

常呂川河口遺跡

— 常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書 —

2007

北海道北見市教育委員会



1. 常呂川 2001年9月 集中豪雨により、露呈した河川礫



2. 中河川跡



1. 172e 号竖穴住居跡



2. 172f 号竖穴住居跡



1. 177号竖穴住居炭化材検出状況



2. 177号竖穴住居跡



1. 178号竖穴住居跡



2. 178号竖穴住居



1. 1201号土壙墓



2. 1209号土壙墓



1. 1233a号土壙墓



2. 1313号土壙墓琥珀玉出土状況



1. 石組炉 (R-77-G 東)



2. 1334号土墳墓



1. 1332号土壙墓



2. 1350号土壙墓



1. 1401号土壙墓



2. 1407号土壙墓



1. 1418号土壙墓



2. 1418号土壙墓琥珀玉出土状況



1. 1210号土墳墓



2. 1406号土墳墓石器出土状況



1. 1233号土壙墓



2. 1247号土壙墓

序 文

平成18年3月5日に旧北見市、端野町、留辺蘂町、常呂町が合併して新北見市が誕生しました。その長さは北海道の屋根である大雪山麓からオホーツク海まで約120kmにおよぶもので、道内でも最大規模の自治体となりました。市域が内陸部と海岸部にまたがるため自然環境も独特なものがみられます。日本・北海道における分布の東限にある端野町のカタクリ、北海道指定天然記念物留辺蘂町のエゾムラサキツツジ群落、北海道遺産に選定された常呂町のワッカ原生花園など変化に富んだ自然環境はその最たるものです。

文化的側面では北方防備と開拓の礎となった屯田兵屋、ピアソン牧師夫妻の住宅であった北海道遺産ピアソン記念館、昭和14年頃、世界一のハッカ生産地として知られその面影を残す、ハッカ記念館など歴史・文化をとどめる建築物も多くみられます。

埋蔵文化財に目を向けると新北見市には447箇所におよぶ遺跡が登録されています。内陸部に顕著にみられる数万年前の旧石器文化、海岸部に多い統縄文・擦文文化の住居跡群など考古学的にもこの地域の独自性が現れています。

このたび報告書を刊行する常呂川河口遺跡は常呂川河口部における掘削護岸工事に伴う緊急発掘調査によるものです。調査は昭和63年から平成15年まで行われ、終了後も整理が続けられています。その成果は「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」としてまとめられ、今回が7巻目となります。

今回も多数の墓が報告されていますが、中でも約1,800年前の墓には実に200本以上のやじり、さまざまなナイフ、原石が副葬されていました。一つの墓からこれほどまで豊富に石器が出土した例は稀で、埋葬された人物は石器作りの達人であったことが予感されます。また、これまでも見られましたが琥珀玉の装飾品も出土しています。この遺跡からは北海道の他の遺跡にみられないほど多量の琥珀玉を所有していました。常呂川河口付近に暮らしていた人々が何故、貴重な琥珀玉を手に入れることができたのか謎ですが、予想以上に豊かな生活を送っていたことが想像されます。その琥珀玉は樺太産である可能性が高いと鑑定報告されています。このことは当時の人々の社会・文化・交易を研究する上で重要な情報と言えるでしょう。

さらに謎の海洋民族と称されるオホーツク人の末裔とみられる人々と擦文人との接触を示す住居の発見も、オホーツク文化と擦文文化の関わりを改めて知ることとなりました。

このひとつひとつの文化財を大切に守り、将来に残し伝えることが現代に生きる私たちの大きな責務と考えているところです。

本書が考古学研究者はもちろん、地域の歴史研究に活用されるとともに埋蔵文化財に対する理解を深める一助となることを願ってやみません。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授藤本強氏、宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力を頂きました。衷心より感謝申し上げる次第です。

平成19年3月

北海道北見市教育委員会

教育長 白馬 幸治

例 言

1. 本書は、主に平成12年・13年に実施した常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡(TK73遺跡)の緊急発掘調査の報告書である。各年度の調査面積は平成12年度5,100㎡、平成13年度5,100㎡である。
2. 本遺跡は北海道常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登録番号はI-16-128である。
3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、旧常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書の執筆は武田修・佐々木覚が行い、武田修が編集した。
5. 写真撮影は遺構を渡部高士、遺物を武田修が行った。
6. 各種遺物の実測図、トレースは恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子が行った。
7. ピット1101~1200、1211~1213、1254~1257、1339~1349、1360~1400、1412~1417、1420~1425、1442~1451は欠番とした。

8. 平成12年度の調査体制

調査期間 平成10年5月10日~10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木覚、熊木美野里、松尾 曜

調査補助員 渡部高士

事務 林 尚美

作業員 橋本信義、原田聖吾、後藤 譲、氷室福二、藤田伊玲、佐々木清子、熊谷弘子、大谷俊子、阿部嘉代子、清永順子、佐藤成子、杉田弘子、岩松祐子、坂口君子、後藤チエ子、武田美津子、栗原アサ子、近江谷光栄、高木貴美子、大沼篤子、田中清子、中島隆子、新井田智子、室田恵美、日脇京子、山根利智

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、日脇京子、中島隆子、石垣綾子、岩松祐子、宇野孔美子、斉藤久美子、佐藤まゆみ、高木貴美子、中台美和子、中村恵子、山内亜希、山田喜美江、米本恭子、林真子、宇野彰一、高岡晴彦、佐藤達也

9. 平成13年度の調査体制

調査期間 平成13年5月9日~10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木覚、熊木美野里

調査補助員 渡部高士

事務 林 尚美

作業員 高橋道直、宇野彰一、工藤孝之、橋本信義、氷室福二、佐々木清子、大谷俊子、阿部嘉代子、清永順子、佐藤成子、杉田弘子、岩松祐子、坂口君子、後藤チエ子、武田美津子、栗原アサ子、近江谷光栄、高木貴美子、大沼篤子、堀井咲子、日脇京子、室田恵美、山根利智

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、阿部真子

10. 発掘調査及び報告書作成の整理作業には、下記の方々の指導・助言を得た。記して感謝の意を表するしだいです。

東京大学名誉教授 藤本 強、東京大学名誉教授 宇田川洋、東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐藤宏之、東京大学文学部助教授 熊木俊朗、同助手 福田正宏、早稲田大学文学部教授 菊池徹夫、北海道教育委員会 大沼忠春、同 種市幸生、紋別市立博物館 佐藤和利、斜里町知床博物館 合地信生、同 松田 功、文化財サポート(有) 豊原熙司、北海道埋蔵文化財センター 熊谷 仁、同 田口 尚、余市町水産博物館 乾 芳弘、岩手県立博物館 赤沼英夫

目 次

序 文	北見市教育委員会 教育長 白 馬 幸 治	…… i
例 言		…… ii
第Ⅰ章	調査に至る経過	…… 1
第Ⅱ章	遺跡の地形と基本土層	…… 3
第Ⅲ章	周辺の遺跡	…… 7
第Ⅳ章	竪穴住居	……15
第Ⅴ章	ピット	……175
第Ⅵ章	まとめ	……341
附 編		
附編 1	159H 上層から出土した植物遺体について	……345
	北海道開拓記念館 山田 悟郎	
附編 2	常呂川河口遺跡平成10年度調査出土の動物遺体	……351
	名古屋大学博物館 新美 倫子	
附編 3	北海道常呂川河口遺跡出土琥珀の産地同定	……355
	(財)元興寺文化財研究所 植田 直美	

挿 図 目 次

<p>第1図 基本層序模式図 …………… 4</p> <p>第2図 地形模式図 …………… 5</p> <p>第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡 …………… 8</p> <p>第4図 遺構配置図(1) …………… 11</p> <p>第5図 遺構配置図(2) …………… 13</p> <p>第6図 159号竪穴平面図・上部アイヌ期送り場遺物出土状況 …………… 16</p> <p>第7図 159号竪穴床面(1)・カマド上面(2)・埋土(3~20)出土土器 …………… 17</p> <p>第8図 159号竪穴埋土(1・2)出土土器 …………… 18</p> <p>第9図 159号竪穴埋土(1~12)、160号竪穴埋土(13~22)出土土器・鉄製品 …………… 19</p> <p>第10図 160号竪穴平面図 …………… 21</p> <p>第11図 160号竪穴床面(1~4)・埋土(5~10)出土土器 …………… 22</p> <p>第12図 160号竪穴埋土(1~12)出土土器 …… 24</p> <p>第13図 161号竪穴平面図 …………… 26</p> <p>第14図 161号竪穴床面(1)・埋土(2~22)出土土器 …………… 27</p> <p>第15図 161号竪穴埋土(1~5)出土土器 …… 28</p> <p>第16図 161号 a 竪穴平面図 …………… 29</p> <p>第17図 161a 号竪穴埋土(1~7)出土土器 …… 30</p> <p>第18図 161a 号竪穴埋土(1~9)出土土器 …… 31</p> <p>第19図 161a号竪穴埋土(1~14)出土土器 …… 32</p> <p>第20図 161a号竪穴埋土(1~12)出土土器 …… 33</p> <p>第21図 161a号竪穴埋土(1~15)出土土器 …… 34</p> <p>第22図 161a 号竪穴床面(1~5)・埋土(6~32)出土土器 …………… 36</p> <p>第23図 161a 号竪穴埋土(1~17) ・ 161b 号竪穴埋土(18)出土土器 ・ 琥珀玉 …………… 37</p> <p>第24図 161b 号竪穴平面図 …………… 38</p> <p>第25図 161b 号竪穴埋土(1~8)出土土器 …… 39</p> <p>第26図 161b号竪穴埋土(1~17)出土土器 …… 40</p> <p>第27図 162号竪穴平面図 …………… 42</p> <p>第28図 162号竪穴床面(1・2)・埋土(3~13)出土土器 …………… 43</p> <p>第29図 162号竪穴埋土(1~8)出土土器 …… 44</p>	<p>第30図 162号竪穴カマド(1・2)・埋土(3~10)出土土器 …………… 45</p> <p>第31図 163号竪穴平面図 …………… 47</p> <p>第32図 163号竪穴床面(1~4)・カマド(5・6)・埋土(7~10)出土土器 …… 48</p> <p>第33図 163号竪穴床面(1)・カマド(2)・埋土(3~8)出土土器・鉄製品 …… 49</p> <p>第34図 163号竪穴埋土(1・2)出土土器 …… 50</p> <p>第35図 164号竪穴平面図 …………… 51</p> <p>第36図 165号竪穴平面図 …………… 53</p> <p>第37図 165号竪穴床面(1~8)・埋土(9)出土土器 …………… 54</p> <p>第38図 165号竪穴埋土(1~6)出土土器 …… 55</p> <p>第39図 165号竪穴床面(1・2)・埋土(3~11)出土土器 …………… 56</p> <p>第40図 166号竪穴、集石11平面図 …………… 58</p> <p>第41図 166号竪穴床面(1・2)・カマド内部(3・4)・埋土(5~16)出土土器 …… 59</p> <p>第42図 166号竪穴埋土(1~9)出土土器 …… 60</p> <p>第43図 166号竪穴埋土(1~16)出土土器・鉄製品 …………… 61</p> <p>第44図 166a 号竪穴床面(1~5)・埋土(6~8)出土土器 …………… 62</p> <p>第45図 166a 号竪穴埋土(1~10)出土土器 …………… 63</p> <p>第46図 166a 号竪穴埋土(1~10)、166b号竪穴埋土(11~21)出土土器 …… 64</p> <p>第47図 166b 号竪穴平面図 …………… 65</p> <p>第48図 166b 号竪穴埋土(1~6)出土土器 …… 66</p> <p>第49図 167号竪穴、167a号竪穴平面図 …… 68</p> <p>第50図 167号竪穴床面(1・2)・埋土(3~11)出土土器 …………… 69</p> <p>第51図 167号竪穴埋土(1~16)出土土器 …… 70</p> <p>第52図 167号竪穴埋土(1~22)出土土器 …… 71</p> <p>第53図 167a 号竪穴床面(1)・埋土(2~13)出土土器 …………… 73</p> <p>第54図 167a号竪穴埋土(1~11)出土土器 …… 74</p> <p>第55図 167a 号竪穴埋土(1~27)出土土器・琥珀玉 …………… 75</p> <p>第56図 167b 号竪穴平面図 …………… 77</p>
--	--

第57図	167b号竪穴埋土(1~15)出土土器…78	9)出土土器……………119	
第58図	167b号竪穴埋土(1)出土土器 ……79	第90図	172a号竪穴床面(1)・埋土(2~6)出土土器……………120
第59図	167b号竪穴埋土(1)出土土器 ……80	第91図	166a号竪穴、172b号竪穴、172c号竪穴、172d号竪穴、ピット1337平面図……………122
第60図	167b号竪穴埋土(1~3)出土土器…81	第92図	172b号竪穴床面(1)・埋土(2~17)出土土器 ……123
第61図	167b号竪穴埋土(1・2)出土土器…82	第93図	172b号竪穴床面(1~4)・埋土(5~12)出土土器 ……124
第62図	167b号竪穴埋土(1~12)出土土器…83	第94図	172c号竪穴床面(1)・埋土(2~5)出土土器……………126
第63図	167b号竪穴埋土(1~24)出土石器…84	第95図	172e号竪穴平面図 ……128
第64図	167b号竪穴埋土(1~7)出土石器…85	第96図	172e号竪穴床面(1~4)・ベンガラ上(5)・埋土(6~16)出土土器…130
第65図	167c号竪穴、167d号竪穴平面図 ……87	第97図	172e号竪穴埋土(1~11)出土土器・土製品……………131
第66図	167c号竪穴埋土(1~3)・167d号竪穴埋土(4~14)出土土器……………88	第98図	172e号竪穴床面(1~4)・埋土(5~16)出土石器・琥珀玉 ……132
第67図	167c号竪穴埋土(1~8)・167d号竪穴埋土(9~27)出土石器……………89	第99図	172f号竪穴、ピット1338平面図 ……134
第68図	167e号竪穴、ピット1336平面図 ……92	第100図	172f号竪穴床面(1)・炭化材上(2~6)・ベンガラ層(7~9)出土土器……………136
第69図	167e号竪穴床面(1~4)・柱穴(5)・埋土(6)出土土器……………93	第101図	172f号竪穴ベンガラ層(1~6)出土土器……………137
第70図	167e号竪穴床面(1~4)・柱穴(5)・埋土(6~15)出土石器……………94	第102図	172f号竪穴埋土(1~12)出土土器……………138
第71図	168号竪穴平面図・土器出土分布図 ……95	第103図	172f号竪穴埋土(1~25)出土土器……………139
第72図	168号竪穴床面(1~5)出土土器…98	第104図	172f号竪穴埋土(1~11)出土土器……………140
第73図	168号竪穴床面(1~4)出土土器…99	第105図	172f号竪穴床面(1~4)・ベンガラ層(5~11)・埋土(12~20)出土土器……………141
第74図	168号竪穴カマド(1)・埋土(2~13)出土土器 ……100	第106図	172f号竪穴埋土(1~11)出土土器……………142
第75図	168号竪穴埋土(1~5)、169号竪穴埋土(6~12)出土石器 ……101	第107図	173号竪穴、ピット1261、1292、1292a、1292b、1299、1317、1318、1319、1320平面図……………144
第76図	169号竪穴平面図 ……103	第108図	174号竪穴、ピット1206、1207、1208平面図……………145
第77図	169号竪穴床面(1・2)・埋土(3~18)出土土器 ……104	第109図	173号竪穴床面(1)・埋土(2~4)、174号竪穴埋土(5~11)出土
第78図	169号竪穴埋土(1~8)出土土器 ……105		
第79図	170号竪穴平面図 ……106		
第80図	170号竪穴埋土(1~8)、171号竪穴埋土(9~13)出土土器 ……107		
第81図	170号竪穴埋土(1~7)出土石器 ……108		
第82図	171号竪穴平面図 ……109		
第83図	172号竪穴、集石10、ピット1352、1352a、1352b、1352c平面図……………111		
第84図	172号竪穴床面(1・2)出土土器 ……112		
第85図	172号竪穴埋土(1~3)出土土器 ……113		
第86図	172号竪穴埋土(1~20)出土土器…114		
第87図	172号竪穴埋土(1~23)出土石器…115		
第88図	172a号竪穴平面図 ……118		
第89図	172a号竪穴床面(1)・埋土(2~		

	土器……………146		(7~11)、1209遺体上(12~14)
第110図	175号竪穴平面図 ……148		・埋土(15・16)出土土器……………177
第111図	175号竪穴埋土(1~10)出土土器…149	第132図	ピット1202埋土(1・2)、1205埋
第112図	175a号竪穴、175b号竪穴平面		土(3・4)、1207遺体上(5~7)、
	図……………150		1209床面(8・9)、1210遺体上
第113図	175a号竪穴埋土(1~13)出土土		(10)、1214埋土(11・12)、1214a
	器……………151		床面(13・14)、1219床面(15
第114図	175b号竪穴埋土(1~20)出土土		~17)、1221埋土(18・19)出土石
	器……………152		器・石製品……………178
第115図	176号竪穴、ピット1315平面図 ……154	第133図	ピット1209平面図……………182
第116図	176号竪穴埋土(1~7)出土土器 ……155	第134図	ピット1210平面図……………183
第117図	177号竪穴、ピット1314平面図 ……156	第135図	ピット1210埋土(1)、1214埋
第118図	177号竪穴炭化材出土状況 ……157		土(2)、1214a埋土(3・4)、1217
第119図	177号竪穴床面(1~9)・埋土(10		埋土(5)、1218埋土(6~9)、1219
	・11)出土土器 ……159		床面(10)、1220埋土(11~13)、
第120図	177号竪穴埋土(1~16)出土土器…160		1221埋土(14~23)出土土器……………185
第121図	173号竪穴埋土(1~3)、174号竪	第136図	ピット1219平面図……………187
	穴埋土(4・5)、175号竪穴埋土(6	第137図	ピット1220、1221、1223、1224、
	~10)、175a号竪穴埋土(11)、		1226、1226a、1227平面図 ……189
	175b号竪穴埋土(12~19)、177	第138図	ピット1225平面図・遺物出土状
	号竪穴埋土(20~22)、178号竪		況……………191
	穴埋土(23~25)、179号竪穴埋	第139図	ピット1223埋土(1~9)、1224埋
	土(26~29)出土石器……………161		土(10~12)、1226埋土(13)、
第122図	178号竪穴平面図 ……163		1226a埋土(14・15)、1227埋
第123図	178号竪穴床面(1)・埋土(2~		土(16)、1228埋土(17~20)出
	4)出土土器……………165		土土器……………192
第124図	178号竪穴埋土(1~20)出土土器…166	第140図	ピット1229平面図……………194
第125図	179号竪穴、180号竪穴平面図……………168	第141図	ピット1229床面(1)・埋土
第126図	179号竪穴埋土(1~3)・180号		(2・3)、1230埋土(4~6)、1231
	竪穴床面(4~6)・埋土(7・8)		埋土(7)、1232埋土(8・9)、
	出土土器……………169		1233埋土(10~13)、1233a埋
第127図	自然営力による段差、ピット		土(14・15)、1233b埋土
	1222平面図……………170		(16~18)、1233c埋土(19)出
第128図	自然営力による段差(1~3)出		土土器……………195
	土土器……………171	第142図	ピット1225床面(1・2)、1227埋
第129図	小河川跡平面図……………173		土(3)、1228埋土(4・5)、1229埋
第130図	ピット1201、1203、1203a、		土(6~8)、1231埋土(9)出土石器…196
	1203b、1204、1205、1216、	第143図	ピット1232平面図……………198
	1216a、1217、1218、1253、	第144図	ピット1232埋土(1~5)出土石器…199
	1779、1280、1289平面図……………176	第145図	ピット1233平面図……………201
第131図	ピット1201床面(1)、1202埋	第146図	ピット1233a、1233b、1233c平
	土(2)、1203a埋土(3・4)、		面図……………202
	1203b埋土(5・6)、1205埋土	第147図	ピット1233a床面(1~16)・埋

	土(17~23)出土石器……………203		土(16)、1282a床面(17)・埋
第148図	ピット1236平面図……………205		土(18)、1284埋土(19)、1284b
第149図	ピット1234埋土(1~3)、1235埋		埋土(20)、1289埋土(21)出土
	土(4~7)、1236a埋土(8)、1240		石器・琥珀玉……………226
	埋土(9~11)、1244埋土(12)、	第160図	ピット1271平面図……………227
	1245a埋土(13~15)、1247床面	第161図	ピット1272平面図……………228
	(16)・埋土(17~19)、1249	第162図	ピット1268埋土(1~5)、1272
	埋土(20・21)、1250埋土(22)		床面(6)、1273埋土(7)、1275埋
	出土土器……………208		土(8・9)、1277埋土(10)、1278
第150図	ピット1234、1234a、1234b、		床面(11)・埋土(12)、1278a埋
	1244、1244a、1244b、1247、		土(13・14)、1280埋土(15~17)
	1248、1288、1293、1294、		出土土器……………230
	1304、1306、1306a、1309	第163図	ピット1276平面図……………231
	平面図……………210	第164図	ピット1278、1278a平面図……………233
第151図	ピット1214、1214a、1215、	第165図	ピット1281平面図・遺体出土
	1235、1251、1252、1273、		状況……………235
	1274、1275、1285、1286、	第166図	ピット1281埋土(1)出土土器……………236
	1287平面図……………212	第167図	ピット1282、1282a平面図……………238
第152図	ピット1249平面図……………214	第168図	ピット1282埋土(1・2)、1282a
第153図	ピット1234埋土(1)、1236床面		埋土(3~6)出土土器……………239
	(2~4)、1245a埋土(5)、1249床	第169図	ピット1230、1231、1236a、
	面(6~8)・遺体上(9・10)・埋		1236b、1238、1277、1283、
	土(11)、1251床面(12・13)、		1284、1284a、1284b、1290、
	1252床面(14~17)、1260埋土		1300、1302、1302a、1302b
	(18~29)、1267床面(30・31)		平面図……………242
	・埋土(32)、1268埋土(33)出土	第170図	ピット1283埋土(1)、1284埋土
	石器……………215		(2・3)、1284a埋土(4・5)、
第154図	ピット1252床面(1)、1253埋		1284b埋土(6)、1290埋土(7)、
	土(2)、1260埋土(3~7)、1261埋		1295a埋土(8)、1302a埋土
	土(8)、1263埋土(9~11)、1266		(9)、1303埋土(10)、1304埋
	埋土(12)、1267埋土(13~15)出		土(11)、1305埋土(12~14)、
	土土器……………217		1306埋土(15)、1306埋土a
第155図	ピット1202、1228、1250、		(16・17)、1310埋土(18・
	1258、1259、1260、1263、		19)、1313埋土(20)、1316埋土
	1264、1265、1266、1268、		(21)出土土器……………244
	1269、1298平面図……………219	第171図	ピット1291平面図……………245
第156図	ピット1262平面図……………221	第172図	ピット1295、1295a、1295b
第157図	ピット1267平面図……………223		平面図……………248
第158図	ピット1270平面図……………225	第173図	ピット1290埋土(1)、1291遺体
第159図	ピット1270埋土(1~5)、1271		上(2・3)、1295a埋土(4・5)、
	埋土(6)、1272床面(7・8)、		1295b床面(6~8)、1296床面
	1273埋土(9)、1276床面(10)、		(9・10)、1297床面(11)、1306a
	1281遺体上(11~15)、1282埋		埋土(12・13)、1307埋土(14)、

	1308埋土(15)、1312埋土(16)出土石器……………249	第190図	ピット1351遺体上(1~39)・埋土(40)出土石器……………282
第174図	ピット1296、1297、1307、1308、1310、1411、1461平面図……………250	第191図	ピット1352埋土(1~3)、1353床面(4~40)出土石器……………285
第175図	ピット1237、1239、1240、1240a、1241、1242、1243、1245、1245a、1245b、1246、1301、1303、1305、1311、1312、1312a、1312b 平面図 ……253	第192図	ピット1354、1354a、1355、1356、1357、1358、1359平面図……………286
第176図	ピット1313平面図・琥珀玉出土状況……………258	第193図	ピット1401、1402、1404、1404a 平面図 ……288
第177図	ピット1313遺体上(1~18)、1323b 埋土(19~21)、1325埋土(22)、1327埋土(23)、1332床面(24~35)・埋土(36~39)出土石器・琥珀玉……………261	第194図	ピット1403平面図・遺物出土状況……………290
第178図	ピット1324、1324a 平面図・遺物出土状況……………263	第195図	ピット1403遺体上(1)、1404a 遺体上(2~4)・埋土(5・6)出土土器……………292
第179図	ピット1324a 床面(1~4)、1325埋土(5・6)、1328埋土(7)、1331a 埋土(8)、1332埋土(9)、1334埋土(10)、1335埋土(11)、1336埋土(12)出土土器……………265	第196図	ピット1402遺体上(1~4)、1403床面直上(5~23)・埋土(24~26)、1404埋土(27)出土石器・琥珀玉……………293
第180図	ピット1328、1328a、1328b、1328c、1328d、1329、1329a、1330、1331、1331a 平面図 ……267	第197図	ピット1405平面図……………295
第181図	ピット1332平面図……………269	第198図	ピット1405床面(1~5)・埋土(6)出土土器……………296
第182図	ピット1333床面(1)・埋土(2~10)出土土器……………271	第199図	ピット1405床面(1~19)出土石器……………297
第183図	ピット1333埋土(1~4)、1350埋土(5~31)出土石器……………272	第200図	ピット1406平面図……………298
第184図	ピット1334平面図・遺物出土状況……………274	第201図	ピット1406埋土(1)、1408遺体上(2)・埋土(3)出土土器……………299
第185図	ピット1335平面図・遺物出土状況……………275	第202図	ピット1406遺体上(1~66)出土石器……………300
第186図	ピット1350床面(1)出土土器……………277	第203図	ピット1406遺体上(1~53)出土石器……………301
第187図	ピット1350平面図……………278	第204図	ピット1406遺体上(1~64)出土石器……………302
第188図	ピット1351、1353、1353a 平面図……………280	第205図	ピット1406遺体上(1~37)出土石器……………303
第189図	ピット1351遺体上(1)、1352埋土(2)、1353床面(3)・埋土(4・5)出土土器……………281	第206図	ピット1406遺体上(1~11)出土石器……………304
		第207図	ピット1406遺体上(1~5)出土石器……………305
		第208図	ピット1407、1408平面図・琥珀玉出土状況……………308
		第209図	ピット1407床面(1・2)・遺体上(3~9)、1408床面(10)・遺体上(11)・埋土(12~16)、1409埋

	土(17・18)出土石器・琥珀玉……309
第210図	ピット1409平面図……311
第211図	ピット1410平面図……312
第212図	ピット1418平面図・琥珀玉出土状況……314
第213図	ピット1418遺体上(1~3)出土土器……315
第214図	ピット1419平面図……316
第215図	ピット1419遺体上(1~27)出土石器・石製装身具……317
第216図	ピット1428平面図……319
第217図	ピット1410遺体上(1~6)、1427埋土(7・8)、1428埋土(9)出土土器……320
第218図	ピット1431平面図……322
第219図	ピット1431遺体上(1~6)・埋土(7・8)出土土器……323
第220図	ピット1426、1427、1429、1430、1432、1433、1434、1435、1436、1437、1438、1439、1440平面図……325
第221図	ピット1441平面図……327
第222図	ピット1418床面(1~10)、1426遺体上(11)、1427埋土(12・13)、1431遺体上(14~21・24)・埋土(22・23)、1434埋土(25・26)、1441床面(27)・

	埋土(28)、1456埋土(29)、1458埋土(30)、1458a埋土(31~34)、1459埋土(35・36)、1460埋土(37・38)、1460b埋土(39)出土石器・琥珀玉……328
第223図	ピット1432埋土(1)、1434埋土(2・3)、1436埋土(4)、1439埋土(5~9)、1440埋土(10)、1441埋土(11~13)、1453埋土(14~17)出土土器……329
第224図	ピット1316、1321、1322、1323、1323a、1323b、1325、1326、1327、1333、1452、1453、1454、1455、1456、1457、1457a、1457b、1457c、1458、1458a、1459、1460、1460a平面図……332
第225図	ピット1457埋土(1~5)、1458埋土(6~8)、1458a埋土(9~12)、1459埋土(13~15)出土土器……334
第226図	ピット1460埋土(1~17)出土土器……336
第227図	ピット1460a埋土(1)出土土器……337
第228図	ピット1461床面(1)出土土器……339

図 版 目 次

図版 1	159号堅穴、159号堅穴埋土内の送り場断面
図版 2	159号堅穴埋土内の送り場
図版 3	159号堅穴埋土内送り場の集石、下顎骨検出状況
図版 4	159号堅穴カマド出土土器、159号堅穴埋土出土土器、160号堅穴
図版 5	160号堅穴床面出土土器、161号堅穴
図版 6	161a号堅穴、161a号堅穴埋土出土土器
図版 7	161b号堅穴、161b号堅穴埋土出土土

	器、162号堅穴
図版 8	162号堅穴床面・埋土出土土器
図版 9	163号堅穴、163号堅穴カマド・床面出土土器
図版10	165号堅穴遺物出土状況、165号堅穴
図版11	165号堅穴土器出土状況
図版12	165号堅穴床面出土土器
図版13	166号堅穴、166号堅穴カマド出土土器、166a号堅穴床面出土土器、166a号堅穴
図版14	166b号堅穴埋土出土土器、167号堅穴

- 図版15 167号竪穴床面出土土器、167a号竪穴埋土出土土器
- 図版16 167b号竪穴埋土出土土器
- 図版17 167d号竪穴埋土出土土器、168号竪穴
- 図版18 168号竪穴土器出土状況、168号竪穴床面出土土器
- 図版19 168号竪穴土器出土状況、168号竪穴床面出土土器
- 図版20 168号竪穴床面・埋土出土土器
- 図版21 168号竪穴埋土出土土器
- 図版22 169号竪穴、169号竪穴床面・埋土出土土器
- 図版23 170号竪穴、172a号竪穴
- 図版24 172号竪穴床面・埋土出土土器
- 図版25 172a号竪穴床面出土土器・埋土出土土器、172c号竪穴床面出土土器
- 図版26 172e号竪穴炭化材検出状況、172e号竪穴
- 図版27 172e号竪穴床面・ベンガラ上部・埋土出土土器
- 図版28 172f号竪穴、172f号竪穴床面・炭化材上・炭化粘土出土土器
- 図版29 172f号竪穴ベンガラ層・出土土器・埋土出土土器
- 図版30 176号竪穴、176号竪穴遺物出土状況
- 図版31 177号竪穴炭化材検出状況、177号竪穴
- 図版32 177号竪穴床面出土土器、178号竪穴
- 図版33 178号竪穴床面・埋土出土土器
- 図版34 179号竪穴
- 図版35 自然営力による段差出土土器、(D-82-8層)・(E-84-Ⅲ)
- 図版36 ピット1201、1201床面出土土器、1205埋土出土土器、1207遺体上出土土器
- 図版37 ピット1209、1209埋土出土土器・床面出土土器
- 図版38 ピット1210、1210床面直上出土土剣
- 図版39 ピット1214埋土出土土器、1214a床面出土土器、1218埋土出土土器
- 図版40 ピット1219埋土出土土器・石器、1221埋土出土土器、1225上部配石
- 図版41 ピット1225、1225石器出土状況、1225床面出土土器
- 図版42 ピット1228、1227埋土出土土器、1228埋土出土土器、1229床面出土土器・埋土出土土器
- 図版43 ピット1232、1232埋土出土土器
- 図版44 ピット1233、1233埋土出土土器
- 図版45 ピット1233a、1233a床面・埋土出土土器
- 図版46 ピット1234埋土出土土器、1236床面出土土器、ピット1247、1247床面出土土器
- 図版47 ピット1249床面・埋土出土土器、1251床面出土土器、1252床面出土土器・石器、1260埋土出土土器、1262埋土出土土器、1267床面埋土出土土器、1268埋土出土土器、1270埋土出土土器・琥珀玉
- 図版48 ピット1271、1271埋土出土土器、1272床面出土土器・琥珀玉、ピット1273埋土出土土器、1276埋土出土琥珀玉
- 図版49 ピット1278、1278床面出土土器、1281埋土出土土器・遺体上出土土器
- 図版50 ピット1282埋土出土土器・石器、1282a埋土出土土器、床面・埋土出土土器、1284b埋土出土土器、1289埋土出土土器、1291遺体上出土土器、1295b床面出土土器、1296床面出土土器、1297床面出土土器
- 図版51 ピット1306a埋土出土土器、1307埋土出土土器、1308埋土出土土器、1313埋土出土土器・遺体上出土土器・琥珀玉
- 図版52 ピット1323b埋土出土土器、1325埋土出土土器、1327埋土出土土器、1332床面・埋土出土土器、1333埋土出土土器
- 図版53 ピット1350、1350床面出土土器・埋土出土土器
- 図版54 ピット1351、1351遺体上出土土器・石器
- 図版55 ピット1351遺体上・出土土器、1352遺体上出土土器
- 図版56 ピット1353、1353床面出土土器・石器
- 図版57 ピット1402遺体上出土琥珀玉、ピット1403、1403遺体上出土土器・床面出土土器
- 図版58 ピット1403床面・埋土出土土器、1404

- 遺体上出土石器・埋土出土石器
- 図版59 ピット1405、1405床面出土石器
- 図版60 ピット1405床面・埋土出土石器・床面出土石器
- 図版61 ピット1406、1406遺体上出土石器
- 図版62 ピット1406遺体上出土石器
- 図版63 ピット1406遺体上出土石器
- 図版64 ピット1406遺体上出土石器
- 図版65 ピット1406遺体上出土石器
- 図版66 ピット1407、1407遺物出土状況
- 図版67 ピット1407遺物出土状況
- 図版68 ピット1407床面・遺体上出土石器・琥珀玉
- 図版69 ピット1408、1408遺物出土状況
- 図版70 ピット1408遺体上出土石器遺体下・埋土出土石器
- 図版71 ピット1409、1409埋土出土石器、1410遺体上出土石器
- 図版72 ピット1418、1418遺体上出土石器
- 図版73 ピット1419、1419遺物出土状況、1419遺体上出土石器
- 図版74 ピット1419遺体上出土石器・石製装身具、1426遺体上出土石器、1427埋土出土石器、1428埋土出土石器
- 図版75 ピット1431遺体上出土石器・石器・琥珀玉、1431埋土出土石器、1431a 遺体上出土石器、1434埋土出土石器、1441床面・埋土出土石器、1456埋土出土石器
- 図版76 ピット1458埋土出土石器、1458a 埋土出土石器、1459埋土出土石器、1460埋土出土石器、1460b 埋土出土石器、1461

第 I 章 調査に至る経過

1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山（標高1,541m）に源を發し、流路延長120km、流域面積1,930km²に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年。大正4、8、11年。昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。発掘調査を行っている間の平成4、14年にも集中豪雨があり、強力な水流によるため遺跡の一部が削られることもあった。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も営々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水の影響で堤防が決壊し、床上浸水等の被害を蒙った区域である。常呂川は河口幅が狭いうえ、本遺跡の付近で最も大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨時は上流で溢水するなどの問題が指摘されていた。このため蛇行部をショートカットして新捷水路を設けるための工事計画が策定された。昭和52年から用地買収が進められ、昭和56年から工事着手の予定であった。しかし、工事着手の直前になって遺跡の存在することが明らかとなった。昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出されたのをうけ、同年11月11日～12日に北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。調査の結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上と低地域にも堅穴の存在することが判明した。遺跡の総面積は約140,000m²に及び39,000m²が発掘必要区域である。考古学的には縄文中期・後期・晩期、続縄文、擦文・オホーツク、アイヌ文化にわたる複合遺跡であり、砂丘上にある縄文中期の包含層まで深度約1.50mに達することも確認された。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間を要しなければならず早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部では常呂川下流域の堤防整備を構じていたが、本遺跡を回避した新捷水路の計画もありえるため、本来の計画地以外についても埋蔵文化財の有無が必要となった。昭和57年9月2日に事前協議書の提出を受け北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で周辺地域の包蔵地範囲確認調査を実施した。昭和60、61年調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中州であるが、包含層は認められなかった。この様な背景とともに常呂川

下流域の堤防整備もほぼ完了したため、本来の計画とおり新捷水路工事を進めるために発掘調査の依頼があった。

しかし、調査にはかなりの歳月を要し、調査体制の問題もあるため本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の照会を願ったものの、適した機関が無いとの回答があったので本町教育委員会が調査体制の充実を図り受諾することとなった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅300m、延長320mあるため調査には約10年間で予想された。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすのは困難であり、調査と並行して工事を着手したいので新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mについて調査を終了してほしいとの要望があった。その場合、幅20mの護岸部が後回しとなり、検出した遺構も半掘りのまま残されてしまう恐れもあるため護岸部を含めて調査することとなった。

調査を進めている過程で縄文中期の包含層よりも下層に縄文前期末葉の包含層があり、さらに下層には縄文前期中葉の包含層が検出された。また、標高0mの低湿地にはアイヌ文化期の木製品が新たに発見され当初の予定を大きく変更せざるを得なかった。

2

調査グリッドは新捷水路センター杭の IP. No.1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

参考文献

- | | | |
|---------|----------|------|
| 網走開発建設部 | 『常呂川治水史』 | 1987 |
| 常 呂 町 | 『常呂町史』 | 1969 |

第Ⅱ章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～75m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15mの低位段丘に分けられる。本遺跡は東側の中位段丘側から派生しており、地形的には標高4～5mの低位段丘とさらに下面にある標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年はこの氾濫原と思われる区域を調査した。この区域の地盤は層厚30～40cmの黄褐色粘土であり、その下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしたがい黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年度に行った包蔵地範囲確認調査では深度約3mのところから木杭が出土している。この区域では現在のところ擦文文化期の堅穴しか発見されていないが、木杭の出土から裏付けられるように下層には他の時期の包含層も残されている可能性がある。氾濫原と考えられるこの区域には大正年間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用されていたため原地形は捉えにくい、おそらく中位段丘側から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。

一方、平成2年から調査している標高4～5mの区域もトコロチャシ跡付近から常呂川に向かって延びた砂丘である。調査当初は栄浦第二・第一遺跡、常呂堅穴群のある新砂丘Ⅰ、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査を進めるにつれて様々なことが明らかになった。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる土砂の堆積で形成されてきたことである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第Ⅲ層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8年・9年度の調査では縄文中期のトコロ六類・五類の下層に第Ⅹa層の(古)トコロ六類とⅩⅡ層の平底押型文Ⅱ群、平成10年の調査では第Ⅹa層の下層にある第Ⅹc層からも北筒式系の包含層、平成11年度の調査ではさらに第ⅩⅥ層から縄文前期綱文式の包含層を確認した。

第Ⅶ層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中期のトコロ六類・五類の北筒式が満遍なく出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第Ⅷ層とは明らかに異なった出方である。第Ⅶ層は河川の氾濫等による土砂流失の影響で本来は下層にある土器が上部に押し上げられ、時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行った低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積が繰り返され、現在の地形に形成されたものであるが、そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも三次の変化が認められる。

第一次形成地は第ⅩⅡ層の縄文前期末の押型文から第Ⅷ層の縄文中期トコロ六類・五類のある礫・角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い箇所では10～15cm、厚い箇所では20～30

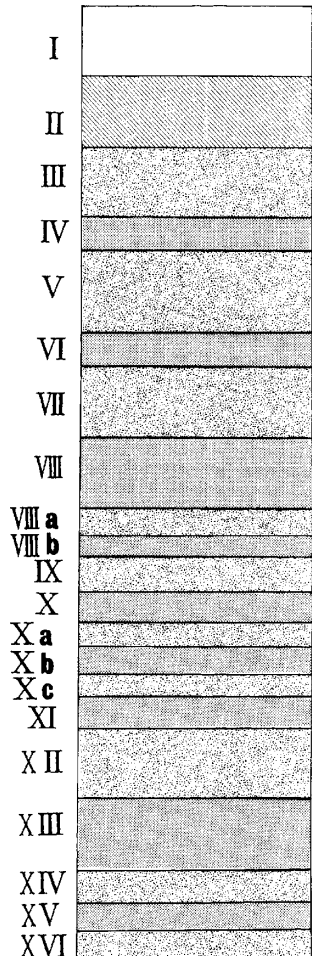
cmである。第XII層の西側部分が削り取られており、縄文前期末葉から中期初頭にかけてかなり激しい流勢のあったことを示している。

第二次形成地は第一次形成地を覆うもので、第VII層から第II層が常呂川に向かってせり出している。せり出し幅は2～20mあり、常呂川に近い程広がっている。

第三次形成地には擦文期の堅穴と続縄文後北C₂・D式の生活面、オホーツク文化期の包含層があるだけであり、それ以前の時期の遺構は全く認められない。第二次形成地と第三次形成地の間は自然の窪みが細長く延びている。特にオホーツク文化期の15号堅穴の付近では土器、獣骨等も散布されている。このことから第二次形成地は縄文中期後半から縄文晩期にかけて少なくとも6回の河川堆積の後に形成されたものと考えられる。第三次形成地はそれ以後のものであり、土質は第二次形成地と比較して粒子の細かい砂質土である。

層位ごとの時期区分は概ね次のとおりである。

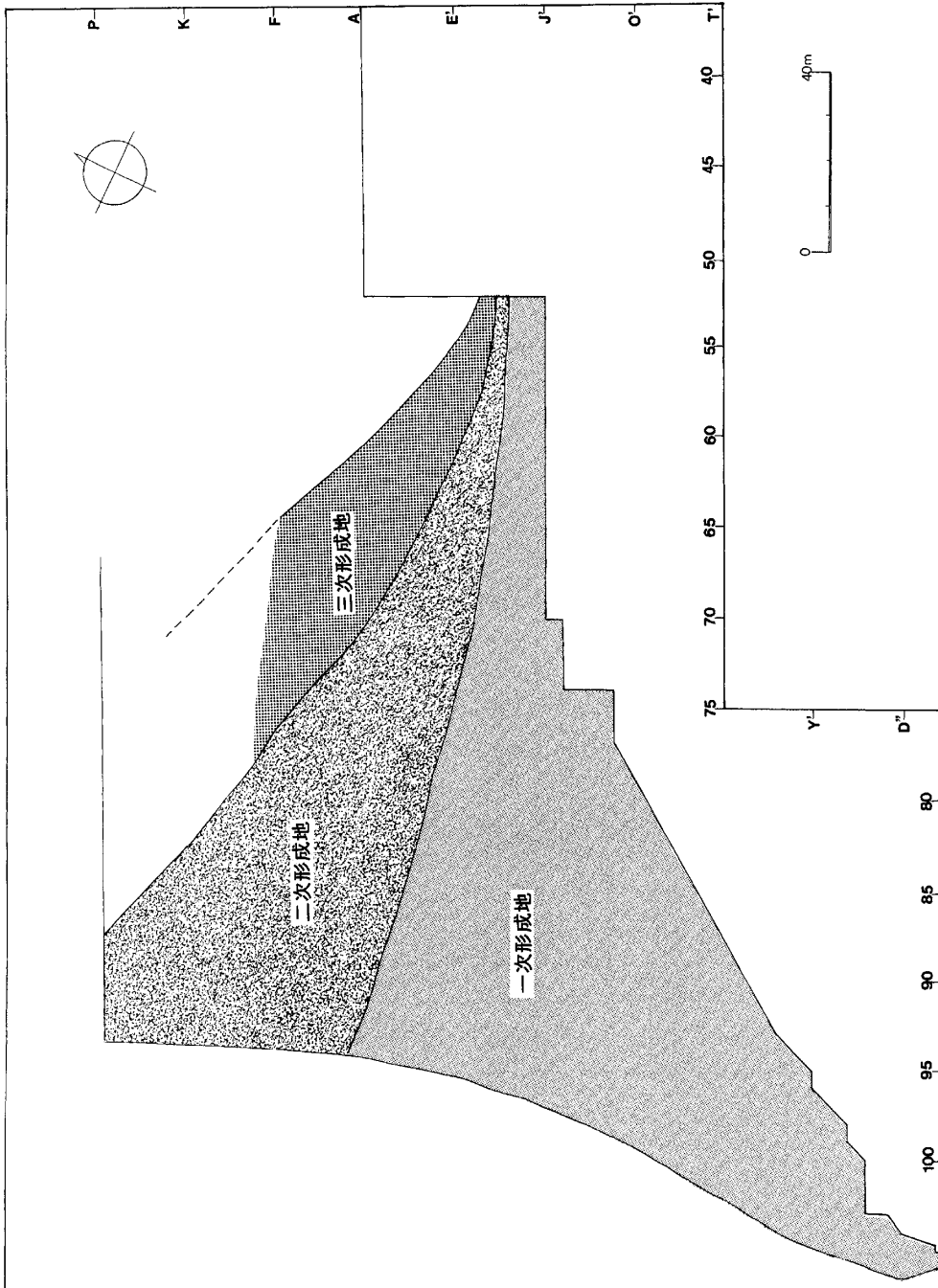
第I層	表土層	
第II層	茶褐色砂層	縄文晩期、続縄文、擦文 オホーツク文化
第III層	褐色砂層	無遺物層
第IV層	黒色土層	縄文後期
第V層	褐色砂層	無遺物層
第VI層	黒色砂層	縄文中期後葉
第VII層	褐色砂層	遺物包含層（砂・礫混じり）
第VIII層	黒色土層	縄文中期中葉
第VIIIa層	褐色砂層	無遺物層
第VIIIb層	黒褐色砂層	遺物包含層
第IX層	褐色砂層	無遺物層
第X層	明褐色砂層	無遺物層
第Xa層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第Xb層	褐色砂層	無遺物層
第Xc層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第XI層	褐色砂層	無遺物層
第XII層	黒色砂層	縄文前期末葉
第XIII層	褐色砂層	無遺物層
第XIV層	黒色砂層	無遺物層
第XV層	明褐色砂層	無遺物層
第XVI層	黒色土層	縄文前期



第1図 基本層序模式図

参考文献

- 1) 遠藤邦彦・上杉 陽 『常呂』所収 東京大学文学部 1972



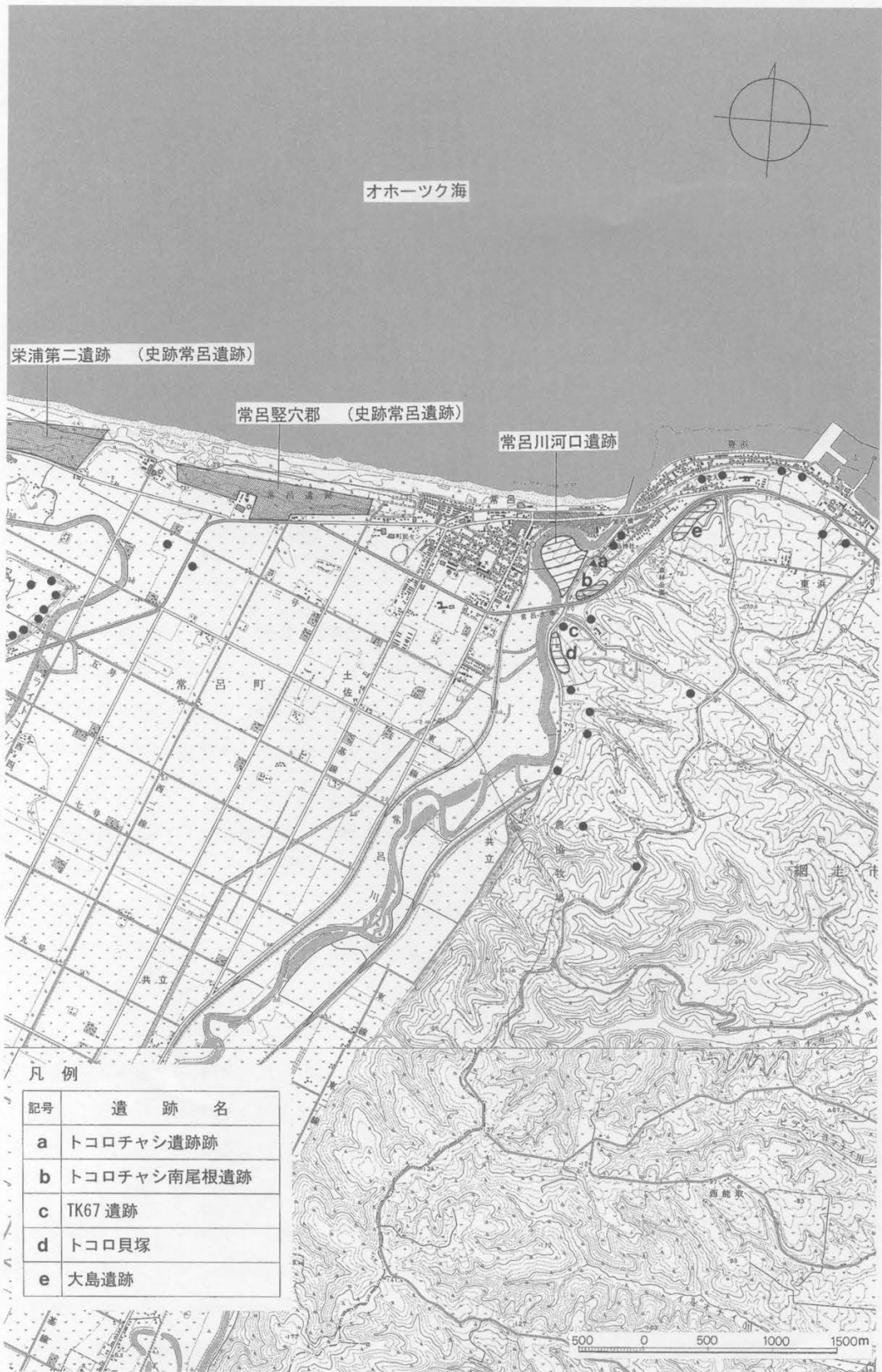
第2図 地形模式図

第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年に擦文文化期とアイヌ文化期の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号堅穴内側(藤本e群)、同外側の2軒が調査された。また、堅穴埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期堅穴との時間関係を解明するためオホーツク文化期2号堅穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年から再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査において刀子、中柄、青銅製円盤、矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている。平成8年度の調査ではチャシの出入り口と思われる橋状遺構(ルイカ)に類する箇所も検出され、先に認められていた柵列柱穴とあわせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られた。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の堅穴調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号堅穴である。この堅穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号堅穴と長軸8.5m、短軸7.5mの7c号堅穴の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号では白樺樹皮を巻かれた炭化材列などが確認され、住居内部の構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。各種の出土遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・碗・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚にははくマ・エゾシカ・タヌキ・キツネの動物骨が見られる。時期はソーメン状貼付文(藤本e群)に比定される。平成12・13年に調査された8号堅穴は7号堅穴同様の火災住居である。壁面に樹皮をあてた後に板材を設置しており内部構造の一端が明らかにされた。骨塚はくマを主体としてキツネ、タヌキがある。平成13・14年に調査された9号堅穴も同様の構造をもった堅穴である。また、本遺跡の15号堅穴でも屋根材と思われる樹皮とそれを留めたと推測できる木釘、炭化木製品が発見されている。この様にトコロチャシ跡遺跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型堅穴の窪地が遺されている。常呂川河口遺跡を含むこの区域は栄浦第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡である。

トコロチャシ跡遺跡と連続したトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの台地縁辺部にある。地表面から32軒の堅穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により縄文中期北筒式の1号堅穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査が行われ、18軒の堅穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・鮎潤式・エリモB式が出土して注目された。昭和61年には最西端部で住宅建設工事に伴う



第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

緊急発掘調査が行われ、8軒の堅穴が調査された。擦文文化期の17号堅穴埋土から頸部に「井」のヘラ記号と回転糸切りの底部をもつ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土している。縄文晩期の5号ピットからは中葉と思われる刺突文の施された鉢型土器とボート形の浅鉢が出土している。

トコロチャシ南尾根遺跡の対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61・62年に北海道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。比較的急斜な北側斜面に擦文期の堅穴5軒、時期不明のピット群がありさらに奥まったところには続縄文期を主体とした堅穴4軒がある。擦文期の堅穴は宇田川編年後期に比定されるもので、包含層から五所川原産の大甕の須恵器が出土している。他に須恵器は包蔵地範囲確認調査字岐阜127-6番地、表面採集による岐阜地区国有林、常呂川河口遺跡で発見されている。TK67遺跡と連続しているのがトコロ貝塚である。昭和33～36年に東京大学文学部による学術調査が実施されている。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。トコロ六類と五類土器が層位的に確認されるとともに縄文早期の石刃鎌が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共伴することが明確になった。

平成11～13年に東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表として東京大学常呂研究室と常呂町による地域連携推進研究に伴う詳細分布調査がトコロチャシ跡遺跡とトコロチャシ南尾根遺跡で実施され、ほぼ全域から遺物が出土している。確認された遺構は縄文早期東釧路系の堅穴、石刃鎌の石器集中域、縄文中期の集石、オホーツク文化期の土壌墓2基である。特にオホーツク文化期の土壌墓は予想されていたことであるが、堅穴群と土壌墓は分離されており墓域を形成していたことが推測された。オホーツク文化期の社会組織・集落研究に果たす役割は大きいものがある。この二遺跡は平成14年9月に史跡常呂遺跡として追加指定を受けた。現在、常呂町ではこの地域の史跡整備に向けた基本構想を計画中であるが、平成15年から東京大学常呂研究室の協力をいただきオホーツク文化期の堅穴復元のための基礎資料を得るため10号堅穴を調査した。時期は藤本編年d群期に比定されるが、重複する内部の藤本編年e群期の堅穴は3期にわたり縮小化が認められる。

この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えばオホーツク文化期の堅穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と常呂川河口遺跡の15号堅穴はソーメン文状貼付文（藤本e群）の時期であり、両者に新旧関係があるのか同時併存するかなどの問題がある。擦文期の堅穴も常呂川河口遺跡と同じで後期のものが多い。続縄文期の堅穴は宇津内系が多いようであり、後北C₂・D式の土壌墓もある。縄文後期では本遺跡からは堅穴の発見はないがピット2基、集石4基あり、周辺に集落跡が予想される。段丘上の遺跡はごく一部分を調査されたに過ぎず各時期の全容を明らかにすることはできないものの、本遺跡とは比較的類似した時代構成である。しかし、個々の時代を見ると縄文晩期後葉の弊舞式から続縄文期初頭の興津

式、宇津内Ⅱa式。中葉の宇津内Ⅱb式、後北C₁式。後葉の後北C₂・D式まではほぼ全期間にわたっている。擦文期は宇田川編年後期に比定できる堅穴が多くある。本遺跡は各時代で濃淡はあるものの生業活動の場として利用されたことは明らかである。特に続縄文期は一時的な場として利用されたのではなく長期間定住していたであろうことが数多くの墓の存在から考えられる。続縄文期の墓では興津系、宇津内系のものが特徴的である。続縄文期の副葬品の消長についてすでに論じられているところであるが、琥珀玉をもつ宇津内系は原石に近い大型、宇津内Ⅱa式は平玉を多量に副葬している。前回までに報告したピット95・254・263a・301・470・545・872号墓がその例である。宇津内Ⅱb期になると琥珀を副葬するのもあるが極端に減少し1012号土壙墓にみられる管玉が加わるなど変化が現れてくる。後北C₁式では鉄製刀子を副葬するものもあるが石器が一般的である。後北C₂・D式は鉄製品の他にガラス玉がある。副葬品の豊富さは生業活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が定住をもたらしたであろう。低地にも大規模遺跡は存在し、隣接する段丘上の遺跡群との相関関係を考える必要がある。

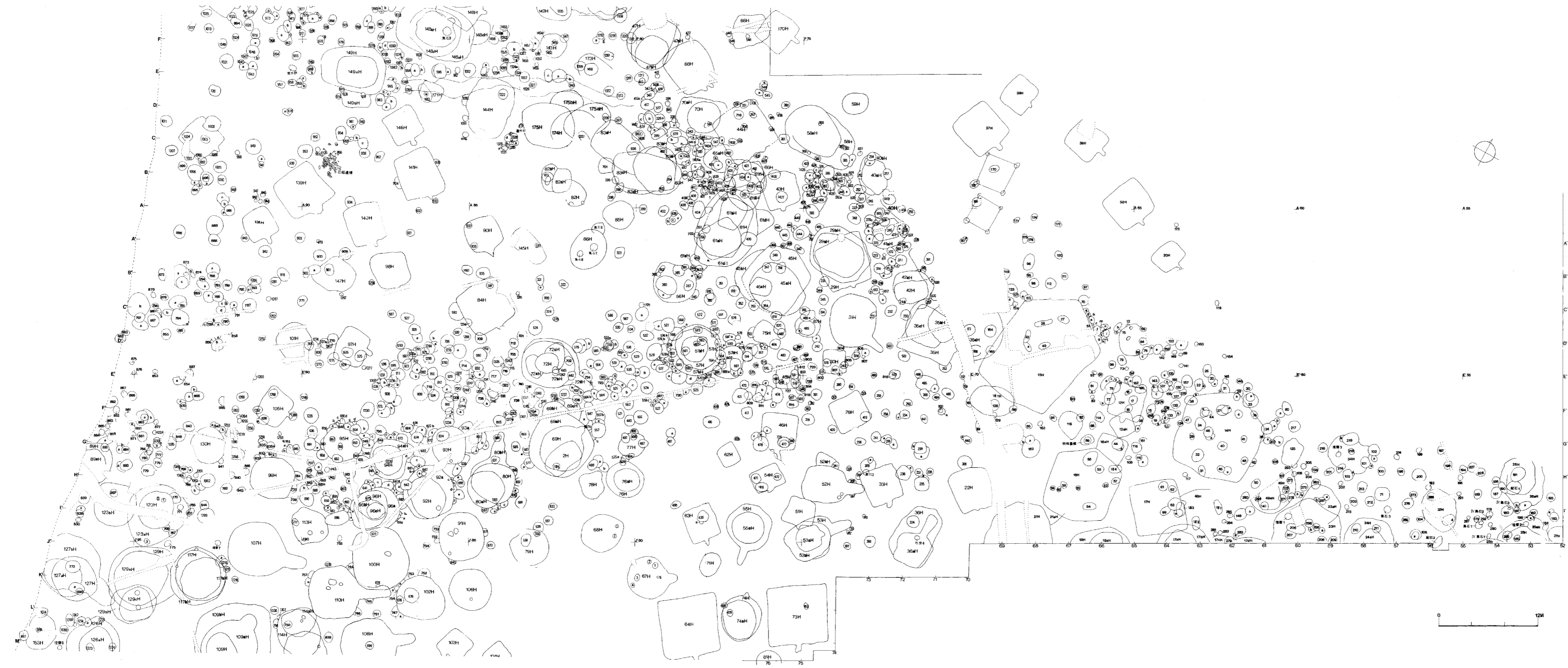
(武田 修)

文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室 「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995. 9
- 2) 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂実習施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999. 9
- 3) 東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会 「トコロチャシ跡遺跡群の調査」トコロチャシ跡遺跡・同オホーツク地点及び「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査概要報告 2002. 2



第4図 遺構配置図(1)



第5図 遺構配置図(2)

第Ⅳ章 竪穴住居

159号 竪 穴

遺 構 (第6図, 図版1-1)

本竪穴はL89・90, M89・90グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると層厚約15cm前後の黒褐色砂層が西壁・北壁側から竪穴中央部に向かって堆積していた。しかし、土層図に示すとおり、中央部では皿状の浅い落ち込みが認められ、1739年降灰の白色を呈した樽前a火山灰の直上(図版1-2)に径約1.30mの範囲に人骨を含む動物骨、貝を混入する灰褐色焼土を検出した(図版2)。図示するとおり隣接して大小6箇所の焼土が東側に集中しており、炭化材もみられる。灰褐色焼土の上部にはやはり骨片、貝を含む黒褐色砂質土と灰褐色焼土の混合層が堆積している。約5~30cmの角礫を主体とした集石は東西方向に細長く伸びた状態で検出された(図版3-1)。これらは焼土層よりやや離れた位置にあるもののほぼ同一レベルにあるので、同一時期と考えられる。

また、樽前a火山灰に覆われて径約15cm、深さ約30cmの小ピットがセクション面に認められ、上部からヒトの下顎骨が逆さまの状態出土した(図版3-2)。頭蓋部は認められずピット埋土には少量の魚骨が混入していた。これらはアイヌ文化期の送り場と思われるもので、樽前a火山灰を鍵層にして上層の動物骨等と下層の小ピットは、時間差があるものの極めて近接していると判断される。上層は灰送り場と思われるが、下顎骨を伴う小ピットの機能・目的は不明である。上層の人骨片と下層の下顎骨について、樽前a火山灰の堆積に乱れはないので別個体と考えられる。

竪穴の規模は約3.50mの方形を呈する。各壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。

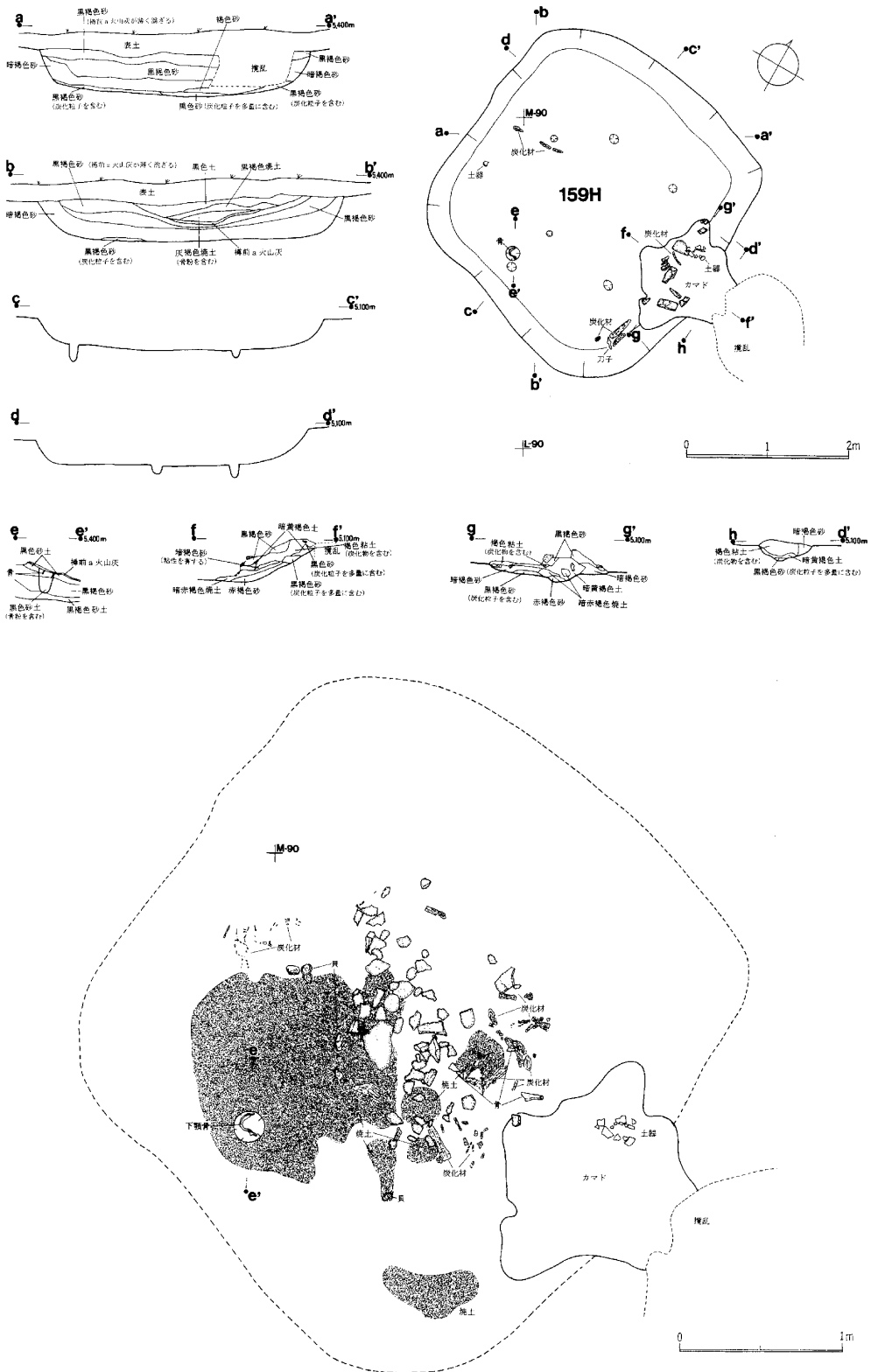
カマドは東壁中央部に構築されているが、暗褐色砂質土と粘土の混合土である袖部は残存する程度であり、煙道部の一部も攪乱を受けているため遺存は悪い。上面にみられた約10~25cmほどの角礫は袖部の芯材と思われる。内部は骨粉を含み粘性のある暗赤褐色土とその下層には混入物のないサラサラした赤褐色砂が煙道部の中ほどまで堆積している。煙道は緩く傾斜し、断面は弧状を呈する。炉跡は検出できなかった。

4本の支柱穴の位置は中央部から東壁寄りにある。このため西壁側が広いスペースを残している。支柱穴は径約7~10cmと細く、深さは約11~14cmと浅い。

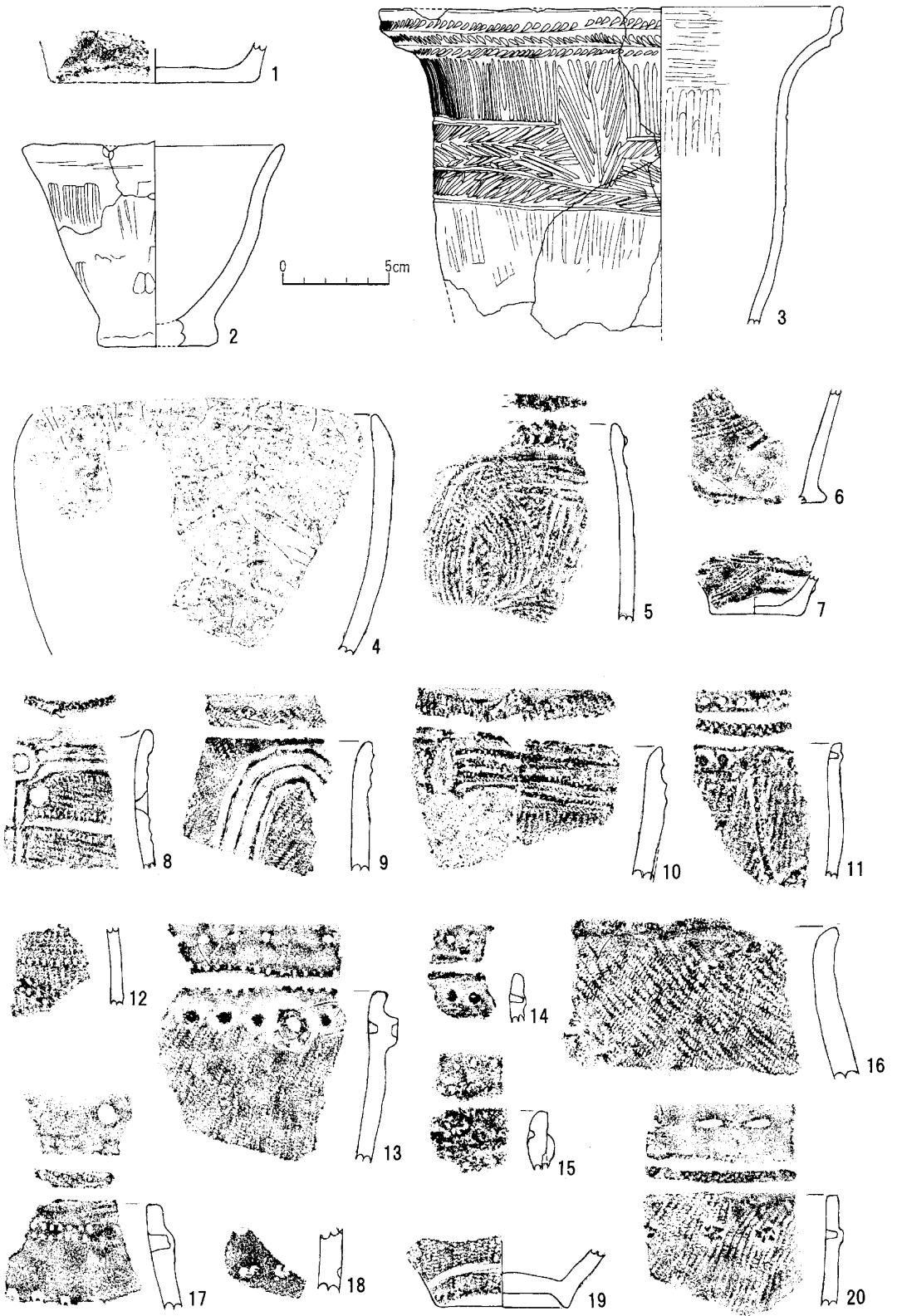
遺 物 (第7図, 第8図, 第9図-1~12, 図版4-1~4)

第7図-1は床面出土で無文土器の底部。2はカマド上面出土で、口径12.5cm、器高9.5cm

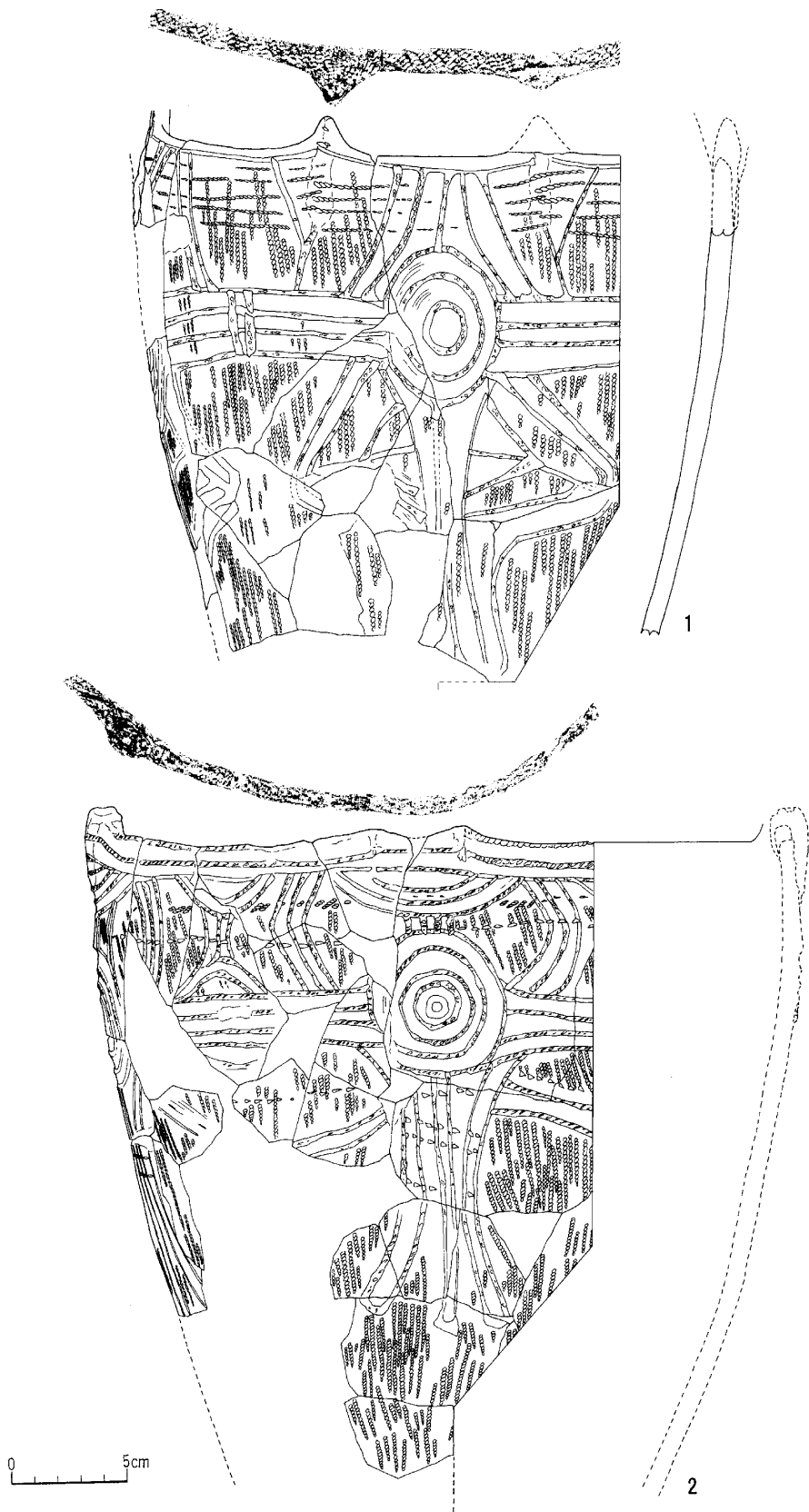
常呂川河口遺跡



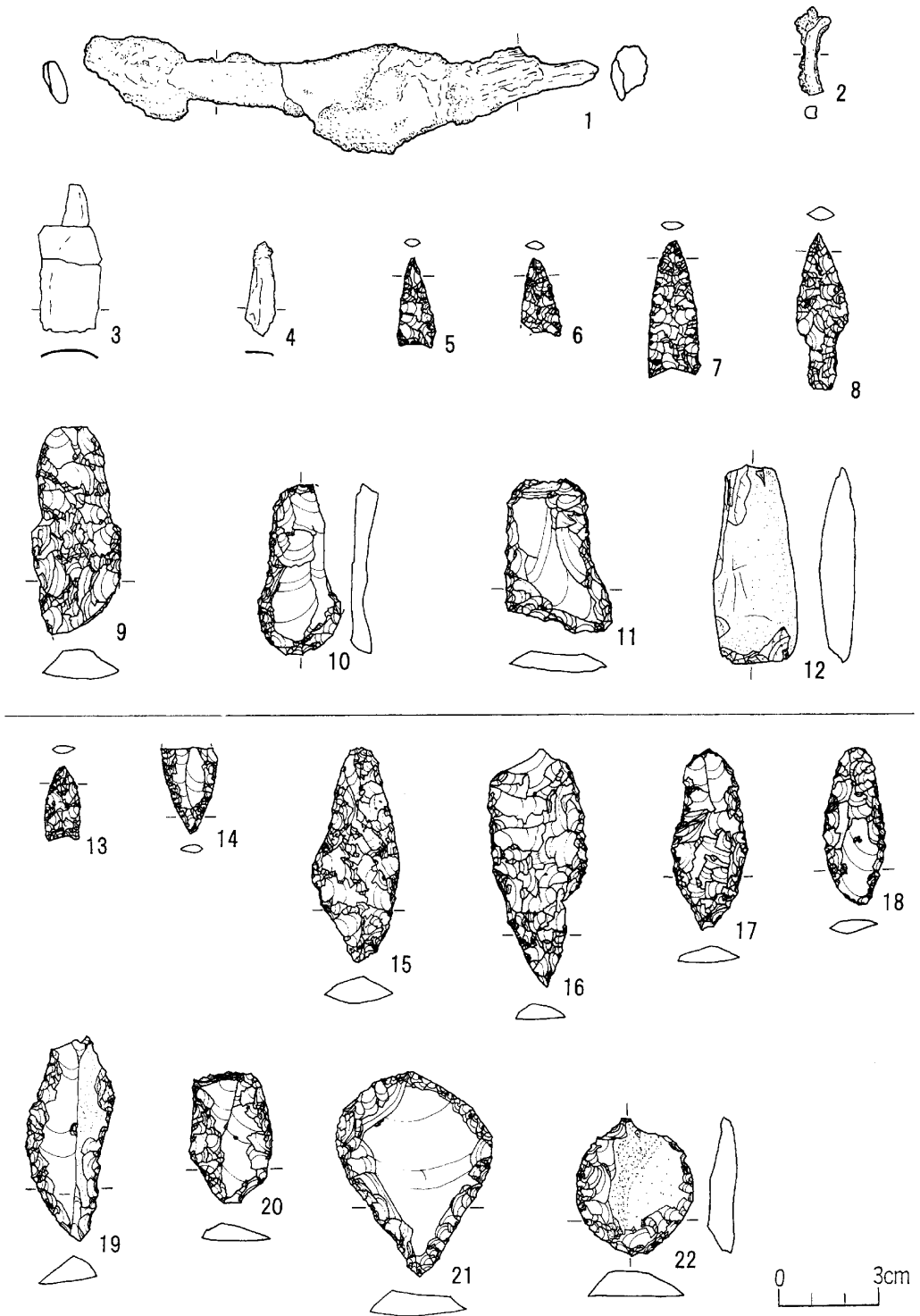
第6図 159号堅穴平面図・上部アイヌ期送り場遺物出土状況



第7図 159号竪穴床面(1)・カマド上面(2)・埋土(3~20)出土土器



第8图 159号竖穴埋土(1·2)出土土器



第9図 159号竪穴埋土(1~12)、160号竪穴埋土(13~22)出土石器・鉄製品

の無文小型土器。3～20は埋土出土。3は口径21.5cmの中型鉢形土器。縦位の刻線文と矢羽根文、斜めの刻線文の複段文様であり、縦位の刻線文は図示するとおり針葉樹状文となる。4は口径約17cmの無文土器。器壁は厚く1cmである。5～7は続縄文後北C₂・D式。7は3本単位の櫛歯状施文具による沈線文が施され、一部に隆帯がみられる。8・9は後北C₁式。10は宇津内Ⅱb式。11～15は同Ⅱa式。16は口縁部が内屈する。興津式相当であろう。17は無文部に突瘤文と細い円形刺突文をもち、胴下部とは馬蹄状の刺突文が施される。続縄文初頭であろう。18は無文部に縄端圧痕文が施されている。19は太目の沈線文をもつ続縄文土器の底部。20は縄文晩期前葉であろう。

第8図は埋土出土。1は口径約25cm、2は口径約30cmの大型鉢形土器。2点とも同心円文が施された続縄文宇津内Ⅱb式である。

第9図-1は埋土から出土した鉄製刀子。1はやや上向く木質の柄部が遺るもので長さ約15.2cm、刃部幅約1.3cm。本堅穴に伴うと思われる。2～4はアイヌ期の送り場から各種の遺存体に混じって出土した。2は断面が方形を呈するもので釘と思われる。3は3点が接合した。極めて薄い銅製で、用途は不明である。4は3と同一の素材で、右側縁が曲げられている。

石器は第9図-5～7が無茎石鏃。8は有茎石鏃。9は両面加工ナイフ。10は搔器。11は靴形状の削器。12は自然礫に刃部を作出した石斧。5～11は黒曜石製、12は泥岩製である。

小 括

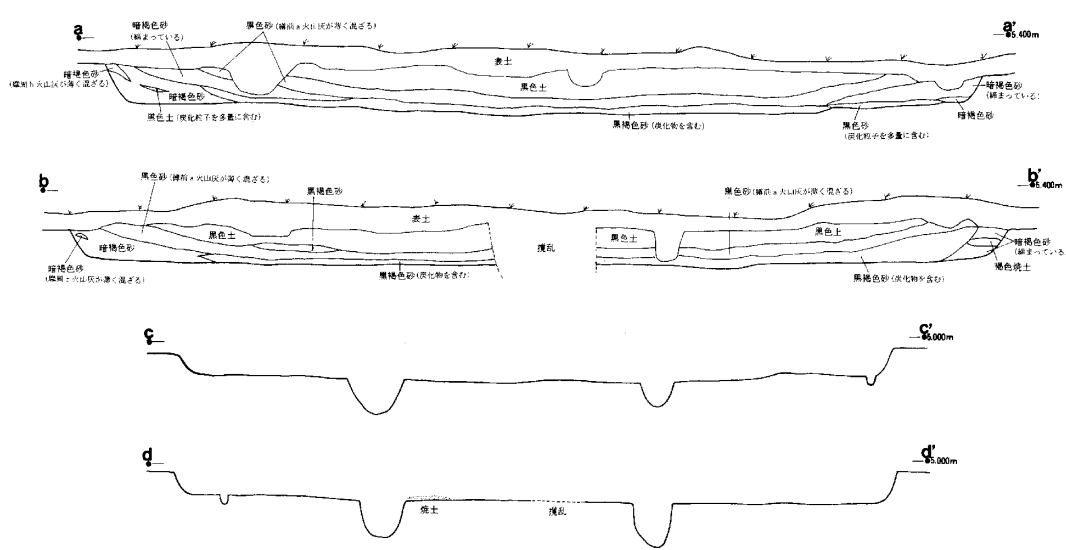
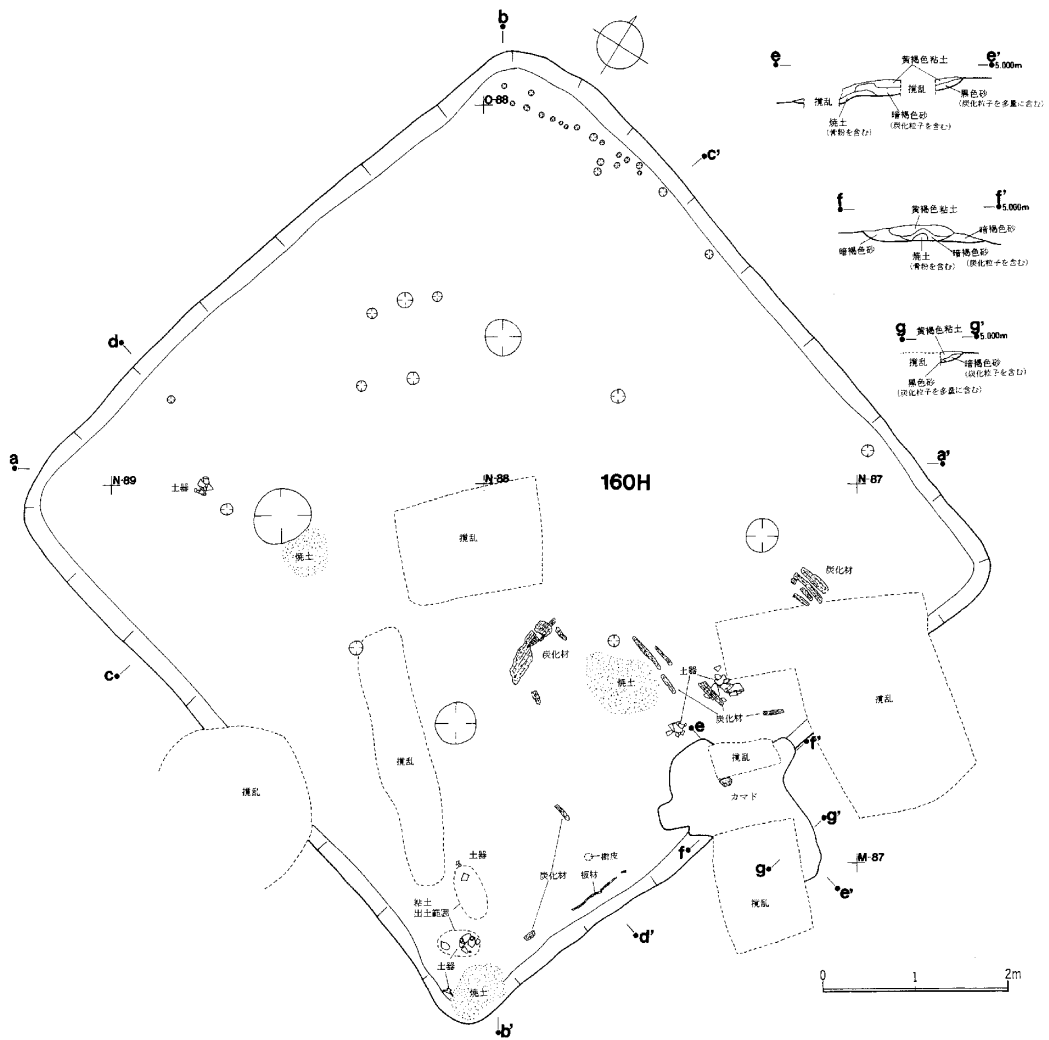
本堅穴は径3.50mほどの小型方形を呈した、擦文期の堅穴である。埋土出土の第7図-3は藤本編年g・h期、宇田川編年後期に比定される。

堅穴の窪みを利用したアイヌ期の送り場は樽前a火山灰の上層にみられ、下層からヒトの下顎骨が出土している。また、焼土から検出された種子は附編1に報告されているとおりのヤマブドウ種子など10種類におよぶ。(武田 修)

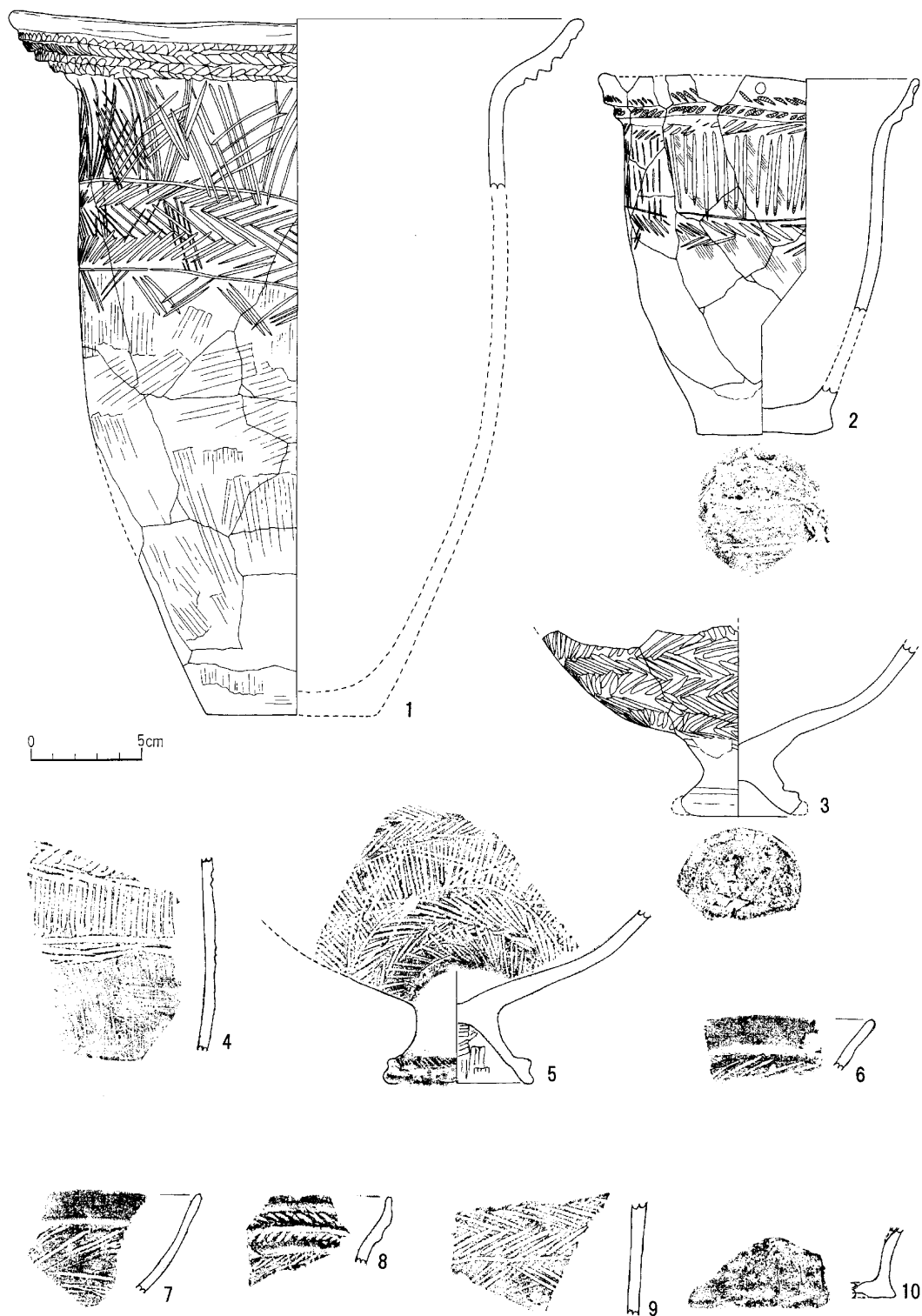
160号 堅 穴

遺 構 (第10図, 図版4-5)

本堅穴はM87・88, N87・88グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると層厚約30cm前後の黒色土の落ち込みが認められ、下層には薄い樽前a火山灰を含む黒色砂が堆積している。また、床面は細い炭化材を含む黒褐色砂に覆われている。この様に本堅穴埋土は黒色腐食砂質土が主要な堆積層である。セクション図、エレベション図a・a', c・c'ラインに示すとおり、北壁側の床面が4～5cmの高低差をもつが、黒褐色砂は床面のほぼ全域に堆積しており、他の遺構との重複は考えられない。むしろベンチ状の施設が想定される。さらにセクション図b・b'ラインの南壁では褐色を呈した焼土を切り込んで壁が立ち上がっているため、古い時期の堅穴が存在した可能性があるものの、焼土をもつ古い面はこの区域で欠失しているた



第10図 160号竪穴平面図



第11图 160号竖穴床面(1~4)・埋土(5~10)出土土器

め明確に判断することができなかった。

竪穴の中央部や東壁で攪乱を受けているため遺存はあまり良くないが、形態・規模など基本的なことは確認できた。規模は東西約7.80m、南北約7.50mの方形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

カマドは東壁中央部に構築されている。天井部や煙道部は黄褐色粘土を用いているが両袖部では明瞭に認められず、壁に近いセクションf・f'ラインでは約7～8cm掘り下げた後に、黄褐色砂を埋めて煙道を構築している。燃焼部の焼土には骨粉が含まれる。煙道は1.20m程の長さがあるもののほとんど傾斜がなく平坦に近い。炉は中央部が攪乱を受けているためか検出できなかった。東南壁隅の床面には長さ約46～61cm、幅約30cmの粘土が2箇所あり、上面から第11図-3の高杯、4の胴部片が出土している。

中央部から東壁側では焼土、炭化材が認められ。焼土は壁上部や床面にある。炭化材はカマド前面の周辺にあり、垂木材と推定される径約6～10cmの細いものは東西方向にあり、東壁と並行した2本の支柱穴間にある径約28cmの太いのは梁材であろう。東壁には板壁と思われる長さ約60cm、厚さ約2cm、長さ約25～35cmの板材が立った状態で検出されている。

支柱穴は4本である。太さは不揃いで、小さい径で約35～45cmが3本。深さ約25～60cm。南西壁側の太いのが径約63cm、深さ約37cmである。補助柱は各支柱穴の中間に径約1cm、深さ約16～29cmのものが配置されている。壁柱穴は北壁隅側で18本が短い間隔で見られる。径約3～5cm、深さ約8～13cmが最も多い。通常の壁柱穴は約10～20cmであり、数10cm～数cmの間隔をもつがそれから比較すると極端に細く、間隔も最短で4～5cm、最長でも15cmである。壁柱とするには無理なほど細いので、北壁隅側の18本は別な用途・機能が考えられる。なお、径約10cm内外、深さ10～15cmの壁柱穴は北壁で3本、西壁で1本みられるものの南壁、東壁では検出できなかった。

遺物 (第11図, 第12図, 第9図-13～22, 図版5-1・2)

第11図-1はカマド前面の床面から大きく二つに分かれて出土した。口径約26cm、器高約31cmの中型鉢形土器である。矢羽根状文と鋸歯状文が複段的に施文されている。内部は煤が付着する。2は南西壁側の支柱穴に近い床面から出土した。口径約14.5cm、器高約16cmの中型鉢形土器である。口縁部は「手塩手法」による施文がみられ、胴上部の文様は縦位の刻線文が矢羽根状文に区画される。胴下部は刷毛により調整される。底部は3本の刻線文がみられる。3・4は前記した東南壁隅の床面の粘土上面から出土したもので、3は矢羽根状文が施された高杯。口縁部の大部分は欠失する。4は大型鉢形土器の胴部片。5～10は埋土出土。5は高杯。矢羽根文間の縦位の刻線上に山形文が施される。6・7は高杯の口縁部。8・9は大型鉢形土器、10は底部。全て擦文土器である。

第12図は埋土出土。1～5は統縄文後北C₂・D式。6・7は宇津内IIb式。8は同IIa式。9は統縄文底部。10は屈曲部に縄端圧痕文が施される。統縄文初頭であろう。11は縄文晩期中

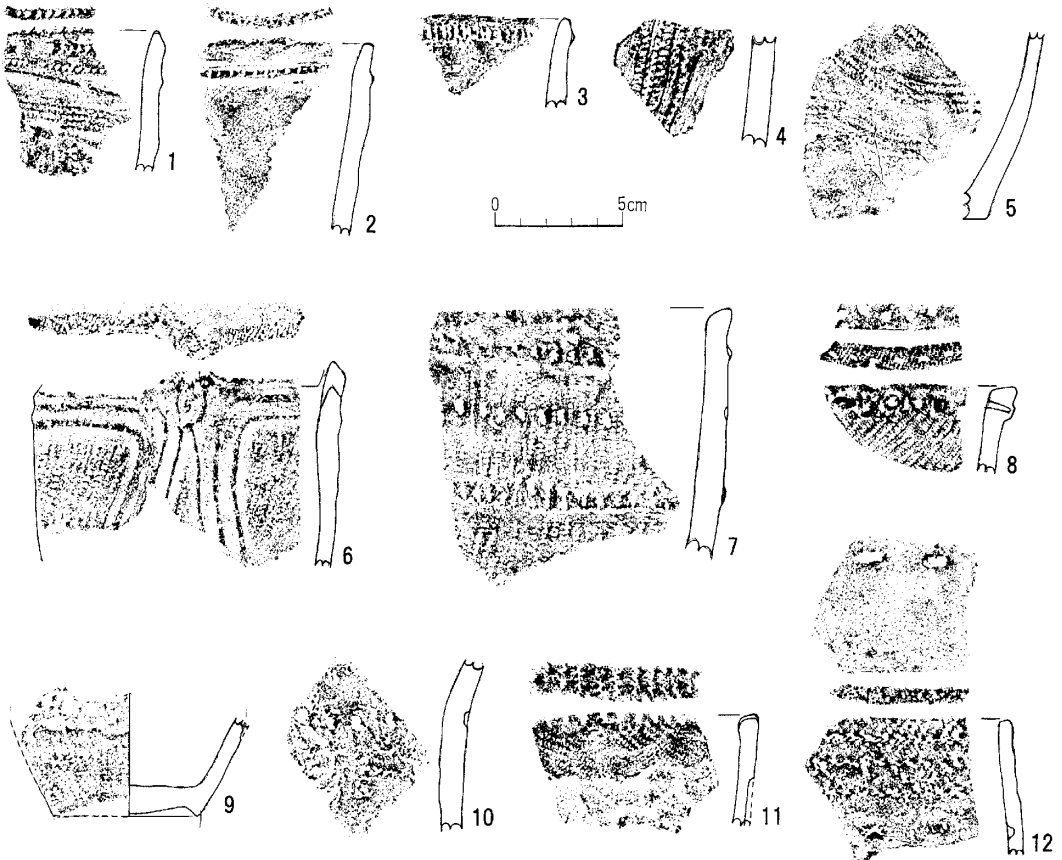
葉、12は縄線文に突瘤文がみられるもので縄文晩期前葉から中葉であろう。

石器は全て埋土出土。第9図-13は無茎石鏃。14は主要剥離面側の縁辺部にも加工を施した尖頭状の削器。15は両面加工ナイフ。16は片面加工ナイフ。17~21は削器。22は円形搔器。全て黒曜石製である。

小 括

本竪穴は焼失住居である。時期は宇田川編年後期、藤本編年 g・h 期に比定される。

(武田 修)



第12図 160号竪穴埋土(1~12)出土土器

161号 竪 穴

遺 構 (第13図, 図版5-3)

本竪穴はI 88・89, J 88・89グリッドにかけて検出された竪穴で、形態は方形を呈する。各壁の長さは東壁約5.30m、南壁約4.90m、西壁約4.20m、北壁約4.90mを測る。壁高は確認面から約60cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の南壁の一部が攪乱を受けており、南西隅から北壁中央部と東壁のカマド北側から北壁にかけても水道工事による攪乱を受けている。

竪穴中央よりやや東寄りには径約60cmの範囲で炉跡があり、炉跡の焼土中からは骨片が多少検出されている。カマドは東壁中央に構築され、構築材は粘土である。煙道の長さは約65cmであり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土からは骨片が検出されている。

柱穴は主柱穴が径16~18cm、深さ18~22cmのものが3本検出されたが、遺りの1本は攪乱により失われたものと思われ検出できなかった。壁柱穴は径8~14cm、深さ7~15cmのものが7本確認され、その他に径8~18cm、深さ8~22cmの柱穴が23本確認された。

埋土中の黒色砂層は炭化物が混入し、炭化したクルミが認められている。竪穴の中央より北西側の埋土中には径約1.00mの範囲で礫の集積が見られるが、一部は攪乱を受けている。この礫の集積と西壁との間の埋土中には黒曜石のフレーク・チップの集積も見られた。

遺 物 (第14図, 第15図)

第14図-1は炉跡西側の床面に出土した高坏の脚部。埋土からは2が口径19cm、器高9.7cmの高坏。矢羽根状文を2列巡らせ、3箇所3~6本1組のV字状の沈線を施す。3・4は高坏。5~10は擦文土器。5~7は口縁部。9・10は底部。11は半載状刺突文具による刺突文を施す紡錘車。径8.2cm、厚さ1.6cm、重量60g。12~14は続縄文後北C₂・D式。15・16は宇津内IIb式。17・18は続縄文初頭。19は縄文晩期。20~22は縄文後期。

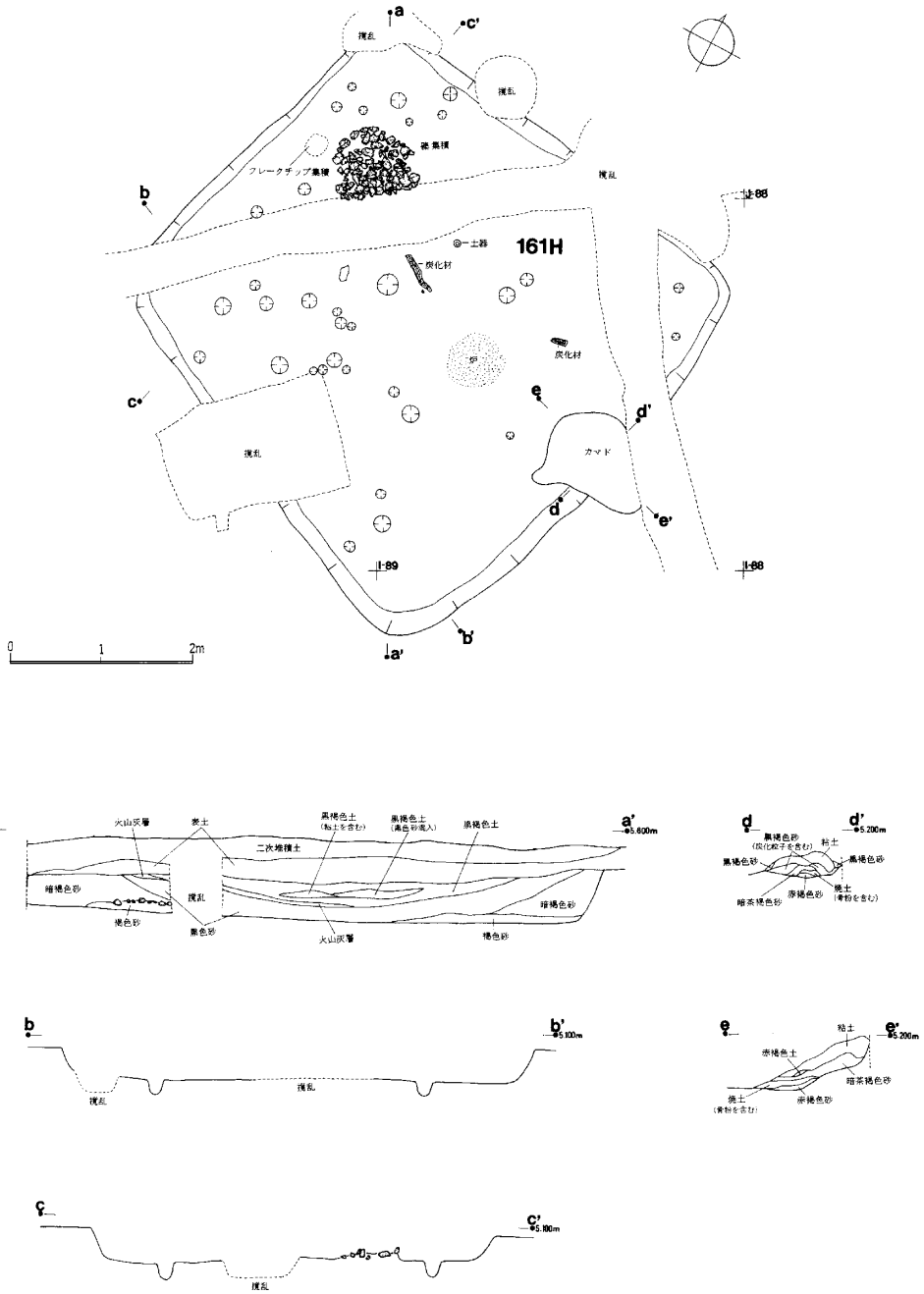
石器はすべて埋土出土。第15図-1は黒曜石製の無茎石鏃。2は頁岩製の削器。3は黒曜石製の搔器。4は砂岩製の砥石。5は砂岩製のたたき石。

小 括

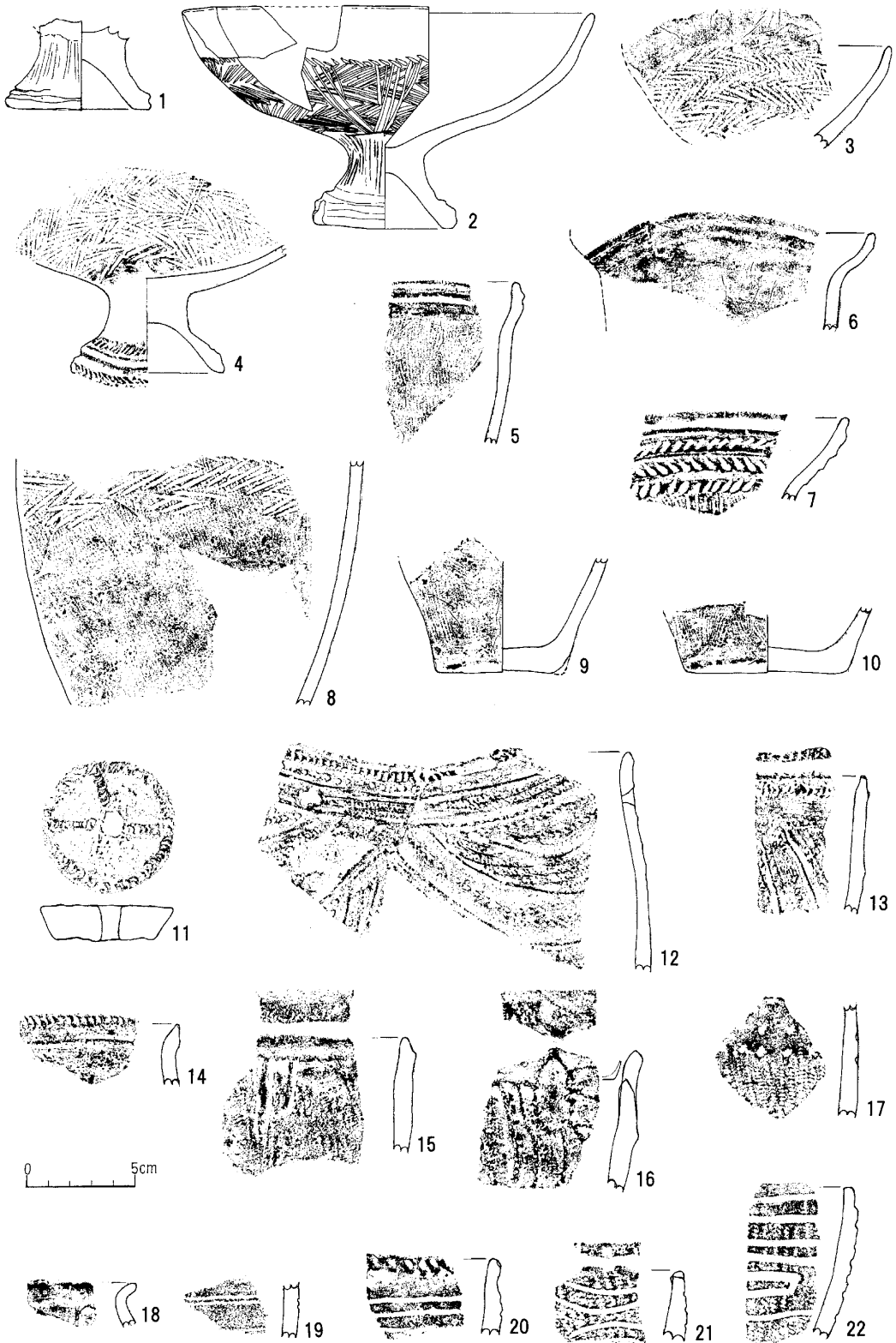
本竪穴は方形を呈する擦文期の竪穴である。カマドは東壁に構築されている。竪穴の埋土中から炭化物が検出されていることから、火災住居と考えられる。時期は出土土器から宇田川編年後期に比定されるものと考えられるが床面出土の土器が1点のみであり断定はできない。

(佐々木 覚)

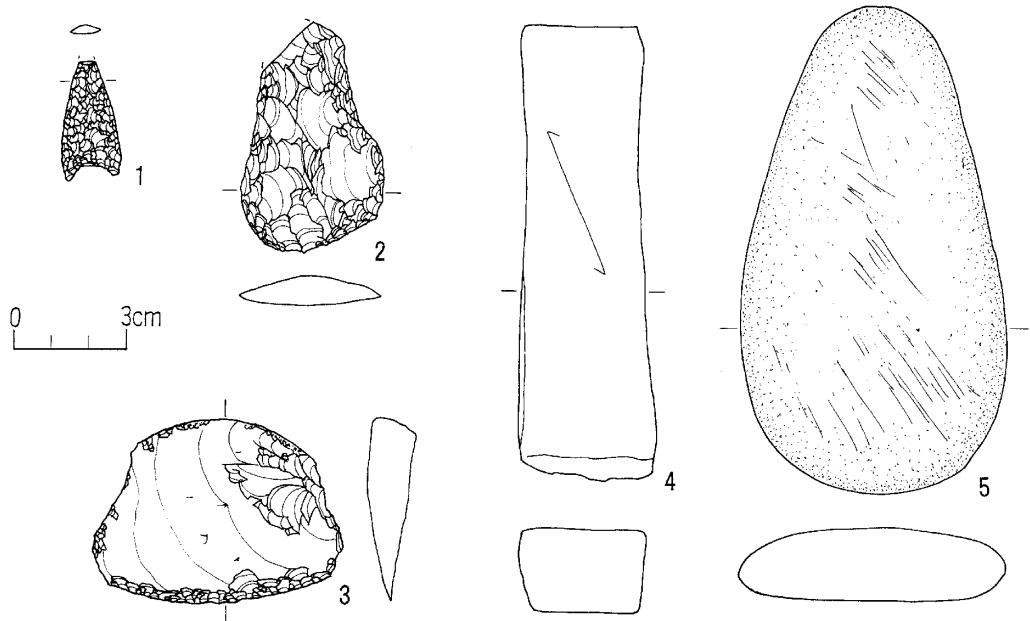
常呂川河口遺跡



第13図 161号竪穴平面図



第14图 161号竖穴床面(1)・埋土(2~22)出土土器



第15図 161号竪穴埋土(1~5)出土石器

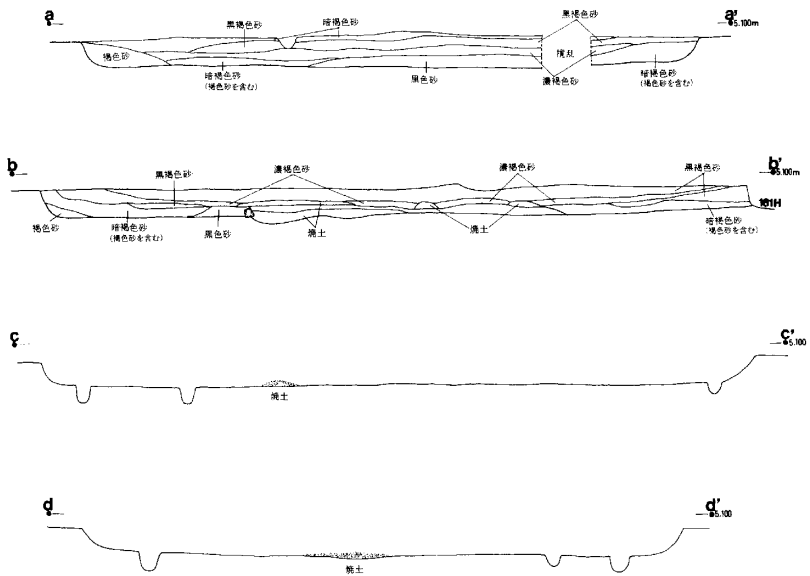
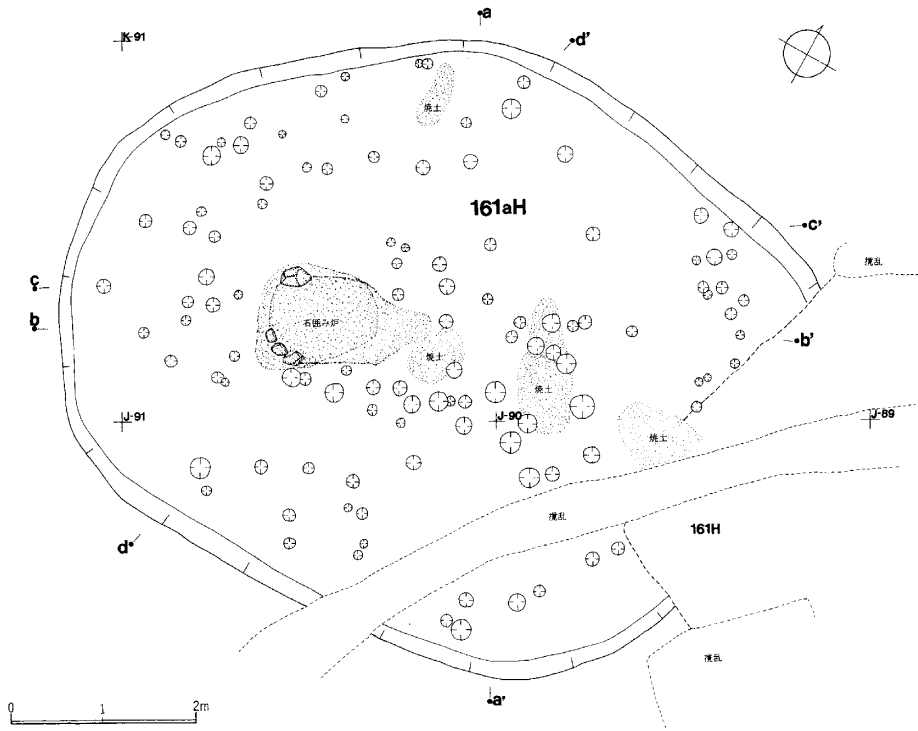
161a号 竪 穴

遺 構 (第16図, 図版6-1)

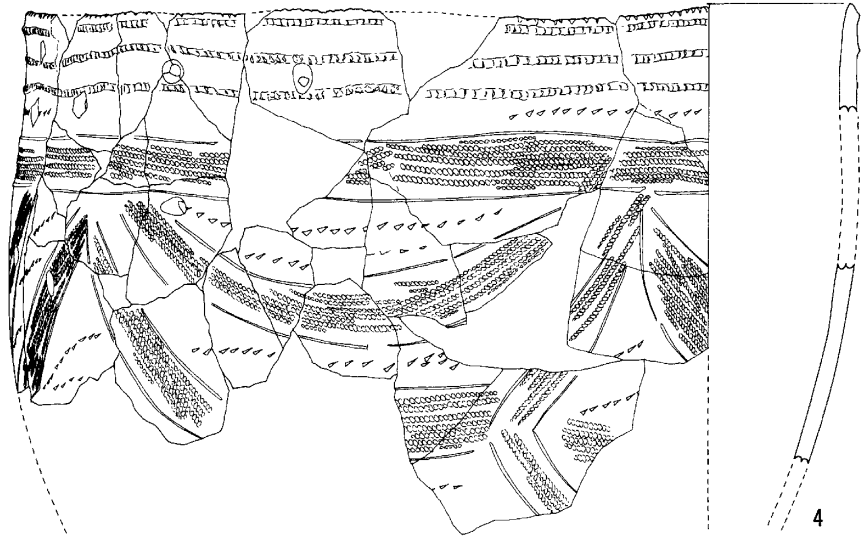
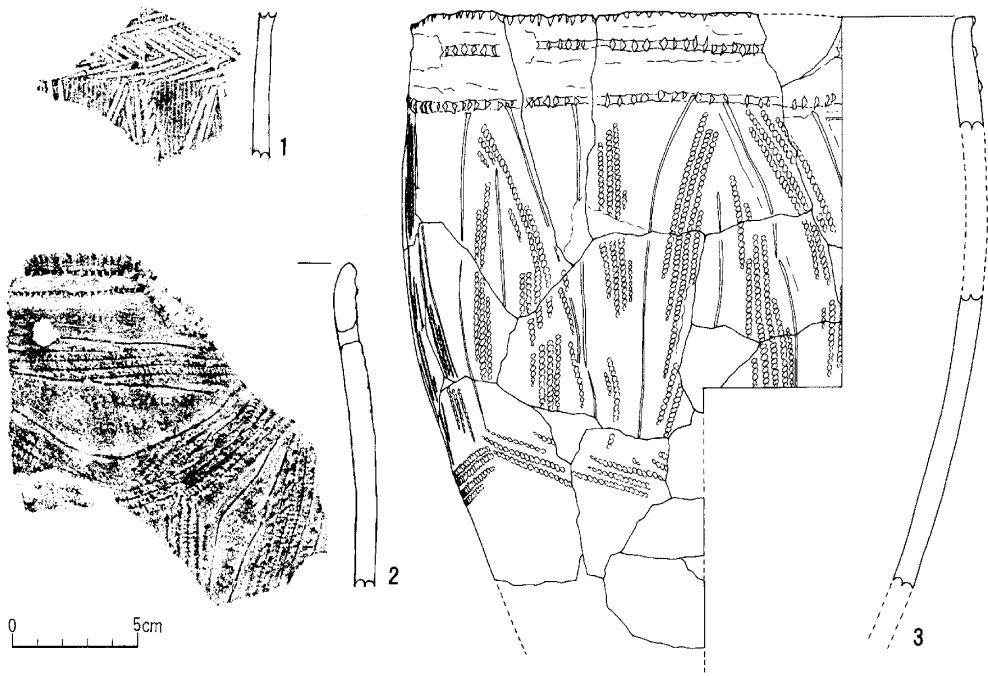
本竪穴は161号竪穴の西側から検出された竪穴である。床面を覆っている黒色砂層の上面からは3箇所から炉跡と考えられる焼土が検出されている。3箇所の焼土中には多くの骨片が認められ、炭化したクルミも検出されている。また、第17図-3・4、第18図-6の土器が一括出土している。

竪穴の規模は東壁の大部分が161号竪穴に切られているが長軸約8.20m短軸約6.70mの楕円形を呈すると思われる。竪穴の南壁から東壁にかけて水道工事による帯状の攪乱を受けている。壁高は確認面から約45cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の中央より多少西寄りの床面に約170×90cmの炉跡が検出された。焼土の南縁に3点と北西縁に1点の計4点の礫が検出されていることから石囲み炉であったと考えられる。この焼土の中からは非常に多くの骨片が検出されており、炭化したクルミも検出されている。この他に東壁近くに約100×60cmの範囲、北壁近くの焼土中からはごく少量の骨片が検出されただけであった。

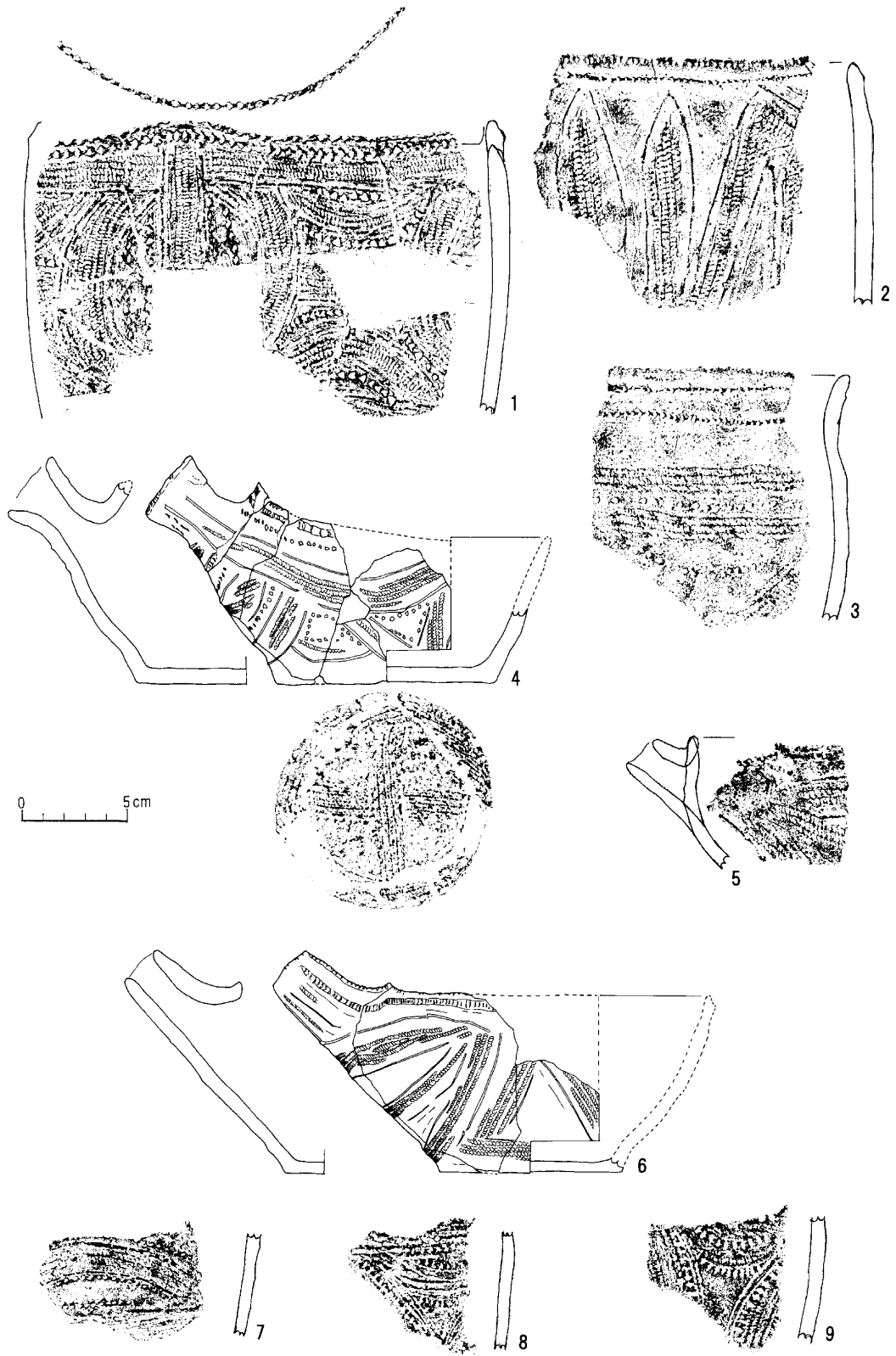
柱穴は径16~20cm、深さ16~25cmの主柱穴と思われるものが5本、径8~16cm、深さ7~18cmの壁柱穴と思われるものが14本検出された。



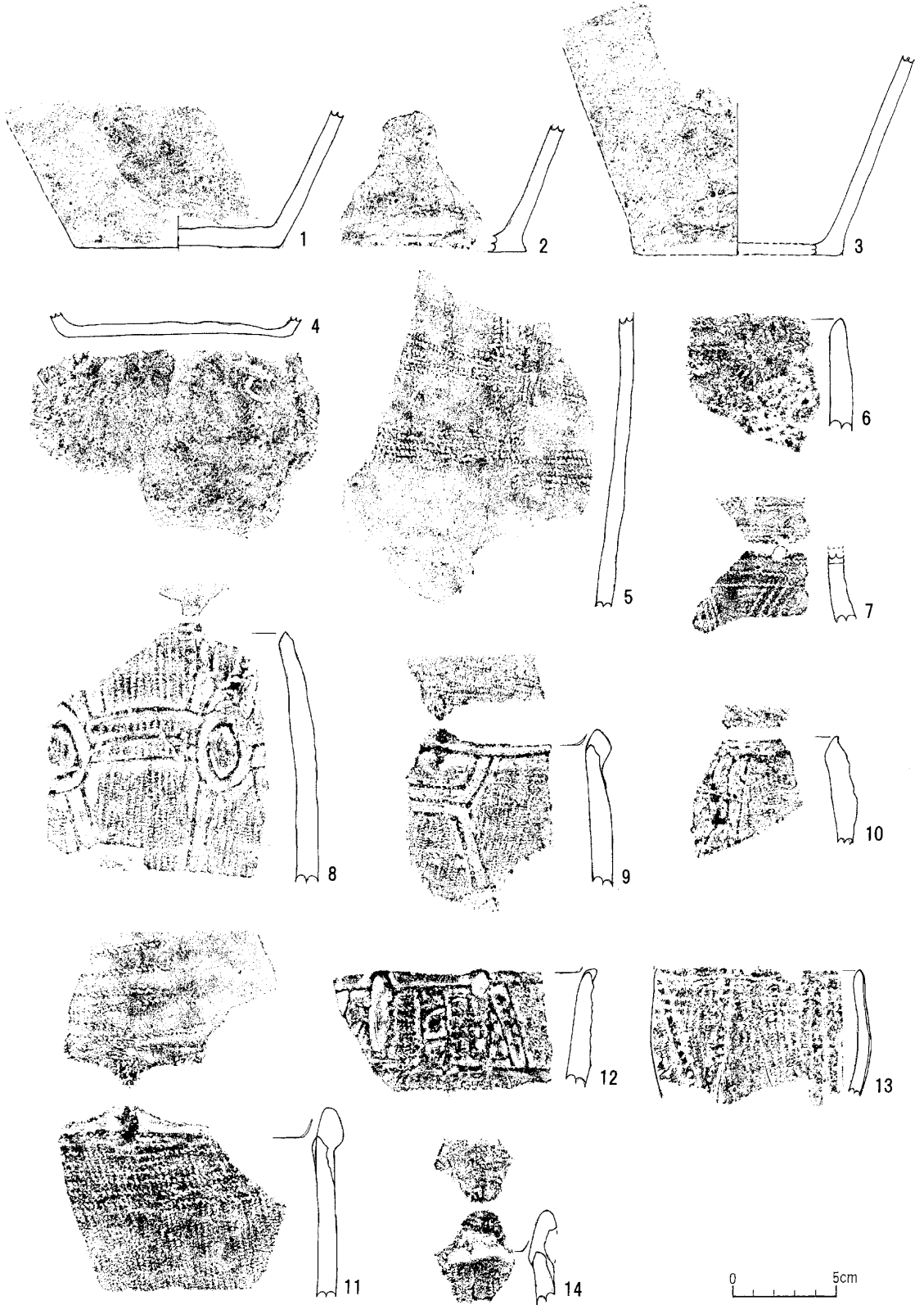
第16图 161a号竖穴平面图



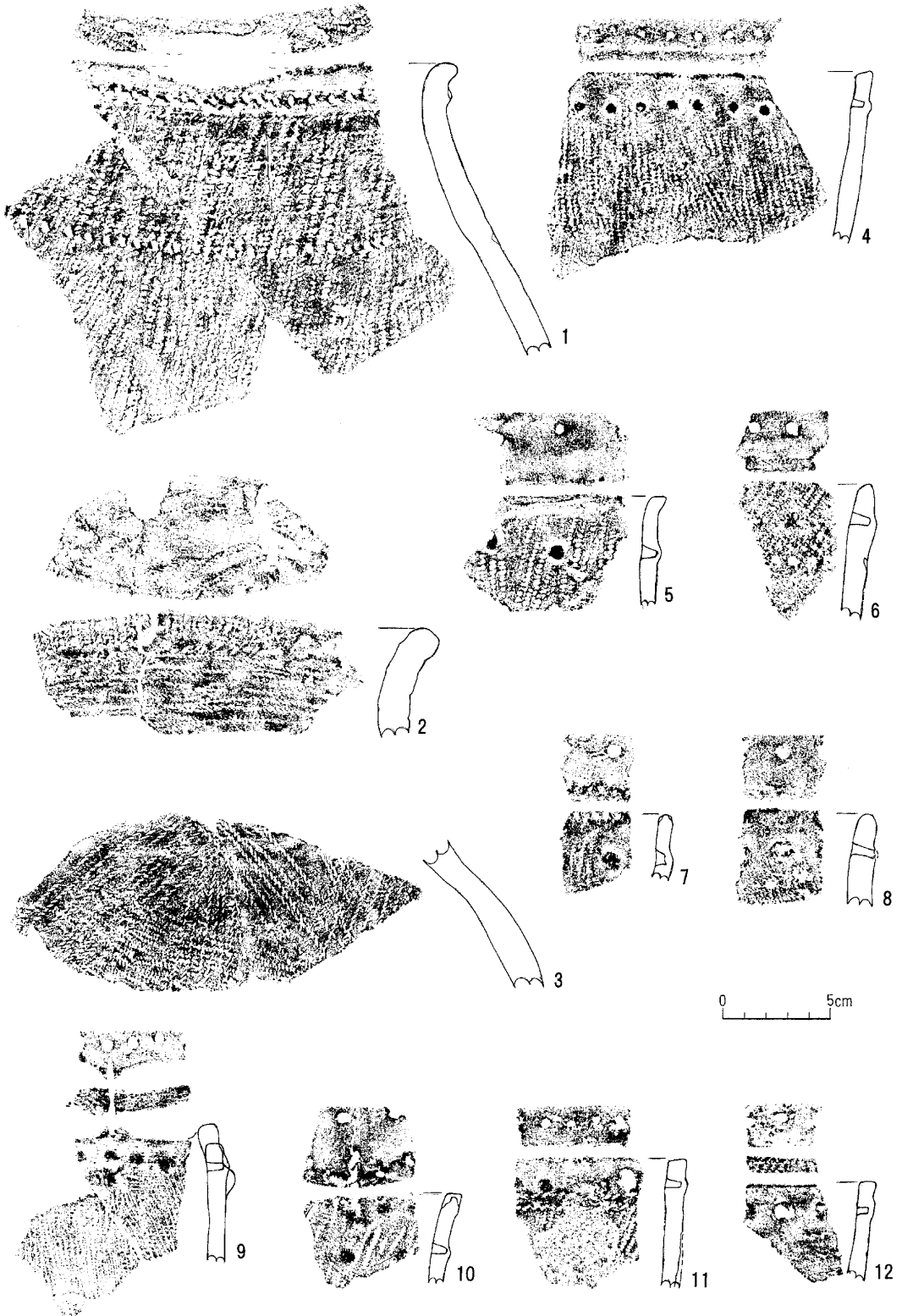
第17图 161a号竖穴埋土(1~7)出土土器



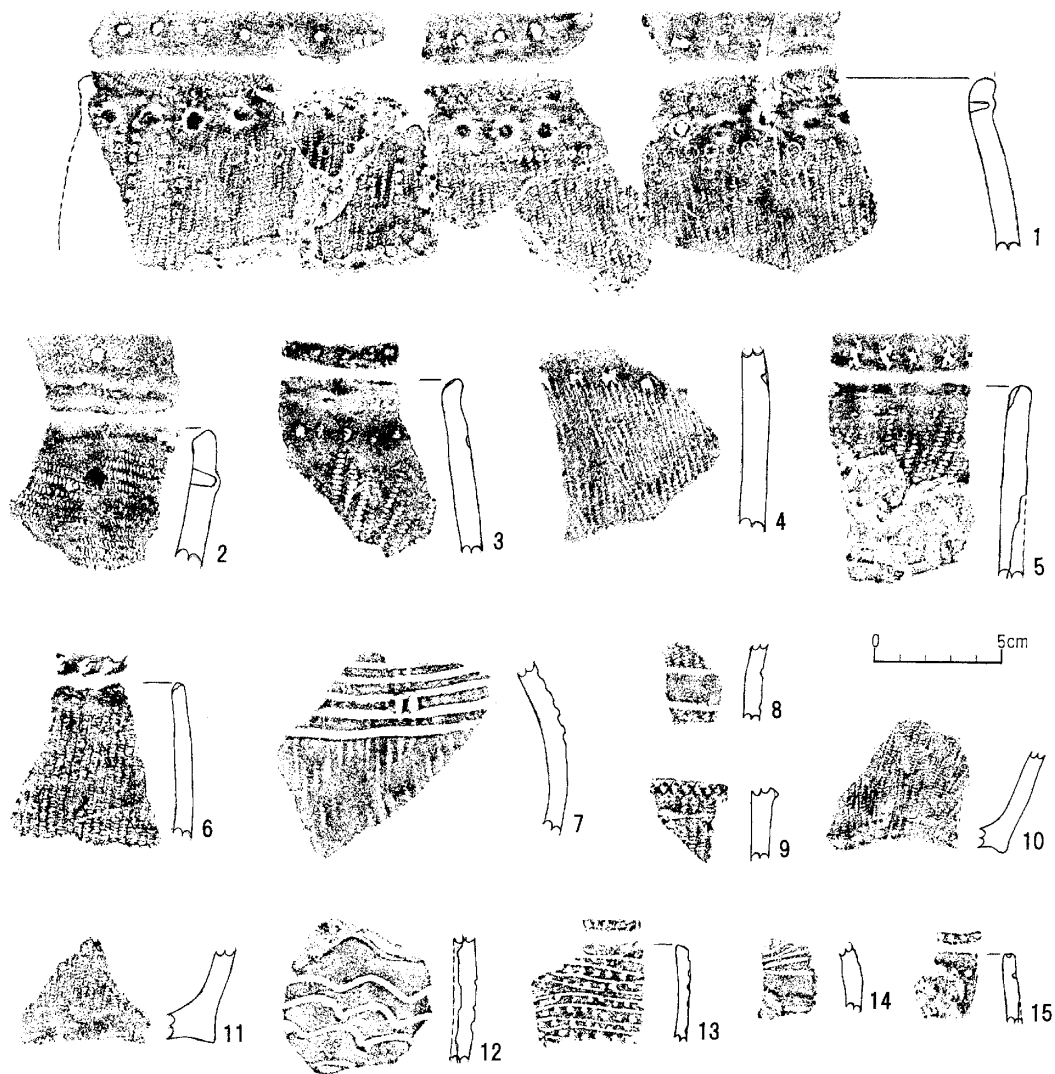
第18图 161a号竖穴埋土(1~9)出土土器



第19图 161a号竖穴埋土(1~14)出土土器



第20图 161a号竖穴埋土(1~12)出土土器



第21圖 161a号竪穴埋土(1~15)出土土器

遺物 (第17図, 第18図, 第19図, 第20図, 第21図, 第22図, 第23図—1～17, 図版6-2・3)

床面からは土器は出土していない。埋土からは第17図-1は擦文土器。2～7は続縄文後北C₂・D式。3は口径22.5cm、4は口径32.5cm。器高はいずれも底部が欠失しているため不明である。

第18図はすべて後北C₂・D式。4～6は注口土器。4は口径14.4cm、器高7.2cm。口縁部に擬状隆帯を巡らせ、隆起線文と縞縄文・列点文を施す。6は口径15.5cm、器高8.5cm口縁部に擬状隆帯を巡らせ、隆起線文と縞縄文を施す。

第19図-1～4は後北式の底部。5は後北C₂・D式。6・7は続縄文初頭。8～14は宇津内Ⅱb式。

第20図-1～3は続縄文初頭。4～12は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。

第21図-1は宇津内Ⅱa式。突瘤をもち、半載状施文具による刺突文を施す。2～8は続縄文初頭。3～5は縄端圧痕文をもち、7・8は沈線を巡らす。9は宇津内Ⅱb式。10・11は宇津内式の底部。12～15は縄文晩期。12・14は沈線、13は沈線と刺突文、15は刺突文を施す。

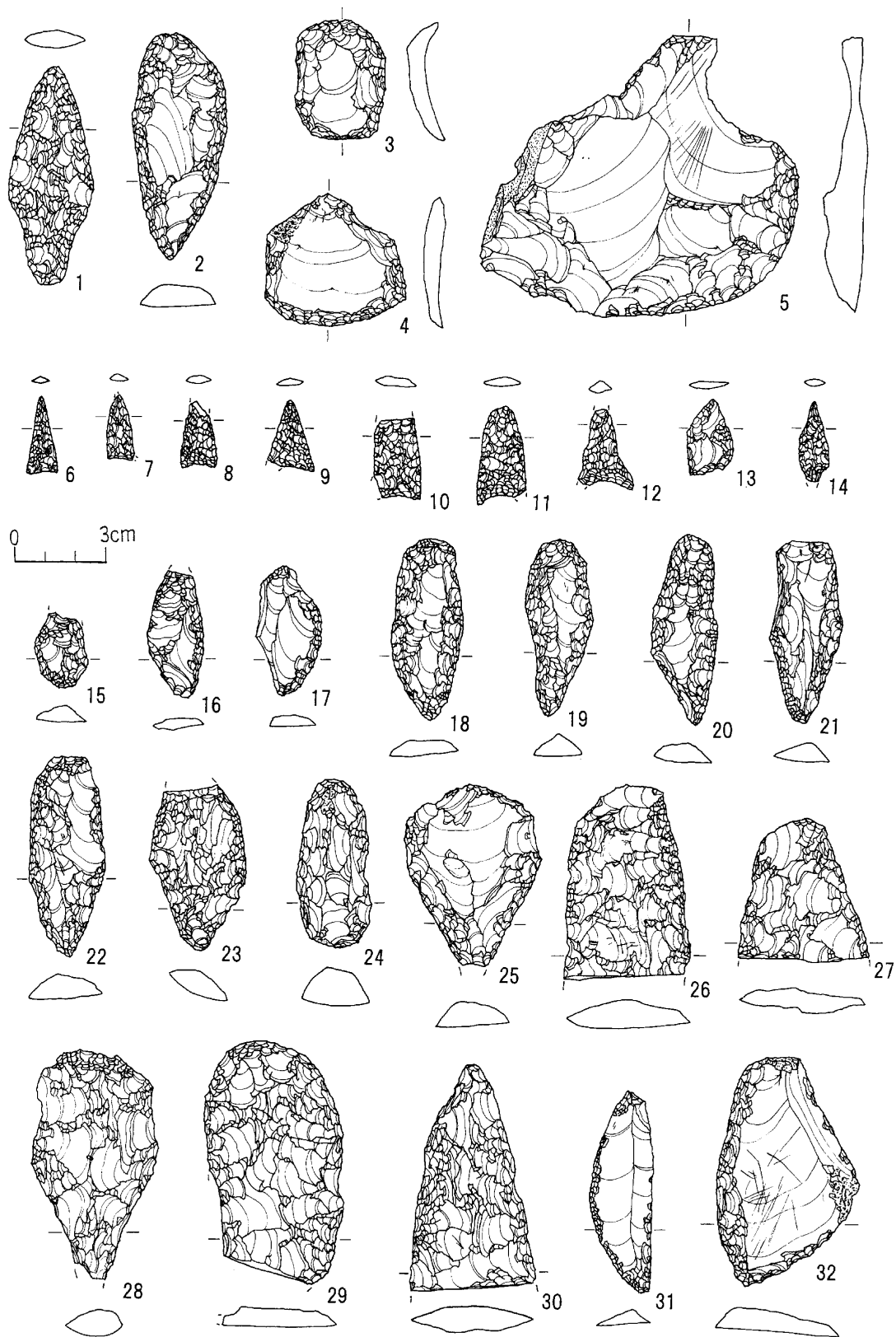
石器は第22図-1～5が床面出土。1は石槍。2は片面加工のナイフ。3～5は搔器。埋土からは6～13が無茎石鏃。14は有茎石鏃。15～25は片面加工のナイフ。26～30は両面加工のナイフ。31・32は削器。全て黒曜石製である。

第23図-1～5は削器。6～12は搔器。13・14は棒状原石。15は打製石斧の未完品。16・17はたたき石。15・17は泥岩製、16は砂岩製、それ以外は黒曜石製。

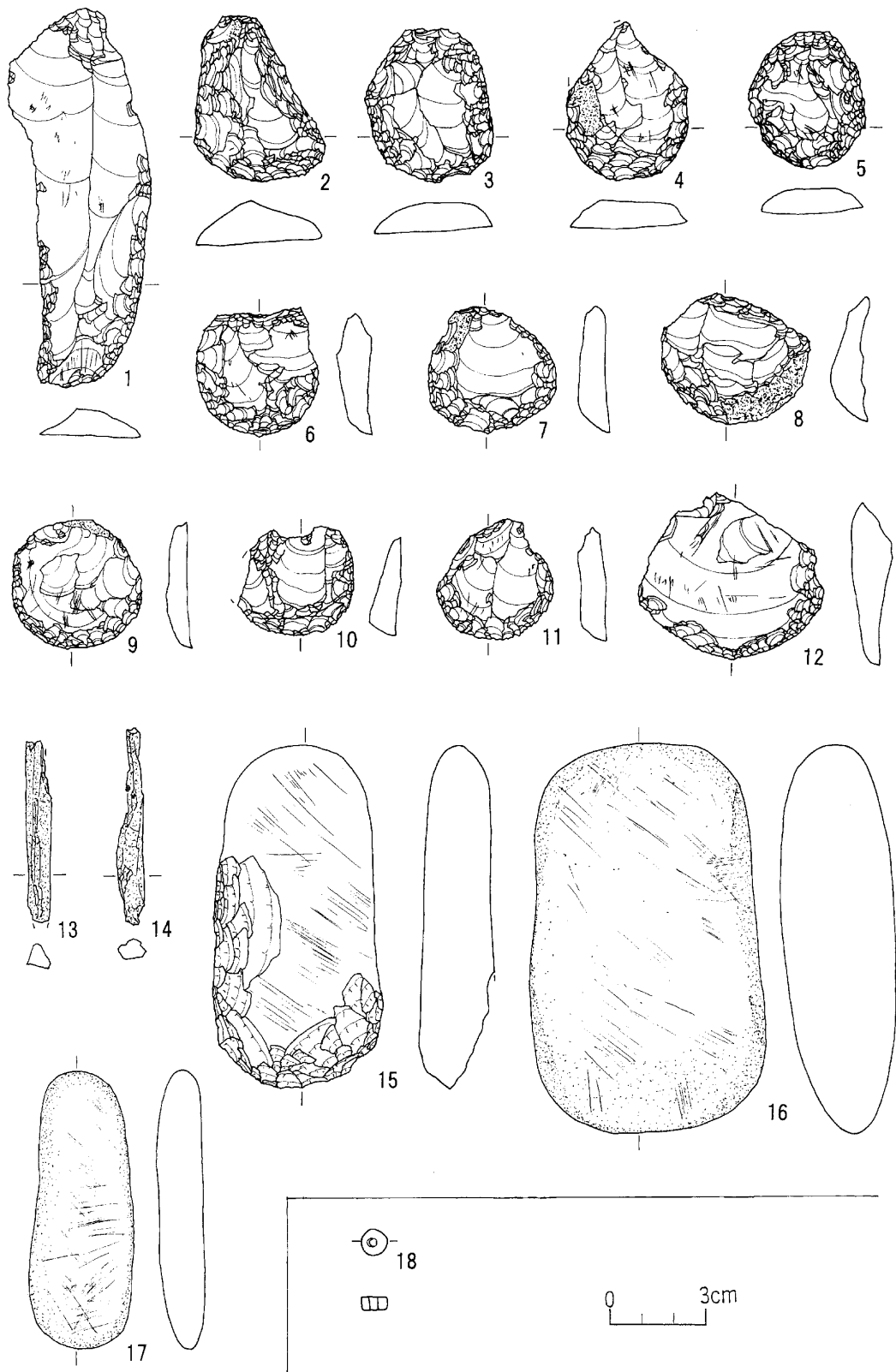
小 括

本竪穴は床面から土器が出土していないことから時期は不明である。埋土中から続縄文後北C₂・D式期の土器が焼土と同じ面から出土しており、竪穴廃棄後にも使用されたことがあったと考えられる。

(佐々木 寛)



第22图 161a号竖穴床面(1~5)·埋土(6~32)出土石器



第23图 161a号竖穴埋土(1~17)、161b号竖穴埋土(18)出土石器·琥珀玉

161b号 竪穴

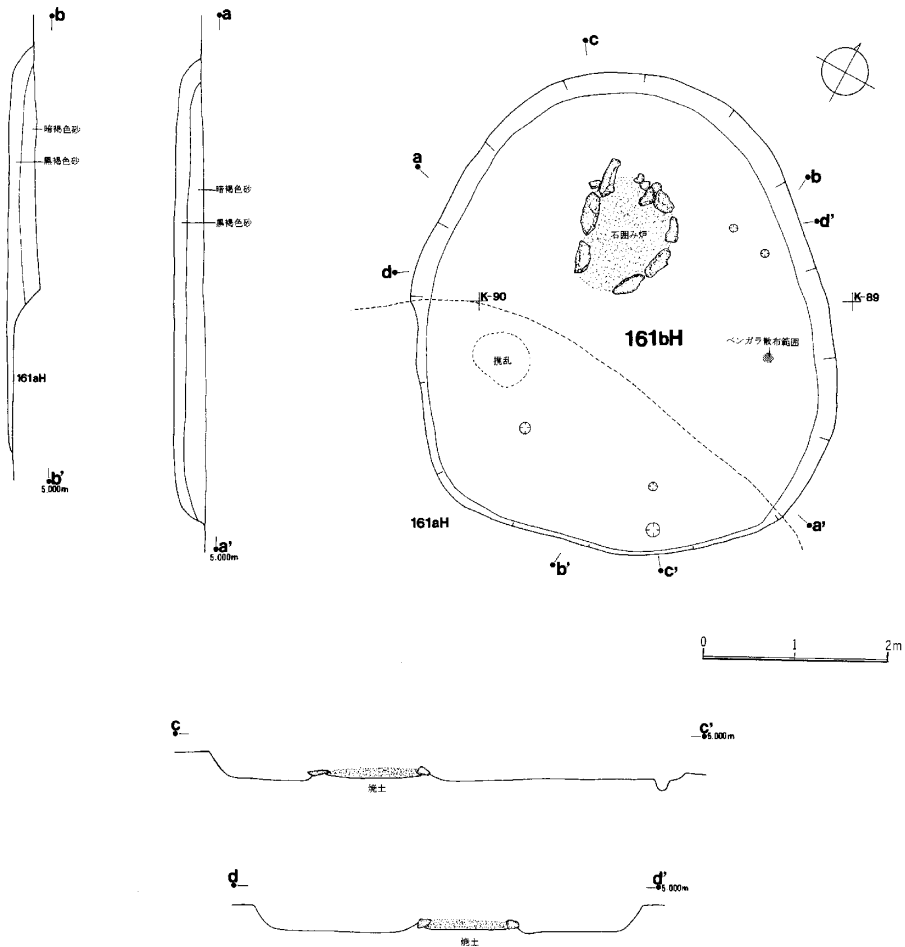
遺 構 (第24図, 図版7-1)

本竪穴は161a号竪穴の床面精査中に検出された竪穴で、形態は長軸約5.00m、短軸約4.60mの楕円形を呈すると考えられる。壁高は確認面から約30cmを測り、緩やかに立ち上がる。

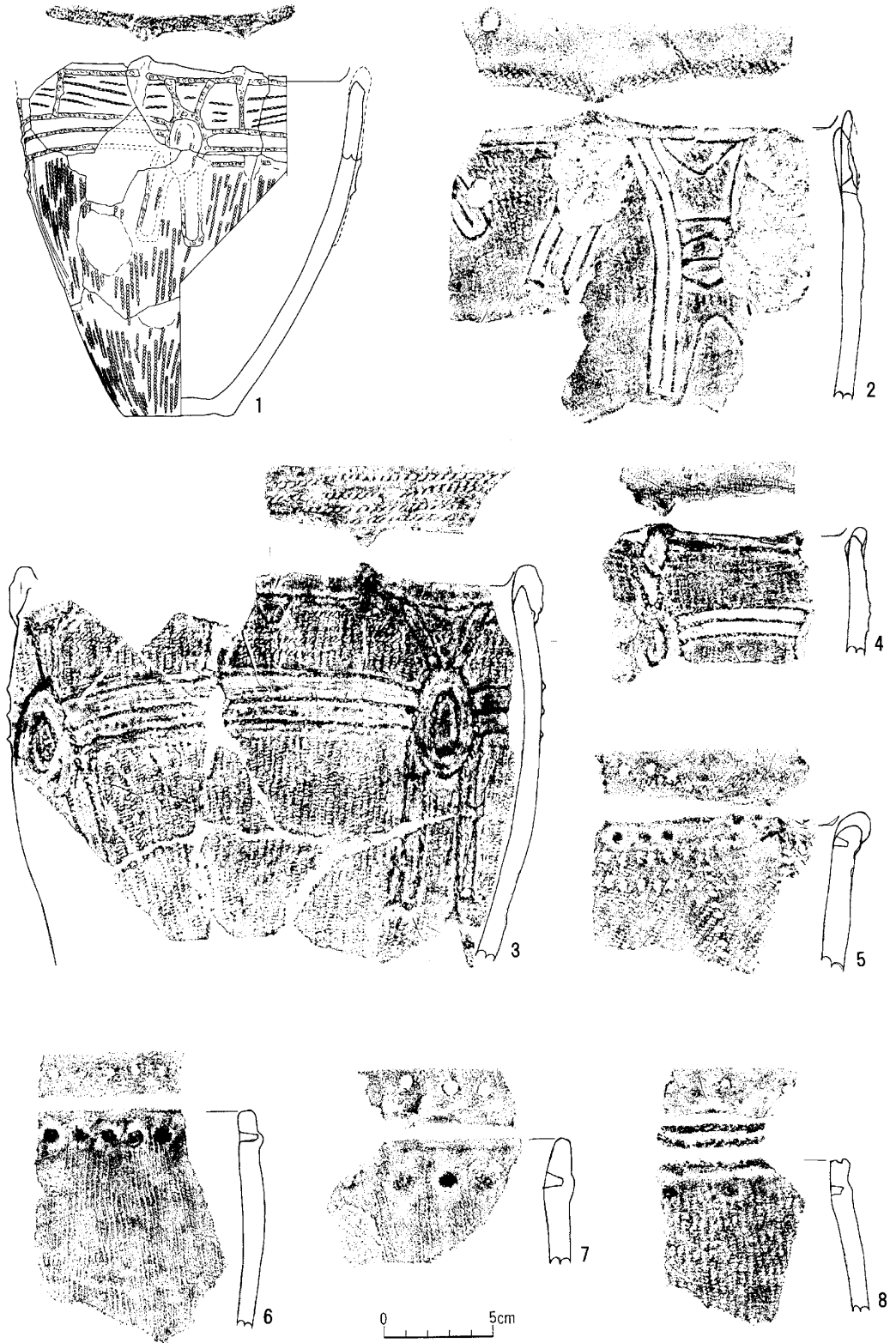
竪穴の埋土中には多量の礫が混入している。竪穴中央よりやや北西側に大小11個の礫に囲まれた約1～1.20mの炉跡が検出され、炉跡の焼土中から多くの骨片が検出された。

柱穴は径8～14cm、深さ8～13cmのものが5本確認された。

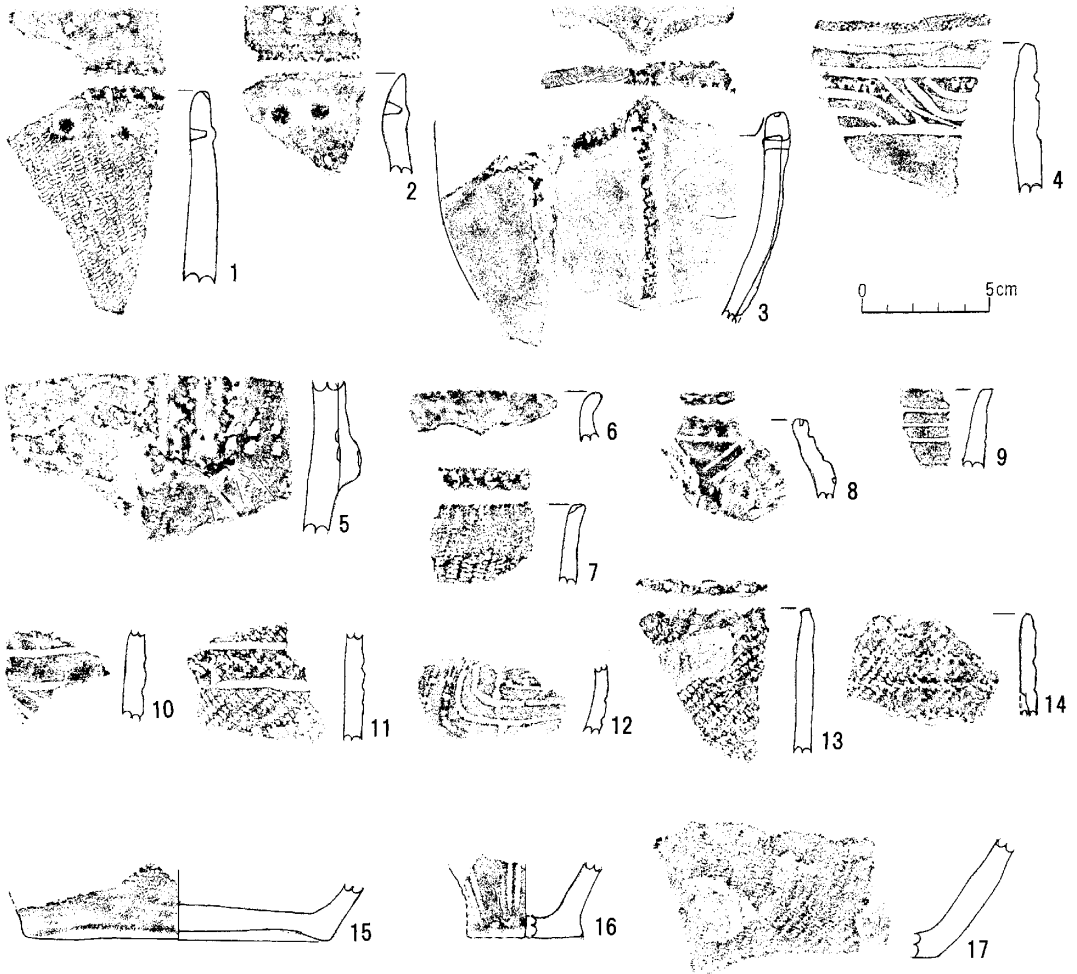
東壁近くの埋土中から径約10cmの範囲でベンガラが認められた。



第24図 161b号竪穴平面図



第25图 161b号竖穴埋土(1~8)出土土器



第26図 161b号堅穴埋土(1~17)出土土器

遺物 (第25図, 第26図, 第23図-18, 図版7-2)

遺物はすべて埋土出土。第25図-1は口径15.4cm、器高16.5cmの続縄文宇津内Ⅱb式。口縁部に擬縄隆帯の同心円文と横走る縄線文をもつ。2~4は擬縄隆帯と縄線文をもつ宇津内Ⅱb式。5~8は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。

第26図-1~3も宇津内Ⅱa式。4~9は続縄文初頭。4は興津式相当。5はフシココタン下層式相当。10~15は縄文晩期。10~12は沈線、15は縄線文をもつ。16・17は続縄文土器の底部。

第23図-18は琥珀製の平玉。

小括

本堅穴は161a号堅穴より古いと考えられるが詳細な時期は不明である。 (佐々木 覚)

162号 竪 穴

遺 構 (第27図, 図版7-3)

本竪穴は161号竪穴の北約1.20mに位置し、一辺約4.60mの方形を呈する。各壁の長さは東壁約4.80m、南壁約4.60m、西壁約4.50m、北壁約4.50mを測る。埋土中の表土と黒色土層の間には樽前a火山灰が検出されている。壁高は確認面から約50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

北壁の大部分と、南東隅から西壁にかけて水道工事による帯状の攪乱を受けている。竪穴中央より西寄りに炉跡の焼土が検出されているが、半分が攪乱により失われている。

カマドは東壁中央に構築されている。構築材は粘土であるが、北側の袖部に1点と南側の袖部に2点の礫が用いられていた。煙道の長さは約85cmであり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土からは骨片が検出されているものの、炉跡には骨片が認められていない。

柱穴は主柱穴が径14~18cm、深さ12~18cmが3本、壁柱穴は西壁際に径8~12cm、深さ9~16cmが4本、北壁際に径12cm、深さ17cmが1本確認され、その他に径8~16cm、深さ9~15cmの柱穴が12本検出された。

床面を覆っている黒色砂中から炭化材が認められたが、1点ごとの量が少ないことと薄いため取り上げることはできなかった。竪穴の南西壁際の床面から第28図-1・2の土器が出土し、カマド袖部北側の埋土中からは第28図-3の土器が出土している。南壁近くの床面からは粘土が検出されており、カマド南側の東壁際床面から黒色砂層上面にかけても粘土が検出されている。また、竪穴埋土で南壁付近の黒褐色砂層から骨片が6点認められた。骨片の一部は板状に削られている。

遺 物 (第28図, 第29図, 第30図, 図版8)

床面からは第28図-1・2の高坏が出土している。いずれも矢羽根状文を巡らす。1は口径19.6cm、器高10.2cm。2は口径17.2cm、器高28.2cm。埋土からは3~11が擦文土器。3は口径25.7cm、器高28.2cm。口縁部の3段の隆帯には短刻文を施し、胴部は縦の刻線と矢羽根状文を交互に巡らす。4~7は口縁部。8は高坏。9は高坏の脚部。11は底部。12は続縄文後北C₂・D式。13は後北C₁式。

第29図-1・2は宇津内Ⅱb式。3は宇津内Ⅱa式。4~7は続縄文初頭。8は縄文晩期。

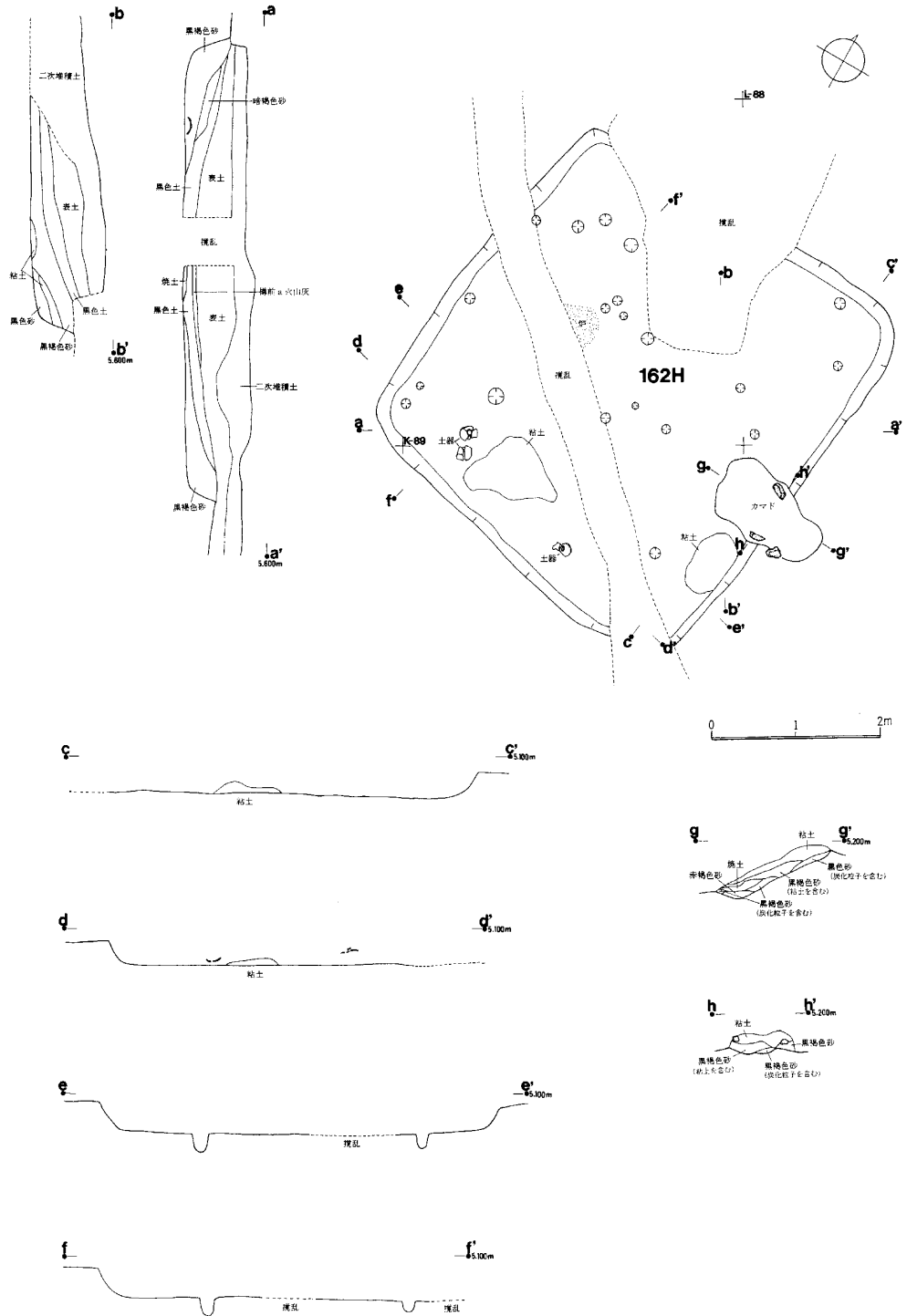
石器は第30図-1・2がカマドから出土。1は削器。2は搔器。埋土からは3が両面加工のナイフ。4~7は削器。8は搔器。9は玄武岩製の打製石斧。10は砂岩製の凹石。9・10以外は黒曜石製。

小 括

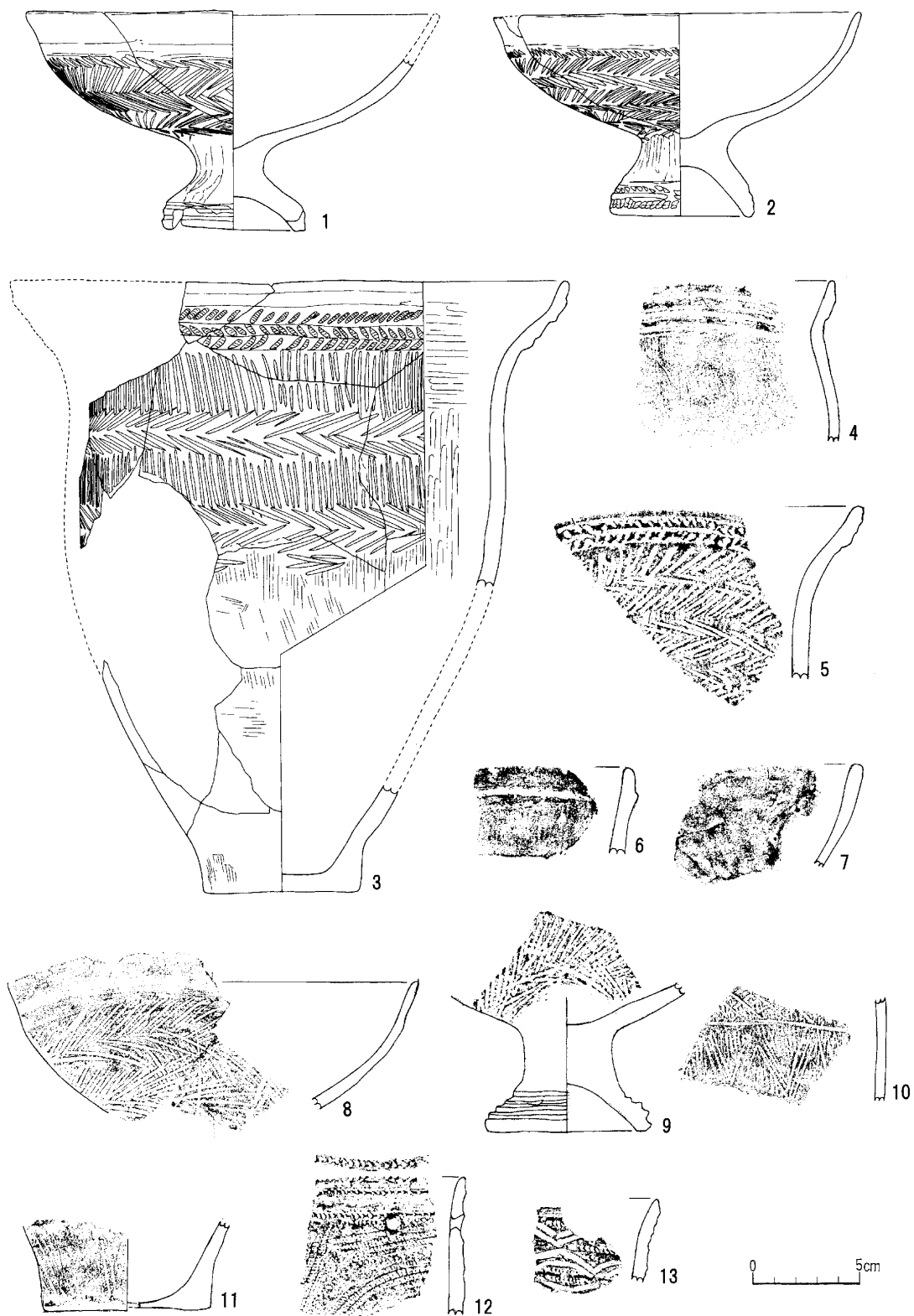
本竪穴は一辺約4.60mの方形を呈する擦文期の竪穴で埋土中に炭化材が確認されていることから火災住居と考えられる。時期は床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。

(佐々木 寛)

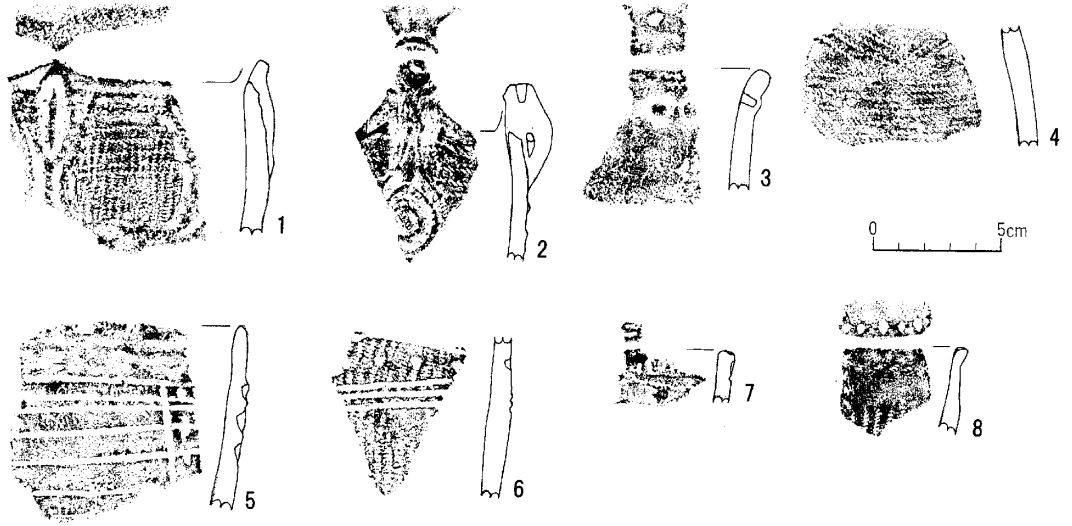
常呂川河口遺跡



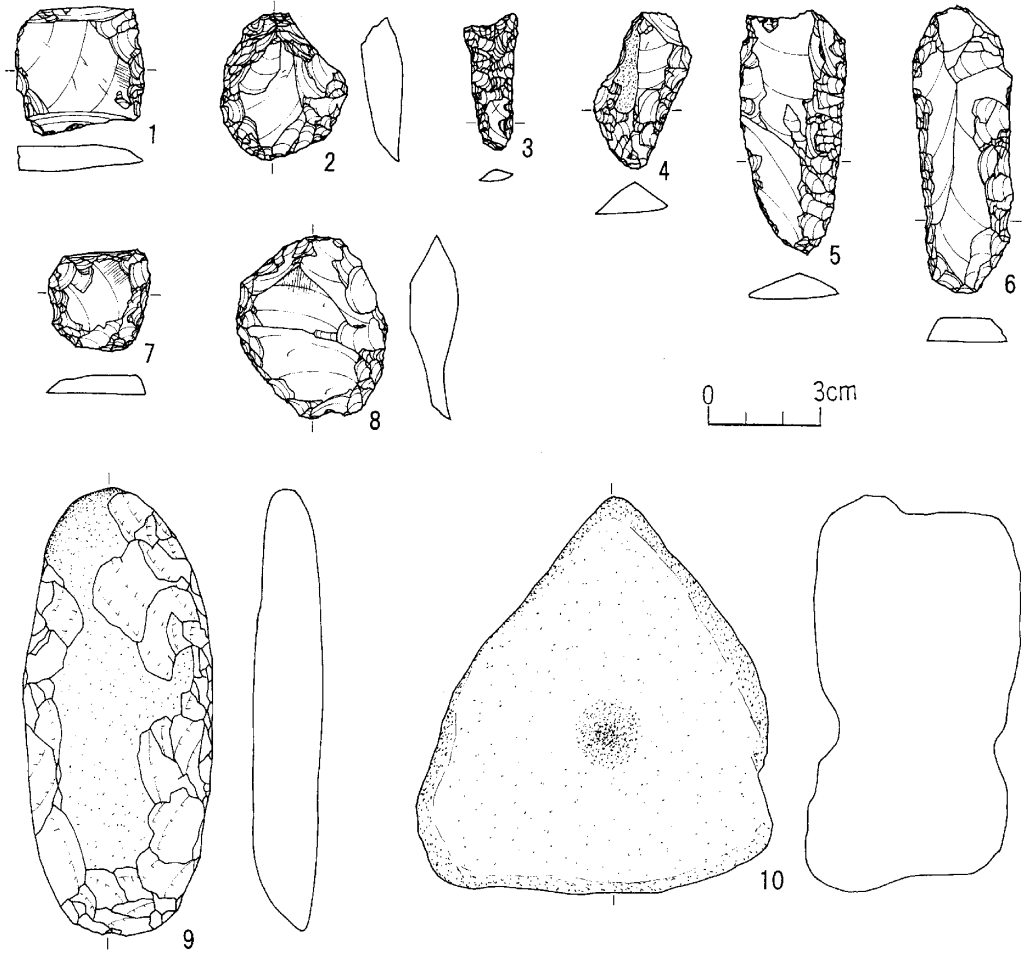
第27図 162号竪穴平面図



第28图 162号竖穴床面(1·2)·埋土(3~13)出土土器



第29図 162号竪穴埋土(1~8)出土土器



第30図 162号竪穴カマド(1・2)・埋土(3~10)出土石器

163号 竪 穴

遺 構 (第31図, 図版9-1)

本竪穴はI85・86, J85・86グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると黒褐色砂の堆積が認められ、竪穴であることを確認した。黒褐色砂の下層には黒褐色土と樽前a火山灰を混入する暗褐色砂が堆積する。また、カマドを含め各壁は攪乱を受けているため遺存は悪いが、規模は東西約4.30m、南北約4.20mの方形を呈する。壁は北壁側がほぼ垂直であるが、他の壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から約42cmを測る。

カマドは東壁中央部に構築されているが、煙道から燃焼部にかけて大きく攪乱をうけているため状況は悪い。残存部から判断すると黄褐色粘土と暗褐色砂によって袖部、天井部が築かれていたようである。煙道の距離は短い、約30cmの深さをもち、煙道口では急斜に立ち上がる。炉跡は検出できなかった。

東南壁隅には長さ約1.05m、幅約30cm程の粘土が床面にみられ、隣接して角礫14点で構成される集積がある。また、西壁側では黒曜石の集積がみられ、第34図に示すとおり2点の原石に接合できた。埋土出土であるが、本竪穴に伴う可能性がある。

支柱穴は4本あったと思われるが北西側の1本は攪乱のため認められなかった。径約20cm前後、深さ約27~37cmである。支柱穴の間には径約10cm、深さ約6~14cmの補助柱穴がみとめられるので、大小7本で屋根を支えていたのであろう。径約3~12cm、深さ3~10cmの壁柱穴は西壁に2本、北壁に3本みられるが、北西壁の2本は160号竪穴にもみられた細い柱穴である。

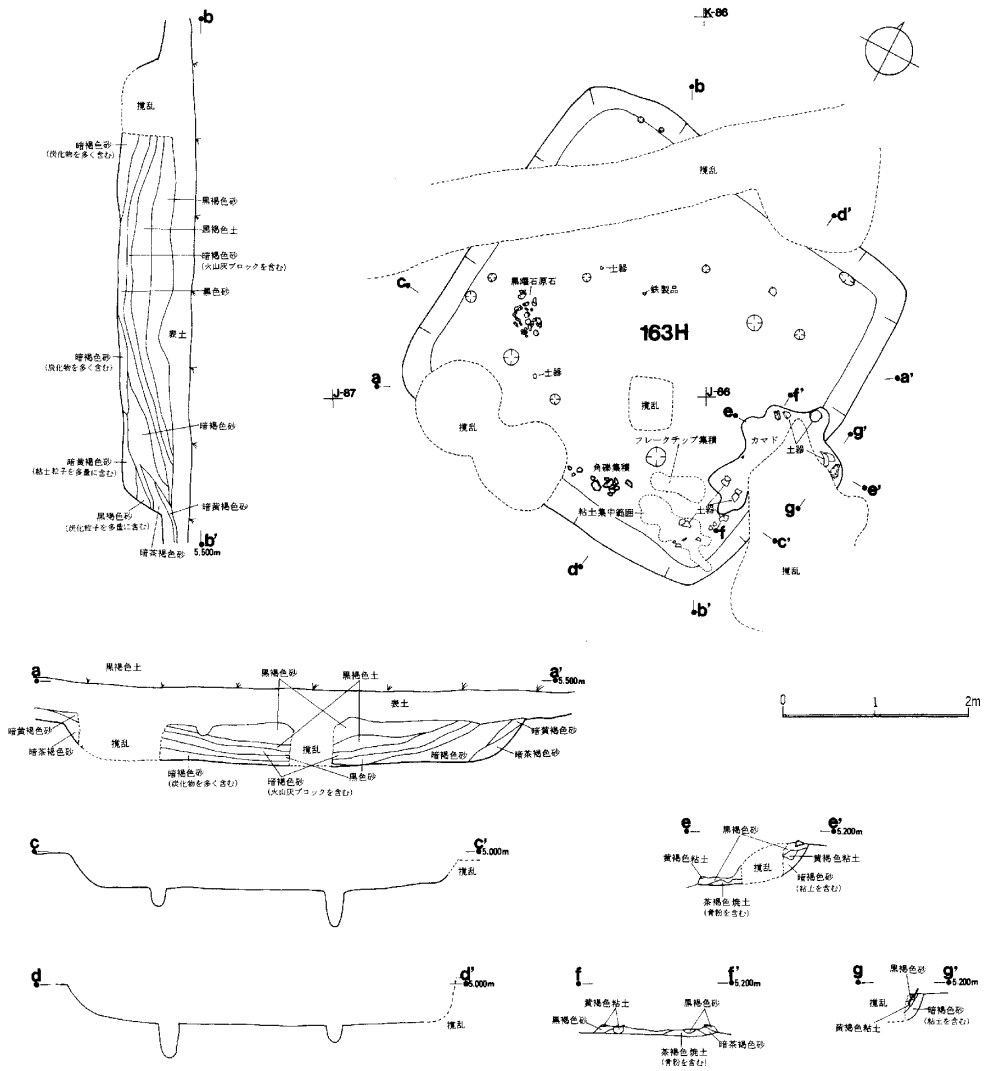
遺 物 (第32図, 第33図, 第34図, 図版9-2・3)

第32図-1~4は床面出土である。1は口径約11.5cm、器高約10cmの小型鉢形無文土器。2~5は高杯。4点とも矢羽根状文を基調とするが、3の杯部は碗状である。5・6は、カマド出土。6は縦位の刻線文と鋸歯状文を複段化し、山形刻線文で区画する。7~10は埋土出土。7・8は高杯。8は口縁部に2条の幅広い凹帯をもち、器面は擦痕状の沈線文がみられる。9は刷毛により調整された小型鉢形土器。10は擬縄貼付文のあるトビニタイI群。

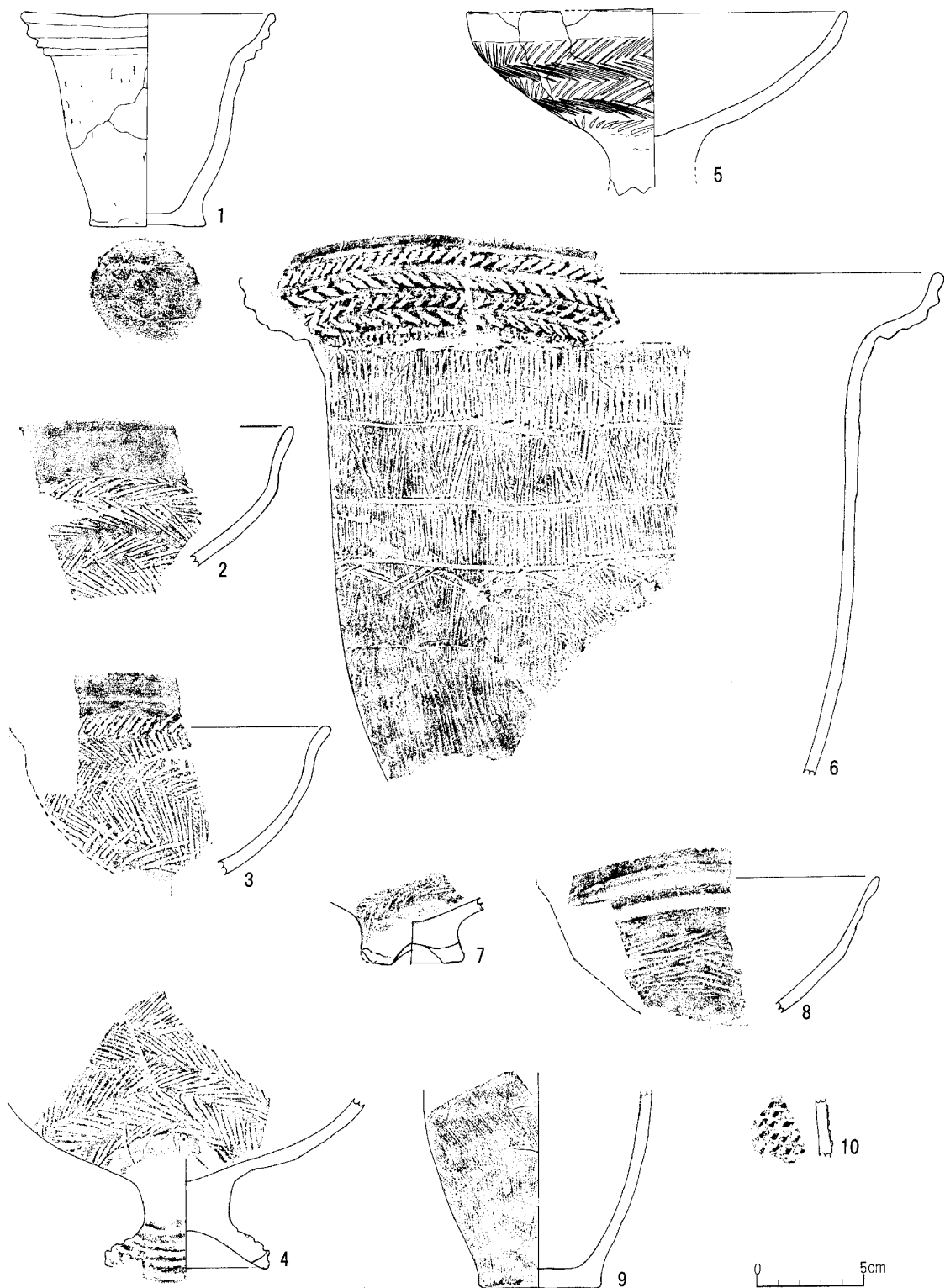
第33図-1は床面から出土した鉄製品。残存している部分は僅かで長さ3.0cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmで刃子の先端部であると思われる。2はカマドから出土した無基石鏃で熱により発泡している。3~8は埋土出土。3~5は無基石鏃。6・7は削器。8は軽石製の砥石。2~7は黒曜石製。

小 括

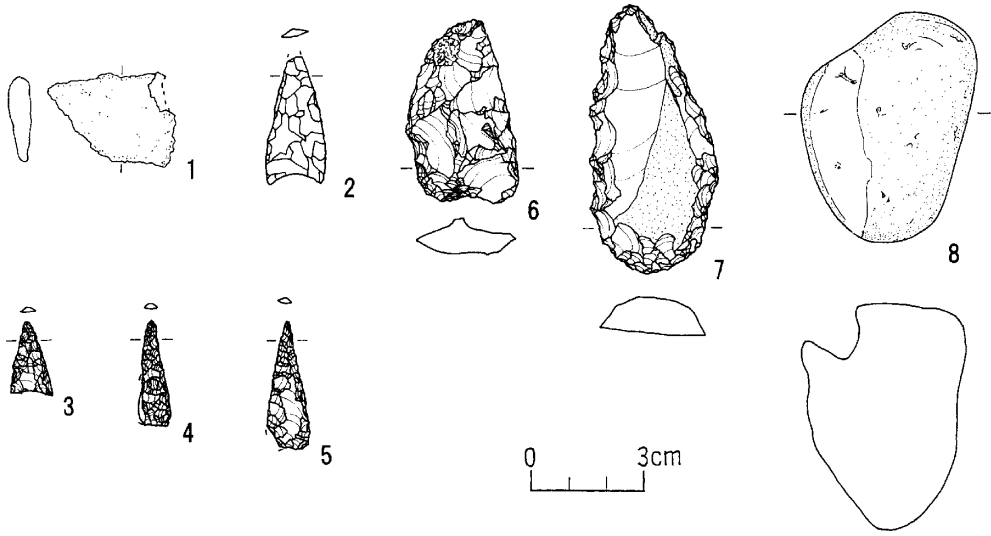
本竪穴の時期は藤本編年g・h期、宇田川編年後期に比定される。床面からトビニタイI群の小破片が出土している。 (武田 修)



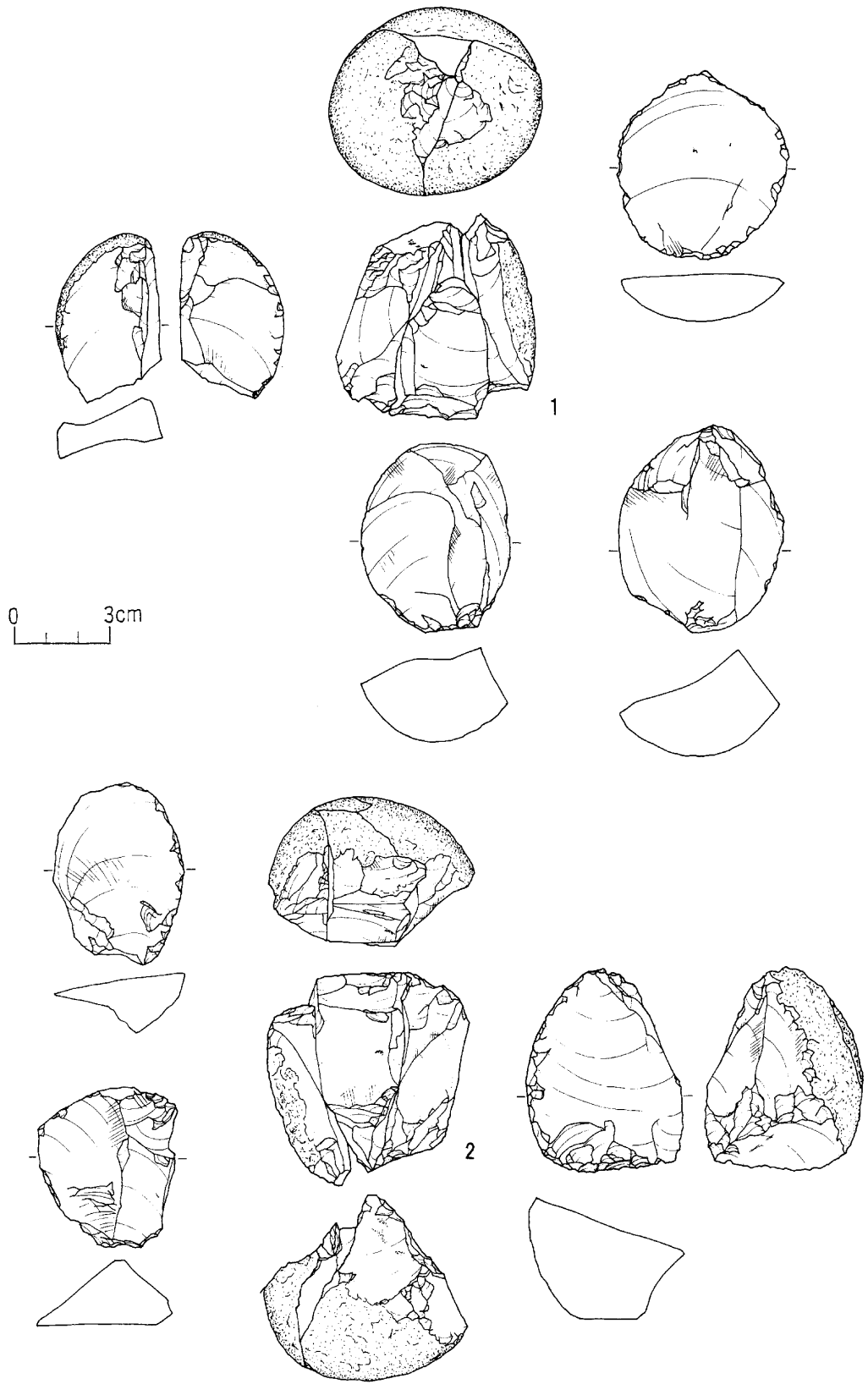
第31図 163号竪穴平面図



第32図 163号竪穴床面(1~4)・カマド(5・6)・埋土(7~10)出土土器



第33図 163号竪穴床面(1)・カマド(2)・埋土(3~8)出土石器・鉄製品



第34图 163号竖穴埋土(1·2)出土石器

164号 竪 穴

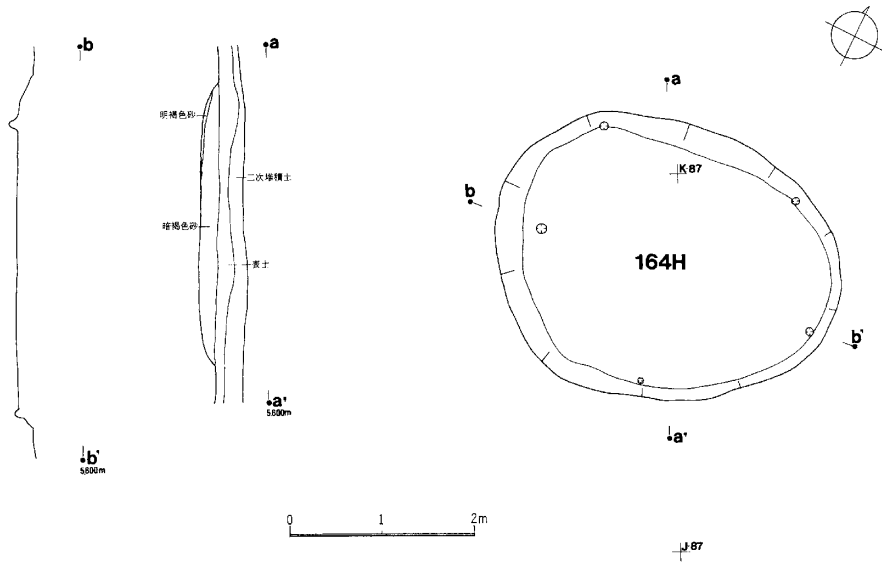
遺 構 (第35図)

本竪穴はJ86・87グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると黒色砂の落ち込みを確認した。土層ベルトに沿って内部を掘り下げたところ皿状の浅い立ち上がりを確認した。埋土は黒色砂以外の堆積は認められない。規模は直径約長軸約3.70m、短軸約3.0mの楕円形を呈し、高さは確認面から約46cmを測る。

内部には炉跡は認められず、径約6～10cm、深さ約5～10cmの小柱穴が各壁に5本認められた。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第35図 164号竪穴平面図

165号 竪 穴

遺 構 (第36図、図版10)

本竪穴はJ79・80グリッドにかけて位置する。規模は一辺約4.00mの方形を呈する。各壁の長さは東壁約3.90m、南壁約3.90m、西壁約4.00m、北壁約4.10mを測る。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

竪穴は摩周b火山灰と思われる黄色味を呈した火山灰を切って構築されており、その上層の黒色砂層と表土の間には樽前a火山灰が竪穴全体を覆っている。竪穴の中央付近では表土と黒色砂層の間の火山灰の上面からは約70cmから1mの範囲で炭化物と焼土がみられた。炭化物は焼土と火山灰の間にあり、焼土の中とその周辺からは7点の礫が出土している。炭化物の中にはカヤ材と思われるものが認められた。また、北壁中央付近の壁際上層から床面にかけて流れ込んだ状態の礫が大小18点見られる。

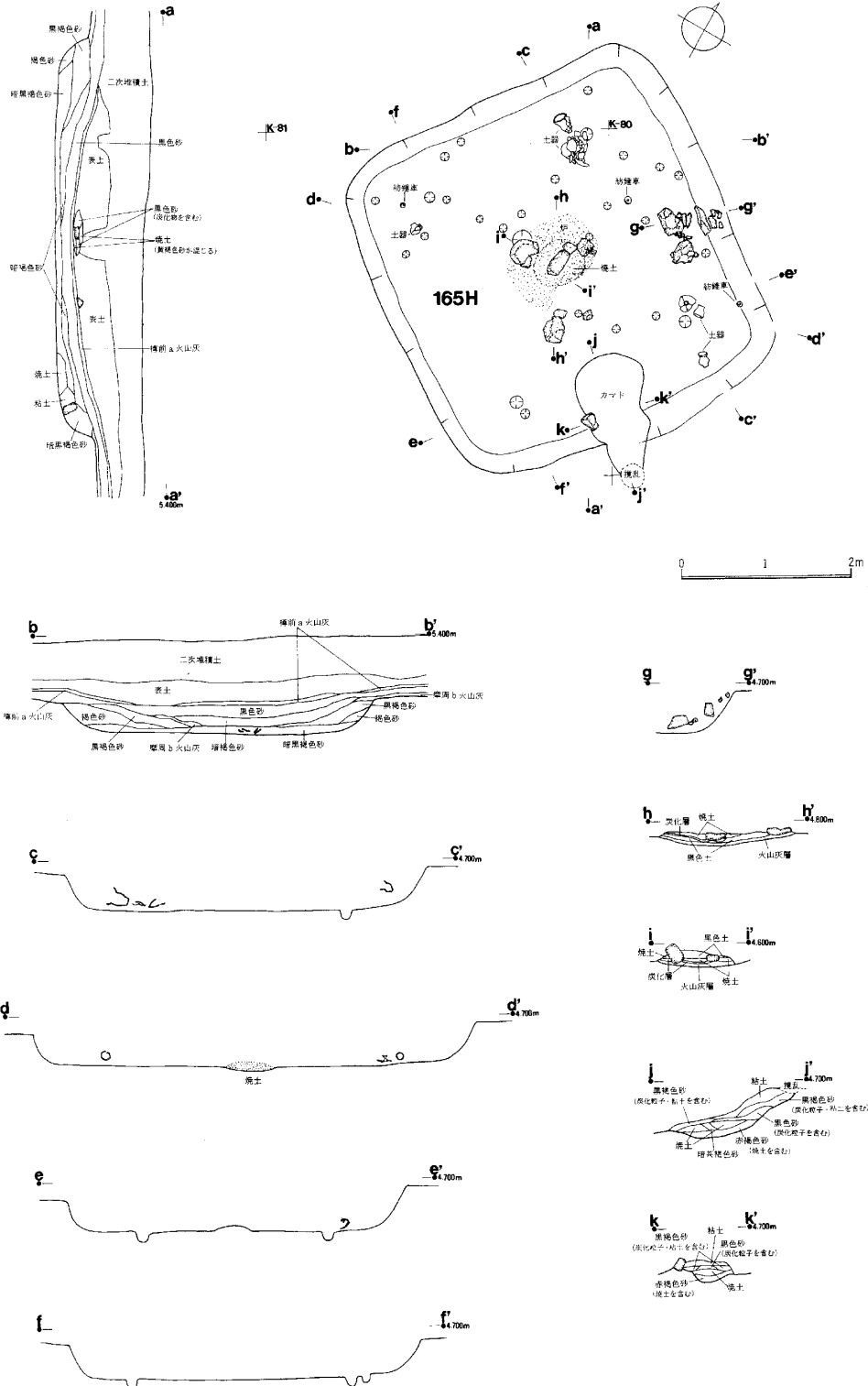
竪穴の床面中央には約60×50cmの範囲に炉跡の焼土が確認された。カマドは東壁中央に構築されている。構築材は粘土であるが、南側袖部に各礫が1点検出されていることから袖部には礫が使用されていた可能性もある。煙道の長さは先端部が攪乱によって削られているが、およそ60cmを測ると思われ緩やかに立ち上がる。カマドと炉跡の焼土中から骨片は認められなかった。

柱穴は支柱穴と思われる径12~14cm、深さ11~13cmのものが4本検出され、壁柱穴は北壁に径8cm、深さ8~10cmのものが2本、西壁に径8~10cm、深さ5~10cmのものが4本検出されている。その他に径8~22cm、深さ6~19cmの柱穴が17本検出された。

竪穴床面の南東側から第37図-1・6の土器が出土しており、北西側から第37図-4・5の土器、および南西側からは第37図-2の土器がそれぞれ出土している。また、東壁際の床面からは第37図-3の土器が出土している。北壁中央付近の礫流れ込みの東側約0.80mの埋土上層からは第37図-9の紡錘車、礫流れ込みの西側約0.40mの床面から第37図-7の紡錘車が、南西隅の床面からは第37図-8の紡錘車がそれぞれ出土している。

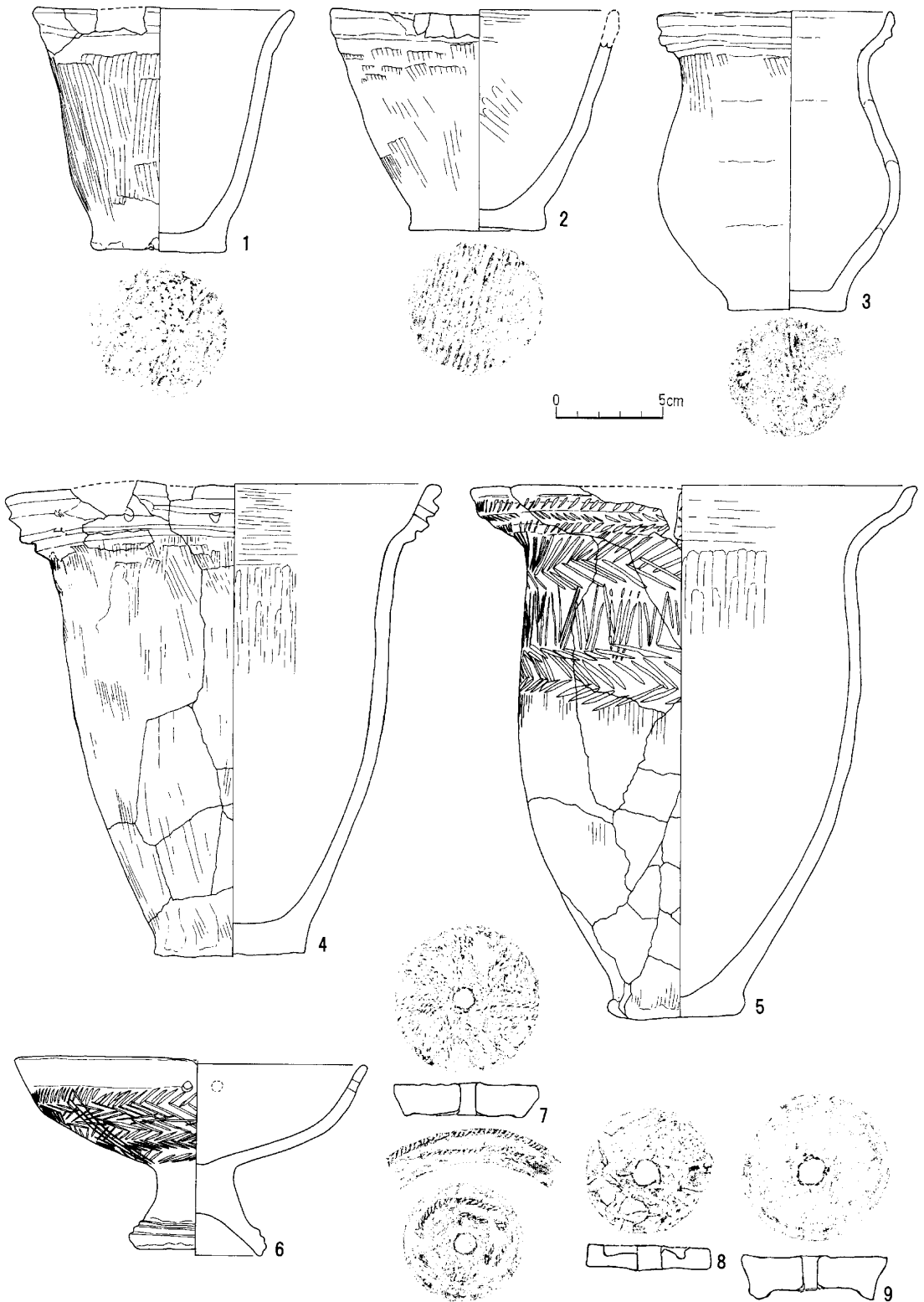
遺 物 (第37図, 第37図, 第39図, 図版11・12)

床面からは第37図-1~6の土器と7・8の紡錘車が出土している。1は口径12.4cm、器高10.9cmの無文の小型鉢形土器。胴部は刷毛により調整されている。2は口径12.6cm、器高10.5cmの無文の小型鉢形土器。底部に板目状の圧痕が残る。3は口径11.2cm、頸部9.0cm、胴部11.0cm、器高13.1cmの中型の壺形土器である。口縁部が張り出し口唇部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部に2条の太い沈線が横走る。胴部は無文で器面は篋により調整されている。底部に板目状の圧痕が残る。4は口径20.3cm、器高21.8cmの無文の鉢形土器。器面は篋により調整されている。5は口径21.0cm、器高25.2cmの鉢形土器。口縁部下に矢羽根状刻文が施され、その下の胴部には横走沈線で区画された2~4本単位の鋸歯状文が施される。さらに短刻線文矢羽根

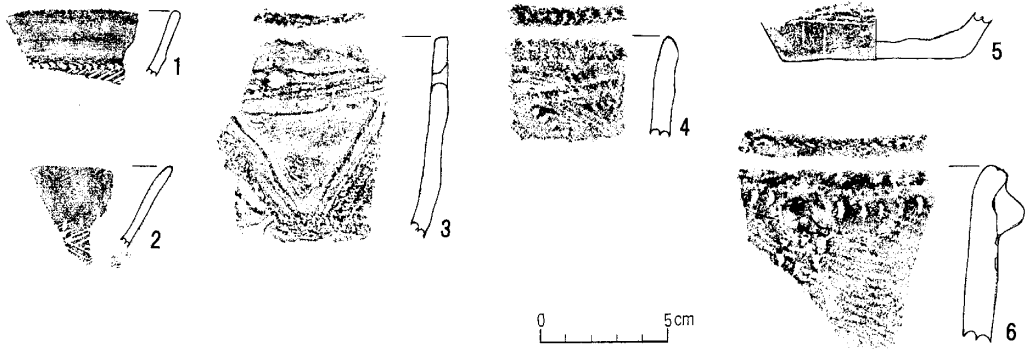


第36図 165号竖穴平面图

常呂川河口遺跡



第37図 165号竪穴床面(1~8)・埋土(9)出土土器



第38図 165号竪穴埋土(1~6)出土土器

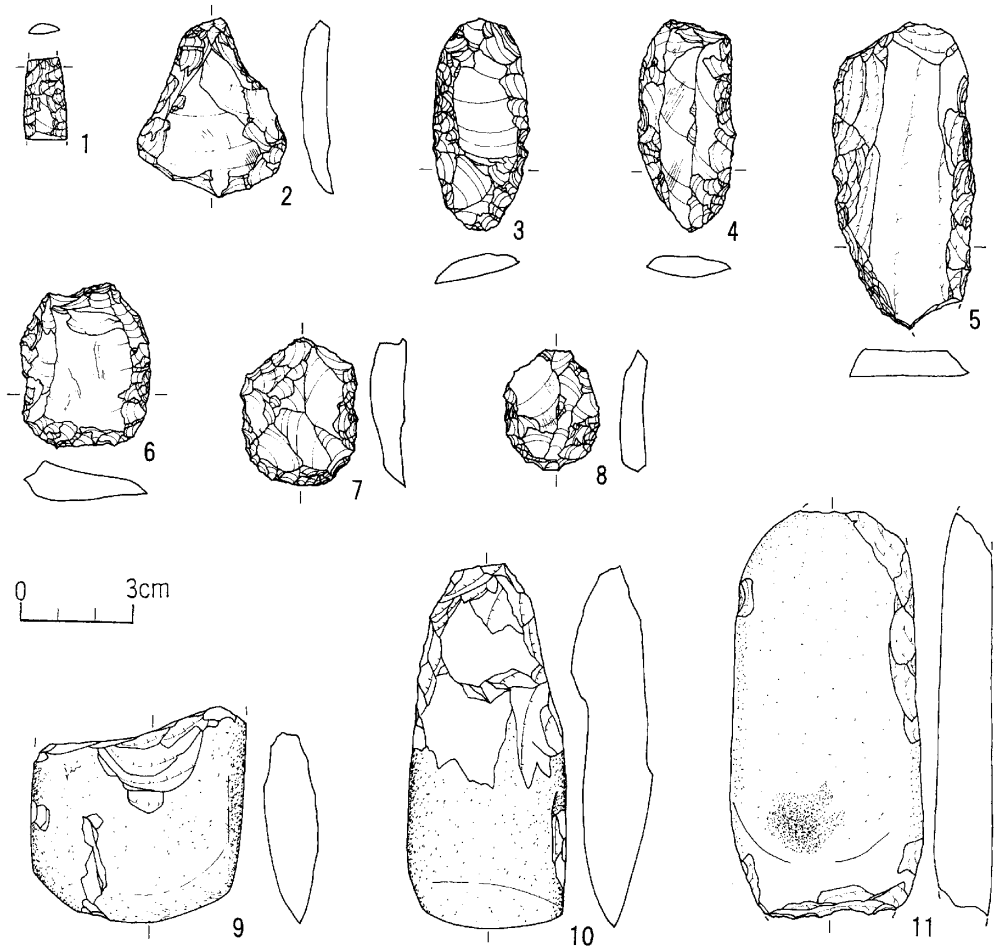
状文が巡らされている。6は口径16.5cm、器高9.0cmの高坏。矢羽根状の刻線上に1本1組の刻線を4組縦に施す。7は礫流れ込み西側出土の紡錘車。2~3本1組の短刻文列を放射状に7組施し、その間の周縁部に「V」字状の短刻文列を配している。もう一方の側の3分の1くらいに短刻文列を1列施している。径7.0cm、厚さ1.4cm、重量75g。8は南西隅の床面から出土した無文の紡錘車。径5.8cm、厚さ1.2cm、重量50g。埋土からは9が無文の紡錘車。径7cm、厚さ2cm、重量80g。

第38図-1・2は高坏の口縁部。3~5は続縄文後北C₂・D式。5は底部。6は続縄文初頭。

石器は第39図-1・2が床面出土。1は石鏃。2は搔器。埋土からは3~6が削器。5は玄武岩製。7・8は搔器。9は青色泥岩製の両刃石斧。10・11は青色泥岩製の片刃石斧。5・9~11以外は黒曜石製。

小 括

本竪穴は一辺約4.00mの方形を呈する擦文期の竪穴であり、床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。(佐々木 寛)



第39図 165号竪穴床面(1・2)・埋土(3~11)出土石器

166号 竪 穴

遺 構 (第40図, 図版13-1)

本竪穴はH84・85, I 84・85グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると層厚約30cmの黒褐色砂が堆積し、その下層には樽前a火山灰を含む黒灰褐色土がみられる。各壁際には167号竪穴にもみられた摩周b火山灰と思われる黄褐色を呈した火山灰を含む暗灰褐色砂がみられる。

規模は東西約5.00m、南北約4.90mの方形を呈する。壁は比較的緩く立ち上がり、高さは確認面から約40~50cmを測る。

カマドは東壁中央部に構築されている。両袖部は暗黒褐色土を基盤としており、南側袖部は明瞭でないが、北側袖部では黄褐色粘土を用いる。天井部も層厚約5~10cmの黄褐色粘土がみられ、遺存は良好である。燃焼部の焼土は粘性をもち、微細な骨粉を含む。

煙道は緩く立ち上がり、煙道口は一部、赤化している。径約40cmの炉跡は床面のほぼ中央部に認められる。

主柱穴は4本である。いずれも径約15cmであり、深さは約29~31cmである。径約8cm、深さ約5cmの壁柱穴は西壁に1本みられただけである。

遺 物 (第41図, 第42図, 第43図, 図版13-2)

床面出土土器は第41図-1・2のトビニタイI群である。1は波状、直線状、擬縄貼付文、2は波状の貼付文下部に三角状施文具による刺突文が施される。3はカマド内部から出土した口径約17cmの中型鉢形土器。口縁部は「天塩手法」による。胴上部は縦位の刻線文、半載状施文具による刺突文、斜位の刻線文をそれぞれ横位の沈線文で区画するが、区画幅は不均等である。4は底部である。カマドと床面出土のものが接合した。3・4は擦文土器で、本竪穴に伴うものであろう。

第41図-5~16は埋土出土である。5は鋸歯状文、短刻文を施し矢羽根状文で区画し、部分的に赤色顔料が付着する。6~8は矢羽根状文を施した高杯の杯部。9・10は変形の針葉樹状文を施すもので、擦文中期に比定される。11・12は続縄文後北C₂・D式。13は帯縄文が施され、一部に縄線文が押捺された(古)後北C₁式。14~16は宇津内IIb式であり、16は擦痕状の浅い刻線が縦位にみられる。

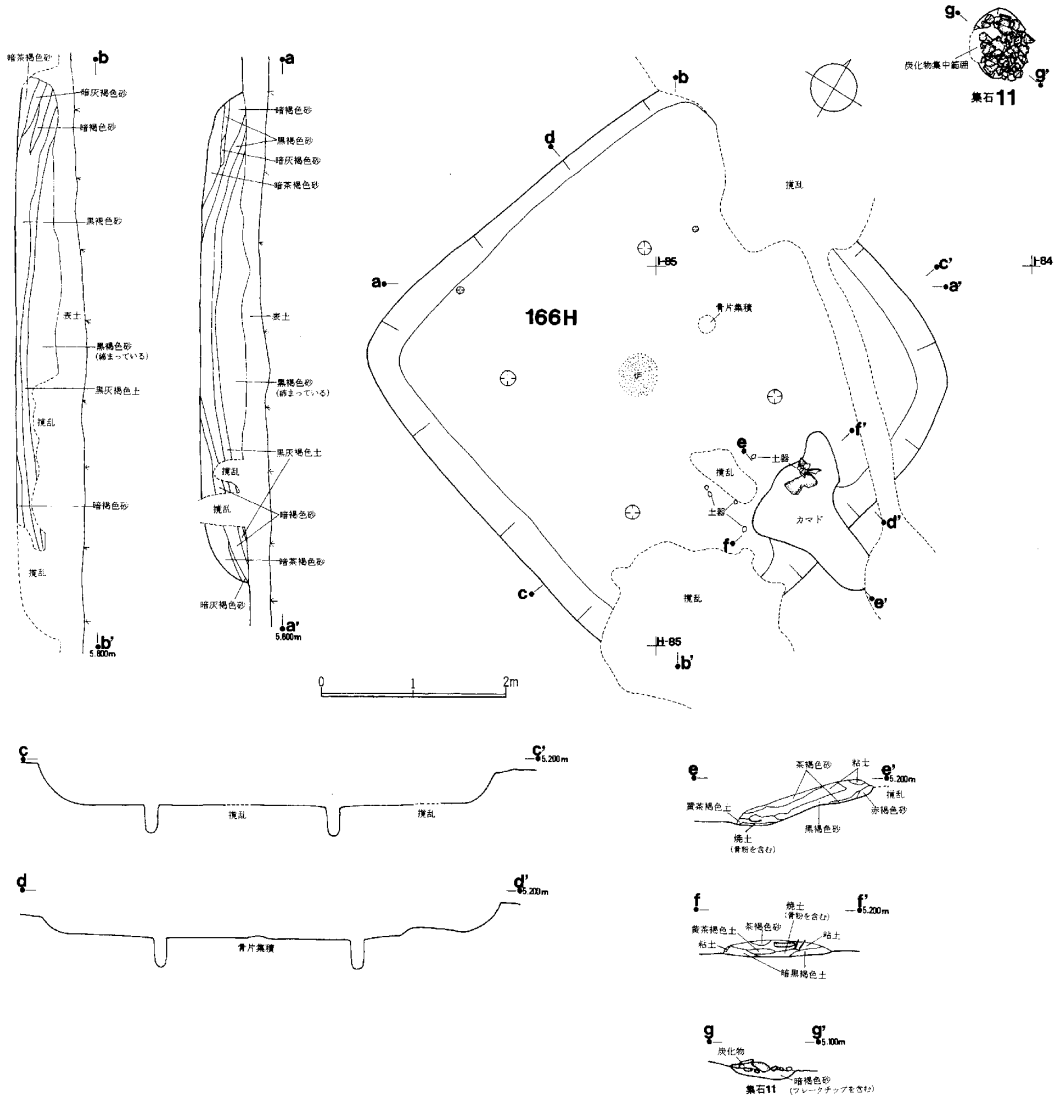
第42図は埋土出土である。1~4は突瘤文をもつものであり、1・2は宇津内IIa式、3・4は無文帯をもち、4は太い縄線文がみられるもので宇津内IIa式より古手であらう。5は口縁直下、6は口唇部に縄端圧痕文が施される。7~9は横走沈線文を施す。5~9は続縄文初頭であらう。

石器は全て埋土出土である。第43図-1・2は両面加工ナイフ。1は先端部を尖らし、柄部をもつ。主要剥離面側も一部を除き刃部が作出されている。3・4は片面加工ナイフ。4は裏

面も柄部のみ加工する。5～9は削器。10～12は搔器。13はたたき石。14・15は凹石。16は調査中に両端が欠失してしまった。残存部の長さは約1.8cm、幅約8mmであり、断面が方形状を呈した鉄製品。9は玄武岩製、13は泥岩製、14・15は砂岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

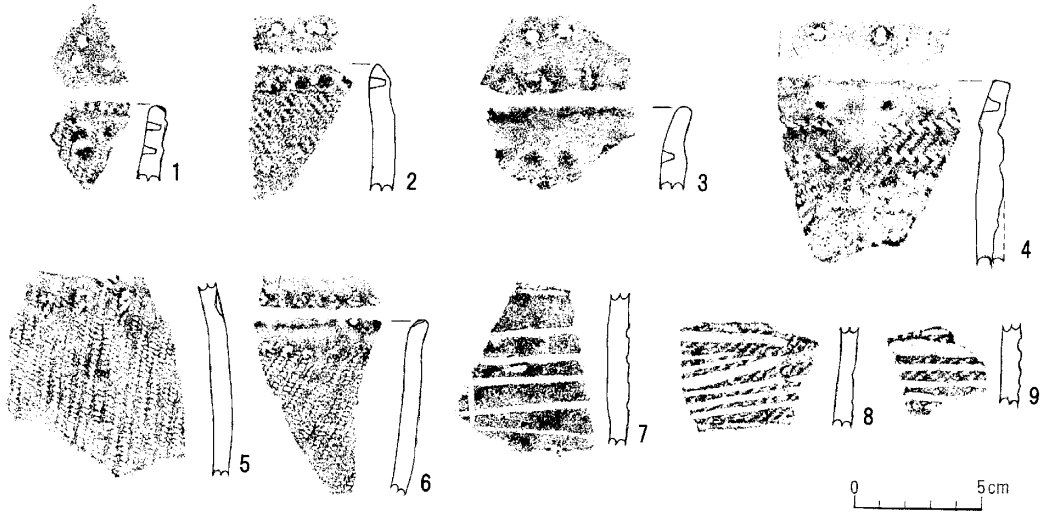
本竪穴の時期は藤本編年 g・h 期、宇田川編年後期に比定される。床面から第41図-1・2 に示すトビニタイ I 群が出土している。 (武田 修)



第40図 166号竪穴、集石11平面図



第41図 166号竪穴床面(1・2)・カマド内部(3・4)・埋土(5~16)出土土器



第42図 166号竪穴埋土(1~9)出土土器

166a号 竪 穴

遺 構 (第91図, 図版13-4)

本竪穴は擦文期の166号竪穴の下面にあり、西側では172b号と重複する。規模は東西約3.90m、南北約3mを測るもので、南北がやや長い不整長方形を呈する。壁高は166号の床面から約10cmを測る。

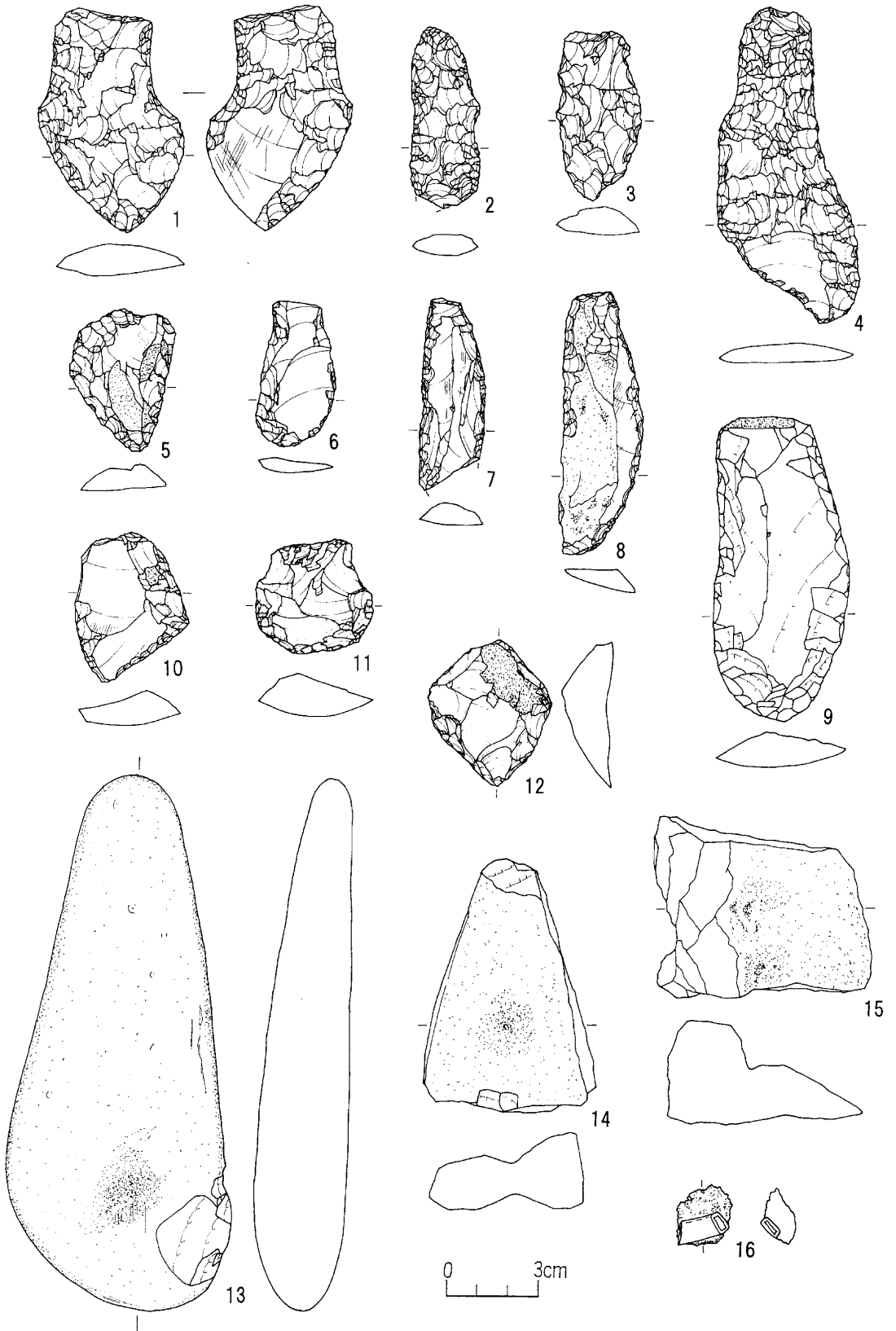
床面の中央部に角礫で構築された石囲み炉をもつ。石は東壁部で一部抜けるもののほぼ全周する。

明確な支柱穴はみられず、径約8~16cm、深さ4~12cmの大小の柱穴が各壁側にみられる。

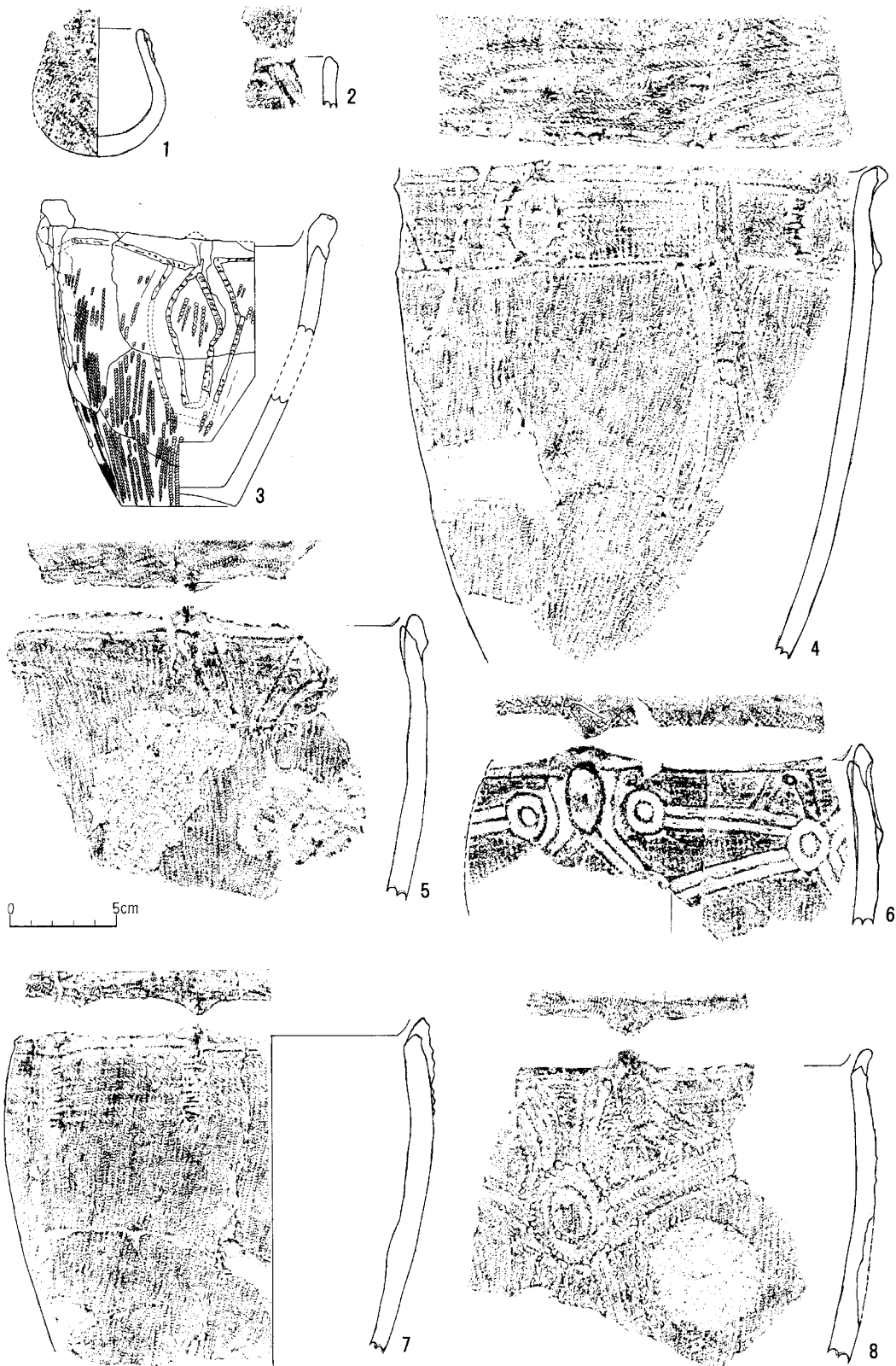
遺 物 (第44図, 第45図, 第46図-1~10, 図版13-3)

第44図-1は床面出土である。胴部から底部にかけて丸みをもった小型土器で、口縁部に縄線文が施される。2~5は床面から約10cm浮いて出土した。3は口径約13cm、器高約14cmの小型土器。2個の大突起と小突起からは擬縄隆帯が垂下する。1~8は続縄文宇津内Ⅱb式である。

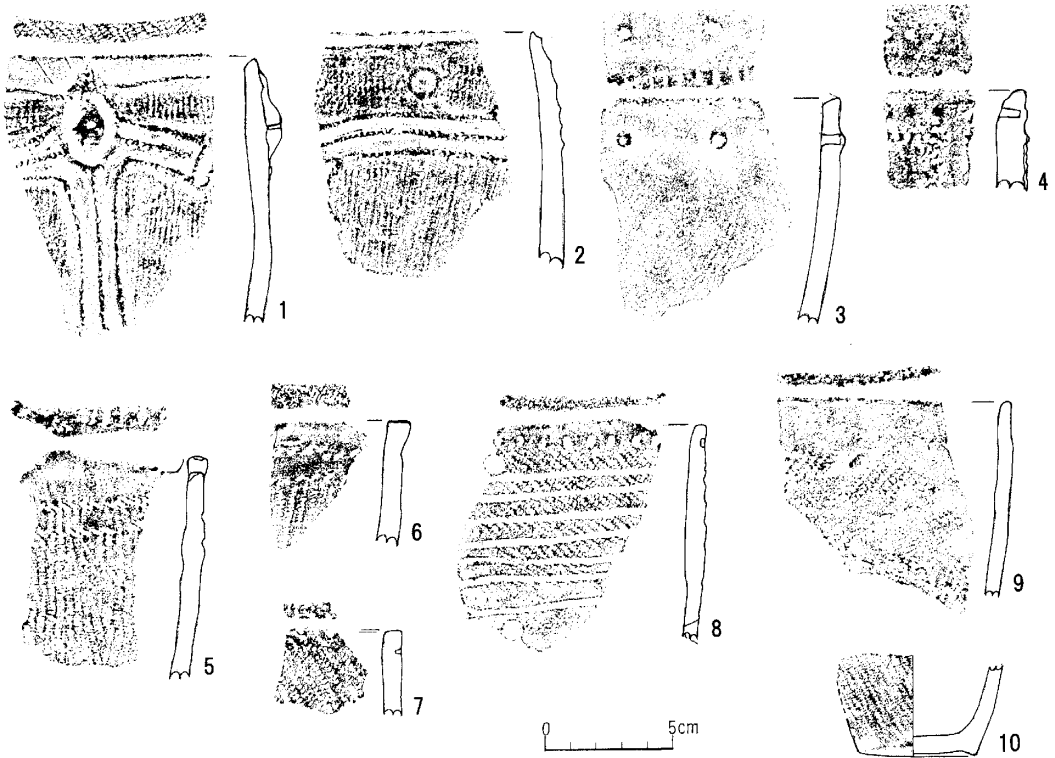
第45図は埋土出土である。1・2は宇津内Ⅱb式。3・4は同Ⅱa式。5・6は縦走縄文を地文に縄線文が施される。興津式相当であろう。7・8は斜縄文を地文に7は円形刺突文、8は円形刺突文と7条の横走沈線文が施される。続縄文初頭であろう。9は縄文晩期。10は続縄文土器の底部。



第43図 166号竖穴埋土(1~16)出土石器・鉄製品



第44图 166a号竖穴床面(1~5)·埋土(6~8)出土土器



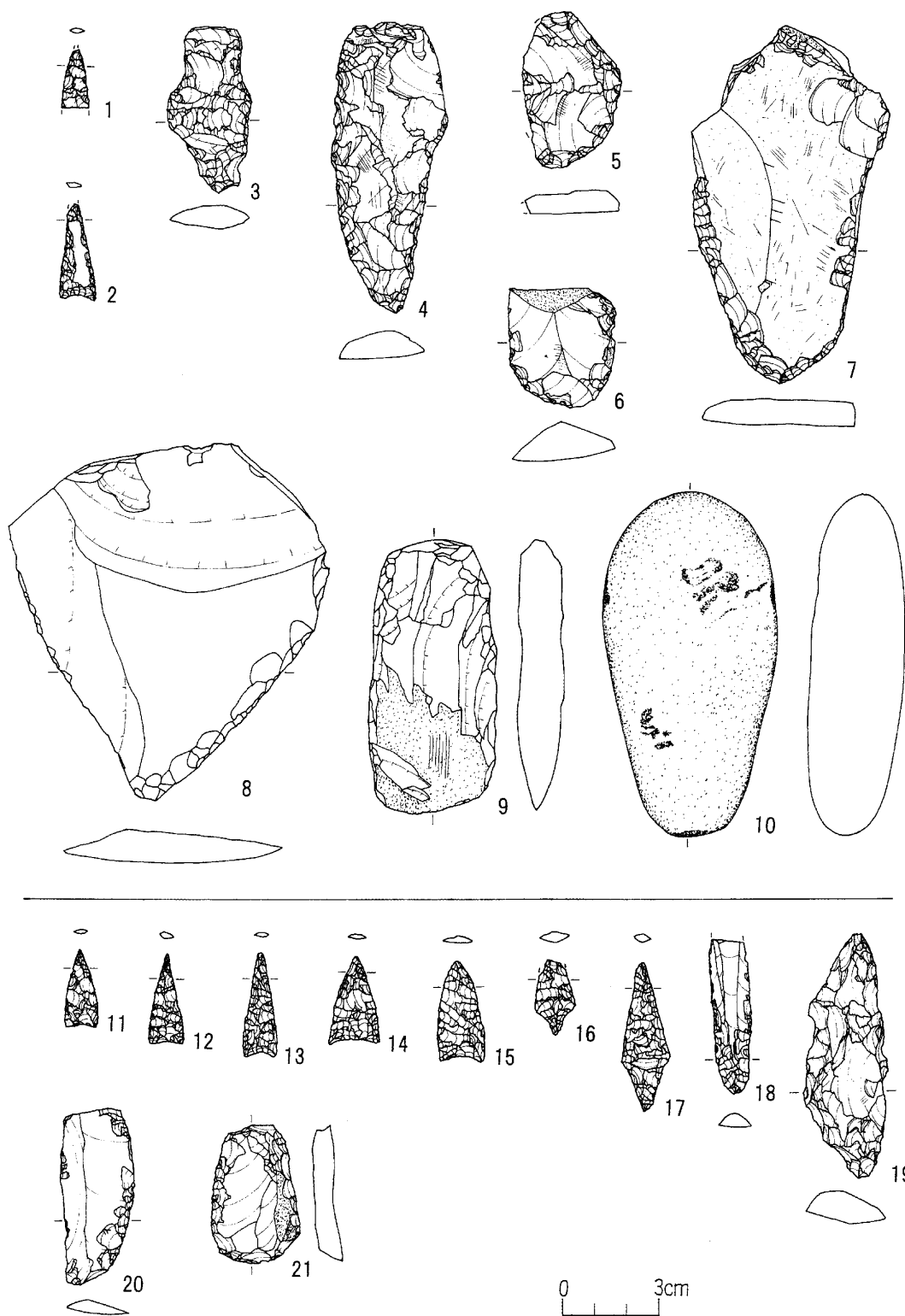
第45図 166a号竪穴埋土(1~10)出土土器

石器は全て埋土出土である。第46図-1は石鏃の先端部、2は無茎石鏃。3は柄部が作出された両面加工ナイフであるが、裏面の調整は粗い。4は片面加工ナイフ。5~8は削器であるが、6は左下端部に急斜な刃部をもつ。9は両刃磨製石斧。10は下端部と側縁部、表面に敲打痕をもつ叩き石。8は玄武岩製、9は青色泥岩製、10は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

本竪穴は床面出土土器から統繩文字津内Ⅱb式と考えられる。

(武田 修)



第46図 166a号竪穴埋土(1~10)、166b号竪穴埋土(11~21)出土石器

166b号 竪 穴

遺 構 (第47図)

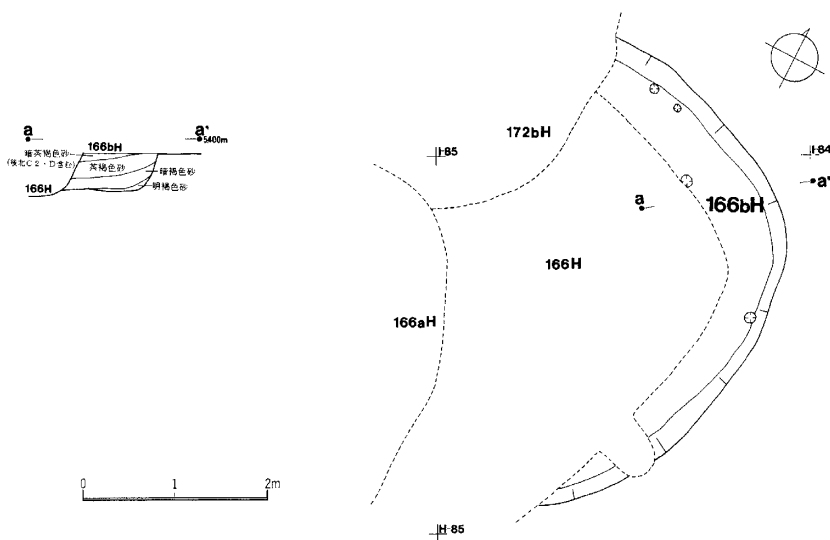
本竪穴は擦文期の166号竪穴の北側に位置する。同竪穴によりほとんどが削られており北と東壁の一部を検出し得ただけである。壁高は確認面から約40cmである。

詳細な規模・形態は不明である。

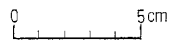
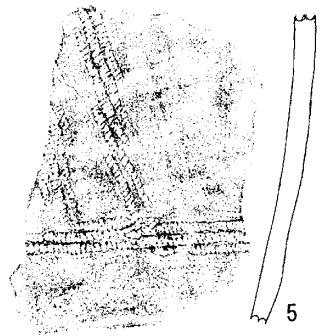
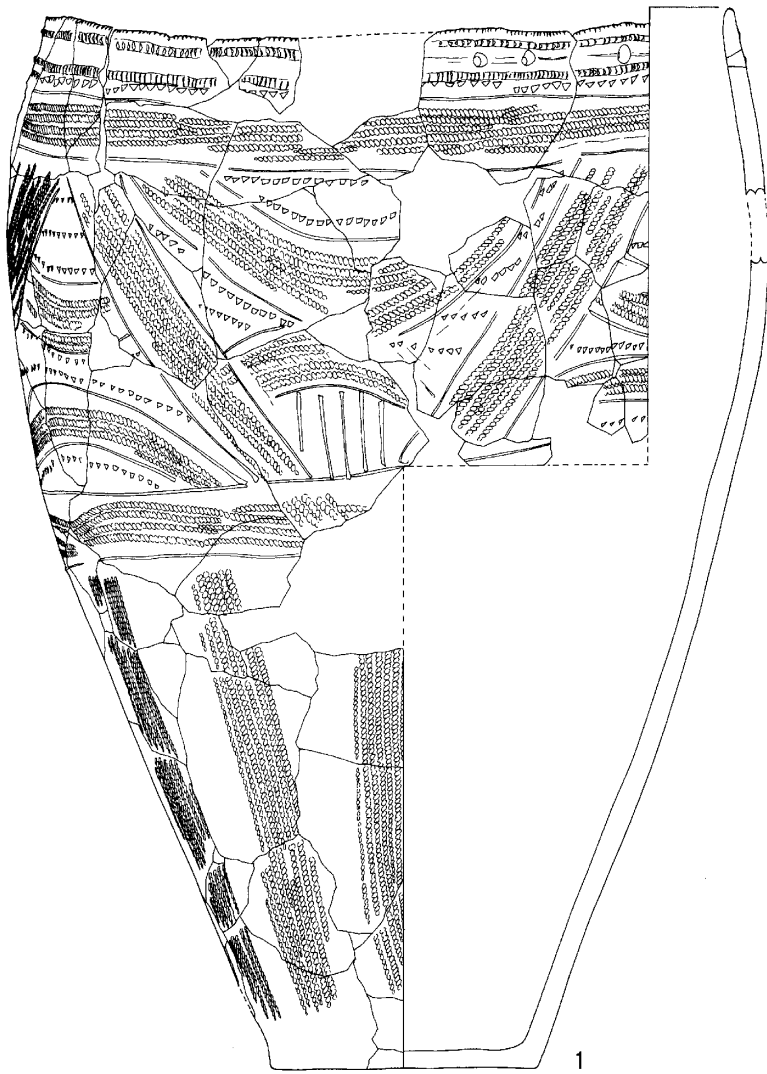
遺 物 (第48図, 第46図-11~21, 図版14-1)

土器は全て埋土出土である。1~6は続縄文後北C₂・D式である。第48図-1は口径約27cm、器高約41cmの特大鉢形土器。口縁下部に2条の擬縄隆帯をもち、横位の帯縄文間に挟まれた胴部には弧線状、「V」字状の帯縄文が施され、胴下部は縦位の帯縄文がみられる。

石器は全て埋土出土である。第46図-11~15は無茎石鏃。16・17は有茎石鏃。18は石刃の先端部と表裏面の縁辺部に加工を施した削器。19は右側縁部が急斜な刃部をもつ両面加工ナイフ。20は削器。21は搔器。全て黒曜石製である。



第47図 166b号竪穴平面図



第48图 166b号竖穴埋土(1~6)出土土器

167号 竪 穴

遺 構 (第49図, 図版14-2)

本竪穴は G81・82、H81・82グリッドにまたがって位置する。規模は東西約5.60m、短軸約5.50mの方形を呈する。壁高は確認面から約45cmを測る。炭化材は西南壁隅と西北壁隅のものが壁上部から内側に向かってみられ、北壁側は床面上にある。これらは垂木材と考えられるもので、いずれも炭化材の間隔が狭く配置されている。焼失住居と思われる。

炉跡は中央部からやや南壁寄りにある。攪乱により一部破壊を受けるものの長軸約0.65m、短軸約0.40mの楕円形である。

カマドは東壁中央部に構築されている。両袖部はほとんど欠失し、燃焼部に粘性を有した淡赤色の焼土が露呈していた。これに対し、極めて緩い傾斜をもつ煙道部は黄褐色粘土、黄褐色粘土と茶褐色土の混合土で天井部が作られ、遺存は良い。

支柱穴は径約20~30cm、深さ約30~42cmが4本配置される。壁柱穴は西壁側で認められなかったが、他の壁では径約8~20cmがほぼ等間隔に配置されている。

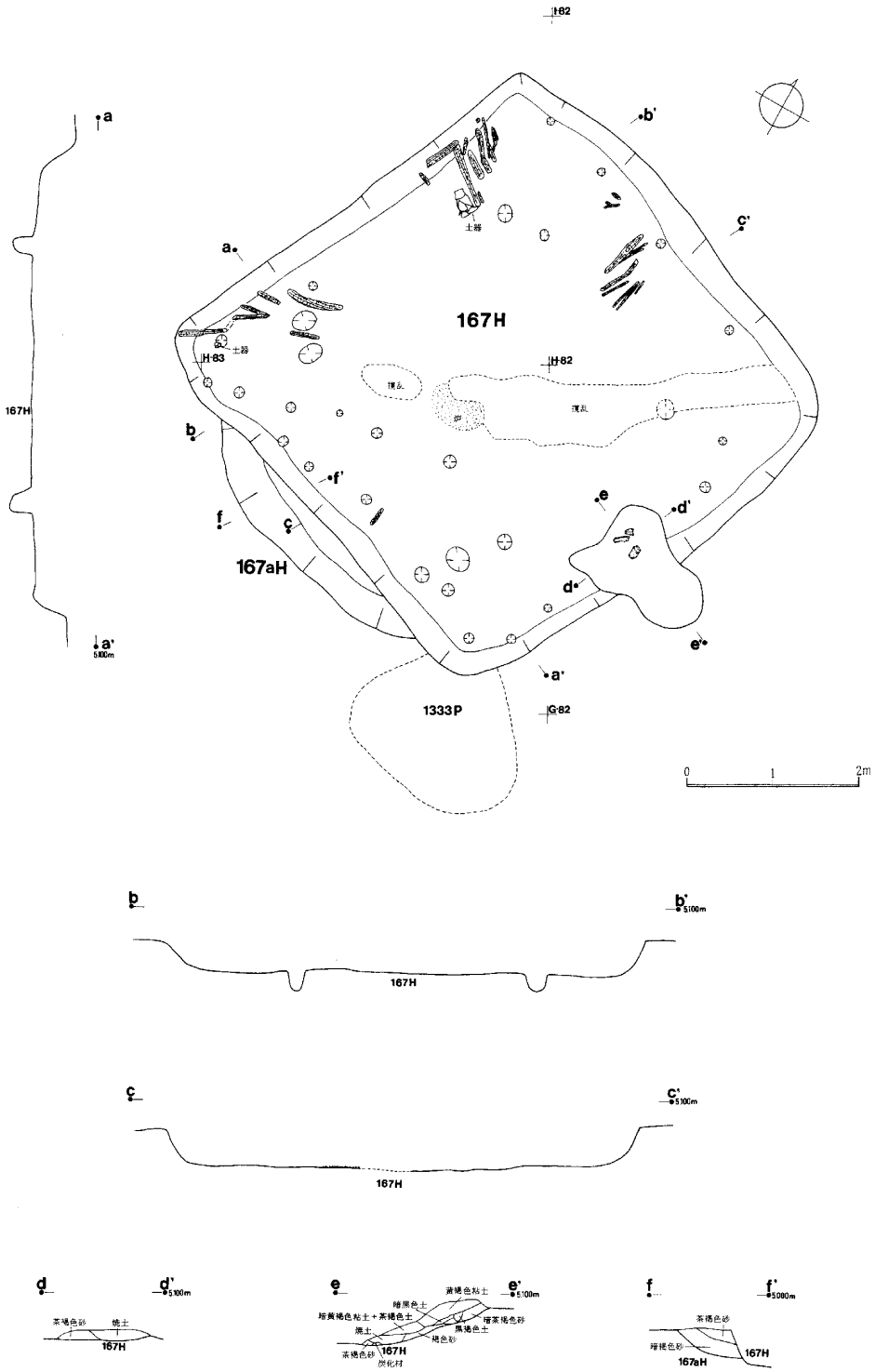
遺 物 (第50図, 第51図, 第52図, 図版15-1・2)

第50図-1・2は床面出土。1は口径約20cm、器高22cmの中型鉢形土器。口縁部の隆帯に刻みが施され、斜位の刻線文は横位の沈線文と「ハ」字状の刻線文で区画される。2は口径約16.5cm、器高約22cmの中型鉢形土器。口縁部は外反し、文様は胴中央部より上位に位置し、3本の縦位刻線を基準に「く」字状の刻線文を対に施す。胴下部は篋により調整される。底部には3本の細沈線文があり、直行するように葉脈に似た極細沈線がみられる。

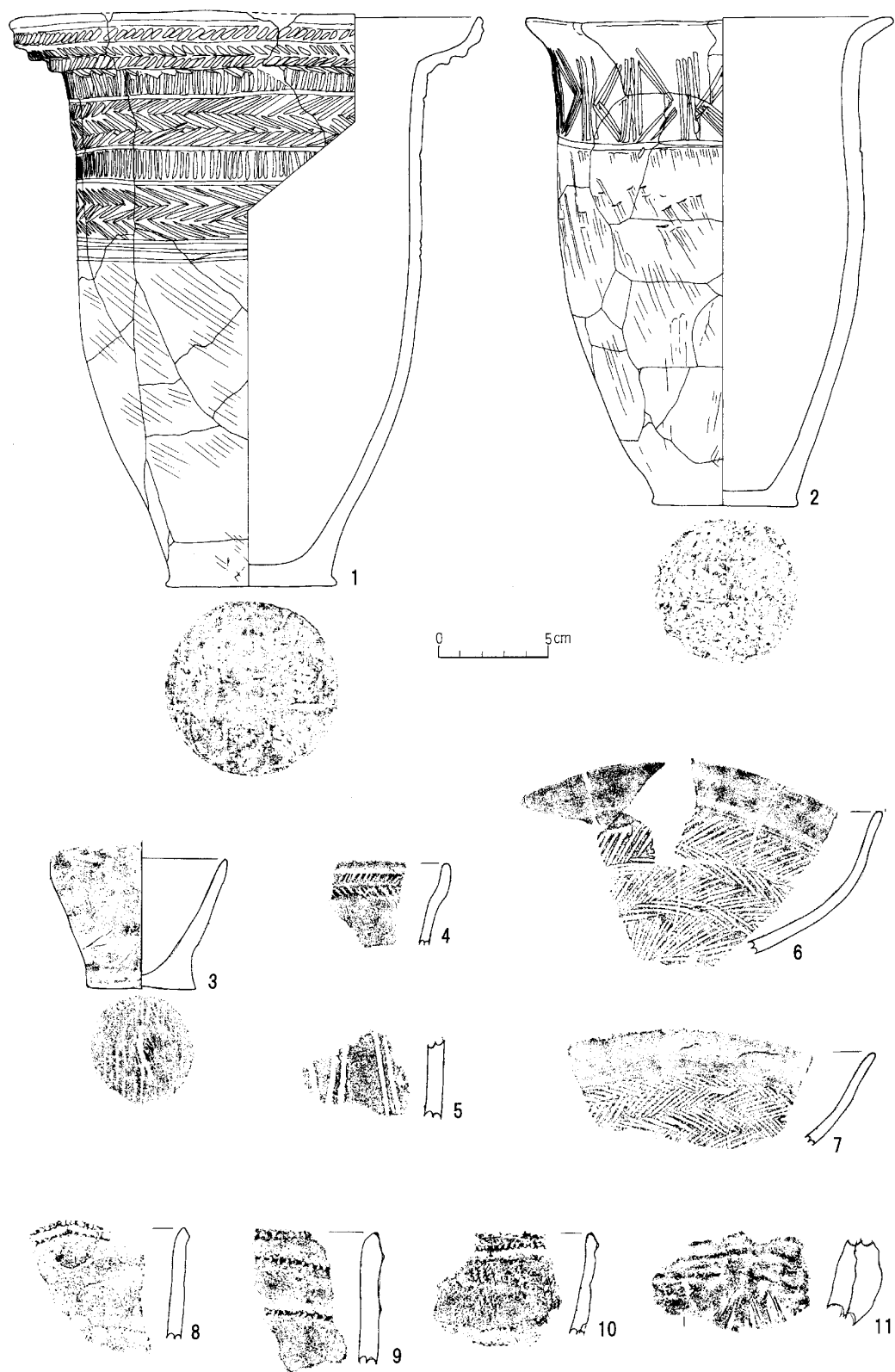
3~11は埋土出土。3~7は擦文土器。3は口径約8cm、器高約6cmの杯形土器。6・7は高杯の杯部。8~11は続縄文後北C₂・D式。

第51図は埋土出土である。1は後北C₂・D式、2は細い微隆起帯を菱形状に施した後北C₁式。3・4は宇津内Ⅱb式。5~7は同Ⅱa式。8は突瘤文下に複数の横走沈線文をもついわゆる元町2式。9・10は縄線文をもち、10は縄端圧痕文が加わるもので、興津式相当であろう。11~14は沈線文を主体とし、11は縄端圧痕文が加わる。15は縦走縄文を地文とする。11~15はフシココタン下層式相当であろう。16は続縄文の底部。宇津内系であろう。

石器は全て埋土出土である。第52図-1~9は無茎石鏃。10は異形石器。11は表裏面の側縁部に加工をもつ木葉状の小型ナイフ。12・13は両面加工ナイフ。14~20は削器であるが、19・20は下部に幅広い刃部をもつ。21は残核。22は両端部に敲打痕をもつたたき石であるが、側縁部は磨石として利用されている。12は頁岩製、20は玄武岩製、22は泥岩製であり、他は黒曜石製である。



第49図 167号竪穴、167a号竪穴平面図



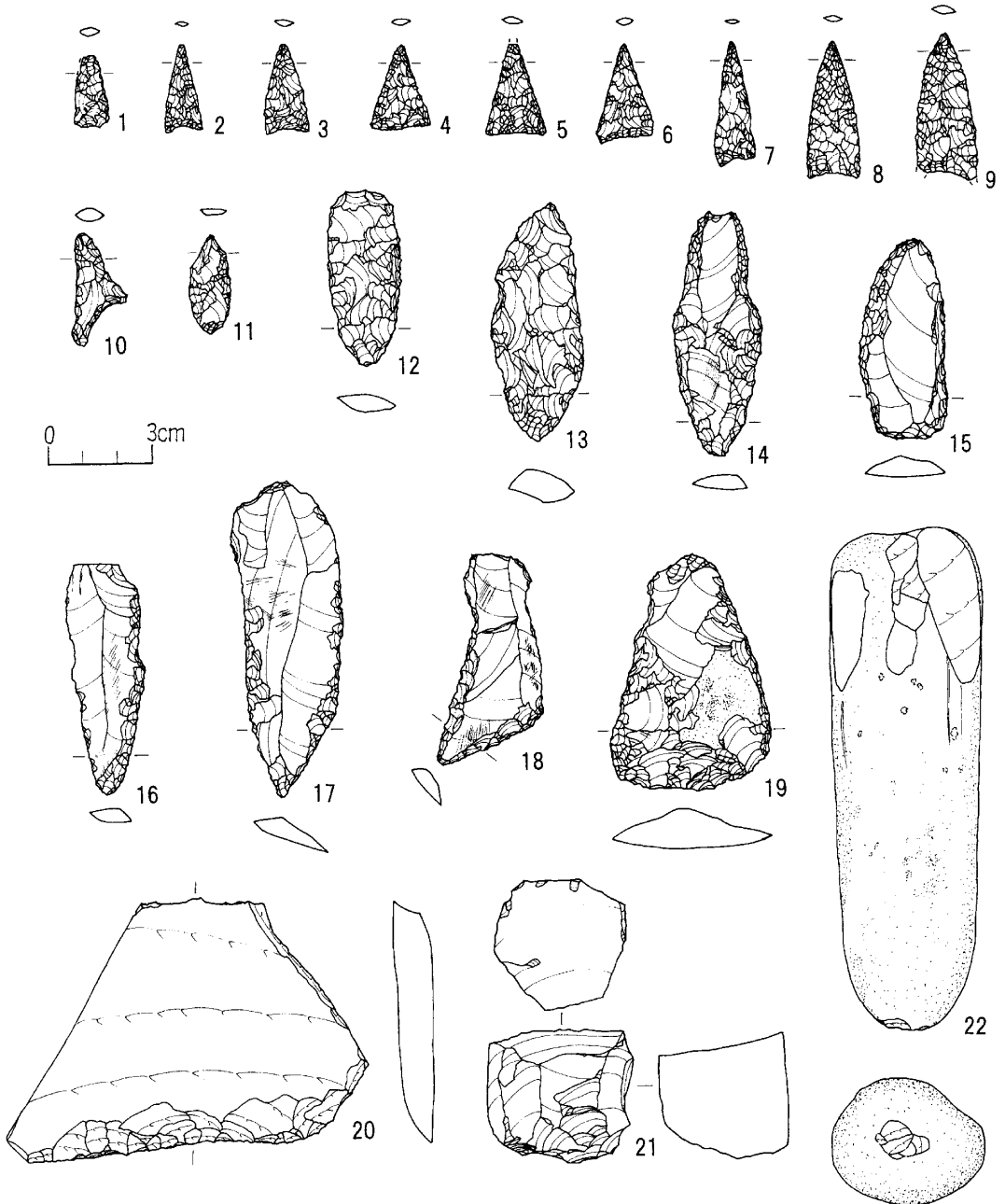
第50图 167号竖穴床面(1·2)·埋土(3~11)出土土器



第51图 167号竖穴埋土(1~16)出土土器

小 括

本竪穴は擦文期の焼失住居である。床面から遺物の出土はないが竪穴の平面形態が東西にやや長い点、竪穴間の相互距離の共通性から140号竪穴と同時併存と考えられる。藤本編年h・i期、宇田川編年後期、に比定するとみられる。(武田 修)



第52図 167号竪穴埋土(1~22)出土石器

167a号 竪 穴

遺 構 (第49図)

本竪穴は擦文期の167号竪穴によって大半が切られている。検出できたのは南壁側だけであり、正確な規模・形態は不明である。残存する南壁の長さは約3.70m。壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

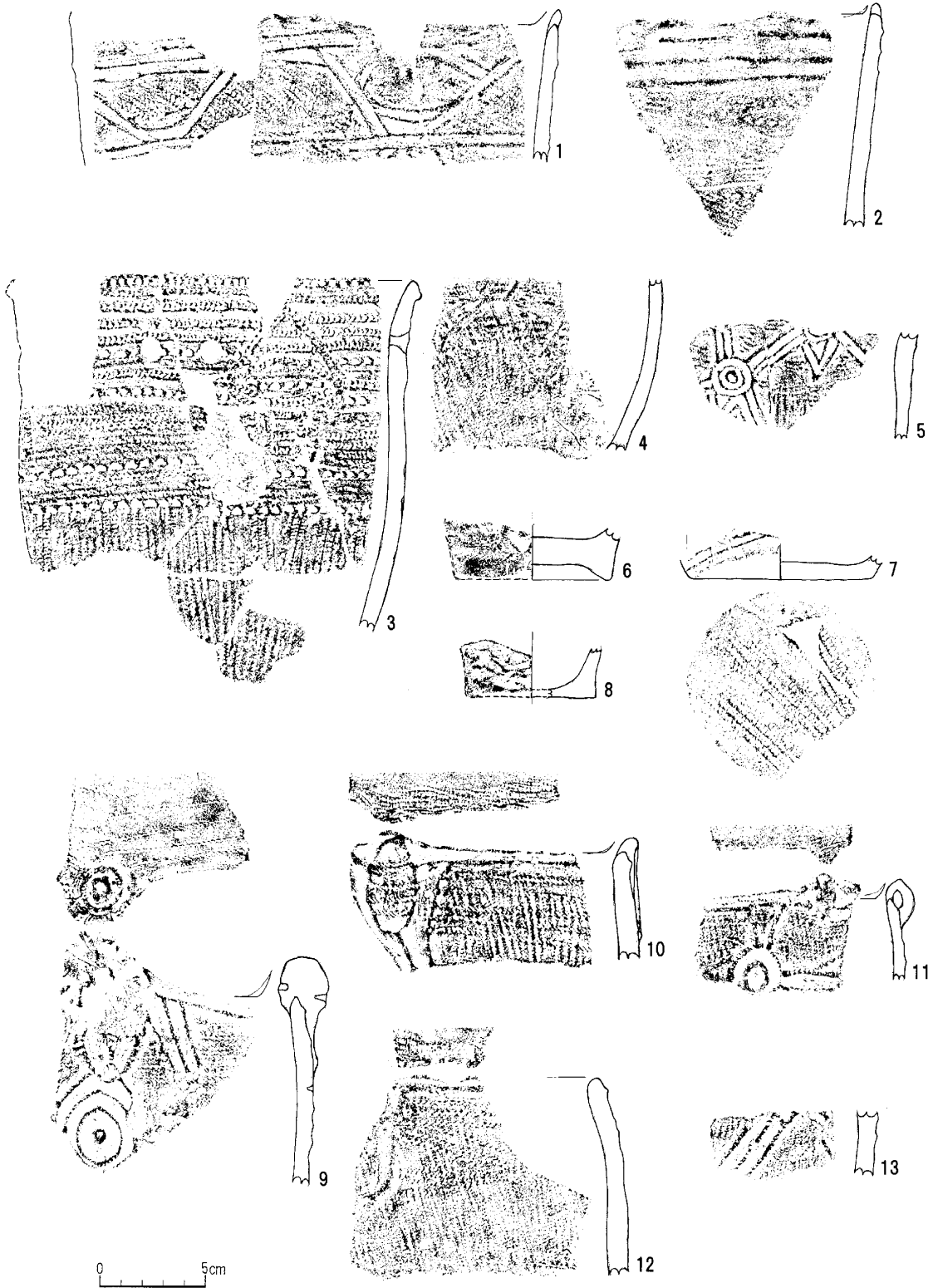
遺 物 (第53図, 第54図, 第55図, 図版15-3)

第53図-1は床面出土であり、他は埋土出土である。1は斜位縄文を地文に横位、波状の微隆起線を施した続縄文後北C₁式。2・4も続縄文後北C₁式で、3は微隆起線と半載状施文具による刺突文が多用され、横位の沈線文と三角形の刺突文が施され、胴下部は縦走縄文となる。後北B式である。4は带状文と縦走縄文を地文に波状の微隆起線が施される。5は微隆起線による同心円文を施し、器面の全面に赤色顔料が塗布されている。6は揚げ底の底部である。後北系であろう。7・8は続縄文後北C₂・D式の底部。9~13は続縄文宇津内IIb式。

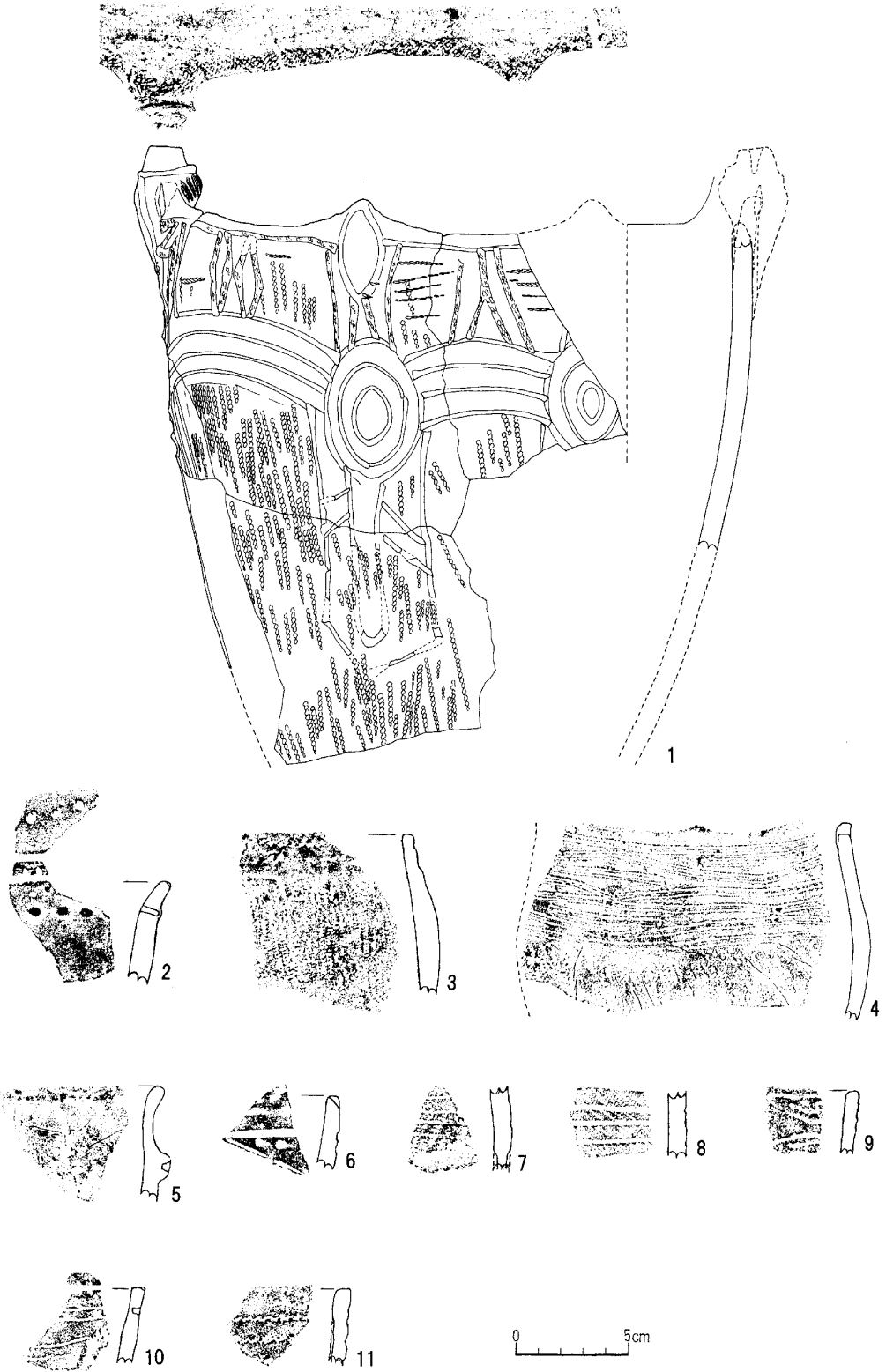
第54図-1は口径約27cm。1対の大突起と2個1対の小突起をもつ続縄文宇津内IIb式。2は無文の口縁部に突瘤文をもつ古手の宇津内IIa式。3は口縁直下に2条の縄線文が施される。続縄文初頭であろう。4は口唇部に山形小突起をもち、変形工字文を半載状施文具により施す。フシココタン下層式相当であろう。5は無文の口縁下部にボタン状貼付文をもつもので、興津式相当であろう。6~10は横位の沈線文を主体とするもので、フシココタン下層式相当であろう。11は縄線文が施される。

石器は全て埋土出土である。第55図-1~6は無茎石鏃であるが、特に1~3は茎部が平坦な三角鏃である。7~9は有茎石鏃。10は異形石器。下部に孔をもつが、意図的に穿孔したのではなく、剥離が薄いため原石面からの窪みが偶然に孔となって残ったものである。11~16は両面加工ナイフであり、12は靴形状、14・16は肉厚である。17・18は片面加工ナイフであり、18は裏面の柄部のみ調整されている。19は表裏面とも加工が粗く、ナイフの未製品と思われる。20は削器。21~23は搔器。24は風化が著しい琥珀製の平玉。25は刃部が欠損し、26は片刃磨製石斧である。27は凹石。25・26は泥岩製、27は安山岩製であり、他は黒曜石製である。

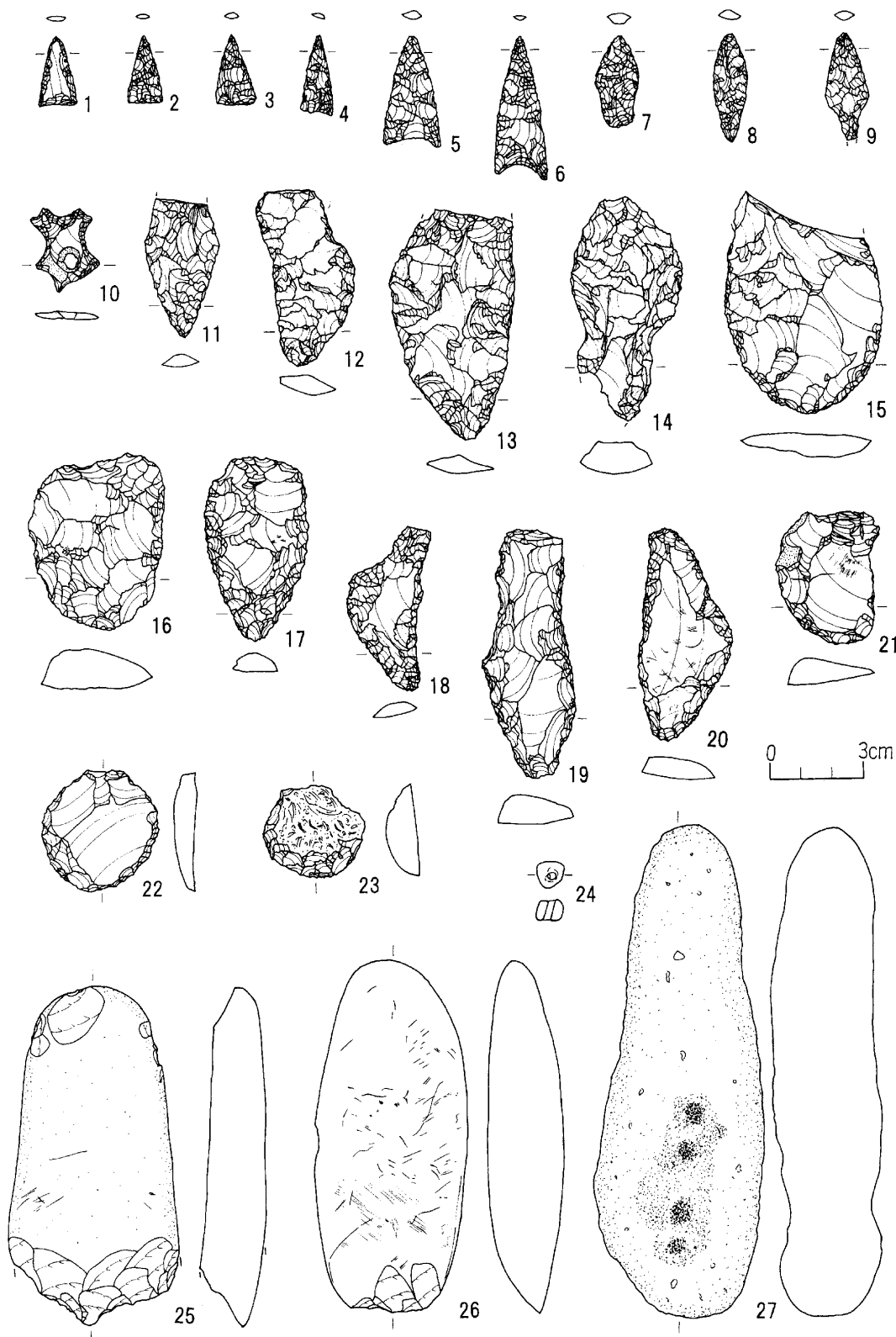
(武田 修)



第53图 167a号竖穴床面(1)·埋土(2~13)出土土器



第54图 167a号竖穴埋土(1~11)出土土器



第55图 167a 号竖穴埋土(1~27)出土石器·琥珀玉

167b号 竪 穴

遺 構 (第56図)

本竪穴は167号竪穴の南側に位置する。規模は長軸面の北側が167号竪穴に切られているものの、残存部で約12mを測る大型の竪穴である。短軸は約5.6m。壁高は確認面から約20~25cmを測る。床面中央部には長軸面に長さ約5.2m、幅約1m、高さ約12cmの細長い炉跡がある。炉跡は黄褐色土を呈し、微細な骨粉、焼けた骨片を混入する。

後北C₂・D式土器の大半は床面上の茶褐色砂、暗褐色砂層から出土している。本竪穴に廃棄されたのであろう。

床面には径約6~25cm、深さ約5~26cmの大小の柱穴があるが、規則性はない。

遺 物 (第57図, 第58図, 第59図, 第60図, 第61図, 第62図, 第63図, 第64図, 図版16)

土器は全て埋土出土である。第57図-1は口縁部にソーメン文状貼付文をもつトビニタイI群。2~15は統縄文後北C₂・D式。2は口径約15.5cm、器高約16cmの中型鉢形土器。口縁部は帯状文が横走し、胴部は縦位・斜位の帯状文が一単位で構成される。3は微隆起線と帯状文を弧線状に施す。4は無文土器。8・9は横位の帯状文、10・11は山形状の微隆起線をもつ。13~15は注口土器であり、14は注口部に吊り耳をもつ。

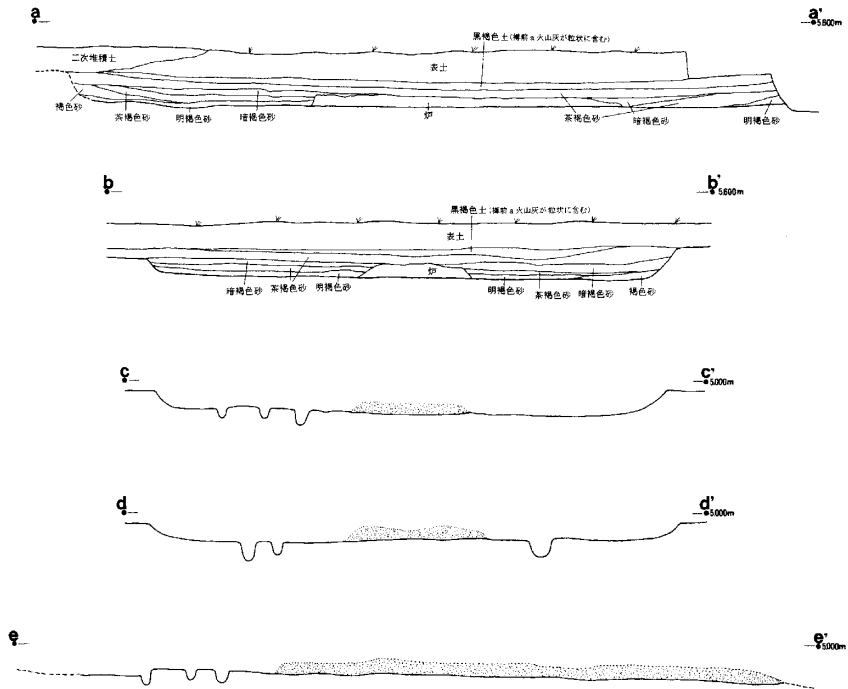
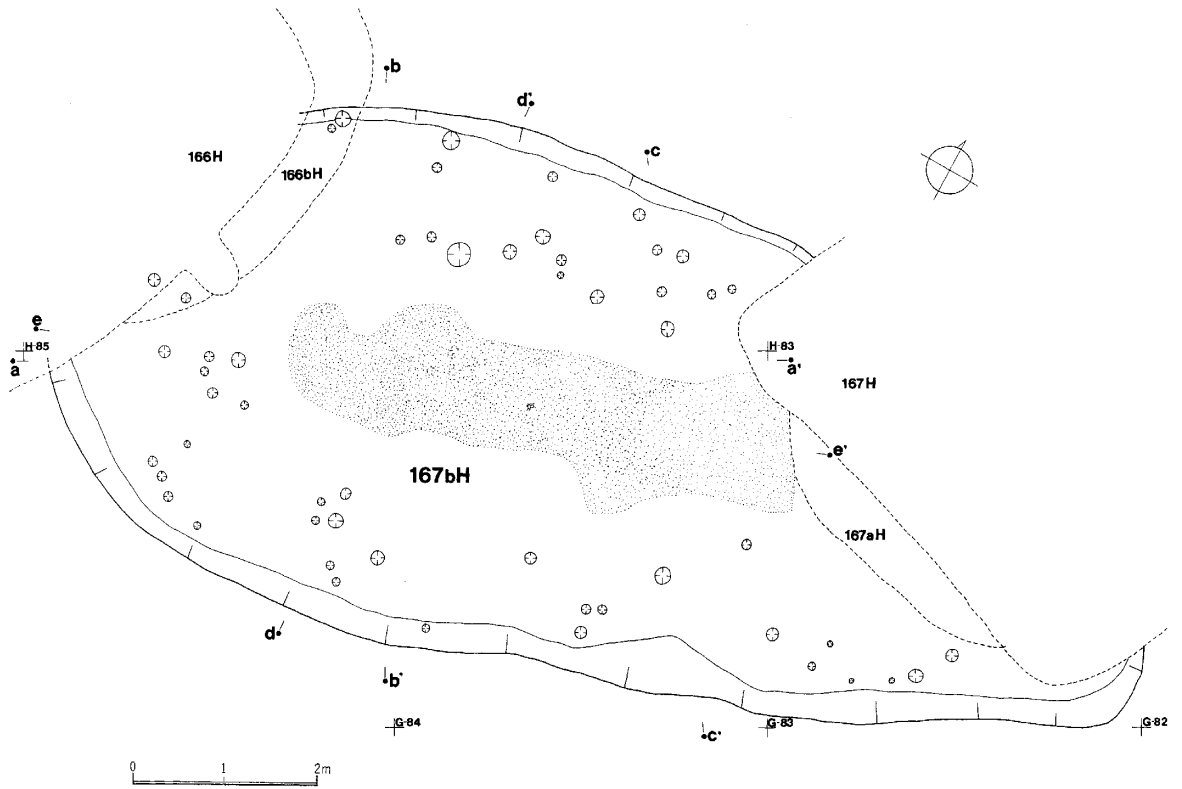
第58図-1は口径約36cm。現存部の器高は約60cmに及ぶ統縄文後北C₂・D式の特大土器。口縁下部に2条の擬縄隆帯をもち、胴上部は3条の横位の帯状文と円弧文で構成される。

第59図-1は口径約38cm。現存部の器高は約55cmにおよぶ統縄文後北C₂・D式の特大土器。口縁下部に2条の擬縄隆帯をもち、胴上部は大形の円弧文で構成される。

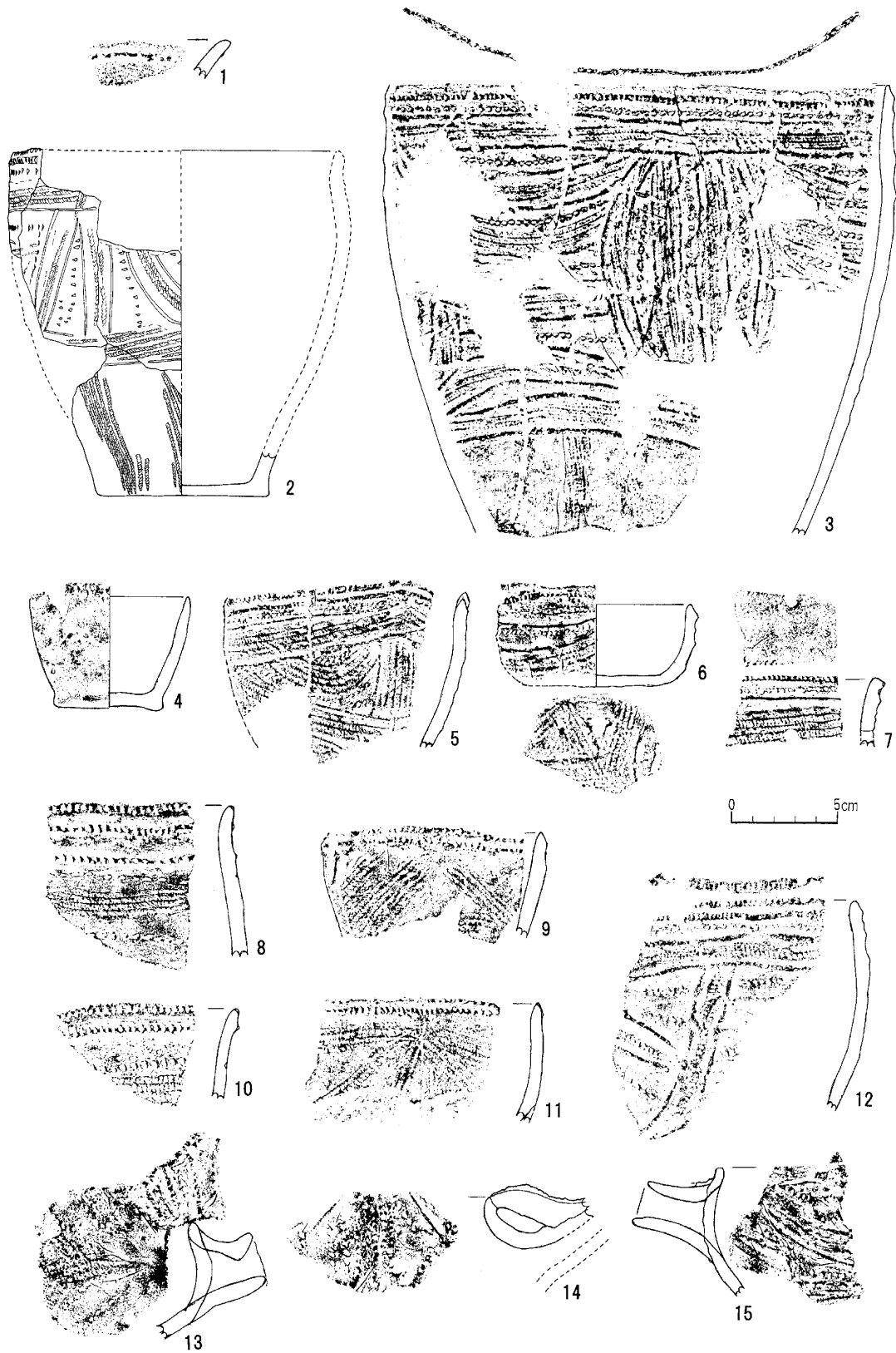
第60図-1は口径約29cm。器高約46cmの統縄文後北C₂・D式の特大土器。僅かに縮約した口縁部に2条の擬縄隆帯をもち、胴上部は帯状文による円形文と三角文で構成される。2も統縄文後北C₂・D式であるが、3は口縁下部の突瘤文は全て貫通したもので、統縄文後北C₂・D式最終末から北大I式初頭と思われる。

第61図-1・2も統縄文後北C₂・D式である。1は口径約25cm、器高約37cmの大型鉢形土器。口縁下部に1条の擬縄隆帯をもち、2本の帯状文間に縦走縄文と三角列点文が施される。2は口径約30cmあり、大型鉢形土器と思われる。円形文と弧線文で構成される。

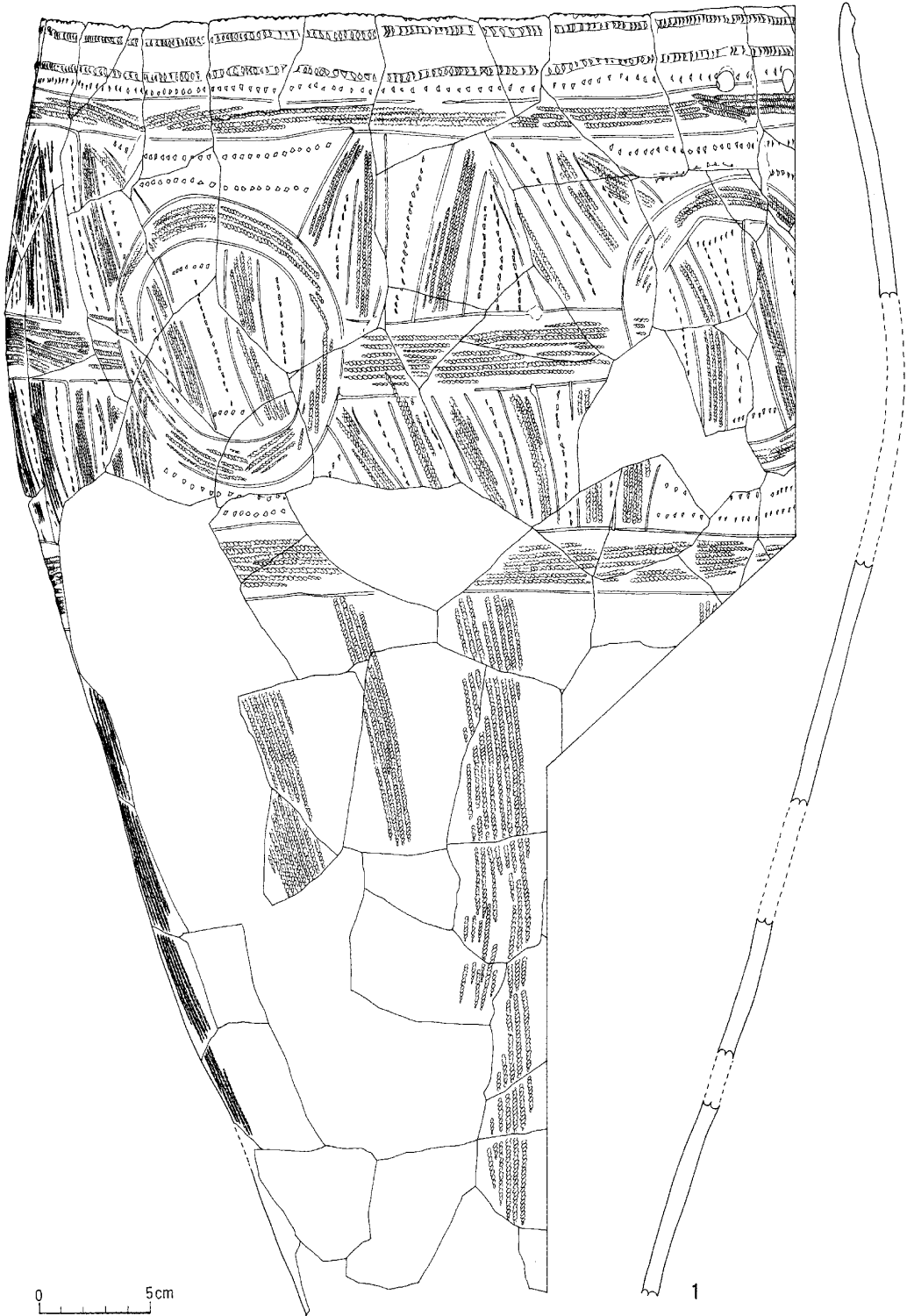
第62図-1は統縄文後北C₂・D式の底部であり、外周縁部に径約5mmの5個の小孔が底部側から穿孔されている。1個は亀裂面にもみられるがこれらは補修孔と思われる。2・3は後北C₁式。4は同B式。5は宇津内IIb式。6~9は突瘤文のある同IIa式で、7は無文部と縦位縄文の2段に施される。9は撚糸文を地文に縄線文と円形刺突文が加わる。10は幅広の口唇部に円形刺突文があり、無文部に突瘤文と細い波状の沈線文が施されたもので宇津内IIa式より古手に位置づけられる。11は横走、12は工字文の沈線文を施す。フシココタン下層式相当であらう。



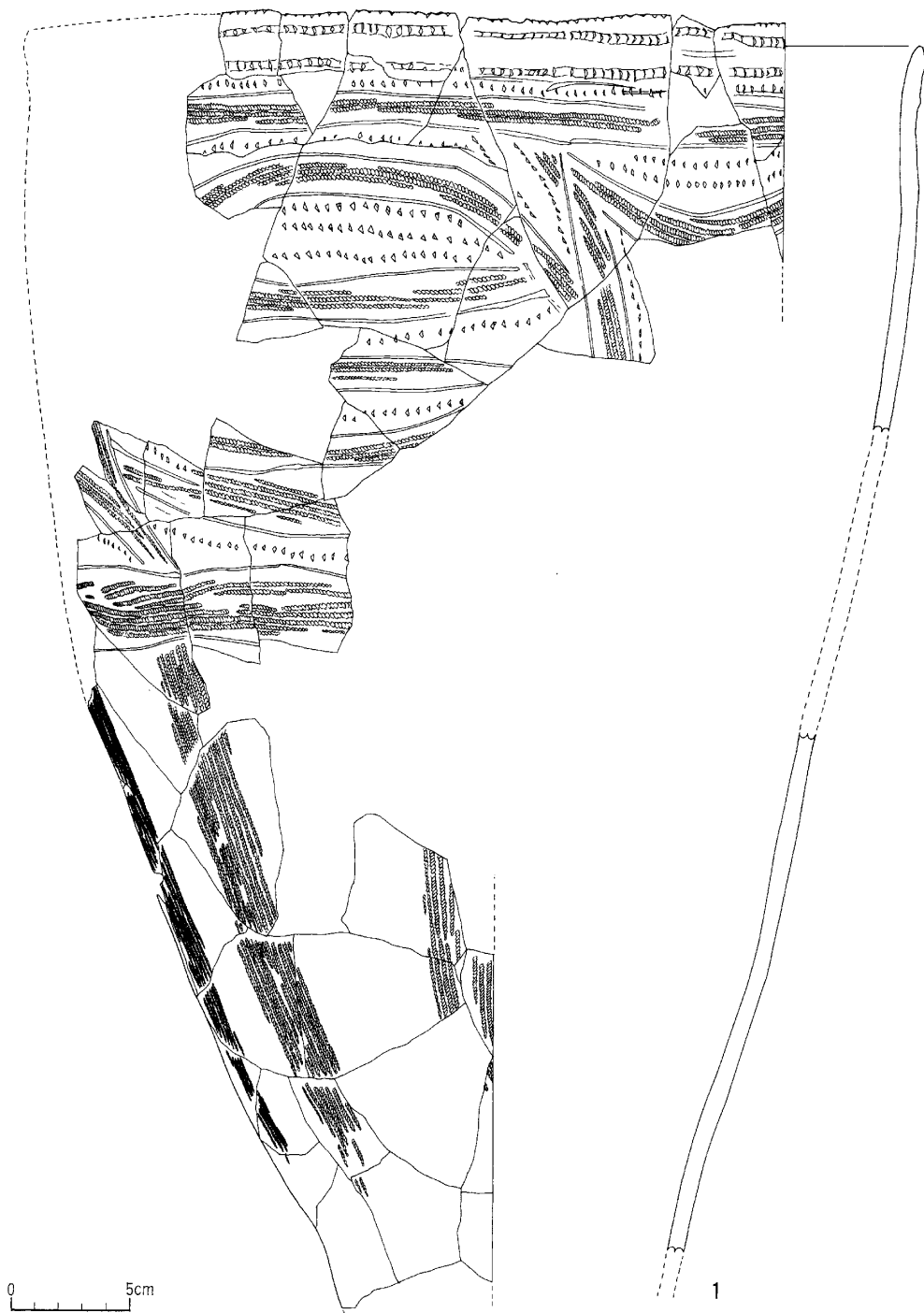
第56图 167b号竖穴平面图



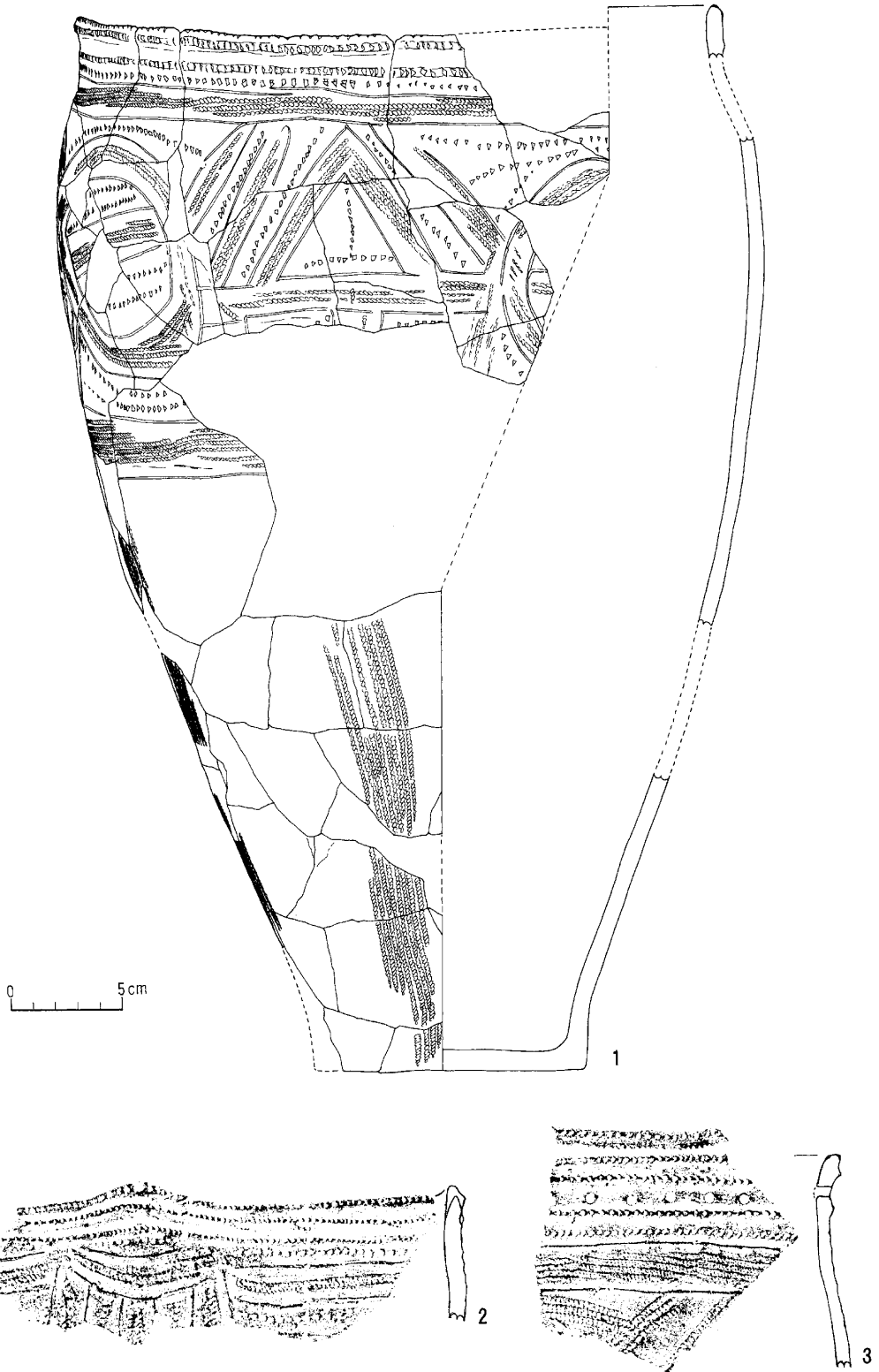
第57图 167b号竖穴埋土(1~15)出土土器



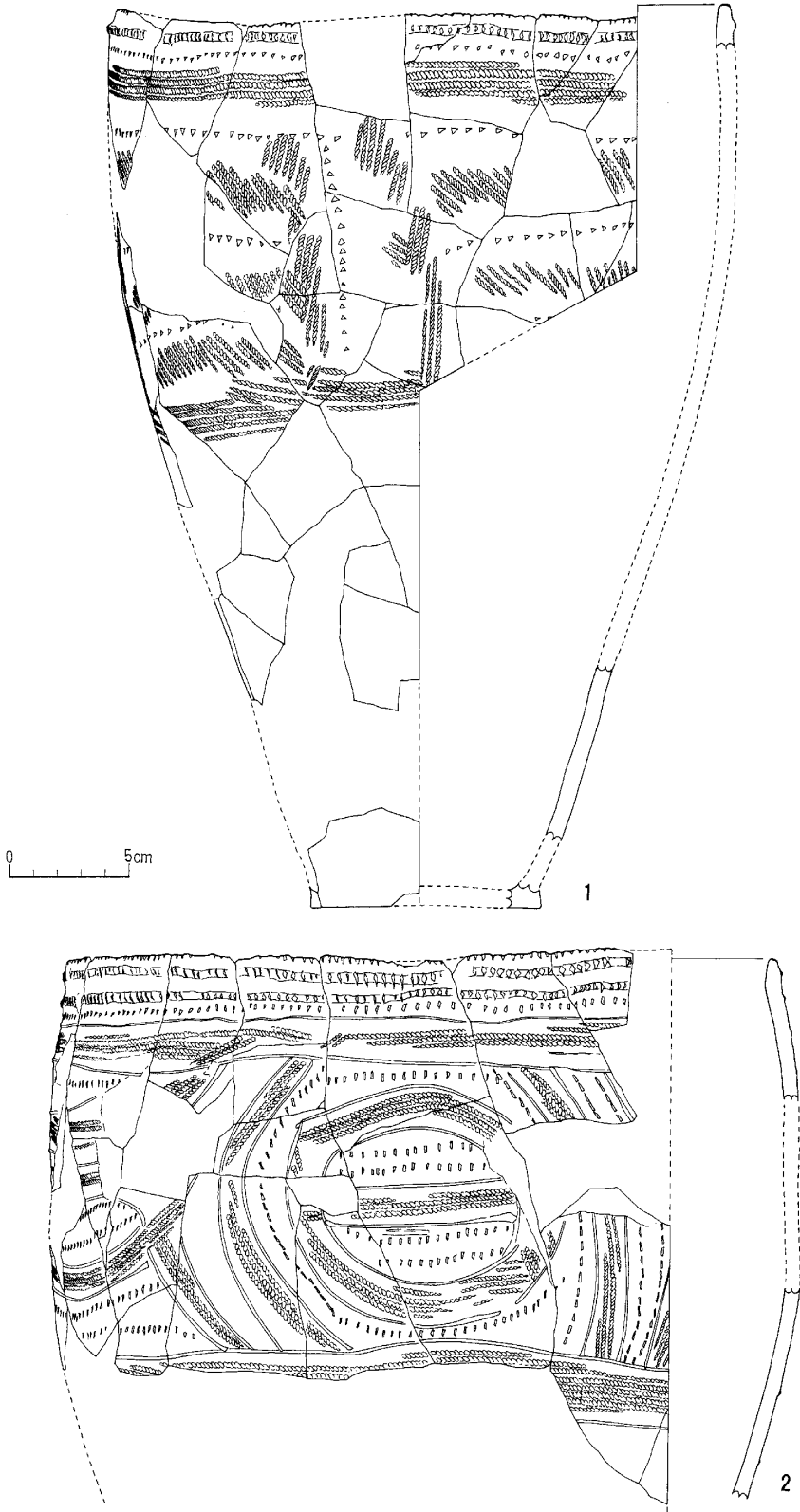
第58图 167b号竖穴埋土(1)出土土器



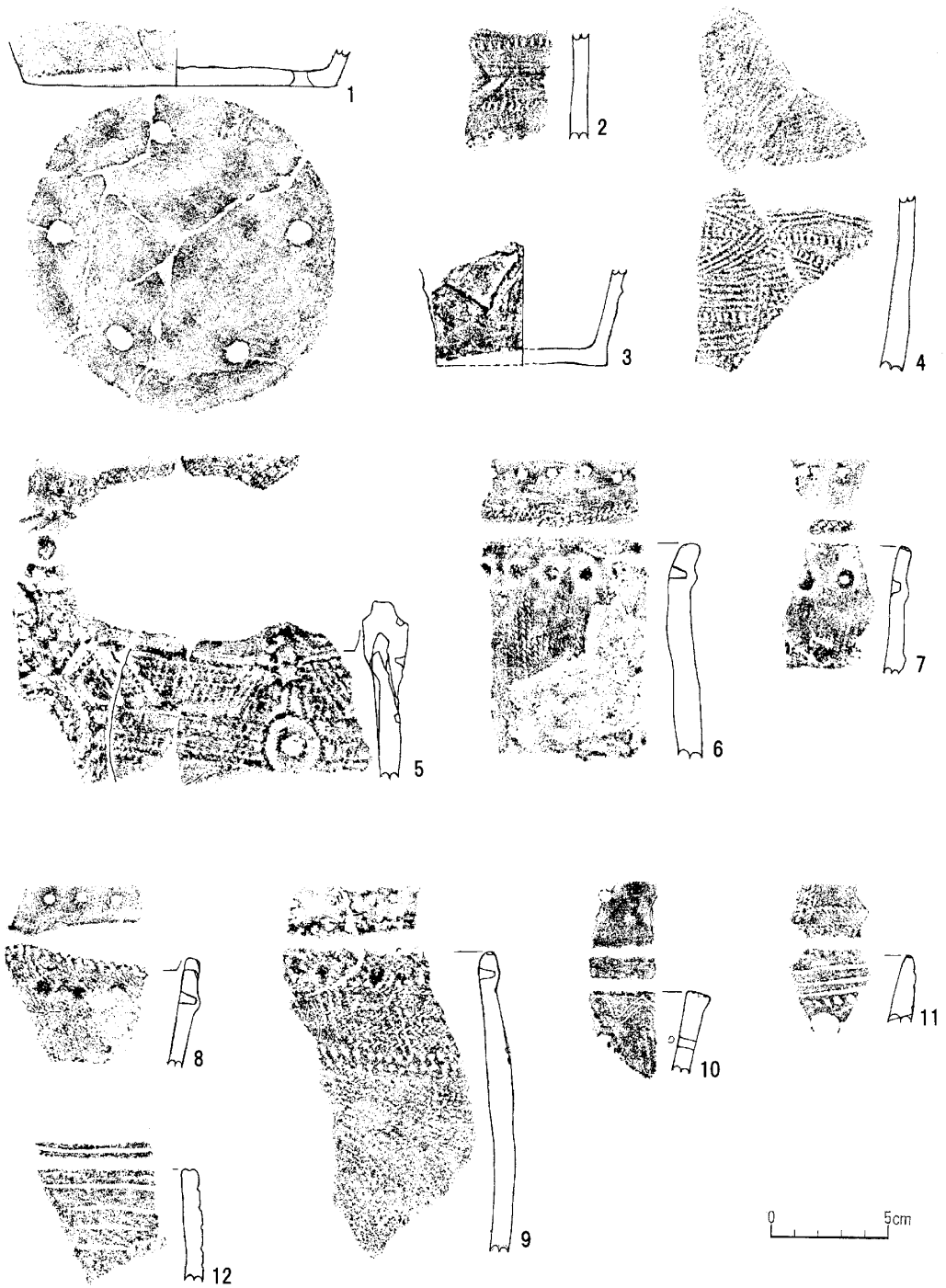
第59図 167b号竖穴埋土(1)出土土器



第60图 167b号竖穴埋土(1~3)出土土器



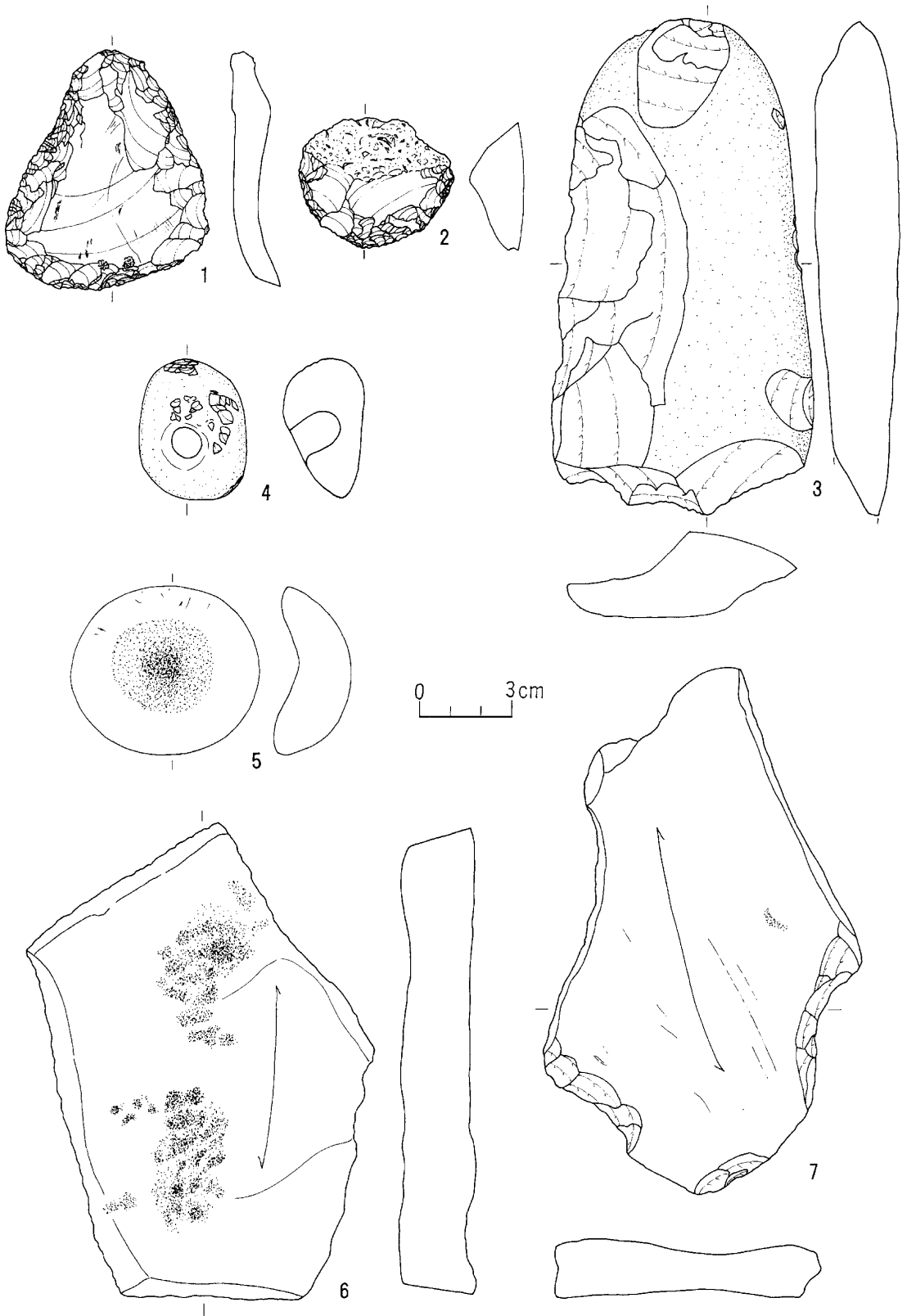
第61图 167b号竖穴埋土(1·2)出土土器



第62图 167b号竖穴埋土(1~12)出土土器



第63图 167b号竖穴埋土(1~24)出土石器



第64图 167b号竖穴埋土(1~7)出土石器

石器は全て埋土出土である。第63図-1・2は無茎石鏃。3は石槍。4～10は両面加工ナイフ。11～13は片面加工ナイフ。14・15は石匙であり、15の裏側縁部も加工が施される。16～23は削器。24は縦長剥片を素材とした搔器。全て黒曜石製である。

第64図-1・2は搔器。3は石斧状の形態であるが脆い砂岩製であり、欠損した大きな剥離面がみられる。上下端部に煤が付着していることなど石斧とは別のものであろう。4は頁岩製の原石面から陥入した孔口部を意図的に調整している。5は半月形の泥岩の中央部が敲打され、凹状となる。6は石皿、7は砥石。1・2は黒曜石製、6・7は砂岩製である。

(熊木美野里)

167c号 竪 穴

遺 構 (第65図)

G80, H81グリッドに位置する。2001年9月の増水により埋土のほとんどが流失し、かろうじて5×3mほどの範囲に約10cmの堆積を確認した。埋土上面には南側に2箇所、北側に1箇所の焼土があり、このうち南側の焼土の1つは直径約80cmで、焼骨の含まれる円形の焼土の周囲に被熱した角礫が5個めぐっているため、石囲み炉であると考えられる。またもう一つの焼土は一部削られており角礫はないものの、直径60cmの円形で、埋土には焼骨が含まれているためこちらも炉跡であろう。従ってこの面が床面と考えられるが、柱穴は検出できなかった。

遺 物 (第66図-1～3, 第67図-1～8)

3点とも埋土出土である。1は統縄文字津内Ⅱa式。2は縮約した口縁部に縄線文とボタン状の貼付文をもち、胴部とは円形刺突文で区画される。統縄文初頭興津式相当であろう。3は底部の外縁に円形刺突文が全周する。統縄文初頭であろう。

石器は第67図-1・2が無茎石鏃。3・4・7・8は削器。3は左側縁の主要剥離面も加工が施される。5・6は両面加工ナイフ。5は頁岩製、6は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

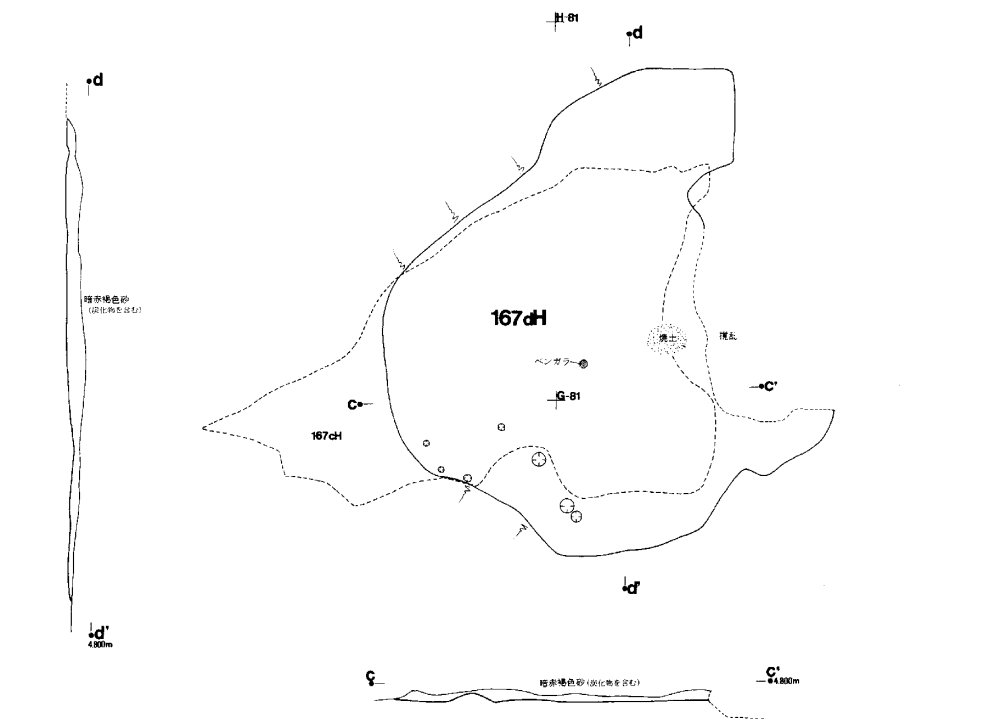
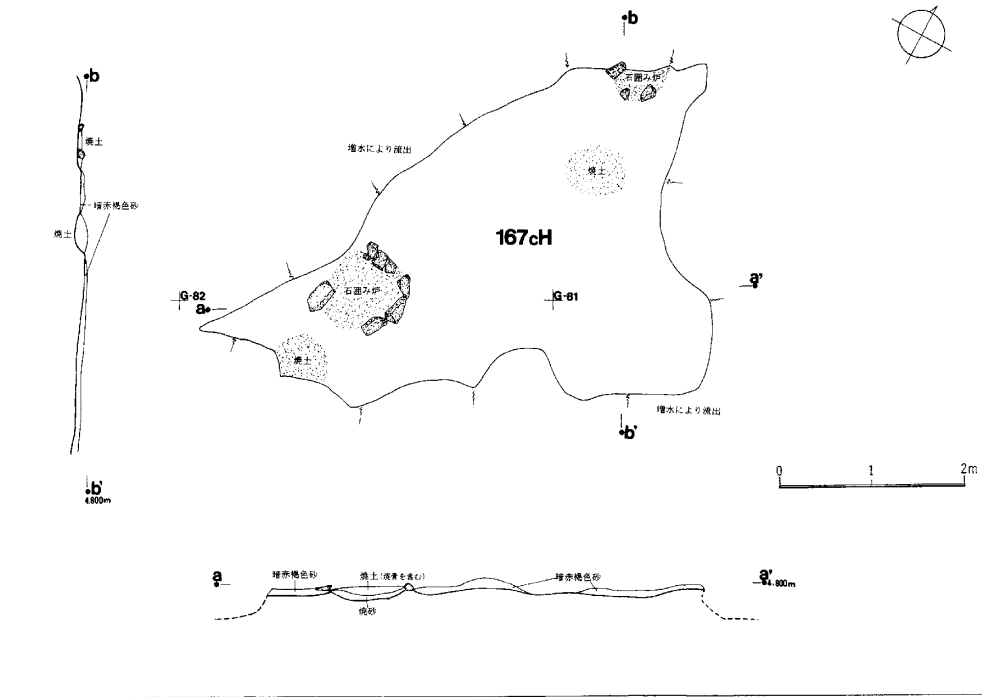
(熊木美野里)

167d号 竪 穴

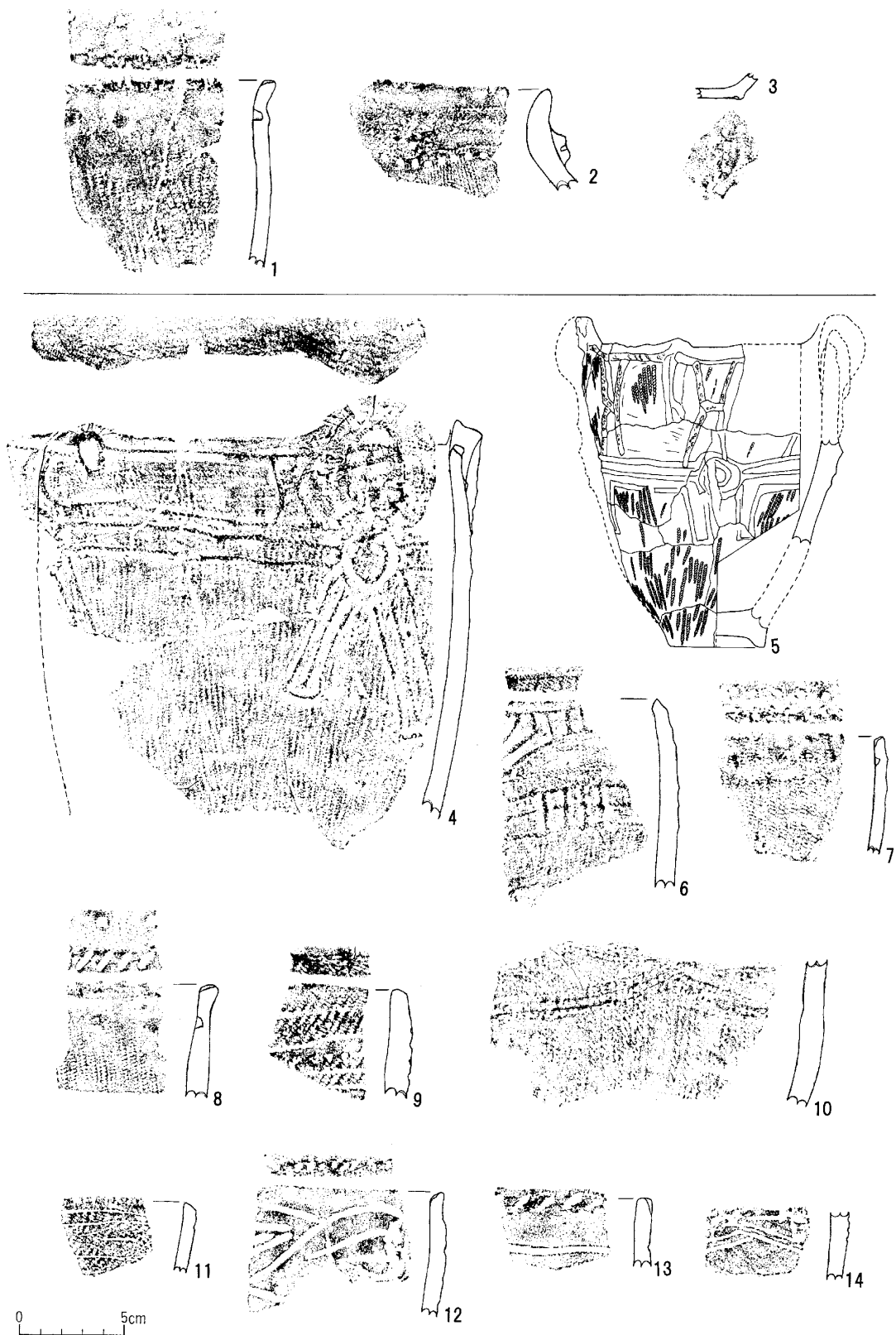
遺 構 (第65図)

167c号竪穴の下層から検出した。ほぼ重複しており、埋土の検出範囲は5×4mほどである。北側と南側にそれぞれ0.4～0.6mの長さで壁の立ち上がりを検出することができた。これをもとにすると、長さ4.00m強の大きさで、壁高は確認面から15cm前後となる。

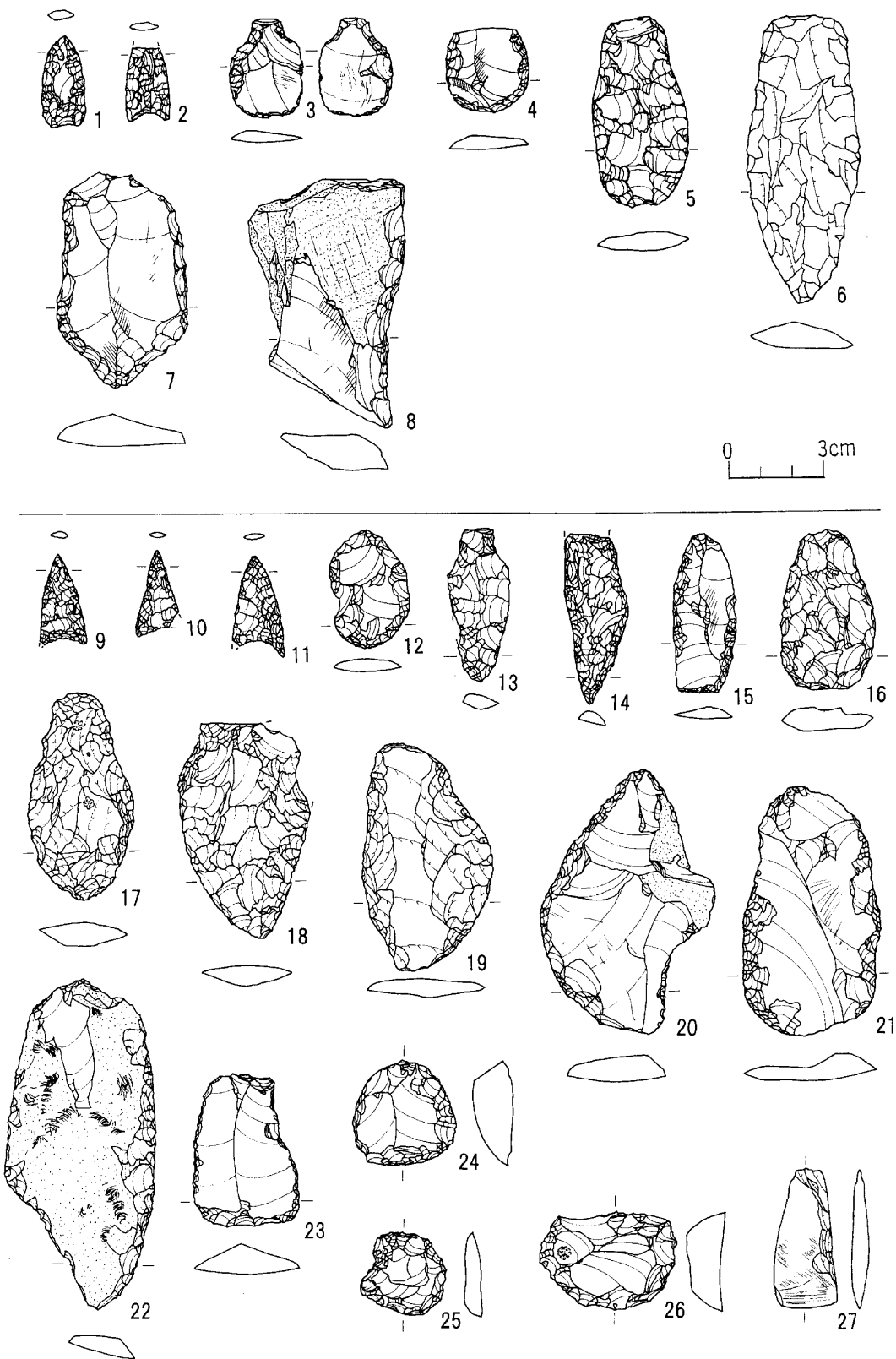
床面では、検出範囲のほぼ中央で40×30cmほどの楕円形を呈する焼土と直径約10cmのベンガラ塊を検出した。焼土に焼骨などは含まれておらず、被熱した角礫も検出していないため、炉



第65図 167c号竪穴、167d号竪穴平面図



第66图 167c号竖穴埋土(1~3)·167d号竖穴埋土(4~14)出土土器



第67图 167c 号竖穴埋土(1~8)·167d 号竖穴埋土(9~27)出土石器

跡かどうかは不明である。柱穴は直径6～15cm、深さは10～15cmで、竪穴の北側にあたる部分で7個検出した。

遺物（第66図－4～14，第67図－9～27，図版17－1）

全て埋土出土である。第66図－4～6は宇津内Ⅱb式。5は口径約13cm、器高約15.5cmの小型土器。7・8は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。9は器面に5本、内側最上部に1本の横走沈線文と刺突文が施される。10は太目の撚糸文を縦・横、山形状に施文する。9・10は続縄文初頭であろう。11～14は沈線文が施されたもので11は外削ぎ状の口唇部をもち、横走沈線文間に菱形文を描く。12は太い曲線的な沈線文、13は横位、14は山形沈線をもつ。これらはフシココタ下層式に相当すると思われる。

石器は第67図－9～11が無基石鏃。13・16～19は両面加工ナイフ。14は片面加工ナイフ。12・15・20～22は削器。23～26は搔器。27は磨製石斧。13・19は玄武岩製、27は青色泥岩製であり、他は黒曜石製である。（熊木美野里）

167e号 竪穴

遺 構 (第68図)

167d号竪穴にほぼ重複している。増水前に一部発掘しており、床面から炭化材と縄文晩期の土器片が出土していた。増水後、埋土の大部分は流失してしまったが、かろうじて炭化材が残存している箇所があり、焼失住居であると考えられる。

炭化材の上層の一部から、茅材と思われる細長い炭化物を検出した。また、南東部を中心に炭化材の下層(=床面直上)には、南北に長く約1.8×2.7mの範囲に厚さ1cmほどの焼土の堆積がみられる。南西部分の炭化材の方が北の炭化材よりも検出レベルが低くなっているためか、炭化材は西側の方が遣りはよい。

炭化材は板状のものと棒状のもの2種類ある。板状のものは長さ80cm、幅10cm前後、厚さは2cmのものが多く、ある程度の規格があった可能性がある。棒状のものは直径1～2cm、長さは短めで5cmほどである。板状のものに垂直に交わるようなものが多い。全体の印象として、竪穴の中心に向けて放射状に検出されている。

壁の立ち上がりは確認できなかったが、南西の炭化材の下層から柱穴を検出した。柱穴は直径10～20cmで、深さは15～30cm前後のものが多い。単独に掘られているものと団子状に重複しているもの2種類ある。北側の炭化材の下層からは柱穴は検出されなかったが、直径20cm前後のものが0.5～1mほどの間隔で楕円を描くように配置されている。

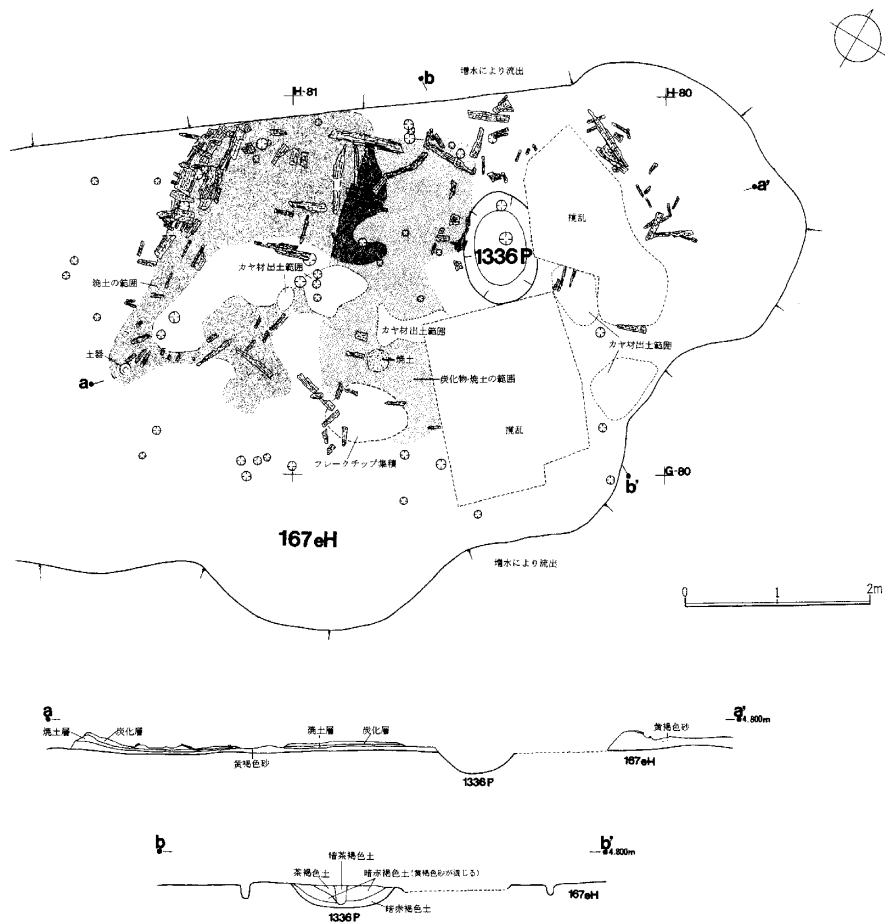
このラインをもとに竪穴の規模を推定すると長軸約3.8m、短軸3.6mほどで、平面形は楕円形を呈すると考えられる。

また、竪穴の東側に直径約30cmの円形の焼土があり、角礫は検出されなかったものの、炉跡と考えられる。さらに床面には1.0×0.5mほどの浅い窪みがあり、埋土から炭化物と黄褐色砂の混在した層から赤色の頁岩系のフレーク・チップが出土している。

遺 物 (第69図, 第70図)

第69図-1～4は床面出土。1は口径約31cmの大型土器。口唇部は刻みが施され、口縁部に太い5条の縄線文がみられ、胴部は斜縄文である。2～5は縦走縄文を地文として、2は縄線文、3は無文帯となり円形刺突文が施される。4は底部。5は柱穴から出土した。3と同様の外反した口縁部であり、縄線文と円形の貼付文が施される。6は埋土出土である。無文部に2本単位の沈線文が施される。1は縄文晩期中葉、2は宇津内系であり他は続縄文初頭である。

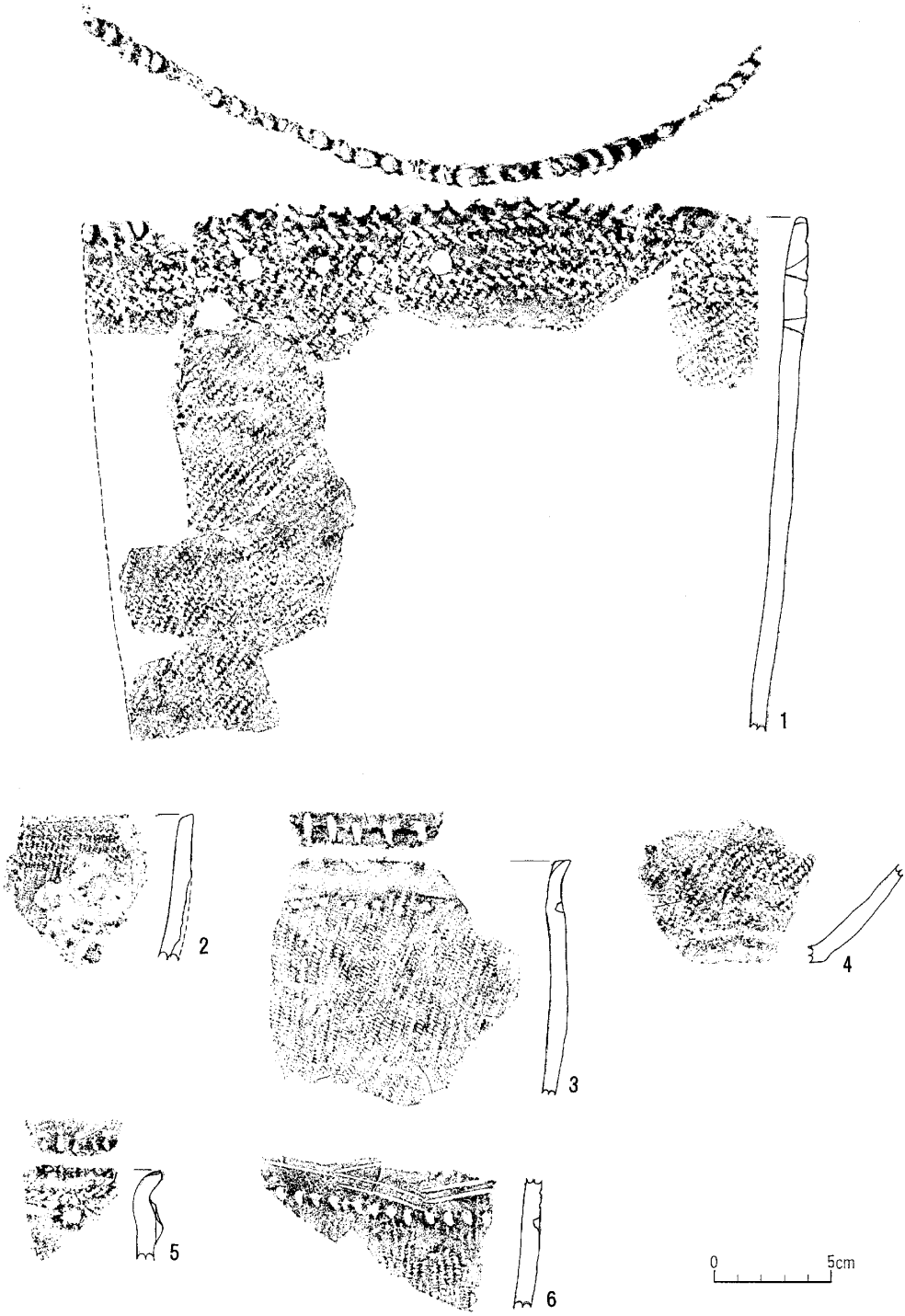
石器は第70図-1～4が床面出土の削器。1の刃部の剥離は広い。3は両面加工ナイフ、4は下端部が先鋭化した削器。5は柱穴から出土した両面加工ナイフ。1～5は本竪穴に伴うと判断できる。6～8は埋土出土の無茎石鏃。9は弧状の剥片先端部が鋭く加工されている。11・12は先端部が尖鋭的に作出されている。10・13・14は削器。15は刃部が欠失し、右側縁が敲打調整された石斧。13はチャート製、15は泥岩製であり、他は黒曜石製である。



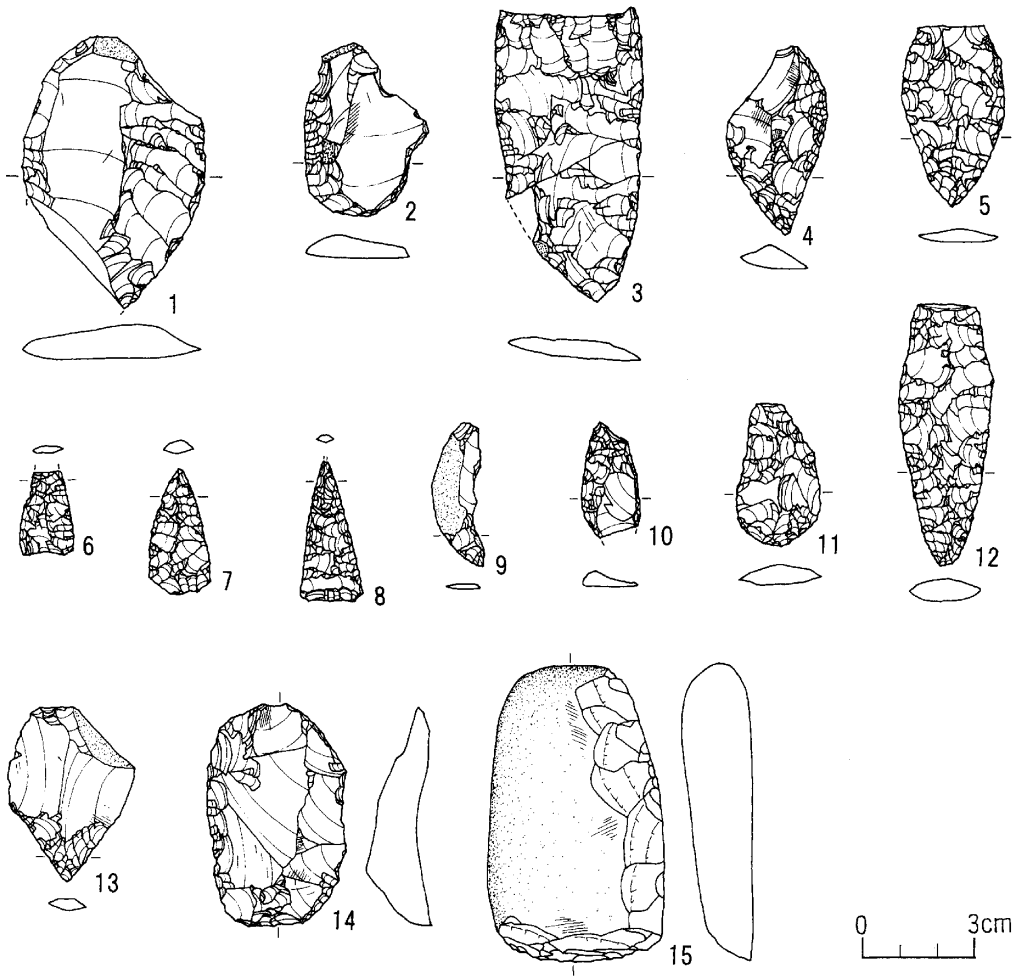
第68図 167e号堅穴、ビット1336平面図

小 括

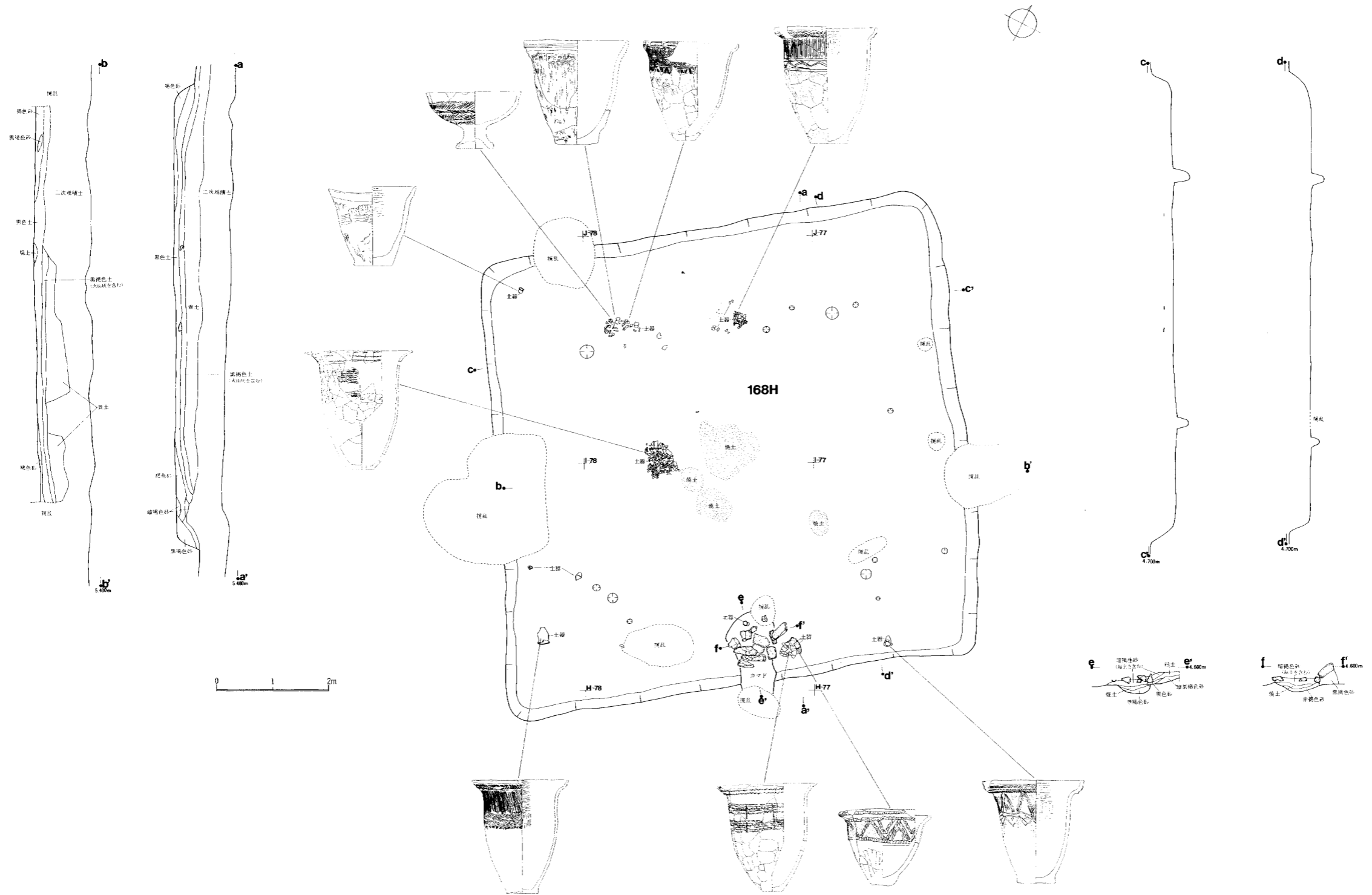
床面から縄文晩期の土器が出土しているのでこの時期と考えられ、床面出土の続縄文初頭の土器は混入であろう。また、炭化材が屋根材とすれば、床面の遺物は増水による削平はほとんど受けていないと思われるが、遺物の量は少なく、完形土器なども出土していない。このため堅穴が焼失したのは廃棄された後と考えられる。(熊木美野里)



第69图 167e号竖穴床面(1~4)·柱穴(5)·埋土(6)出土土器



第70図 167e号竪穴床面(1~4)・柱穴(5)・埋土(6~15)出土石器



第71図 168号竪穴平面図・土器出土分布図

168号 竪 穴

遺 構 (第71図, 図版17-2)

本竪穴はH76~78, I76~78グリッドにかけて位置し、一辺約8.00mの方形を呈する大型の竪穴である。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

竪穴床面の4箇所から焼土が検出されている。いずれの焼土中からも骨片は検出されていない。カマドは東壁のほぼ中央に構築されている。構築材は粘土が使用されており、カマドの袖部や上部には礫が使われている。焚口部の一部と煙道先端部が攪乱を受けているため煙道の長さは正確には不明であるが、約80cmくらいであろうと思われ、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土からも骨片は検出されていない。

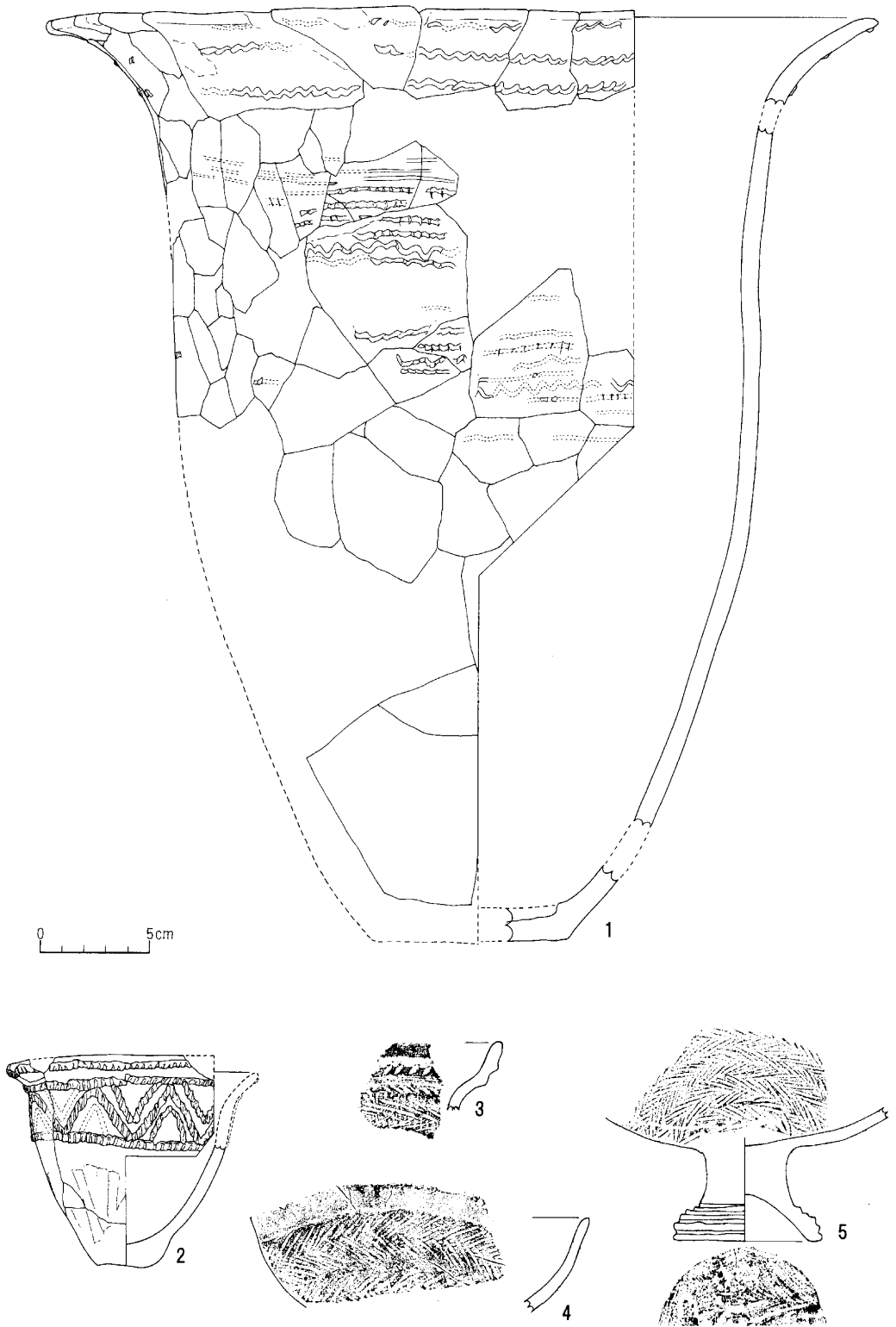
柱穴は径16~24cm、深さ17~26cmの主柱穴が4本、その他に径6~12cm、深さ6~12cmのものが9本確認されている。カマドの北側の床面からは第73図-1のトビニタイ式土器が出土し(図版18-2・3)、その下から第72図-2の小型のトビニタイ式土器が出土している。中央の焼土のすぐ南側からも第72図-1のトビニタイ式土器が出土(図版19-3)している。第73図-1のトビニタイ式土器北側の東壁際からは第73図-4の土器が出土し、南東側隅からは第73図-3の土器が、北西側隅からは第73図-2の土器が出土している。埋土中では中央焼土の北西側からは第74図-2~5の土器が出土している。

遺 物 (第72図, 第73図, 第74図, 第75図-1~5, 図版18, 図版19, 図版20, 図版21)

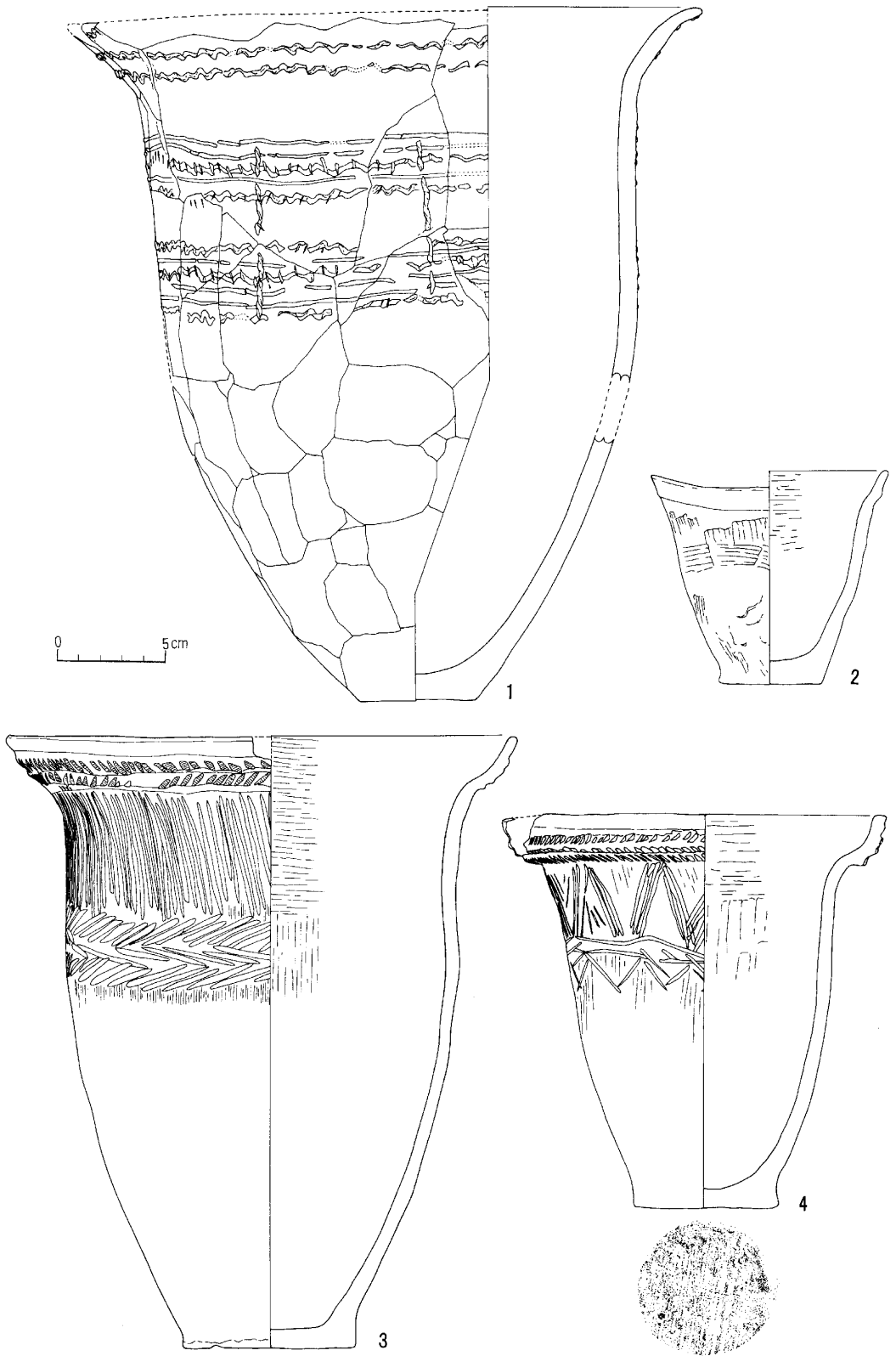
床面からは第72図、第73図の土器が出土している。第72図-1・2、第73図-1はトビニタイ式土器である。

第72図-1は口径38cm、器高は胴部の一部が欠失しているが約42cmと思われる。口縁部に波状の3段の貼付文をもち、胴部には波状の貼付文と疑縄貼付文を横方向に巡らす。2は口径11.1cm、器高9.9cmの小型鉢形土器。底部から口縁部にかけて大きく開いている。口唇部直下に1条の疑縄貼付文を施し、頸部には2本の直線の疑縄貼付文と山形の疑縄貼付文を巡らしている。底部は丸みをもっている。3は擦文土器の口縁部。4は高坏の口縁部。5は高坏の脚部。

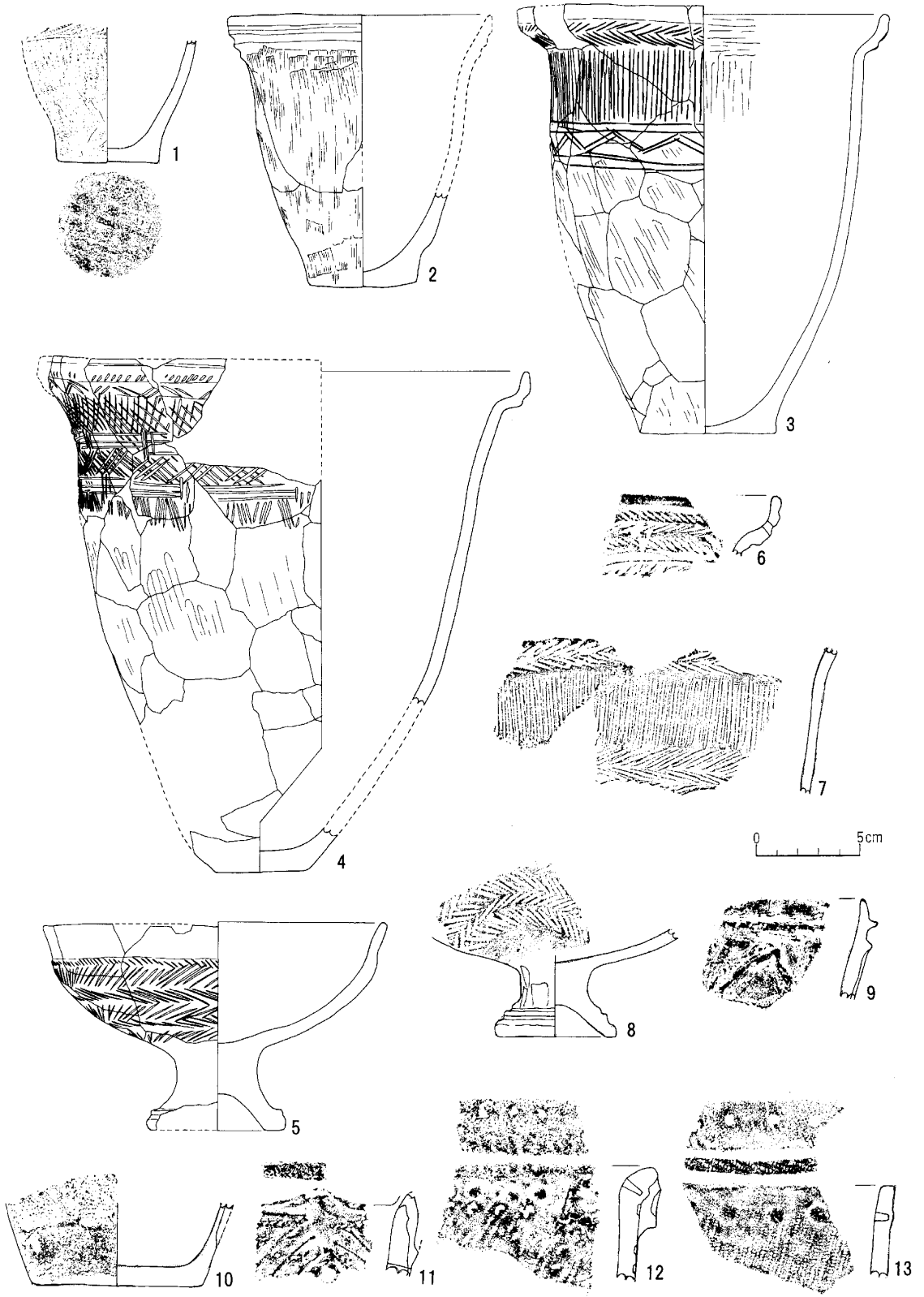
第73図-1は口径30cm、器高31cmの鉢形土器。口縁部に3段の貼付文をもち、胴部には直線の貼付文と波状の貼付文、疑縄貼付文を横方向に巡らし、それに縦の疑縄貼付文を施している。土器の胎土は当遺跡出土のオホーツク土器と非常によく似ている。2は口径11.1cm、器高10cm。底部から口縁部にかけて大きく開いている。無文で刷毛により調整されている。3は口径23cm、器高28.5cmの鉢形土器。口縁部は矢羽根状の刻文が施され、胴部は縦の刻線と短刻線文・矢羽根状刻文を施している。器面は刷毛により調整されている。4は口径17.7cm、器高18cm。底部から口縁部にかけて大きく開いており、口縁部の3段の隆帯には短刻文が施される。胴部には3~4本単位の鋸歯状文・横走沈線・「ハ」字状の短刻文が巡らされており、施文は雑である。第74図-1はカマドから出土した擦文土器の底部。



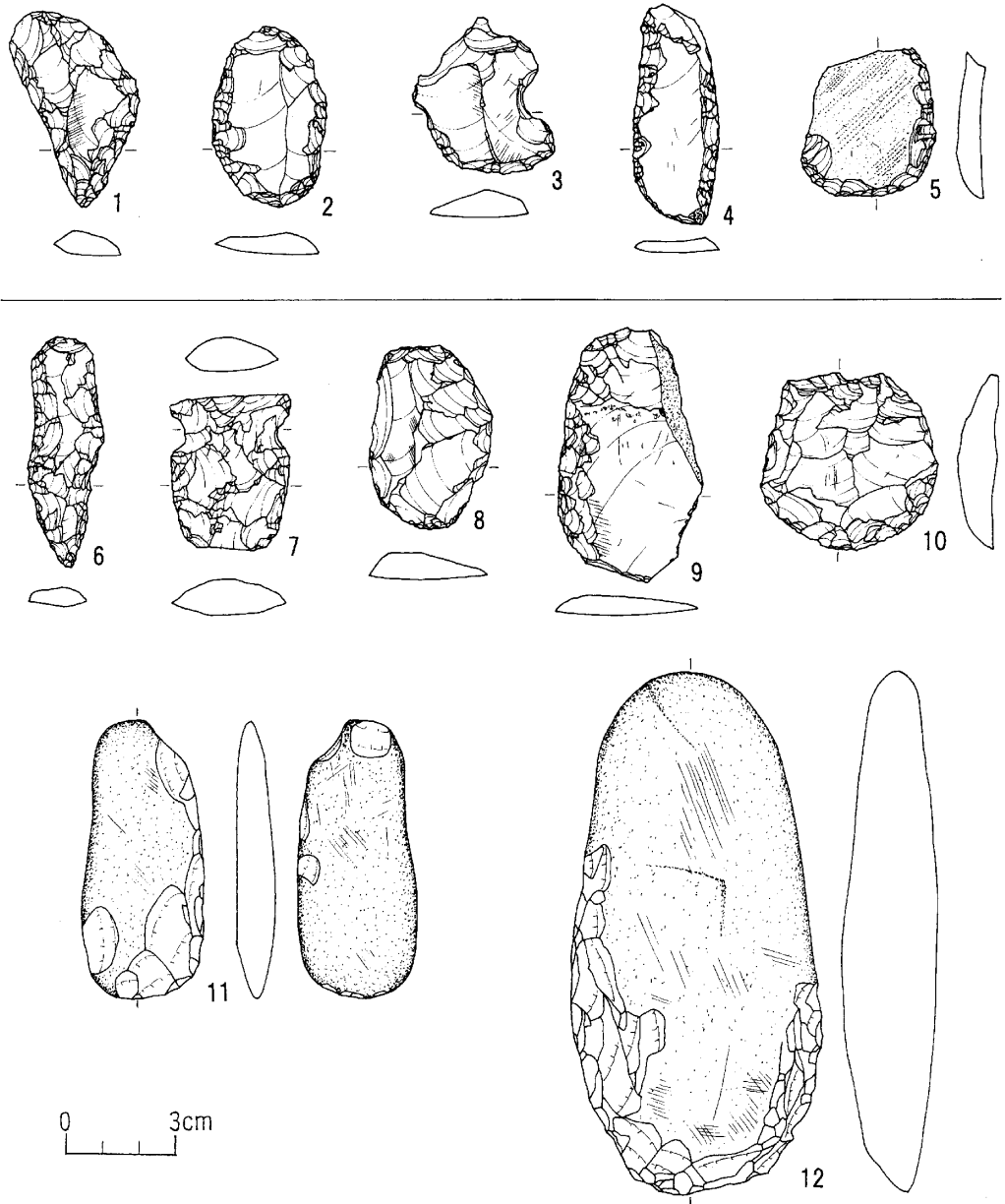
第72図 168号堅穴床面(1~5)出土土器



第73图 168号竖穴床面(1~4)出土土器



第74図 168号竪穴カマド(1)・埋土(2~13)出土土器



第75图 168号竖穴埋土(1~5)、169号竖穴埋土(6~12)出土石器

埋土からは第74図-2は口径12.8cm、器高12.8cmの鉢形土器。底部から口縁部にかけて開いており、無文で刷毛により調整されている。3は口径17.6cm、器高20.7cm、口縁部は外に開いた後、上方に立ち上がり、外面は矢羽根状刻文が施される。胴部は上段に縦の刻線、下段には「ハ」字の刻線文が施され、下段の上下には横方向の刻線文2本が巡らされている。4は口径23.6cm、器高24.8cm。口縁部に2本1組の刻文を「ハ」字状に巡らせ、胴部には格子目文を配し、その下に斜めの刻線とそれに交差する3本の刻線を施し、3～4本の横走沈線で区画する。5は口径16.7cm、器高10.1cmの高坏である。短刻文と矢羽根状刻文が施されている。6は擦文土器の口縁部。7は胴部。8は高坏の脚部。9・10は続縄文後北C₂・D式。11・12は宇津内Ⅱa式。13は続縄文土器の底部。

石器はすべて埋土出土。第75図-1～4は削器。5は搔器。いずれも黒曜石製。

小 括

本堅穴は床面からトビニタイ式の土器が出土しているが一辺約8.00mの方形を呈する擦文期の堅穴と考えられる。床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。(佐々木 覚)

169号 堅 穴

遺 構 (第76図, 図版22-1)

本堅穴は168号堅穴の西側約7.00mに位置する。規模は東西約7.20m、南北約6.20mの長方形を呈する。壁高は確認面から約50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。堅穴の南東隅から西壁の南側にかけて帯状の攪乱を受けている。

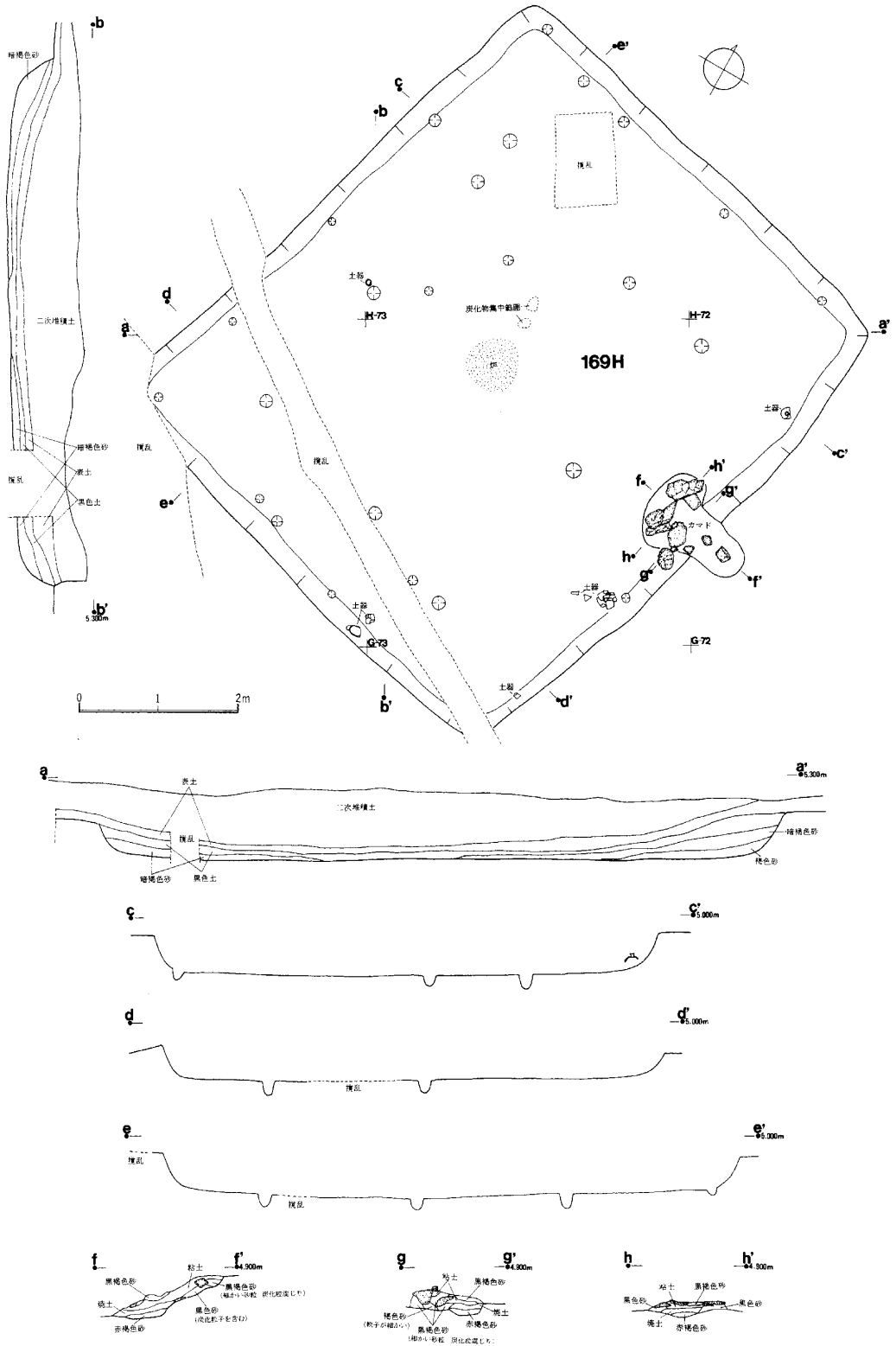
堅穴の床面中央には炉跡の焼土が検出された。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、構築材は粘土である。カマドの焚口部上面に板状の礫と、焚口部奥の袖部には立った状態で礫が検出されていることから袖部には礫が使用されていたと考えられる。煙道の長さは約70cmであり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土からは骨片が検出されている。

柱穴は径14～18cm、深さ12～18cmの支柱穴が8本、壁柱穴は南壁に径8～12cm、深さ7～12cmのものが4本、西壁に径8～14cm、深さ6～9cmのものが3本、来た壁に径10～14cm、深さ8～16cmのものが5本検出され、その他に径10～16cm、深さ8～18cmのものが4本確認されている。炉跡北側の床面直上から炭化物が検出されている。

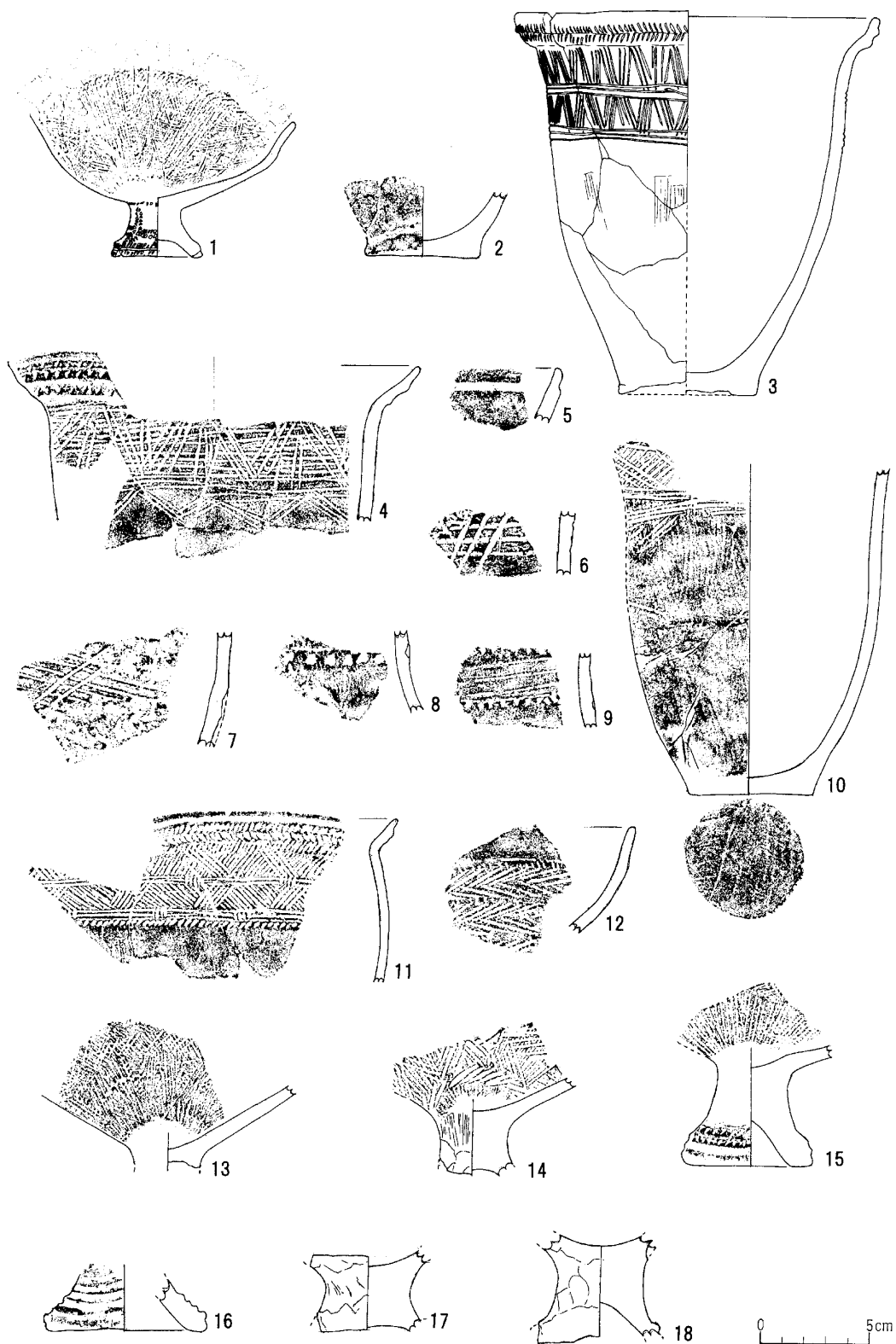
遺 物 (第77図, 第78図, 第75図-6～12, 図版22-2・3)

床面からは第77図-1・2が出土している。1は高坏。口縁部直下に列点文を巡らせ、縦位の沈線と列点文で胴部を6区分し、それぞれに横走又は「X」状の沈線を組み合わせて配す。2は擦文土器の底部。

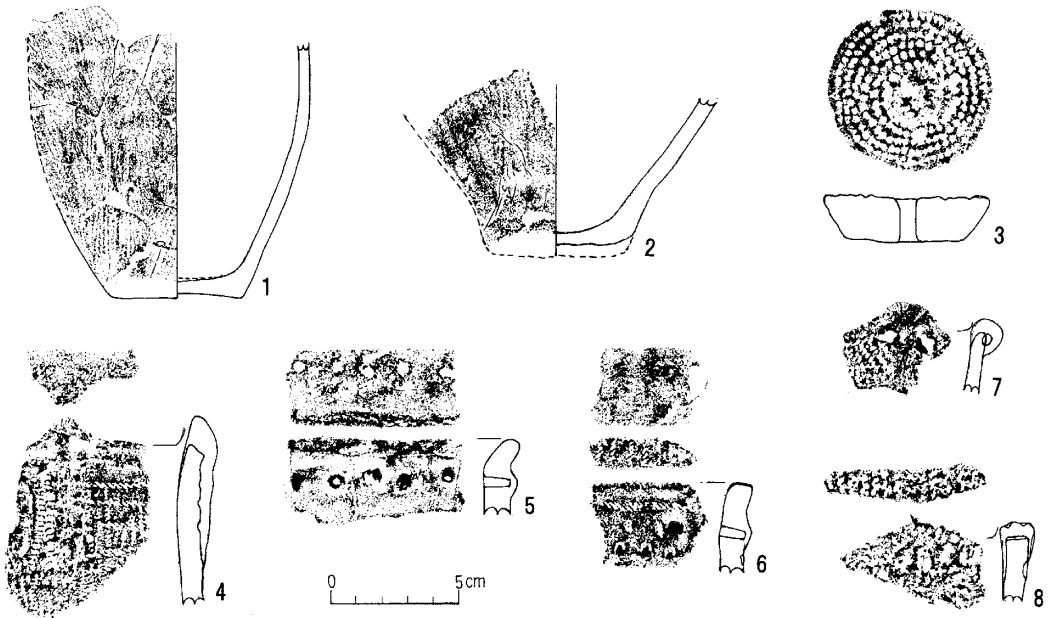
埋土からは3が擦文土器。口径16.5cm、器高17.5cm。口縁部は短刻文を配し、胴部は2段の山形刻線文を横走する2本の沈線で区画する。4～18も擦文土器。6・8・9は古手のものと



第76図 169号竖穴平面図



第77图 169号竖穴床面(1·2)·埋土(3~18)出土土器



第78図 169号竪穴埋土(1~8)出土土器

考えられる。12~18は高坏。

第78図-1・2は擦文土器の底部。3は紡錘車。径6.4cm、厚さ1.8cm、重さ84g。半載状刺文具による刺突文を渦巻状に施す。4は続縄文宇津内Ⅱb式。5は宇津内Ⅱa式。6は続縄文初頭。7は縄文晩期。8は爪形文をもつ縄文晩期前葉。

石器は埋土出土。第75図-6・7はナイフ。8・9は削器。10は搔器。11・12は泥岩製の打製石斧。11・12以外は黒曜石製。

小 括

本竪穴は床面直上から炭化物が検出されていることから焼失住居と考えられる。時期は擦文期のもので出土した土器は宇田川編年後期に比定される。(佐々木 寛)

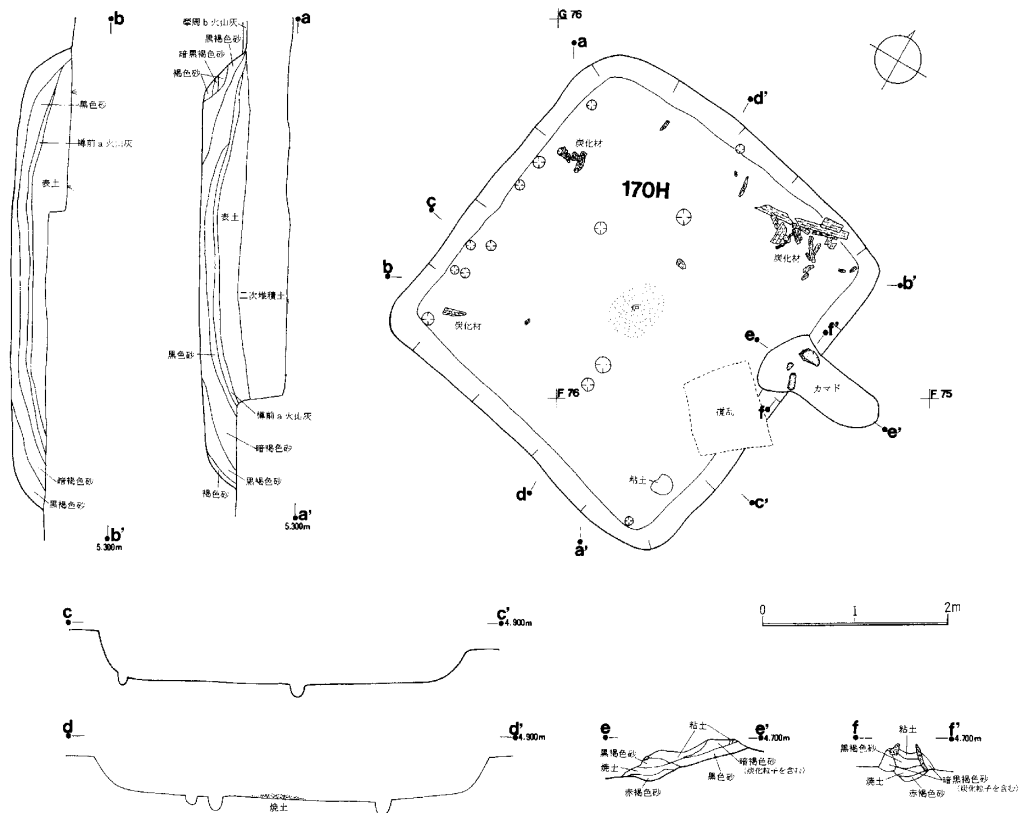
170号 竪 穴

遺 構 (第79図, 図版23-1)

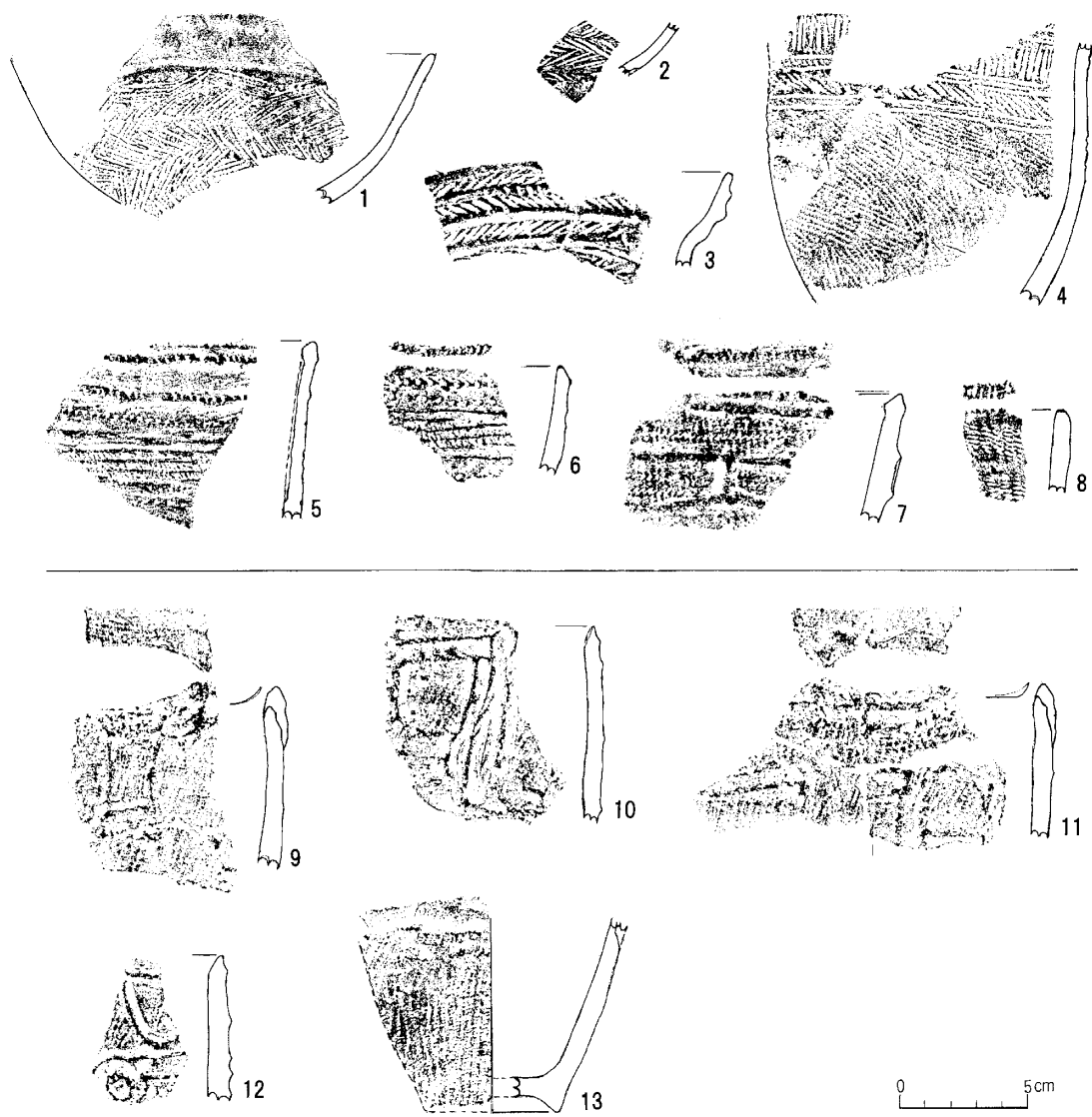
本竪穴は168号竪穴の南東約5.40mに位置する。規模は一辺約4.00mの方形を呈する。各壁の長さは東壁と西壁が約4.00m、南壁と北壁が約3.80mを測る。竪穴は多少黄色い摩周b火山灰を切って構築されており、埋土中の表土と黒色砂層の間からは樽前a火山灰が認められた。竪穴の壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

竪穴の床面ほぼ中央からは炉跡の焼土が検出されている。カマドは東壁の中央より多少北寄りに構築され、構築材は粘土である。袖部には礫が使用され、焚口部の礫2点が立った状態で検出されている。煙道の長さは約80cmであり、緩やかに立ち上がる。

柱穴は壁柱穴が南壁に径8~12cm、深さ6~12cmのものが2本、西壁に径8~12cm、深さ8~10cmのものが5本、北壁に径8cm、深さ6cmのものが1本検出され、その他に径10~16cm、深さ10~16cmのものが6本確認されている。竪穴の床面直上からは炭化物が多く見られ、特に北東隅はまとまってみられる。



第79図 170号竪穴平面図



第80图 170号竖穴埋土(1~8)、171号竖穴埋土(9~13)出土土器

遺物 (第80図-1~8, 第81図)

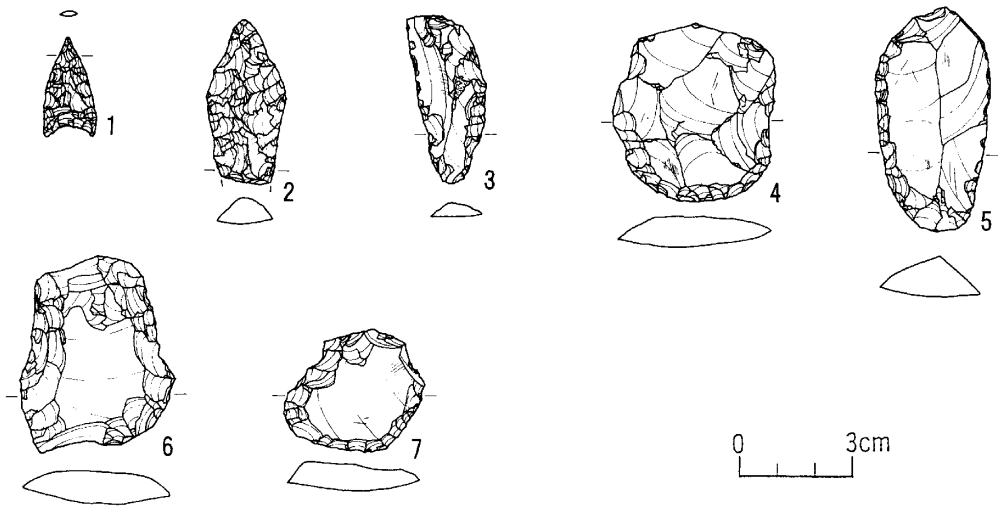
床面からは遺物は出土していない。埋土からは第80図-1~4は擦文土器。1・2は高坏。3は口縁部。4は胴部。5・6は統縄文後北C₂・D式。7は宇津内Ⅱb式。8は縄文晩期。

石器は埋土出土。第81図-1は無茎石鏃。2は両面加工のナイフ。3~6は削器。7は搔器。いずれも黒曜石製。

小括

本竪穴は一辺約4.00mの方形を呈する擦文期のもので、床面直上から炭化物が多く出土していることから火災住居と思われる。時期は不明であるが、摩周b火山灰を切って構築されていることと埋土の土器から宇田川編年後期に比定されると考えられるが断定はできない。

(佐々木 寛)



第81図 170号竪穴埋土(1~7)出土石器

171号 竪 穴

遺 構 (第82図)

本竪穴はピット983, 983aの調査中に発見していたものでD85・86グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約2.80m、短軸約2.30mの小型不整形方を呈する。壁高は確認面から約34cmを測る。

角礫を用いた石囲み炉はほぼ中央部に位置するが、北側と南側は欠失する。内部は良く焼けている。

支柱穴は南壁側の中央部にある径約25cm、深さ約9cmと炉跡に近い径約16cm、深さ約12cmの2本が相当する。壁柱穴は径約8～10cm、深さ約6～12cmが北壁を除く各壁に1～2本みられる。

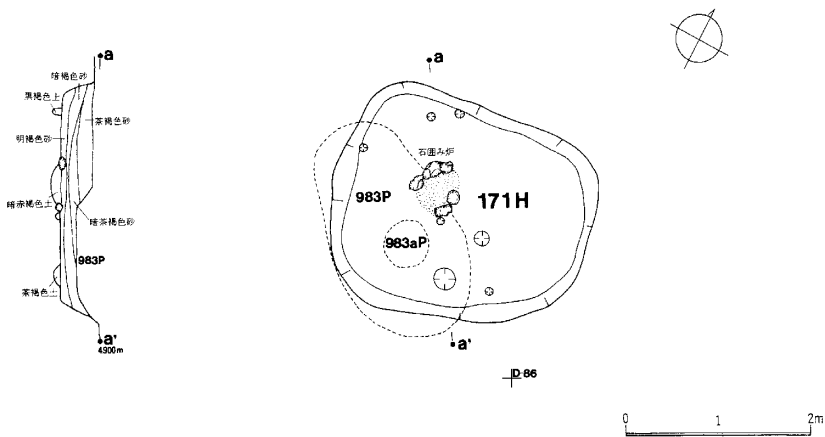
遺 物 (第80図-9～13)

全て埋土出土である。4点とも統縄文字津内Ⅱb式であり、13の底部も同時期であろう。

小 括

時期は統縄文期と思われるが、詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第82図 171号竪穴平面図

172号 竪 穴

遺 構 (第83図)

本竪穴はH86・87, I86・87グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると樽前a火山灰を含む暗黒褐色砂が堆積し、下層には層厚約25cmの黒褐色砂が床面に達しており、大小約5～35cmの各礫に混じって6点の凹石がみられた。これらは東壁上部から内側の床面にかけて傾斜した状態で出土しているため、遺棄されたものと思われる。西壁側では黒褐色砂の中位から第85図-1に示す続縄文後北C₂・D式の土器がつぶれた状態で出土した。

規模は長軸約6.00m、短軸約4.35mの隅丸長方形を呈するが、南壁側は僅かに張り出す様である。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約25～30cmを測る。

長さ約0.95cm、幅約50cmの楕円形を呈する炉跡は中央部からやや東壁寄りにみられ、10cmほど盛り上がっている。炉跡の検出時に長方形を呈した3点の角礫が繋がった状態でみられたが、3点の角礫は下層にある172a号竪穴の石囲み炉の上部にあたる。本竪穴の炉跡の一部はその石囲み炉の上に被さっているので時間的差は明らかである。また、下層の石囲み炉は集石10によりその一部が破壊されている。

明瞭な支柱穴は認められない。最大でも径約24cm、深さ約34cmが南壁に1本あるだけである。壁柱穴は径約10～15cm、深さ約10～33cmが大部分を占めており、これらにより屋根が支えられていたのであろう。

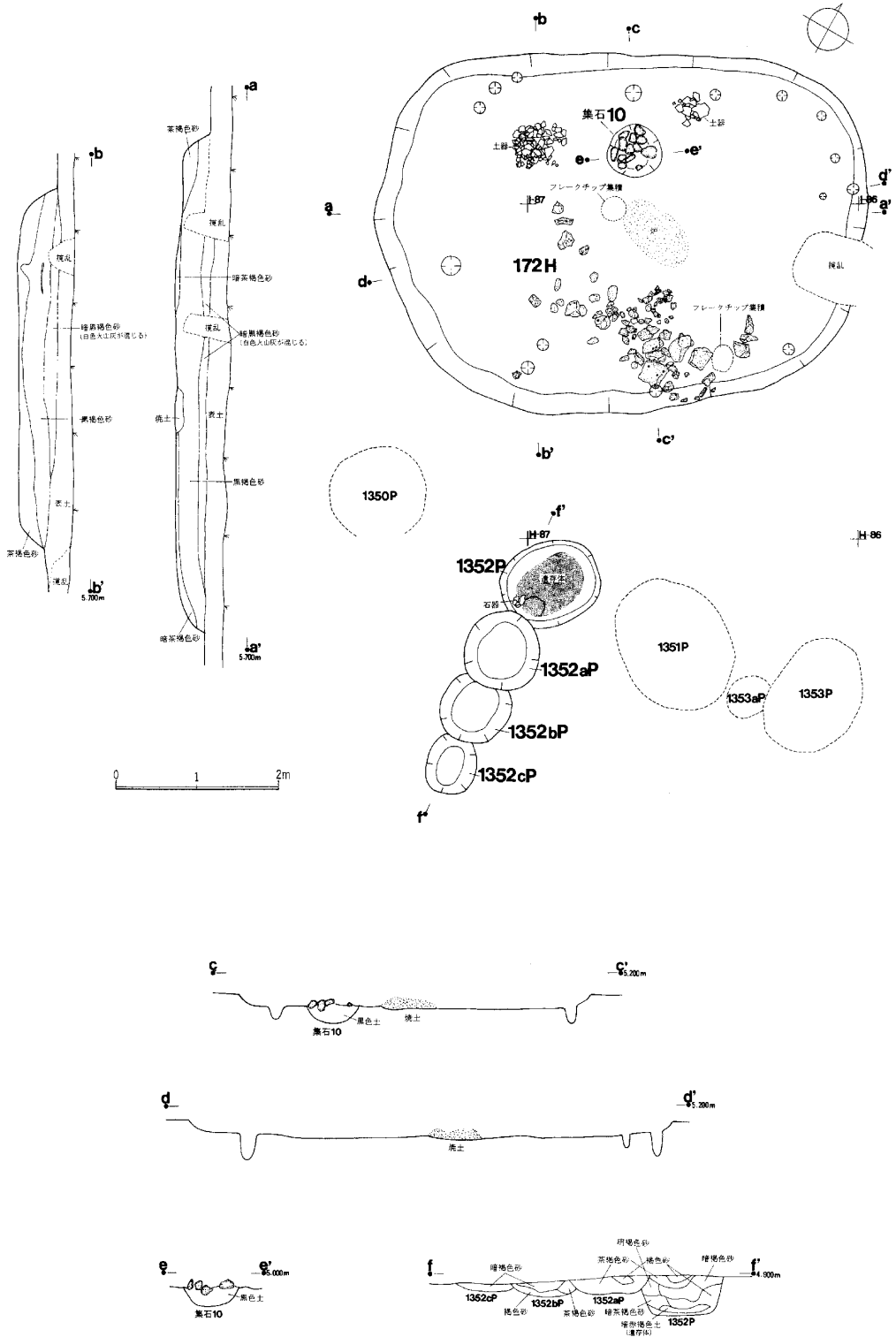
黒曜石のフレーク・チップ集積は東壁際と炉跡に接してそれぞれ1箇所ある。床面上にあり、本竪穴に伴うものである。

遺 物 (第84図, 第85図, 第86図, 第87図, 図版24)

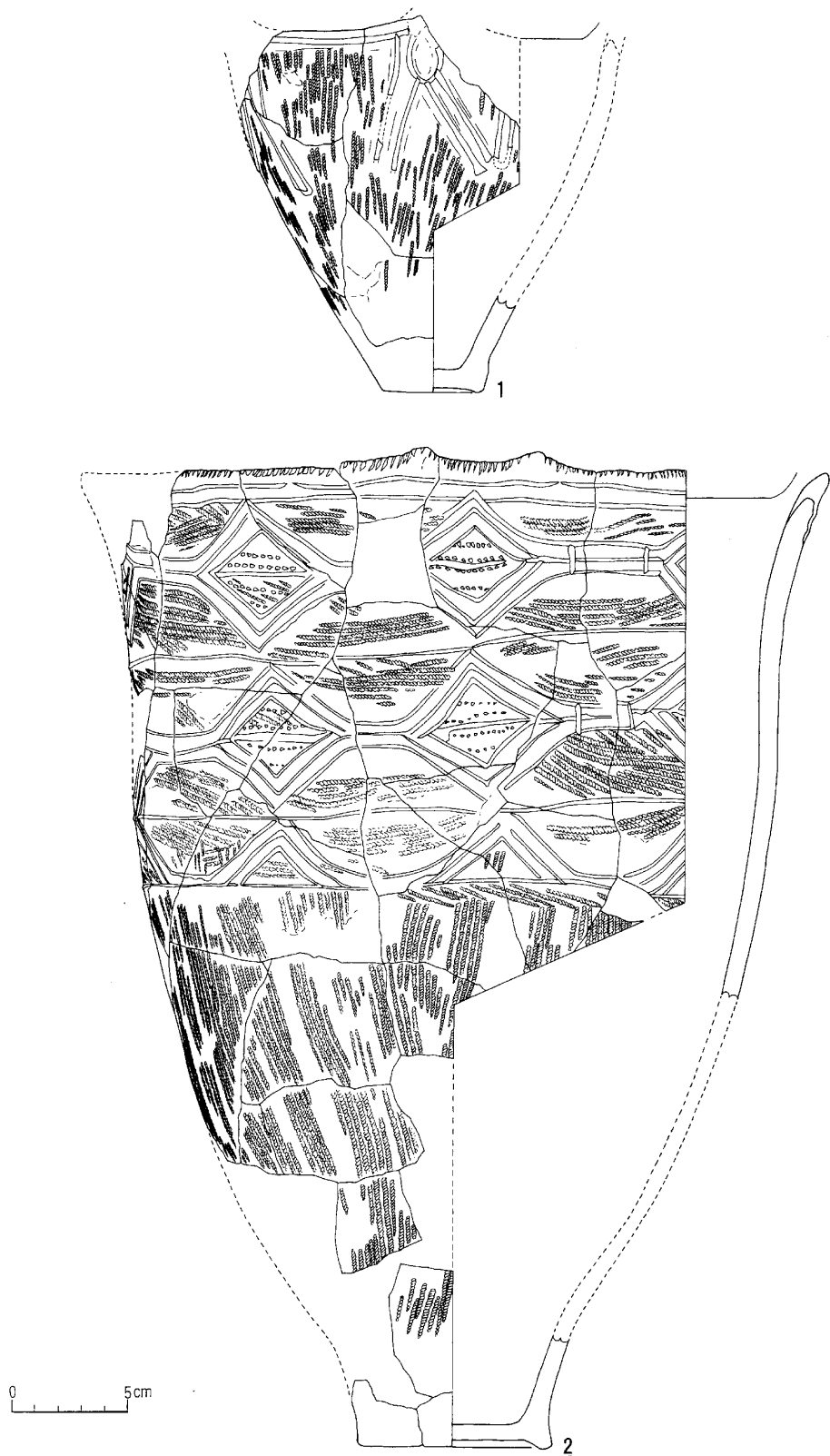
第84図-1は口径、器高とも約17cm。4個の小突起から隆帯が垂下し、底部から口縁部にかけて大きく開いた中型鉢形土器。続縄文宇津内IIb式。2は北壁近くの床面から出土した。口径約32cm、胴下部と底部は僅かに接合しないものの器高は約42cmの特大土器である。口唇部に2個1対の小突起を4個もつ。胴上部の文様は菱形状の微隆起帯をもち、胴下部は縦走縄文を施した続縄文後北C₁式である。

第85図-1は床面から約30cm上部の黒褐色砂層内から出土した口径約31cm、器高約44cmの特大土器。口縁下部に2条の横走る擬縄隆帯をもち、胴部は三角状、楕円状の帯縄文間を施した後北C₂・D式。2は口径約9cm、器高約6cmの注口土器。後北C₂・D式。3は続縄文後北C₁式。

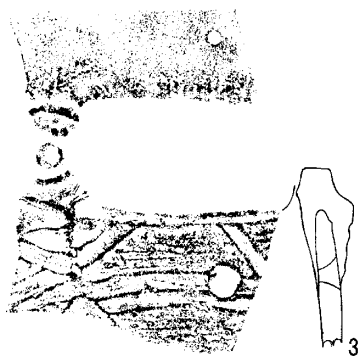
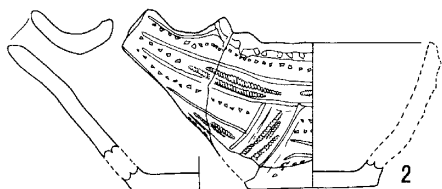
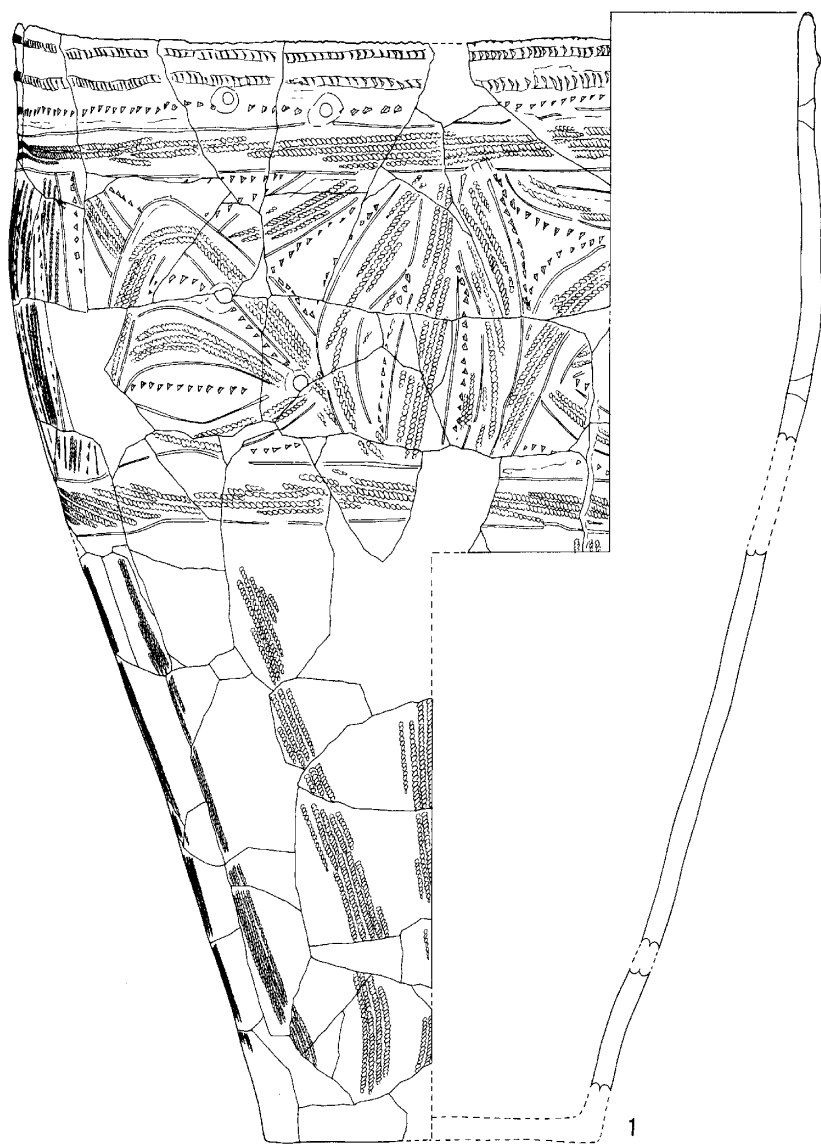
第86図は全て埋土出土である。1は口径約17.5cm、器高約27cmの中型鉢形土器。小突起下部を起点に弧線状の隆帯が連結した宇津内IIb式。2～4も宇津内IIb式。5は宇津内IIa式。6は無文の口縁部が外反する。興津式相当であろう。7は縄線文が垂下し、縄端圧痕文をもつ。8は口唇部に刻みをもち、口縁部が緩く開く。7・8は続縄文初頭であろう。9～12は太目の



第83図 172号竪穴、集石10、ピット1352、1352a、1352b、1352c平面図

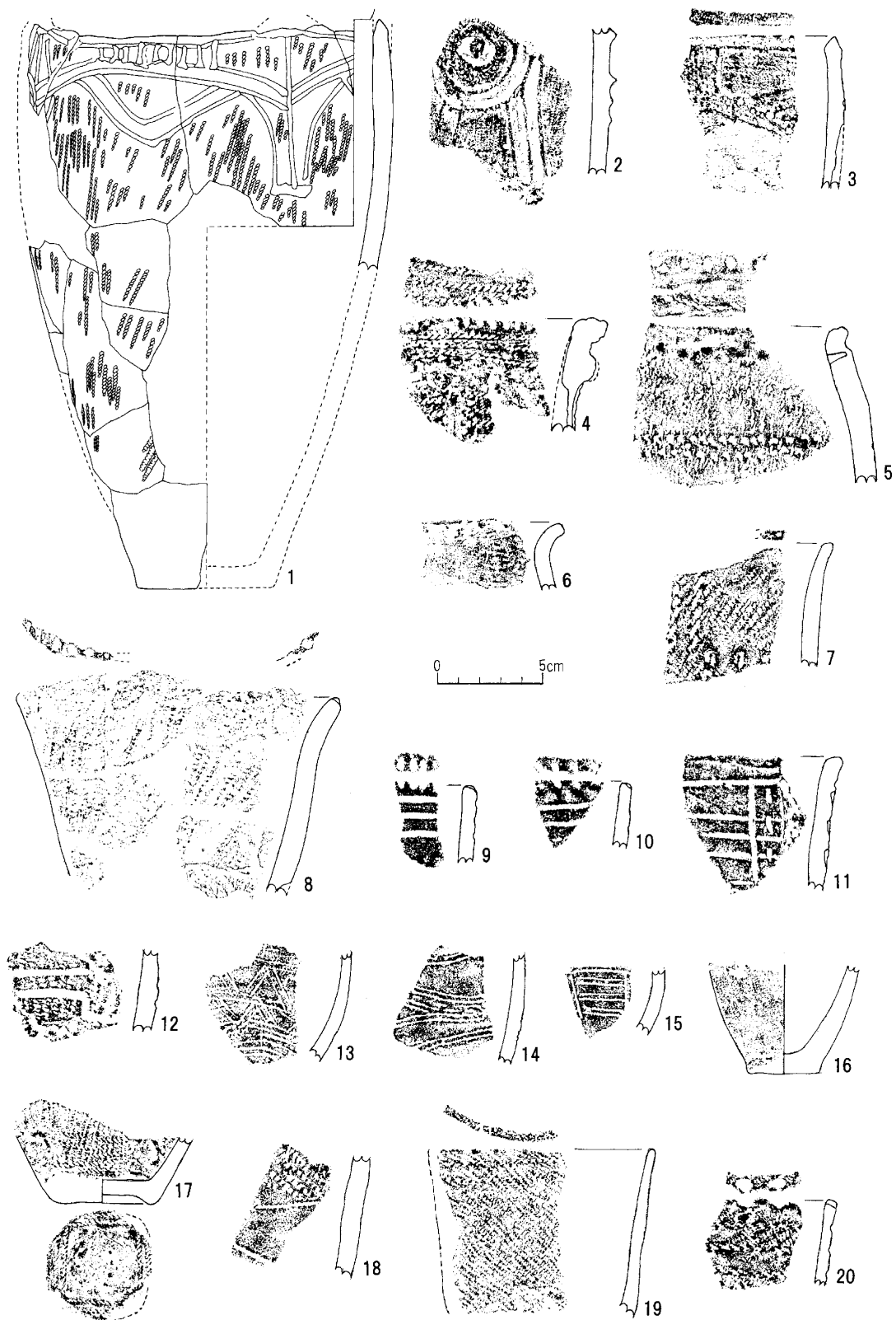


第84图 172号竖穴床面(1·2)出土土器

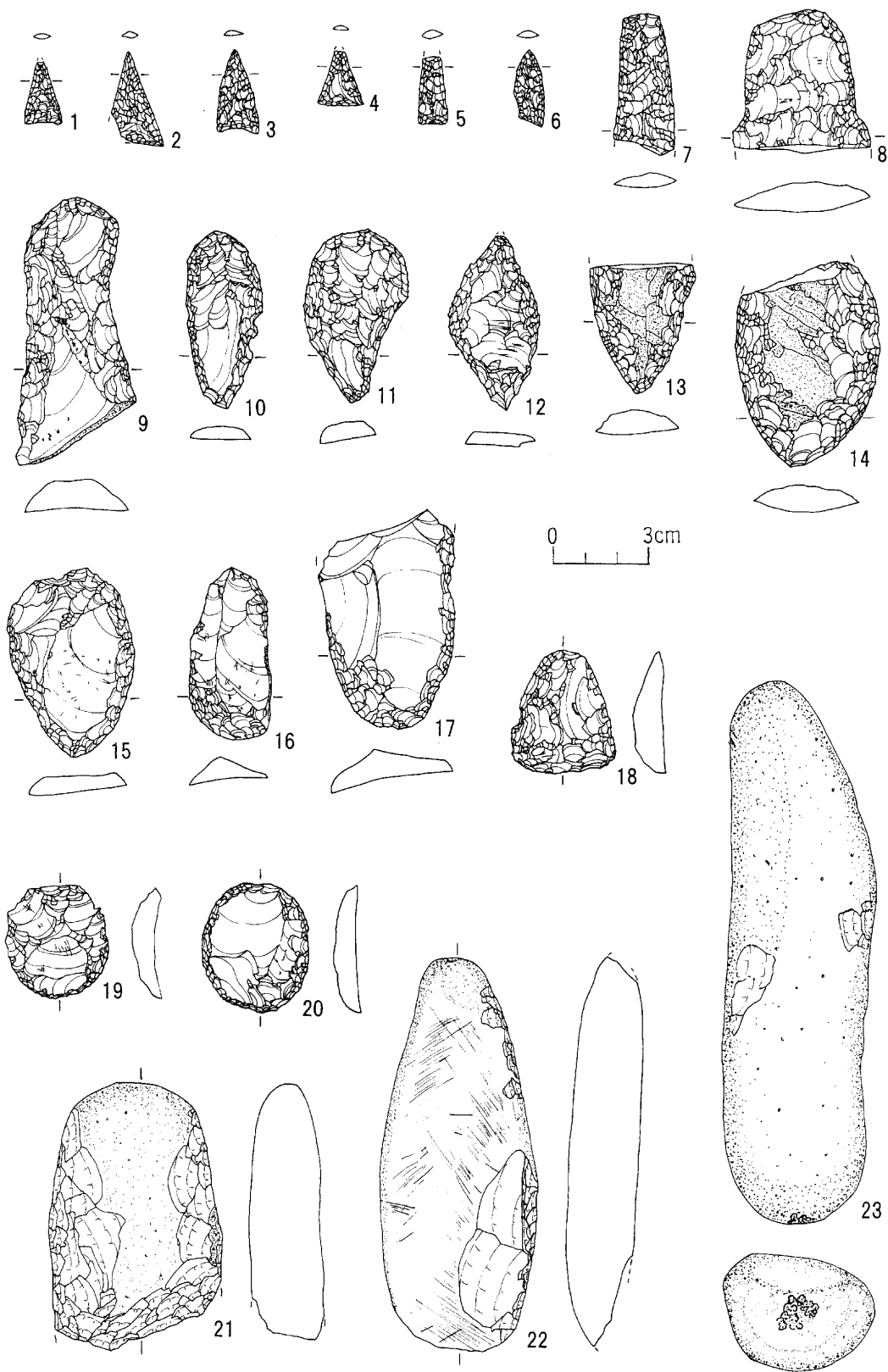


0 5cm

第85圖 172号竖穴埋土(1~3)出土土器



第86图 172号竖穴埋土(1~20)出土土器



第87图 172号竖穴埋土(1~23)出土石器

沈線文を施す。フシココタン下層式相当であろう。13～15は半載状施文具による細目の沈線文を施す。続縄文初頭であろう。16・17は続縄文の底部。18～20は斜位の縄文を地文に18が沈線文、19・20は縄線文が施されたもので縄文晩期中葉と思われる。

石器は全て埋土出土である。第87図-1～6は無茎石鏃。7・8は両面加工ナイフ。9～15は削器。12～15は下端部が尖鋭化する。16～20は搔器。16・17は縦長剥片の端部に急斜な刃部をもつ。21の刃部は欠失するが、両側縁部が加工されており石斧と思われる。22は粗い加工を加え刃部とした石斧。上部側の両側縁が敲打調整され、一部に赤色顔料が付着する。23はたたき石。17は頁岩製、21・23は安山岩製、22は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

本堅穴の時期は床面出土土器から続縄文後北C₁式である。 (武田 修)

集 石 10

遺 構 (第83図)

本集石は172号堅穴の床面を切り込んで構築されている。径約0.65m、深さ約20cmの不整円形を呈する。礫は最小で約10cm、最大で約20cmの円礫であり、最上部から出土するものの底面には達していない。火熱を受け赤変している。

集石は172号堅穴を切り込むことと円礫は床面より上部に位置するため、少なくとも続縄文後北C₁式より新しいと判断される。 (武田 修)

172a号 竪 穴

遺 構 (第88図、図版23-2)

本竪穴は172号竪穴の下層にある。前記したとおり172号竪穴の調査中に本竪穴の石囲み炉の一部を認めていた。規模は東西約5.20m、南北約6.30mの隅丸方形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは172号竪穴の床面から約20cm程度である。中央部に2基の石囲み炉をもつ。2基の距離は30cmであり、極めて接近している。石囲み炉は細長い角礫を用いるが全周せず、いずれも一部は欠失している。内部の赤化はそれほど認められず、骨粉混じりの黄褐色土が堆積している。

明瞭な支柱穴は不明であるが、南壁と東壁の中央部に位置する径約20~27cm、深さ約11~15cmは可能性がある。壁柱穴は径約8~10cm、深さ約7~12。補助柱は壁柱穴よりやや内側にある径約13~15cm、深さ約15cmと思われる。

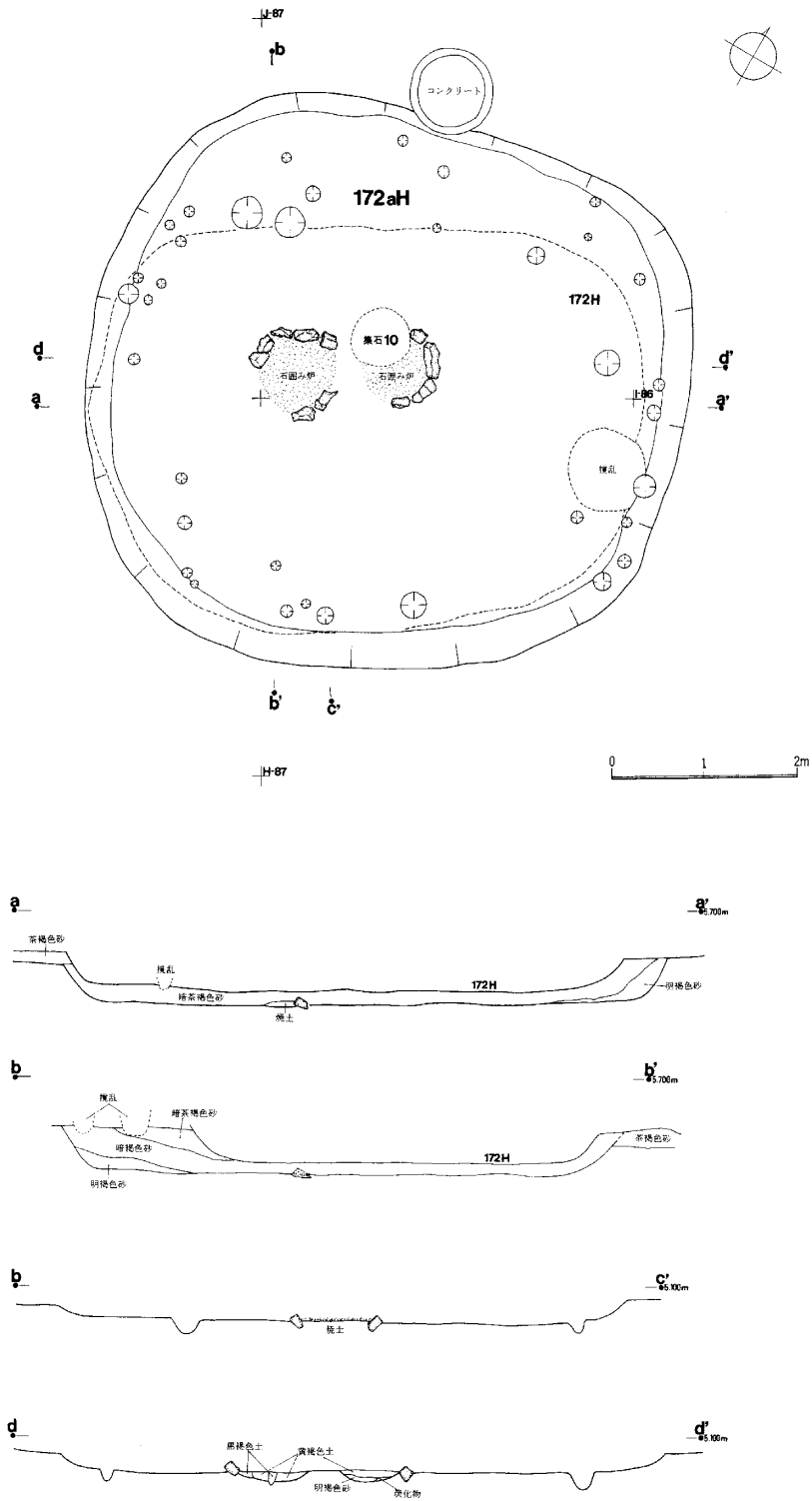
遺 物 (第89図、第90図、図版25-1・2)

第89図-1は172号竪穴の炉下にあたる床面から出土した。口径約12cm、器高約14.5cmの中型鉢形土器。2個1対の大突起をもち、文様は同心円文をもつ。続縄文字津内Ⅱb式である。2~9は埋土出土である。2は口縁部に4条の縄線文をもち、2個1対の小突起から隆帯が垂下した、中型鉢形土器。底部は明瞭な揚げ底となり、刺突文が円形に施された宇津内Ⅱb式。3は後北C₂・D式の杯形土器。4~6は宇津内Ⅱb式。7は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。8は横走沈線文下に刺突文が連続する。続縄文初頭であろう。9は横走沈線文が施される。フシココタン下層式相当であろう。

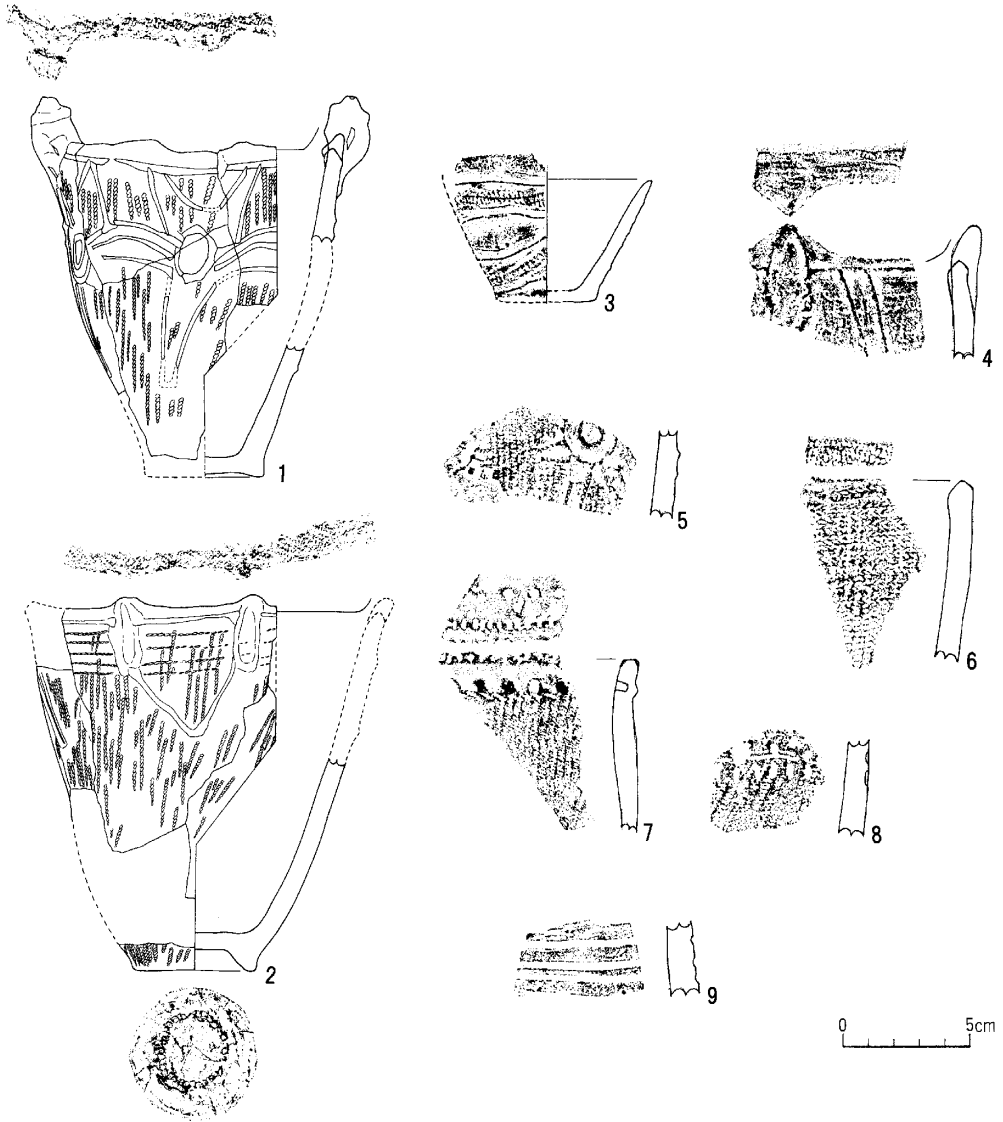
石器は第90図-1が床面出土である。扁平な円礫の中央部が窪み、裏面は研磨されている。両面とも煤が付着している。2~6は埋土出土。2は無茎石鏃。3は削器。4~6は両刃磨製石斧。4は両側縁部が敲打調整される。5は断面が丸みをもち、表裏面とも丁寧な敲打調整された磨製石斧。6は石囲み炉出土である。2・3は黒曜石製、4は緑色泥岩製、5・6は泥岩製である。

小 括

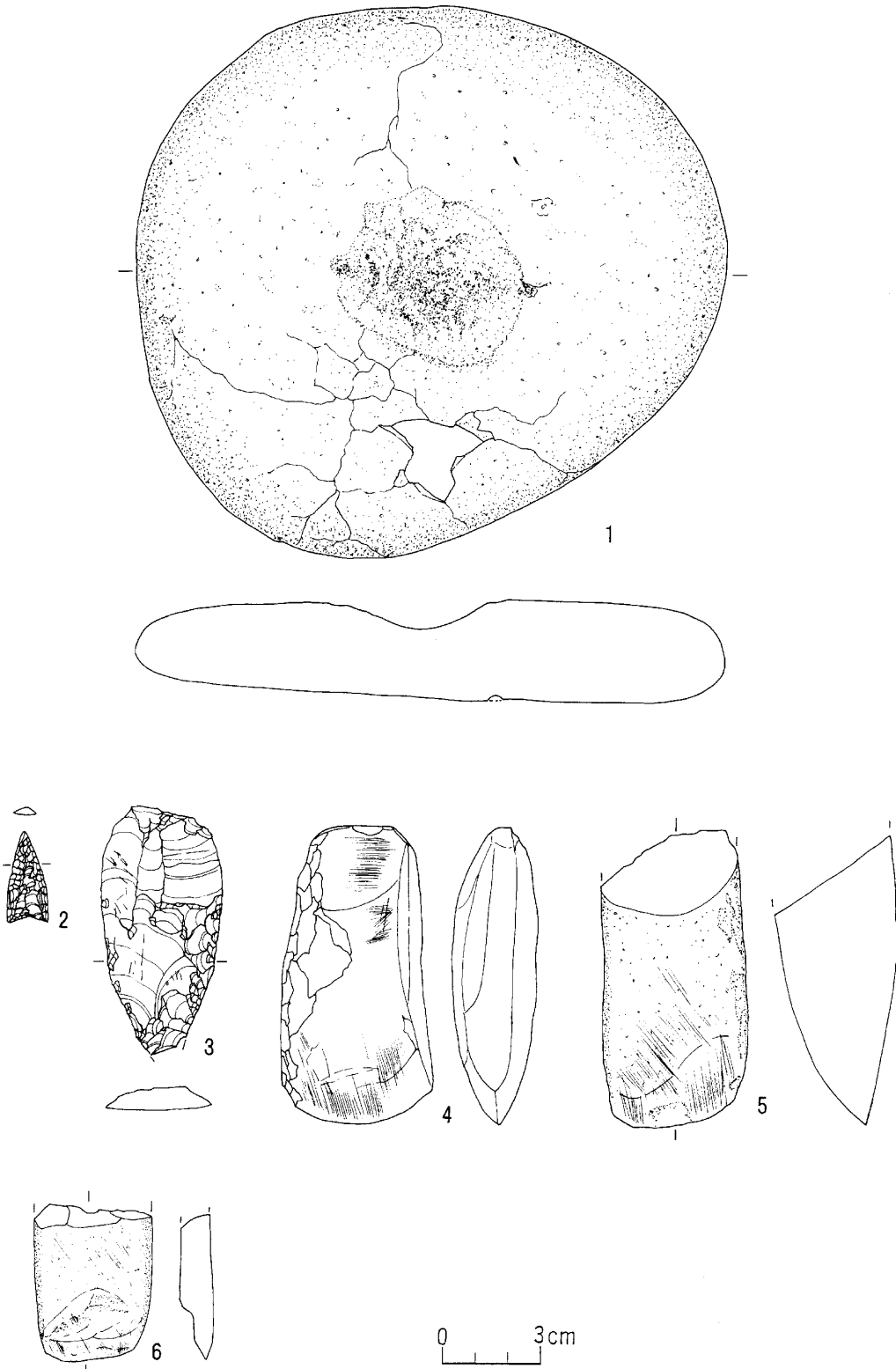
本竪穴は2基の石囲み炉をもつ。床面出土の土器は続縄文字津内Ⅱb式である。したがって、続縄文後北C₁式の172号竪穴とは新旧関係があり、本竪穴が古い。 (武田 修)



第88図 172a号竪穴平面図



第89图 172a号竖穴床面(1)・埋土(2~9)出土土器



第90図 172a号竪穴床面(1)・埋土(2~6)出土石器

172b号 竪穴

遺 構 (第91図)

本竪穴はⅡ層茶褐色砂の上面で確認できず、各グリッドを約10cm掘り下げた段階で発見した。東壁側は擦文期の166号竪穴と続縄文字津内Ⅱb式の166a号竪穴に切られ、下面に172c号、172f号竪穴がある。南壁と東・西壁の一部は検出できたが、北壁の大部分は攪乱を受けており一部分しか確認できなかつた。規模は短軸約4.38m、長軸約5.20mの不整形方形を呈すると思われる。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約15cmである。

床面中央部に角礫を主体とした石囲み炉をもつ。石囲み炉は全周せず、東側が欠失する。内部はあまり焼けていない。

支柱穴は東南壁隅の直径約30cm、深さ約18cmが相当するが、他に認められない。壁柱穴も支柱穴に近接して径約12～15cm、深さ約10～13cmのものが2本だけである。

遺 物 (第92図, 第93図)

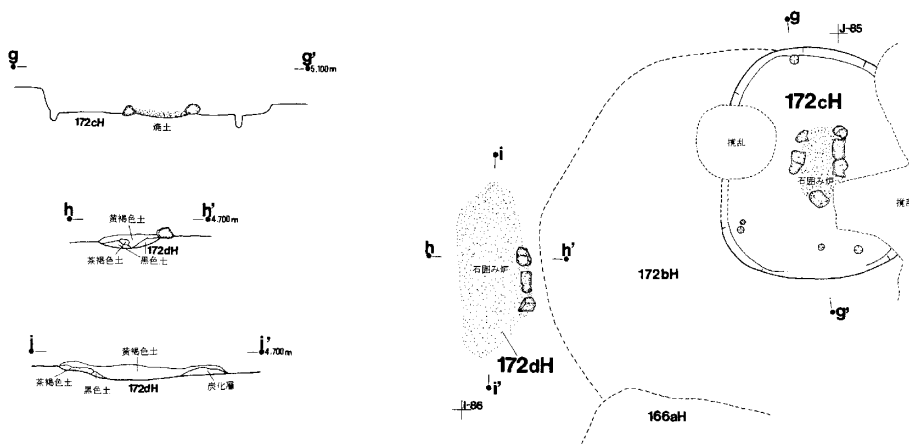
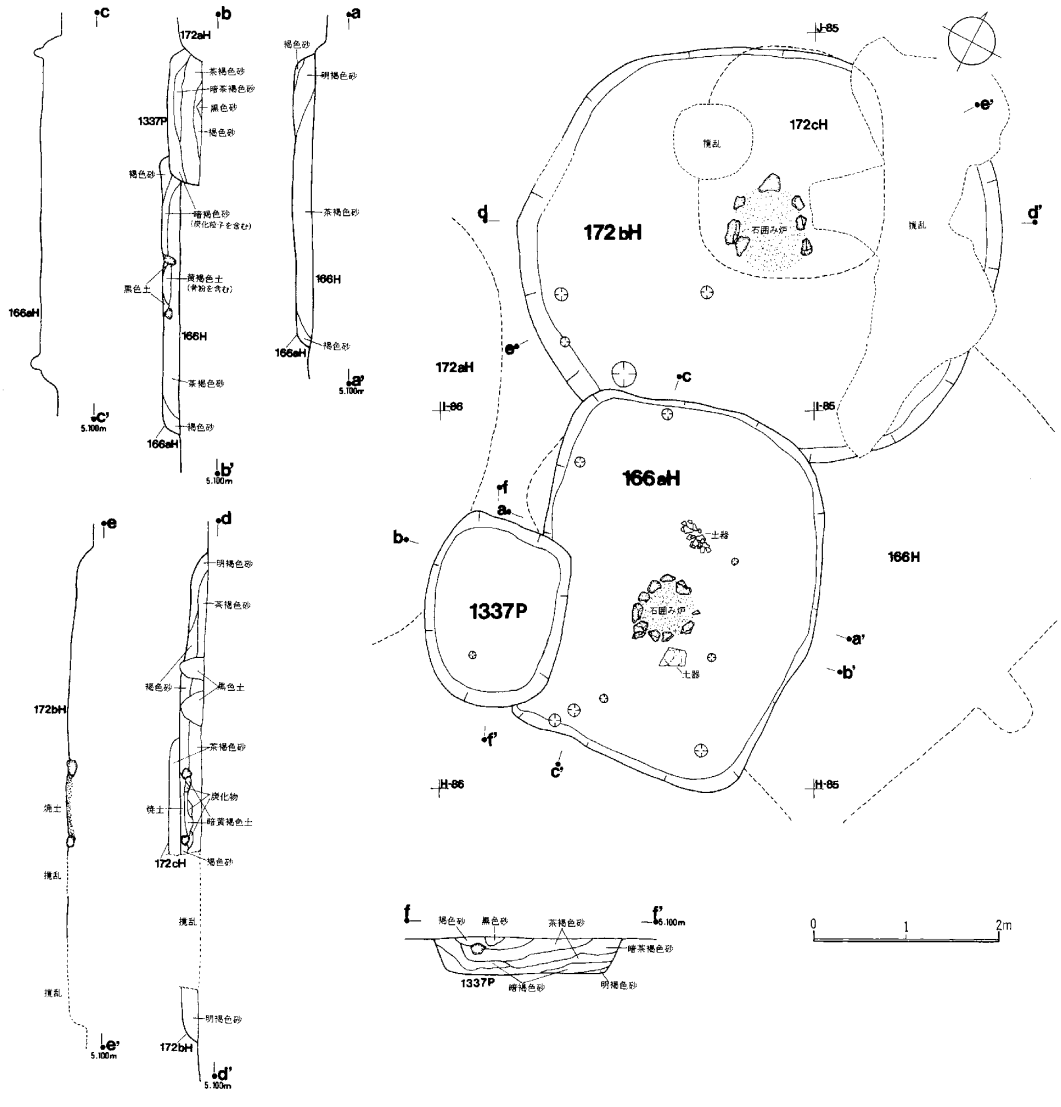
第92図-1は床面出土である。胴上部が欠失するが、かろうじて隆帯が残存し、底部に木葉痕状の沈線文がみられる。続縄文字津内系であろう。2～17は埋土出土。2・3は宇津内Ⅱb式。4～6は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。7～9も基本的に突瘤文をもつが、7・8は横走沈線文、9は口唇部に鋭い刻みをもつものの、無文の口縁部には縄線文が施されるもので宇津内Ⅱa式より古手に位置づけられる。10～13は口縁直下に縄端圧痕文が施され、13は強く外反した無文の口縁部である。これらは興津式相当であろう。14・15は縄線文をもち、14は下部に刺突文がみられる。16・17は宇津内系と思われる続縄文の底部。

石器は第93図-1～4が床面出土である。1は片面加工、2は両面加工ナイフ。3は凹石。4は表裏面が研磨され、表面は窪み痕、裏面は叩き痕がみられる。5～12は埋土出土である。5は無茎石鏃。6は両面加工ナイフ。7・8は削器。9・10は自然礫を素材としている。いずれも刃部が欠失するものの、かろうじて研磨部が認められる磨製石斧。11は凹石。12は断面が三角形状であり、その頂部に叩き痕が残る。また、平坦面は研磨され、変色している。3・9・10・12は泥岩製、4・11は砂岩製であり、他は黒曜石製である。

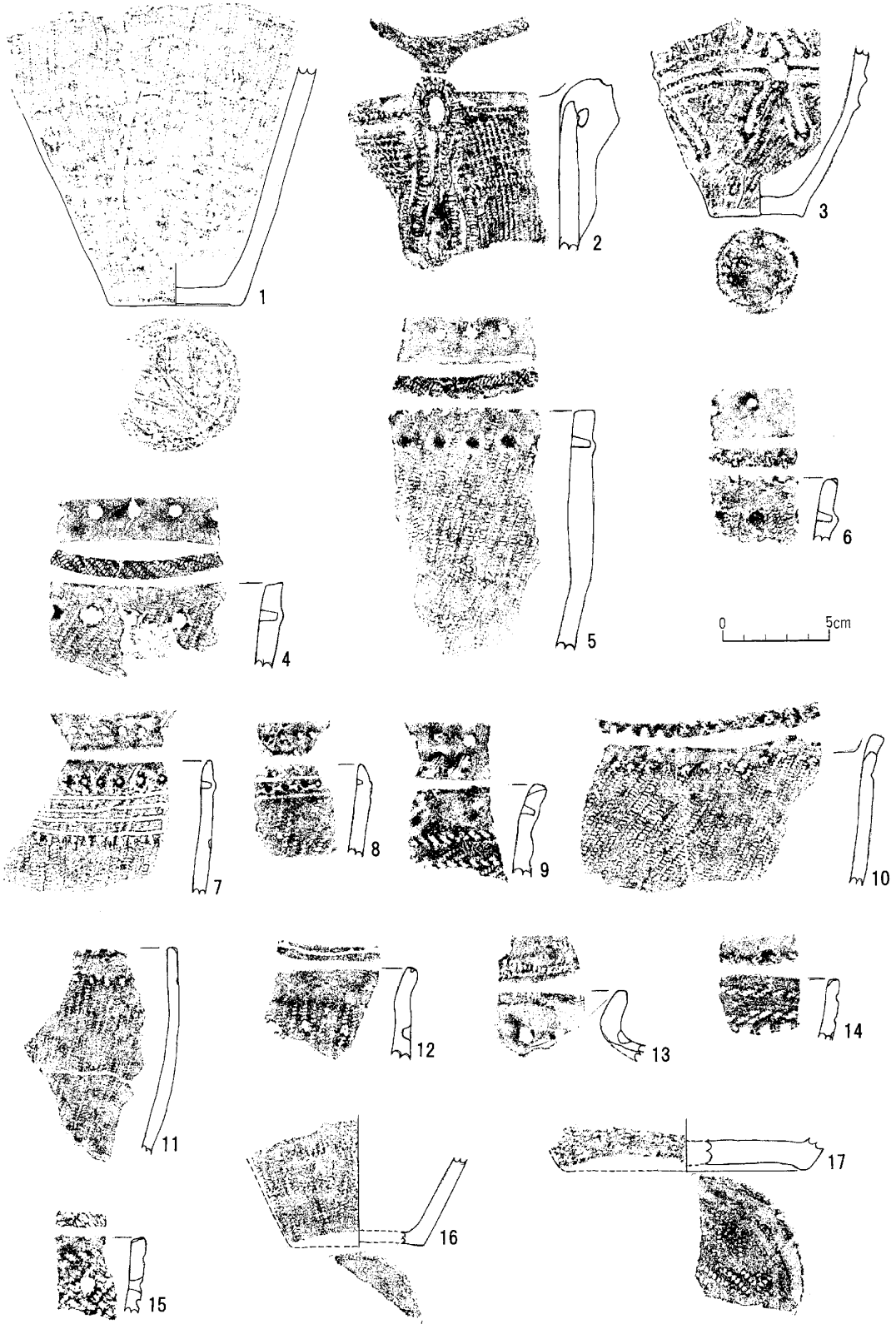
小 括

本竪穴は攪乱や各時期の竪穴に切られているため遺存は悪い。時期は続縄文字津内系と思われる。

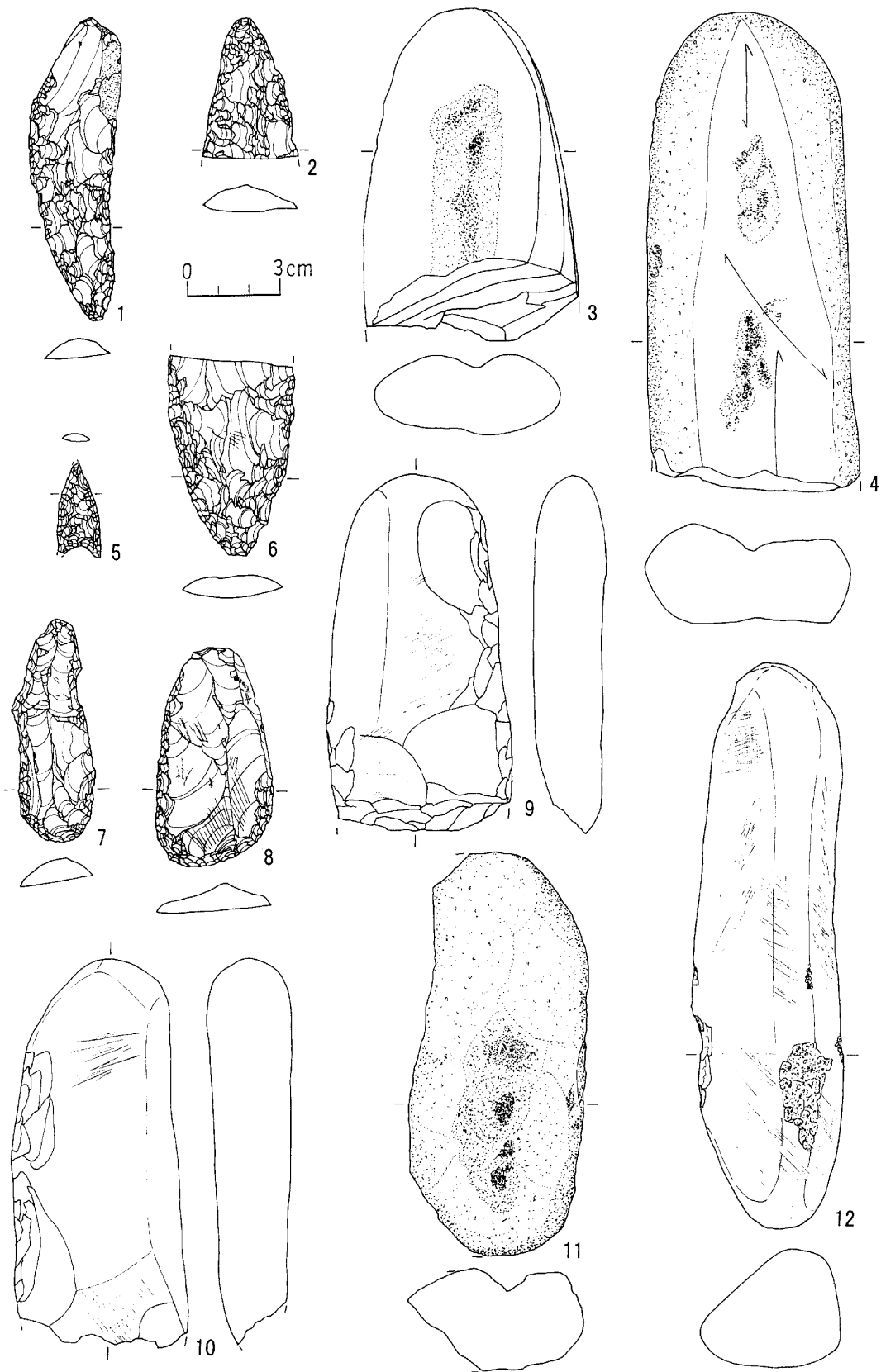
(武田 修)



第91図 166a号竪穴、172b号竪穴、172c号竪穴、172d号竪穴、ピット1337平面図



第92图 172b号竖穴床面(1)・埋土(2~17)出土土器



第93图 172b号竖穴床面(1~4)·埋土(5~12)出土石器

172c号 竪 穴

遺 構 (第91図)

本竪穴は172b号竪穴の下面に位置する。規模は東西約2.35m、南北約2.00mの方形を呈する。172b号竪穴の石囲み炉の検出時に本竪穴の石囲み炉の上面が確認できていたもので、壁高は172b号竪穴の床面から約10cmである。石囲み炉は中央部にあり長さ約0.80m、幅約0.60mである。炉は角礫を用い構築されているが、西側部が抜けている。内部は僅かに赤化する程度である。

主柱穴はみられず、径約8～10cm、深さ約8～12cmの壁柱穴が北壁を除き数本みられる。

遺 物 (第94図, 図版25-3)

第94図-1は石囲み炉に接した床面から出土した宇津内Ⅱa式。2～5は埋土出土。2・3は宇津内Ⅱa式。4は突瘤文下部に沈線文と縄端圧痕文をもつもので宇津内Ⅱa式より古手であろう。5は宇津内Ⅱb式。

小 括

本竪穴は小型の方形住居である。時期は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱb式と考えられる。切り合い状況から判断すると172b号竪穴と時間的に近接しているのであろう。(武田 修)

172d号 竪 穴

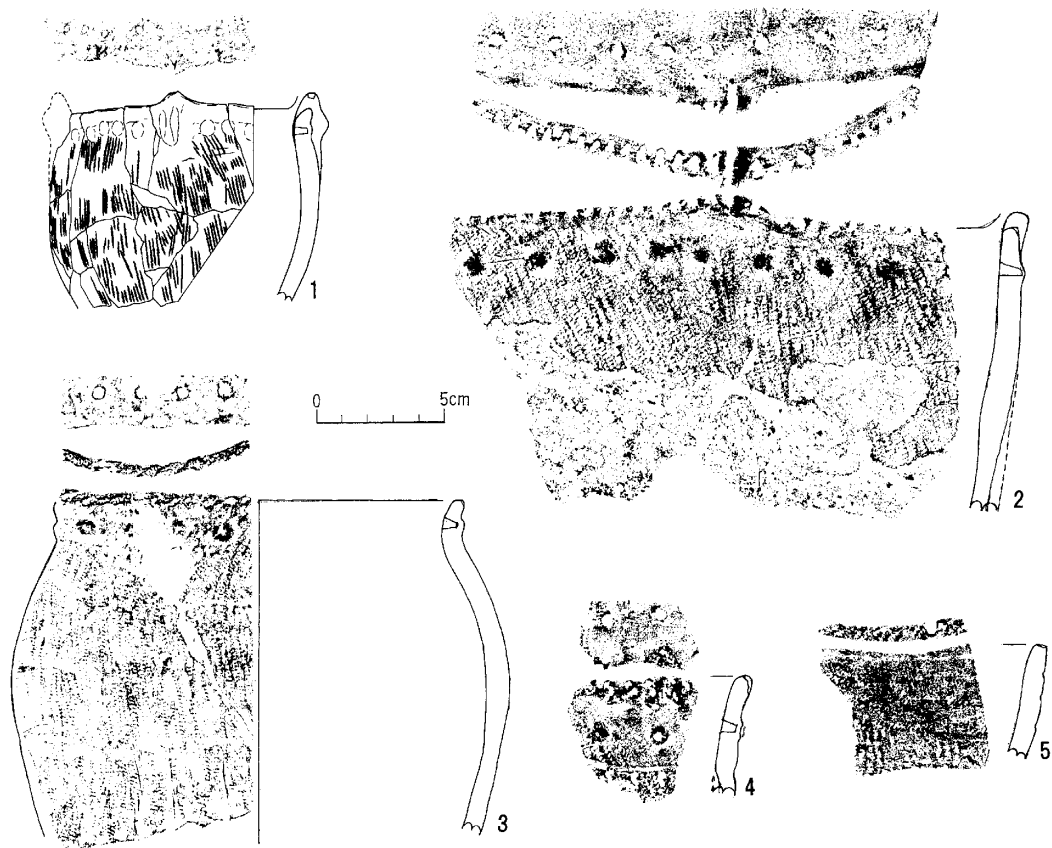
遺 構 (第91図)

本竪穴は172f号竪穴の調査中に検出した。石囲み炉をもつため竪穴を想定して調査を進めたが、明確な壁の立ち上がりは認められなかった。炉跡は長さ約1.80m、幅約0.72mを測る比較的大型のもので、北壁側に3点の角礫がみられるため石囲み炉の可能性はある。

172f号竪穴を利用して構築されたものであるが、この炉跡の検出面ではすでに172f号竪穴の炭化材も露呈しており、一部を切り、または直上にあった。172f号竪穴の地床炉とは一部で接している。床面とのレベル差も10cm内外である。床面も不安定であり、竪穴というよりは172f号竪穴の廃絶後、ただちに構築された屋外炉跡など生活面の可能性が高いかもしれない。

石囲み炉の内部は微細な骨粉を含む黄褐色土がみられるものの、赤化は少ない。

(武田 修)



第94図 172c 号竪穴床面(1)・埋土(2~5)出土土器

172e号 竪穴

遺 構 (第95図, 図版26, 口絵2-1)

本竪穴はI83~85, J83~85グリッドにまたがって位置する。表土を剥土しても明瞭な落ち込みは確認できなかったもので、172f号竪穴の調査中に検出した。埋土の中央部には10~25cmの角礫を含む明褐色砂が堆積している。この明褐色砂は本遺跡のⅢ層下部にある粒子の粗い地山と同質のものである。通常、竪穴には各種の腐食土や砂質土がみられるが、本竪穴では腐食土の堆積がなく地山と同質の明褐色砂がみられる。このことから明褐色砂は竪穴構築時の廃土を屋根に被せたものと考えられる。

規模は東西約6.00m、南北約6.00mの方形を呈し、北側中央部からやや東寄りに長さ約4.60mの舌状の張り出しをもつ。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30~60cmである。

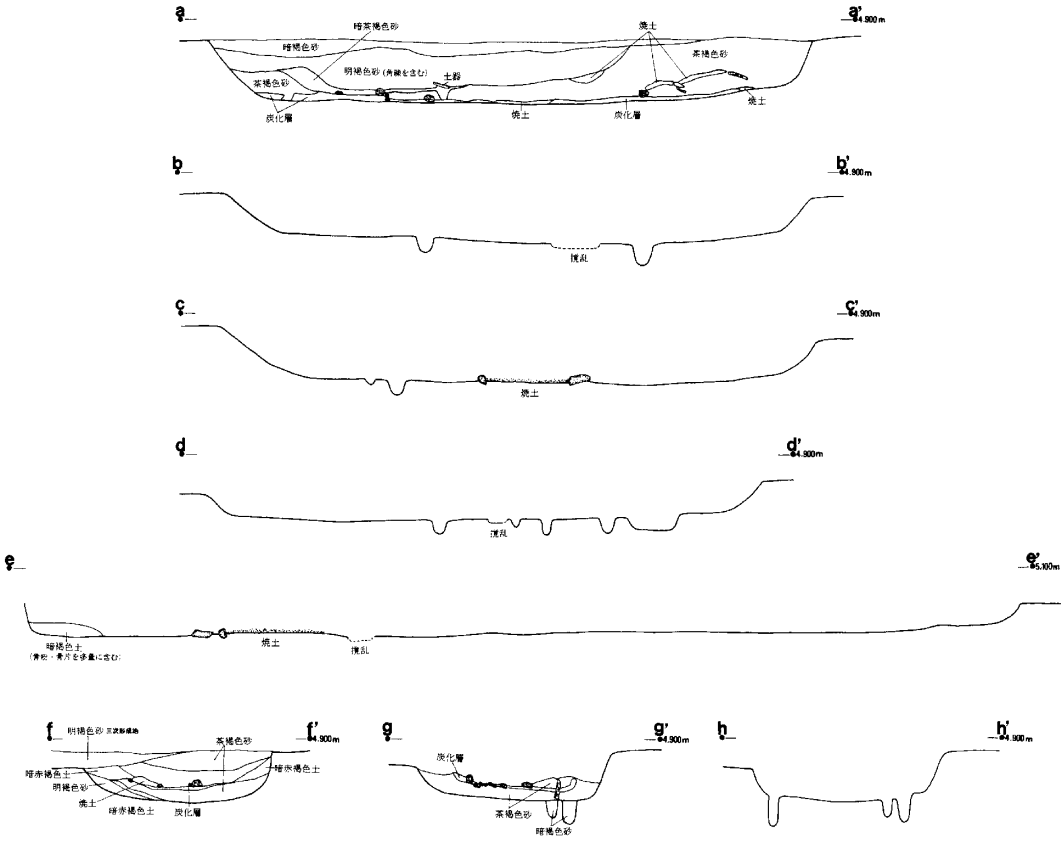
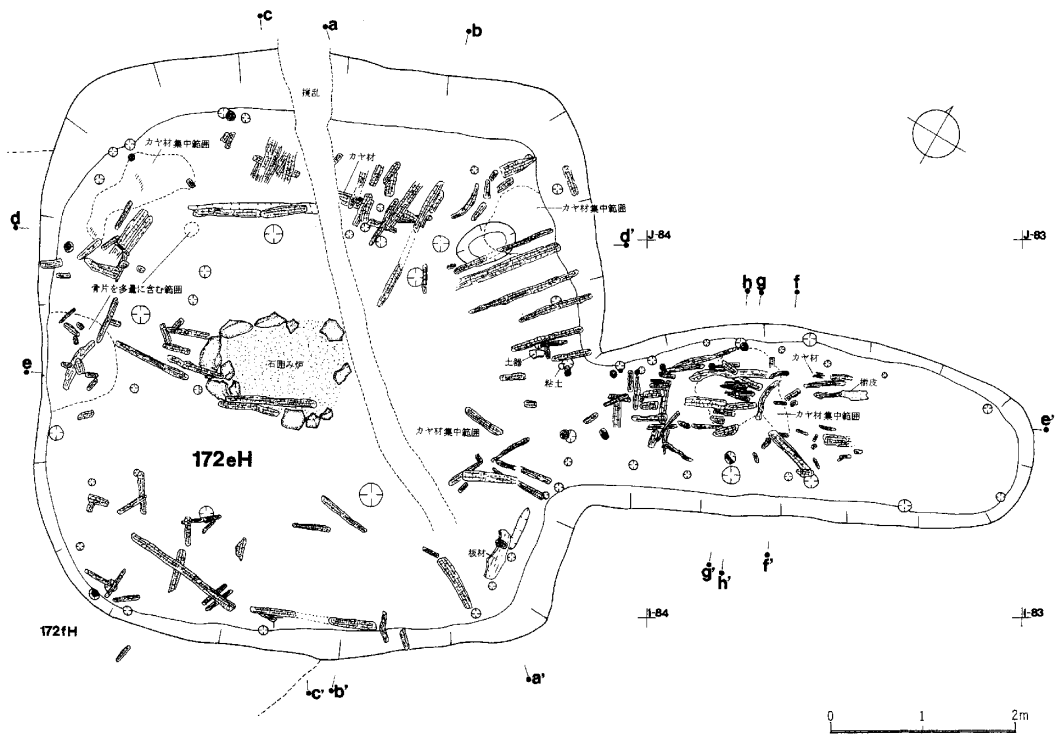
張り出し部は東壁側が直線的であるが、西壁側は弧状を呈し、基部は狭まる。最大幅は約1.80mである。壁は緩く立ち上がり、床の中央部は僅かに丸みを呈し、張り出し部の突端から基部にかけて傾斜する。舌状部の壁柱穴は東壁と西壁のそれぞれは最も狭い箇所で約15cm、広い箇所で約0.90~1m、平均約30~50cmの等間隔の対角に配置され、一部では炭化材が直立した状態で検出された。壁柱穴の大部分は10cm内外、深さ約5~20cmであるが、張り出し部のほぼ中間に位置するものは径約15~20cm、深さ約25~30cmであり大型の柱材が使用されているので主柱の可能性がある。

張り出し部の炭化材は細いもので約3cm、太いもので約10cmあり、張り出し部と並行して縦方向に配列されている。図示するとおり隙間がないほど密着した状態である。横木は張り出し部で4箇所認められるが、この縦方向の炭化材は横木に載る状態で検出されている。また、茅材は縦方向に配置され、縦方向に配列された炭化材とほぼ同一レベルにあるか、一部はその下面にある。部分的に樹皮が床に密着してみられ、遺存体の痕跡を思わせる粘性をもった暗赤褐色土の堆積も確認している。これらは下地材と考えられる。

内部は中央部よりやや南壁側に寄って石囲み炉が構築されている。石囲み炉は長さ約1.60m、幅約1mあり扁平な角礫を比較的多用している。内部は良く赤化している。

主柱穴は径約19~25cm、深さ約12~21cmである。石囲み炉の周囲に6本配置されているが、張り出し部に面する北側には認められない。壁柱穴は径約8~15cm、深さ約5~18cmであり、北壁と南壁側が顕著であるが、東壁と西壁は少ない。

内部の炭化材は各壁側にみられるが、中でも北壁から西壁にかけて多量に検出された。北壁と西壁では内側に向かって放射状に配列されている。これらの多くは垂木材と考えられるもので径約5~10cmである。北壁、西壁の垂木の上には茅材が認められた。北壁側では垂木の間隔が狭い箇所約10cm、広い箇所約25cmである。これに対して西壁側では垂木が密着した状態であり、梁材と思われる横木に載っている。この箇所では垂木が折れたため、茅が垂直に立ち



第95図 172e号竖穴平面図

上がっていた。東北壁隅では幅・深さとも約10cmの周溝があり、その上部から板材がやや内側に傾斜した状態でみられた。また、茅が垂木と垂木に挟まれたサンドイッチ状の箇所もみられる。

張り出し部の炭化材は床面から十数cm上部から検出されているが、内部の垂木材は床面に密着しており、崩落過程の時間差を顕わしているように思われる。

西壁の床面には残存部で長さ約1.30m、幅約12cm、深さ約8cmの溝が西壁と並行しており、これに沿って1本の炭化材がみられた。何らかの仕切りが考えられる。

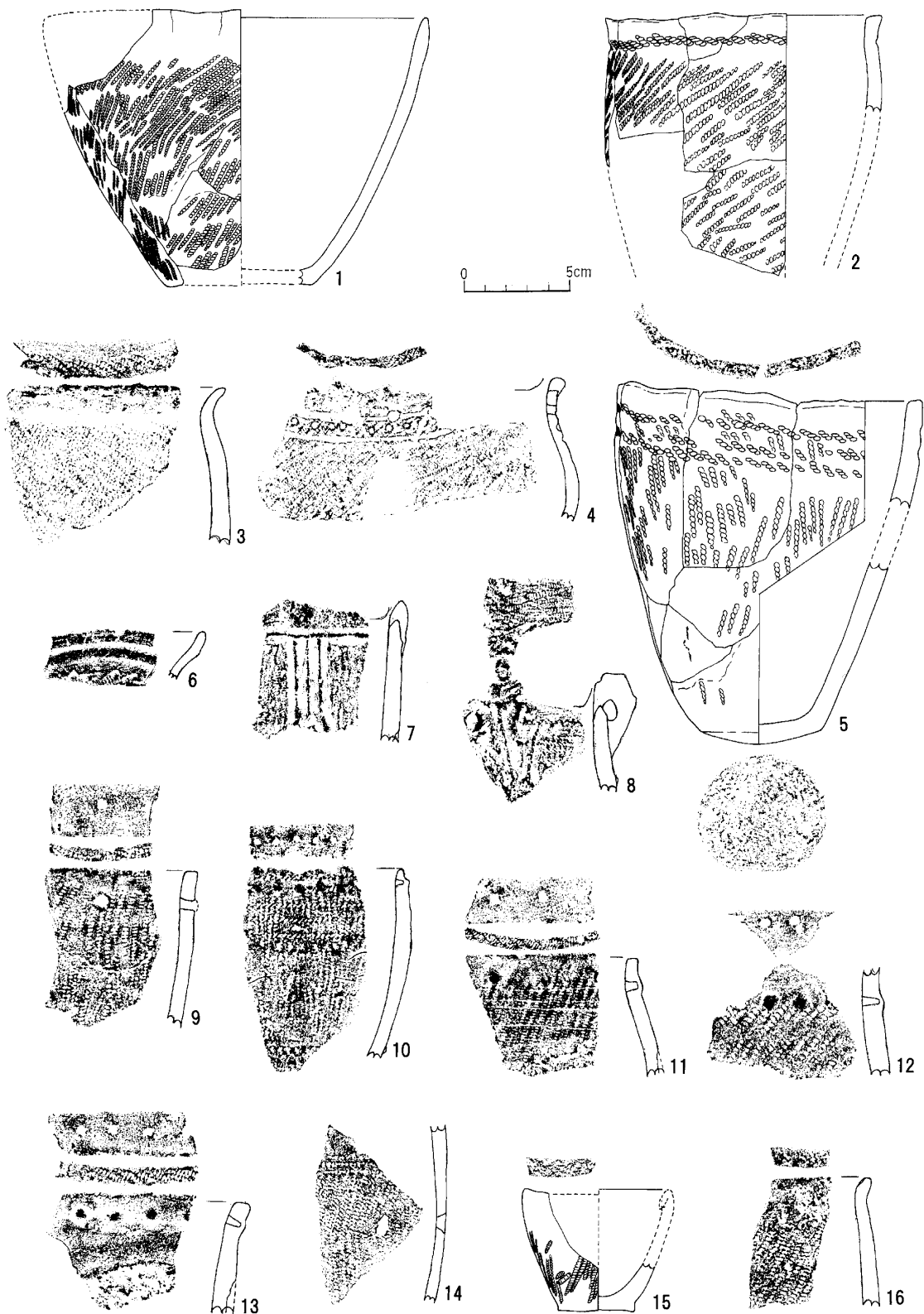
南壁中央部には骨粉を含む層厚約14cmの黄褐色土が堆積していた。北西壁側の床面にある長軸約0.65m、短軸約0.40m、深さ約19cmのピットは茅材、垂木材が上部を覆っていたので本竪穴に伴うものである。

遺物 (第96図, 第97図, 第98図, 図版27)

第96図-1~4は床面出土である。1は口径約18cm、器高約13cmの小型鉢形土器。口縁部は無文帯をなし、器面は斜行縄文が施される。内面は横位に調整されている。2は口径約13cmの小型鉢形土器。口唇部は平縁である。僅かに外反する口縁部は無文であり、頸部に縄線文が施される。器面は斜行縄文である。3も外反する口縁部は無文であり、器面は斜行縄文が施される。4は口唇部に山形小突起をもつ。口縁部は無文となり、2条の横走沈線文間に円形刺突文が連続する。胴部は膨らみをもち、斜行縄文が施される。5は床面のベンガラ上から出土したもので、本竪穴に伴うと判断される。口径約14cm、器高約16.5cmの小型鉢形土器。縦走縄文を地文に3条の縄線文をもつ。底部は丸底である。6~16は埋土出土。6は擦文土器。7・8は宇津内Ⅱb式。9~13は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式であり、11は細い横走沈線文、12は口縁部が幅広い無文となる。15は口径約7cm、器高約5.5cmの小型土器。内側の折り返し口縁部である。宇津内系であろう。16は口縁部が緩く外反し、口唇部に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭であろう。

第97図は埋土出土である。1は胴部が膨らむ壺形である。口縁部は欠失するが、太い縄線文が施され、下部に小突起が付される。2は波状の口唇部で、口縁部が幅狭い無文帯となり、斜行縄文が施される。3は平縁の口唇部である。4は横位と縦位の隆帯が連結し「工」字状となり、縄線文が施される。1~4は興津式相当であろう。5~10は太目の沈線文が主体である。5は弧線状、6は横長の菱形状であり、半載状、円形施文具による刺突文がみられる。7は斜位の沈線文、8~10は横位の沈線文が施される。5~10はフシココタン下層式相当であろう。11は土製品。表面と左側面のみ調整されるものの、他は亀裂が入る。

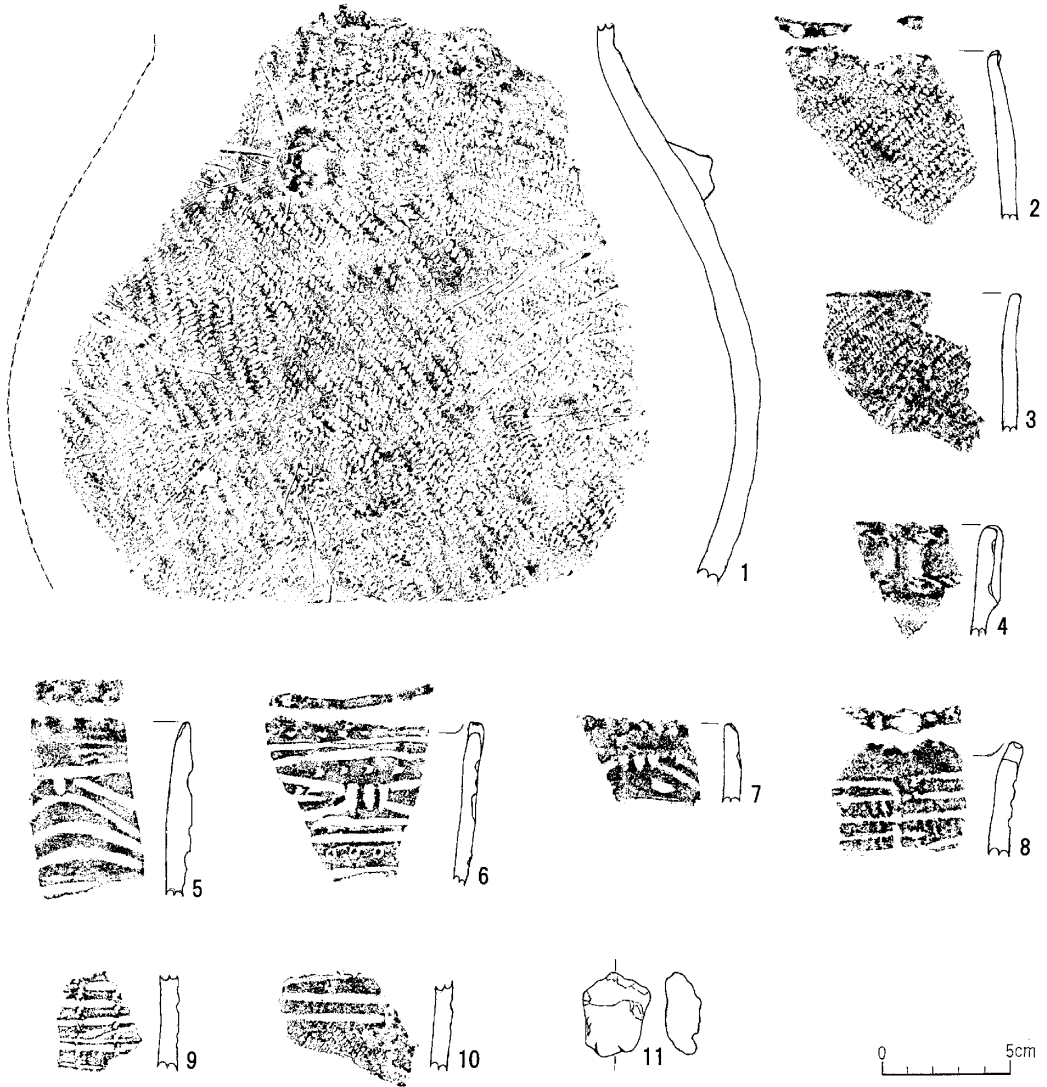
第98図-1~4は床面出土である。1は有茎石鏃。2は幅広い刃部、3は柄部が作出され、先端部が尖る両面加工ナイフ。4は削器。5~16は埋土出土。5は無茎石鏃。6は主要剥離面側に刃部をもつ削器。7・8は両面加工ナイフ。9・10は搔器。11~13は削器。14は片刃磨製石斧。15は琥珀製の平玉。両方向から穿孔している。16は長方形を呈した琥珀の原石。



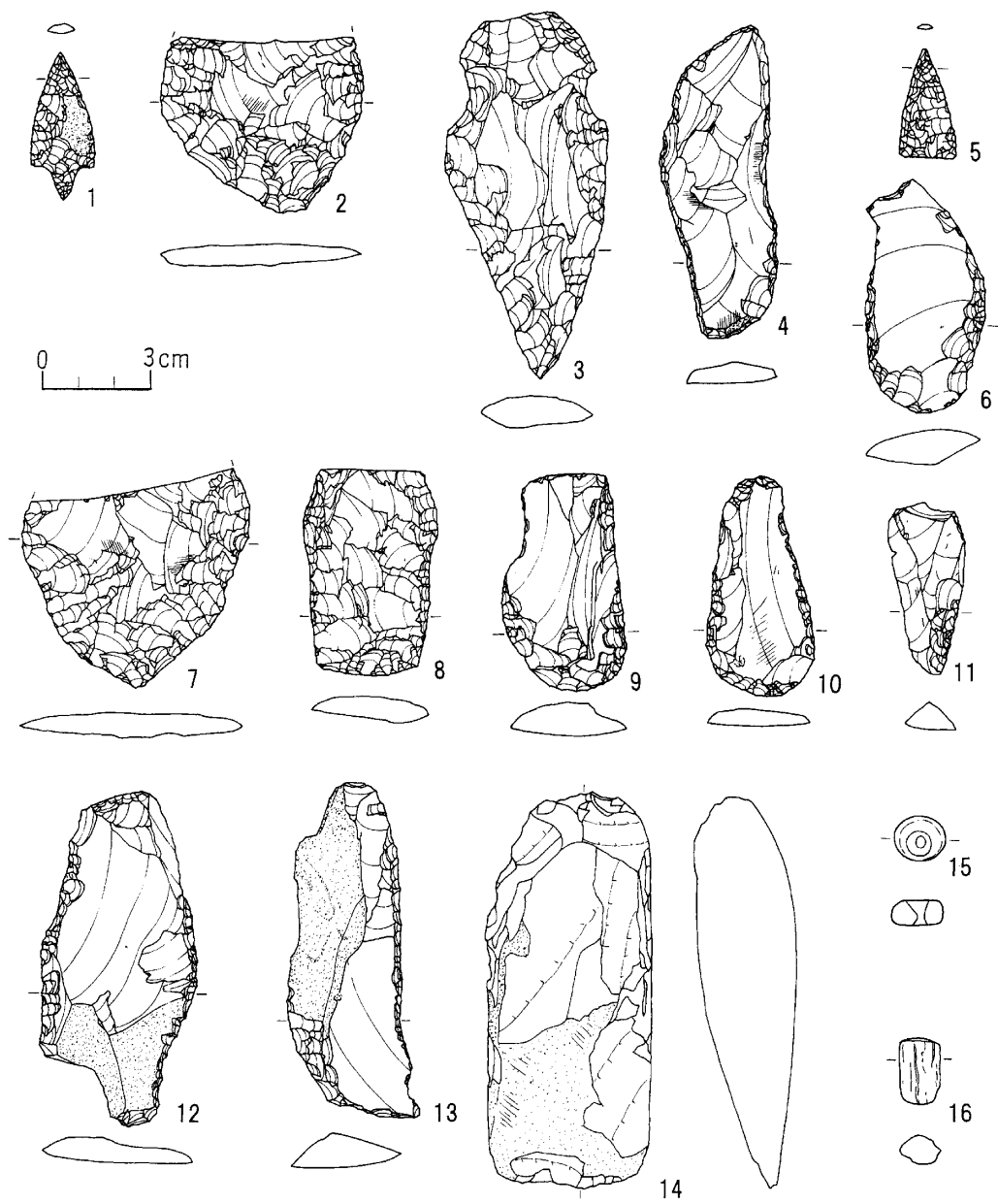
第96図 172e号竪穴床面(1~4)・ベンガラ上(5)・埋土(6~16)出土土器

小 括

本竪穴は舌状の張り出しをもつ続縄文初頭の焼失住居である。支柱穴、壁柱穴は計画的に配置され、下地に茅、樹皮を用い、垂木間に茅をサンドイッチ状に挟むなど、かなりしっかり構築されている。続縄文初頭の竪穴構造を解明する上で貴重な資料を提供した。(武田 修)



第97図 172e号竪穴埋土(1~11)出土土器・土製品



第98図 172e号竪穴床面(1~4)・埋土(5~16)出土石器・琥珀玉

172f号 竪穴

遺 構 (第99図, 図版28-1, 口絵2-2)

本竪穴の規模は短軸約6.80mである。北側の大部分は172e号竪穴に切られているため長軸は不明であるが、中央部に位置する炉跡から推測して約9.00m前後はあると思われる。壁はエレベーションラインb・b'に示すとおり、b'点のある東壁ではかなり緩く傾斜している。高さは西壁側が擦文期の163号竪穴、南壁側が172a号竪穴に切られるため約10cmと低いが、本来は同様の傾斜と思われる。東壁側は約50cmを測る。

床面に密着した炭化材は径約10cm内外が最も多く、大部分は内側に倒れ込む状態でみられる。これらは垂木材と思われるものでその間隔は約15~25cmほどであり、垂木が密着して並べられている箇所もある。西壁際では長さ約50cmの樹皮があり、垂木が径約25cmの太目の炭化材に載った状態もみられ、屋根材と思われる茅が所々に散見される。

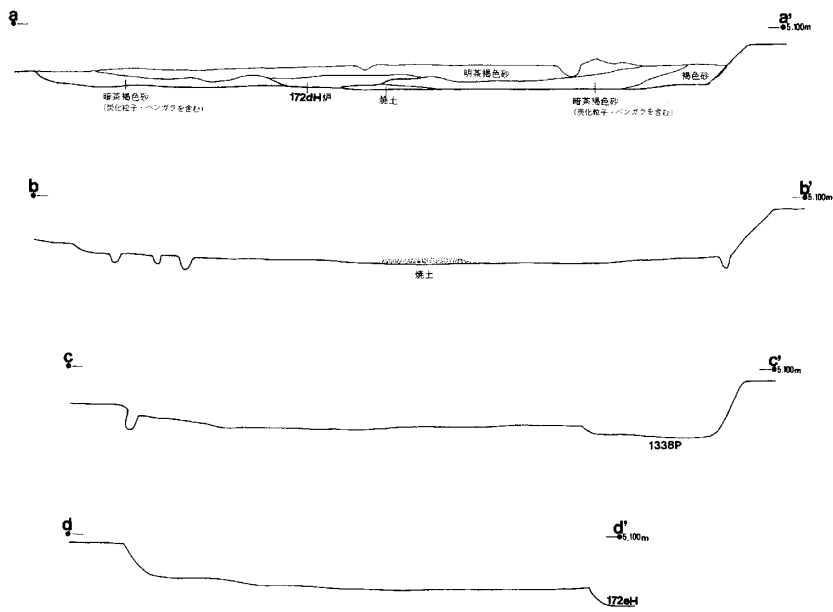
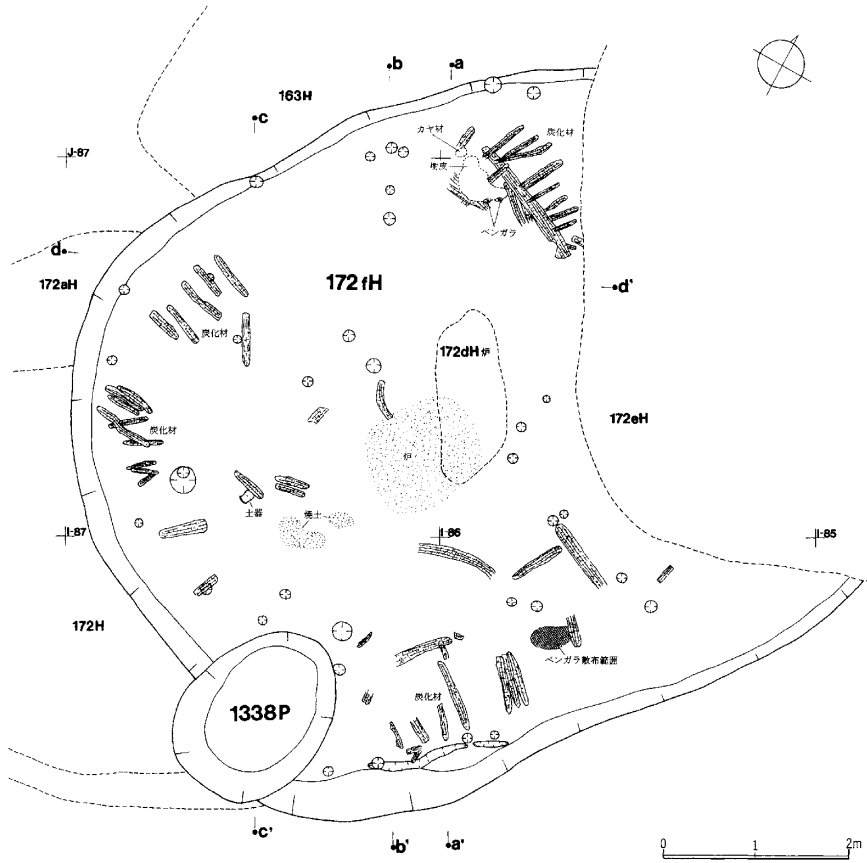
また、東壁際では長さ約1.45m、幅約6~10cm、深さ約4~8cmの小溝に接して径約8~13cm、深さ約10~13cmの壁柱穴が小溝内と接した位置にみられる。

炉跡は地床炉であり、長さ約1.20m、幅約1.05mの方形を呈する。赤化は著しい。明確に主柱穴とみられるものは認められず、径約10~18cm、深さ約5~25cmの柱穴が各壁にみられる。

遺 物 (第100図, 第101図, 第102図, 第103図, 第104図, 第105図, 第106図, 図版28-2~5, 図版29)

第100図-1は炭化材と接した床面から出土した。口径約13cm、器高約14cmの小型鉢形土器である。胴下部がやや膨らみをもち、底部は丸底である。外反した口縁部に2条の縄線文をもち、胴部は斜行縄文が施される。器面の色調は灰褐色を呈する。2~6は炭化材上から出土した。2は口径約7cm、器高約11cmの小型壺形土器。無文の口縁部は縮約し、横位沈線文の下部に刺突文が連続する。胴部は斜行縄文が施される。3は口径約9cm、器高約7cmの小型土器。口縁部は緩い小波状を呈し、器面は縦走縄文が施される。4は口径、器高約11cmの小型鉢形土器。口唇部に三角状の小突起を1個もち、口縁直下に1条の縄線文、一部に弧状の沈線文が施される。器面は斜行縄文を地文とする。5は2本単位の沈線文を山形状に施し、刺突文を加える。下部に横位の帯縄文がみられる。6は斜行縄文間に横位の帯縄文が施される。7~9は竪穴埋土のベンガラ層から出土した。7は口径約11.5cm。底部と胴部の接点はないが同一個体と思われるもので、器高は約15cmである。4個の山形小突起の頂部に1本、口唇部に3本単位の刻みをもち、口縁下部は4条の横走沈線文が施される。胴部は斜行縄文である。8は口径約11cm、器高約12.5cmの小型鉢形土器。底部は丸底である。口縁部は外反しないものの、1条の縄線文をもち、胴部は斜行縄文が施される。9は口径約14.5cm、器高約15cmの小型鉢形土器。口唇部は内削ぎ状となる。器面は縦走縄文を地文に口縁下部に3条の横走沈線文が施される。

第101図もベンガラ層から出土した。1は底部から口縁部にかけて大きく開いた口径約24cm、



第99図 172f号堅穴、ピット1338平面図

器高約27cmの中型鉢形土器。斜行縄文を地文に口縁下部に5条の縄線文をもつ。2は突起下部に貼付文をもち、横位の沈線文があり、3は弧線状の沈線文が施される。4は刻みのある山形突起と縦走縄文をもち、5は口唇部に縄端圧痕文と器面に斜行縄文が施される。6は口径29cmある大型鉢形土器。口唇部に1個の山形突起をもち、口縁部と同様の縄線文がみられる。器面は斜行縄文が施される。

第102図-1～3は後北C₂・D式。4は口径約12.5cm、器高約17cmの小型土器。隆帯による同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。5・6は宇津内Ⅱa式。7は縦走縄文を地文に4条の縄線文と円形刺突文が施される。8は縦走縄文を地文に口唇部に縄端圧痕文をもつ。9・10は横位の縄文、11・12は斜行縄文である。

第103図-1・2は縦走縄文を地文とする。2～7は縄線文をもつもので、4の口縁部は幅広の無文帯となる。8、10・11は円形刺突文、9は内湾した口縁部に横位の縄文をもち、胴部に刺突文が加えられる。12・13の口縁部は無文。14～25は直線・弧線的な沈線文を施したフシココタン下層式相当の土器である。21は縄端圧痕文が加わり、25は半載状施文具による沈線文である。

第104図-1～9も直線・弧線的な沈線文をもつもので、フシココタン下層式相当であろう。4は壺型、7は縄線文を横位・縦位に施す。9は2条の縄線文の下部に沈線文をもつ。10・11はこの時期の底部であろう。

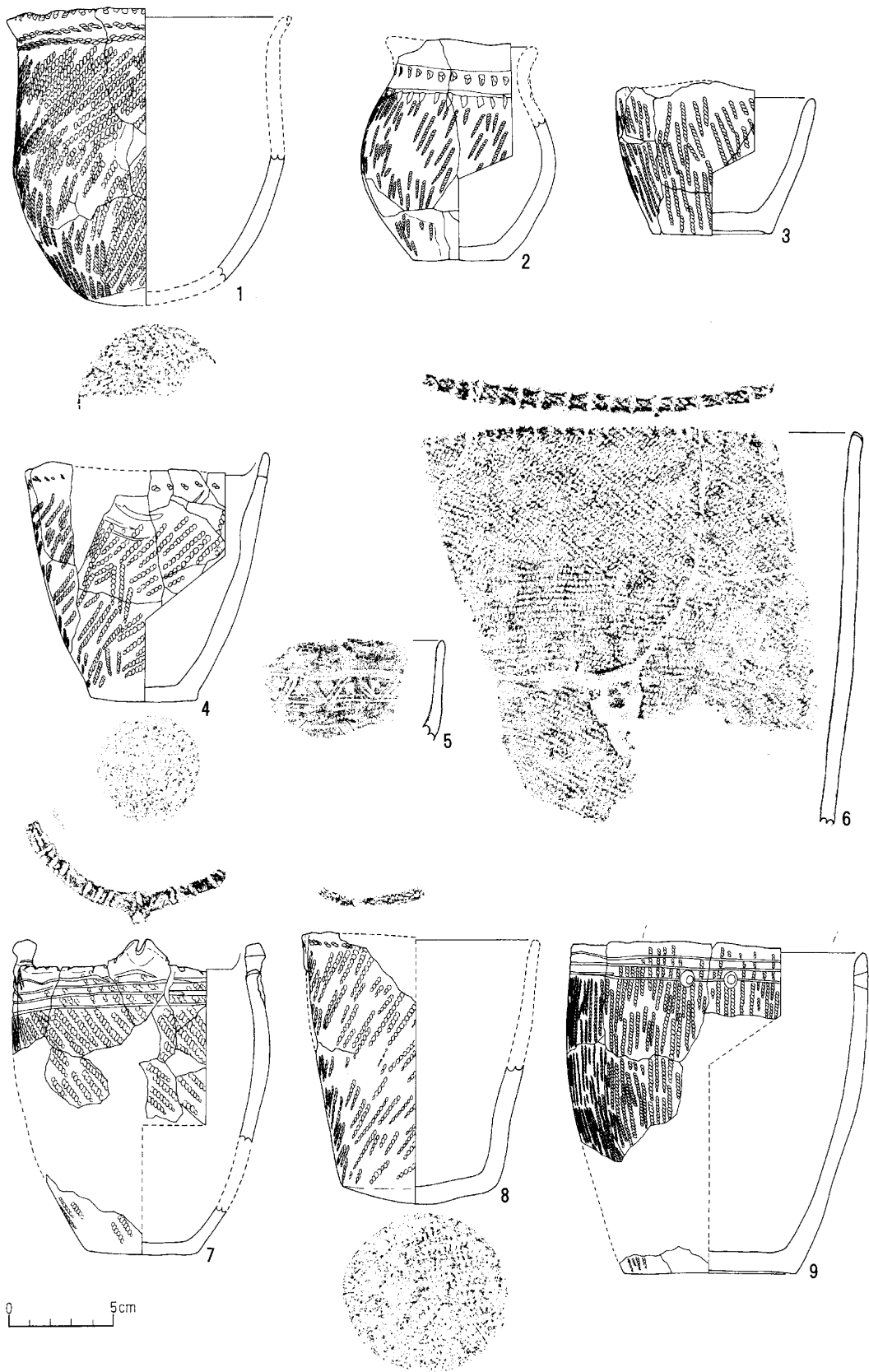
石器は第105図-1～4が床面出土である。1は両面加工ナイフ。2は削器。3・4は上部に原石面をもち、下端部を刃部とした搔器。5～20は埋土出土であるが、5～11はベンガラ層から出土したもので、5～9は両面加工ナイフ。7・8は柄部が明瞭に作出され、特に8は刃部が幅広い。10は片面加工ナイフ。11は右側縁部の刃部や表裏面とも加工が粗く、両面加工ナイフの未製品であろう。12・13は無茎石鏃。14～20は両面加工ナイフ。17・18は柄部が明瞭に作出される。5は頁岩製、9は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

第106図は埋土出土である。1～4は両面加工ナイフ。1は上部につまみ部を作出した肉厚のナイフ。2の刃部は幅広い。4は未製品である。5・6は片面加工ナイフ。7・8は削器。9は下端部が急斜な刃部をもつ搔器、側縁部が削器の複合石器。10はいわゆる両極打法によるピース・エスキューである。11は破損しているが表裏面、刃部とも丁寧に研磨された泥岩製の磨製石斧。3は硬質頁岩製、4は頁岩製、6はメノウ製であり、他は黒曜石製である。

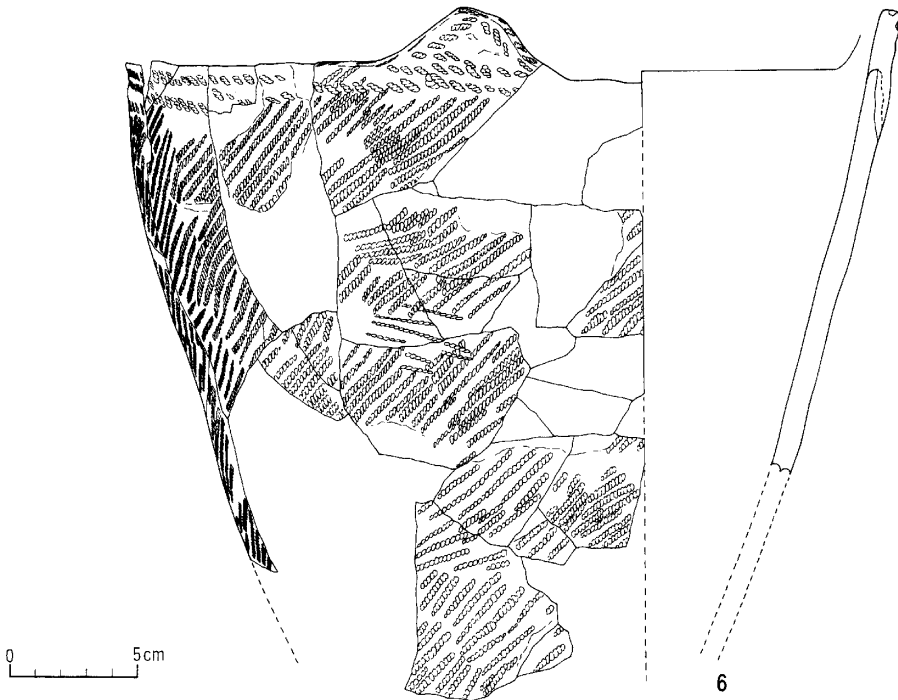
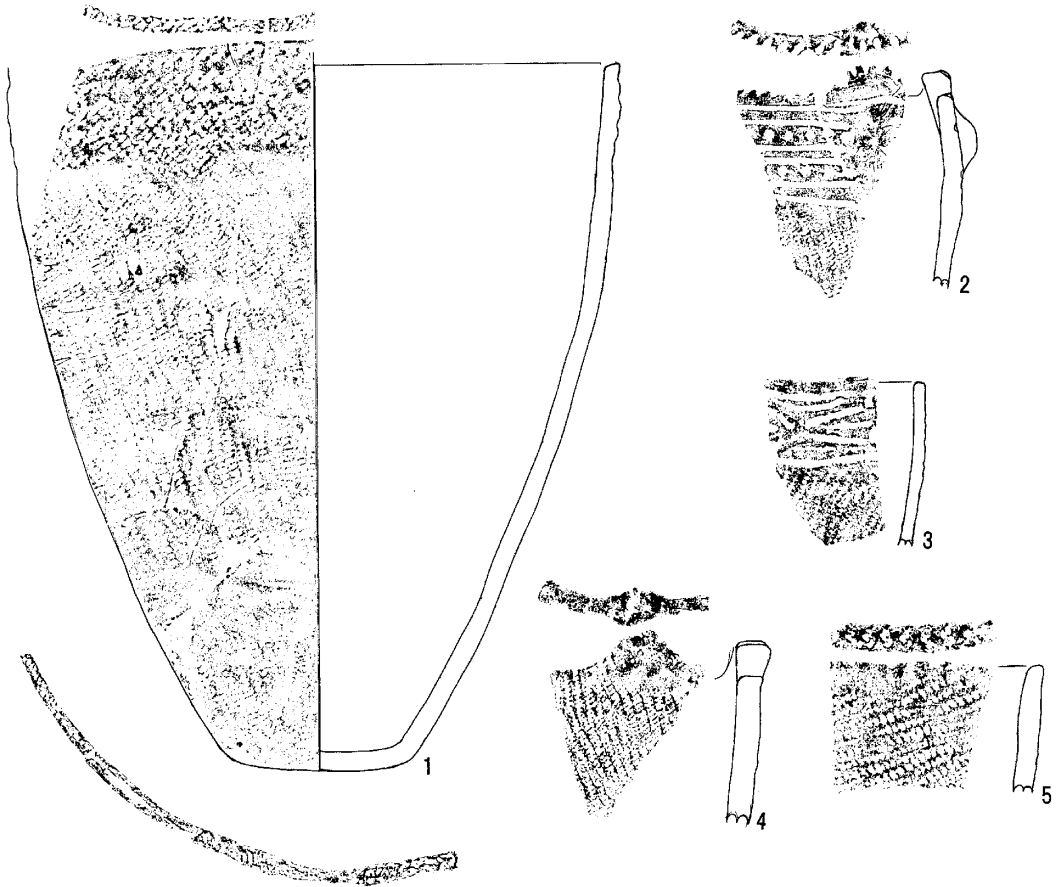
小 括

本竪穴は焼失住居である。時期は続縄文フシココタン下層式に相当する。

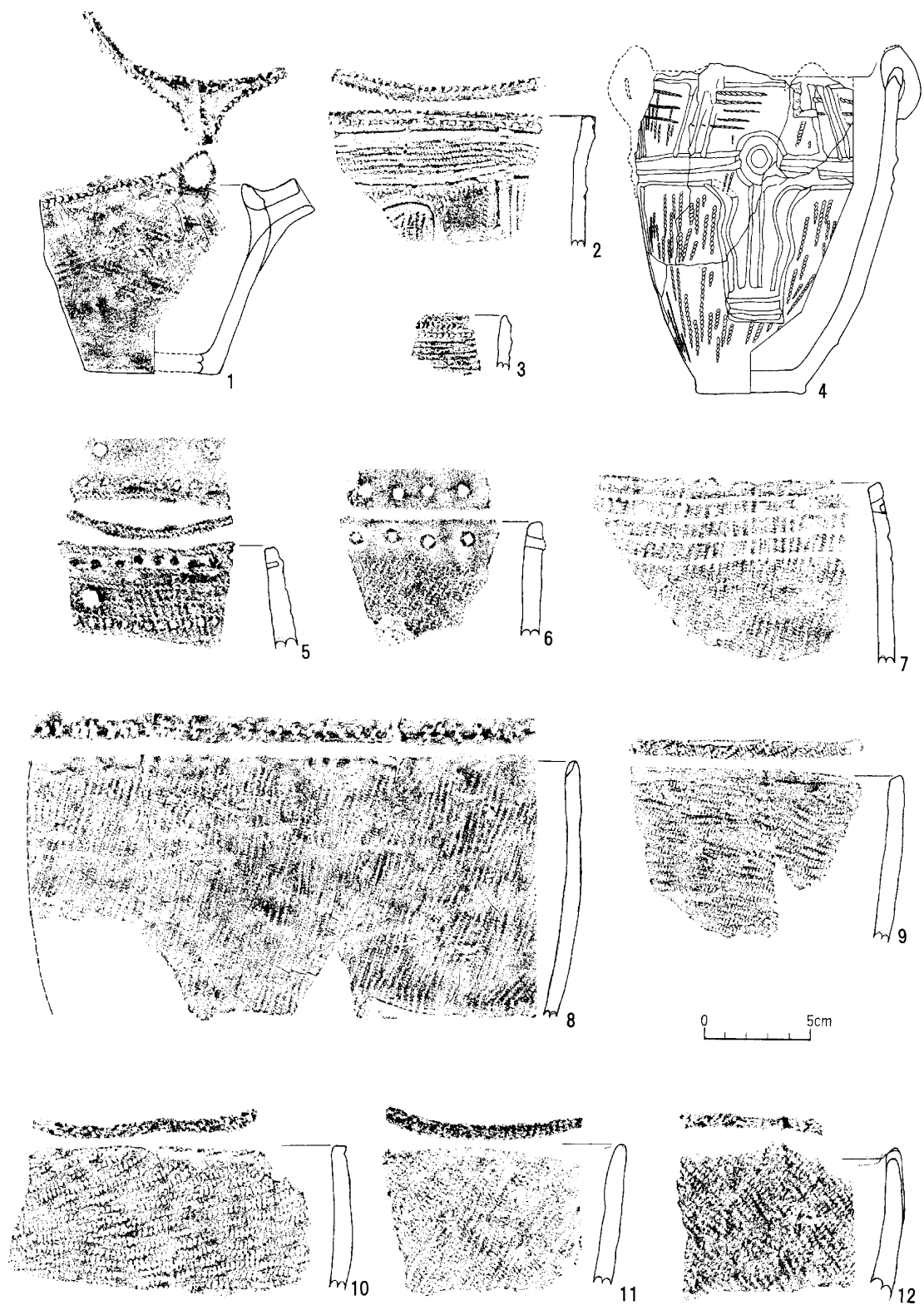
(武田 修)



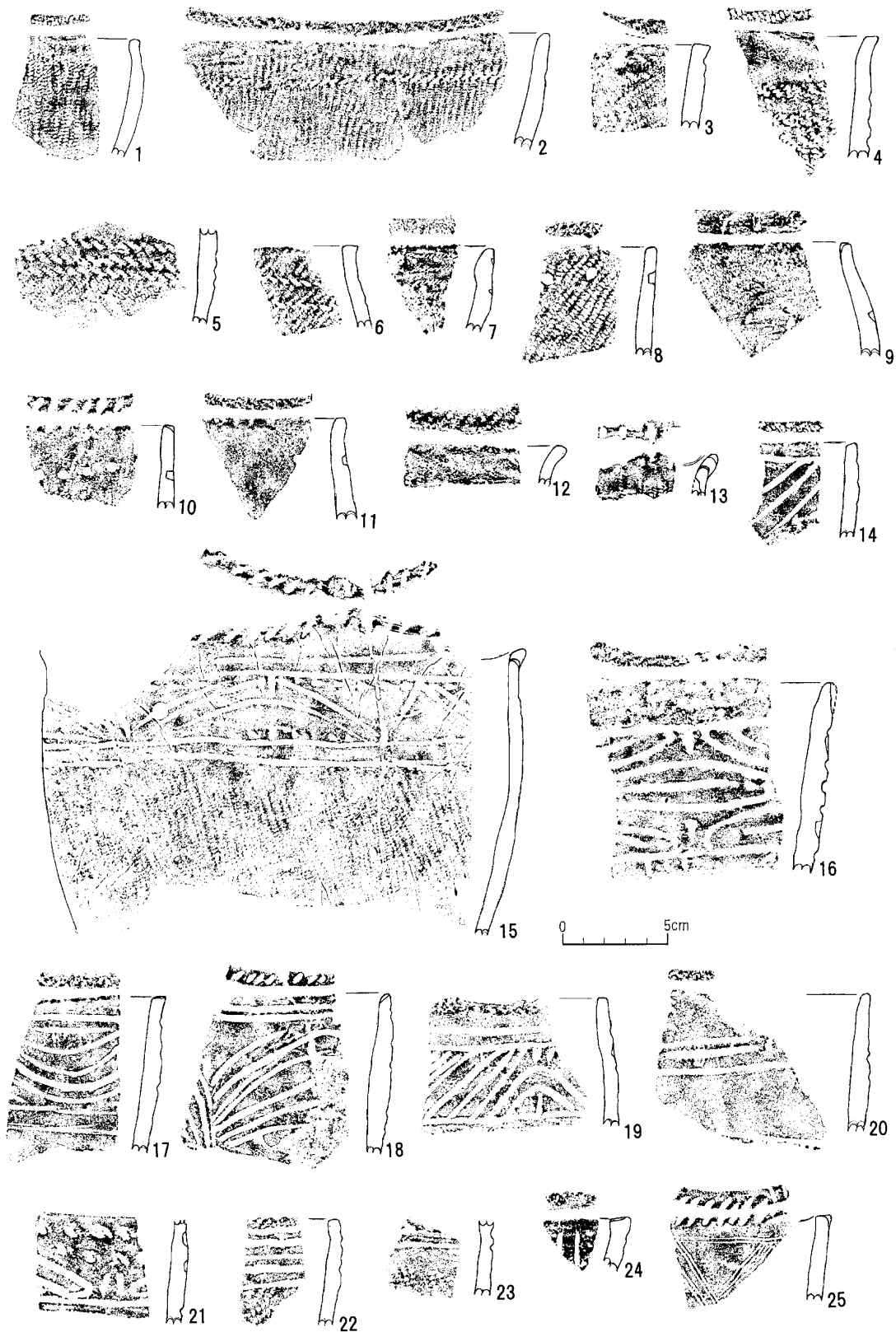
第100図 172f号竪穴床面(1)・炭化材上(2~6)・ベンガラ層(7~9)出土土器



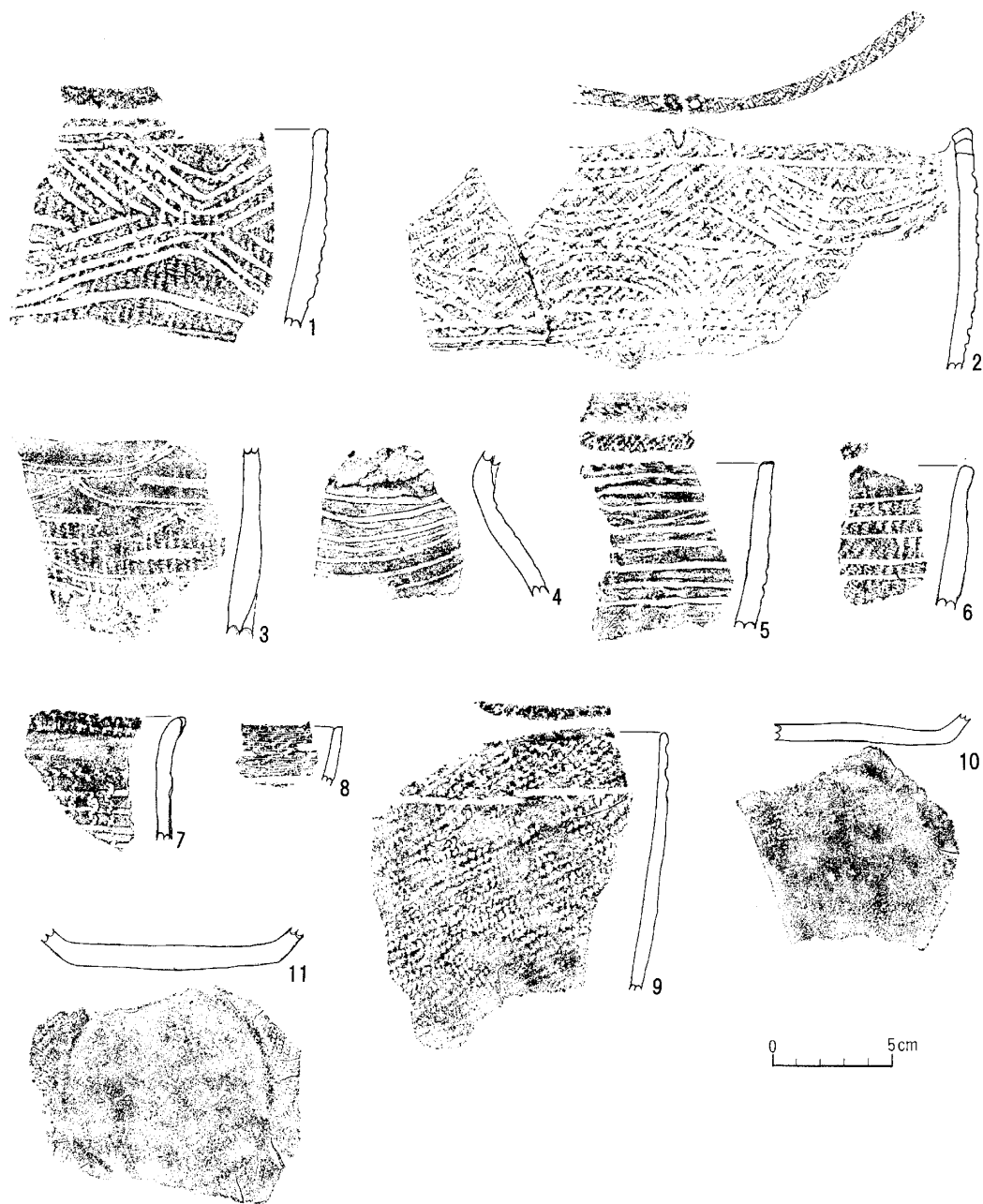
第101図 172f号竪穴ベンガラ層(1~6)出土土器



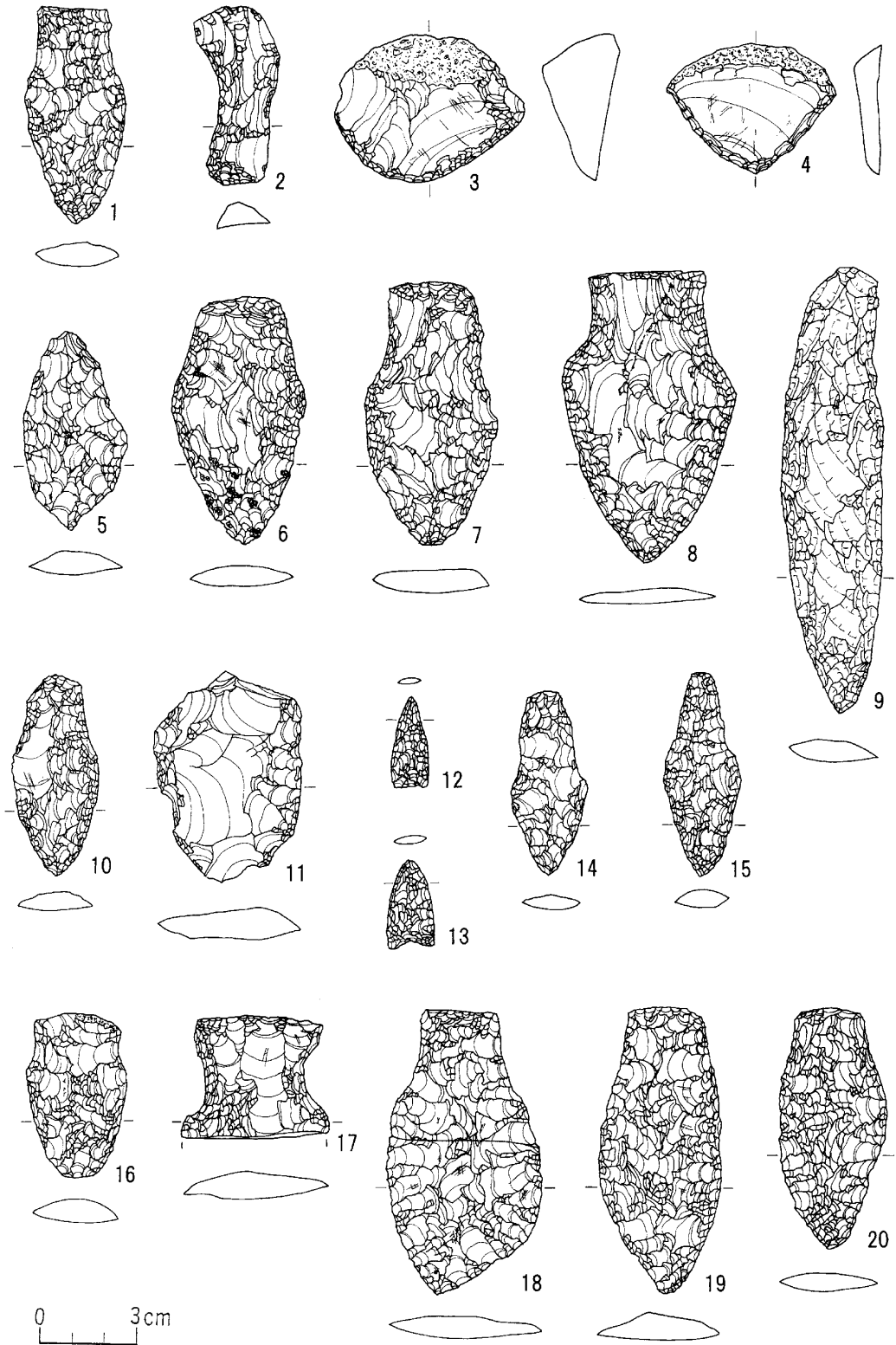
第102图 172f号竖穴埋土(1~12)出土土器



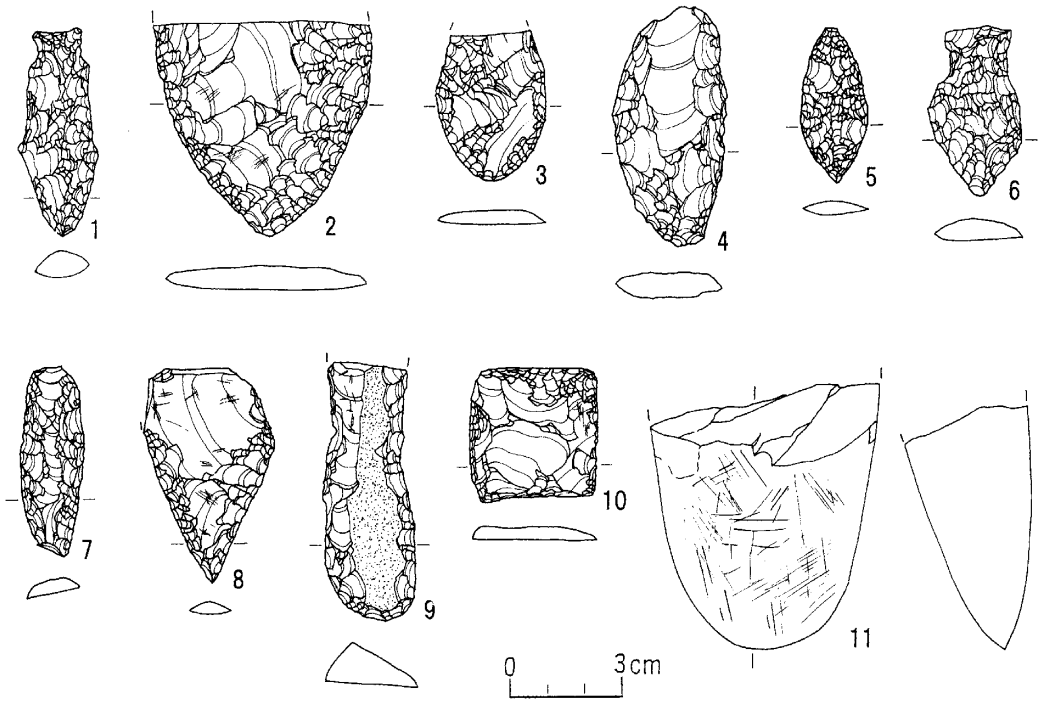
第103图 172f号竖穴埋土(1~25)出土土器



第104图 172f号竖穴埋土(1~11)出土土器



第105図 172f号竪穴床面(1~4)・ベンガラ層(5~11)・埋土(12~20)出土石器



第106图 172f号竖穴埋土(1~11)出土石器

173号 竪 穴

遺 構 (第107図)

本竪穴は E81 グリッドに位置する。掘り込みが確認面から約30cmと浅く、東壁から南壁の一部は検出できなかった。形態は残存部から判断して長方形を呈する様である。床面に良く焼けた2箇所の焼土が遺されている。北側のもは壁に近いがいずれも炉跡と思われる。中央に位置する炉跡から約20cm離れて凹石2点と角礫1点が繋がってみられるが、これらは石囲み炉を構成していた可能性がある。

支柱穴は認められず径約10cm、深さ約8～16cmの壁柱穴が北壁、南壁からそれぞれ2本ずつ検出した。

遺 物 (第109図-1～4, 第121図-1～3)

第109図-1は床面出土の続縄文宇津内Ⅱb式。2～4は埋土出土である。2は口唇部の断面が丸みをもつ。口縁部は外半し、2条の列点文、横走沈線文と変形の針葉樹状文が施される。宇田川編年前期に比定される。3は口縁部に縄線文が短く施された続縄文。4は続縄文の底部。

石器は埋土出土のもので、第121図-1・2が無茎石鏃、3は主要剥離面側に急斜な刃部を作出した搔器。3点とも黒曜石製。

小 括

本竪穴の時期は床面出土土器から続縄文宇津内Ⅱb式と考えられる。 (武田 修)

174号 竪 穴

遺 構 (第108図)

本竪穴は C81・82 グリッドに位置する。2001年9月の集中豪雨による常呂川の氾濫により土砂が流失したため南壁から北壁にかけて検出できなかった。中央部に石囲み炉をもつので規模・形態は推定約6.00mの楕円形を呈すると思われる。残存部の壁も第Ⅱ層茶褐色砂層の上面が数10cm削られたため検出時の高さは10cmと低い。

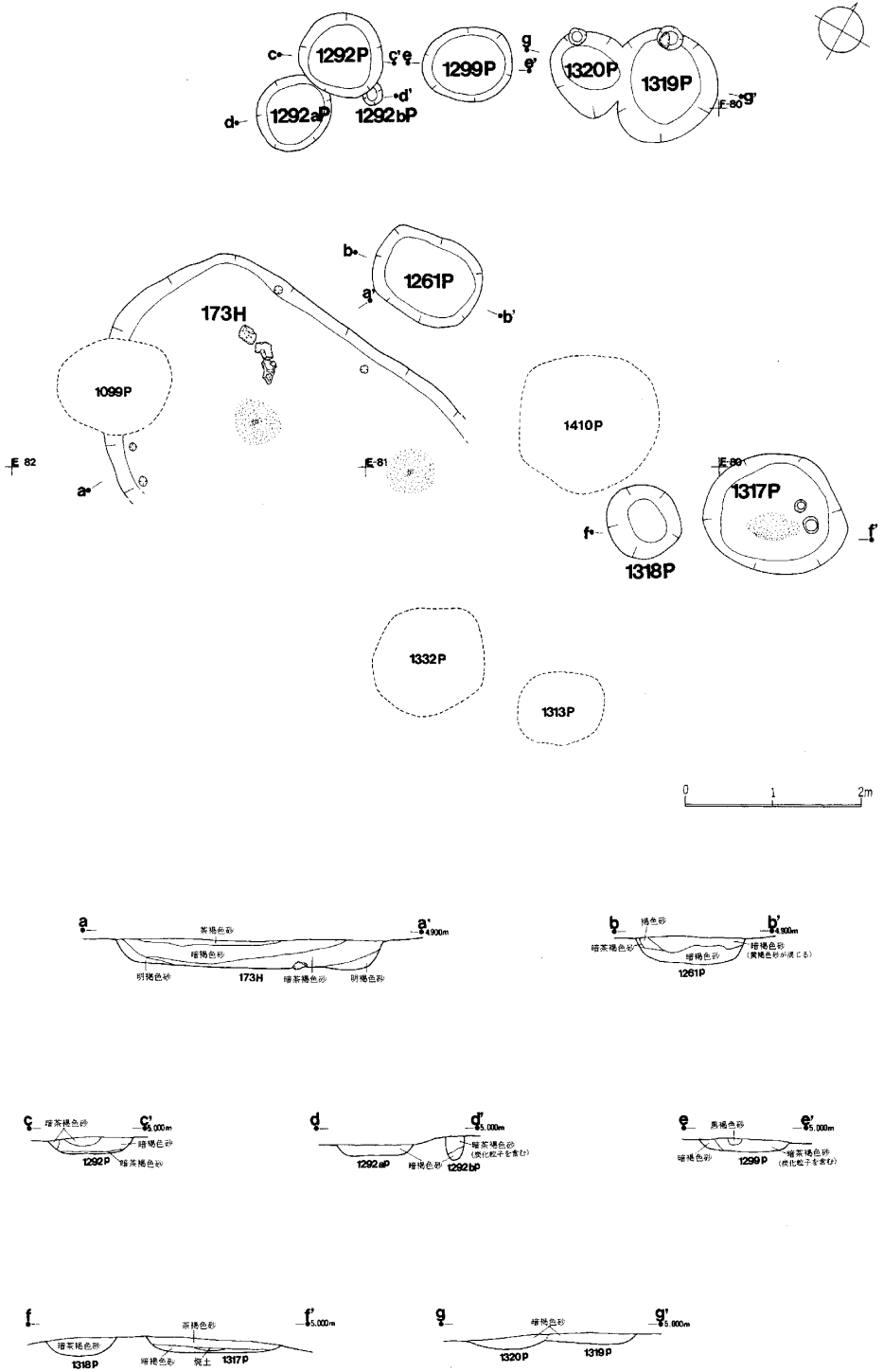
石囲み炉は長さ約71cm。4個の角礫で構成されるが、3点は赤化した上面に載った状態である。内部は焼けており、粘性をもった暗赤褐色土には骨片が混入する。

支柱穴と想定できるのが、西壁側の石囲み炉の周辺に配置されている径約12～15cm、深さ約13～20cmの4本である。壁柱穴は南壁際の4本が径約7～10cm、深さ約6～11cmである。

遺 物 (第109図-5～11, 第121図-4・5)

遺物は全て埋土出土である。第109図-5は続縄文後北 C₂・D 式。6～8は宇津内Ⅱb式。

9は口縁下部が無文を呈し、極めて緩く外反する。器面は斜縄文であるが、焼成の胎土から続縄文初頭と思われる。10は羽状縄文を施した続縄文。11は縄文晩期であろう。

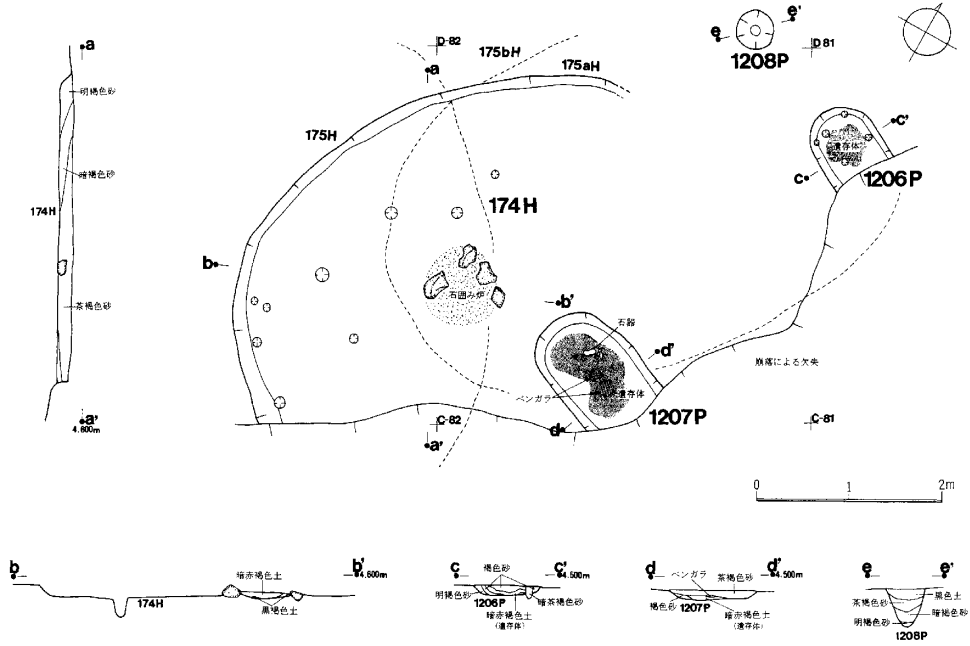


第107図 173号竪穴、ピット1261、1292、1292a、1292b、1299、1317、1318、1319、1320平面図

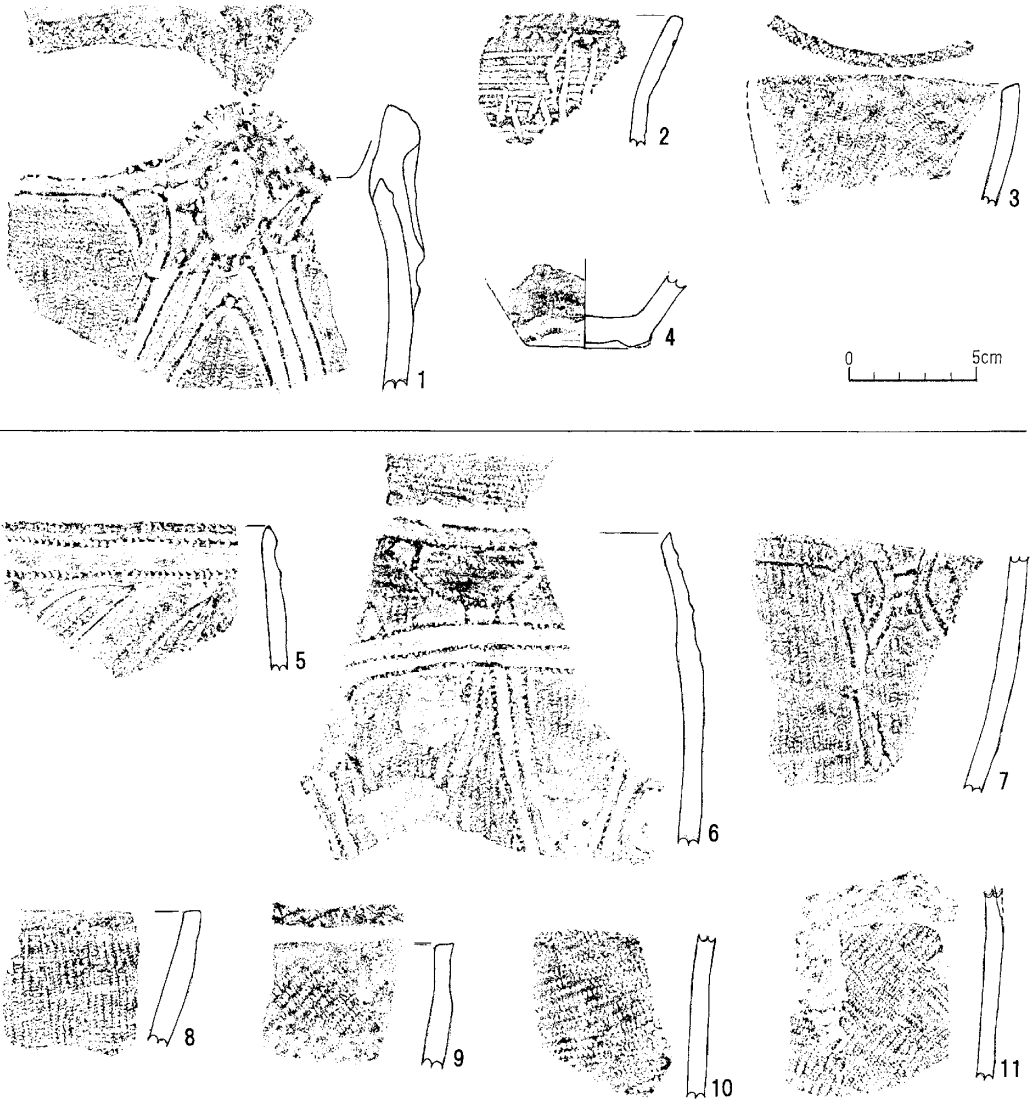
石器は第121図-4が大型の横長剥片を素材とした削器。5は両面加工ナイフ。2点とも黒曜石製である。

小 括

本竪穴は続縄文期と思われるが、詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第108図 174号竪穴、ピット1206、1207、1208平面図



第109図 173号竪穴床面(1)・埋土(2~4)、174号竪穴埋土(5~11)出土土器

175号 竪 穴

遺 構 (第110図)

本竪穴はC82・83グリッドにまたがって位置する。規模は直径約5.40mの不整形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。中央部に径約40cmの炉跡が2個ある。径約15～20cm、深さ約9～20cmの大きめの柱穴は壁から1m内外の箇所があり、5～10cm、深さ約5～11cmの柱穴の間隔は広めであるものの、各壁にみられる。

遺 物 (第111図, 第121図-6～10)

全て埋土出土である。第111図-1～3は統縄文後北C₂・D式。4～7は同宇津内Ⅱb式。8は口唇部と口縁下部に同一の施文具による円形刺突文と器面には燃糸文が施される。9も燃糸文がみられる。8とは器面の色調が異なるものの同一個体であろう。統縄文初頭と思われる。10は縄文晩期後葉の幣舞式。

石器は第121図-6が片面加工ナイフ。7・8・10は削器。9は柄部を作出した肉厚の搔器。10は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

床面から出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

(武田 修)

175a号 竪 穴

遺 構 (第112図)

本竪穴はC81グリッドに位置する。規模は長軸約5.50m、短軸約4mの楕円形を呈するが、175号竪穴によって南壁上部が削られている。中央部に5個の角礫を用いた石囲み炉がある。竪穴と同じ形状の楕円形であり、良く焼けている。

主柱穴はエレベーションラインd・d'の2本が相当すると思われる。径約20cm、深さ約18～19cmで周囲の壁柱穴より大きめである。壁柱穴は径約5～10cm、深さ約5～12cmである。

遺 物 (第113図, 第121図-11)

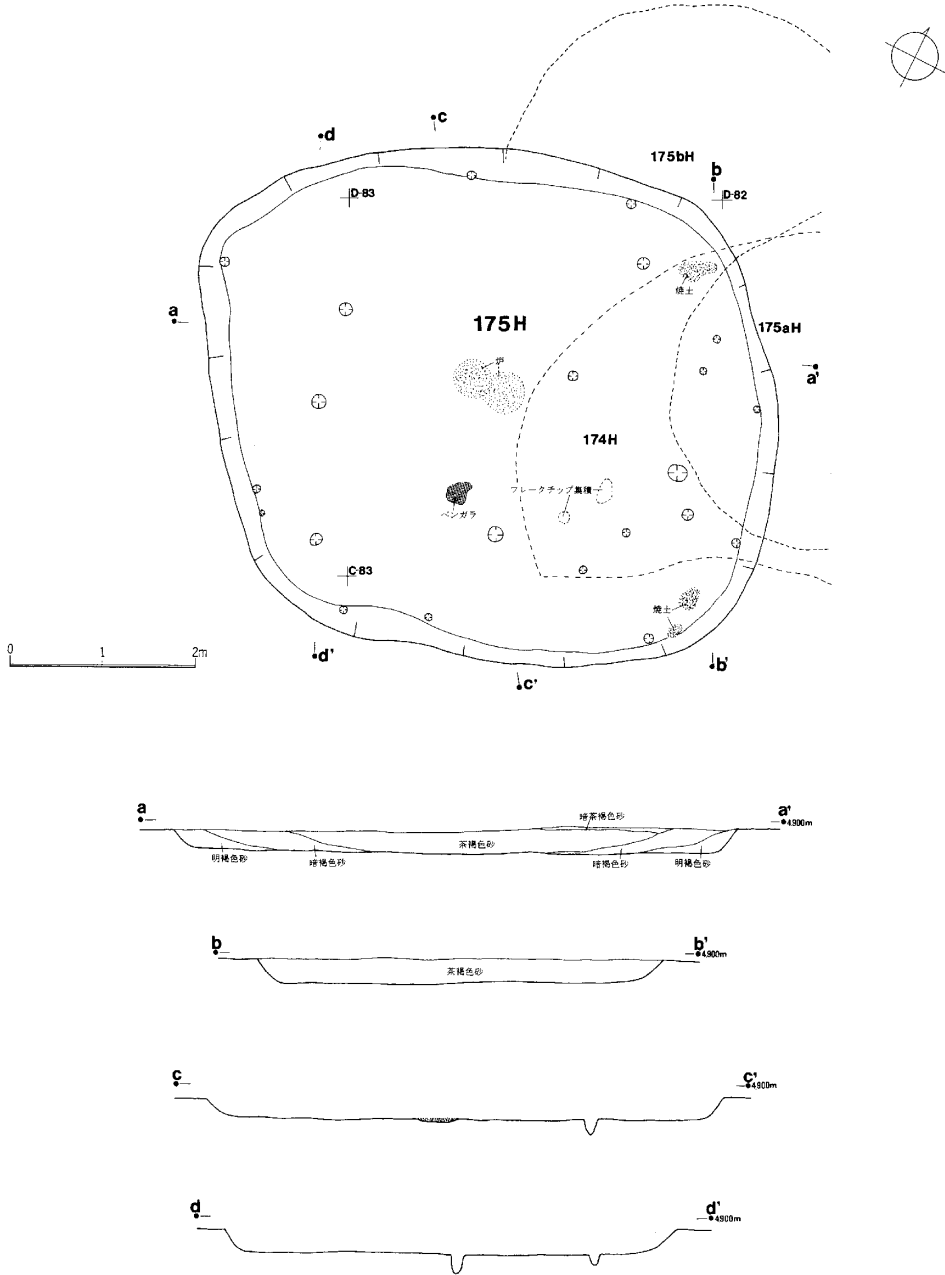
全て埋土出土である。第113図-1～8は統縄文字津内Ⅱb式。9は突瘤文の下部に縄線文と半載状施文具による刺突文が施される。宇津内Ⅱa式かやや古手に位置づけられるものである。10は縄端疋痕文、11は縄線文、12は弧線状の沈線文が施される。10～12は統縄文初頭であろう。13は2本の沈線文が施されたもので、宇津内系の底部と思われる。

石器は第121図-11が埋土出土の無茎石鏃。黒曜石製である。

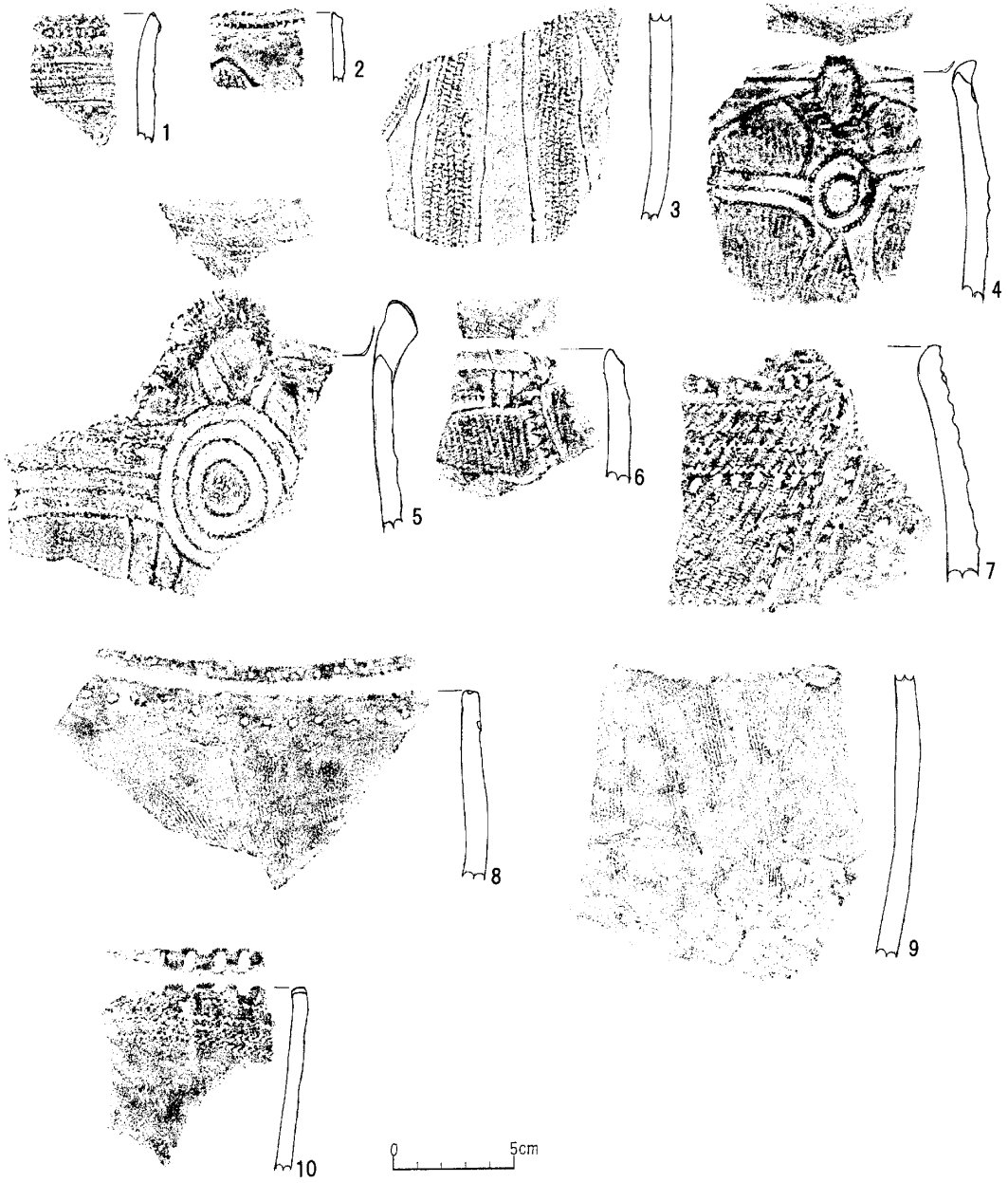
小 括

床面から出土遺物が無いため詳細な時期は不明であるが、埋土からは統縄文字津内系の土器が比較的多く出土しており、この時期の可能性はある。

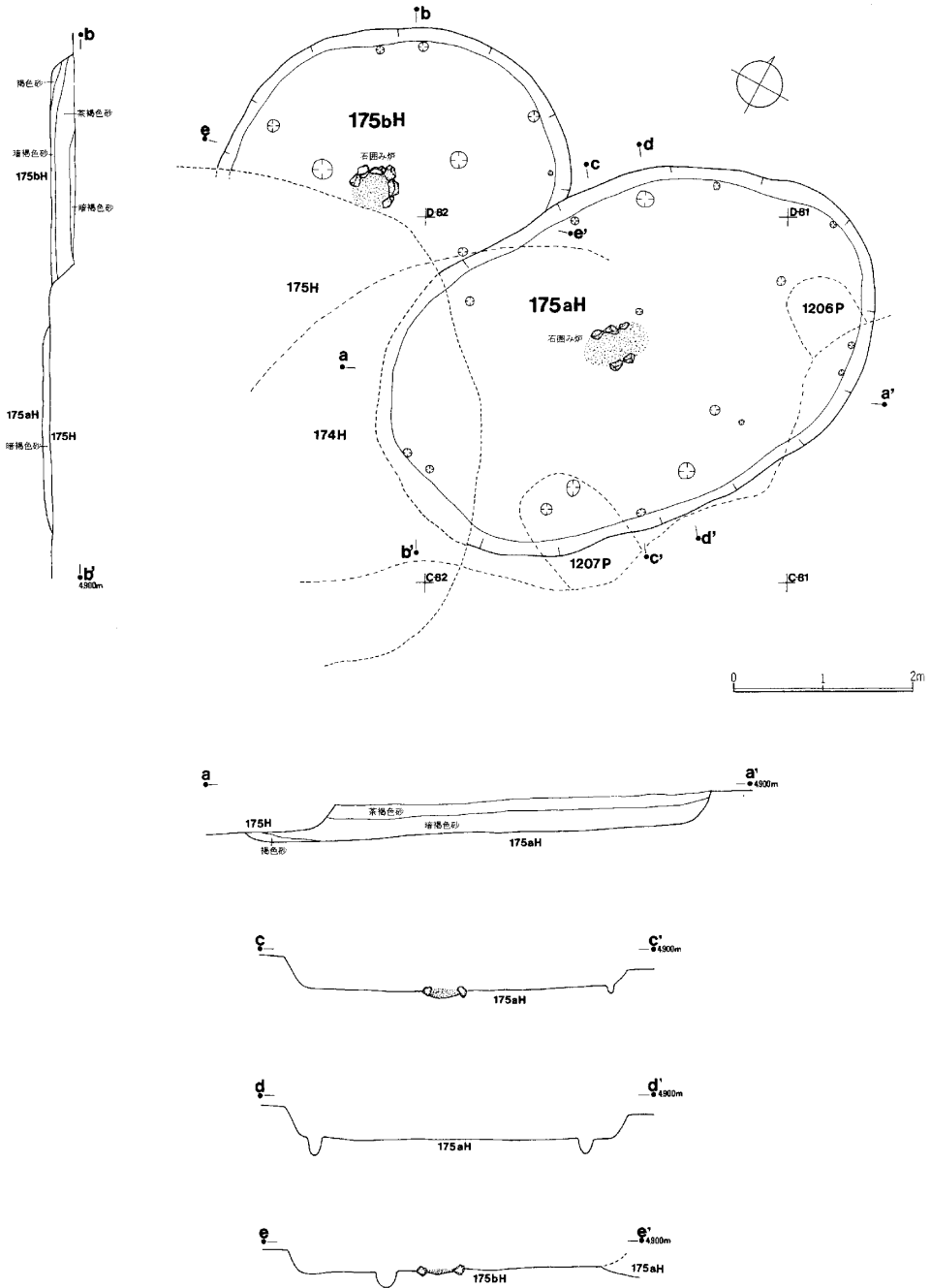
(武田 修)



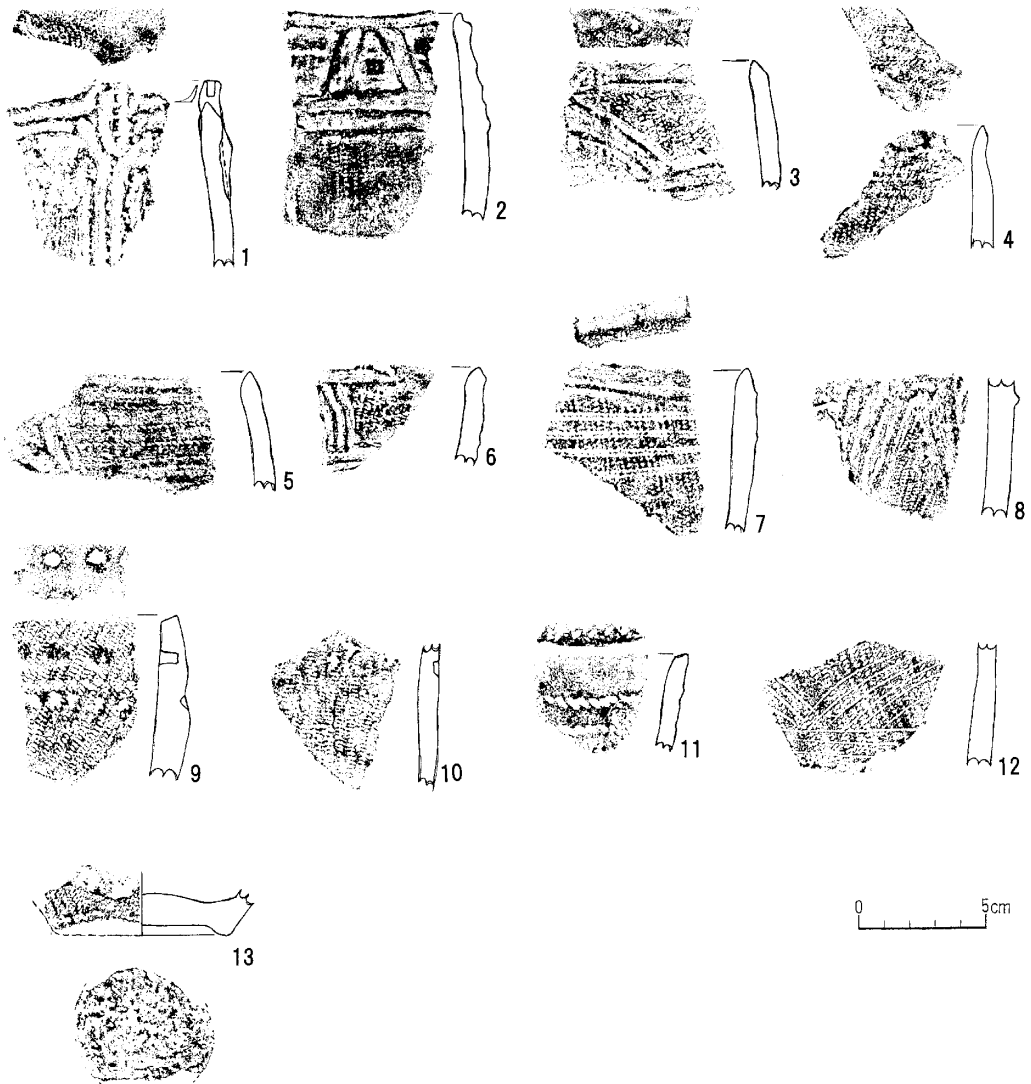
第110図 175号竪穴平面図



第111图 175号竖穴埋土(1~10)出土土器



第112図 175a号竪穴、175b号竪穴平面図

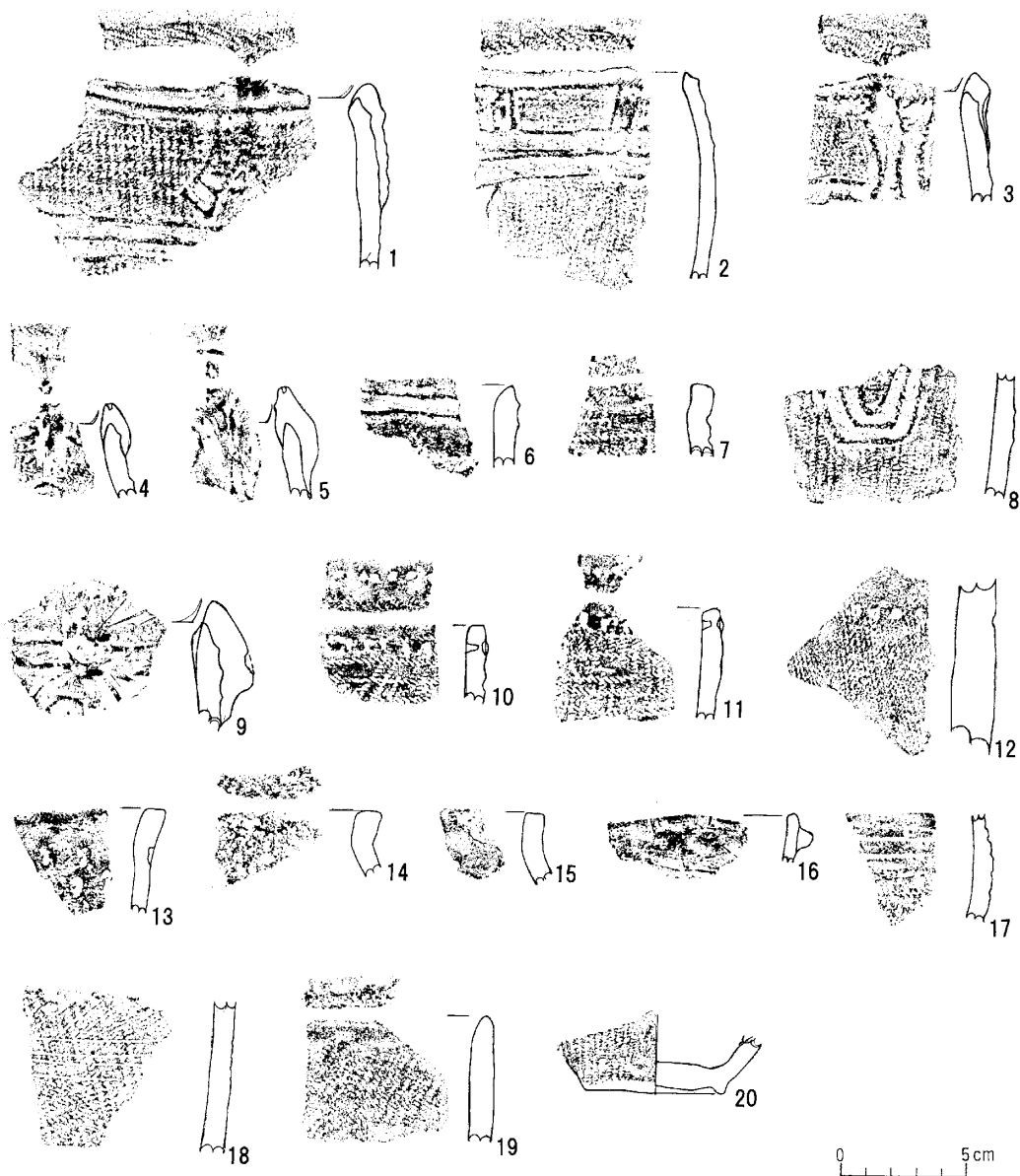


第113図 175a号竪穴埋土(1~13)出土土器

175b号 竪 穴

遺 構 (第112図)

D81・82グリッドに位置するが、南壁を175号竪穴、東壁を175a号竪穴によって切られているため遺存は悪い。残存部から判断して径約4.00mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約22cmである。中央部に6点の角礫を用いた石囲み炉をもつが、175号竪穴に破壊され



第114図 175b号竪穴埋土(1~20)出土土器

ているためか角礫は全周しない。炉に近接して径約20～25cm、深さ約16～18cmの支柱穴がある。壁柱穴は径約5～10cm、深さ約6～10cmである。

遺物 (第114図, 第121図-12～19)

全て埋土出土である。第114図-1～8は宇津内Ⅱb式。9は小突起から太い隆帯が垂下し、微隆起線と縄線文が横位に施される。胎土の粒子は粗い。後北系と思われる。10～12は宇津内Ⅱa式。13は無文帯に縄短丘痕文をもち、14・15は口縁部が外反する。13～15は興津式相当であろう。16の器壁は薄く、無文部に横長の突起をもつ。17は4条の横走沈線文と1条の縄線文が施される。16・17は続縄文初頭。18は横位・斜位の沈線文、19は縄文が施される。18・19は縄文晩期と思われる。20は続縄文の底部。

石器は第121図-12～15が無茎石鏃。16が有茎石鏃。17が石錐。18は片面加工ナイフであり、左側縁部も加工されている。19は柄部を作出した両面加工ナイフ。13は頁岩製、17はメノウ製、19は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

小括

埋土からは続縄文各期の土器が出土している。時期は続縄文と思われるが、詳細は時期は不明である。(武田 修)

176号 竪穴

遺構 (第115図, 図版30)

本竪穴はL57グリットにあり、13号竪穴の北東約1.80mに位置する。竪穴の規模・形態は一辺約3.20mの方形を呈する。壁高は確認面から30cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

東壁中央部にカマドが構築され、構築材は粘土であるが残りはよくない。煙道の長さは約60cmあり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土には多少骨片が含まれている。竪穴の中央には径15cmの範囲で炉跡の焼土が検出された。

支柱穴は径14cm、深さ12cmのものが1本検出され、その他に径8～12cm、深さ5～11cmの柱穴が6本検出されている。

床面を覆っている黒褐色砂層から炭化物が検出されていることから火災住居と考えられる。

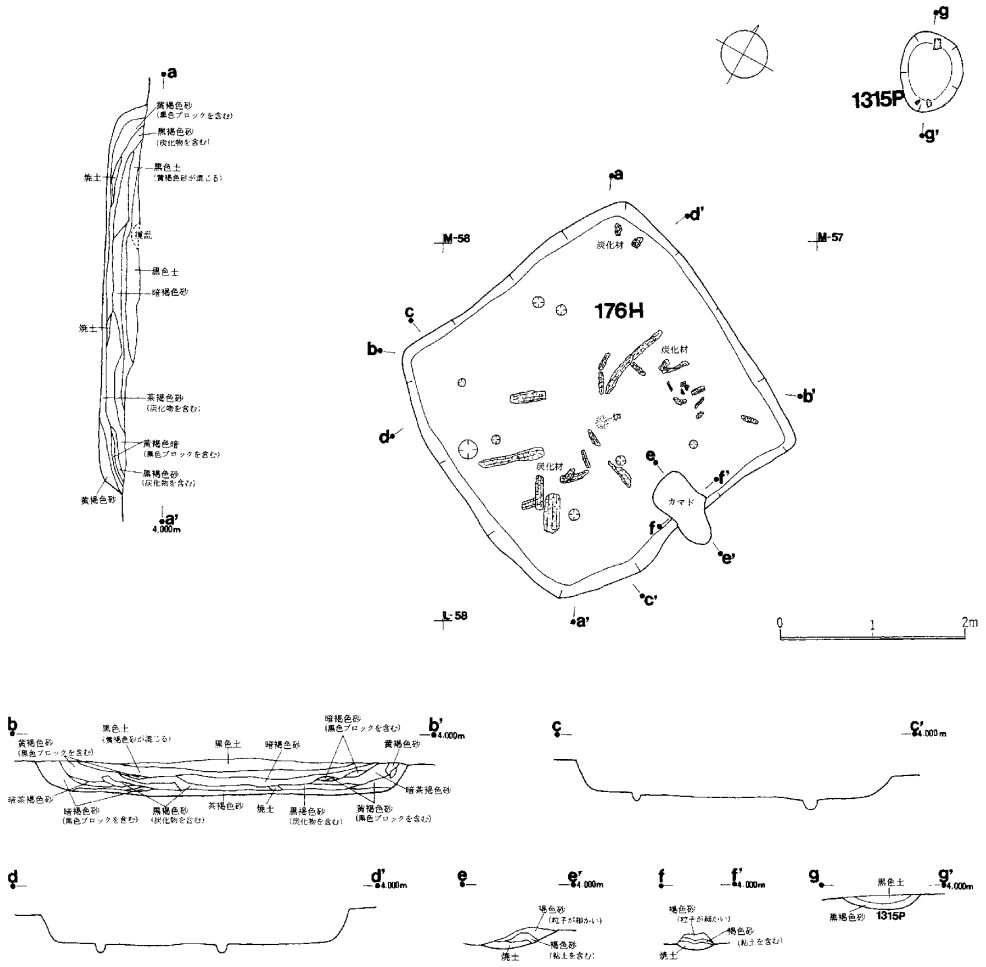
遺物 (第116図)

床面からは遺物は出土していない。埋土からは第116図-1が無文の擦文土器。口径8.7cm、器高4.5cm。2は擦文土器の口縁部。3は擦文土器の胴部。4は高坏の口縁部。5・6は高坏の脚部。7は擦文土器の底部。

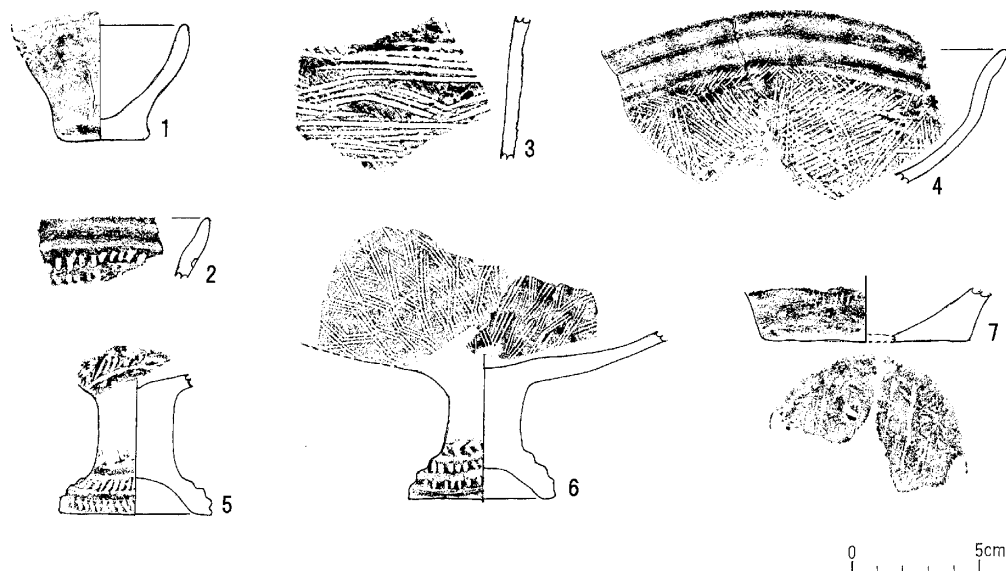
小括

本竪穴は一辺約3.20mの方形を呈する擦文期の竪穴と考えられる。床面から土器が出土していないため詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)

常呂川河口遺跡



第115図 176号竪穴、ピット1315平面図



第116図 176号竪穴埋土(1~7)出土土器

177号 竪 穴

遺 構 (第117図, 図版31, 口絵3-1・2)

本竪穴は13号竪穴の西約6.00mに位置し、一辺約6.00mの方形を呈する。各壁の長さは東壁5.60m、南壁・西壁・北壁がそれぞれ6.00mを測る。壁高は確認面から40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南壁の一部は攪乱を受けている。

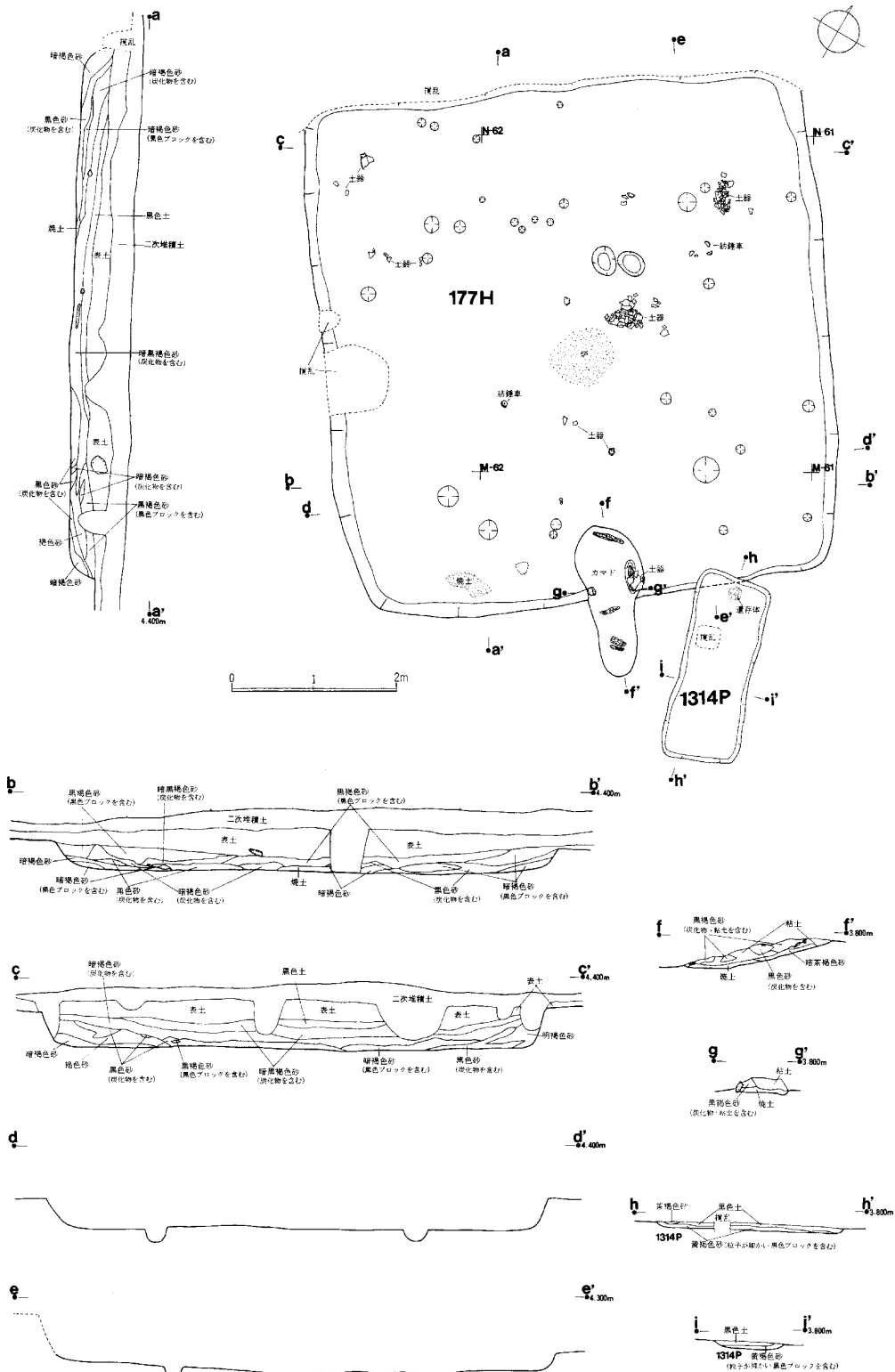
竪穴中央に70×80cmの範囲で炉跡の焼土があり、焼土の中からは骨片が検出されている。

カマドは東壁中央に構築され、構築材は粘土である。北側の袖部と南側の袖部に各1点の礫が認められ、北側袖部の礫は溝状の窪みに立てられている。煙道の長さは約2mであり、緩やかに立ち上がる。焚口部と煙道の上部から炭化物、カマドの焼土から骨片が検出されている。

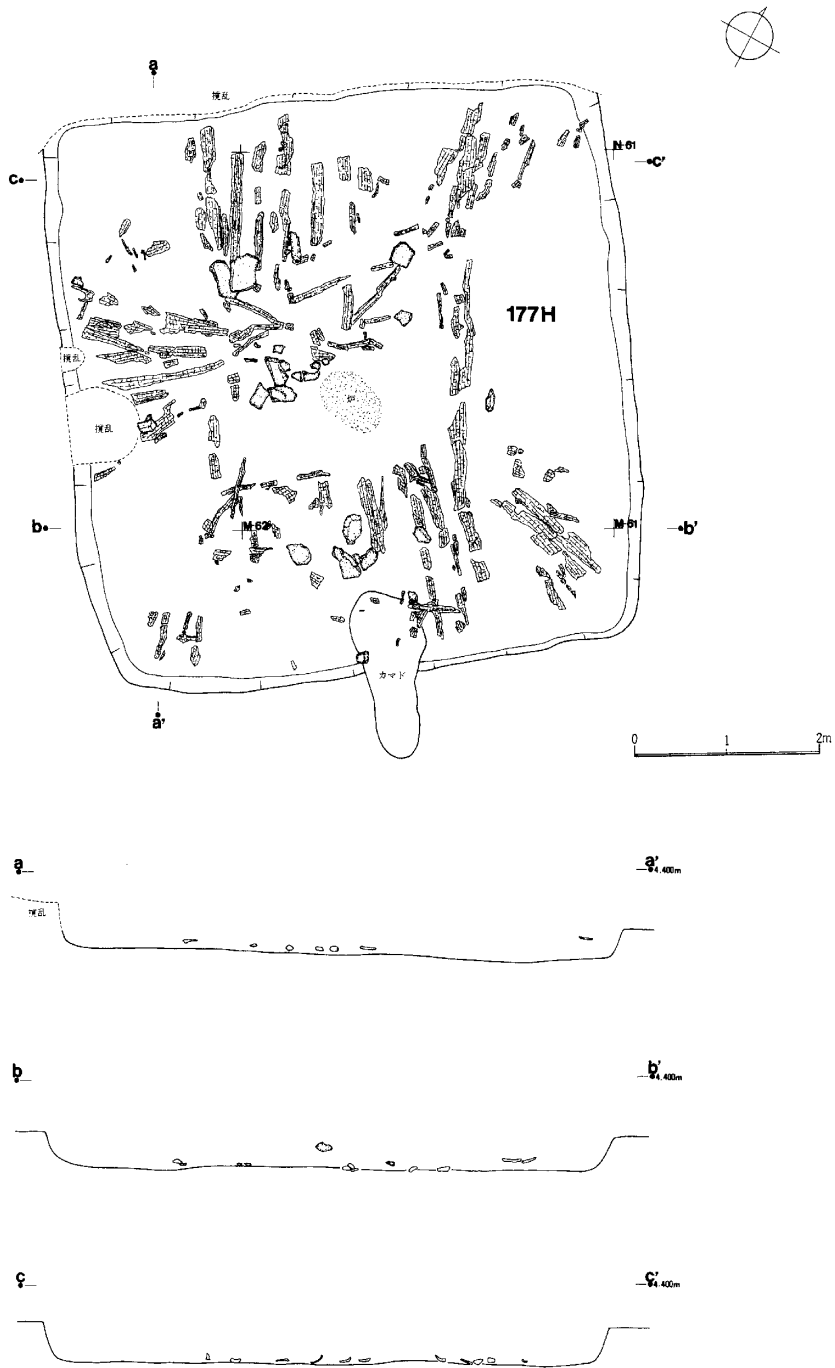
柱穴は支柱穴が径20~30cm、深さ13~24cmのものが4本、壁柱穴は径8~14cm、深さ6~14cmのものが6本確認されている。

床面を覆っている黒色砂と黒褐色砂中からは多量の炭化材があり、特に黒色砂の中からはカヤ材の炭化物も認められている。北壁付近の炭化物の一部には壁と平行しているものもあるが、その他の炭化物はほとんどが中央に向かって倒れた状態で出土している。また、炭化物の上からは大きな礫が多数出土している。竪穴の床面からは第119図-1~3の土器と第119図-9の紡錘車出土している。カマド南側の東壁際から粘土が僅かに検出されている。

常呂川河口遺跡



第117図 177号堅穴、ピット1314平面図



第118図 177号竪穴炭化材出土状況

遺物（第119図，第120図，第121図-20～22，図版32-1・2）

床面からは第119図-1～8の擦文土器が出土している。1は口径27.5cm、器高31.5cm。口縁部に短刻文を配し、胴部は5～7本単位の鋸歯状文と3～4本単位の横走沈線を巡らし、篋による調整は粗い。2は無文の小型土器。胴部の大半が失われているため口径は不明であるが器高は5cmを測る。3は壺形土器。口縁部を欠くため口径・器高ともに不明である。胴部は鋸歯状文に刻線文を配す。4は胴部。5は高坏の口縁部。6は高坏の脚部。7・8は底部。9は床面出土の紡錘車。半載状刺文具による刺突文を施す。径5.8cm、重さ70g。埋土から10はオホーツク土器。11は擦文土器の口縁部が出土している。

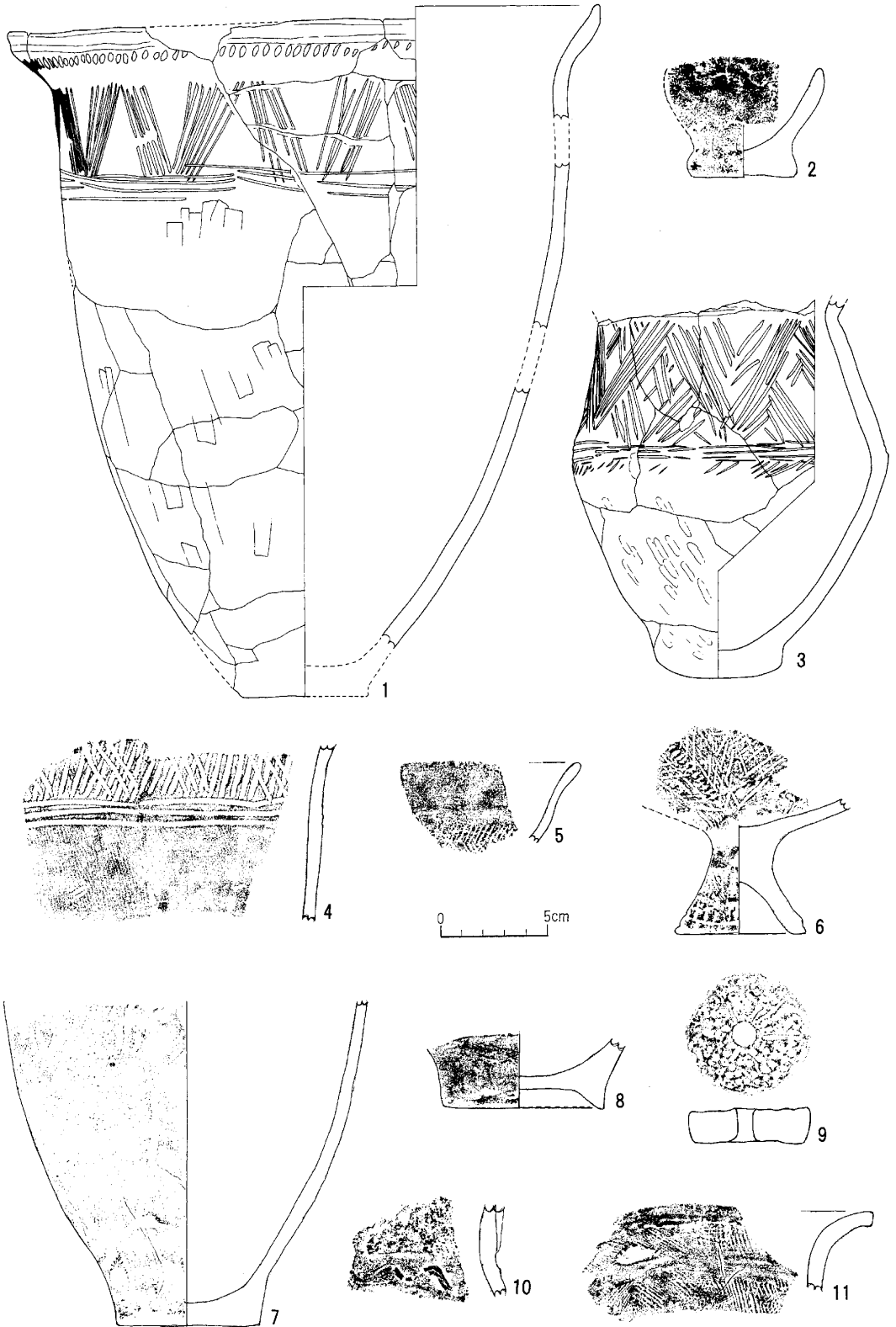
第120図もすべて擦文土器。1～5が口縁部。6～11は胴部。12・13は高坏。14・15は底部。16は紡錘車。半載状刺文具による刺突文を放射状に配す。径6.7cm、重さ65g。

石器は埋土出土。第121図-20・21は有茎石鏃。22はつまみ付きナイフ。いずれも黒曜石製。

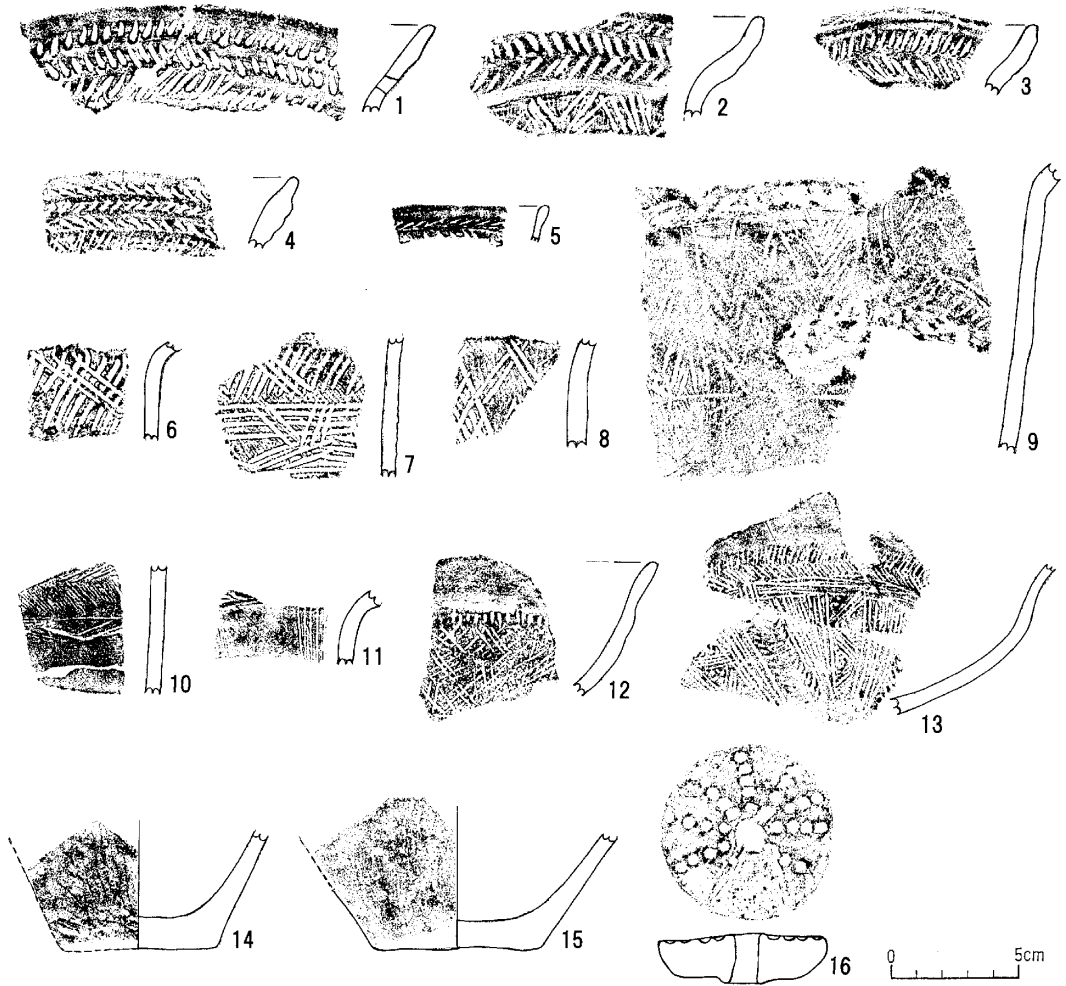
小括

本竪穴は一辺約6.00mの方形を呈する擦文期の竪穴で埋土中に多量の炭化材が確認されているところから火災住居と考えられる。時期は床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。

（佐々木 寛）



第119图 177号竖穴床面(1~9)·埋土(10·11)出土土器



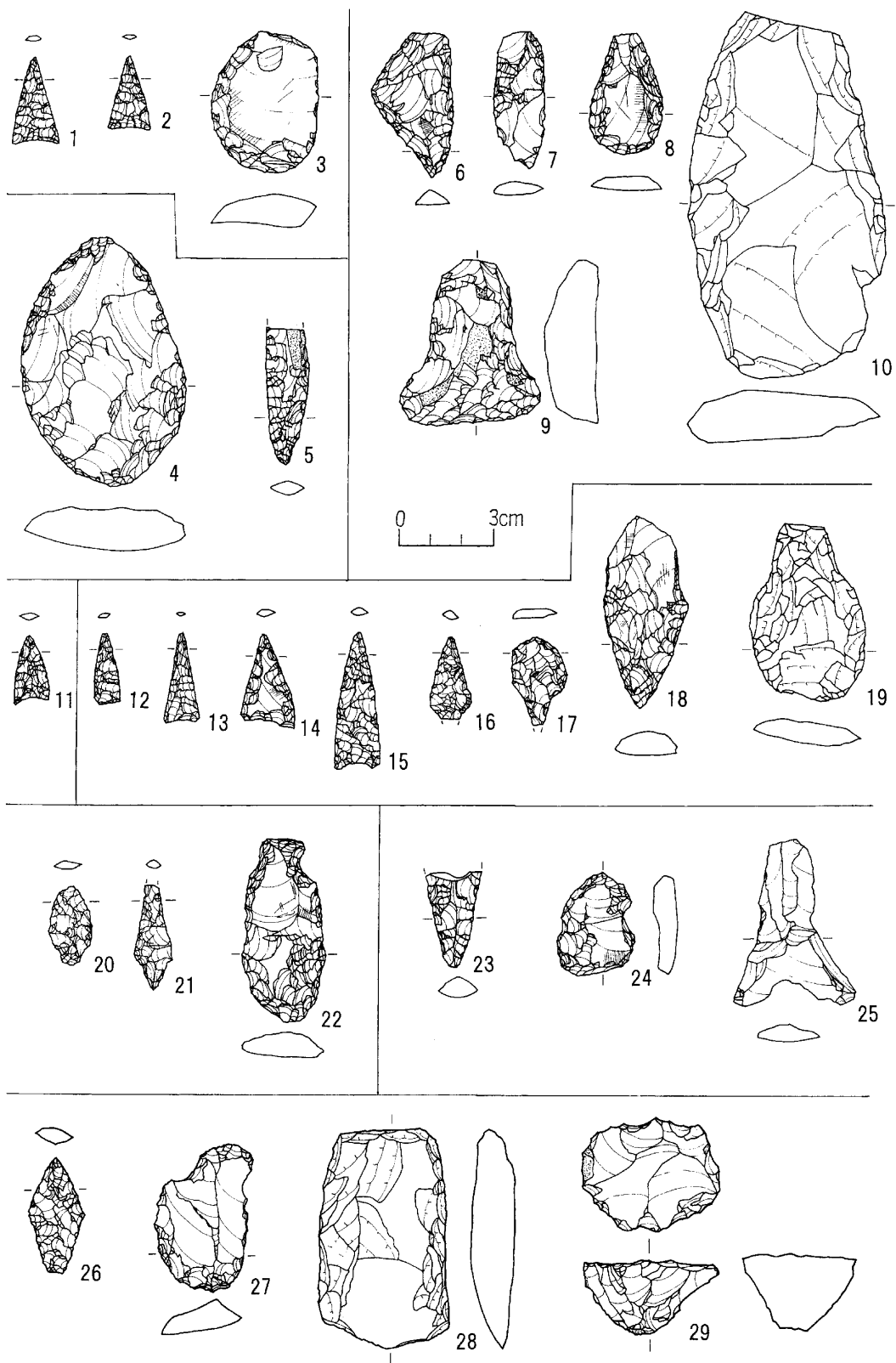
第120図 177号堅穴埋土(1~16)出土土器

178号 堅 穴

遺 構 (第122図, 図版32-3, 口絵4-1・2)

本堅穴は177号堅穴の北約4.00mに位置する。規模は一辺約9.10mの方形を呈する。各壁の長さは東壁・南壁約9.30m、西壁9.10m、北壁8.80m測る。壁高は確認面から東壁で約40cm、西壁で約15cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堅穴の南西側から西壁にかけて攪乱を受けており、堅穴の表土全体も耕作により削平されている。

堅穴の床面中央には炉跡の焼土が検出された。カマドは東壁の2箇所に構築されている。北側のカマドの遺存は良好な状態であり、構築材は粘土である。カマドの焚口部上面には板状の



第121图 173号竖穴埋土(1~3)、174号竖穴埋土(4·5)、175号竖穴埋土(6~10)、175a号竖穴埋土(11)、175b号竖穴埋土(12~19)、177号竖穴埋土(20~22)、178号竖穴埋土(23~25)、179号竖穴埋土(26~29)出土石器

礫が認められており、焚口部の袖部には礫が立った状態で検出されていることから袖部には礫が使用されていたものと思われる。煙道の長さは約1mであり、緩やかに立ち上がる。煙道部の残りも良好で上部を粘土により覆われている。南側のカマドは袖部には礫が使用されているが、北側のカマドほど遺存状態は良好ではなく焚口部や煙道は潰れた状態で検出され、焼土の量も少ない。煙道の長さは約50cmであり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土からはいずれも骨片が検出されている。南側カマドの南の壁際から鯨骨と思われる遺存体が埋土中から出土している。

柱穴は径14～36cm、深さ10～31cmの主柱穴が8本、壁柱穴は径6～10cm、深さ5～11cmのものが27本検出されている。

埋土の黒色砂中から炭化物がみられ、床面直上で炭化物が検出していることから焼失住居と考えられる。

遺物 (第123図, 第124図, 第121図-23～25, 図版33)

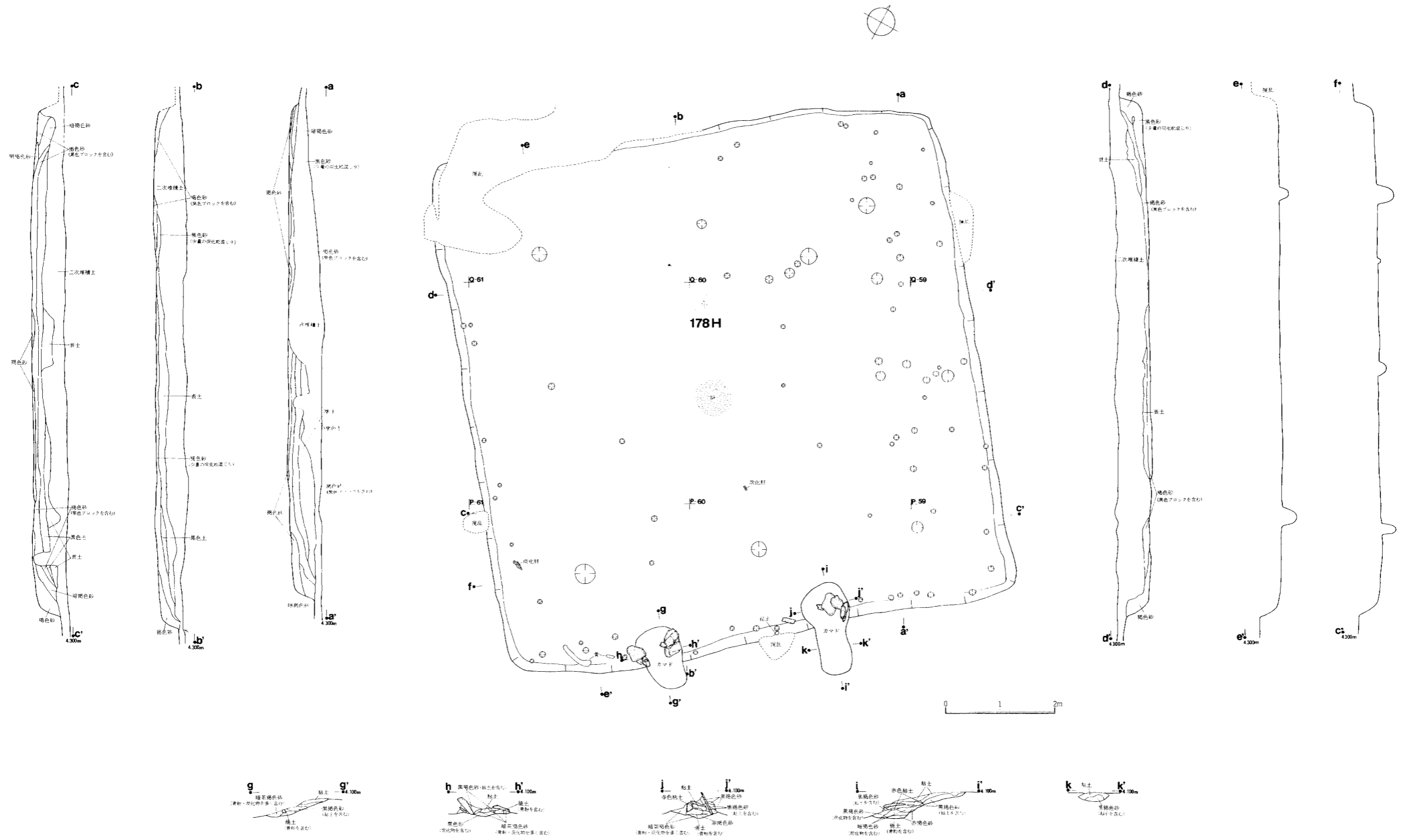
床面からは第123図-1の擦文土器が出土している。口径7cm、器高4.9cm。口縁部に矢羽根状の短刻文を施し、胴部は縦位の刻線文に矢羽根状の短刻文と「X」状の刻線文を組み合わせ、下に2条の刻線文を横方向に巡らす。埋土からは2～4と第123図-1の擦文土器が出土している。2は口径16.3cm、器高16cm。口縁部に半載状刺文具による刺突文を2条巡らせ、胴部は「X」状の刻線に半載状刺文具による刺突文を配す。3は口径16cm、器高15.5cm。口縁部に1条刻文を巡らせ、胴部は斜めの沈線文に交差する3～4本単位の沈線を施し、その下に横走る沈線を配す。4は口径30.5cm、器高は底部が欠失しているため不明である。口縁部は3列の刻文を施し、胴部は3本単位の横走沈線を2段巡らせ、6～7本単位の縦位の沈線で区画し、その間を鋸歯状文で埋めている。

第124図-1は口径21.5cm、器高は底部が欠失しているため不明である。口縁部に2～3条の列点文を巡らせ、胴部は縦位の沈線に鋸歯状文を施す。2～20もすべて擦文土器。2～11は口縁部。12・13は胴部。14・15は高坏の口縁部。16～18は高坏の脚部。19・20は底部。

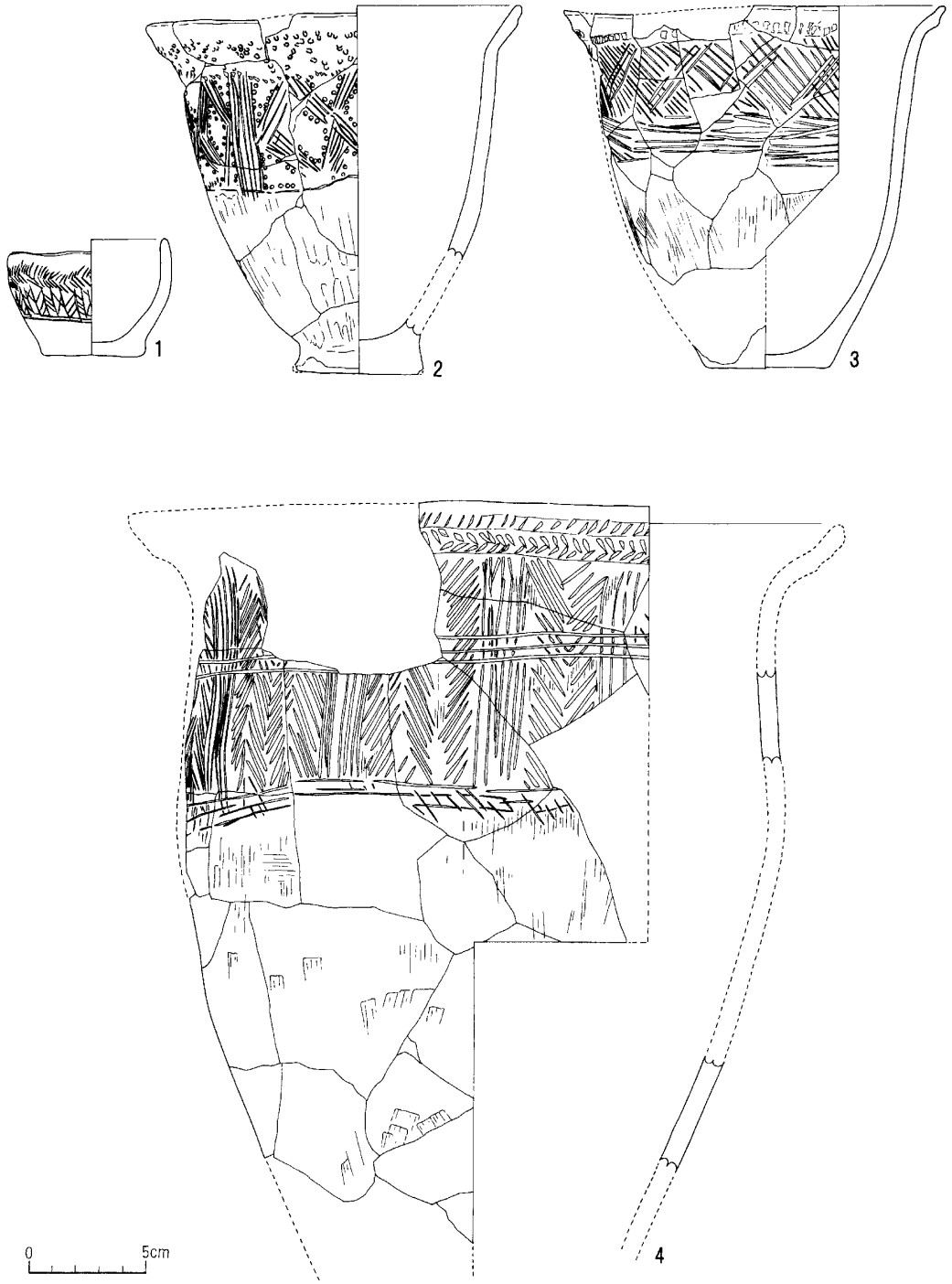
石器は埋土出土。第121図-23はナイフ。24は搔器。25はフレーク。いずれも黒曜石製。

小括

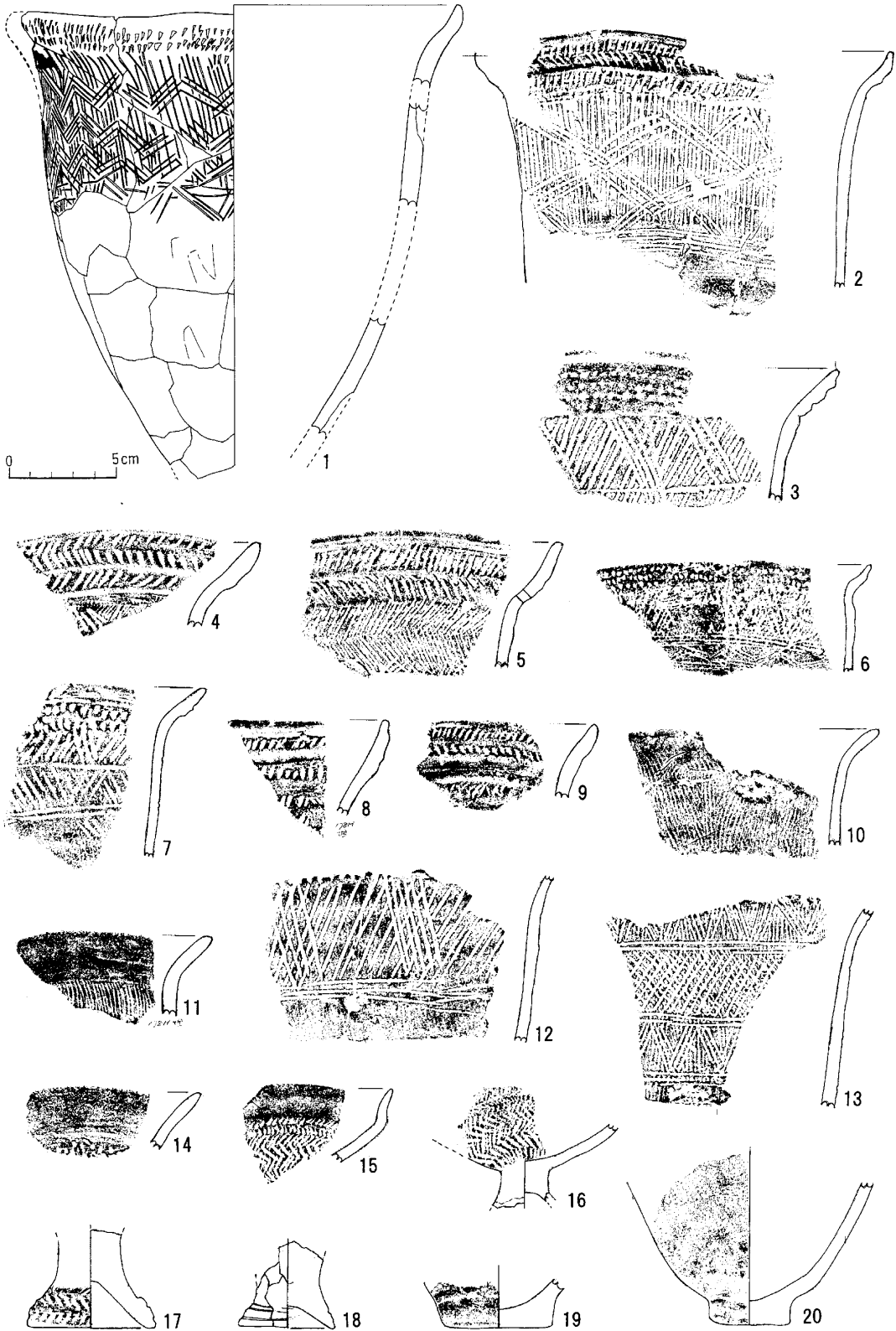
本竪穴は出土した土器から擦文期のもので宇田川編年後期に比定される。(佐々木 寛)



第122図 178号竪穴平面図



第123图 178号竖穴床面(1)・埋土(2~4)出土土器



第124图 178号竖穴埋土(1~20)出土土器

179号 竪 穴

遺 構 (第125図, 図版34)

本竪穴は168号竪穴と170号竪穴の間に位置し、一辺約2.80mの方形を呈する。各壁の長さは東壁が約3.00m、南壁が約2.40m、西壁が約2.80m、北壁が約2.70mを測る。南壁と西壁の一部と北東側の床面が攪乱を受けている。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。炉跡は検出されなかった。

カマドは東壁中央に構築されており、構築材は粘土である。煙道の長さは先端部が攪乱を受けているため不明であるが、緩やかに立ち上がる。燃焼部から煙道にかけての粘土を含む黒褐色砂中からは礫が2点認められた。

柱穴は径14cm、深さ14cmのものが1本検出されたのみである。

遺 物 (第126図-1~3, 第121図-26~29)

床面からは遺物は出土していない。埋土からは第126図-1が外からの突瘤をもつ北大式。2は統縄文後北C₂・D式。3は器面は無文であり、角形の口唇部に刺突文が施される。北大式であろう。

石器は第121図-26は石鏃。27は削器。28は青色泥岩製の磨製石斧。29は石核。28以外は黒曜石製。

小 括

本竪穴は一辺2.80mの方形を呈する擦文期の竪穴であるが、床面出土の土器がないため詳細な時は不明である。(佐々木 寛)

180号 竪 穴

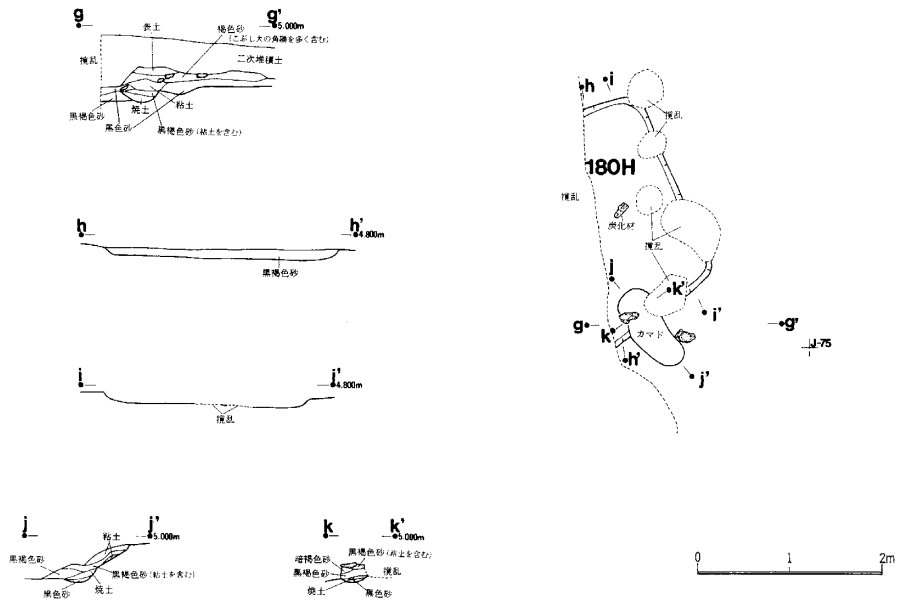
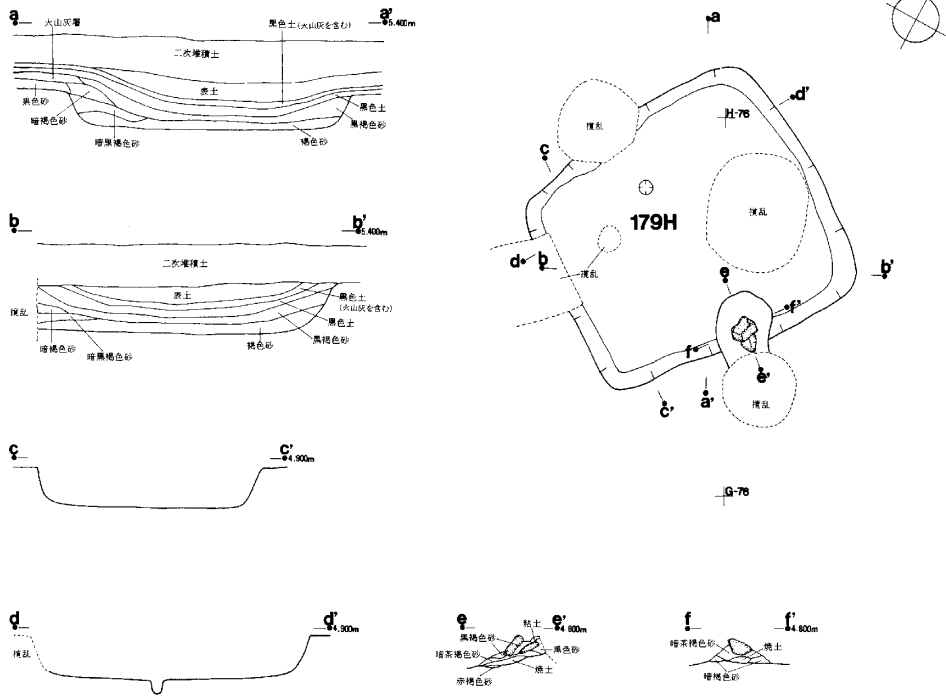
遺 構 (第125図)

本竪穴はJ75グリッドに位置する。竪穴の規模・形態は南側半分以上が攪乱のため失われているが検出された北壁が2.10mあることから一辺約2.00mの方形を呈するものと思われる。北壁のところどころと東壁のカマドの北側も攪乱を受けている。壁高は確認面から約10cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。東壁にはカマドが構築され、構築材は粘土である。カマドの上面に平らな礫が1点検出されている。煙道の長さは約40cmあり、斜めに立ち上がる。柱穴は検出されなかった。床面直上から炭化物が検出されていることから火災住居の可能性はある。

遺 物 (第126図-4~8)

床面からは第126図-4~6が出土しており、すべて擦文土器。4・5は口縁部。7・8は埋土出土、いずれも擦文土器。

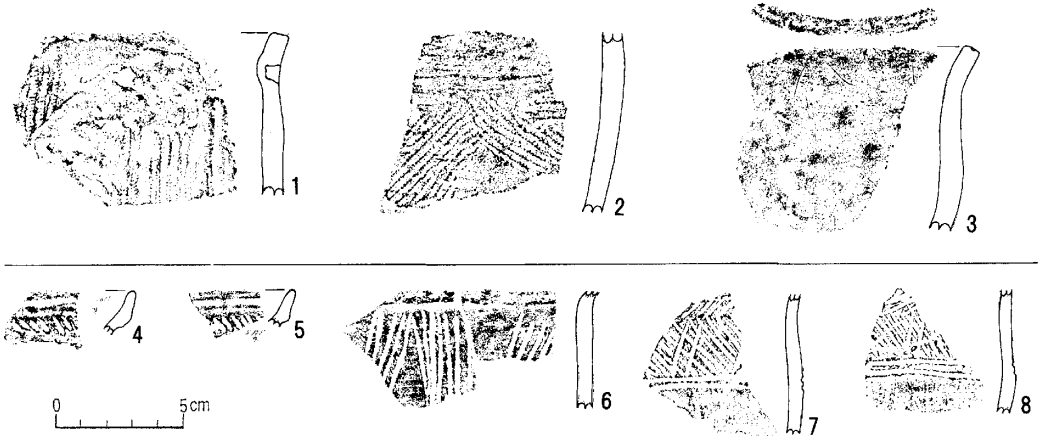
常呂川河口遺跡



第125図 179号堅穴、180号堅穴平面図

小 括

本竪穴は南側半分以上が攪乱により失われているが、一辺約2.00mの方形を呈する擦文期の竪穴と考えられる。床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。(佐々木 寛)



第126図 179号竪穴埋土(1~3)、180号竪穴床面(4~6)・埋土(7・8)出土土器

自然営力による段差

第127図

D80~87グリッドのDラインに沿って深さ約40~50cm落ち込みがみられた。セクション図に示すとおりこの落ち込みは各Dグリッドから極めて緩い傾斜の落ち込みをみせるものの、西側のE・Fグリッドにかけて平坦化し、立ち上がりは確認できない。

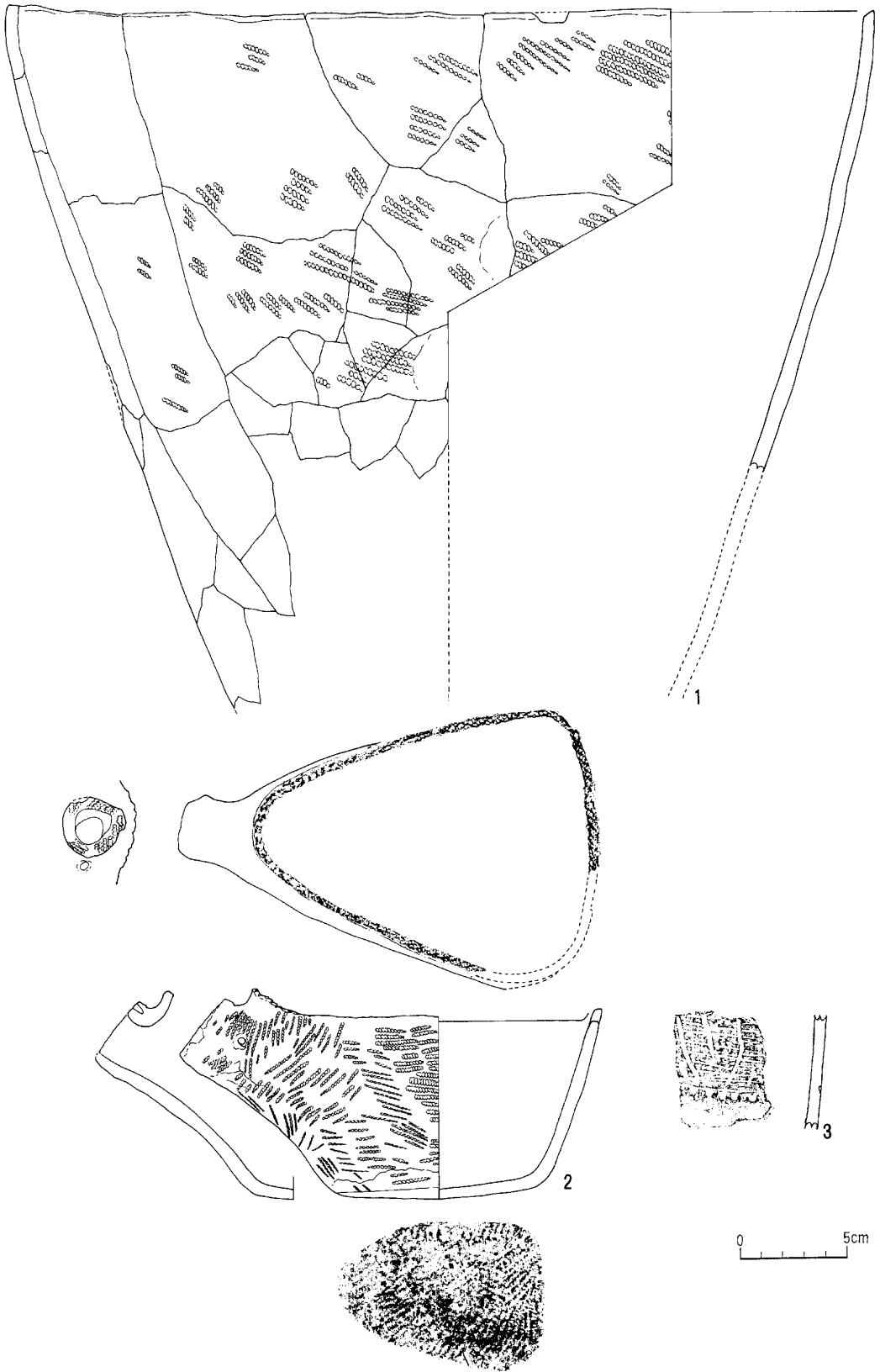
埋土は褐色砂層を基本に3枚の黒色砂層が堆積し、底面に堆積する黒色砂層からは第128図に示す縄文晩期中葉の完形土器2点と他の区域の同層からも破片が出土している。また、長さ約70cm、幅約40cmの焼土も検出している。上面にはこれまで続縄文期の墓墳が検出されている。

当初、溝状跡と思われていたが片面だけの立ち上がりのため明確な溝とは断定できないが、縄文晩期中葉かそれ以前に自然作用の影響を受けて形成されたものと考えられる。

遺 物 (第128図, 図版35-1, 2)

第128図-1はD82グリッド出土である。胴下部から底部にかけて欠失するものの、口径約38cmの特大土器である。口唇部は内削ぎ状となり、胴部文様は斜位縄文である。器面には煤が顕著に付着する。この2点は縄文晩期中葉に比定される。3は縄文晩期幣舞式。

2はE84グリッド出土である。上面観が三角形を呈した異形な注口土器である。口縁部の最大径は約16cm、器高は約8cmである。注口部には2個小孔が穿たれている。口唇部は注口部で刻みがみられるものの、他は縄文が押捺される。胴部文様は横位の縄文である。立てると斜めに傾く不安定な土器である。(武田 修)



第128図 自然営力による段差(1~3)出土土器

小河川跡

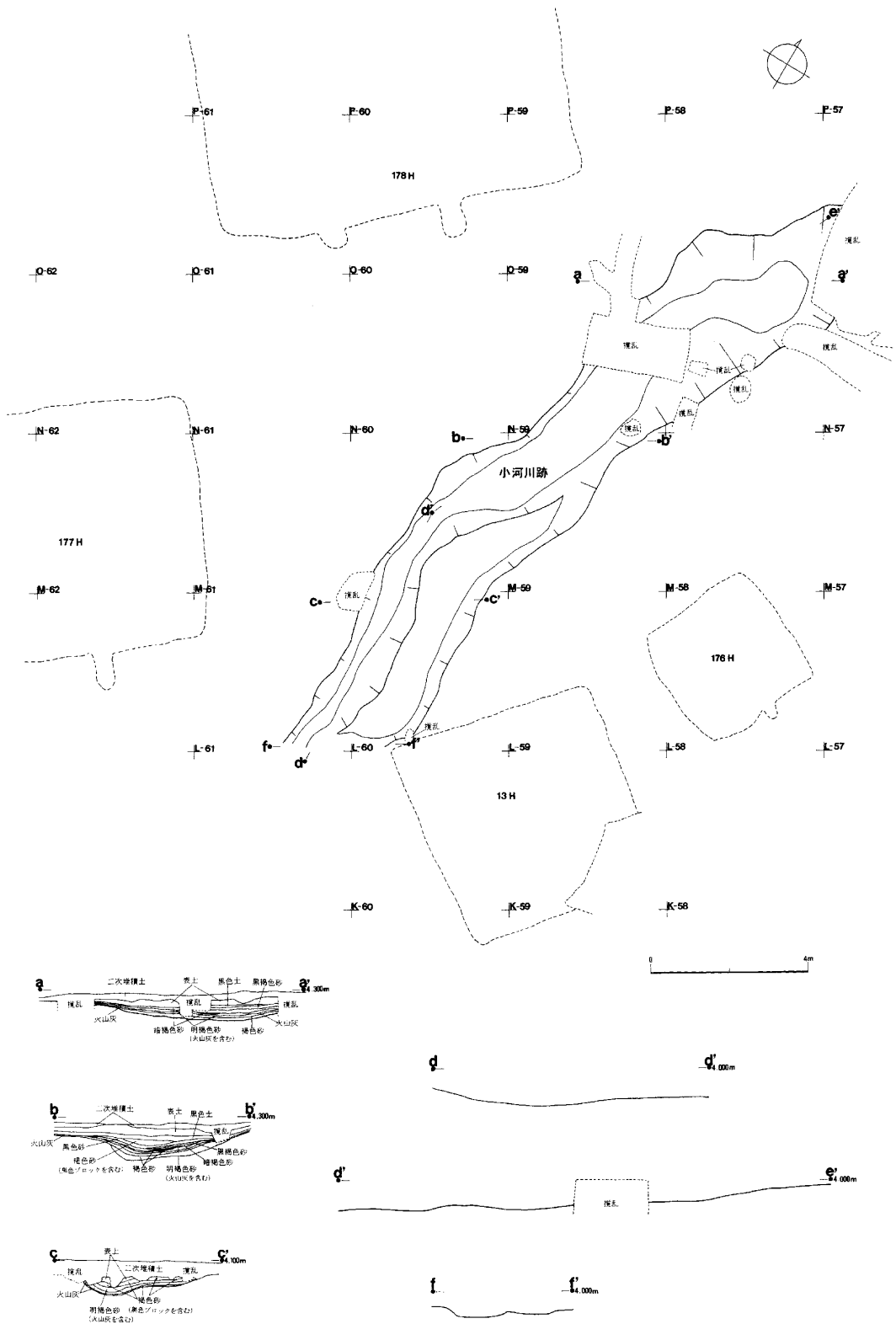
遺構 (第129図, 口絵1-2)

小河川跡は O57グリッドから南の方向の L59, L60グリッドにかけて長さ約20mにわたって検出された。幅は狭いところで2m、広いところで3mを測る。深さは30~60cmで埋土下層には数mmから1cmの軽石を多量に含む火山灰が検出されている。

埋土上層の黒色土層から図示していないが宇田川編年後期に比定される擦文土器が検出されていることから擦文期にはすでに埋没していたと考えられる。平成1年度に調査している小河川跡に続くものと考えられる。 (佐々木 覚)

中河川跡

中河川跡は T67・68グリッドから南東方向に延び、幅が約10mと最大となる L67~L69グリッド付近からは東側に緩やかに蛇行しており、G63・64グリッドまで約60mにわたって存在する。河川の両側は O67・68グリッド付近から北側は急であるが、南側では緩やかである。深さは Q67・68グリッド付近では約80cmと深くなっており、G63・64グリッド付近では約10cmと浅くなる。河川跡の底から図示していないが擦文期の土器が出土していることから擦文期の河川跡と考えられるが、177号堅穴から約16m、178号堅穴から約25mと近いことからこの時期の水場の可能性も考えられる。 (佐々木 覚)



第129図 小河川跡平面図

第V章 ピ ッ ト

ピ ッ ト 1201

遺 構 (第130図, 図版36-1)

本ピットはH' 93, I' 93グリッドに位置し、長軸約0.63m、短軸約0.55mの不整円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。本来はさらに上層から掘り込まれていたものと思われるが、確認面までピットの輪郭が把握できなかった。床面からは第131図-1の土器が出土している。

遺 物 (第131図-1, 図版36-2)

第131図-1の土器は口唇部を欠いている。口径6.8cm、胴部の最大径11cm、器高13.4cm、器厚は8~9mmを測る。口縁部には2本の沈線に挟まれた刻み列が3本あり、刻み列下の頸部はくびれている。胴部は卵形を呈しており、底部から3分の1のところ膨らみが最大径となる。この最大径となる部分に径8mmの円形小孔が1個穿たれている。小孔の約2cm上に沈線を横方向に1本巡らせて文様帯を区画している。この沈線の上と下に曲線の沈線と羽状縄文で構成された磨消縄文の文様がある。胎土には砂が混入されており、色調は暗茶褐色を呈している。縄文後期末葉の栗沢式と考えられる。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1202

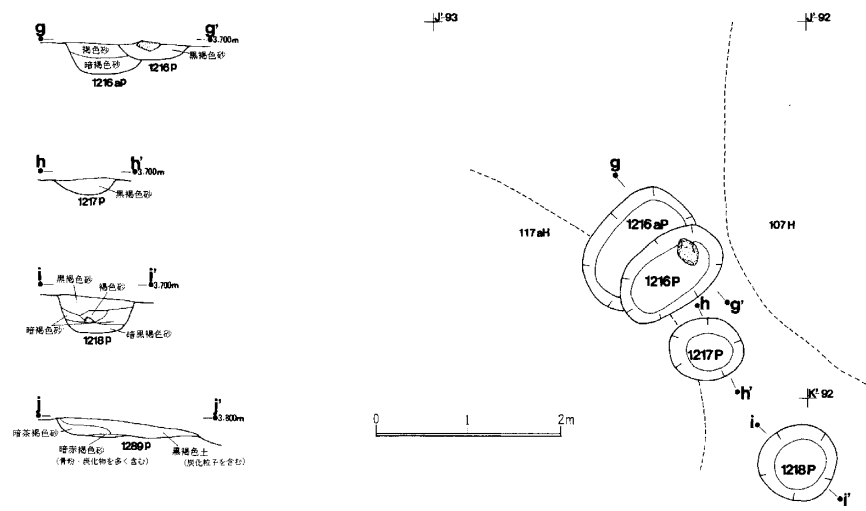
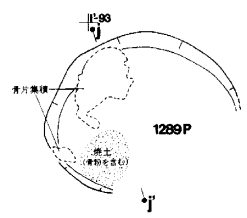
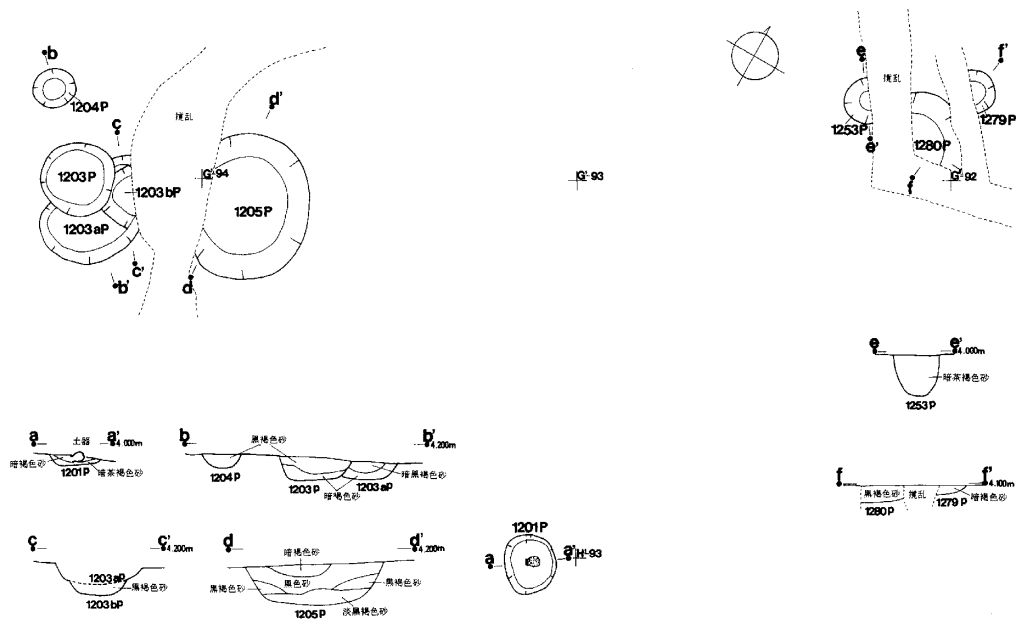
遺 構 (第155図)

本ピットはG' 91グリッドに位置し、規模は長軸約1.10m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から38cmを測る。埋土は4層で床面からは遺存体と考えられる粘性をもった暗茶褐色砂が検出された。遺存体の上から第132図-1・2の石鏃が出土している。土壙墓と考えられるが、時期は不明である。

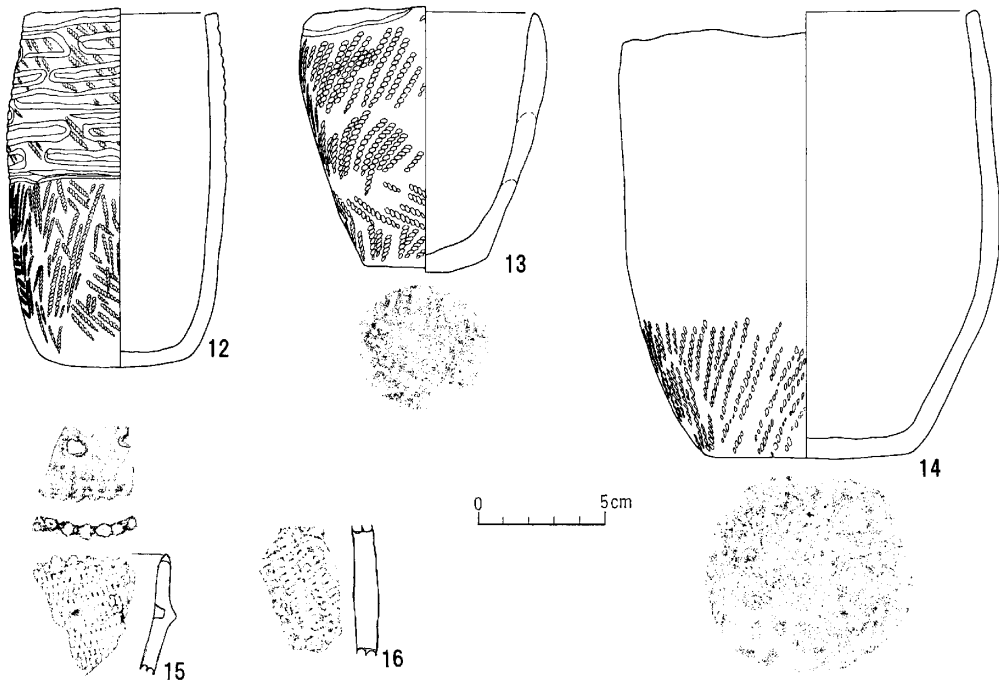
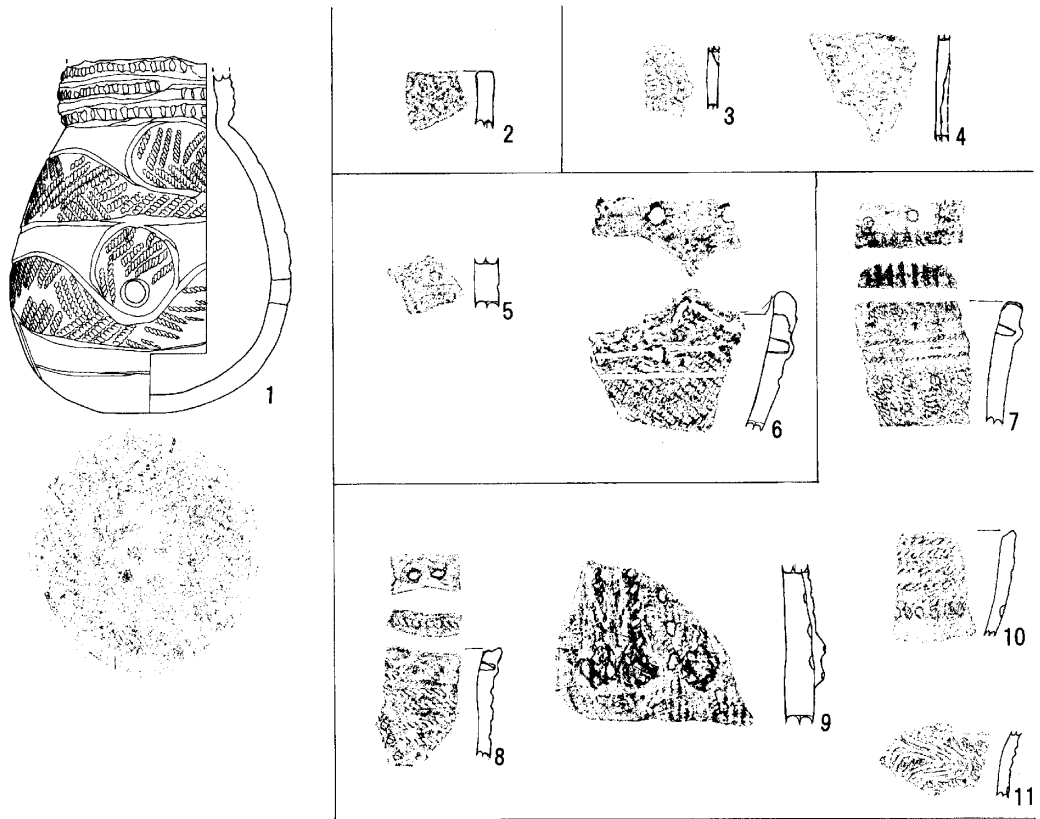
遺 物 (第131図-2, 第132図-1・2)

第131図-2は埋土出土の続縄文。

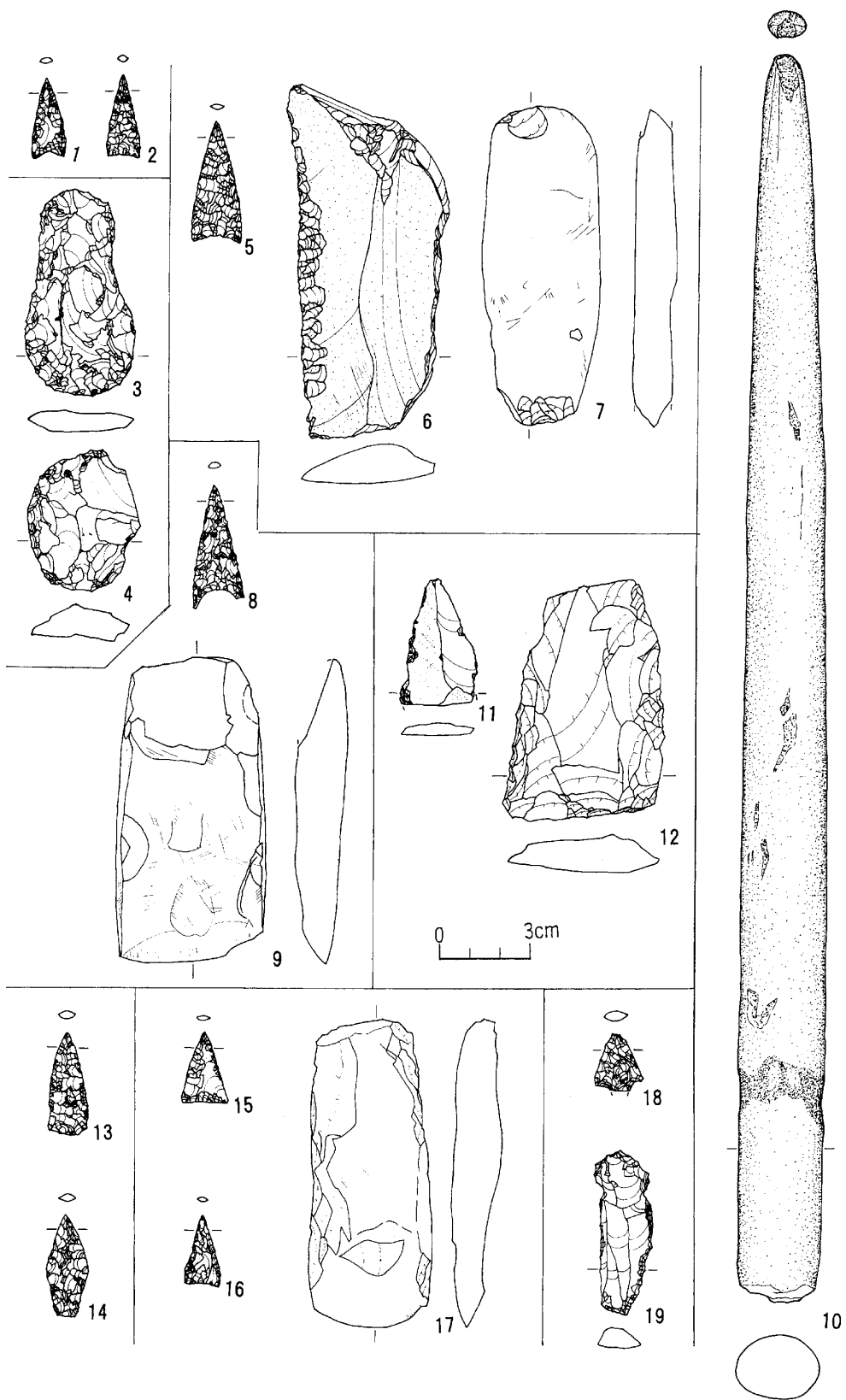
第132図-1・2は遺存体の上から出土した無茎の石鏃で黒曜石製である。(佐々木 覚)



第130図 ピット1201、1203、1203a、1203b、1204、1205、1216、1216a、1217、1218、1253、1779、1280、1289平面図



第131図 ビット1201床面(1)、1202埋土(2)、1203a埋土(3・4)、1203b埋土(5・6)、1205埋土(7~11)、1209遺体上(12~14)・埋土(15・16)出土土器



第132図 ピット1202埋土(1・2)、1205埋土(3・4)、1207遺体上(5~7)、1209床面(8・9)、1210遺体上(10)、
1214埋土(11・12)、1214a 床面(13・14)、1219床面(15~17)、1221埋土(18・19)出土石器・石製品

ピ ッ ト 1203・1203a

遺 構 (第130図)

ピット1203はH' 94, G' 94グリッドに位置する。径約0.80mの円形を呈し、壁高は確認面から20cmを測る。

ピット1203aはピット1203の東側にあり北側が攪乱を受けているものの規模は長軸約1.40m、短軸約0.90mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

遺 物 (第131図-3・4)

ピット1203aの埋土から第131図-3・4の縄文晩期が出土している。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1203b

遺 構 (第130図)

本ピットはピット1203aの床面から検出された。北東側の大半が攪乱を受けているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から12cmを測る。

遺 物 (第131図-5・6)

ピット1203bの埋土からは第131図-5は擦文土器。6は縄文後期堂林式。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1204

遺 構 (第130図)

本ピットはG' 94グリッドに位置する。規模は長軸約0.46m、短軸約0.38mの小円形を呈し、壁高は確認面から15cmを測る。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1205

遺 構 (第130図)

本ピットはH' 93, G' 93グリッドに位置する。規模は長軸1.54m、短軸は西側が攪乱を受けているため不明であるものの、楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から43cmを測る。

遺 物 (第131図-7~11, 第132図-3・4, 図版36-3・4)

第131図-7~9は続縄文初頭。9・10は縄文晩期。

石器は第132図3・4は黒曜石製の削器。(佐々木 覚)

ピット 1206

遺構 (第108図)

本ピットはC80グリッドに位置する。2001年9月の集中豪雨により断面が削られたため正確な規模は不明であるが、短軸約0.70mを測る。楕円形を呈すると思われるが、遺存体の検出状況からみると小楕円形であろう。本来の壁は深かったと思われるが上部も冠水の影響等で削られ、壁高は確認面から10cmである。

床面には暗赤褐色土の遺存体のみられ、壁の周囲には径約6～8cm、深さ6～11cmの柱穴が認められた。

小括

出土遺物が無いため詳細な時期は不明であるが、形態が楕円形で東西方向に長軸をもつことや小柱穴の存在から続縄文字津内Ⅱa式の可能性が高い。(武田 修)

ピット 1207

遺構 (第108図)

本ピットはC81グリッドに位置する。ピット1206同様に集中豪雨のため東壁側が削られているが、遺存体の検出状況から判断して破壊は僅かである。従って形態は長軸推定1.30m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約10cmである。

遺存体は暗赤褐色土を呈し、上部2箇所には層厚約1～2cmのベンガラが散布されている。

遺物 (第132図-5～7、図版36-5～7)

石器は遺存体上部にあり、中央からやや西寄りから出土した。

第132図-5は無茎石鏃。6は削器。7は泥岩製の石斧。5・6は黒曜石製。

(武田 修)

ピット 1208

遺構 (第108図)

本ピットはD81グリッド位置する。規模は直径約0.40mの円形を呈する。断面は「V」字状を呈し、深さは確認面から約40cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1209

遺構 (第133図, 図版37-1)

本ピットはI'87グリッドに位置する。規模は長軸1.00m、短軸0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から32cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、この遺存体の南西側から歯骨が検出された。遺存体の上から第131図-12~14の土器3点が出土している。遺存体の中から石斧が1点、その下から石鏃1点が出土した。また、歯骨の北側に白色粘土が1点、南東側の土器の上から炭化物1点がみられたものの取り上げは不可能であった。

床面には径16~18cm、深さ7~11cmの柱穴が4本検出されている。

遺物 (第131図-12~16, 第132図-8・9, 図版37-2~6)

第131図-12は口径7.7cm、器高13.8cmの筒型の土器。口縁部から胴中央部にかけて沈線の工字文が施され、下半分は縦走縄文のみであり、底部は丸底である。13は口径9.8cm、器高10.3cm。口縁部に沈線文を1条巡らす、その下は縄文の地文のみであり、底部は丸底である。14は口径14.2cm、器高17.6cm。口唇部に浅い刻みをもち、胴部3分の2は無文、3分の1は縄文の地文で平底である。3点とも続縄文初頭。15は突瘤文をもつ縄文晩期前葉。16は縄文中期。

石器は第132図-8は床面から出土した無茎石鏃で黒曜石製。6は遺存体の中から出土した緑色泥岩製の片刃磨製石斧。

小括

本ピットは長軸北東-南西方向にあり、頭位は歯骨の位置から南西方向である。続縄文初頭の土壌墓と考えられる。(佐々木 寛)

ピット 1210

遺構 (第134図, 図版38-1)

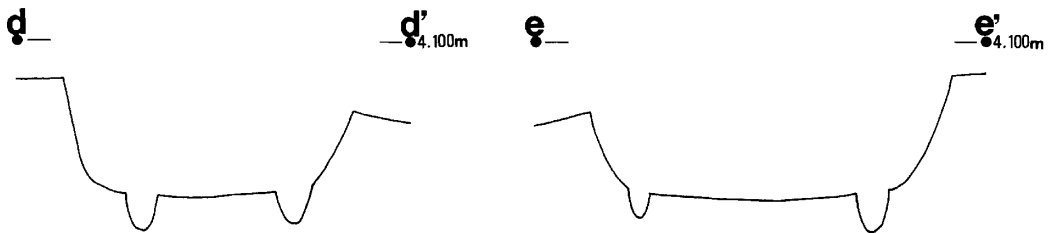
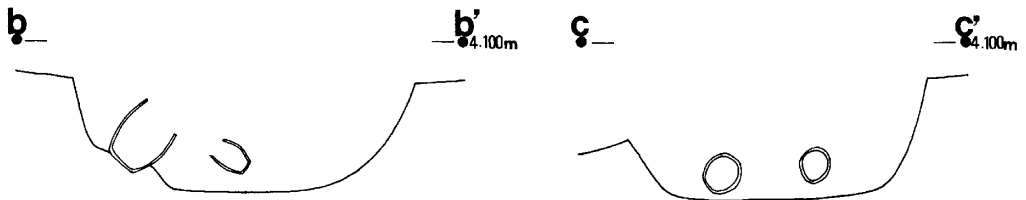
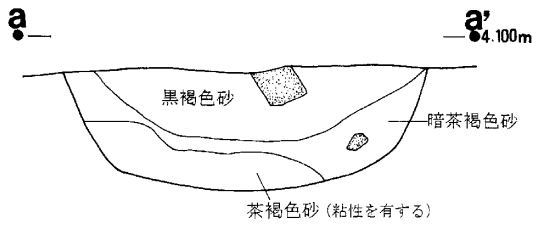
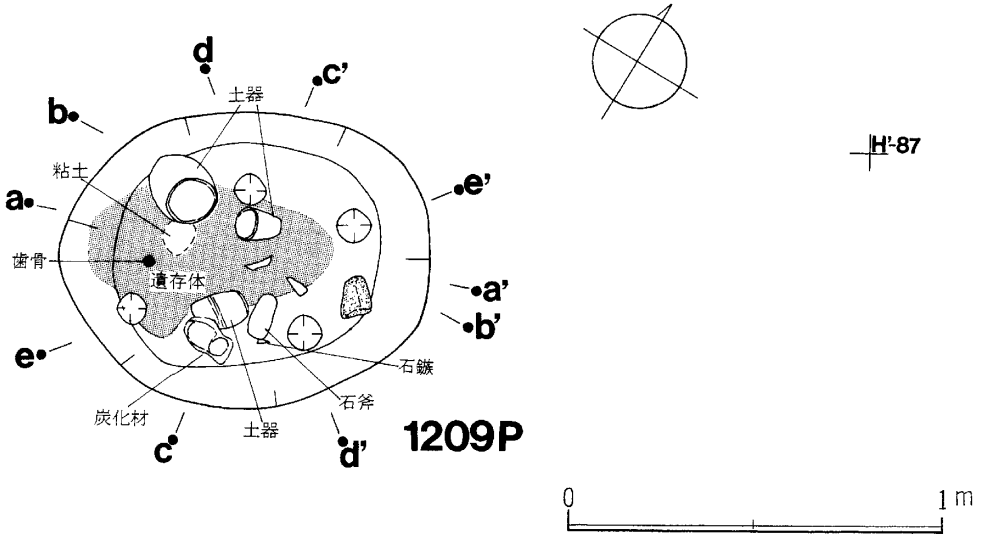
本ピットはJ'90グリッドに位置する。規模は長軸約1.26m、短軸約0.96mの楕円形を呈する。壁高は確認面から37cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。

ピットの上面には礫が2点検出されている。床面からベンガラをかけられた遺存体と思われる粘性をもった赤褐色砂が検出されたが頭位は不明である。遺存体の上から第132図-10の石剣が出土している。

遺物 (第135図-1, 第132図-10, 図版38-2)

第135図-1は埋土出土の縄文晩期。

第132図-10は遺存体の上から出土した石剣で先端部の一部は僅かに欠けている。長さは41cm、断面は28.7×22mmの楕円形で先端部が細くなっており、太いほうから約6cmのところを敲



第133図 ビット1209平面図

打による幅1～1.5cmのごく浅い窪みが全周している。

小 括

頭位は不明であるが長軸は北東－南西方向にある土壙墓である。時期は縄文初頭と考えられる。
(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1214

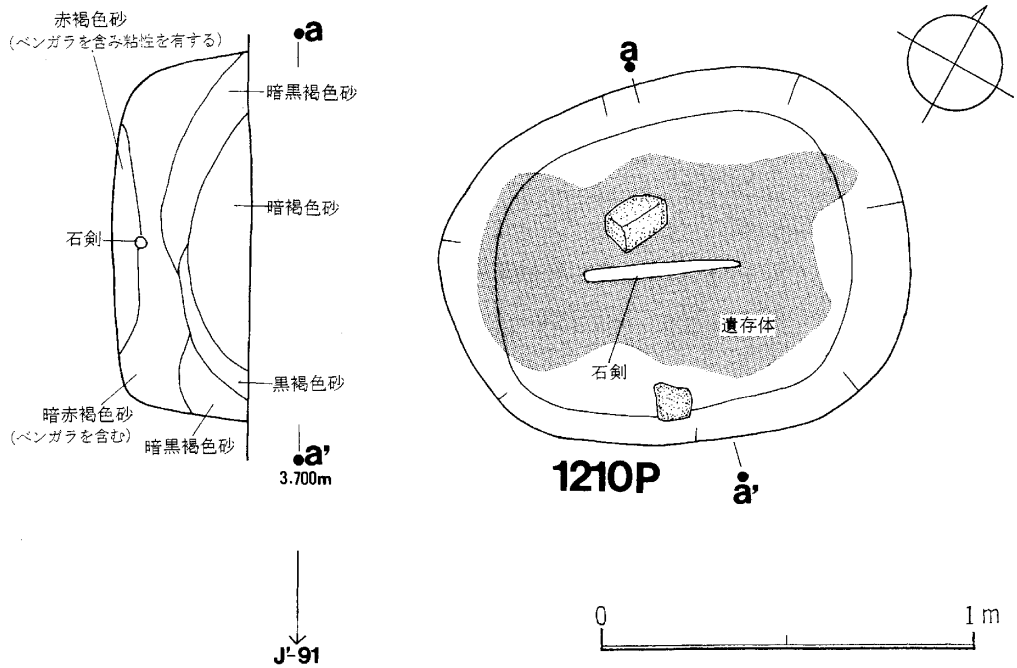
遺 構 (第151図)

本ピットはM'96グリッドに位置する。規模は径約0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から23cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面には遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂層が確認されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。

遺 物 (第135図-2, 第132図-11・12, 図版39-1・2)

遺物は埋土出土。第135図-2は縄文晩期。

第132図-11は黒曜石製の削器。12は玄武岩製のナイフ。
(佐々木 覚)



第134図 ピット1210平面図

ピ ッ ト 1214a

遺 構 (第151図)

本ピットはピット1214の東側に位置する。規模は長軸約0.82m、短軸約0.76mの円形を呈する。壁高は確認面から16cmを測り、斜めに立ち上がる。

床面にはベンガラを含む遺存体と思われる粘性をもった赤褐色砂が検出され、第132図-13・14の石鏃が出土している。土壌墓と考えられるが、時期は不明である。

遺 物 (第135図-3・4, 第132図-13・14, 図版39-3・4)

第135図-3・4は埋土出土の縄文後期堂林式。

第132図-13・14は床面出土の石鏃。13はメノウ製。14は硬質頁岩製。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 1215

遺 構 (第151図)

本ピットはJ'90グリッドに位置する。規模は長軸約0.96m、短軸約0.68mの楕円形を呈し、壁高は確認面から14cmを測る。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 1216

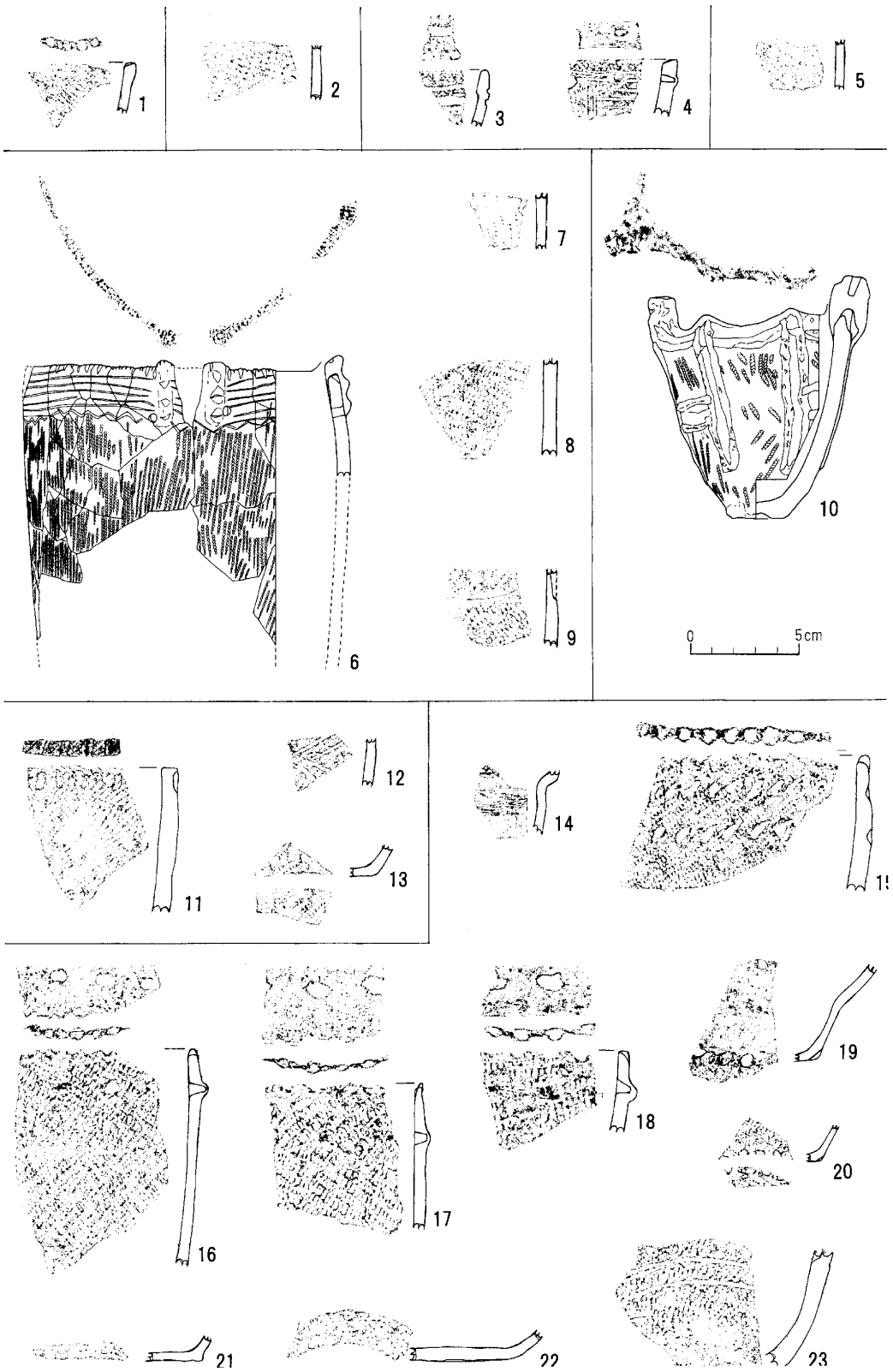
遺 構 (第130図)

本ピットはK'92グリッドに位置する。規模は長軸約1.22m、短軸約0.72mの楕円形を呈する。壁高は確認面から15cmを測る。埋土上面から礫が1点出土している。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 1216a

遺 構 (第130図)

本ピットはピット1216の西側から検出された。規模は長軸約1.34m、短軸はピット1216に切られて不明である。楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から33cmを測る。埋土からは黒曜石のフレークが2点出土したのみである。 (佐々木 覚)



第135図 ピット1210埋土(1)、1214埋土(2)、1214a埋土(3・4)、1217埋土(5)、1218埋土(6~9)、1219床面(10)、1220埋土(11~13)、1221埋土(14~23)出土土器

ピ ッ ト 1217

遺 構 (第130図)

本ピットはK'92グリッドに検出された。規模は長軸約0.78m、短軸約0.66mの楕円形を呈する。壁高は確認面から16cmを測り、壁は緩やかな皿状である。

遺 物 (第135図-5)

第135図-5は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1218

遺 構 (第130図)

本ピットはL'91・92グリッドに位置する。規模は径約0.80mの円形を呈し、壁高は確認面から38cmを測る。埋土上面から第135図-6の土器が出土している。

遺 物 (第135図-6～9, 図版39-5)

第135図-6の口径は長軸18cm、短軸14.5cmの楕円形を呈する。器高は底部が欠失しているため不明である。口縁部の長軸上に2個1対の隆帯を垂下させ、短軸上に1対の隆帯を垂下させる。長軸上の2個1対の隆帯の両脇には1個ずつ小孔を配す。口唇部に刻みを施し、口縁部には5～6条の沈線文と1条の波状の沈線文を巡らせる。縄文晩期幣舞式。7～9は縄文晩期中葉。

(佐々木 寛)

ピット 1219

遺構 (第136図)

本ピットはK'89グリッドに位置する。規模は長軸約0.68m、短軸約0.52mの楕円形を呈し、壁高は確認面から10cmと浅いが、本来は第Ⅱ層の茶褐色砂層から掘り込まれていたものと考えられる。

西側の床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、その中から歯骨が検出されている。

床面直上の埋土中から小礫が5点出土し、第135図-10の土器、第132図-15~17の石斧と石鏃が床面から出土している。土器の上には粘土塊がみられた。

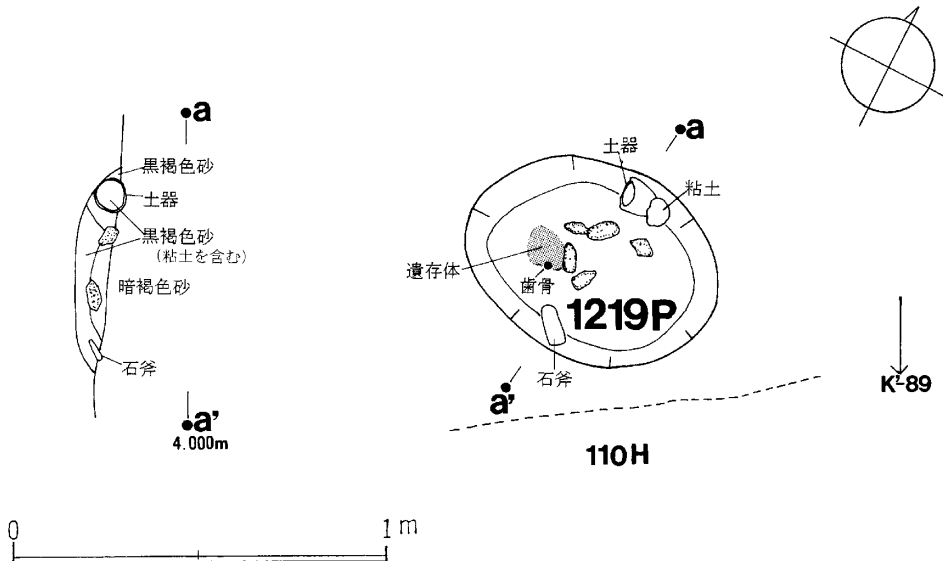
遺物 (第135図-10, 第132図-15~17, 図版40-1~4)

第135図-10は床面から出土した口径8cm、器高10.3cmの宇津内Ⅱb式の小型土器。口唇部に1対の突起と2個1対の小突起をもち、口縁部に2条の隆帯を巡らす。6個の突起からはそれぞれ隆帯を垂下させ、横方向の隆帯で連結している。

第132図-15・16は黒曜石製の無茎石鏃。17は青色泥岩製の磨製石斧。

小括

本ピットは統縄文字津内Ⅱb式期の土壙墓である。頭位は西であり、長軸は西-東方向にある。
(佐々木 寛)



第136図 ピット1219平面図

ピ ッ ト 1220

遺 構 (第137図)

本ピットはN' 93・94グリッドにかけて検出した。規模は長軸約0.95m、短軸約0.86mの円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり高さは確認面から54cmを測る。

遺 物 (第135図-11~13)

第135図-11~13は埋土出土の縄文晩期。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1221

遺 構 (第137図)

本ピットはN' 94グリッドに位置する。規模は長軸約1.12m、短軸約0.78mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。

遺 物 (第135図-14~23, 第132図-18・19, 図版40-5・6)

遺物はすべて埋土出土。第135図-14は擦文土器。15~20は縄文晩期中葉。15は爪形文をもつ。16~18は突瘤文をもつ。19・20は底部。21は続縄文後北C₂・D式の底部。22・23は縄文後期。22は底部。

石器は第132図-18は有茎石鏃。19は削器。どちらも黒曜石製。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1222

遺 構 (第127図)

本ピットはD83・84グリッドにまたがって位置する。続縄文期の144号堅穴の調査中に発見できなかったものである。規模は直径約1.18mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から30cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1223

遺 構 (第137図)

本ピットはN' 94グリッドに位置し、規模は長軸約1.10m、短軸約0.92mの楕円形を呈する。壁高は確認面から30cmを測る。

遺物 (第139図-1~9)

第139図-1~7は縄文晩期中葉。1は縄線文。2・3は沈線文。7は刺突文。8は突瘤をもつ縄文晩期前葉。9は縄文後期。
(佐々木 寛)

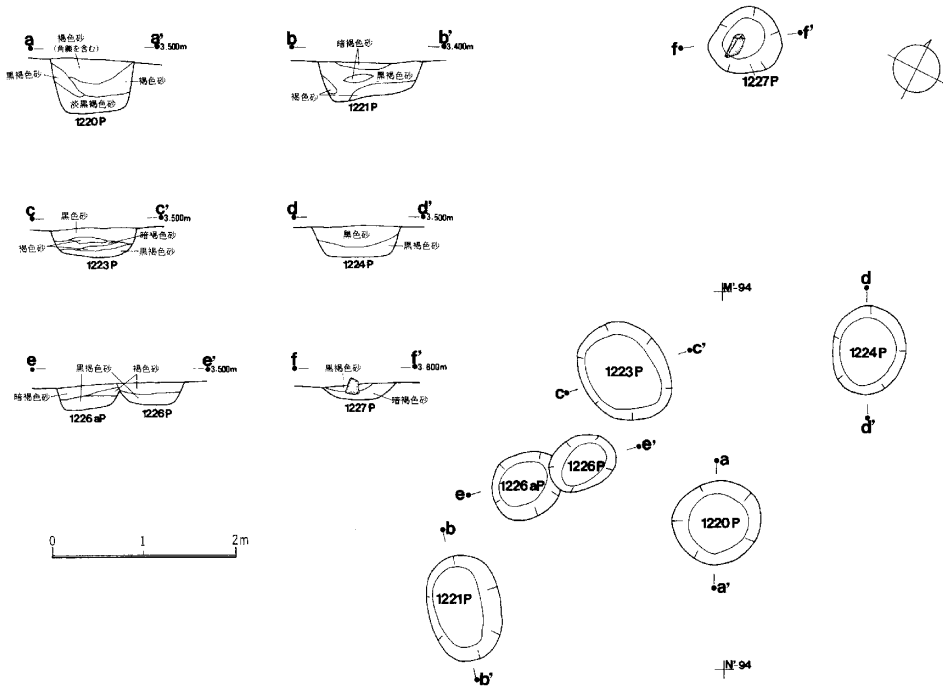
ピット 1224

遺構 (第137図)

本ピットはN'93グリッドに位置し、規模は長軸約0.92m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から32cmを測る。

遺物 (第139図-10~12)

第139図-10・11は縄文晩期中葉。12は突瘤をもつ縄文晩期前葉。
(佐々木 寛)



第137図 ピット1220、1221、1223、1224、1226、1226a、1227平面図

ピ ッ ト 1225

遺 構 (第138図, 図版40-7, 図版41-1・2)

本ピットはI'90, J'90グリッドにかけて位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から57cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

当初からピットの上面から大型の礫が認められ、埋土の黒褐色砂層中からも多数の大きな礫が出土している。

黒褐色砂層の下には暗茶褐色砂が堆積し、さらにその下の床面からは遺存体と考えられるベンガラを含み粘性をもった赤褐色砂が認められた。遺存体の中からは第142図-1・2の石斧2点と軽石1点が出土している。

遺 物 (第142図-1・2, 図版41-3・4)

第142図-1・2は砂岩製の磨製石斧。

小 括

本ピットの長軸は北-南方向にあるが頭位は不明である。土壌墓の埋土中から礫が多数検出されているが同様の例はこれまで縄文晩期幣舞式に認められ、この時期の可能性がある。

(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1226・1226a

遺 構 (第137図)

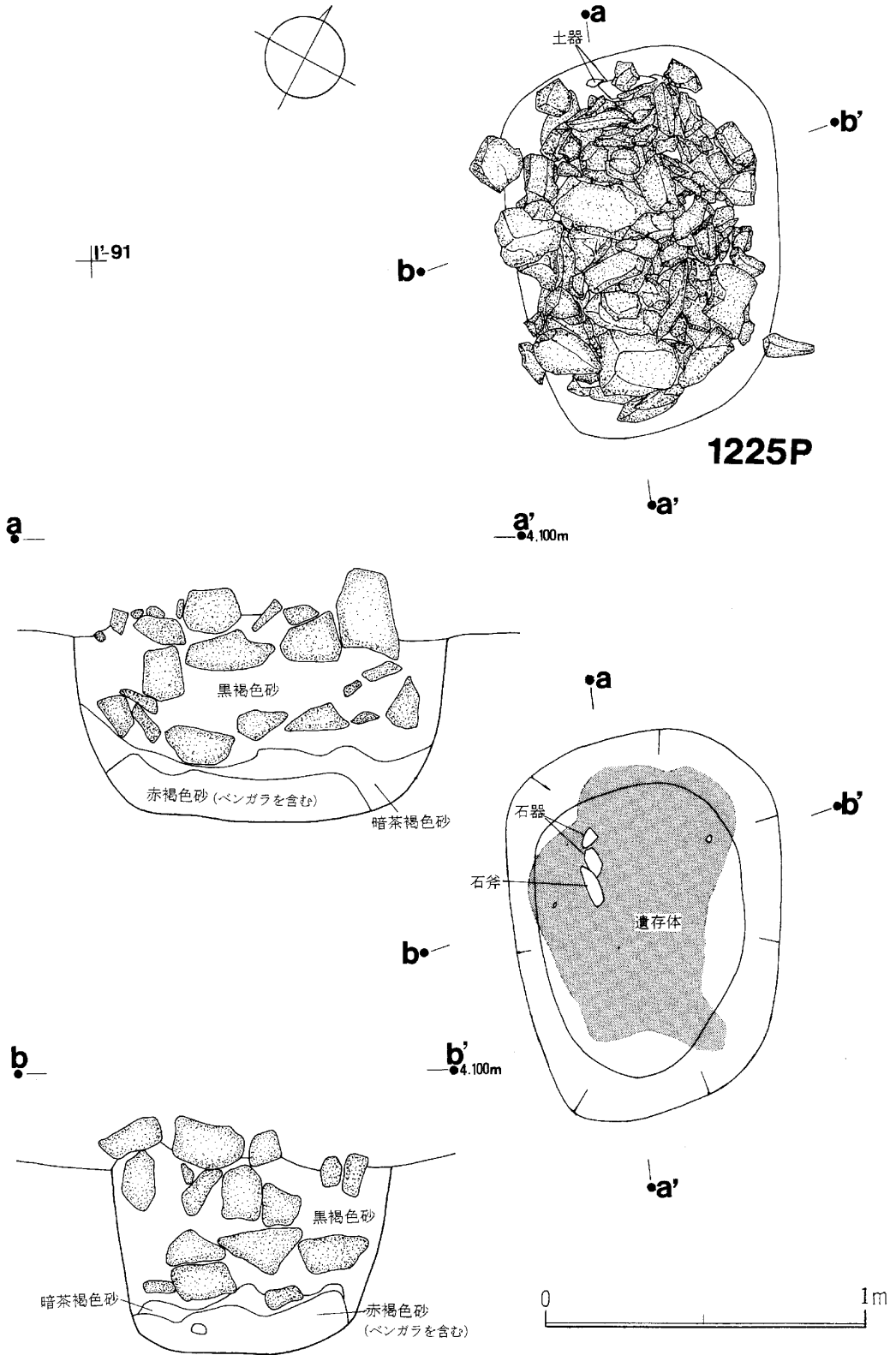
ピット1226はN'94グリッドに位置する。規模は長軸約0.74m、短軸約0.56mの楕円形を呈し、壁高は確認面から25cmを測る。

ピット1226aはピット1226の南側から検出され、規模は長軸約0.80m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁高は確認面から24cmを測る。埋土中から炭化物が出土している。

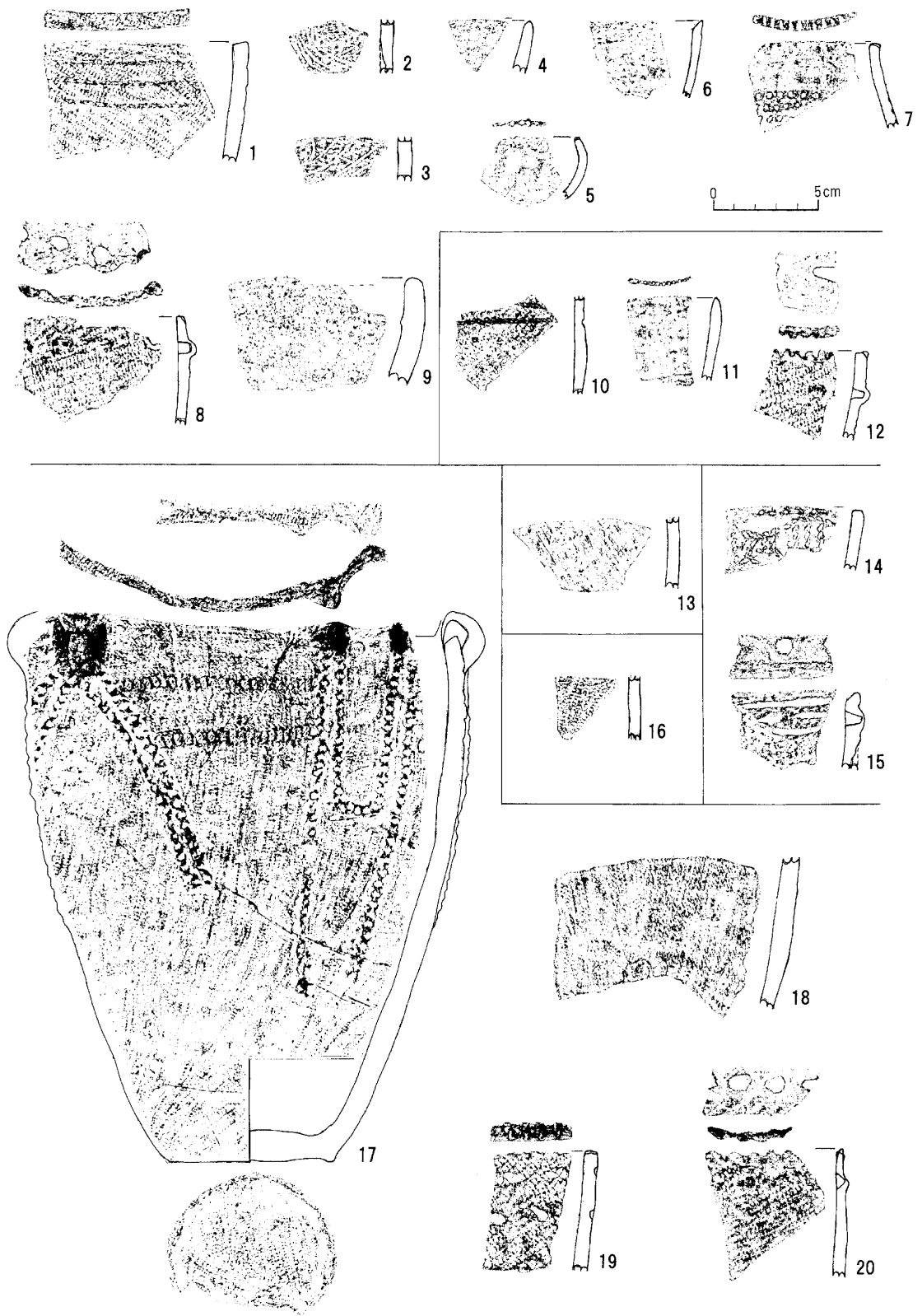
遺 物 (第139図-13~15)

ピット1226の埋土から第139図-13の縄文晩期が出土。

ピット1226aの埋土からは第139図-14は縄文晩期。15は縄文後期堂林式。(佐々木 寛)



第138図 ピット1225平面図・遺物出土状況



第139図 ピット1223埋土(1~9)、1224埋土(10~12)、1226埋土(13)、1226a埋土(14・15)、1227埋土(16)、1228埋土(17~20)出土土器

ピット 1227

遺構 (第137図)

本ピットはM'93グリッドに位置する。規模は長軸約0.76m、短軸約0.72mの不整円形を呈する。壁高は確認面から17cmである。ピット上面から礫が1点出土した。

遺物 (第139図-16, 第142図-3, 図版42-2)

遺物は埋土出土。第139図-16は縄文晩期。

石器は第142図-3が黒曜石製の削器。 (佐々木 寛)

ピット 1228

遺構 (第155図, 図版42-1)

本ピットはG'89グリッドに位置する。規模は長軸約1.88m、短軸約1.84mの不整円形を呈する。壁高は確認面から38cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。

埋土から第139図-17の土器が半分のみ出土している。

遺物 (第139図-17~20, 第142図-4・5, 図版42-3・4)

第139図-17は埋土出土の土器で宇津内Ⅱb式である。貼付文と口唇部の突起から隆帯を垂下させる。口縁部には3条の縄線文と1列の縄端瓦痕文列を2段に巡らす。器高25.5cm、口径は推定約20cmである。18は続縄文宇津内式。19は縄文晩期中葉。20は縄文晩期前葉。

石器は第142図-4は黒曜石製のナイフ。5は砂岩製の凹石。 (佐々木 寛)

ピット 1229

遺構 (第140図)

本ピットはG'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.73m、短軸約1.44mの楕円形を呈し、壁高は確認面から63cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

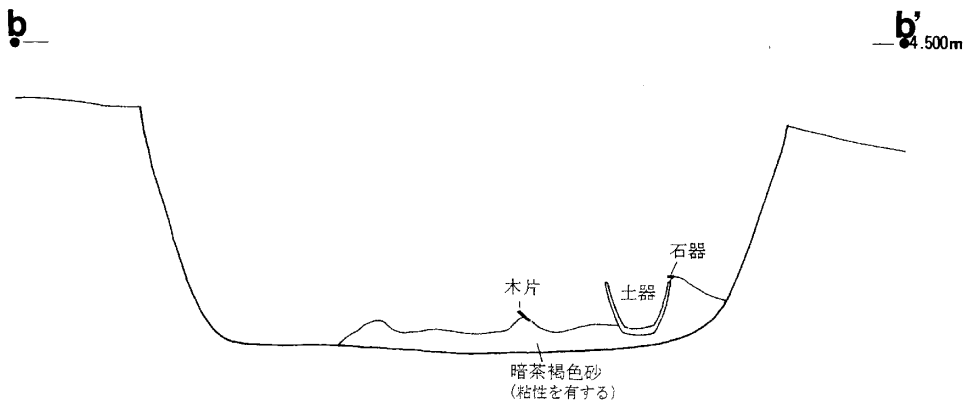
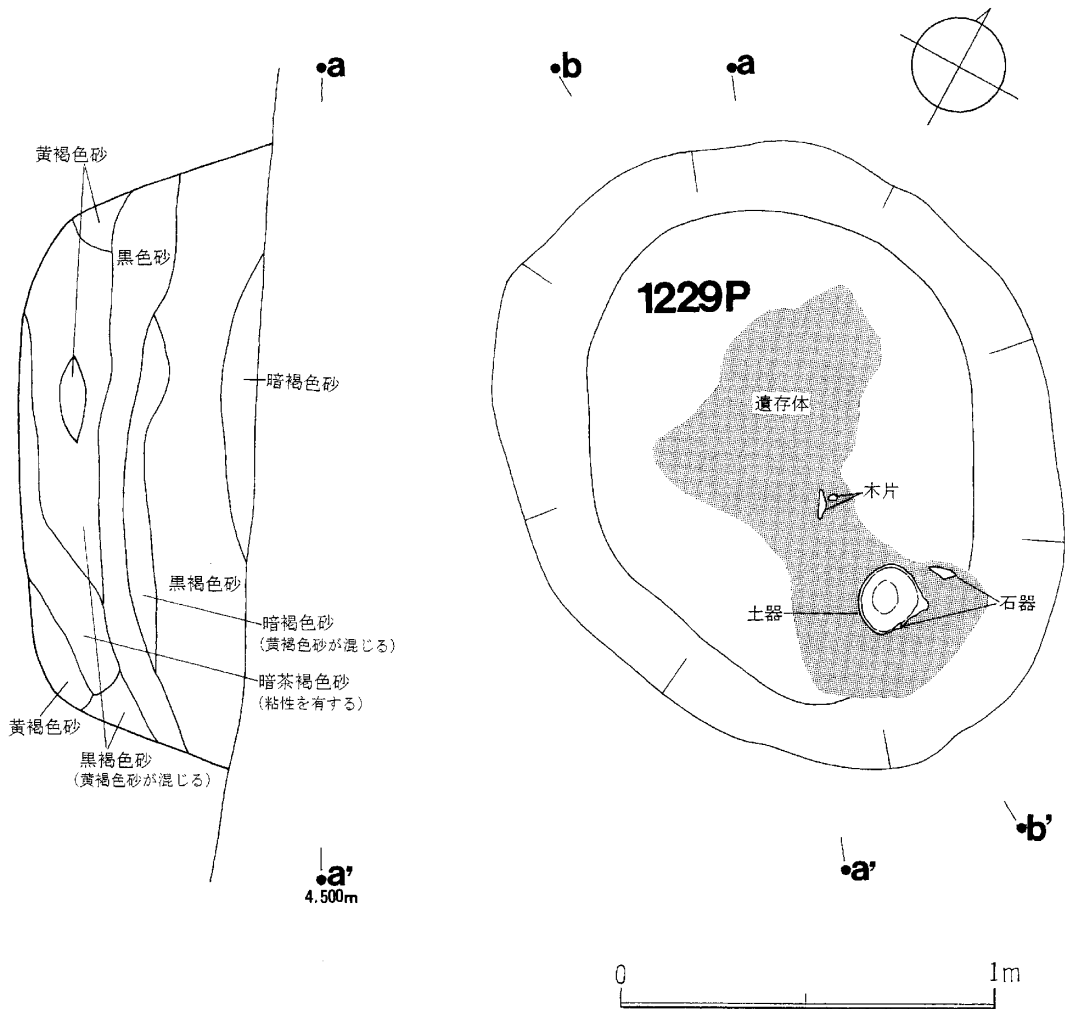
床面からは遺存体と考えられる粘性をもった暗茶褐色砂が認められたが頭位は不明である。遺存体の上から第141図-1の土器と木片が2点認められ、埋土中からは3点の石器が出土している。

遺物 (第141図-1~3, 第142図-6~8, 図版42-5~8)

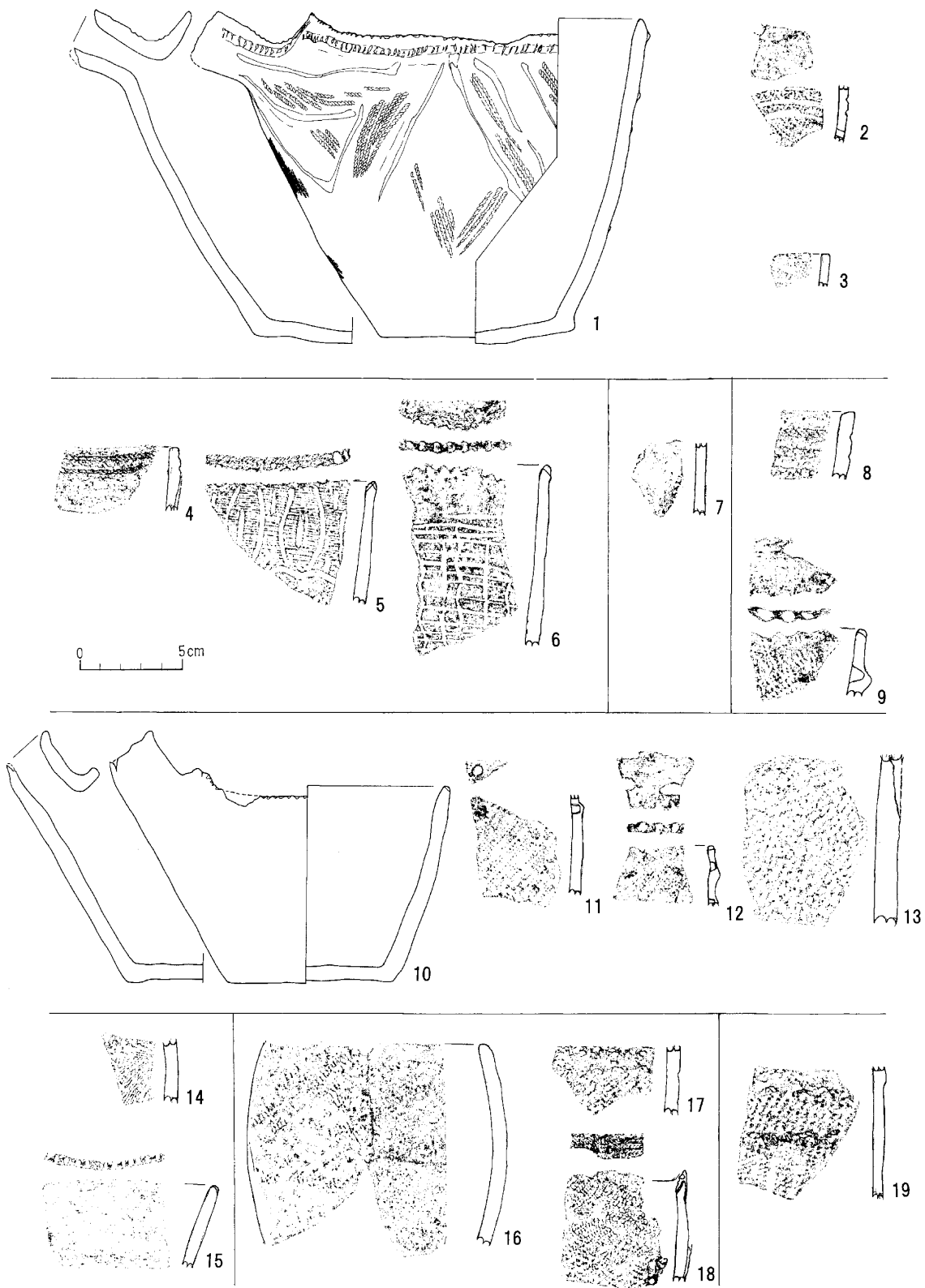
第141図-1は口径17cm、器高16.5cmの後北C₂・D式の注口土器。口唇部に刻みをもち、口縁部に擬縄隆帯を巡らす。胴部には縞縄文と断面三角の微隆起線を施し、外側に赤色顔料が付着している。2・3は縄文晩期。

石器は第142図-6が無茎石鏃。7は削器。8は片面加工のナイフ。石鏃は頁岩製。他は黒

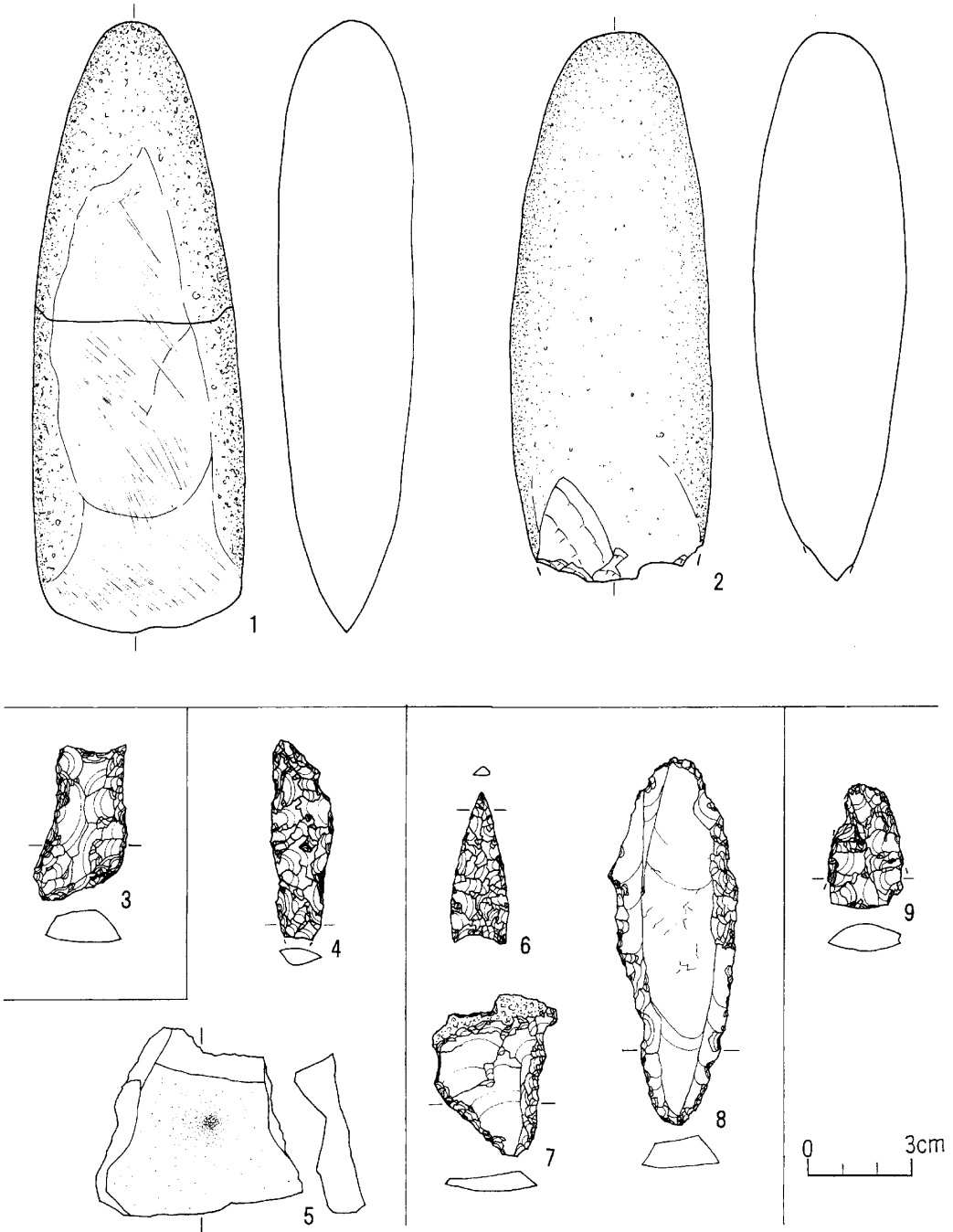
F-87



第140図 ピット1229平面図



第141図 ビット1229床面(1)・埋土(2・3)、1230埋土(4~6)、1231埋土(7)、1232埋土(8・9)、1233埋土(10~13)、1233a埋土(14・15)、1233b埋土(16~18)、1233c埋土(19)出土土器



第142図 ピット1225床面(1・2)、1227埋土(3)、1228埋土(4・5)、1229埋土(6~8)、
1231埋土(9)出土石器

曜石製。

小 括

本ピットの長軸は西-東方向にあるが頭位は不明である。床面出土の土器から統縄文後北C₂・D式期と考えられる。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1230

遺 構 (第169図)

本ピットはF' 87・88, G' 87・88グリッドに位置する。規模は長軸約1.90m、短軸約1.52mの楕円形を呈し、壁高は確認面から26cmを測る。

遺 物 (第141図-4~6)

第141図-4は統縄文初頭。5・6は縄文晩期幣舞式。すべて埋土出土。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1231

遺 構 (第169図)

本ピットはE' 87, F' 87グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.96mの楕円形を呈し、壁高は確認面から18cmを測る。

遺 物 (第141図-7, 第142図-9)

遺物は埋土出土。第141図-7は縄文晩期。

石器は第142図-9は黒曜石製のナイフ。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1232

遺 構 (第143図, 図版43-1)

本ピットはF' 88グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂層を剥土し、第Ⅲ層の褐色砂層が現れた段階で初めてピットの輪郭と粘性をもった茶褐色砂が認められた。埋土は暗褐色砂と遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂の2層であり、暗褐色砂の上面から礫が11点出土した。

埋土の暗褐色砂を剥土すると南側の壁際から第144図-4・5の石斧、遺存体の上からは第144図-1~3の石器が出土した。

規模・形態は長軸約1.42m、短軸約0.98mの楕円形を呈し、壁は確認面から30cmを測り、斜めに立ち上がる。遺存体の上からは歯骨を検出した。

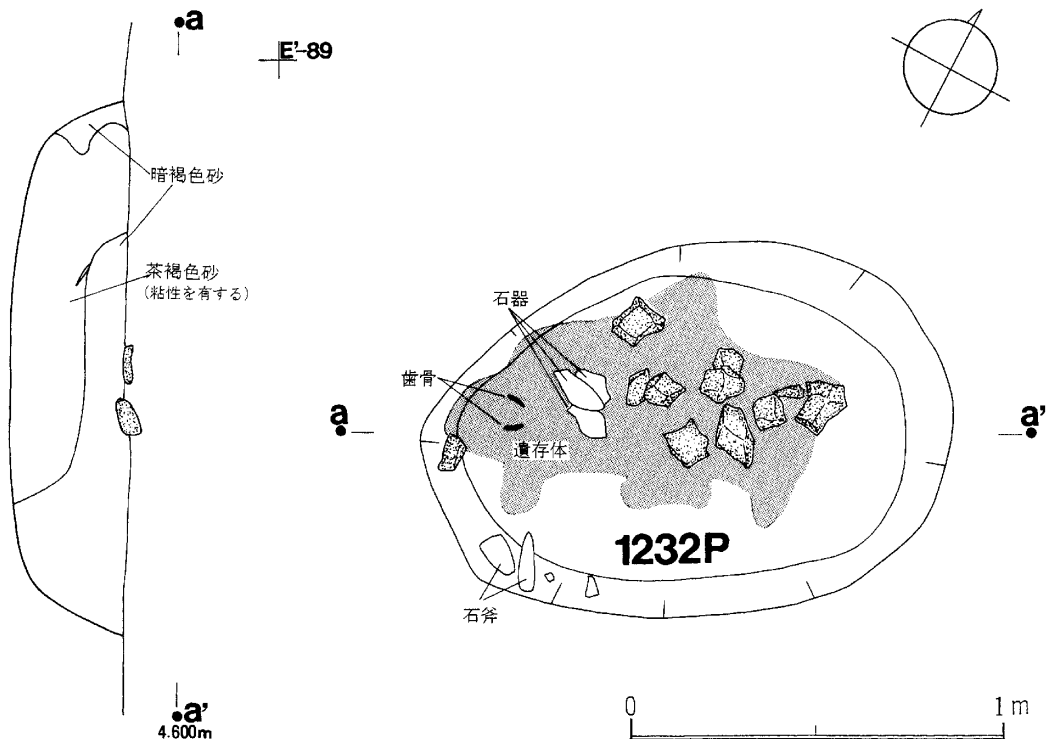
遺 物 (第141図-8・9, 第144図-1~5, 図版43-2~6)

第141図- 8は縄文晩期中葉。9は縄文晩期前葉。

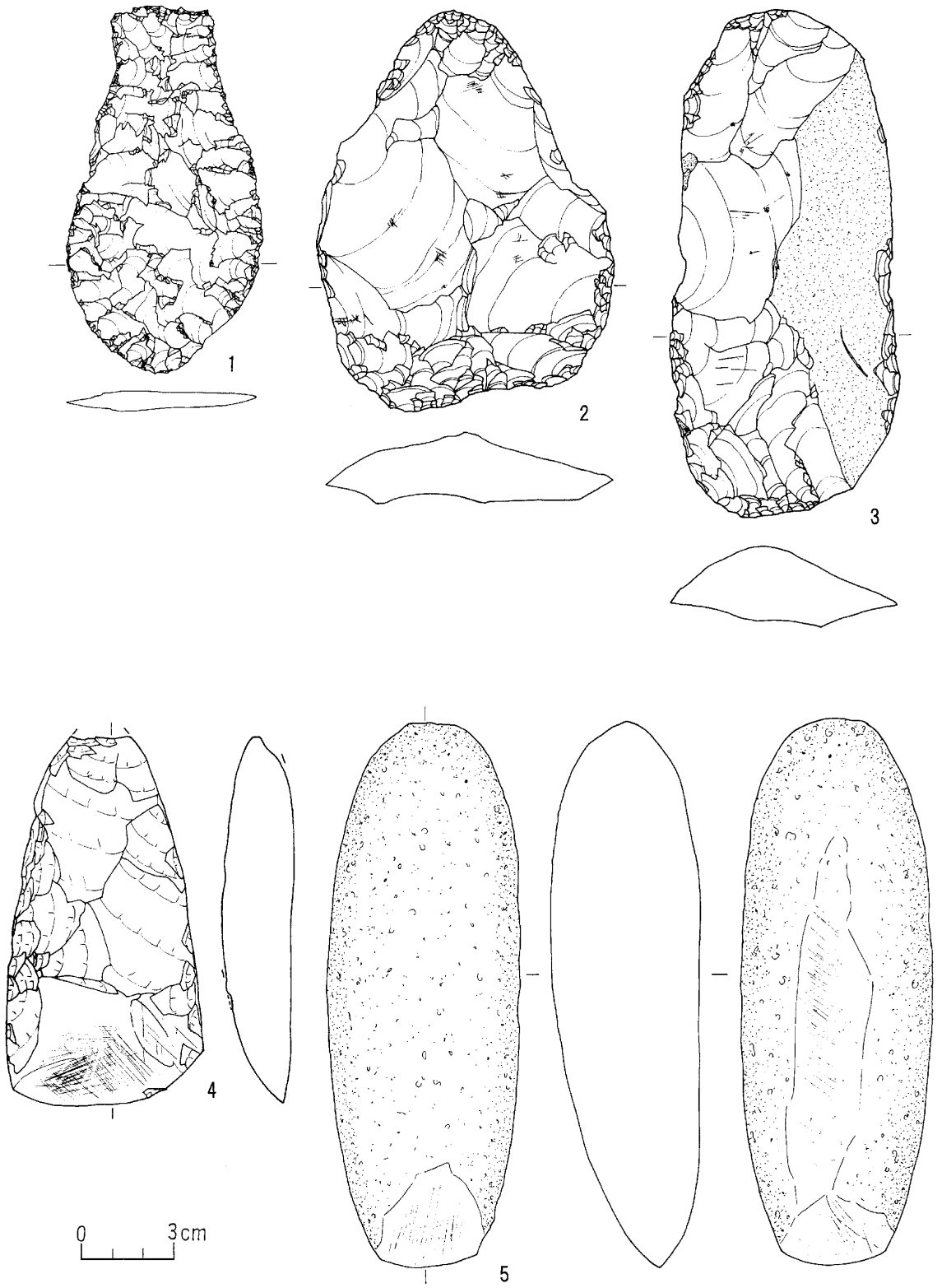
石器は第144図- 1はナイフ。2・3は大型石器。4・5は磨製石斧。4は泥岩製。5は安山岩製。石斧以外は黒曜石製。

小 括

本ピットの長軸は西-東方向にあり、頭位は西である。時期は大型石器が出土していることから続縄文初頭と考えられる。 (佐々木 寛)



第143図 ピット1232平面図



第144図 ビット1232埋土(1~5)出土石器

ピ ッ ト 1233

遺 構 (第145図, 図版44-1)

本ピットはF'87グリッドに位置し、規模は長軸約1.13m、短軸約0.98mの楕円形を呈する。壁高は確認面から22cmを測り、斜めに立ち上がる。

床面には遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が堆積し、遺存体の中からは歯骨が検出された。また埋土上層からは第141図-10の土器が出土している。

遺 物 (第141図-10~13, 図版44-2)

第141図-10は口唇部に刻みをもち、胴部は無文である。後北C₂・D式の注口土器。11は続縄文初頭。12は縄文晩期前葉。13は縄文中期。

小 括

本ピットの長軸は北西-南東方向にあるが、歯骨はピットのほぼ中央で検出されている。時期は出土土器から続縄文後北C₂・D式期と考えられる。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1233a

遺 構 (第146図, 図版45-1)

本ピットはピット1233の東側に検出された。規模は長軸約1.56m、短軸約1.32mの楕円形を呈する。壁高は確認面から62cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

ピットの埋土を剥土すると埋土中から大きな礫が1点出土した。その下からは粘性をもった暗茶褐色砂が認められ、その上面と中から第147図-17・18の石鏃2点、大型石器2点、石斧1点、自然石1点の他にも黒曜石フレーク2点、黒曜石原石1点、頁岩残核1点、骨片1点が出土した。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂があり、第147図-1~16の石鏃が出土し、床面には径12~20cm、深さ5~11cmの柱穴が6本検出された。

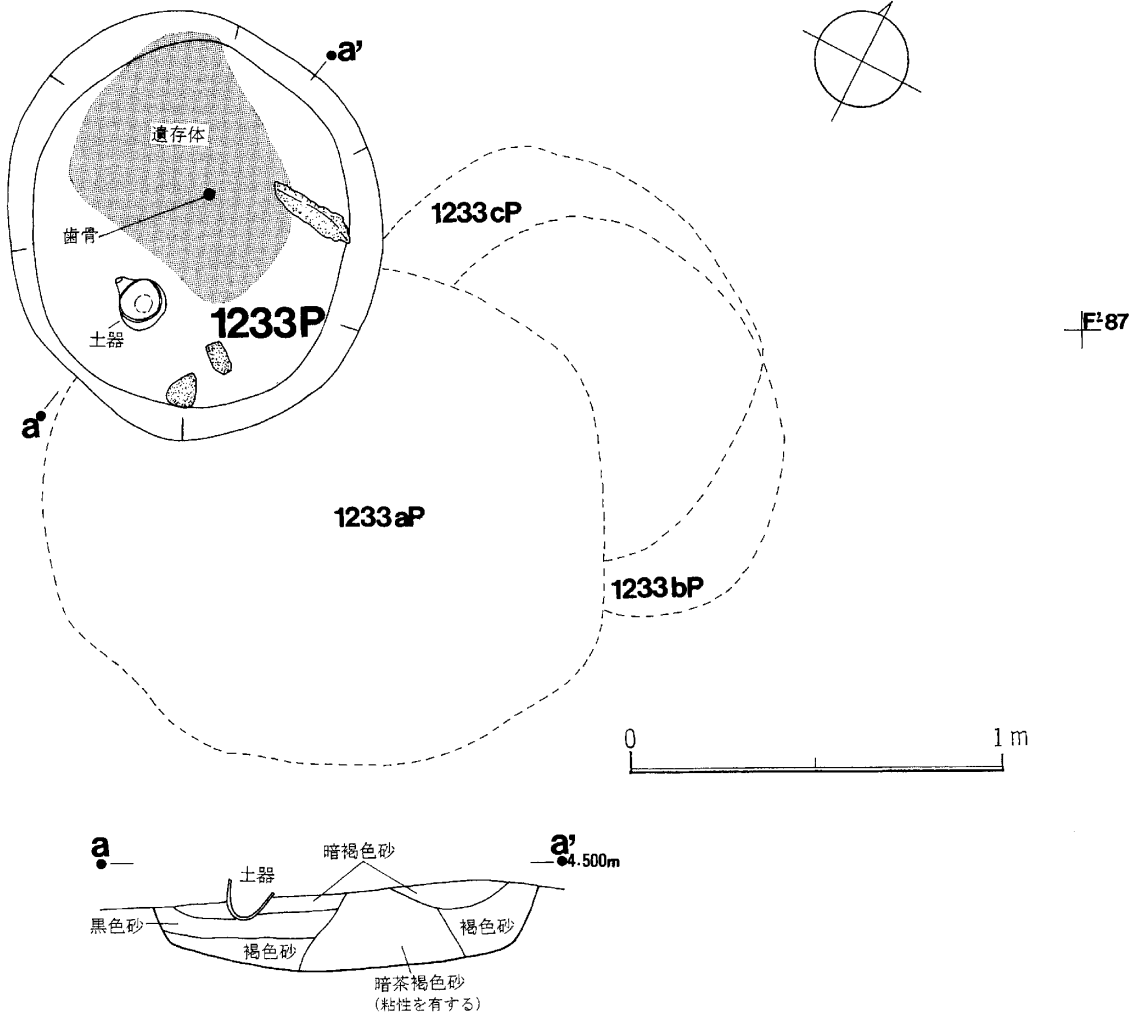
遺 物 (第141図-14・15, 第147図, 図版45-2~24)

第141図-14・15は埋土出土の縄文晩期。

石器は第147図-1~16は遺存体の中から出土した無茎石鏃。埋土中から17・18は有茎石鏃。19は削器。20・21は大型石器。22は緑色泥岩製の磨製石斧。23の中央は窪む自然石であるがこのような形の自然石をもつ土墳墓は他にも検出されており、意識して副葬したものと考えられる。22・23以外は黒曜石製。

小 括

本ピットの長軸は西-東方向にあり、頭位は遺存体の形態から西と思われる。時期は続縄文初頭と考えられる。(佐々木 覚)



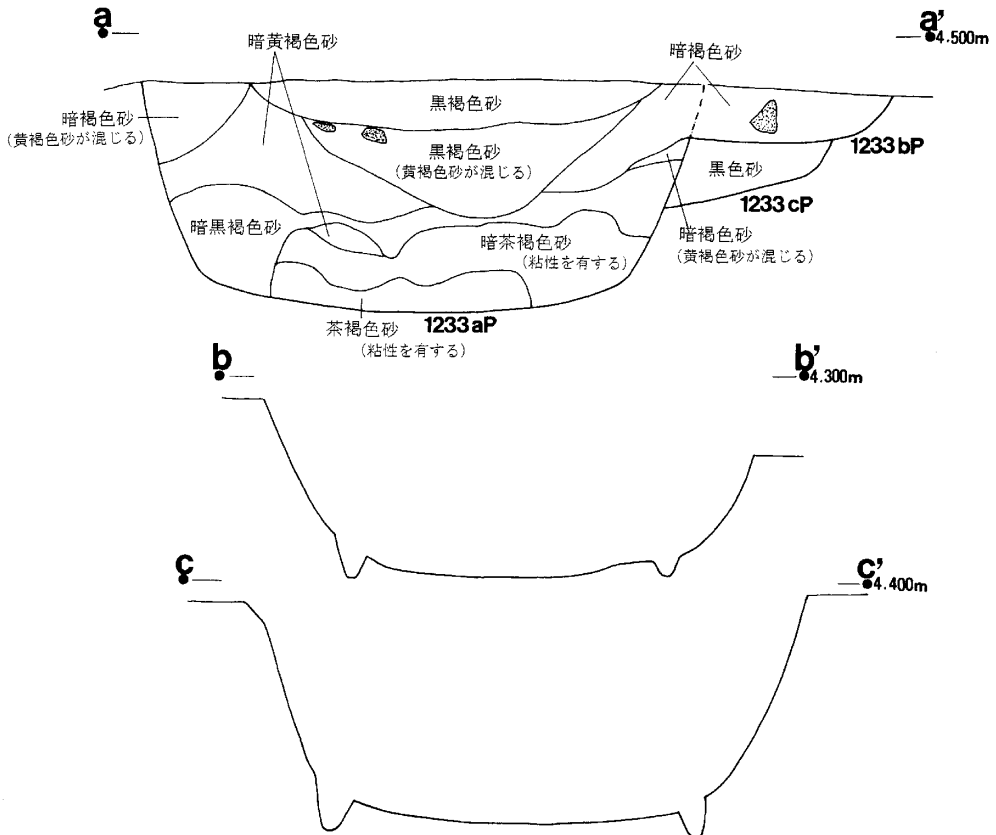
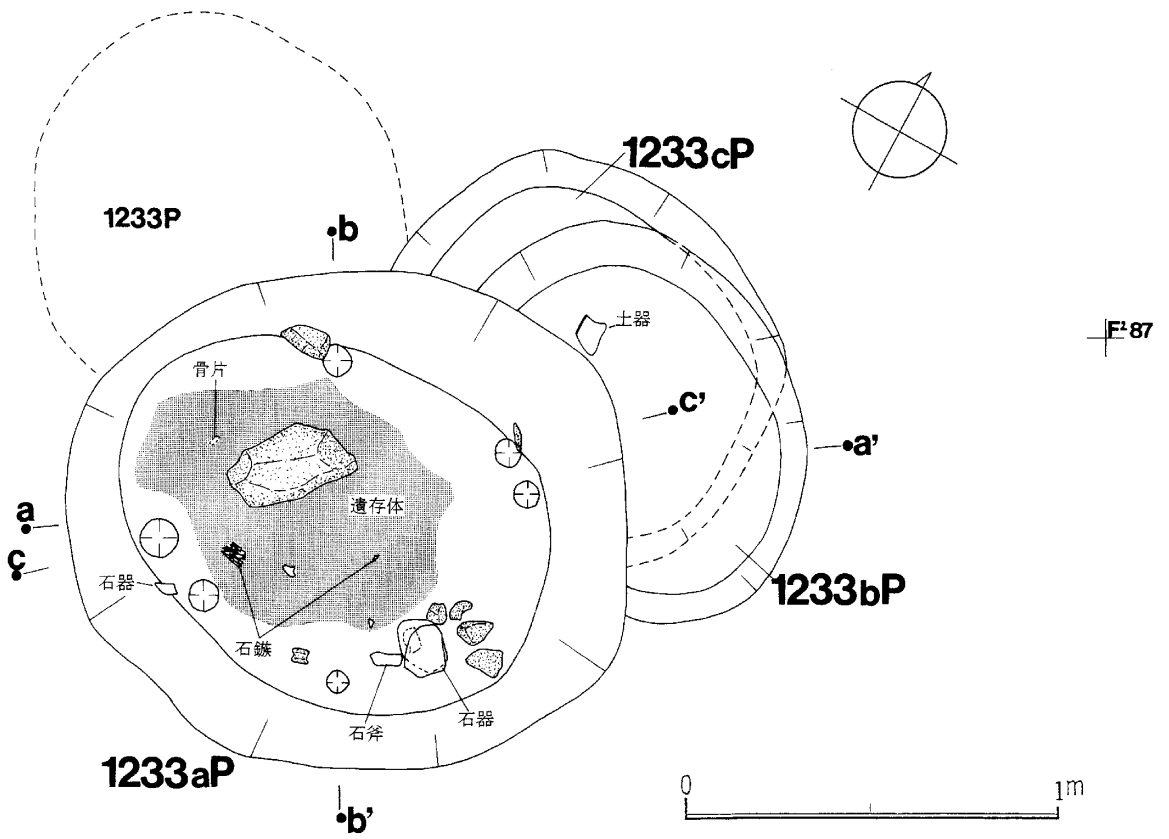
第145図 ピット1233平面図

ピット 1233b・1233c

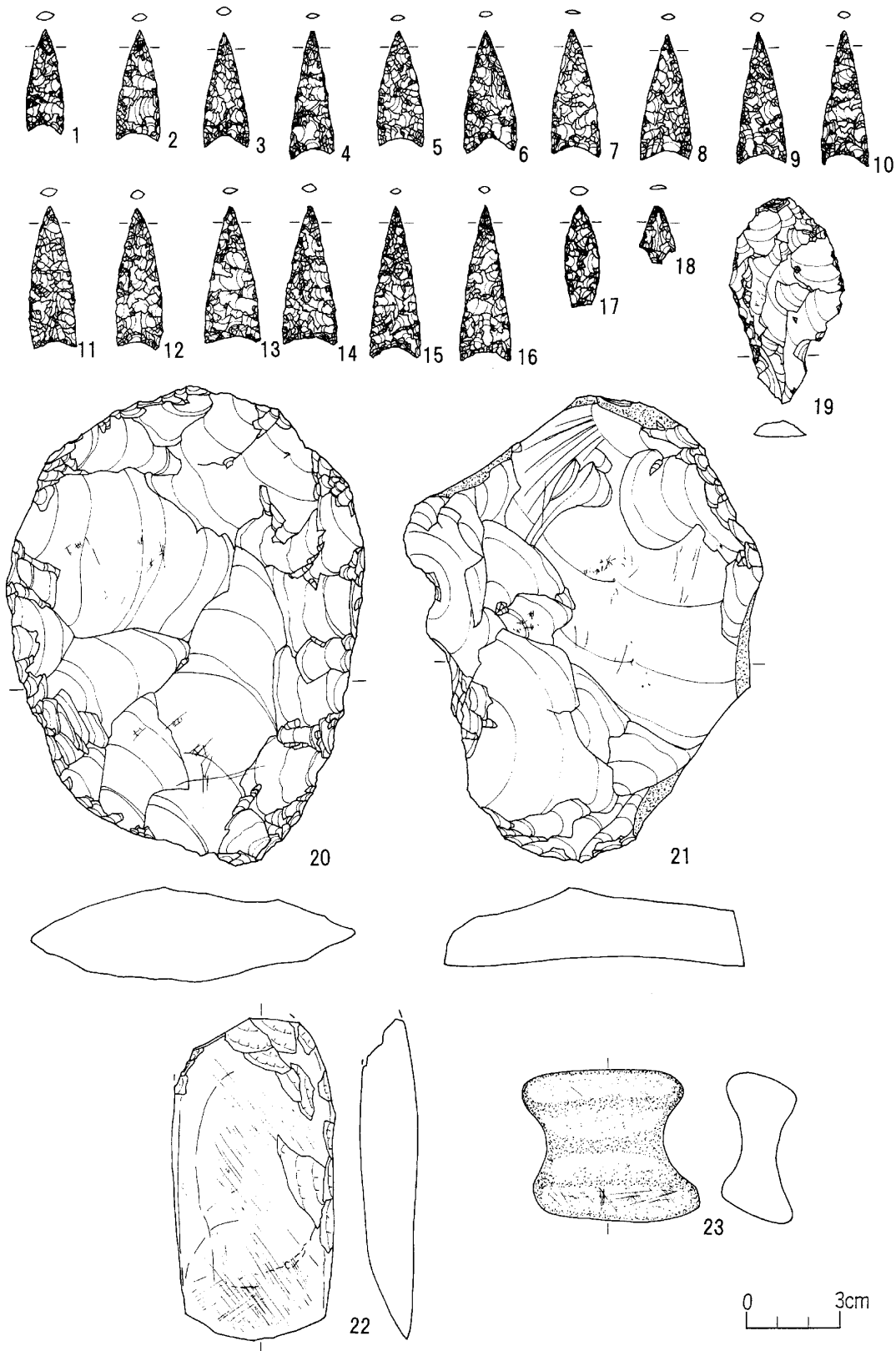
遺構 (第146図)

ピット1233bはピット1233aの北側に検出され、規模は短軸は不明であるが長軸約1.10mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から14cmと浅い。

ピット1233cもピット1233aの北側にあり、ピット1233bの下層から検出された。短軸は不明であるが長軸約1.07mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から32cmを測る。



第146図 ピット1233a、1233b、1233c 平面図



第147図 ピット1233a 床面(1~16)・埋土(17~23)出土石器

遺物 (第141図-16~19)

ピット1233bの埋土から第141図-16・17は統縄文初頭。18は縄文晩期。

ピット1233cの埋土からは第141図-19は統縄文初頭。 (佐々木 寛)

ピット 1234

遺構 (第150図)

本ピットはG'85グリッドに位置し、規模は長軸約1.23m、短軸約1.13mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から46cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられる。時期は不明である。

遺物 (第149図-1~3, 第153図-1, 図版46-1)

遺物は埋土出土。第149図-1~3は縄文晩期。

石器は第153図-1が黒曜石製の有茎石鏃。 (佐々木 寛)

ピット 1234a・1234b

遺構 (第150図)

ピット1234aはピット1234の北側に位置する。ピット1234に大半を切られているが径約1.00mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から15cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。

ピット1234bはピット1234aの北側にあり、規模は長軸約1.06m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測る。遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

ピット 1235

遺構 (第151図)

本ピットはH'87グリッドにあり、規模は北西側に攪乱を受けているが径約0.86mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から16cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。ピットの床面を遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が覆っており、床面からは径12~20cm、深さ5~7cmの柱穴が5本検出されている。土壙墓と考えられるが、頭位・時期ともに不明である。

遺物 (第149図-4~7)

第149図-4は統縄文字津内IIa式。5・6は縄文晩期。7は縄文晩期前葉。 (佐々木 寛)

ピット 1236

遺構 (第148図)

本ピットはF' 87グリッドに位置する。規模は径約1.05mの円形を呈する。壁高は確認面から44cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土を剥土していくと途中でベンガラを多少含んだ暗赤褐色砂と暗茶褐色砂が認められ、その下から遺存体の一部と考えられる粘性をもった茶褐色砂が現れた。さらにこの層を剥土すると床面に遺存体と思われる粘性をもちベンガラを含んだ赤褐色砂が認められた。遺存体の北側から歯骨が検出されている。床面から石器と軽石が2点出土している。

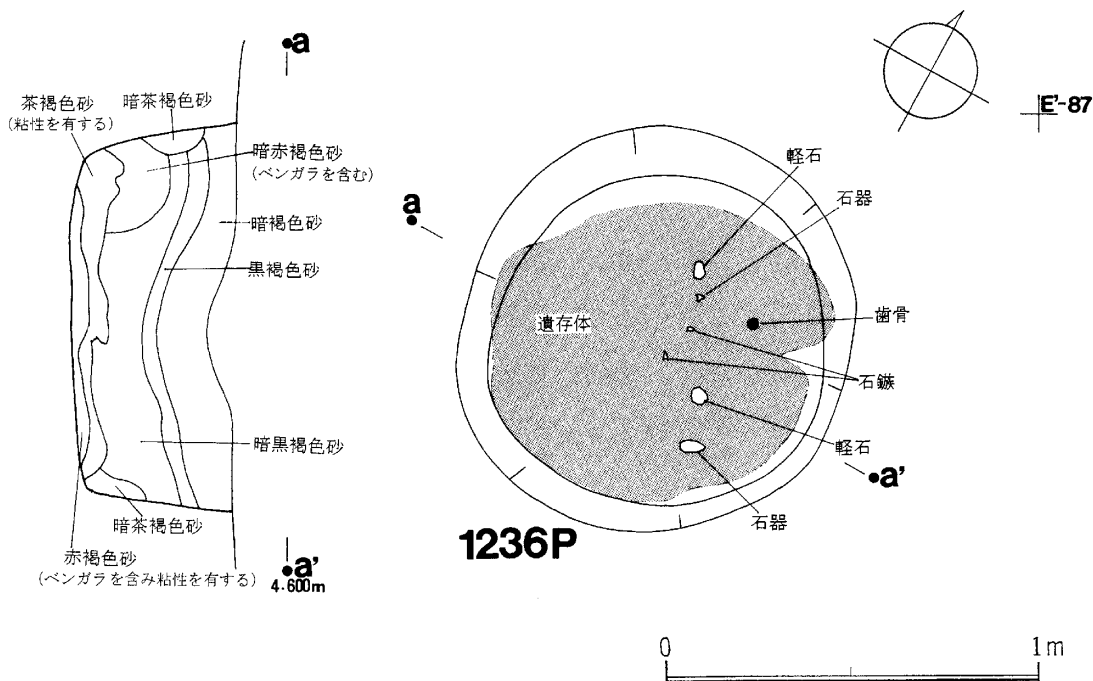
遺物 (第153図-2~4, 図版46-2~4)

床面から出土した石器は第153図-2が無茎石鏃。3はつまみ付きナイフ。4はナイフ。いずれも黒曜石製。

小括

本ピットの頭位は北方向であるが、時期は不明である。

(佐々木 寛)



第148図 ピット1236平面図

ピ ッ ト 1236a・1236b

遺 構 (第169図)

ピット1236aはピット1236の南側にあり、北側をピット1236に西南側をピット908、908bに切られているため規模は不明である。形態は楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から55cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中の暗褐色砂層の間からベンガラを含む褐色砂が少量検出されている。

ピット1236bはピット1236の東側にあり、規模は長軸約1.10m、短軸約0.80mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から18cmを測る。遺物は出土していない。

遺 物 (第149図-8)

ピット1236aの埋土から第149図-8は縄文晩期。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1237

遺 構 (第175図)

本ピットはF'82グリッドに位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約1.10mの円形を呈する。壁高は確認面から35cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

床面から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出されている。遺物は出土していない。土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1238

遺 構 (第169図)

本ピットはF'87グリッドに位置し、規模は長軸約1.00m、短軸約0.92mの円形を呈する。壁高は確認面から36cmを測る。遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1239

遺 構 (第175図)

本ピットはF'82に位置する。規模は径約0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測り、浅い皿状を呈する。遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

ピット 1240

遺構 (第175図)

本ピットはF' 82グリッドに位置する。規模は長軸約1.28m、短軸約1.18mの円形を呈する。壁高は確認面から15cmを測る。

遺物 (第149図-9~11)

第149図-9~11は縄文晩期。 (佐々木 寛)

ピット 1240a

遺構 (第175図)

本ピットはピット1240の南側に位置する。長軸は不明であるが短軸約0.90mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から36cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出されていることから土壌墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 寛)

ピット 1241

遺構 (第175図)

本ピットはF' 82グリッドに位置する。規模は長軸約0.50m、短軸約0.42mの小円形を呈し、壁高は確認面から30cmを測る。遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

ピット 1242

遺構 (第175図)

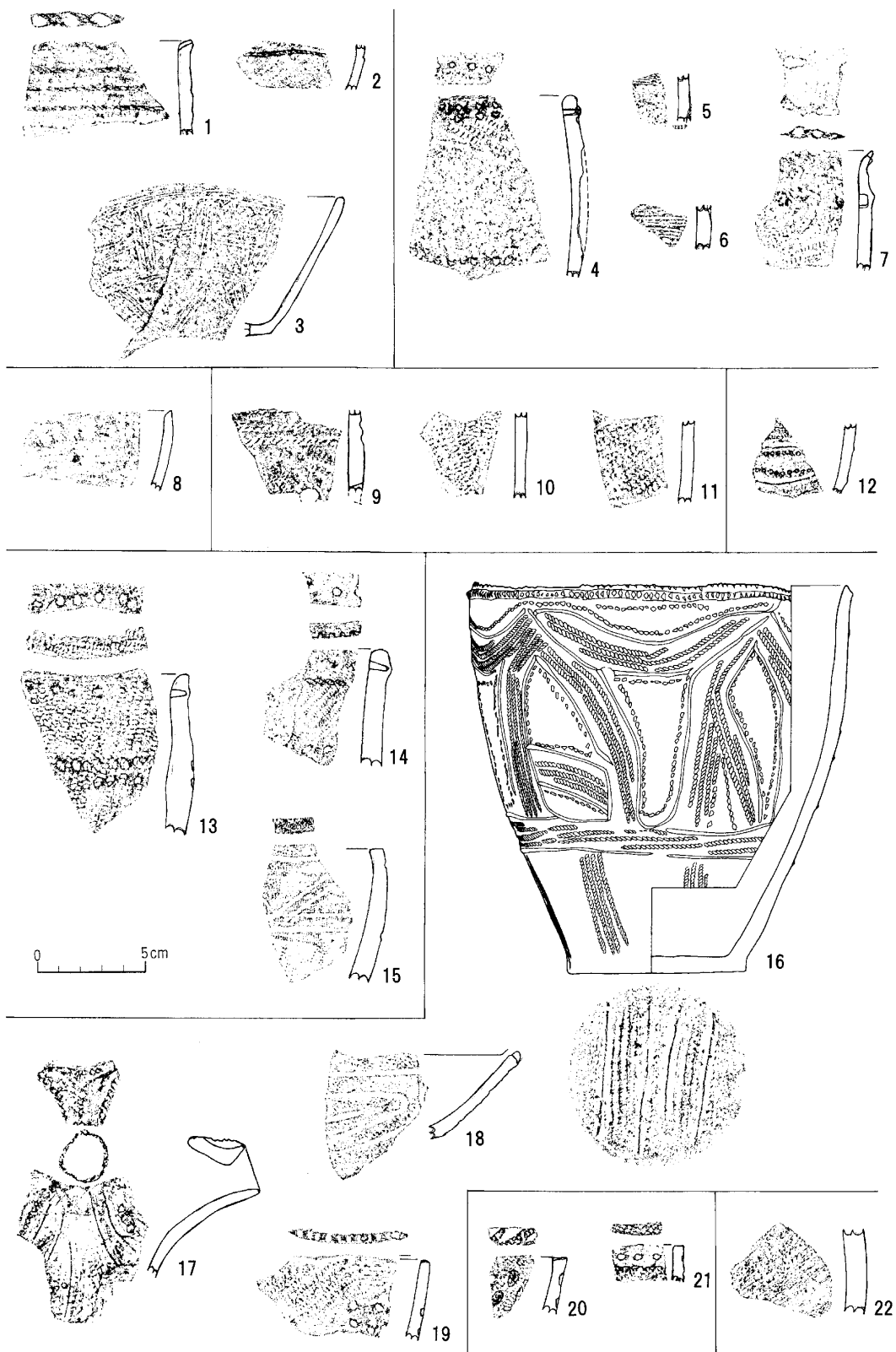
本ピットはE' 83グリッドに位置する。規模は径約0.80mの円形を呈し、壁高は確認面から21cmを測る。 (佐々木 寛)

ピット 1243

遺構 (第175図)

本ピットはE' 83グリッドに位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.64mの楕円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測る。

第Ⅱ層の茶褐色砂層を掘り下げて第Ⅲ層の褐色砂層が現れた時点でピットの輪郭と遺存体と



第149図 ピット1234埋土(1~3)、1235埋土(4~7)、1236a埋土(8)、1240埋土(9~11)、1244埋土(12)、1245a埋土(13~15)、1247床面(16)・埋土(17~19)、1249埋土(20・21)、1250埋土(22)出土土器

思われる粘性をもった暗茶褐色砂が認められた。本来は第Ⅱ層から掘り込まれていたものであろう。

土壙墓と考えられるが時期は不明である。(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1244

遺 構 (第150図)

本ピットはF'85グリッドに位置する。規模は長軸約1.02m、短軸約0.85mの楕円形を呈し、壁高は確認面から10cmと浅く皿状を呈する。

床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。

遺 物 (第149図-12)

第149図-12は続縄文後北C₂・D式。(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1244a

遺 構 (第150図)

本ピットはピット1244の南側に位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.72mの楕円形を呈し、壁高は確認面から24cmを測る。

床面から遺存体と考えられる粘性をもった暗茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。

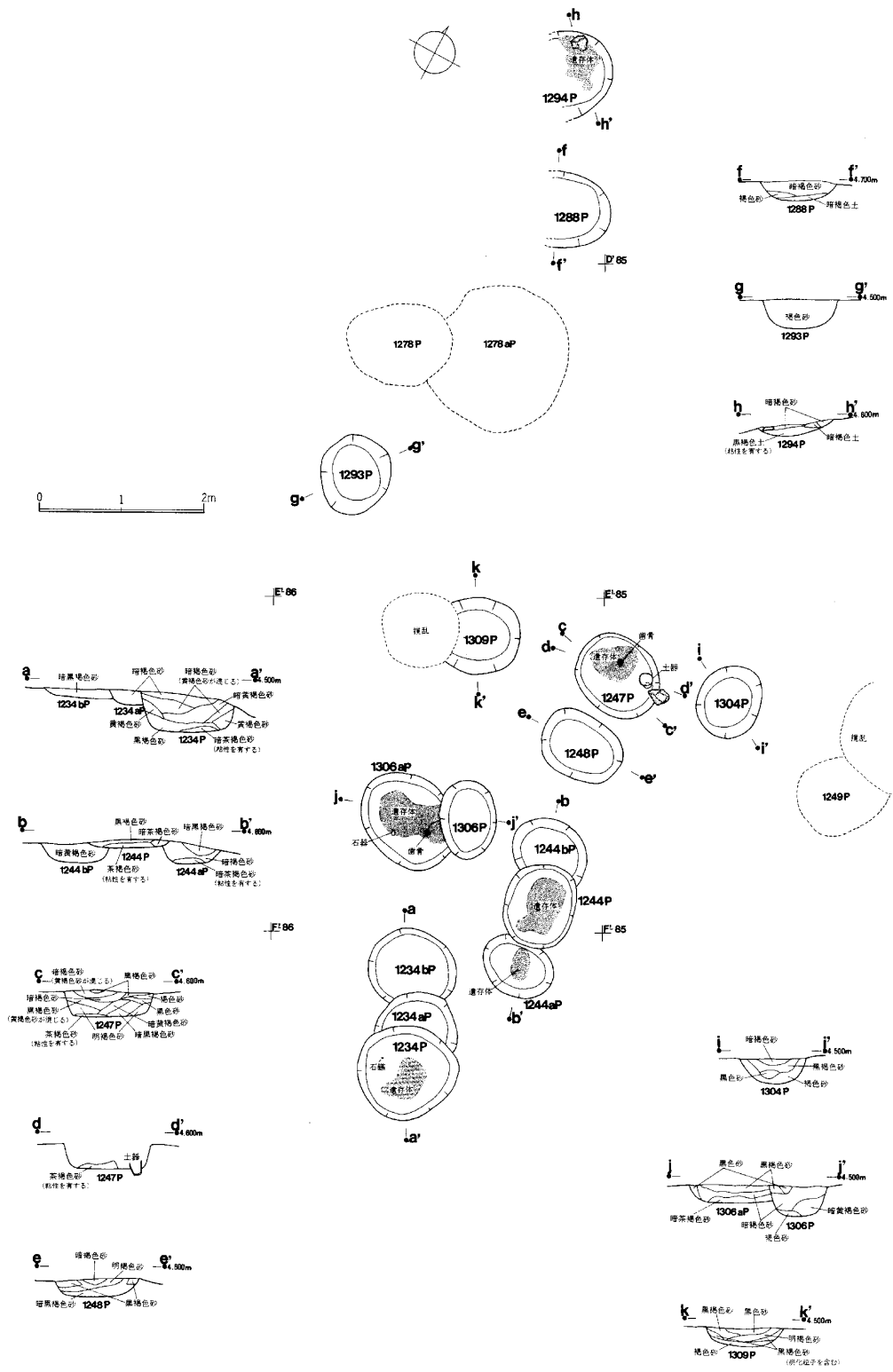
遺物は出土していない。(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1244b

遺 構 (第150図)

本ピットはピット1244の北側から検出された。規模は長軸約0.98m、短軸約0.80mの楕円形を呈し、壁高は確認面から22cmを測る。

遺物は出土していない。(佐々木 寛)



第150図 ピット1234、1234a、1234b、1244、1244a、1244b、1247、1248、1288、1293、1294、1304、1306、1306a、1309平面図

ピット 1245

遺構 (第175図)

本ピットはF' 83グリッドに位置する。規模は北側に攪乱を受けているため長軸は不明であるが短軸約0.56mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から21cmを測る。

(佐々木 覚)

ピット 1245a・1245b

遺構 (第175図)

ピット1245aはピット1245の南側から検出した。規模は長軸約0.98m、短軸約0.80mの楕円形を呈し、壁高は確認面から30cmを測る。

ピット1245bはピット1245aの南東側に位置し、規模は長軸約1.54m、短軸は南側に攪乱を受けているため不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から30cmを測る。

遺物 (第149図-13~15, 第153図-5)

ピット1245aの埋土からは第149図-13・14が統縄文字津内Ⅱa式。15は統縄文初頭。

石器は第153図-5は黒曜石製の削器。(佐々木 覚)

ピット 1246

遺構 (第175図)

本ピットはF' 83グリッドに位置する。規模は径約0.36mの円形を呈し、壁高は確認面から16cmを測る。

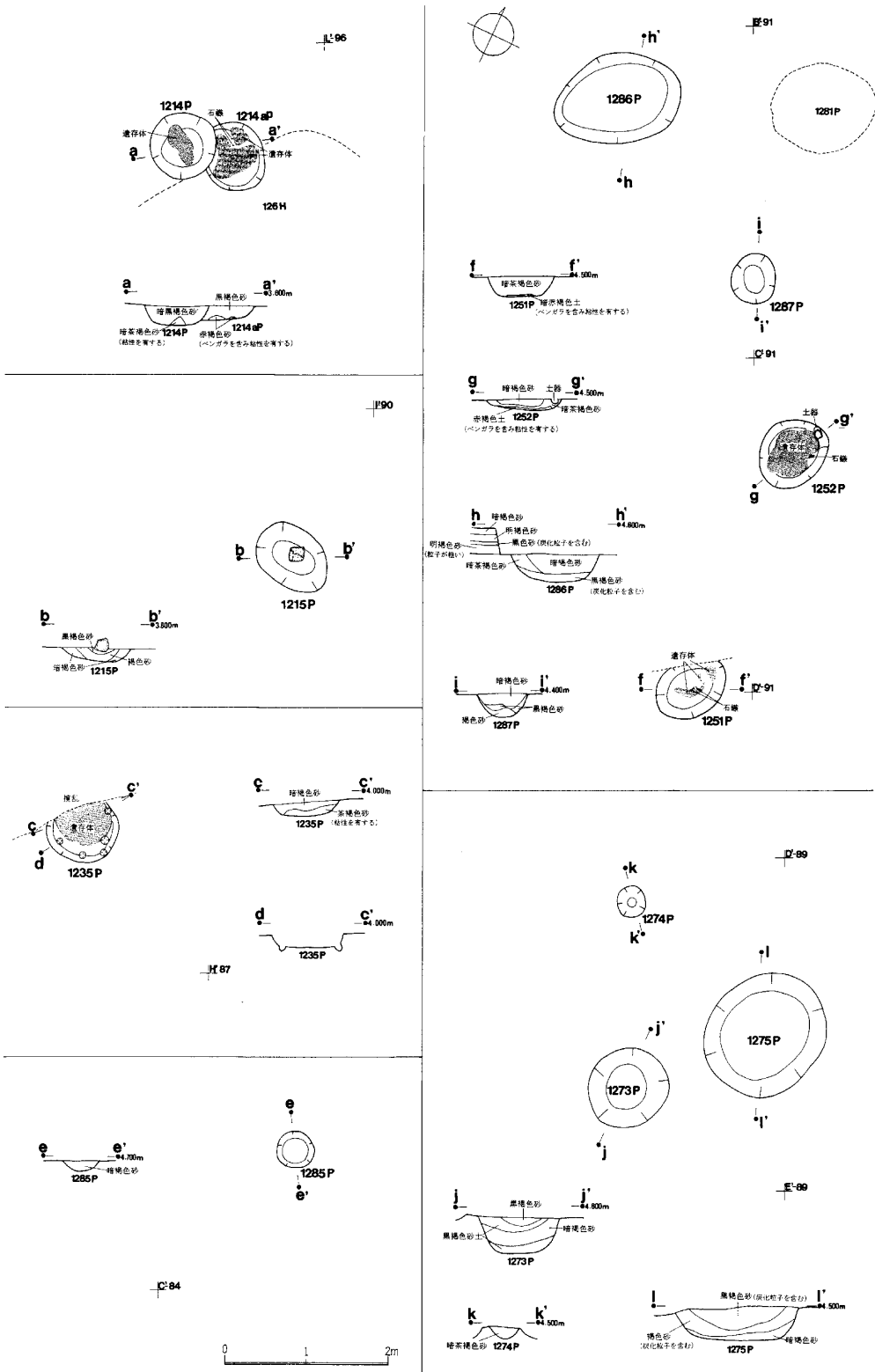
遺物は出土していない。(佐々木 覚)

ピット 1247

遺構 (第150図, 図版46-5)

本ピットはF' 84・85グリッドに位置する。規模は長軸約1.06m、短軸約0.88mの楕円形を呈する。壁高は確認面から33cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂と第149図-16の土器が出土している。土器は床面に約10cm埋められたような状態でみとめられ、遺存体の東側からは歯骨が検出されている。



第151図 ピット1214、1214a、1215、1235、1251、1252、1273、1274、1275、1285、1286、1287平面図

遺物 (第149図-16~19, 図版46-6)

第149図-16は床面から出土した後北C₂・D式土器。口唇部に刻みをもち、口縁部に擬縄隆帯を巡らす。胴部は微隆起線と縞縄文・列点文を施す。口径17.6cm、器高18cm。17は統縄文後北C₂・D式の注口土器。18・19は縄文晩期。18の表面にはベンガラが付着している。

小括

本ピットの長軸は西一東方向にあり、頭位は東である。時期は統縄文後北C₂・D式期である。
(佐々木 寛)

ピット 1248**遺構** (第150図)

本ピットはF'85グリッドに位置する。規模は長軸約1.02m、短軸約0.76mの楕円形を呈し、壁高は確認面から20cmを測る。
(佐々木 寛)

ピット 1249**遺構** (第152図)

本ピットはF'84グリッドに位置する。長軸は北側に攪乱を受けているため不明であるが短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から18cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂があり、遺存体の上と中から石鏃5点、石錐1点、ナイフ片1点、琥珀玉3点、黒曜石のフレーク1点が出土し、歯骨は遺存体の南側から検出されている。

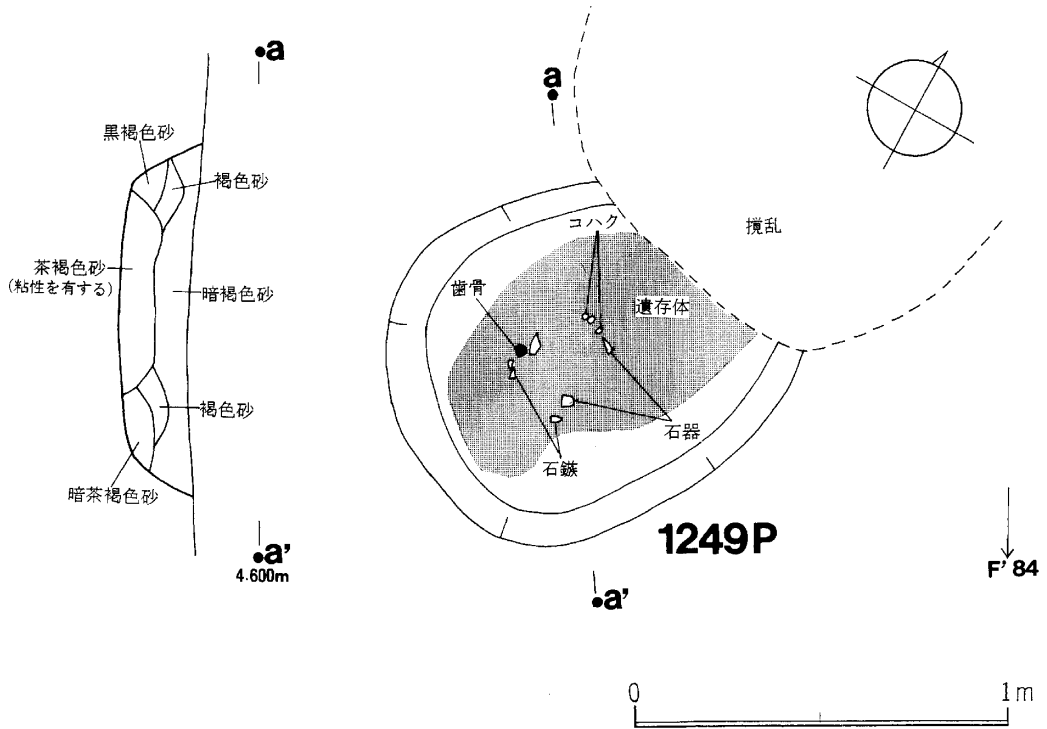
遺物 (第149図-20・21, 第153図-6~11, 図版47-1~5)

第149図-20・21は埋土出土の縄文晩期。

石器は遺存体の中からは第153図-6~8は無茎石鏃。遺存体の上からは9・10が無茎石鏃。埋土からは11が石錐。6・7はメノウ製。11は玄武岩製。他は黒曜石製。

小括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌墓と考えられる。長軸は南一北方向にあり、頭位は南である。時期は土器が出土していないため不明である。
(佐々木 寛)



第152図 ビット1249平面図

ピット 1250

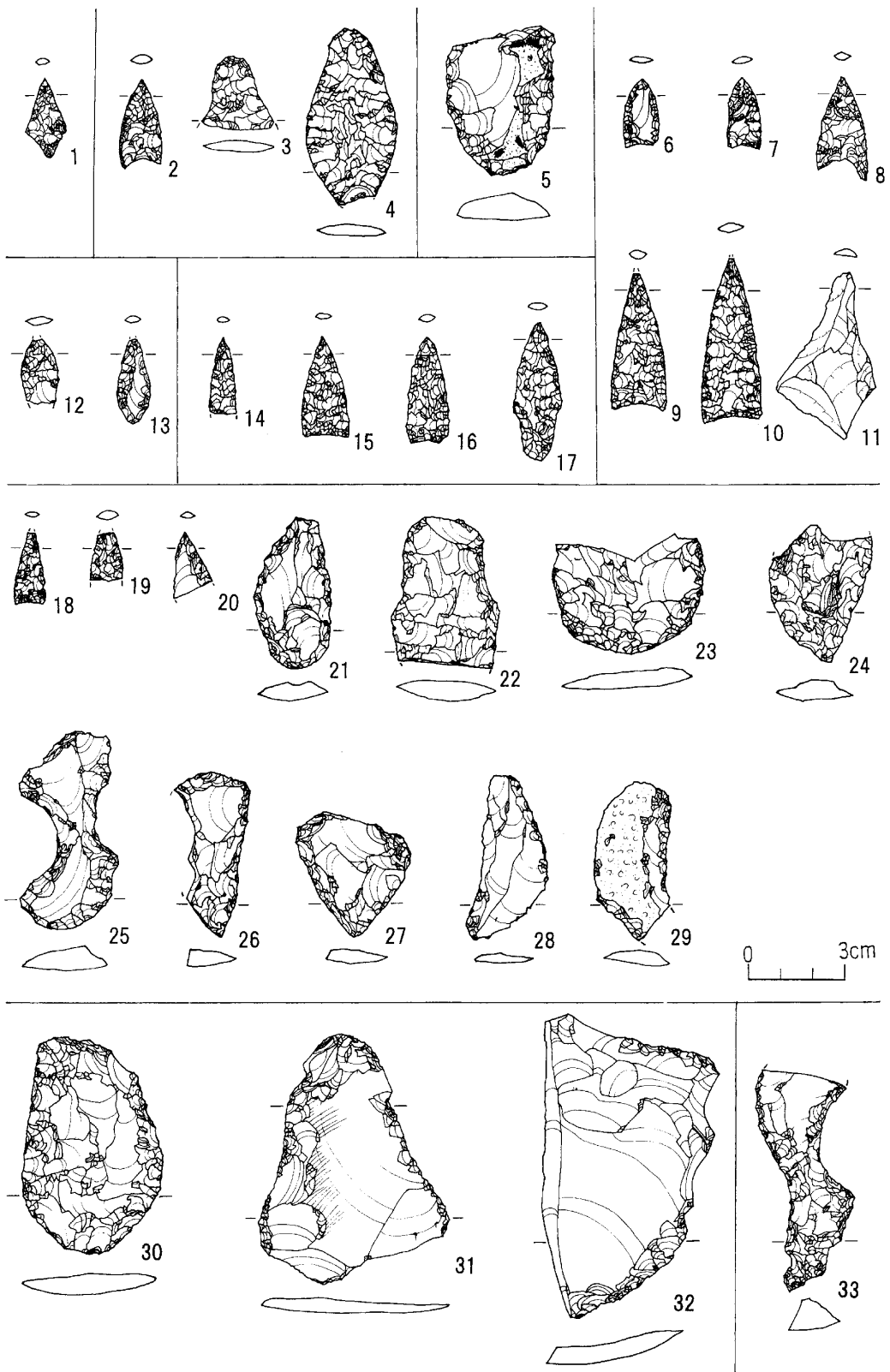
遺構 (第155図)

本ピットはG' 91グリッドに位置する。規模は直径約0.97mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第149図-22)

第149図-22は埋土出土である。器面に燃糸文が施されたもので、続縄文字津内Ⅱa式と思われる。
(武田 修)



第153図 ビット1234埋土(1)、1236床面(2~4)、1245a埋土(5)、1249床面(6~8)・
 遺体上(9・10)・埋土(11)、1251床面(12・13)、1252床面(14~17)、1260
 埋土(18~29)、1267床面(30・31)・埋土(32)、1268埋土(33)出土石器

ピ ッ ト 1251

遺 構 (第151図)

本ピットはD'91, E'91グリッドにまたがって位置する。西壁上部の一部は攪乱を受けるものの、長軸約0.90m、短軸約0.67mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約25cmである。

埋土は炭化物を含む暗茶褐色砂が堆積しており、これを取り除くと床面のほぼ中央部に粘性をもち、ベンガラが散布された遺存体である暗赤褐色土が長軸面に沿って細長く伸びていた。北壁際では頭骨と思われる盛り上がりも認められた。遺存体からは第153図-12・13に示す2本の石鏃が出土している。

遺 物 (第153図-12・13, 図版47-6)

2点とも床面から出土した石鏃である。第153図-12は茎部が欠失するものの、13と同様の鏃身下部が丸みをもつ柳葉形を呈すると思われる。12は頁岩製、13はメノウ製である。

小 括

土壌墓である。詳細な時期は不明であるが、石鏃の形態から統縄文初頭と思われる。

(武田 修)

ピ ッ ト 1252

遺 構 (第151図)

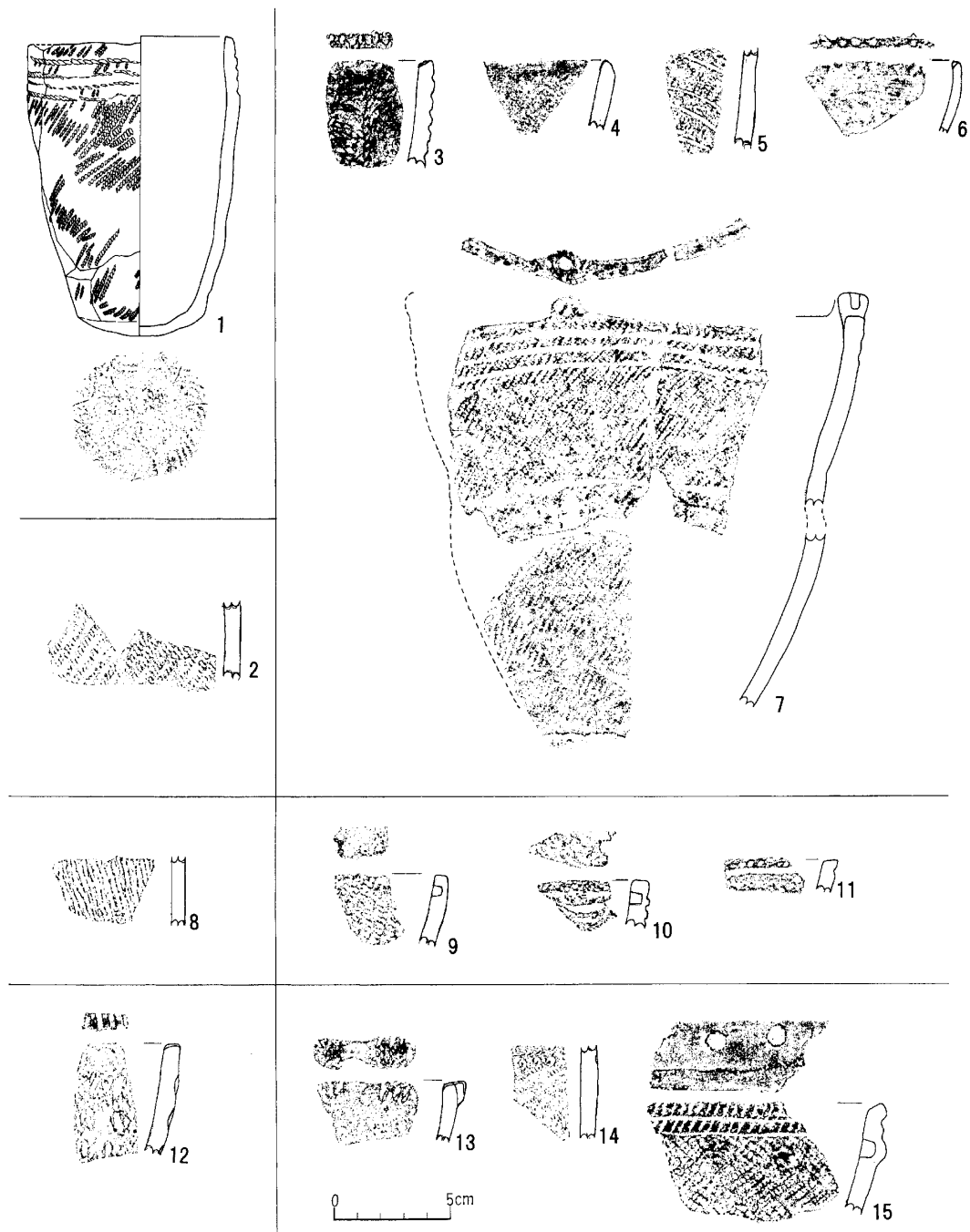
本ピットはD'90グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。各壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約15cmである。

埋土層中からベンガラの散布が確認され、床面のほぼ全域に粘性をもち、ベンガラを多く含む遺存体が広がっている。特に北壁・南壁・東壁の中央部が盛り上がり、北壁が頭部の可能性がある。

遺 物 (第154図-1, 第153図-14~17, 図版47-7・8)

第154図-1は頭部と思われる箇所の上部から横倒しの状態で出土した。出土状況から判断して、本ピットに伴うと考えられるもので口径約9cm、器高約13cmの小型土器。器面は斜縄文を地文とし、4条の縄線文が口縁下部に施される。底部は丸底である。縄文晩期中葉であろう。

遺存体の東壁際からは第153図-14~17に示す石器が出土している。14~16は石鏃である。14は茎部が欠失するため形態は不明であるが、15・16は無茎石鏃である。17は有茎石鏃。4点とも黒曜石製である。



第154図 ビット1252床面(1)、1253埋土(2)、1260埋土(3~7)、1261埋土(8)、1263埋土(9~11)、1266埋土(12)、1267埋土(13~15)出土土器

小 括

上部から出土した土器は本ピットに伴うと思われる。時期は縄線文を多用したもので縄文晩期中葉の土壙墓であろう。 (武田 修)

ピ ッ ト 1253

遺 構 (第130図)

本ピットはG'92グリッドに位置する。大半が攪乱を受けているが、直径約0.50mの円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第154図-2)

第154図-2は埋土から出土した縄文晩期の胴部片と思われる。 (武田 修)

ピ ッ ト 1258

遺 構 (第155図)

本ピットはG'91, H'91グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。

壁高は確認面から約14cmである。埋土に黒曜石のフレーク・チップを少量含む。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1259

遺 構 (第155図)

本ピットはG'90グリッドに位置する。規模は直径約0.45mの小円形である。

壁高は確認面から約16cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

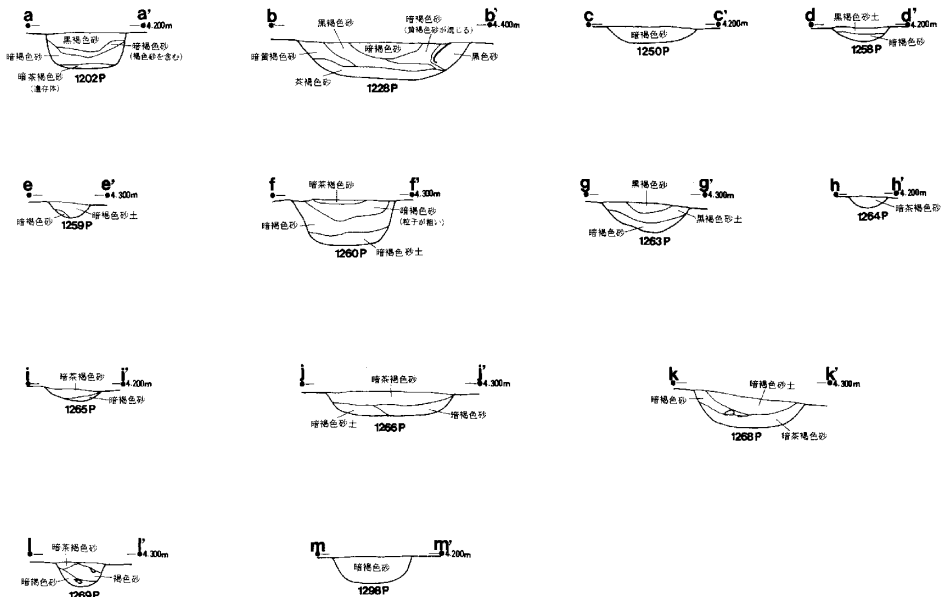
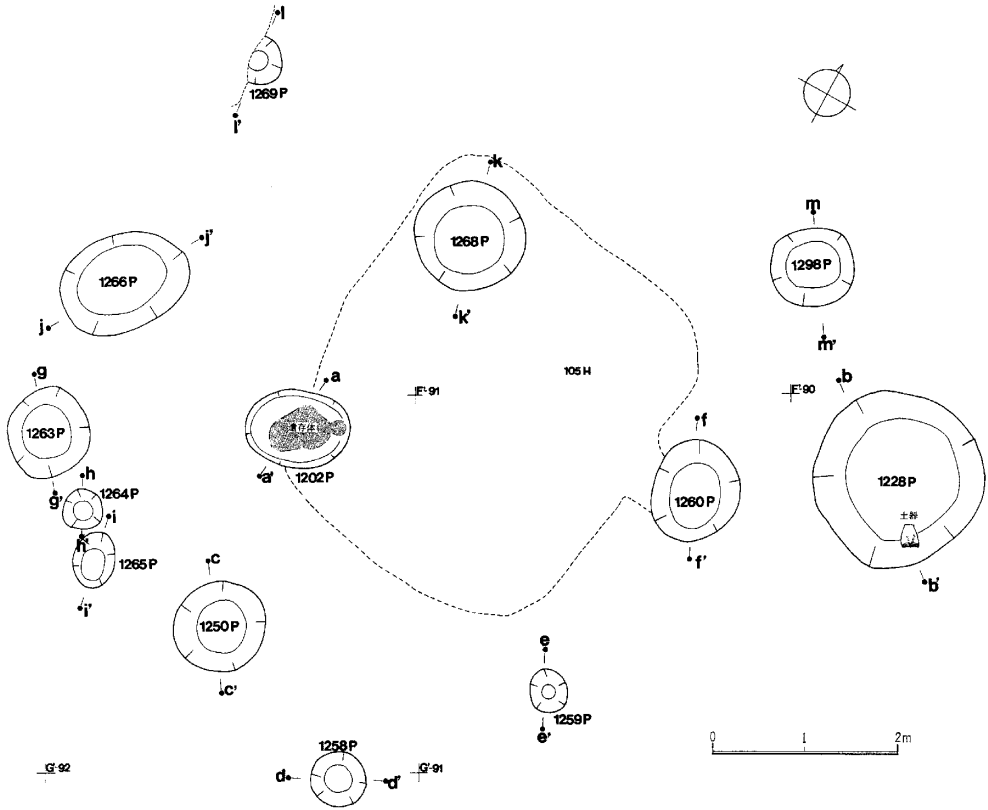
ピ ッ ト 1260

遺 構 (第155図)

本ピットはG'90グリッドに位置する。規模は長軸約1.04m、短軸約0.92mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約44cmである。

遺 物 (第154図-3~7, 第153図-18~29, 図版47-9~15)

土器は全て埋土出土で、これらは床面から約10cm上部から出土したものであり、本ピットに伴う可能性が高い。縄文晩期中葉と思われる代表的な4点を図示したが、他に同時期と思われる



第155図 ピット1202、1228、1250、1258、1259、1260、1263、1264、1265、1266、1268、1269、1298平面図

る大型の胴部片もみられる。第154図-3は短縄文と縄線文、4は器面が風化して明確でないものの斜縄文が施される。5は弧線状の沈線文、6は無文である。7は口唇部に小突起をもち、3条の横走沈線文が施され、くびれた胴中央部は無文帯となり沈線文で区画される。縄文後期船泊上層式。

石器も埋土出土である。第153図-18は無茎石鏃。19も先端、茎部が欠失するものの無茎石鏃であろう。20・21・28・29は削器。20は先端部が鋭く加工され、28は歯こぼれ状の微細な使用痕がみられる。22~24・26はいずれも一部が欠失した両面加工ナイフ。25は両側縁部がノッチ状の刃部、下端部は急斜な刃部である。27は搔器。全て黒曜石製である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1261

遺 構 (第107図)

本ピットはE80グリッドに位置する。規模は長軸約1.25m、短軸約0.92mの不整楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

埋土の各層には少量の炭化物と焼けた骨片が多く混入している。

遺 物 (第154図-8)

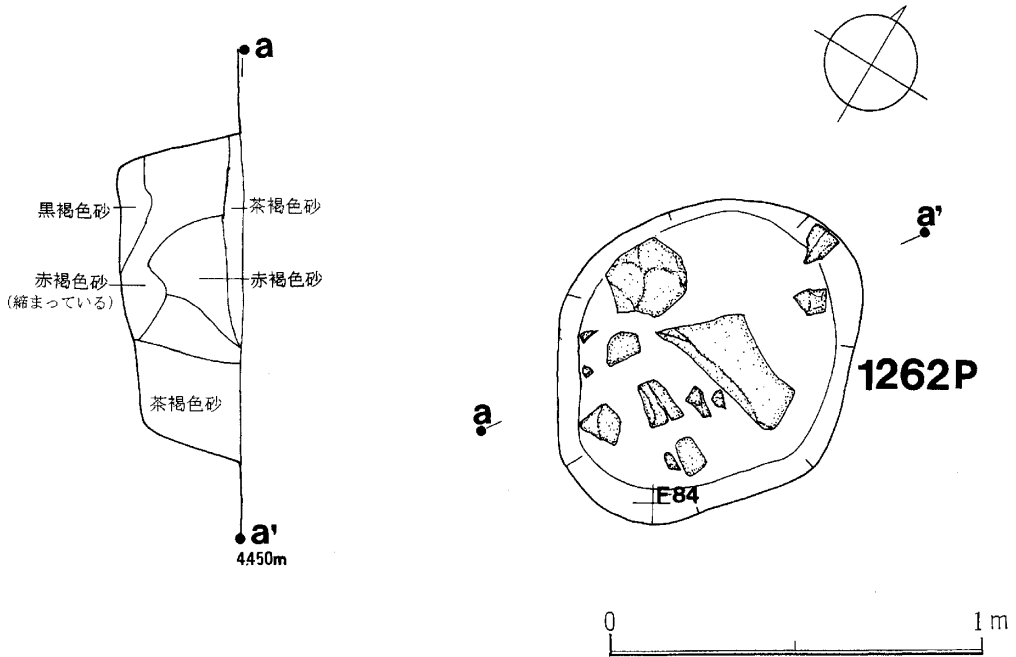
第154図-8は埋土出土の縄文晩期と思われる。 (武田 修)

ピ ッ ト 1262

遺 構 (第156図)

本ピットはF84グリッド杭の下部に位置する。南壁側で落ち込みの一部を確認したが、中央部から南西方向にかけて炭化物を混入し、粘性のある茶褐色砂が堆積しているためサブトレンチを設定し、約25cm掘り下げた。その結果、明瞭なピットであることが確認できた。確認面から約40cm下げた段階で、約5~20cmを主体として、最大約40cmの角礫がほぼ均一に出土した。

規模は長軸約1.87m、短軸約1.60mの楕円形を呈するが、短軸側の西壁と東壁が膨らみをもつ。床面は起伏をもち、北側に傾斜する。壁は北壁から東壁側がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、南壁は僅かに傾斜する。高さは確認面から約35cmである。 (武田 修)



第156図 ピット1262平面図

ピット 1263

遺 構 (第155図)

本ピットは G' 91・92 グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。床面は若干の凹凸があり、壁は皿状に立ち上がる。埋土は炭化粒子と5cm程の小角礫を多量に含む。高さは確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第154図-9~11)

3点とも埋土出土である。第154図-9・10は突瘤文をもつもので縄文後期エリモB式。11は同範濶式。

本ピットの詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1264

遺 構 (第155図)

本ピットはG'91グリッドに位置する。規模は直径約40cmの小円形を呈する。壁高は確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1265

遺 構 (第155図)

本ピットはG'91グリッドに位置する。規模は長軸約0.60m、短軸約0.45の小楕円形を呈する。床面は南側に向かって僅かに傾斜する。壁高は確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1266

遺 構 (第155図)

本ピットはF'91グリッドに位置する。規模は長軸約1.37m、短軸約0.90の楕円形を呈する。壁高は確認面から約26cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第154図-12)

埋土出土である。第154図-12は下方からの刺突文が施されたもので、縄文晩期前葉であろう。 (武田 修)

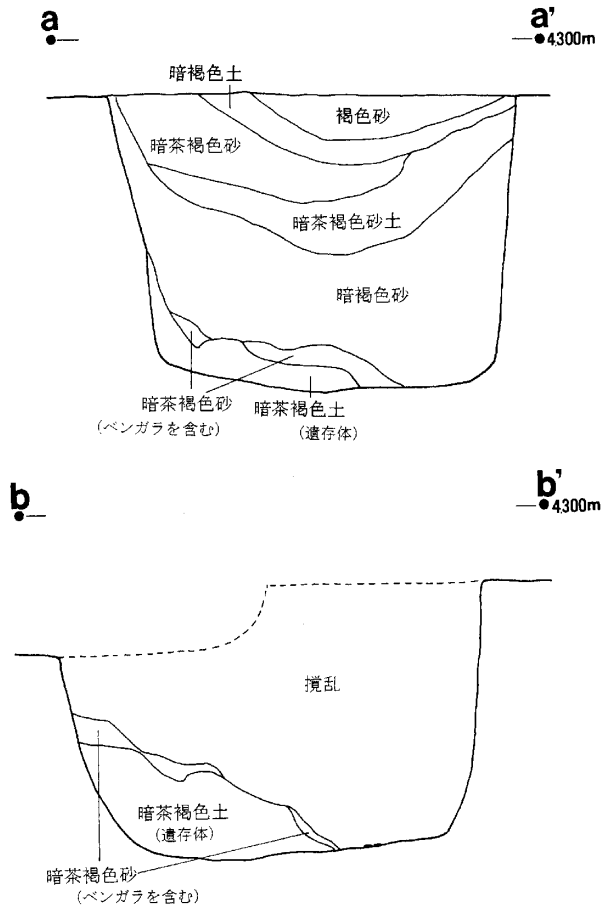
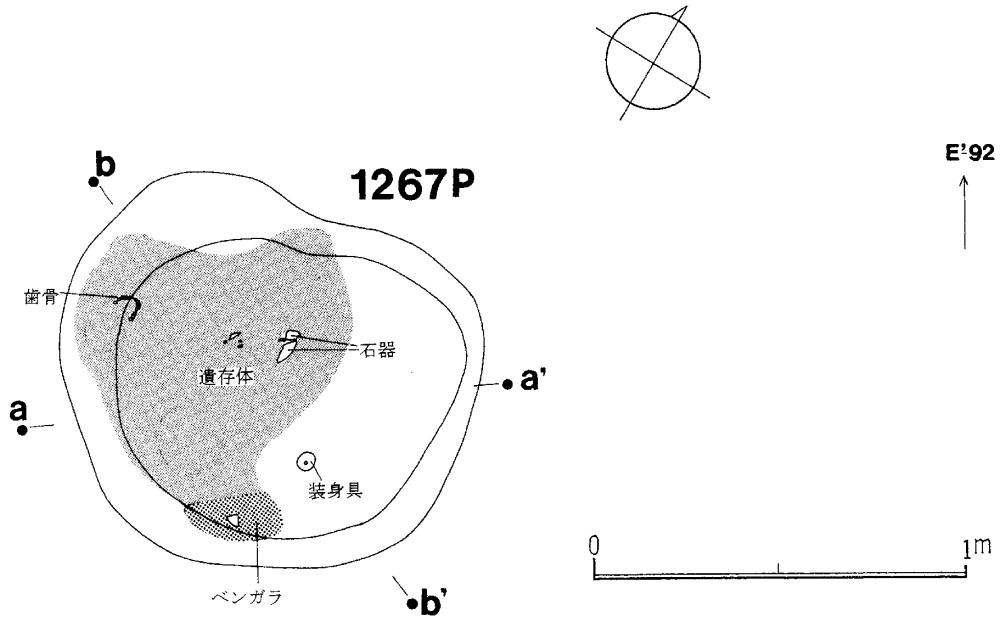
ピ ッ ト 1267

遺 構 (第157図)

本ピットはF'92グリッドに位置する。規模は長軸約1.13m、短軸約1mの不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約70cmを測る。暗茶褐色を呈した遺存体は粘性をもち、上部にベンガラが散布される。南壁側が厚い痕跡を遺す。西側から北側に向けて歯骨列が検出され、南壁中央部でも頭部と思われる膨らみが認められた。二体合葬墓と思われる。

遺 物 (第154図-13~15, 第153図-30~32, 図版47-16~18)

土器、石器とも埋土出土である。第154図-13は無文であるが、口唇部に縄線文が押捺され



第157図 ピット1267平面図

る。14は1条の縄線文の下部に縄端圧痕文が施される。13・14は縄文晩期中葉であろう。15は口唇部が内削ぎ状であり、口縁下部に2列の刻み列と突瘤文が施される。縄文後期エリモB式である。

第153図-30は片面加工ナイフ。31・32は大型剥片の側縁部に加工を施した削器。3点とも黒曜石製。

小 括

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1268

遺 構 (第155図)

本ピットはF'90グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの円形を呈する。壁は北壁側がほぼ垂直に立ち上がるものの、南壁側は開き気味である。高さは確認面から約30cmである。

出土土器は縄文後期を主体とするが、下層にある同時期の包含層からの混入であり、詳細な時期は不明である。

遺 物 (第162図-1～5, 第153図-33, 図版47-19)

土器、石器とも埋土出土である。第162図-1～3・5は縄文後期である。1は内削ぎ状の口唇部であり、突瘤文をもち、5は口唇部に山形小突起と口縁部に横走沈線文、突瘤文が施されたエリモB式。2は三叉文状の沈線文、3は突瘤文に爪形文が施された栗沢式。4は縄文前期末葉の押型文。

石器は第153図-33が左側縁部に弧状、右側縁部にノッチ状の刃部をもつ。黒曜石製である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1269

遺 構 (第155図)

本ピットはF'91グリッドに位置する。西壁側が削られるものの規模は直径約0.50mの円形である。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約23cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1270

遺構 (第158図)

本ピットはE'92, F'92グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.75mの不整楕円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。ベンガラを含む層厚約8cmの遺存体である暗茶褐色砂が東壁を除く各壁側にみられる。西壁側の上部には10cm内外の角礫4点がまとまってあり、下方から長さ20cmほどの板状礫がみられた。この板状礫はピット1271、1282からも検出されている。頭部と思われる膨らみは南壁際にある。

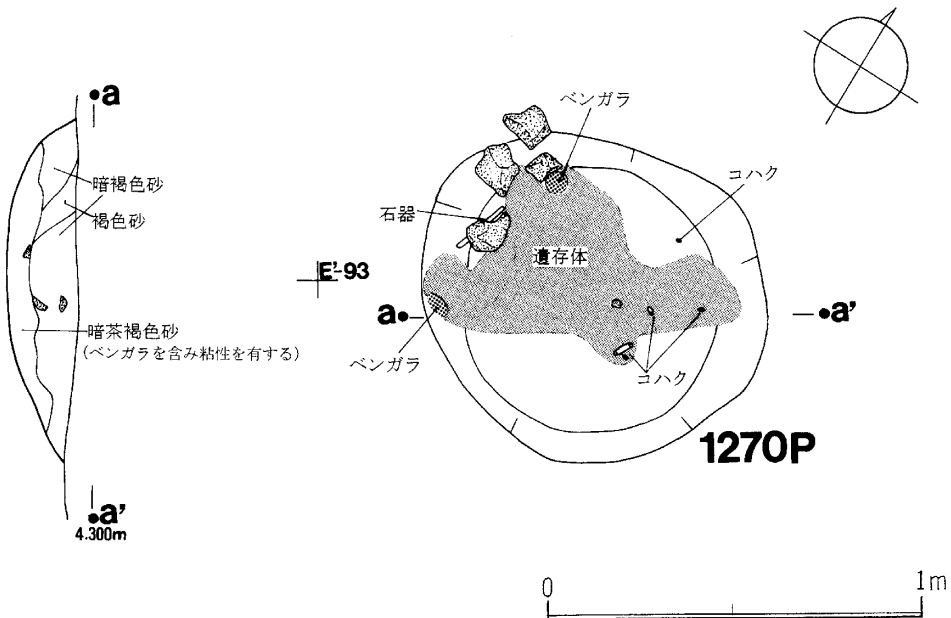
各種の形態をもつ琥珀玉は遺存体の東側にあるが、いずれも10cm程度の距離をおいて出土している。

遺物 (第159図-1~5, 図版47-22~26)

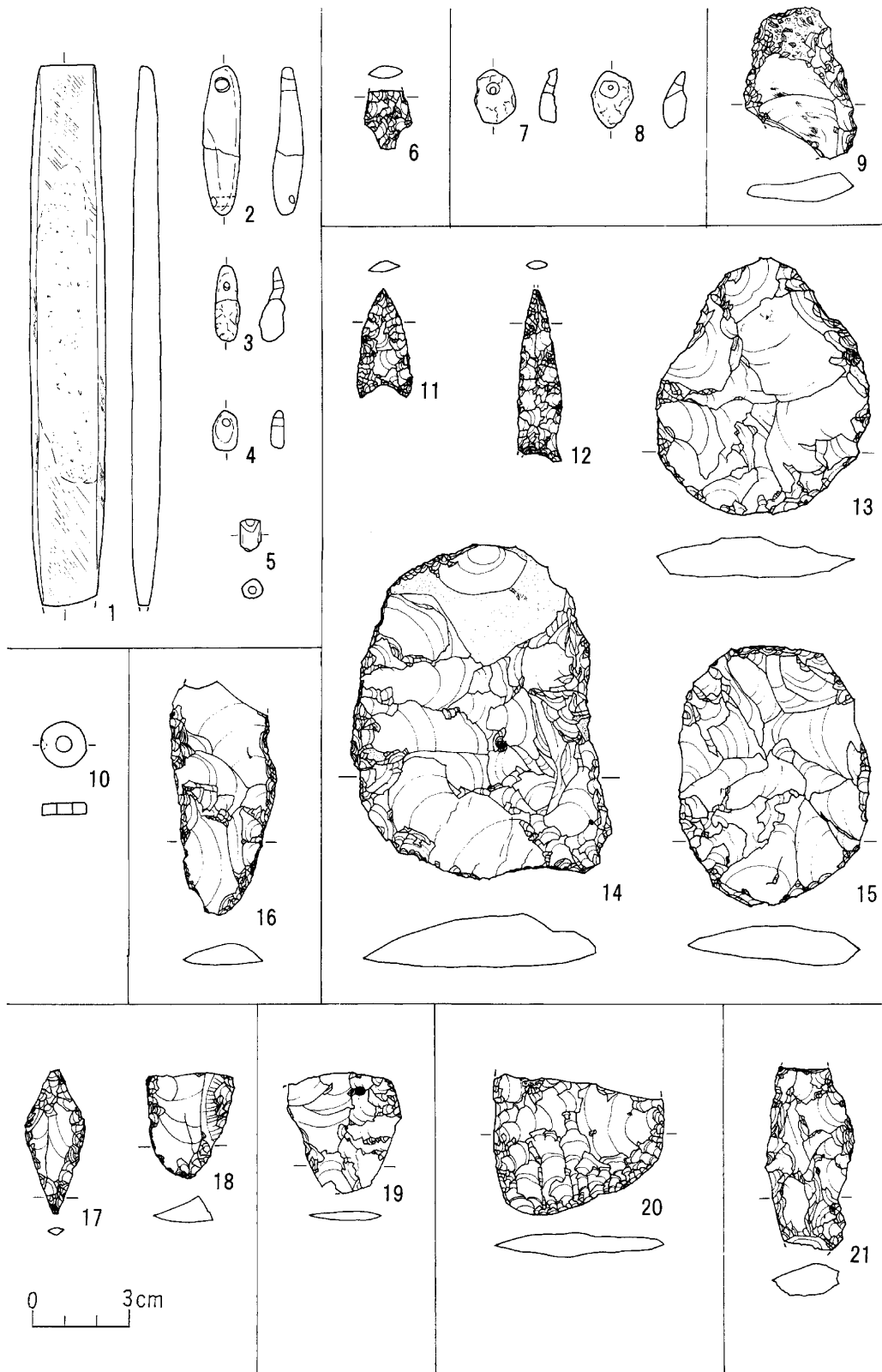
第159図-1は下部の刃部は欠失するが細長い磨製石斧である。表裏面とも敲打調整され、断面は方形を呈する。泥岩製である。2~5は琥珀の原石を利用した細長い飾り玉である。2は上下の端部が穿孔される。3は原石を利用しているが、穿孔の箇所だけ薄く加工している。

小括

土器が出土していないため詳細な時期は不明であるが、琥珀玉の形状から縄文初頭であり、宇津内IIa式より古手に位置づけられると思われる。(武田 修)



第158図 ピット1270平面図



第159図 ピット1270埋土(1~5)、1271埋土(6)、1272床面(7・8)、1273埋土(9)、1276床面(10)、1281遺体上(11~15)、1282埋土(16)、1282a床面(17)・埋土(18)、1284埋土(19)、1284b埋土(20)、1289埋土(21)出土石器・琥珀玉

ピット 1271

遺 構 (第160図, 図版48-1)

本ピットはE'91・92グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.70m、短軸約0.50mの楕円形を呈するが、短軸面の西壁が角状を呈するに対し、東壁では尖鋭化する。

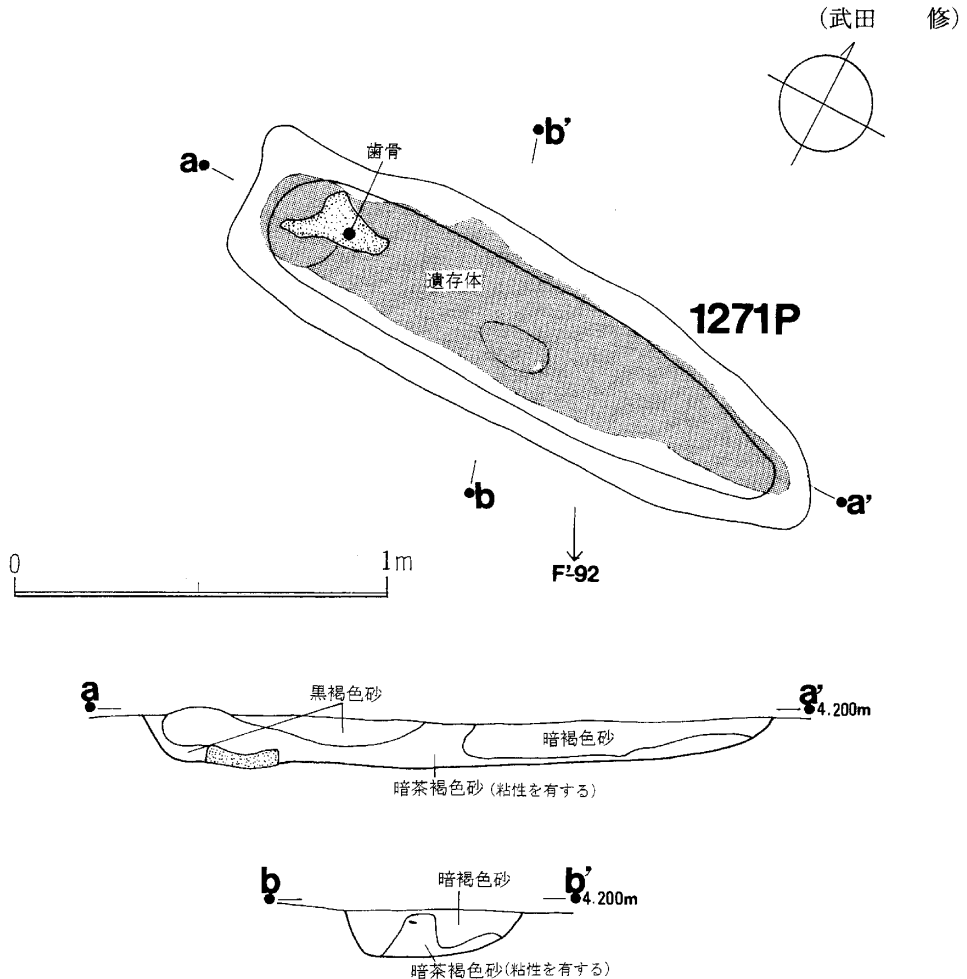
暗茶褐色の遺存体は粘性をもち床面の全域に広がっている。頭部は西壁側にあり膨らみをもち、歯骨も検出された。頭部の下部には石枕と思われる、長さ約25cm、厚さ5cmの三角形の板状礫が置かれている。壁は皿状の浅い立ち上がりをもち、高さは確認面から約15cmである。

遺 物 (第159図-6, 図版48-2)

埋土出土の有茎石鏃。黒曜石製である。

小 括

本ピットは形態、歯骨の位置から伸展葬の土壌墓と思われるが正確な時期は不明である。



第160図 ピット1271平面図

ピット 1272

遺構 (第161図)

本ピットはE'91グリッドに位置する。規模は長軸約0.85m、短軸約0.56mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約10cmである。

床面の全面にベンガラを含み、粘性のある暗茶褐色を呈した遺存体が広がっている。南壁際に幅3cmと5cmのベンガラ塊がみられる。床面の中央部からやや東よりに歯骨が検出され、近接して琥珀玉が出土している。床面には径3cm、深さ3cmと径4cm、深さ7cmの2本の小柱穴が認められた。

遺物 (第162図-6, 第159図-7・8, 図版48-3~15)

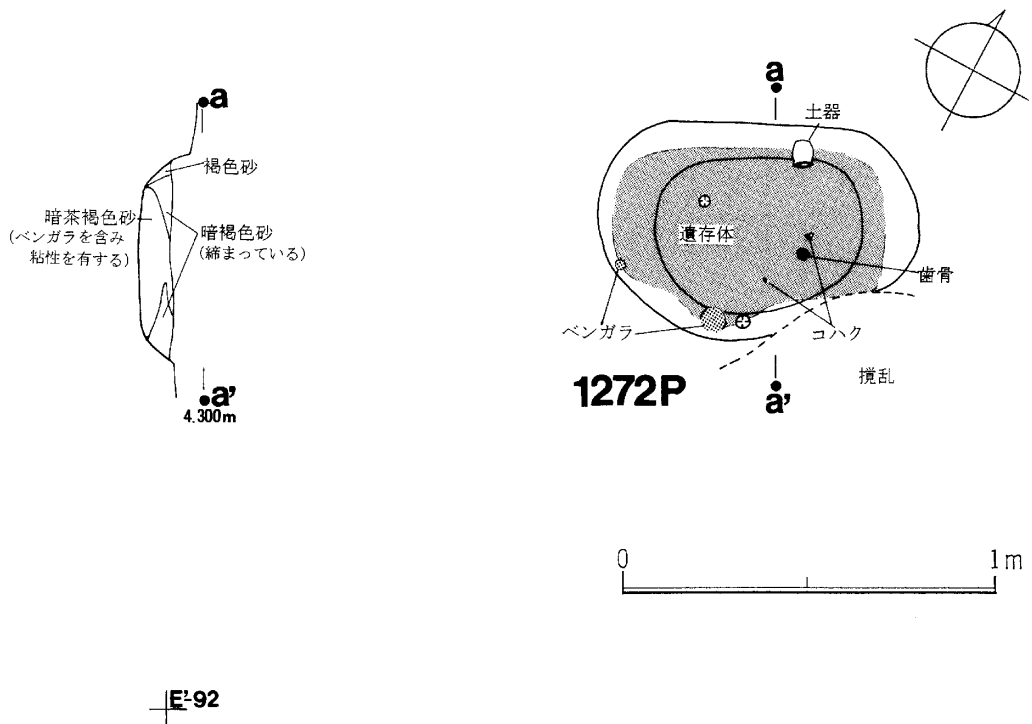
第162図-6の土器は北壁の上部近くから横倒しの状態で出土した口径約6cm、器高約6.5cmの小型土器。口縁下部が縮約した無文土器。口縁部の一部は打ち欠けている。興津式相当であろう。

14点の琥珀玉が出土しているが第159図-7・8はその一部である。全点とも表裏面は研磨されておらず、凹凸がある雑な作りである。

小括

本ピットは続縄文初頭興津式相当の土壌墓と思われる。

(武田 修)



第161図 ピット1272平面図

ピット 1273

遺構 (第151図)

本ピットはE'89グリッドに位置する。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約46cmである。埋土上層と下層は黒色系の砂質土が堆積する。

本ピットの詳細な時期は不明である。

遺物 (第162図-7, 第159図-9, 図版48-16)

埋土出土である。第162図-7は内側からの突瘤文をもち、4条の横走沈線文が施される。続縄文初頭元町2式であろう。

第159図-9は削器。黒曜石製である。 (武田 修)

ピット 1274

遺構 (第151図)

本ピットはE'89グリッドに位置する。規模は直径約0.36mの小円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1275

遺構 (第151図)

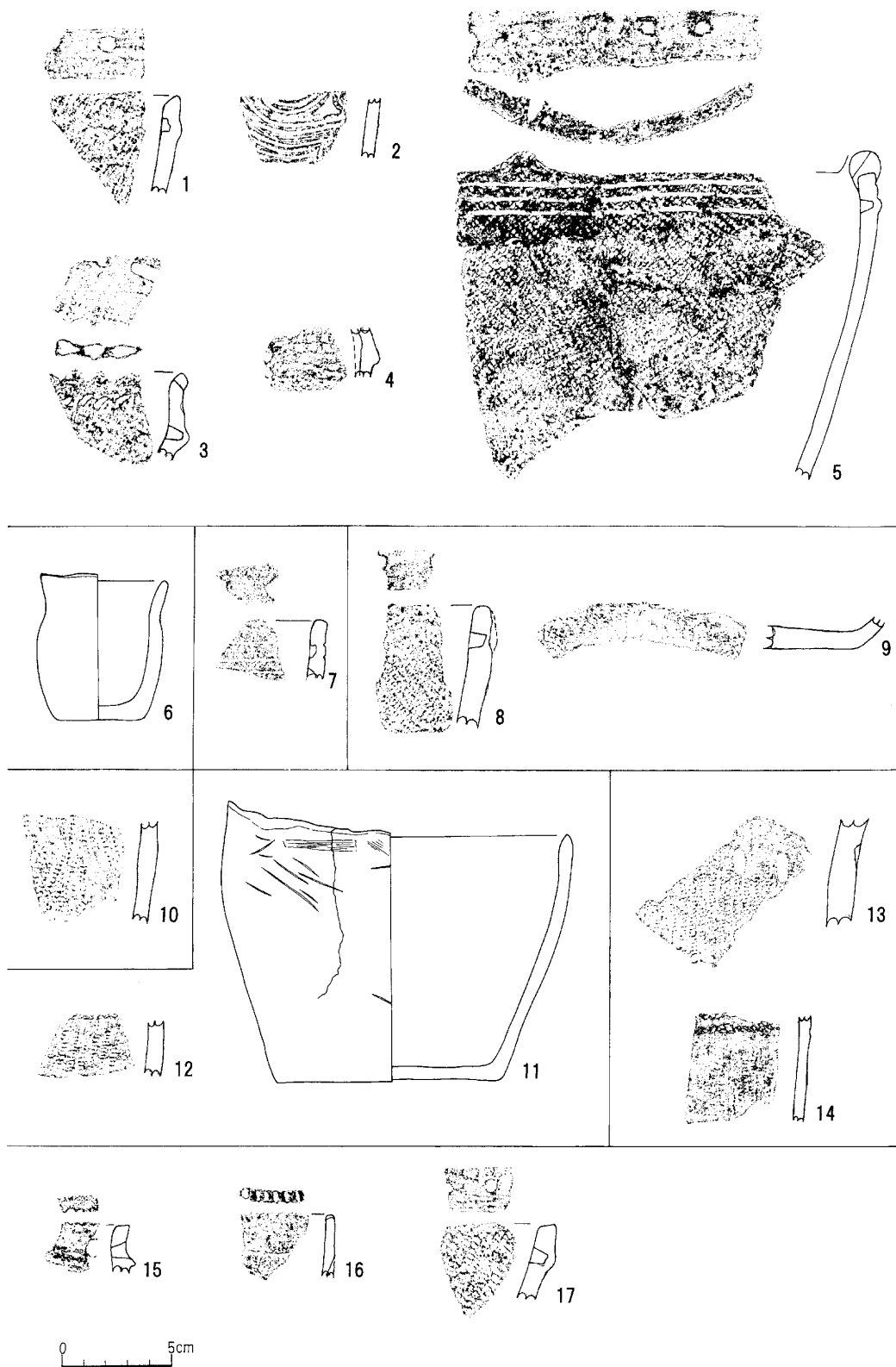
本ピットはE'88・89グリッドにまたがって位置する。規模は直径約1.55mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。上層の黒褐色砂には炭化物が混入する。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第162図-8・9)

2点とも埋土出土である。8は突瘤文をもつ縄文後期堂林式。9は縄文晩期の底部であろう。

(武田 修)



第162図 ピット1268埋土(1~5)、1272床面(6)、1273埋土(7)、1275埋土(8・9)、
1277埋土(10)、1278床面(11)・埋土(12)、1278a埋土(13・14)、1280埋土
(15~17)出土土器

ピット 1276

遺 構 (第163図)

本ピットは C' 88, D' 88グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.13m、短軸約0.78mの楕円形を呈する。床面から壁にかけての断面は弧状を呈し、高さは中央部で約20cmである。

床面に少量のベンガラを散布された粘性をもつ暗赤褐色土の遺存体が広い範囲にある。膨らみをもつ頭部は南壁側にあり、歯骨も検出された。琥珀玉は遺体上であり、西壁側から5点まとまって出土している。

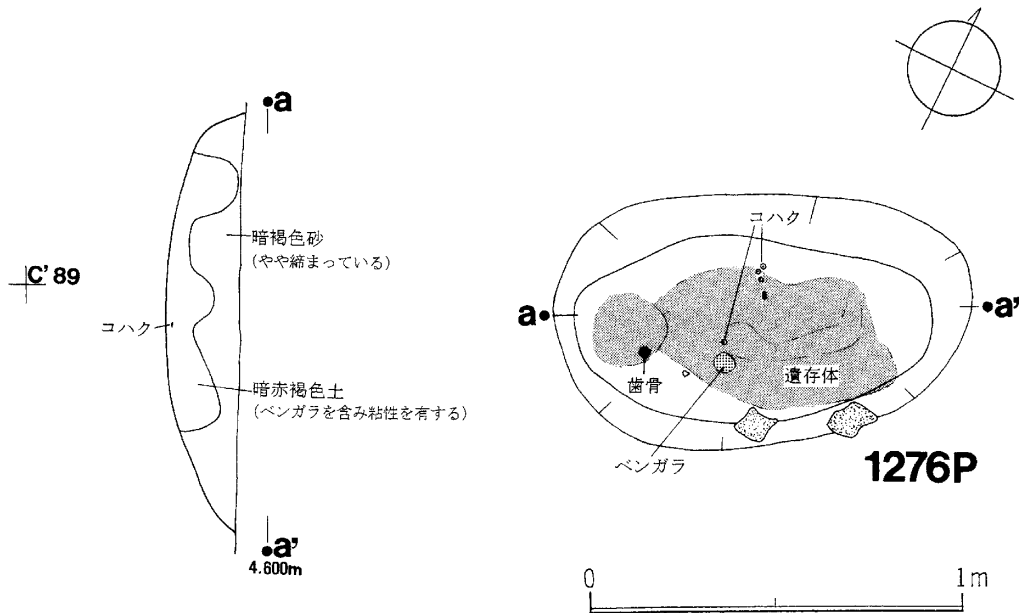
遺 物 (第159図-10, 図版48-17~23)

床面からは第159図-10に示す直径約1.3cmの琥珀製平玉が出土している。他に6点出土しているが、いずれも同じ大きさである。

小 括

本ピットは琥珀製平玉の存在から続縄文字津内Ⅱa式の土壙墓と考えられる。

(武田 修)



第163図 ピット1276平面図

ピ ッ ト 1277

遺 構 (第169図)

本ピットはE' 88グリッドに位置する。規模は直径約0.45mの小円形を呈する。壁は西壁側が垂直に立ち上がるものの、他の壁は丸みをもつ。高さは確認面から約23cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第162図-10)

埋土から出土した縄文晩期の胴部片である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1278

遺 構 (第164図, 図版49-1)

本ピットはE' 85グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約18cmである。

遺存体は暗茶褐色を呈し、粘性をもつ。頭部の膨らみは東壁側に有り、第162図-11に示す中型土器が正立の状態で副葬されている。土器は床面を2~3cmほど掘り下げた小ピット内部に置かれている。

遺 物 (第162図-11・12, 図版49-2)

第162図-11は床面出土。口径約16cm、器高約11cm中型鉢形土器。無文であるが、器面の内外面には擦痕がみられる。12は縄文晩期の胴部片である。

小 括

本ピットは東頭位の続縄文後北C₂・D式の土壌墓である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1278a

遺 構 (第164図)

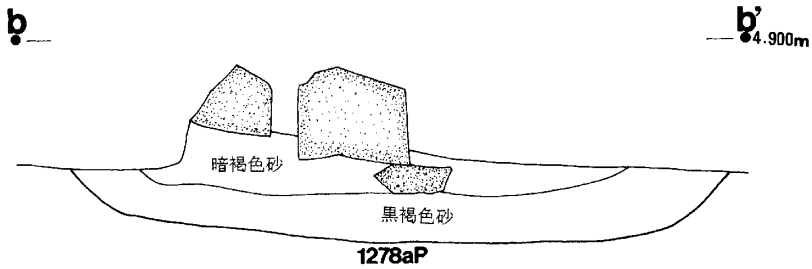
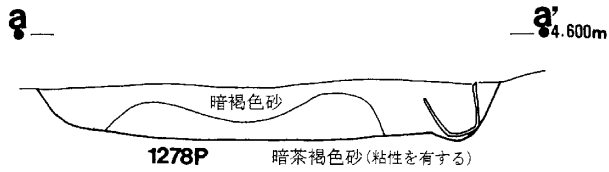
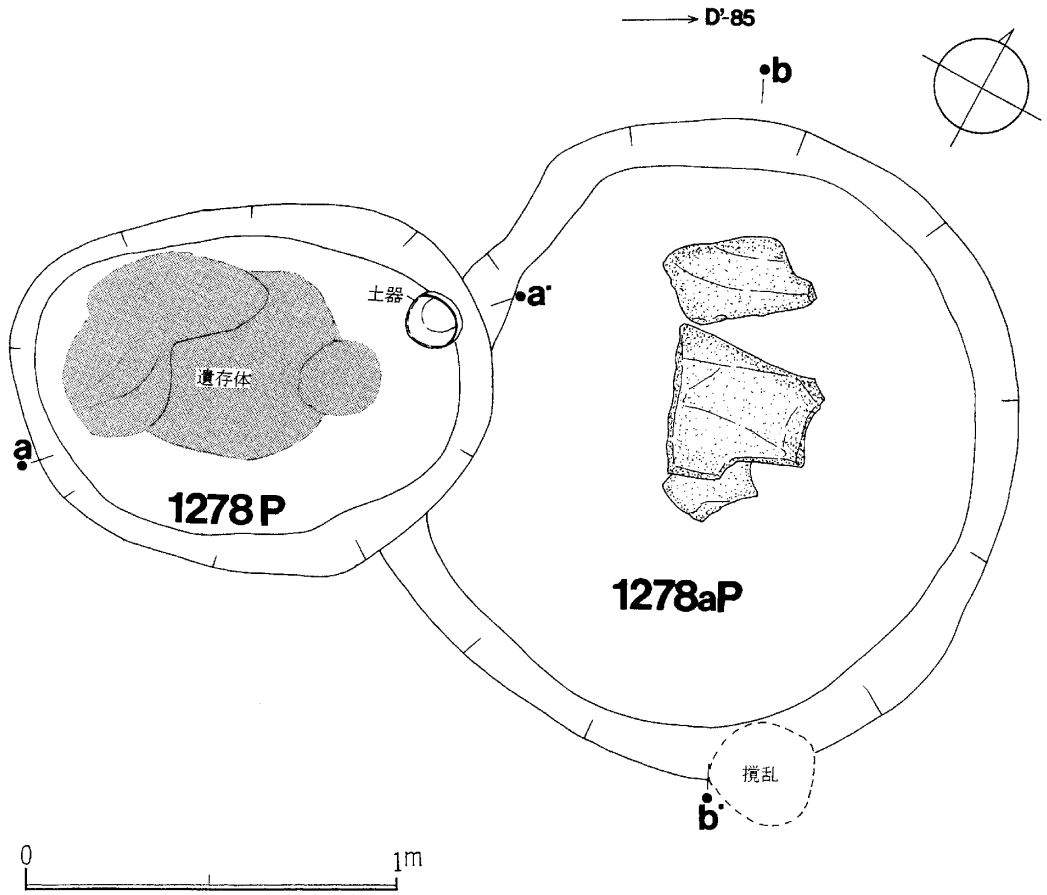
本ピットはE' 85グリッドに位置する。規模は直径約1.75mの円形を呈し、西壁側でピット1278に削られている。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

上部のほぼ中央部に長さ20cm、幅6cmの小型礫1点と長さ38~40cm、幅20cmの大型礫2点が並列して配置されている。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第162図-13・14)

2点とも埋土出土である。第162図-13は口縁下部の無文帯に刺突文が施される。続縄文初頭興津式相当であろう。14は縦走縄文を地文に縄線文がみられる。続縄文初頭であろう。



第164図 ピット1278、1278a 平面図

ピ ッ ト 1279

遺 構 (第130図)

本ピットはG'91グリッドに位置する。半分が攪乱を受けているが、残存部から判断して直径約0.45mの小円形である。壁高は約10cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1280

遺 構 (第130図)

本ピットはG'92グリッドに位置する。西壁、南壁が攪乱を受けており、詳細な規模、形態は不明である。壁高は約20cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第162図-15~17)

3点とも埋土出土である。第162図-15は口縁部に2条の微隆起線をもつ後北C₂・D式。16は縄文晩期の無文土器。17は縄文後期。 (武田 修)

ピ ッ ト 1281

遺 構 (第165図)

本ピットはC'90グリッドに位置する。壙上部に第166図-1に示す土器が破砕された状態で凹石と出土しており、周辺精査の結果、落ち込みを確認した。規模は直径約1.20mの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約85cmを測る比較的深い掘り込みである。

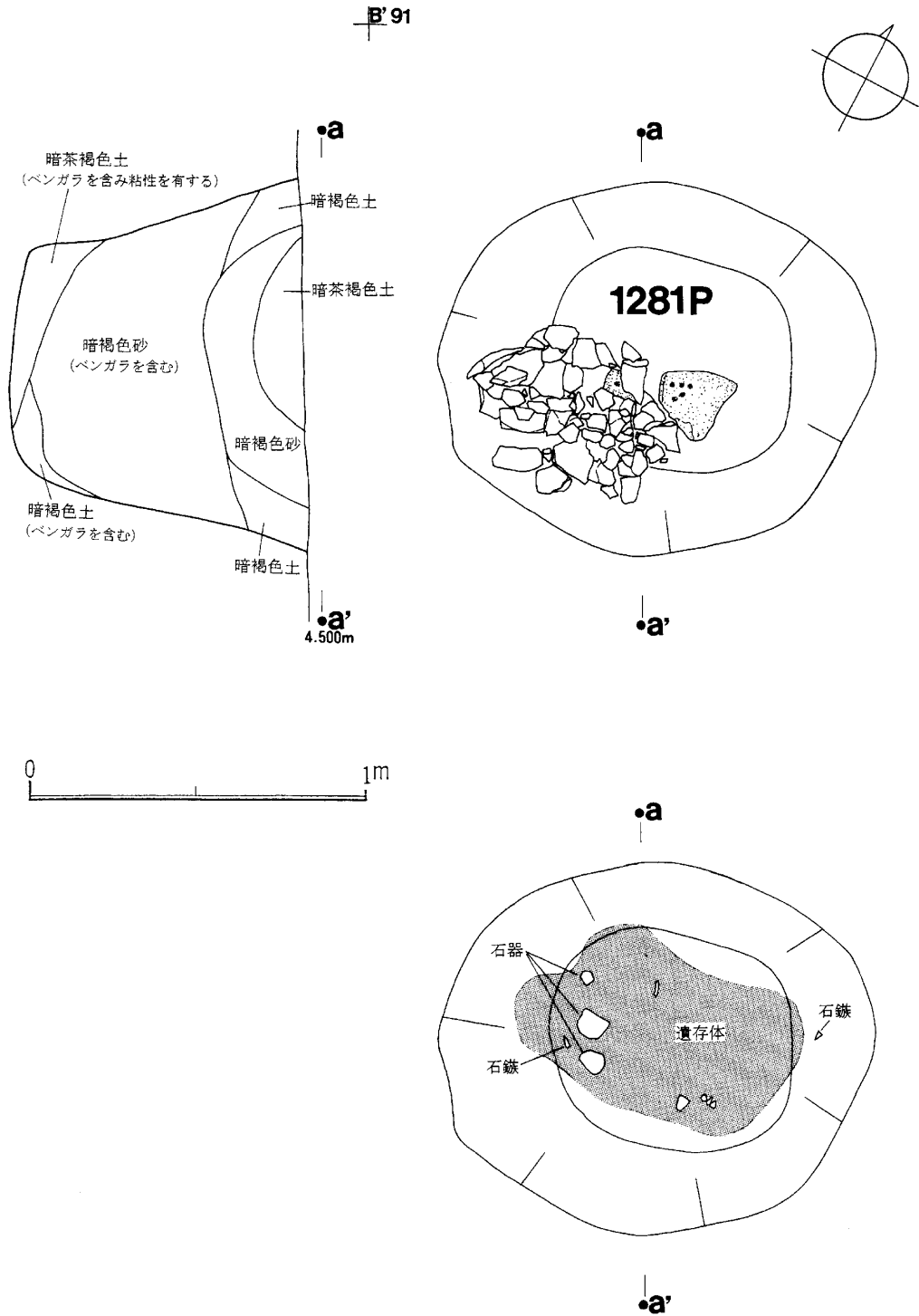
埋土の大部分はベンガラ混じりの暗褐色砂が床面の遺存体である暗茶褐色砂まで堆積している。遺存体にもベンガラが散布され、頭部と思われる張り出しが西壁際にみられる。

各種の石器は遺存体の上部から出土している。配置に規則性はみられない。

遺 物 (第166図, 第159図-11~15, 図版49-3~8)

第166図-1は口径約19cm、器高約45cmの大型で胴下部が大きく膨らむ壺形土器。縦走縄文を地文に縮約した口縁部に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭興津式相当であろう。

第159図-11・12は無茎石鏃であるが、12は鏃身が長く5.3cm。13・15は表裏面、14は表面に大きな剥離面を遺す。ナイフの未製品であろう。5点とも黒曜石製である。



第165図 ピット1281平面図・遺体出土状況



第166図 ビット1281埋土(1)出土土器

小 括

上部から出土した大型壺形土器は意識的に破碎されたもので、本ピットに伴うと思われる。本ピットは統縄文初頭興津式相当の土壌墓であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 1282

遺 構 (第167図)

本ピットはG'92・93グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約0.80m、短軸は南壁が0.60m、北壁が0.40mと南壁が長い不整形である。壁は皿状に立ち上がり高さは確認面から約20cmである。

埋土の暗褐色土には少量のベンガラが混入し、北壁から西壁側に遺存体と思われる暗褐色砂が認められ、セクション図に示すとおり第168図-1の土器が潰れた状態で出土した。土器の下には厚さ3cmの板状礫と黒曜石のフレーク・チップ4点が重なっていた。

遺 物 (第168図-1・2, 第159図-16, 図版50-1・2)

第168図-1は口径13cm、器高15.5cmの小型土器。2個1対の吊り耳間に擬縄隆帯が垂下する。宇津内Ⅱb式。

2は器面に3条の横走沈線文と上部に方形の沈線文がみられる。縄文後期船泊上層式。

石器は第159図-16は横長剥片を素材とした削器。黒曜石製である。

小 括

遺存体が検出されたので土壌墓と思われるが、詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 1282a

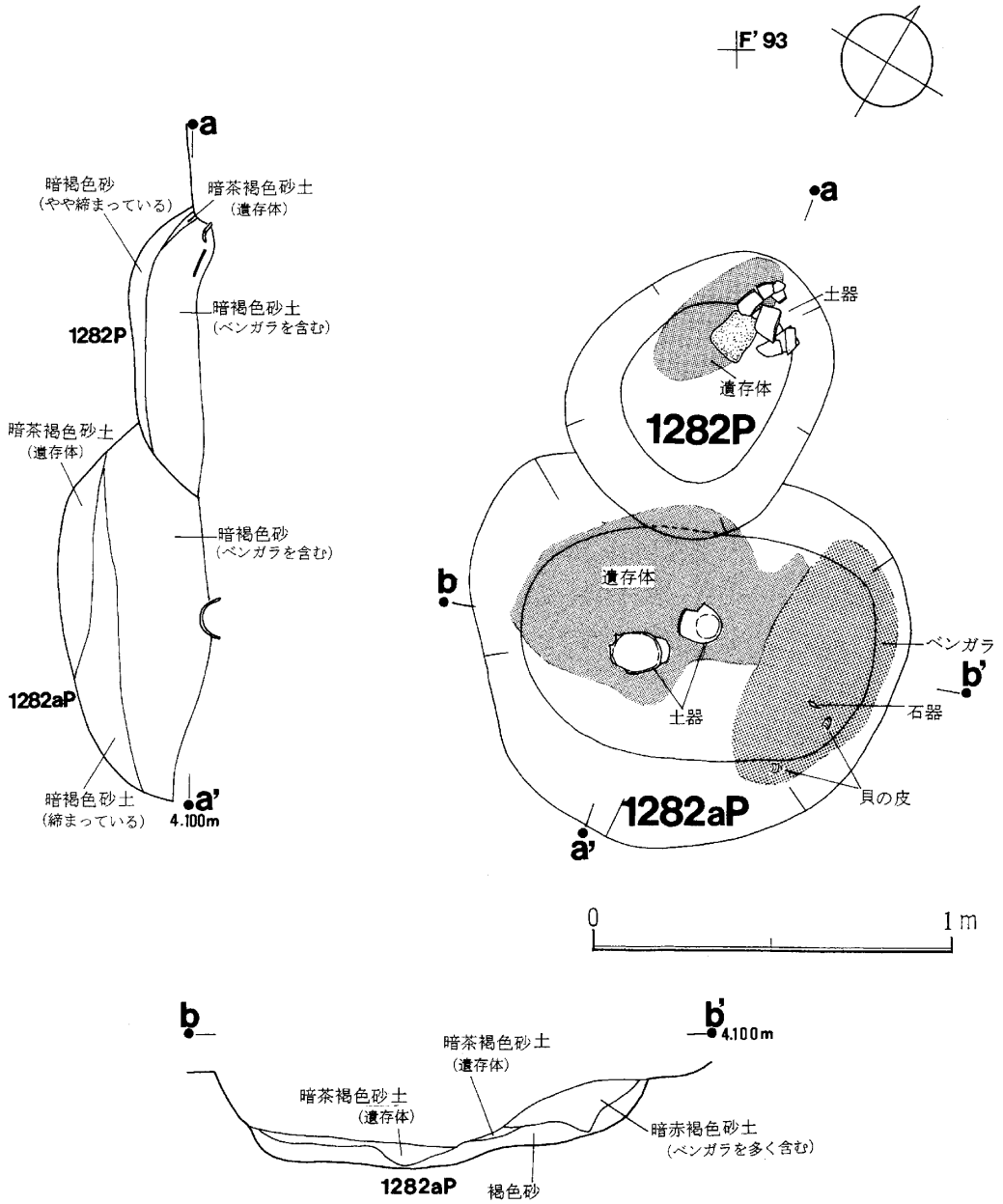
遺 構 (第167図)

本ピットはピット1282に北壁上部を切られている。規模は長軸約1.20m、短軸は北壁と南壁側が大きく開くため約1.06mと長い。床面の状態からみると形態は楕円形である。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

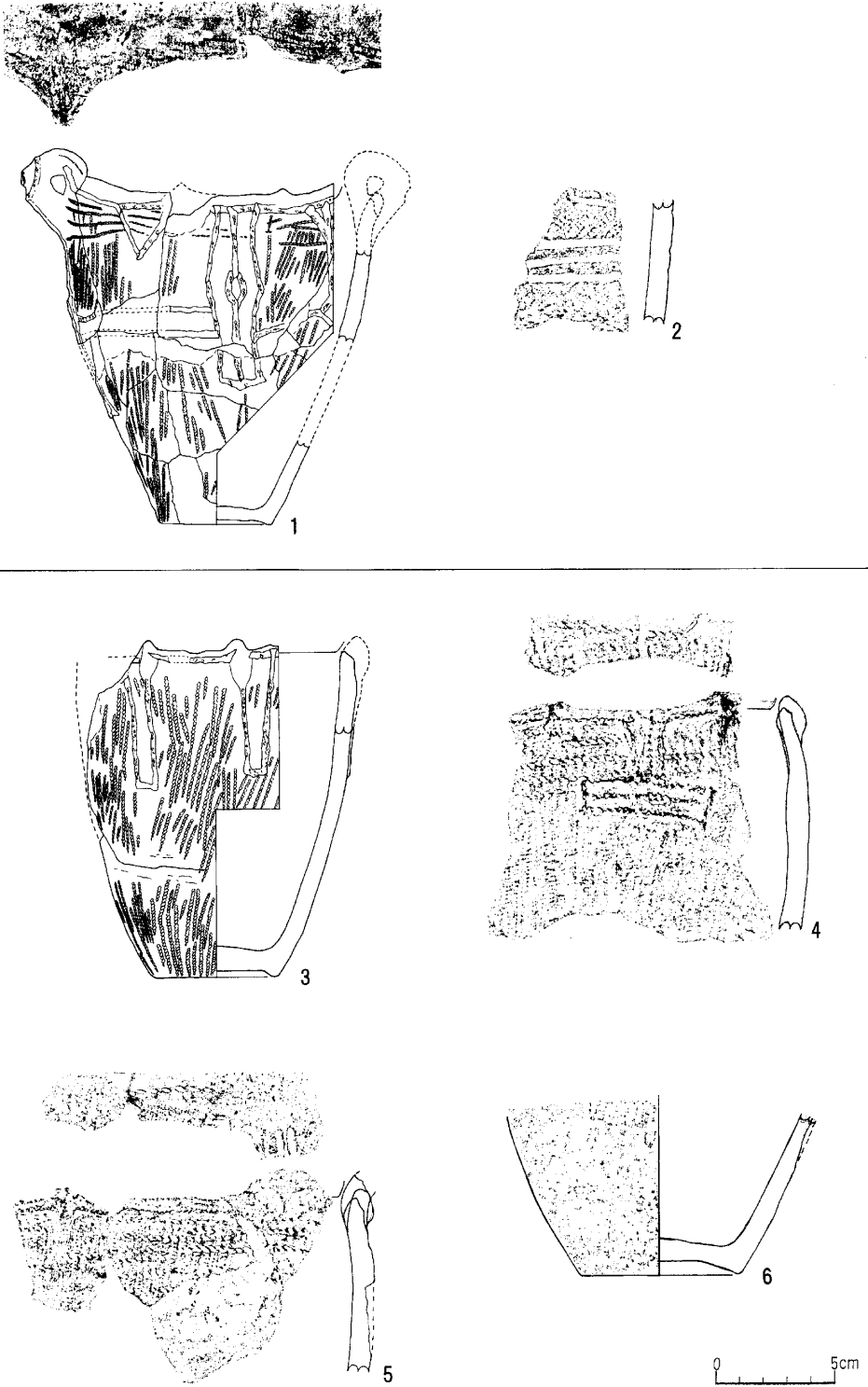
やや黒味を帯び、僅かに粘性のある暗茶褐色の遺存体は床面のほぼ全面にあるが、大部分は層厚約5cmの褐色砂を挟んだ上にみられる。短軸面のある東壁では長さ70cm、幅35cm、厚さ5~10cmのベンガラが流れ込む様に散布され、内部から第159図-17に示すナイフと貝皮が出土した。

遺 物 (第168図-3~6, 第159図-17・18, 図版50-3~5)

第168図-3は口径12cm、器高14cmの小型土器。口縁部の大半は欠失するが、残存部では2個の小突起から擬縄隆帯が垂下する。宇津内Ⅱb式である。



第167図 ピット1282、1282a 平面図



第168図 ピット1282埋土(1・2)、1282a埋土(3~6)出土土器

4・5の土器片は最上部、6の底部は埋土出土でありこの3点は同一個体と思われる。時期は統縄文字津内Ⅱb式である。出土状況から本ピットに伴うと判断できる。

石器は第159図-17は先端部が鋭く尖った片面加工ナイフ。18は削器。17は頁岩製、18は黒曜石製である。

小 括

本ピットは統縄文字津内Ⅱb式の土壌墓と考えられる。 (武田 修)

ピ ッ ト 1283

遺 構 (第169図)

本ピットはE'86・87グリッドにまたがって位置する。規模は直径約1.00mの円形を呈する。掘り込みは浅く、壁は皿状に立ち上がる。高さは確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第170図-1)

埋土出土である。胎土は砂粒が多く混入し、弧線状の沈線文が施される。縄文晩期中葉であろう。 (武田 修)

ピ ッ ト 1284

遺 構 (第169図)

本ピットはE'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.55m、短軸約1.20mの楕円形を呈する。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

埋土は3層に分層されるが、5～10cmの小角礫と炭化物が全体に混入する。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第170図-2・3、第159図-19)

埋土出土である。第170図-2は統縄文土器の胴部片。3は浅鉢か皿と思われる無文土器。縄文晩期であろう。

石器は第159図-19が削器。黒曜石製である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1284a・1284b

遺 構 (第169図)

ピット1284aはE'86グリッドに位置する。南壁から中央部にかけてピット1284に切られているため遺存は悪い。短軸約1.20mの楕円形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

ピット1284bはピット1284aと東壁で僅かに重複する。ピット1284aが切り込んでおり、形態は直径約1.30mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約35cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。

遺 物 (第170図-4~6, 第159図-20, 図版50-6)

第170図-4・5はピット1284aの埋土出土。2点とも縄文晩期中葉であろう。6はピット1284bの埋土出土。続縄文字津内Ⅱb式である。

石器は第159図-20がピット1284bから出土した両面加工ナイフ。黒曜石製。(武田 修)

ピ ッ ト 1285

遺 構 (第151図)

本ピットはC'83グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。約10cmの浅い掘り込みである。

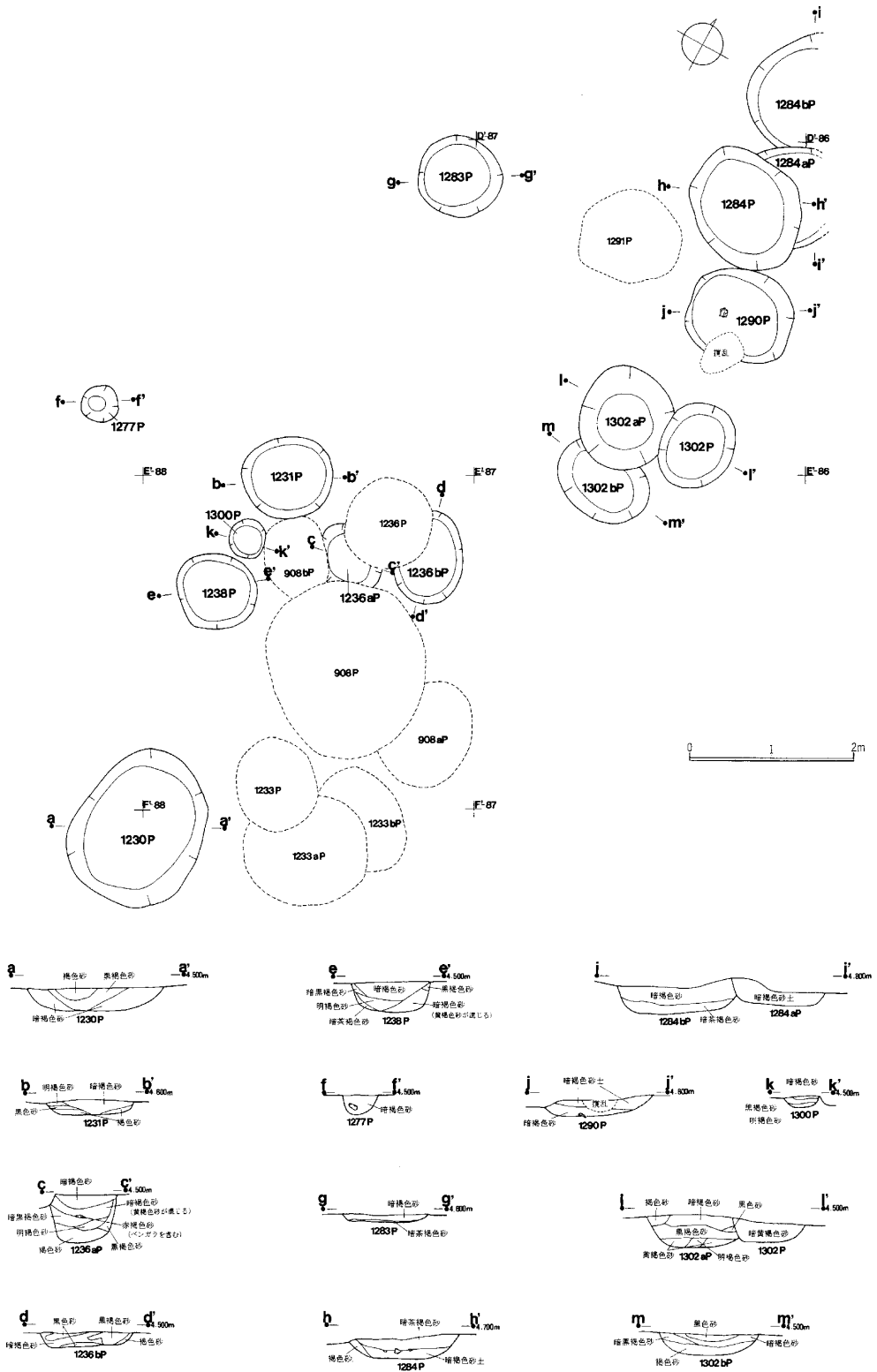
本ピットの詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 1286

遺 構 (第151図)

本ピットはC'91グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂層の上面で検出できず、下層の粒子の粗い明褐色砂内で確認した。床面は縄文後期の包含層も切り込んでいる。規模は長軸約1.55m、短軸約1.10の楕円形を呈するが、南壁側が尖り気味である。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは約35cmである。

本ピットの詳細な時期は不明である。(武田 修)



第169図 ピット1230、1231、1236a、1236b、1238、1277、1283、1284、1284a、1284b、1290、1300、1302、1302a、1302b 平面図

ピ ッ ト 1287

遺 構 (第151図)

本ピットはC'90・91グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約0.60m、短軸約0.53の小楕円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1288

遺 構 (第150図)

本ピットはD'85グリッドに位置する。形態は南西側が検出できなかったものの残存部から判断して楕円形と思われる。短軸は0.95mであり、壁高は確認面から約20cmである。

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1289

遺 構 (第130図)

本ピットはJ'92・93グリッドにまたがって位置する。東壁側が検出できなかったものの、残存部から判断して規模は直径約1.74mの不整楕円形を呈すると思われる。西壁側の最上部に長さ30cm、幅14cmと長さ82cm、幅52cmの動物と思われる骨の痕跡があり、数cm掘り下げると骨粉を含む焼土が接して認められた。埋土にも同様の痕跡が遺され、床面は西側を中心に炭化材があり、所々で火熱を受け赤変していたので、上層から床面の状況は一連のものと判断される。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第159図-21, 図版50-7)

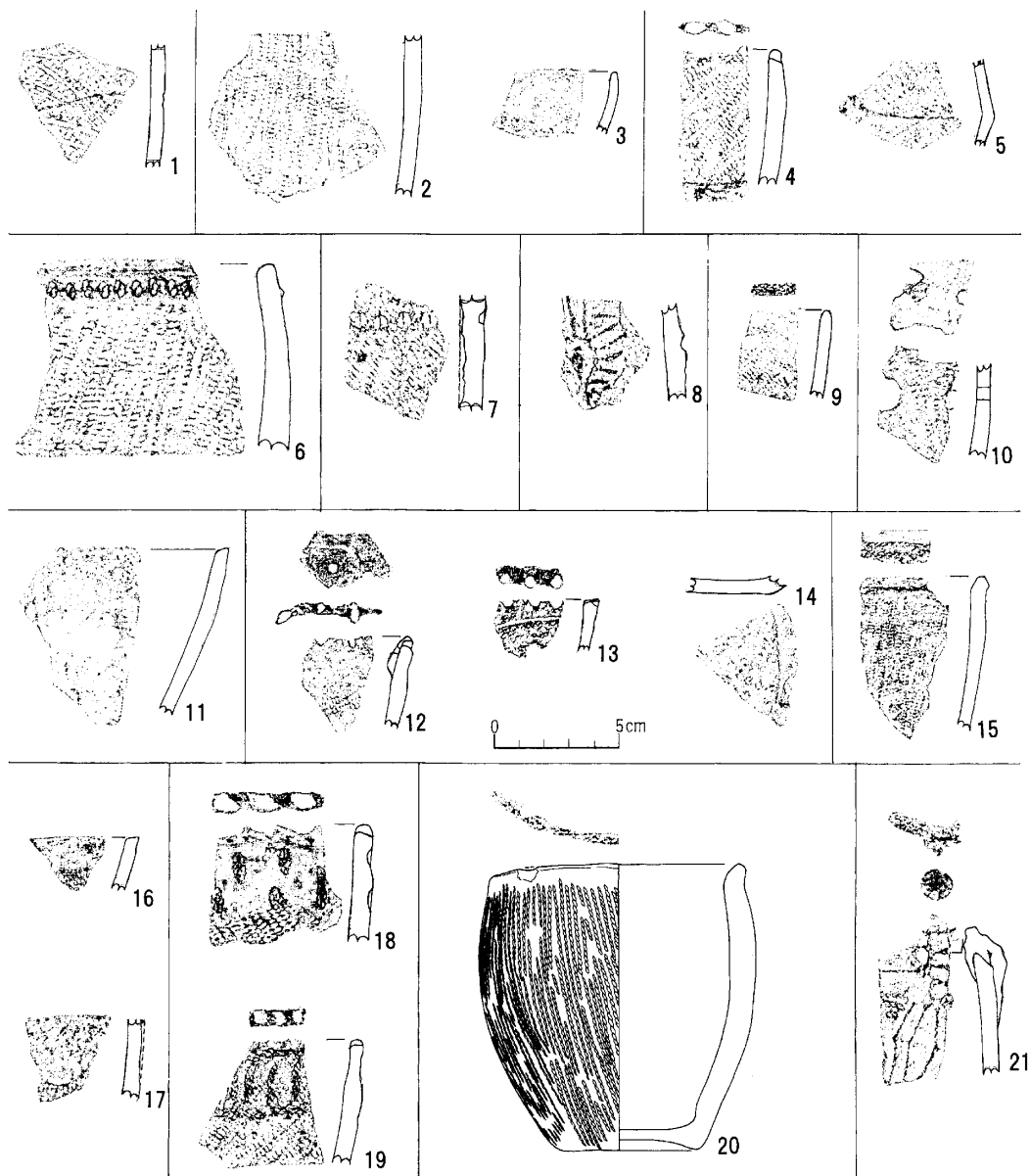
埋土出土である。上下端部が欠失した両面加工ナイフ。黒曜石製である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1290

遺 構 (第169図)

本ピットはE'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10m方形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。



第170図 ピット1283埋土(1)、1284埋土(2・3)、1284a埋土(4・5)、1284b埋土(6)、1290埋土(7)、1295a埋土(8)、1302a埋土(9)、1303埋土(10)、1304埋土(11)、1305埋土(12~14)、1306埋土(15)、1306埋土a(16・17)、1310埋土(18・19)、1313埋土(20)、1316埋土(21)出土土器

遺物 (第170図-7, 第173図-1)

第170図-7は埋土出土である。胎土に植物繊維を多量に混入する。器面は縄文を地文に円形刺突文が連続して施される。縄文中期北筒式である。

第173図-1は埋土出土の削器。黒曜石製である。 (武田 修)

ピット 1291

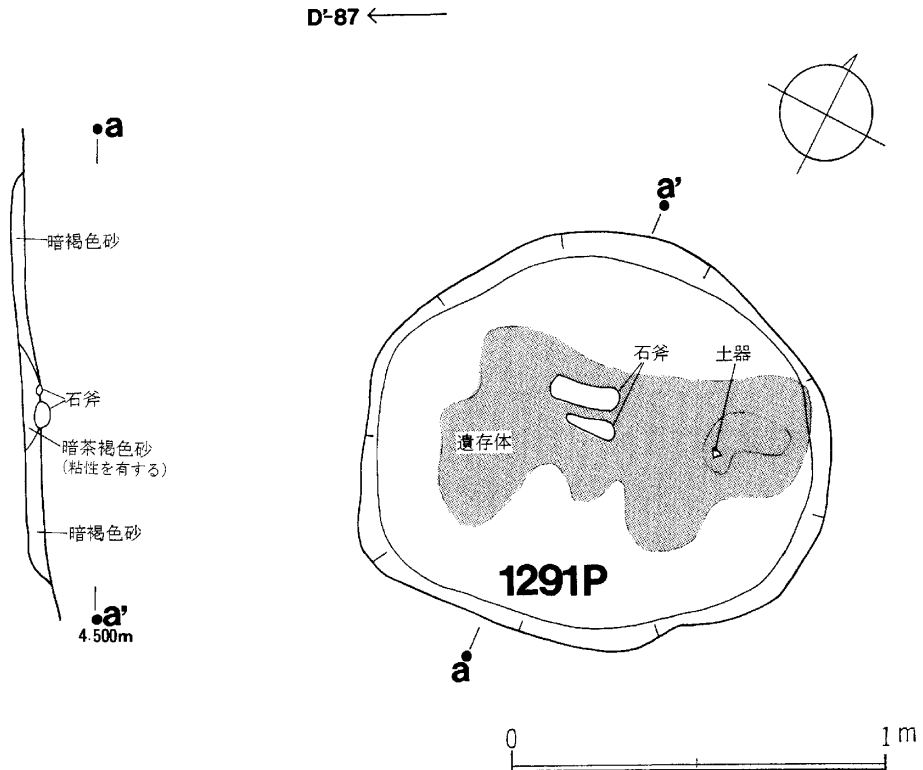
遺構 (第171図)

本ピットはE'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.23m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は約5cmである。暗茶褐色砂の遺存体は長軸面である東西方向にあり、頭部と思われる膨らみは東壁側に位置し、床面は僅かに傾斜する。

遺物 (第173図-2・3, 図版50-8・9)

第173図-2・3は遺存体上から出土した石斧。2は下端部に刃部をもつ片刃磨製石斧。花崗岩製。3は縦断面が弧状を呈する。刃部と柄部の周辺が研磨され、表面のみ中央部から縁辺部にかけて丁寧に敲打調整された両刃磨製石斧。ヒスイを含有する角閃岩製である。

(武田 修)



第171図 ピット1291平面図

ピ ッ ト 1292

遺 構 (第107図)

本ピットはF80・81グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.98mの円形を呈する。壁高は確認面から約19cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1292a・1292b

遺 構 (第107図)

ピット1292aはE81, F81グリッドにまたがって位置する。ピット1292に北壁の一部が切られる。規模は直径約0.84mの円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。

ピット1292bはF80グリッドに位置する。ピット1292に西壁側を切られるものの規模は直径約0.26mの小円形を呈する。壁高は確認面から約28cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1293

遺 構 (第150図)

本ピットはE'85グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁高は約30cmである。埋土は褐色砂のみ堆積する。

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1294

遺 構 (第150図)

本ピットはD'85グリッドに位置する。南西側が検出できなかったものの、規模は直径約1.00mの円形を呈すると思われる。壁高は約8cmである。北壁側に粘性を有した黒褐色土の遺存体がみられる。

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1295

遺 構 (第172図)

本ピットはD'87グリッドに位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.57mの楕円形を呈する。壁高は約8cmである。

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 1295a・1295b

遺 構 (第172図)

ピット1295aはピット1295に東壁側の一部を切られる。規模は長軸約1.80m、短軸約1.10mの大型の楕円形である。床面は南壁側で僅かに有段化して壁に続くが、他は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。

遺存体は暗茶褐色を呈し、粘性がある。遺存体の痕跡から把握して、頭部は北壁側にあると思われる。

ピット1295bはピット1295に西側を切られている。残存部から判断して楕円形を呈すると思われる。短軸は約0.85mであり、高さは確認面から約18cmである。

遺存体は粘性のある暗赤褐色を呈し、ベンガラが散布されている。東壁上部から床面にかけてみられる膨らみが頭部と推測される。

石器は北壁側から集中して出土している。

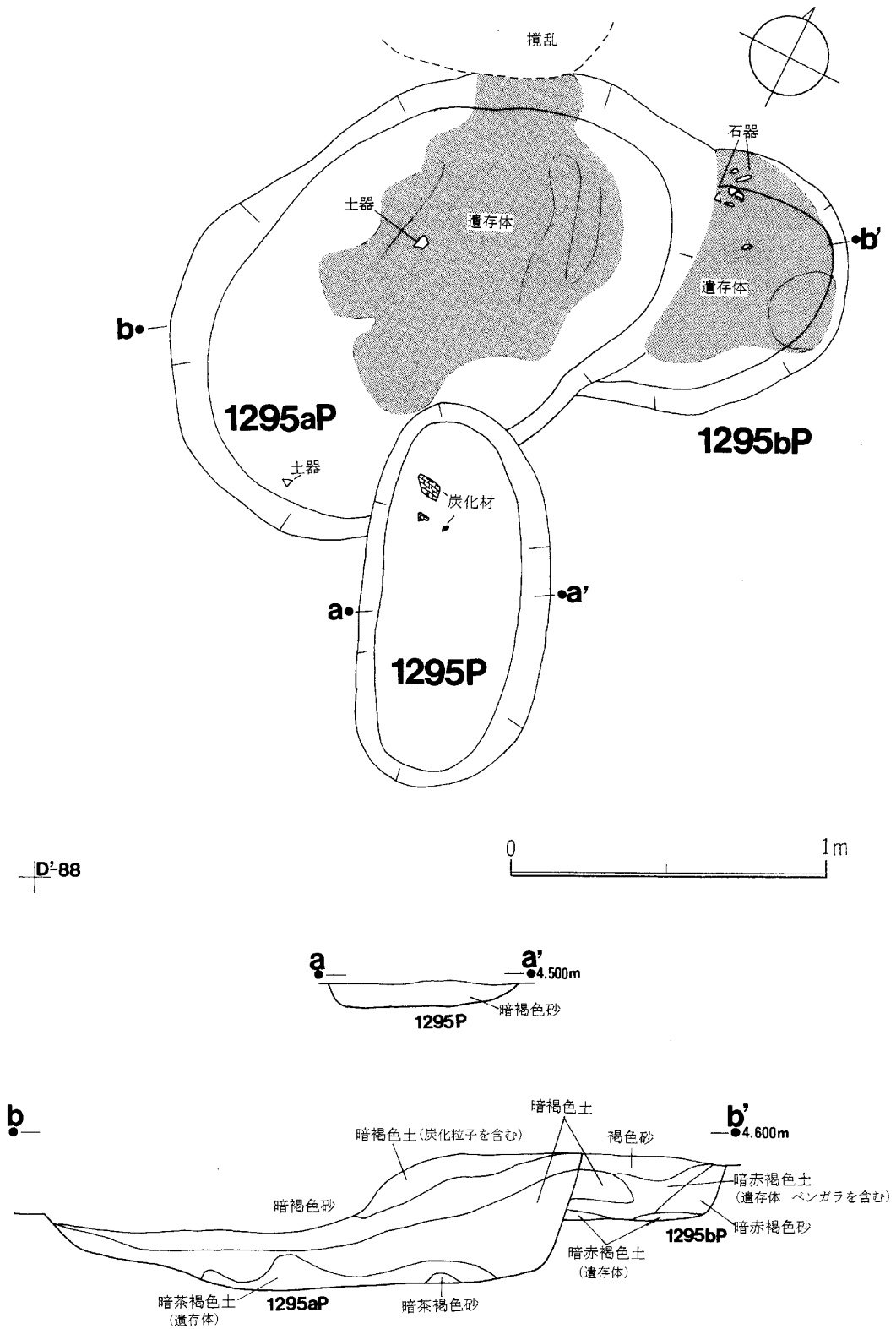
遺 物 (第170図-8, 第173図-4~8, 図版50-10)

ピット1295aの埋土からは第170図-8は続縄文字津内Ⅱb式。

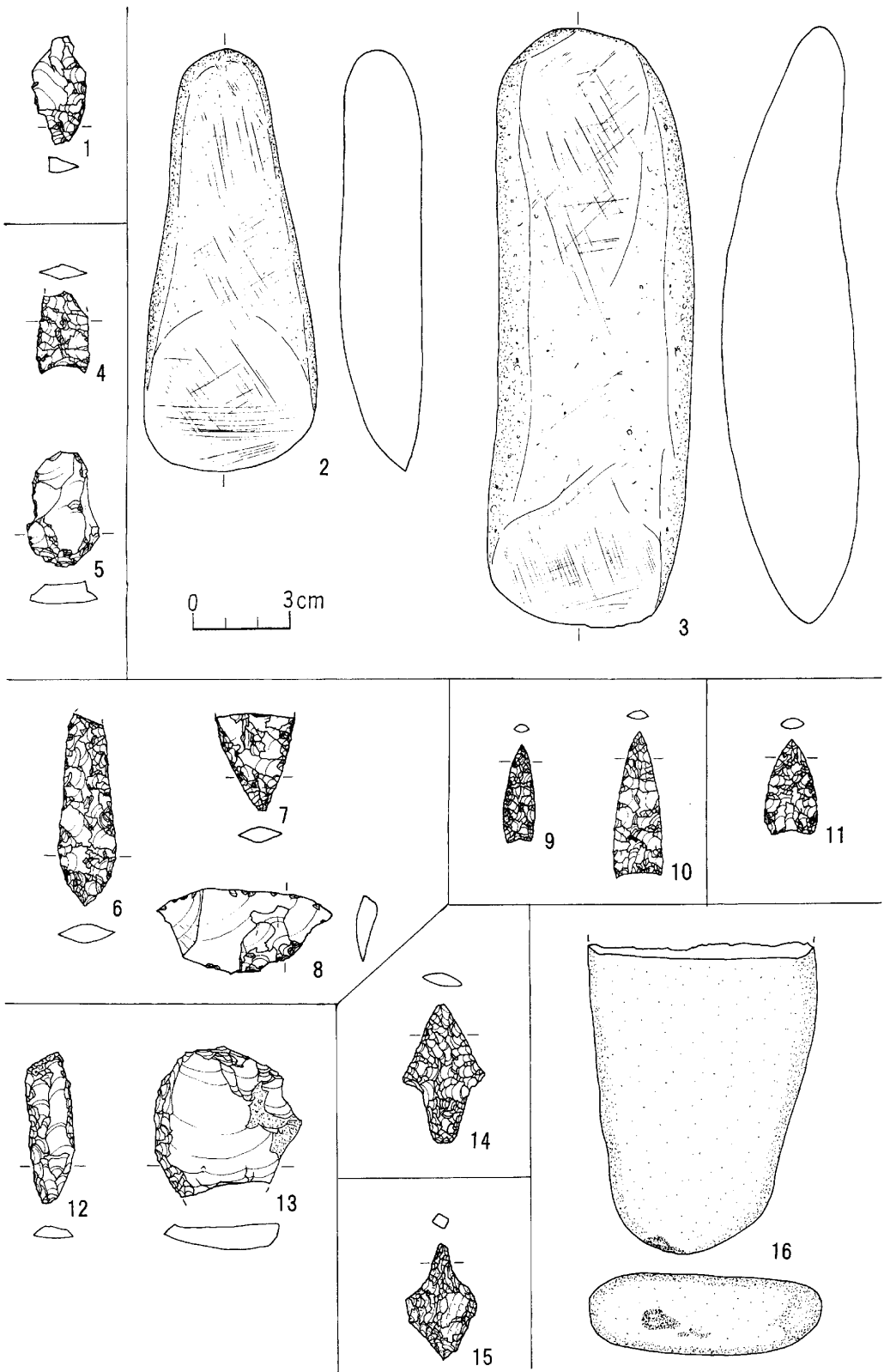
第173図-4は無茎石鏃。5は搔器。2点とも黒曜石製。

ピット1295bの床面からは第173図-6・7は両面加工ナイフ。8は横長剥片の一部に加工を施した削器。裏面の縁辺部にも微細な刃こぼれ状の使用痕がみられる。全て黒曜石製。

(武田 修)



第172図 ピット1295、1295a、1295b 平面図



第173図 ピット1290埋土(1)、1291遺体上(2・3)、1295a埋土(4・5)、1295b床面(6～8)、1296床面(9・10)、1297床面(11)、1306a埋土(12・13)、1307埋土(14)、1308埋土(15)、1312埋土(16)出土石器

ピット 1296

遺構 (第174図)

本ピットはC'87グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は約10cmである。床面には遺存体の痕跡が3箇所に見られ、1つにはベンガラが散布されている。第173図-9・10の石鏃はそれぞれ離れて出土したが、本ピットに伴うと思われる。

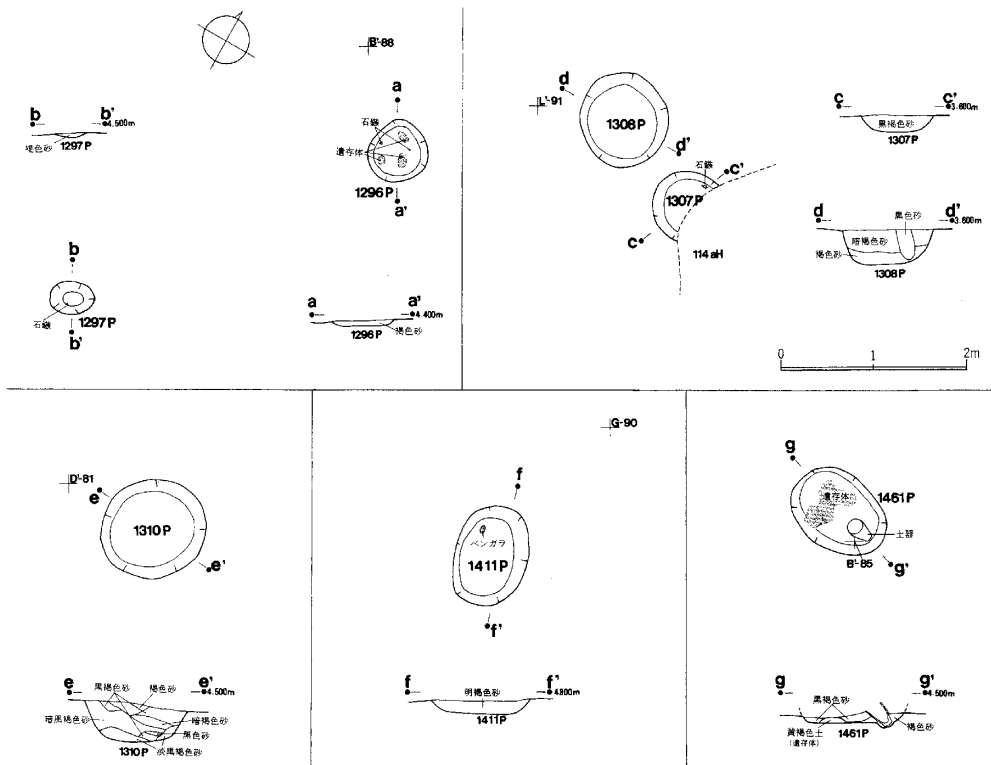
遺物 (第173図-9・10, 図版50-11・12)

2点とも無茎石鏃である。9は黒曜石製、10は頁岩製である。

小括

土墳墓であるが詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第174図 ピット1296、1297、1307、1308、1310、1411、1461平面図

ピット 1297

遺構 (第174図)

本ピットはC'88グリッドに位置する。規模は長軸約0.45m、短軸約0.33mの楕円形を呈する。壁高は約10cmである。

本ピットの詳細な時期は不明である。

遺物 (第173図-11, 図版50-13)

床面出土の無茎石鏃。黒曜石製である。 (武田 修)

ピット 1298

遺構 (第155図)

本ピットはF'89・90グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約28cmである。

本ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1299

遺構 (第107図)

本ピットはE80グリッドに位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.84mの楕円形を呈する。壁高は確認面から14cmを測る。 (武田 修)

ピット 1300

遺構 (第169図)

本ピットはF'87グリッドに位置し、規模は径約0.46mの円形を呈する。壁高は確認面から13cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

ピット 1301

遺構 (第175図)

本ピットはG'83グリッドにあり、規模は南東側に攪乱を受けているが径約1.10mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から22cmを測る。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1302・1302a

遺 構 (第169図)

ピット1302はE'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.04m、短軸約0.88mの楕円形を呈し、壁高は確認面から20cmを測る。遺物は出土していない。

ピット1302aはピット1302の西側にあり、規模は径約1.20mの円形を呈する。壁高は確認面から38cmを測る。

遺 物 (第170図-9)

ピット1302aの埋土からは第170図-9が出土。縄文晩期。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1302b

遺 構 (第169図)

本ピットはピット1302aの南側にあるが、規模は長軸約1.20m、短軸約0.90mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から24cmを測る。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1303

遺 構 (第175図)

本ピットはF'83・84グリッドに位置する。規模は南側に攪乱を受けているが長軸約1.44m、短軸約1.35mの円形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。

遺 物 (第170図-10)

第170図-10は埋土出土である。左側に補修口があり、右側は貫通した円形刺突文が施されるようである。縄文晩期であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 1304

遺 構 (第150図)

本ピットはF'84グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.76mの楕円形を呈する。壁高は確認面から28cmを測る。

遺 物 (第170図-11)

第170図-11は埋土出土である。内削状の口唇部をもつ無文土器。縄文晩期中葉であろう。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1305

遺 構 (第175図)

本ピットはE'84グリッドに位置する。規模は長軸約1.44m、短軸約1.32mの円形を呈し、壁高は確認面から43cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面西側の壁際から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌墓と考えられるが、時期は不明である。

遺 物 (第170図-12~14)

第170図-12~14は埋土出土である。12・13とも口唇部に刻みをもつ。縄文晩期後葉の幣舞式。14は縄文晩期の底部。(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1306

遺 構 (第150図)

本ピットはF'85グリッドに位置し、規模は長軸約0.92m、短軸約0.68mの楕円形を呈する。壁高は確認面から34cmを測る。

遺 物 (第170図-15)

第170図-15は埋土出土の統縄文字津内Ⅱb式。(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1306a

遺 構 (第150図)

本ピットはピット1306の南西側にあり、規模は長軸約1.28m、短軸約1.00mの楕円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。

床面には遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出され、その上から石器が出土している。遺存体の東側から歯骨が検出されている。

遺 物 (第170図-16・17, 第173図-12・13, 図版51-1・2)

第170図-16・17は埋土出土である。16は無文の口縁下部に帯縄文が施される。17は無文である。2点とも縄文晩期中葉であろう。

石器は第173図-12・13は埋土出土である。2点とも黒曜石製の削器。

小 括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌墓とも考えられる。長軸は東-西方向にあり、頭位は東である。時期は不明である。

(佐々木 寛)

ピット 1307

遺構 (第174図)

本ピットはM'90グリッドに検出された。長軸は114a号堅穴に切られて不明であるが、短軸は0.74mあり、壁高は確認面から17cmを測る。

遺物 (第173図-14, 図版51-3)

石器は埋土出土で第173図-14はアグが張り出した有基石鏃。黒曜石製。(佐々木 寛)

ピット 1308

遺構 (第174図)

本ピットはM'90グリッドに検出された。規模は長軸約1.02m、短軸約0.94mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から36cmを測る。

遺物 (第173図-15, 図版51-4)

石器は第173図-15は埋土出土の頁岩製の石鏃。(佐々木 寛)

ピット 1309

遺構 (第150図)

本ピットはF'85グリッドに位置する。南西側に攪乱を受けているため長軸は不明であるが短軸0.74mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から17cmを測る。(佐々木 寛)

ピット 1310

遺構 (第174図)

本ピットはE'80グリッドに位置する。規模は長軸約1.14m、短軸約1.02mの円形を呈し、壁高は確認面から42cmを測る。

遺物 (第170図-18・19)

埋土から第170図-18は無文の口縁下部に縄端丘痕文が二段に施される。続縄文初頭興津式相当であろう。19は幅広い間隔で2条の縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

(佐々木 寛)

ピ ッ ト 1311

遺 構 (第175図)

本ピットはF' 83に位置し、規模は長軸約1.40m、短軸約1.30mの円形を呈する。壁高は確認面から43cmを測る。
(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1312

遺 構 (第175図)

本ピットはG' 83グリットに位置し、規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から24cmを測る。

遺 物 (第173図-16)

第173図-16は埋土出土、幅広い泥岩を利用した、下端部に使用痕があるたたき石。

(武田 修)

ピ ッ ト 1312a・1312b

遺 構 (第175図)

ピット1312aはピット1312の南側に位置する。規模は長軸は南側に攪乱を受けているため不明であるが短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から22cmを測る。

ピット1312bはピット1312aの西側にあり、長軸は不明であるが短軸約0.60mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1313

遺 構 (第176図)

D80グリッドに位置する。平成13年9月の洪水によって遺構の大半が流失し、埋土の一部と遺存体が検出されたに過ぎないため規模・形態ともに不明である。

遺存体の中からは第177図-1～9の石器と琥珀玉が161点出土している。遺存体の下から径10～15cm、深さ5～10cmの柱穴が6本検出された。ピット中央より多少北東側の遺存体中から歯骨が出土しており、ベンガラも僅かに認められた。

遺 物 (第170図-20, 第177図-1～18, 図版51-5～16)

第170図-20はほとんどが地表に現れた状態で検出された土器。地文の縄文のみで口径10cm、

器高11.5cmの続縄文初頭。

石器はすべて遺存体中からの出土。第177図-1～7は無基石鏃。8・9はナイフ。いずれも黒曜石製。10～18は琥珀玉。

小 括

本ピットは出土遺物から続縄文初頭の土壙墓であるが、大半が流失しているため規模・形態ともに不明である。長軸は南西～北東と考えられ、頭位は北東である。 (佐々木 寛)

ピ ッ ト 1314

遺 構 (第117図)

本ピットはL61グリッドに位置する。規模は長軸約2.20m、短軸約0.90mの長方形を呈し、壁高は確認面から10cmと非常に浅い。本来は上層から掘り込まれていたものと思われるが、耕作によりピットの上部ほとんどが失われている。

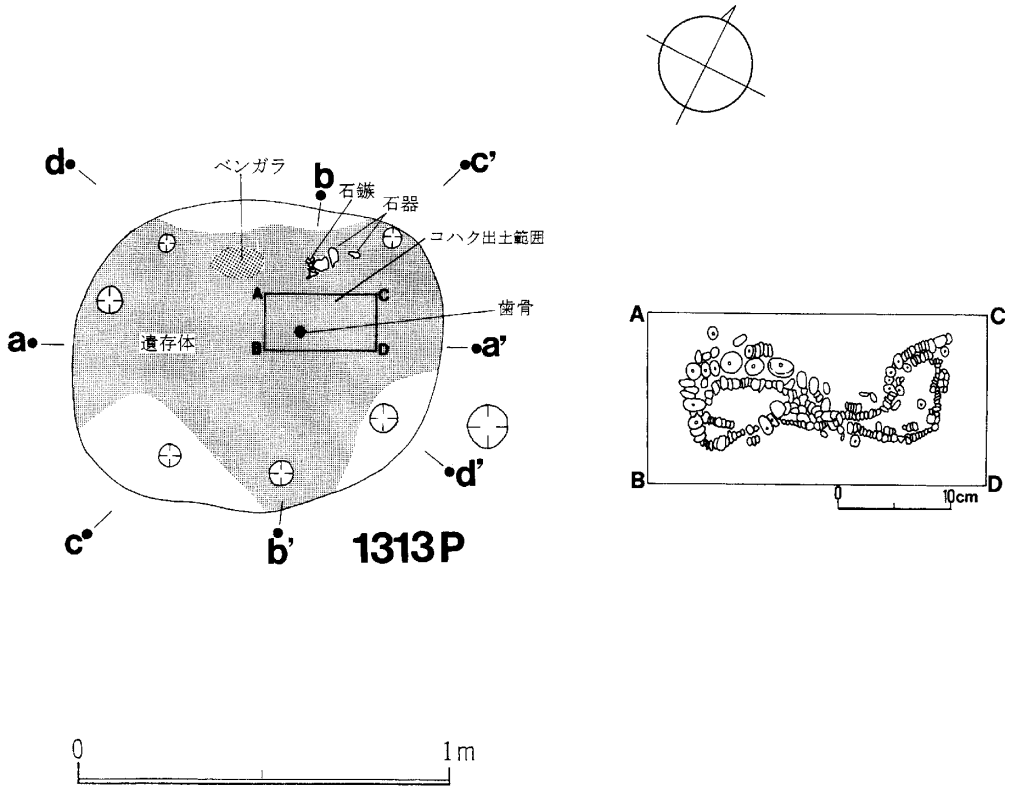
長軸上の北側に遺存体の頭部と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。ピットの形態からアイヌ期の土壙墓と考えられるが、断定はできない。

遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

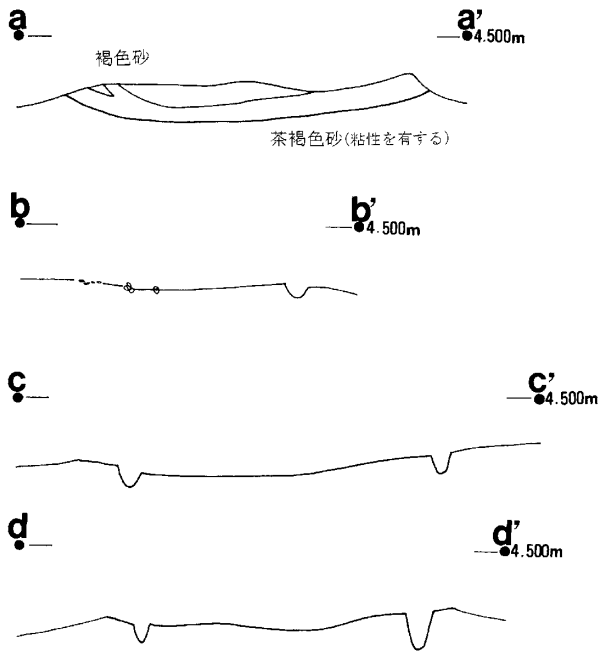
ピ ッ ト 1315

遺 構 (第115図)

本ピットはM56グリッドに位置する。規模は長軸約0.86m、短軸約0.68mの楕円形を呈し、壁高は確認面から14cmを測る。 (佐々木 寛)



D-80



第176図 ピット1313平面図・琥珀玉出土状況

ピット 1316

遺構 (第224図)

本ピットはE82グリッドに位置する。規模は径0.30mの小円形を呈する。壁高は確認面から24cmを測る。

遺物 (第170図-21)

第170図-21は埋土出土の宇津内Ⅱb式。

(佐々木 寛)

ピット 1317

遺構 (第107図)

本ピットはD80グリッドに位置する。規模は長軸約1.62m、短軸約1.34mを呈する。壁高は確認面から18cmを測る。埋土には60×30cmの範囲で焼骨を含む焼土が約2cmの厚さで堆積している。床面から直径10cmほどの小ピットを2個検出している。

(熊木美野里)

ピット 1318

遺構 (第107図)

本ピットはD81グリッドに位置する。規模は直径約0.84mの円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る

(熊木美野里)

ピット 1319

遺構 (第107図)

本ピットはF80グリッドに位置する。西壁をピット1320に切られているが、規模は直径約1.30mの円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測る。壁はレンズ状に立ち上がる。北壁は径30cmの小ピットに切られている。

遺物は少量出土しているが、時期を確定できるものはない。

(熊木美野里)

ピット 1320

遺構 (第107図)

本ピットはF80グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの不整形な円形を呈する。壁高は確認面から16cmを測る。壁は緩やかなレンズ状に立ち上がる。このピットも北壁は径20cmの小

常呂川河口遺跡

ピットに切られている。

遺物は少量出土しているが、時期を確定できるものはない。

(熊木美野里)

ピット 1321

遺構 (第224図)

本ピットはE83グリッドに位置する。規模は径約0.30mの小円形を呈する。壁高は確認面から14cmを測る。

(熊木美野里)

ピット 1322

遺構 (第224図)

本ピットはE83グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈し、ピット1323bの東壁上部の一部を切っている。掘り込みは浅く、壁高は確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1323

遺構 (第224図)

本ピットはE83グリッドに位置する。規模は長軸約0.98m、短軸約0.74mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

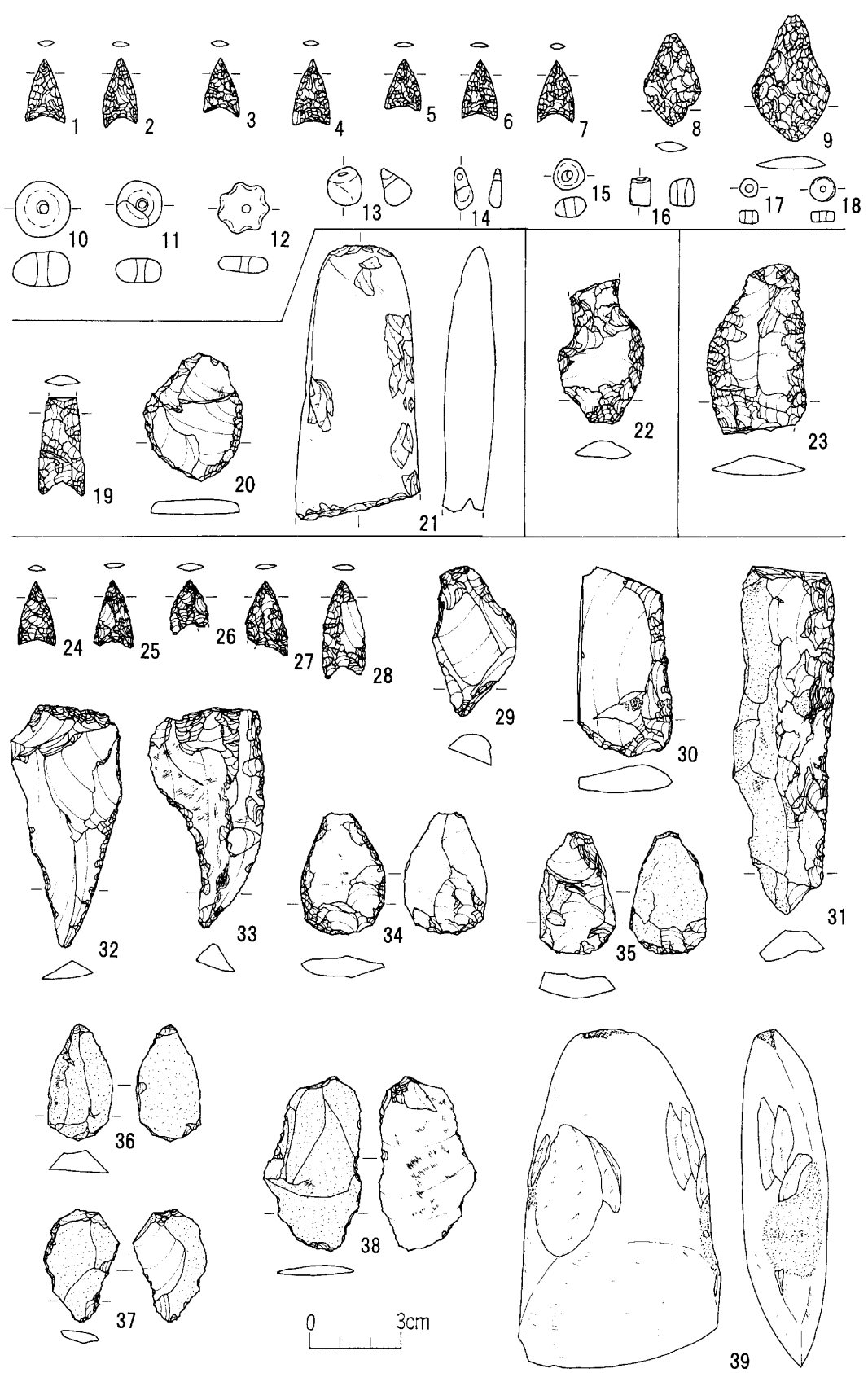
ピット 1323a・1323b

遺構 (第224図)

ピット1323aはピット1323に大半を切られているため正確な形態は不明であるが、残存部から判断して小楕円形を呈するようである。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約25cmである。床面に径約10cmの円礫がみられる。

ピット1323bはピット1323の西側にあり、東壁の一部を切られている。規模は直径約1.70mの円形を呈する。壁は東壁側が垂直に立ち上がるものの、他の壁は開き気味である。高さは確認面から約35cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。



第177図 ピット1313遺体上(1~18)、1323b埋土(19~21)、1325埋土(22)、1327埋土(23)、1332床面(24~35)・埋土(36~39)出土石器・琥珀玉

遺物 (第177図-19~21, 図版52-1~3)

石器はピット1323bの埋土出土である。第177図-19は無茎石鏃。20は搔器。2点とも黒曜石製。21は刃部が欠失するが、緑色泥岩製の磨製石斧。 (武田 修)

ピット 1324

遺構 (第178図)

本ピットはD83, E83グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。床面は僅かに傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。

確認面で長さ約33cmの細長い角礫があり、掘り下げ直後に擦石1点と長さ35cmと40cmの細長い角礫が出土した。これらの礫は壙上部にあつて、あたかも塞ぐように平坦に置かれてあった。床面近くには凹石1点の他、15cm前後の角礫3点が出土した。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1324a

遺構 (第178図)

本ピットはE83, F83グリッドにまたがって位置する。ピット1324に東壁の一部を切られるものの全体を検出することができた。規模は直径約1.45mの方形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

埋土は各層に分層されるが、全体的に数cmの炭化材、炭化粒を含む。

遺物 (第179図-1~4)

第179図-1・2は床面出土であり、3・4は埋土出土である。1は口縁下部に太目の縄線文を2条施す。続縄文初頭興津式相当であろう。2は続縄文土器の底部。3は続縄文字津内Ⅱa式。4は無文の口縁部に楕円形の貼付をもつ。胴上部は膨らみ縄線文と変形工字文状の沈線文が施される。フシココタン下層式相当であろう。

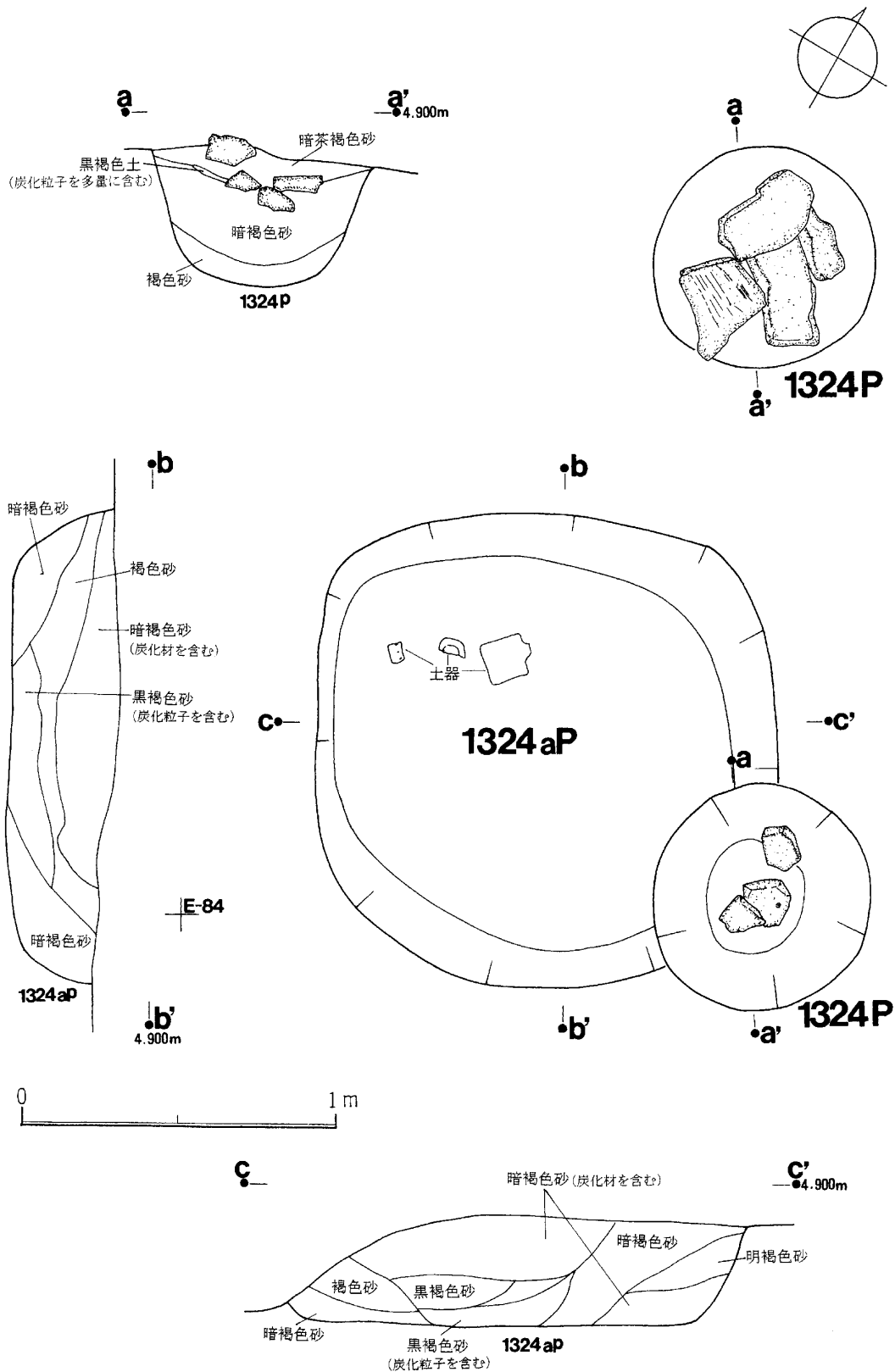
小括

床面から興津式相当の土器が出土しているが、時期的にみて字津内Ⅱa式が本ピットに伴い、興津式相当の土器は混入されたものと判断できる。 (武田 修)

ピット 1325

遺構 (第224図)

本ピットはE83・84グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.90m



第178図 ピット1324、1324a 平面図・遺物出土状況

常呂川河口遺跡

を測る。形態は東壁側が膨らむものの楕円形である。壁は床面から弧状に立ち上がり、高さは確認面から約27cmである。中央部に火熱を受けた径約20cmの角礫があり、埋土層にも焼土ブロックが混入している。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第179図-5・6, 第177図-22, 図版52-4)

第179図-5・6は埋土出土。2点とも統縄文字津内系であり、5は同Ⅱb式である。

石器は第177図-22が埋土出土。柄部と表裏面の縁辺部を加工したナイフ。黒曜石製である。

(武田 修)

ピット 1326

遺構 (第224図)

本ピットはD83グリッドに位置する。規模は長軸約0.50m、短軸約0.40mの小楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約18cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1327

遺構 (第224図)

本ピットはD82・83グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約11cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第177図-23, 図版52-5)

埋土から出土した削器。黒曜石製である。

(武田 修)

ピット 1328

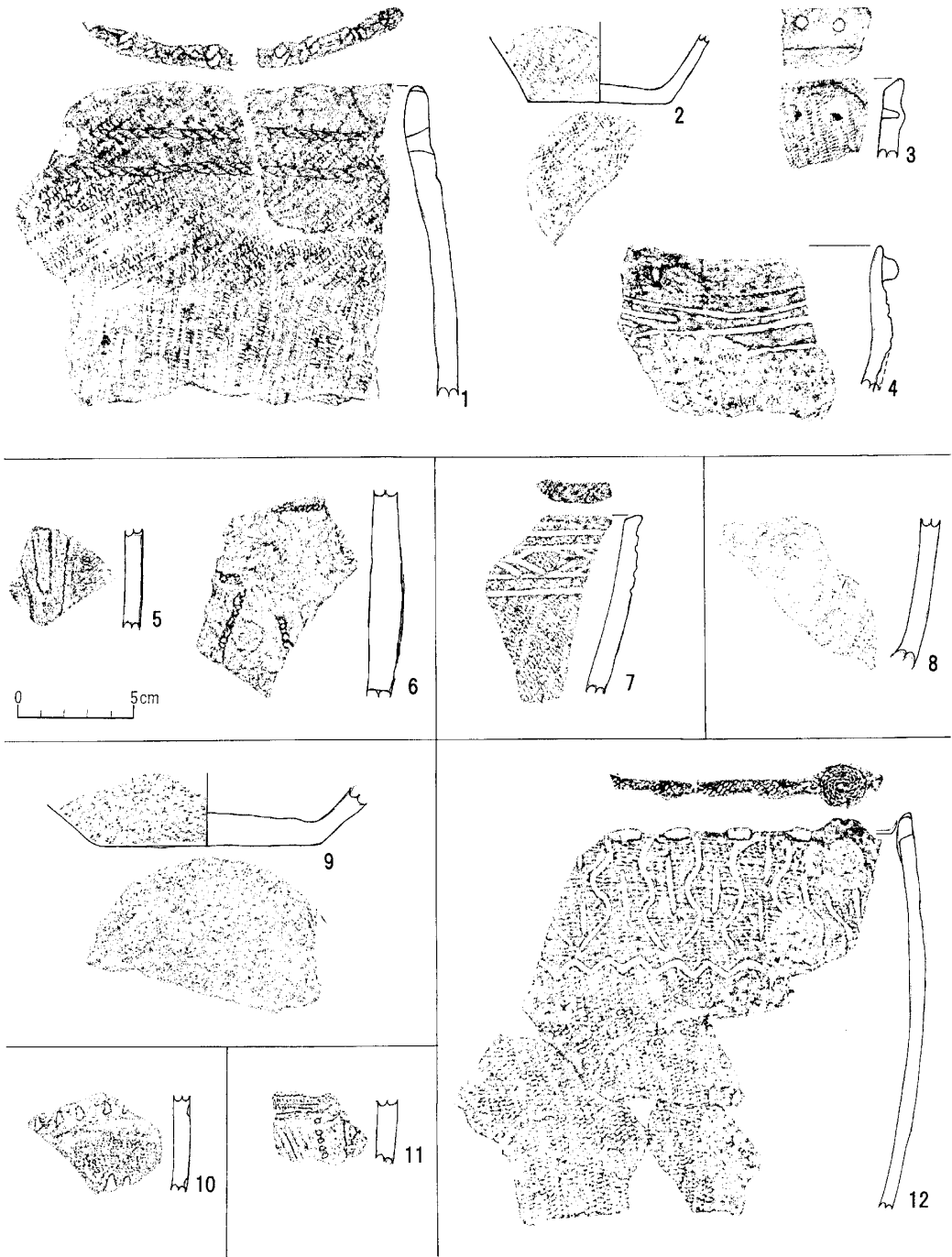
遺構 (第180図)

本ピットはB83, C83グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.04m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁は床面中央から浅く立ち上がり、高さは確認面から約18cmである。

長軸面の東壁端部と床面、北壁端部からカワシンジュ貝の貝皮が検出された。埋土は黒褐色砂の堆積が主体的であり、時期的には統縄文後北C₂・D式以降の可能性はある。

遺物 (第179図-7)

第179図-7は埋土出土である。2本単位の横位の沈線文間に矢羽根文を左右逆向きに施す。



第179図 ビット1324a 床面(1~4)、1325埋土(5・6)、1328埋土(7)、1331a 埋土(8)、1332埋土(9)、1334埋土(10)、1335埋土(11)、1336埋土(12)出土土器

続縄文初頭フシココタン下層式相当であろう。

(武田 修)

ピ ッ ト 1328a・1328b

遺 構 (第180図)

ピット1328aはB83グリッドに位置する。ピット1328に西壁側を切られるものの、規模は直径約0.50mの小円形を呈する。掘り込みは浅く、高さは確認面から約10cmである。

ピット1328bはピット1328に北壁側を切られる。直径約0.40mの小円形を呈する。

壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約16cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1328c・1328d

遺 構 (第180図)

ピット1328cはC83グリッドに位置する。ピット1328に東壁から中央部にかけて切られるため全体の規模は不明であるが、短軸は約0.30mであることからそれほど大きくないようである。残存部から判断して長軸は約0.50～0.60mの小楕円形を呈すると思われる。掘り込みは浅く、高さは確認面から約10cmである。

ピット1328dはピット1328、1328b、1328cに北壁側を切られる。短軸約0.90mを測り、長軸は残存部から判断して約1.20mの楕円形を呈すると思われる。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1329・1329a

遺 構 (第180図)

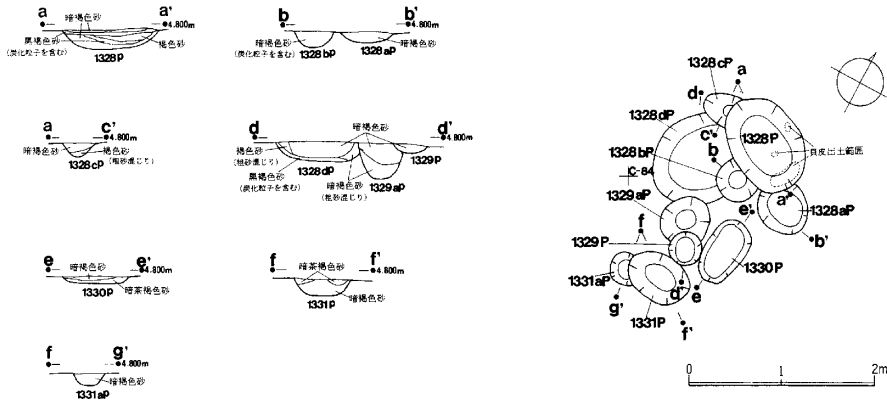
両ピットはB83グリッドに位置する。ピット1329の規模は直径約0.35mの小円形を呈する。掘り込みは浅く、高さは確認面から約7cmである。

ピット1329aはピット1329に東壁上部を切られる。直径約0.53mの円形を呈する。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約35cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第180図 ピット1328、1328a、1328b、1328c、1328d、1329、1329a、1330、1331、1331a 平面図

ピット 1330

遺構 (第180図)

本ピットはB83グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.40mの小楕円形を呈する。極めて浅い掘り込みで、高さは確認面から約5cmである。

床面上の暗茶褐色砂は粘性をもち遺存体と思われる。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1331・1331a

遺構 (第180図)

ピット1331はB83グリッドに位置する。規模は長軸0.70m、短軸0.49mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

ピット1331aはピット1331の西側にありピット1331に東壁の大半を切られる。直径約0.34mの小円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約12cmである。

両ピットの詳細な時期は不明である。

遺物 (第179図-8)

ピット1331aの埋土出土である。縄文土器の胴部片である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1332

遺 構 (第181図)

本ピットはD80グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの不整形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

最上部でベンガラ混入の茶褐色砂があり、径約10～20cmの角礫3点が配置されている。この面で柱穴痕と思われる9本の黒褐色もしくは暗褐色の輪郭を確認した。掘り下げる過程で黒曜石の剥片7点が北壁側の上部にあり、ほぼ同一レベルで土器の散布がみられたが、本ピットに伴うか明らかでない。埋土は褐色砂が大半を占め遺存体を覆っており、埋戻す段階でベンガラの散布が繰り返されていたことがセクション図から明らかである。

遺存体は粘性を有した暗赤褐色土であり、南北に向けられている。南壁際では頭部と思われる膨らみも確認することができた。ベンガラは遺存体を中心に濃淡はあるものの床面の全域にみられた。最も濃いベンガラは幅約15cm、厚さ約7cmで東壁側にある。

出土遺物は径約5cmの白色粘土1点と各種の石器群で構成されているが、大部分は北壁側から集中して出土するのに対し、石鏃は頭部に近い位置に散在していた。

確認面で検出していた柱穴は新たに1本追加され、10本におよぶ。柱穴は壁際を取り囲む様に15～20cmの間隔で配置されているが、頭部のある南壁側は約50cmと幅広い。埋土層の切り合いから判断すると遺体を安置し、完全に埋戻してから打ち込まれており、ほとんどが床面を貫通している。柱穴は直径約6～8cm、深さ約7～21cmである。

遺 物 (第179図-9, 第177図-24～39, 図版52-6～20)

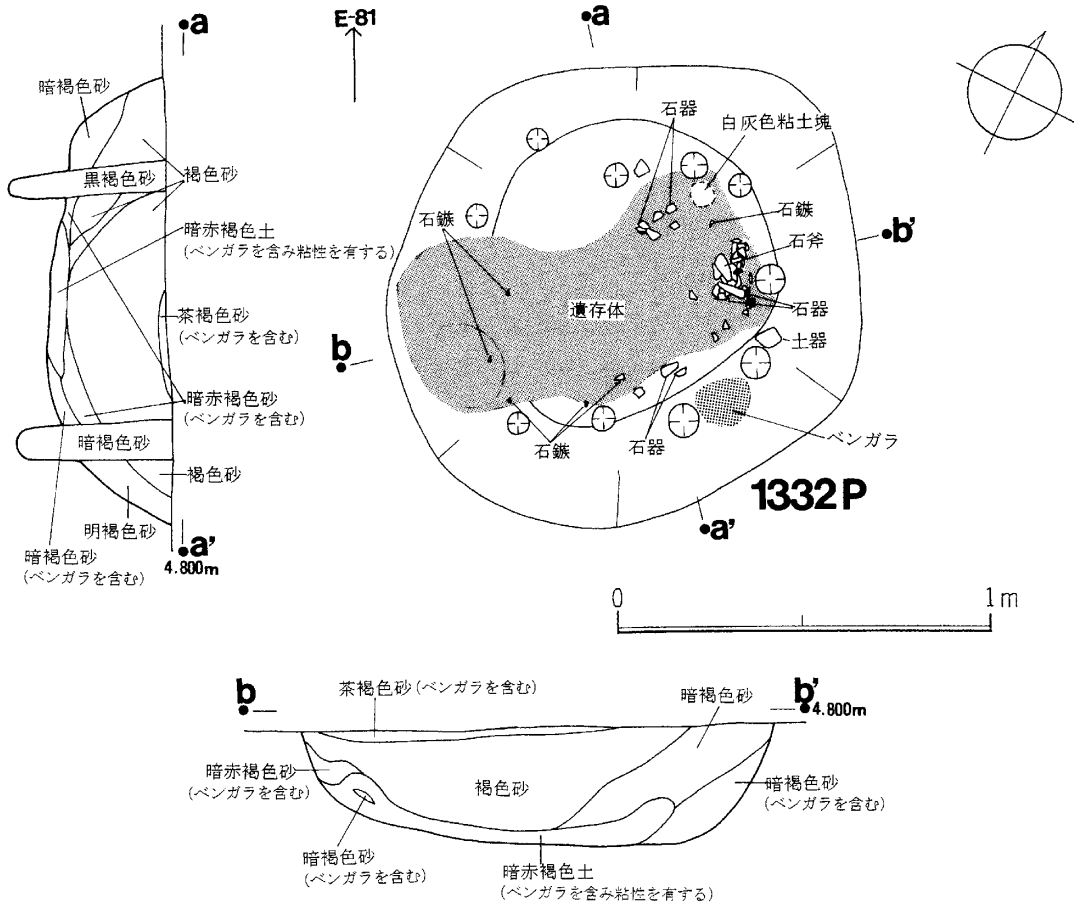
第179図-9は胎土に砂粒を多量に含む続縄文土器の底部。埋土出土。

石器は各種出土している。図示していないが最も多いのは黒曜石を主体とした剥片であり、総数88点出土している。

代表的な石器は第177図-24～35が床面、他は埋土出土である。24～28は無茎石鏃。29～35は削器等であるが、31は幅広い棒状原石を素材としている。右側縁部の表裏面に加工を施し、刃部を作出したものである。32・33は類似の形態をもち、先端を中心に刃部が設けられ、33はコンケーブしている。36は小型の棒状原石。37・38は原石面を大きく遺し、縁辺部に刃こぼれ状の使用痕があるユーステッドフレーク。39は両刃磨製石斧。29は頁岩製、39は緑色泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

本ピットから土器が出土していないため詳細な時期は不明であるが、柱穴の存在と南頭位のあり方から続縄文初頭、中でも宇津内Ⅱa式の可能性が高いと思われる。(武田 修)



第181図 ピット1332平面図

ピット 1333

遺 構 (第224図)

本ピットはF82, G82グリッドに位置する。この付近も増水による消平があり、おそらく上層には住居が存在した可能性が強く、断面図の第1層はその埋土と考えている。ピットは第1層を除去したレベルで平面形を確認した。この面ではすでに142号堅穴の平面形は確認している。平面形は隅丸三角形という奇妙な形であるため、二つのピットが切りあっている可能性も考えたが、平面、断面ともに確認することができなかった。検出面では30cm前後の角礫がままとまって検出した。このなかには被熱しているものもあるが、ピットに伴うものか142号堅穴に伴うかは不明である。

規模は長辺約1.90m, 短辺約1.70mを測る。壁高は確認面から30cmである。二等辺三角形の頂点部分には土器片がまとまって検出された。底部が2個体分ある。その他に続縄文初頭と思われる胴部片がある。また西隅からは石斧1点が遺体上から出土している。土器の出土レベルはほとんどが遺体上層のⅢ層上面からの出土である。

遺物 (第182図, 第183図-1~4, 図版52-21~24)

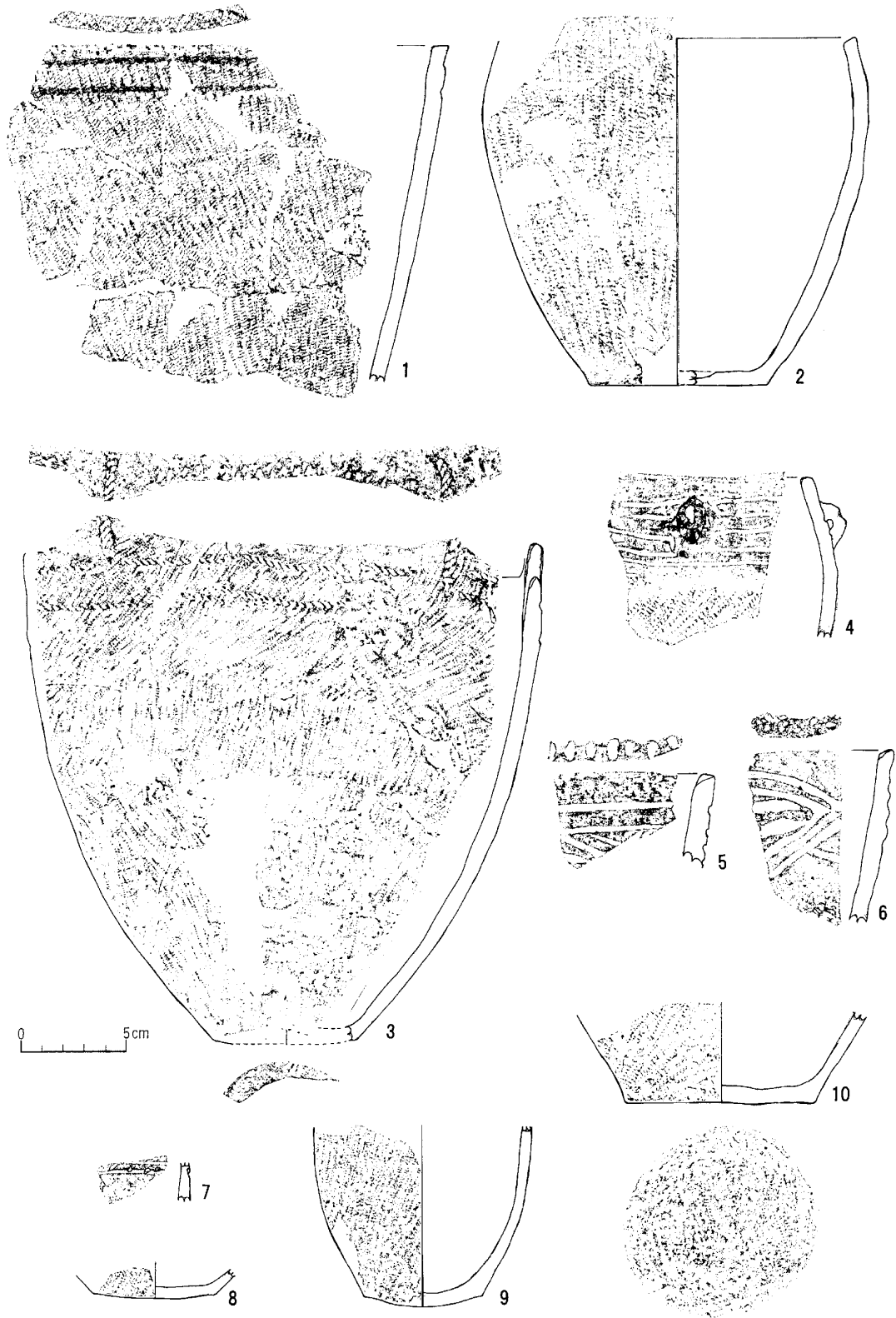
第182図-1は床面出土、他は埋土出土である。埋土の4・10を除き縦走縄文を地文としている。1・3は口縁直下に2条の縄線文が施され、3では山形突起の表裏面に短縄文がみられる。2は3分の1程度が復元できたもので、口縁部がやや内湾した深鉢形土器。1~3は続縄文初頭興津式相当と思われる。4は口縁部に吊り耳と変形工字文状の沈線文が施される。5~7も沈線文がみられる。5は矢羽根状、6は菱形状の沈線文になると思われる。4~7は続縄文初頭フシココタン下層式相当であろう。8~10はこれらの時期の底部であろう。

石器は第183図-1~4は埋土出土である。1は無茎石鏃。2は柄部が作出された両面加工ナイフ。3は削器。4は撥形を呈した片刃磨製石斧。1~3は黒曜石製、4は緑色片岩製である。

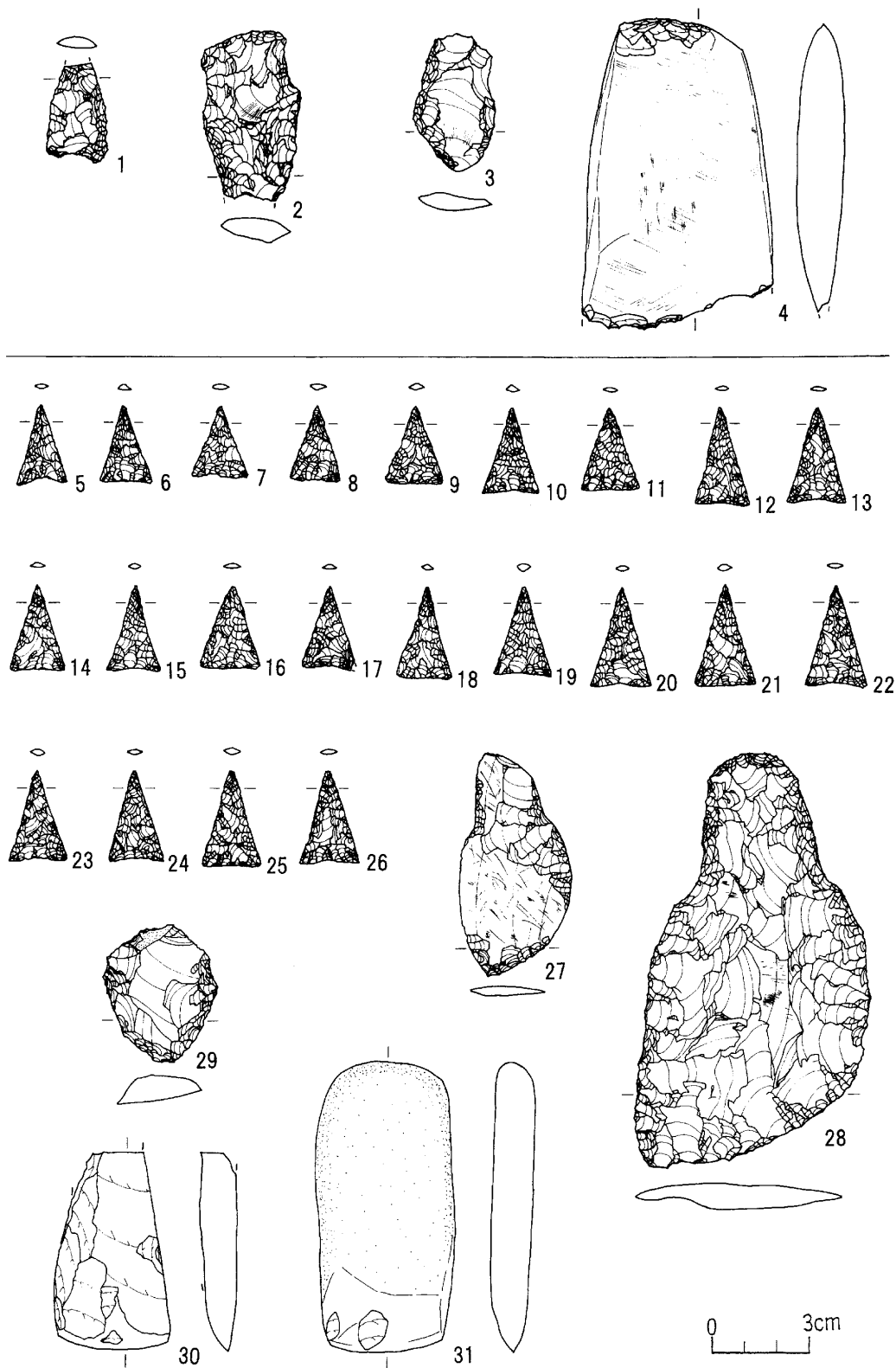
小括

本ピットは床面出土土器から続縄文初頭の興津式に相当すると考えられる土壌墓である。

(熊木美野里)



第182図 ピット1333床面(1)・埋土(2~10)出土土器



第183図 ピット1333埋土(1~4)、1350埋土(5~31)出土石器

ピット 1334

遺構 (第184図)

本ピットは第2図に示す第三次形成地にあたる R79グリッドに位置する。この区域の層序は表土下に灰褐色砂層（層厚約7cm）、黒褐色砂（層厚約5cm）が堆積しており、本ピットは黒褐色砂を剥土した灰褐色砂層（層厚約8cm）の上面で検出した。

中央部から東壁にかけてみられる攪乱は床面近くまで達するもののほぼ全体を確認することができた。規模は直径約1.60mの円形を呈する。壁は中ほどから上部に向かって開き気味に立ち上がる。高さは確認面から約70cmである。

埋土上部には灰褐色砂に挟まれた炭化物を含む2枚の黒褐色砂が堆積しており、これを取り除くと一部で焼土がみられ、赤化した径約15～25cmの角礫がほぼ全面を覆っていた。さらにこの下部には層厚約15～20cmにわたる炭化土があり、床面には平面図に示すとおり南北方向に向いた幅約5～10cmの炭化材が並べられている。

遺物 (第179図-10)

埋土出土である。続縄文後北 C₂・D 式。

小括

第三次形成地は続縄文後北 C₂・D 式、オホーツク文化、擦文文化の包含層が認められており、この区域では特に2枚の続縄文後北 C₂・D 式の包含層を確認している。掘り込みは擦文期の堅穴がみられる茶褐色砂より下層にあたることから、本遺構は続縄文後北 C₂・D 式と判断できる。炭化材はピット上部を覆う蓋と礫はそれを固定するためと考えられるが、用途・機能は不明である。

(武田 修)

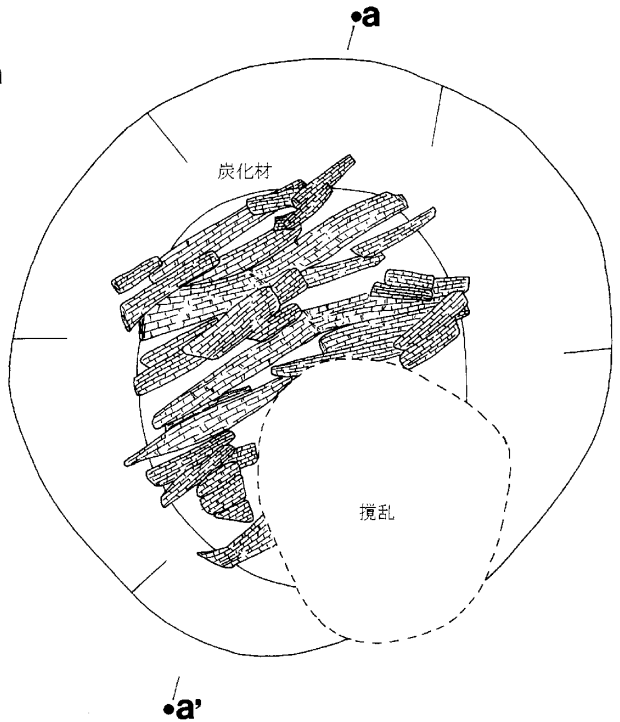
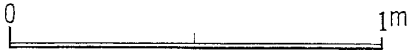
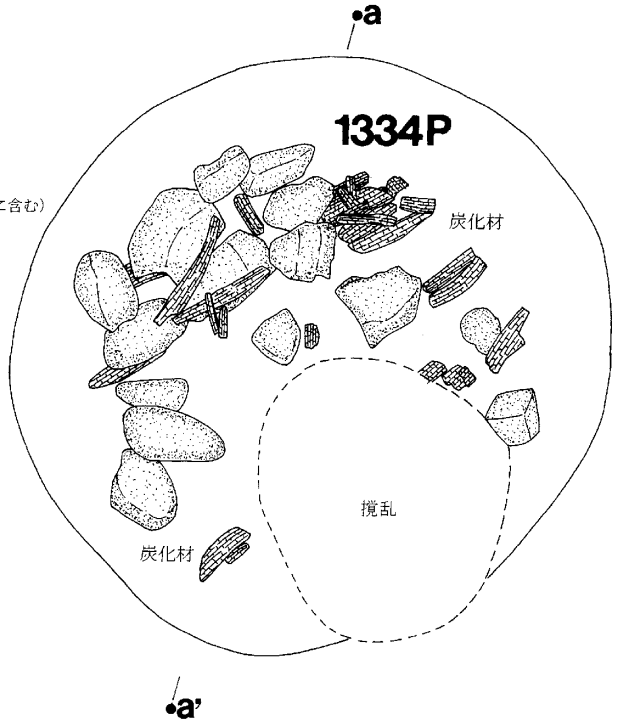
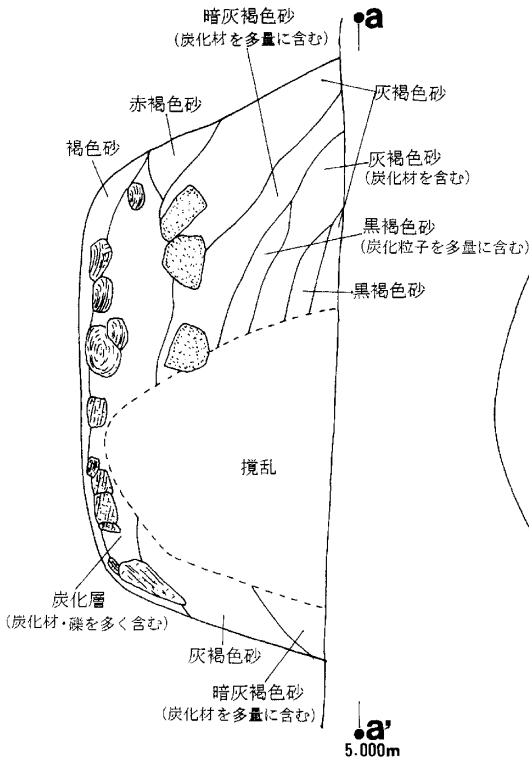
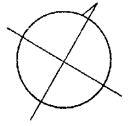
ピット 1335

遺構 (第185図)

本ピットは R79グリッドに位置する。ピット1334に近接しており、埋土の堆積や内部の状況が極めて類似している。規模は直径約1.20mの円形を呈し、壁は床面から開き気味に立ち上がる。高さは確認面から約35～45cmである。

セクション図に示すとおり最上部に黒褐色砂が堆積しており、次の暗灰色砂の下面には径約10～20cm前後の角礫が壙上部から流れ込む状態で検出された。礫の下には炭化材を多量に含む黒色土が広範囲に広がっている。礫や黒色土を取り上げると幅約5cm前後の炭化材がみられた。炭化材の検出状況から判断するとピット1334とは異なる方形の枠を作り、その上に材木を並べている様に見受けられる。また、床面を覆う暗褐色砂にも炭化物が含まれ、床は部分的に赤化している。

S-80



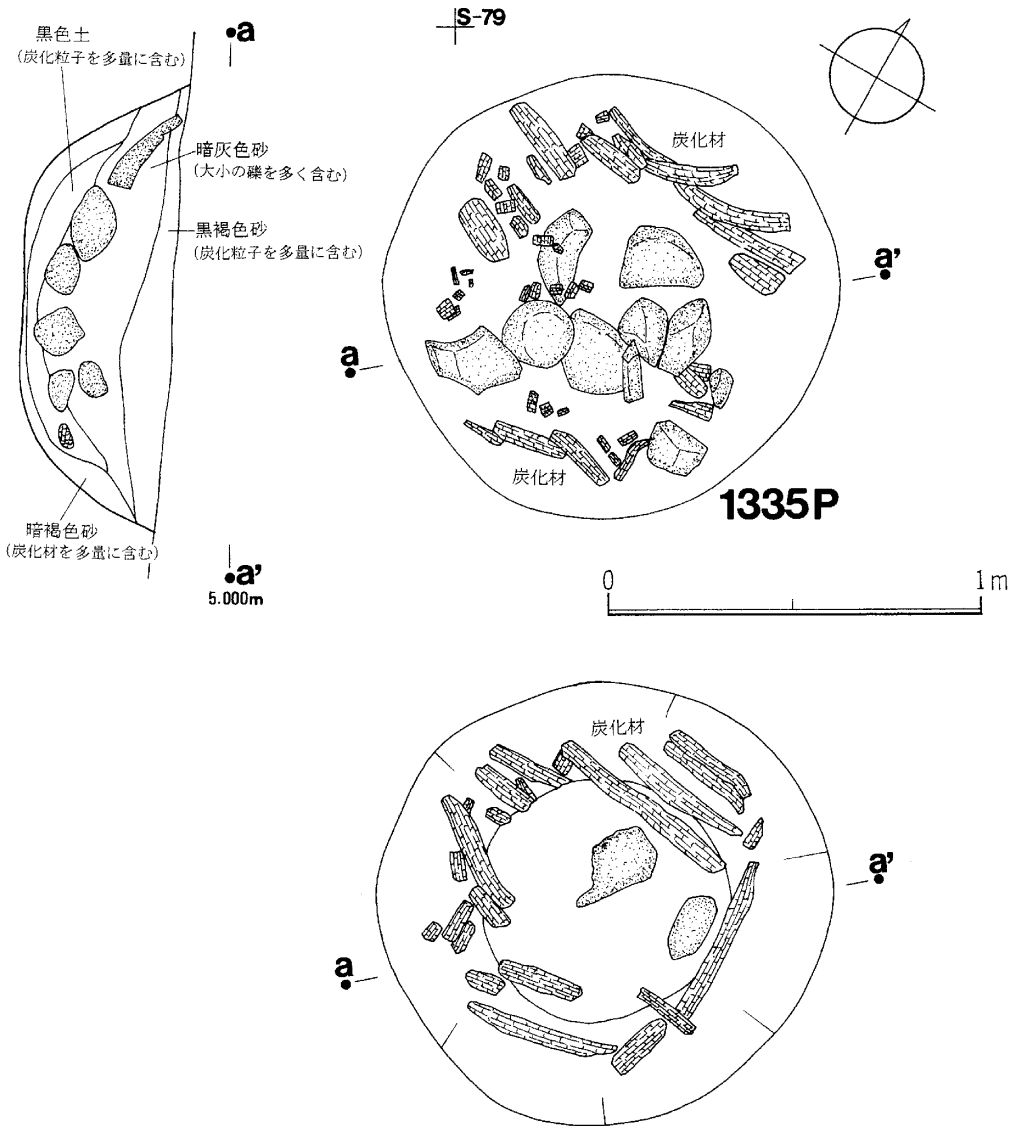
第184図 ピット1334平面図・遺物出土状況

遺物 (第179図-11)

埋土出土である。統縄文後北 C₂・D 式。

小括

本ピットの機能・用途は不明であるが、上部に配置された木柵状の蓋と礫が一気に埋没したことを土層セクション図は現している。時期はピット1334同様の統縄文後北 C₂・D 式と判断できる。
(武田 修)



第185図 ピット1335平面図・遺物出土状況

ピット 1336

遺構 (第68図)

G80グリッドに位置する。167e号堅穴の床面から検出した。規模は長軸約1.20m、短軸約0.95mで楕円形を呈する。北端を攪乱によって消平されている。壁高は167e号堅穴の床面から30cmを測る。検出面には167e号堅穴の柱穴が2箇所掘り込まれている。南壁の立ち上がりに沿って土器片が集中して出土しているが床面からの土器の出土はない。

遺物 (第179図-12)

埋土出土である。縄文晩期後葉の幣舞式。

(武田 修)

ピット 1337

遺構 (第91図)

本ピットはH85グリッドに位置する。西壁端部を続縄文字津内Ⅱb式の172a号堅穴に切られ、東壁側では同じく津内Ⅱb式の166a号堅穴南壁を切っている。規模は長軸約2.00m、短軸約1.40mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。床面に径約8cm、深さ約6cmの小柱穴がある。

埋土からは珪岩製の礫が小さく割れた状態で出土している。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1338

遺構 (第99図)

本ピットは続縄文初頭の172f号堅穴の南壁を切り込んで構築されている。長軸面の南側が幅広く、北側がすぼまる形態をもち規模は長軸1.94m、短軸約1.50mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約60cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1350

遺 構 (第187図, 図版53-1)

本ピットはH87グリッドに位置する。155c号堅穴の埋土中に構築されているもので、セクション図作成の段階で落ち込みを確認した。堅穴埋土上層から掘り込まれており、規模は直径約1.15mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約60cmである。

床面は南壁側にかけて若干であるが傾斜しており、ほぼ全面に遺存体である粘性を有した暗赤褐色土がみられる。丸い輪郭をもった頭部は東南壁に接しており、歯骨も検出できた。中央部から北壁にかけて脚部と思われるやや硬質化した箇所が二列認められた。ベンガラは西壁側で長さ約40cm、幅約10cm、東壁側では幅約7cmにわたって散布されていた。層厚はいずれも2cmほどである。副葬品は比較的豊富で各種の石器群は西壁側の遺体上にある。石鏃の先端は北側に向けられ、白色粘土は床面から出土している。土器は頭部に近接して正立の状態が副葬されており、土器の下に石斧がみられた。

東壁際に径約4~6cm、深さ約5~8cmの柱穴が3本配置されている。セクションa-a'ラインに示すとおり、柱穴に向かって幅約7cmの黒色土が垂直に立ち上がっているが、これは柱材の痕跡と思われる。

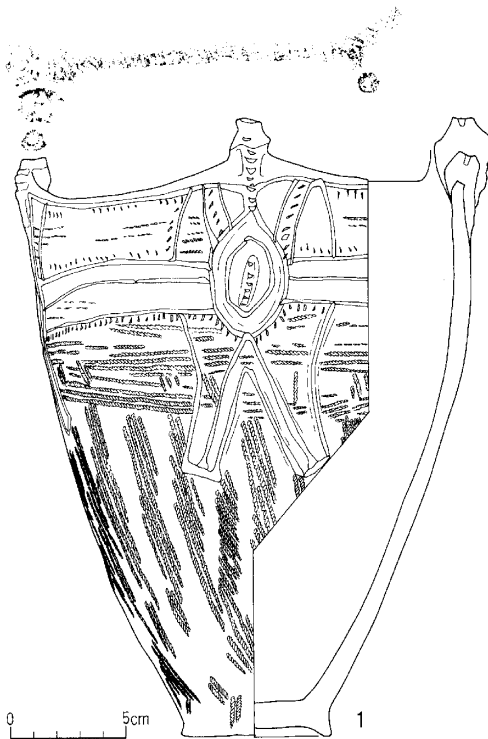
遺 物 (第186図, 第183図-5~31, 図版53-2~29)

第186図-1は床面出土である。口径約20cm、器高約26.5cmの中型鉢形土器である。4個の突起下部に同心円文を施した続縄文後北C₁式。

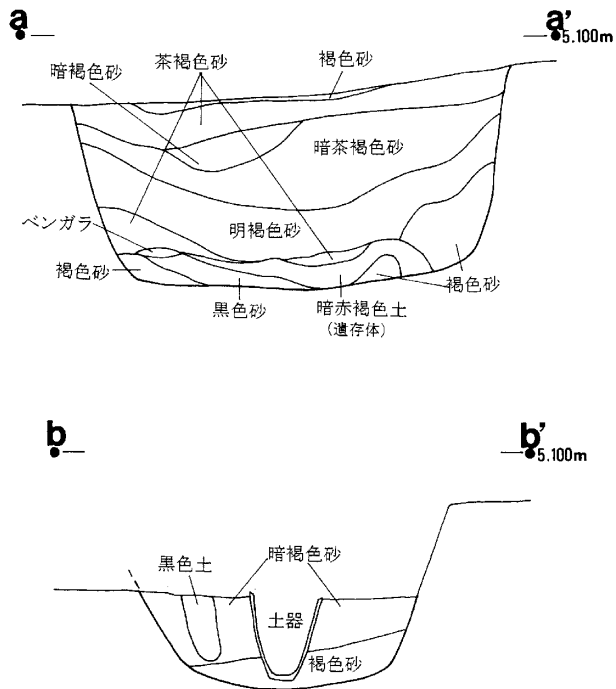
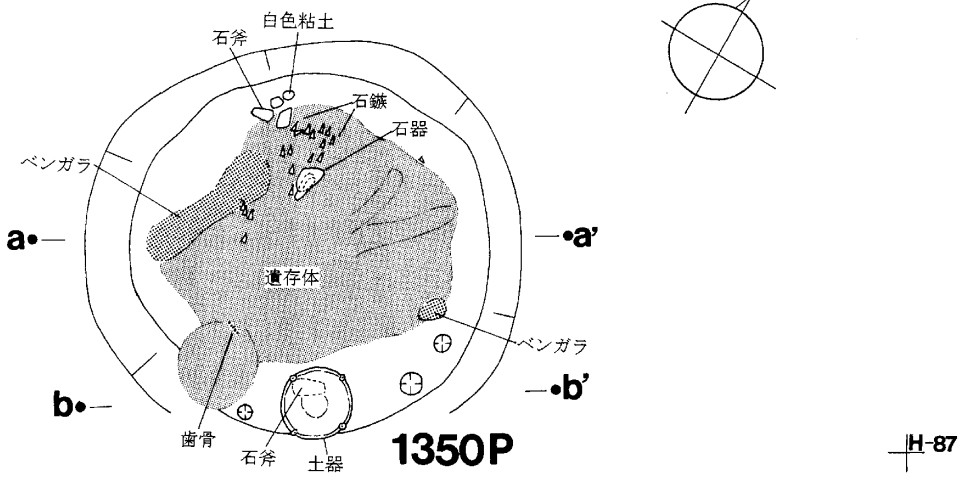
石器は全て埋土出土であるが出土状況から本ピットに伴うと思われる。第183図-5~26は基部が三角形か緩い弧状を呈した同一形態、サイズの無茎石鏃。27・28は柄部が作出されたナイフで、27は片面、28は両面加工である。29は削器。30・31は片刃磨製石斧。30は撥形を呈する。31は刃部と右側縁部のみ研磨されている。30は緑色片岩製、31は扁平な泥岩を素材としたもので、他は黒曜石製である。

小 括

本ピットは東南頭位の続縄文後北C₁式の土壙墓である。 (武田 修)



第186図 ピット1350床面(1)出土土器



第187図 ピット1350平面図

ピット 1351

遺構 (第188図, 図版54-1)

本ピットは G86 グリッドに位置する。埋土を約10cm掘り下げた段階で北壁側に径約20cm、中央部に径約15cmの円礫が出土している。床面のほぼ全面には粘性を有した暗赤褐色土が広がっている。遺存体であり、南壁に接して丸みをもった2個の頭部があり、歯骨も検出した。

規模は長軸約1.65m、短軸約1.30mの大きな楕円形であり、二体は短軸面を利用して安置されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約60cmを測る。東側の遺存体には長さ約20~25cm、幅約1~2cmの細い硬質化した箇所が二列みられたが、これは上腕骨か大腿骨であろう。

副葬品は二体の頭部の中間に一個体ある。本来は正立の状態で置かれていたと推測できるが、土砂の重圧によるためか口縁部から胴部は西壁にある頭部に向かって開いた状態で出土した。径4cmほどのベンガラは土器底部に接している。石器は東壁の遺存体が壁に沿って各種のものを有するに対し、西壁の遺存体は石鏃4本にとどまっている。

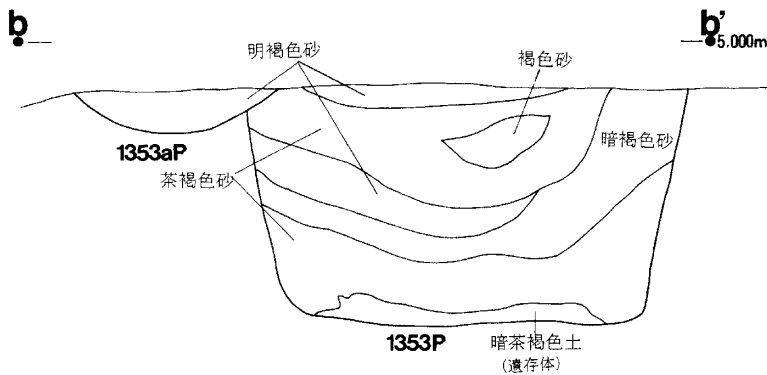
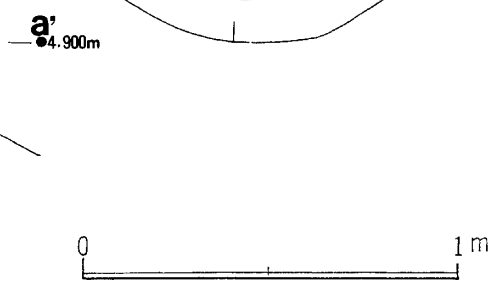
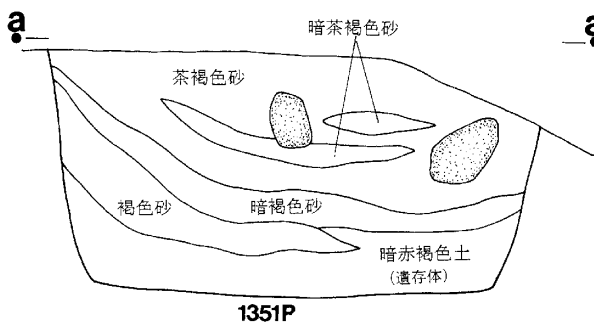
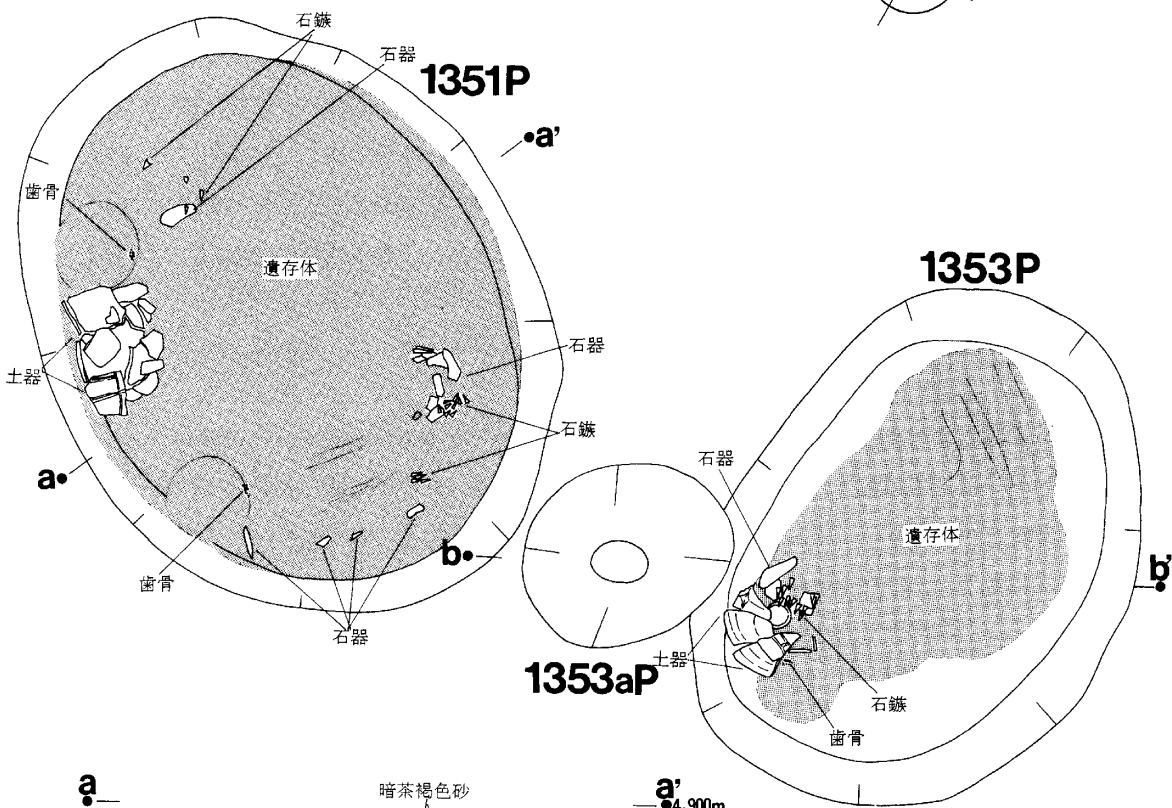
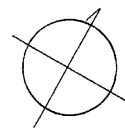
遺物 (第189図-1, 第190図, 図版54-2~37, 図版55-1~5)

第189図-1は遺存体上部から出土した。口径約23cm、器高約24cmの中型鉢形土器。帯縄文を地文として、口縁部の4個の小突起を基準に縦方向に帯縄文をほぼ等間隔に施し、胴下部では斜方向に転換させている。続縄文後北C₁式である。

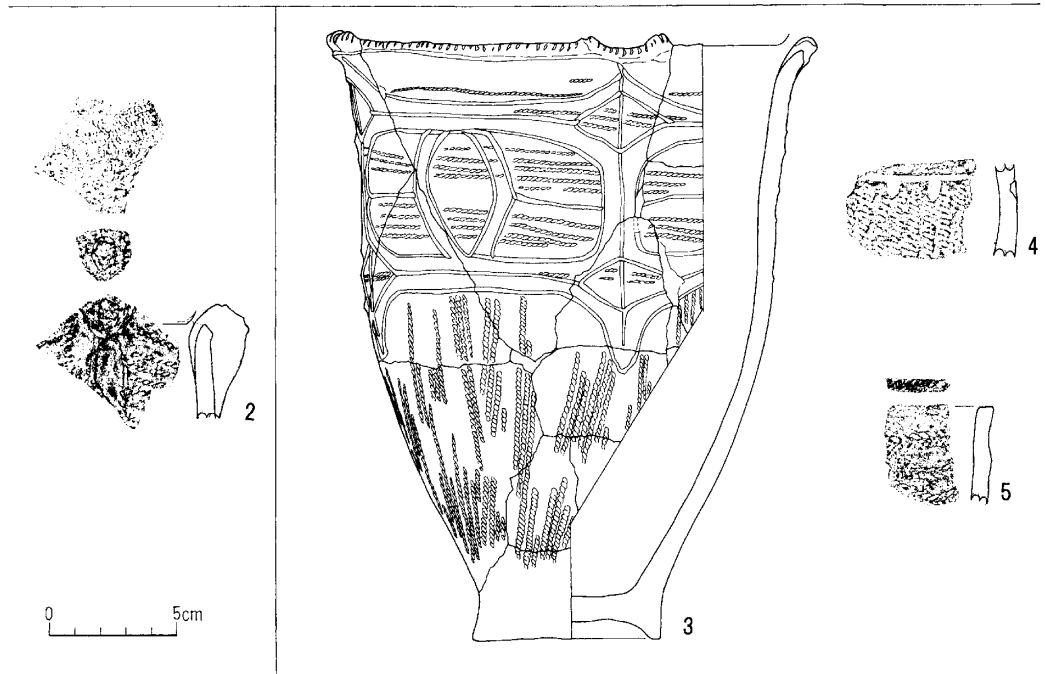
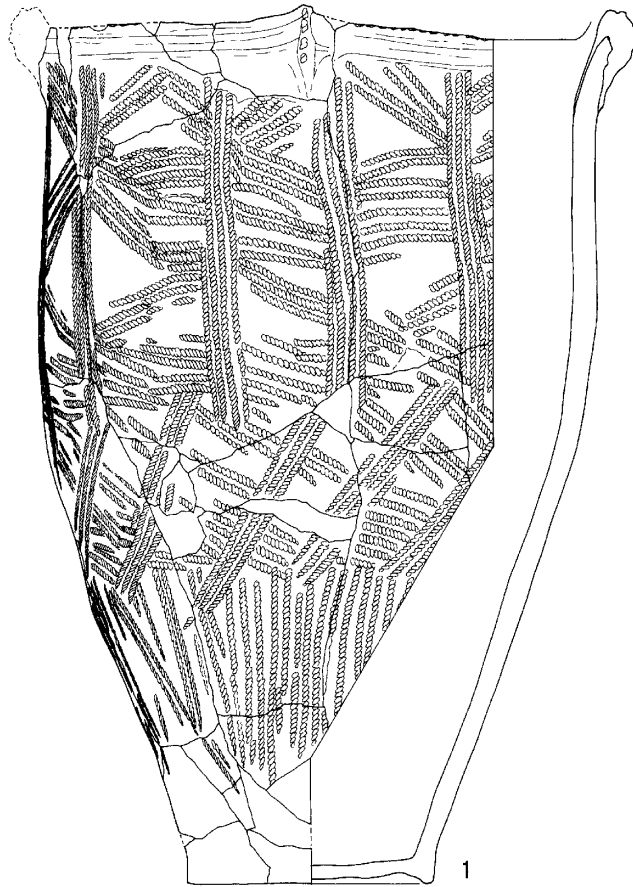
石器の大部分は遺存体上からの出土である。第190図-1~30はピット1350にもみられた形態・サイズがほぼ同一の無茎石鏃。31は両面加工ナイフ。32~37は削器。32は主要剥離面の左側縁部にも刃部が作出されている。38は片刃磨製石斧。39・40は埋土出土であるが、39の石鏃は上記の石鏃と同一形態であり、40の磨製石斧の刃部は凸状であるが、ピット1350にもみられた扁平な円礫の端部にのみ刃部を作出したものである。この2点は本ピットに伴うと判断される。38は青色泥岩製、40は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小括

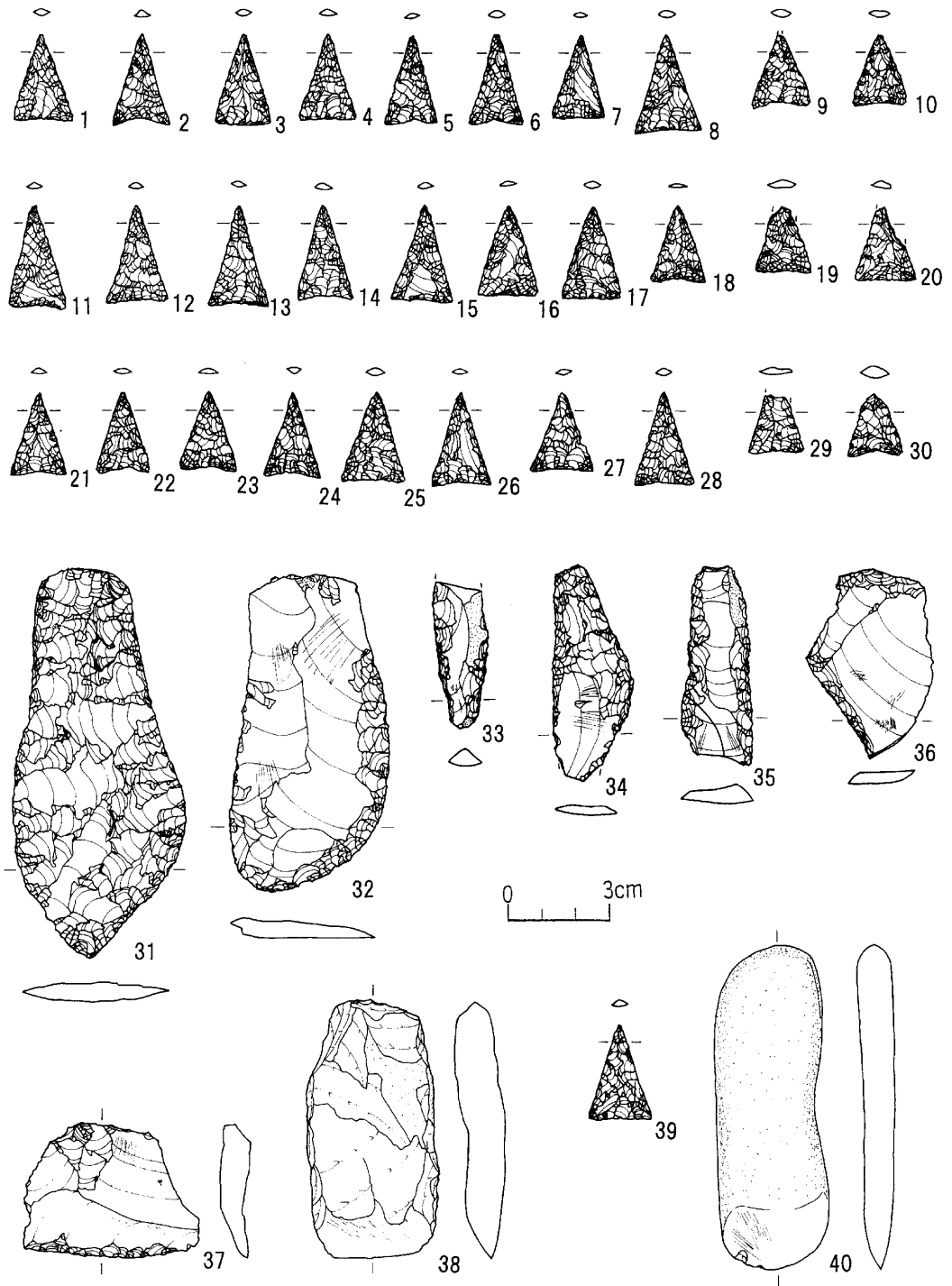
本ピットはピット1350とは約5.00mしか離れておらず、頭位方向と石器組成も共通点がある。時期は続縄文後北C₁式の土壌墓である。 (武田 修)



第188図 ピット1351、1353、1353a 平面図



第189図 ビット1351遺体上(1)、1352埋土(2)、1353床面(3)・埋土(4・5)出土土器



第190図 ピット1351遺体上(1~39)・埋土(40)出土石器

ピット 1352・1352a

遺構 (第83図)

ピット1352はG86・87グリッドにまたがって位置する。確認面精査の段階で南側に連なる他の落ち込みを確認したため中央を分断するようにセクションラインを設定した。ピット1352は南壁上端部をピット1352aに僅かに切られる。規模は長軸約1.20m、短軸約1.00mの楕円形である。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約50cmである。

暗赤褐色土を呈した遺存体は床面に堆積する褐色砂の上にあり、頭部と思われる膨らみは南壁際に認められた。頭部に接して黒曜石のフレーク5点と径約7～8cmの白色粘土・暗灰褐色粘土塊が出土している。

ピット1352aは直径約0.90mの不整円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは南壁で約10cm、他の壁は20cm前後である。

遺物 (第189図-2, 第191図-1～3, 図版55-6～8)

第189図-2はピット1352の埋土から出土した続縄文字津内Ⅱb式。

石器は第191図-1～3もピット1352の埋土出土である。1・2は削器。1の打瘤部は調整されている。3は意図的に破壊したのであろう、頭部付近から出土したフレークが接合したものである。大きな剥離面を遺す大型の剥片であり、打瘤部は調整されている。

小括

両ピットとも詳細な時期は不明であるが、ピット1352は土壙墓である。(武田 修)

ピット 1352b・1352c

遺構 (第83図)

2基のピットはG87グリッドに位置する。ピット1352bはピット1352aに北壁側を切られているものの、規模は長軸約0.86m、短軸約0.80mの不整楕円形を呈する。

壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約12cmである。

ピット1352cはピット1352bに北壁側を切られる。規模は長軸約0.75m、短軸約0.70mの不整楕円形である。皿状の浅いピットであり、高さは確認面から約8cmである。(武田 修)

ピ ッ ト 1353・1353a

遺 構 (第188図, 図版56-1)

両ピットはG86グリッドに位置する。ピット1353の規模は長軸約1.45m、短軸は東壁が弧状を呈しており約1.05mである。壁高は確認面から約65cmである。

起伏がある床面には粘性をもつ暗茶褐色土の遺存体が全域に広がる。南壁際で頭部と歯骨を検出し、北壁側では長さ約60cm、幅約6～8cmの硬質化した黄褐色土が並列してみられた。位置的にみて二体合葬と思われる。

副葬品の土器は頭部に接して出土したが、底部は床に密着するものの口縁部や胴部は南壁側に倒れる様な状態である。先端部を南側に向けて並べられた石鏃の一部は土器の破片や底部に重なっているため、この土器は正立の状態で置かれた後に破壊された可能性が考えられる。

ピット1353aはピット1353の南壁上部を切って構築されている。規模は径約0.55mを測る小さいものであるが、床面から丸みをもった壁は12cmと浅い。

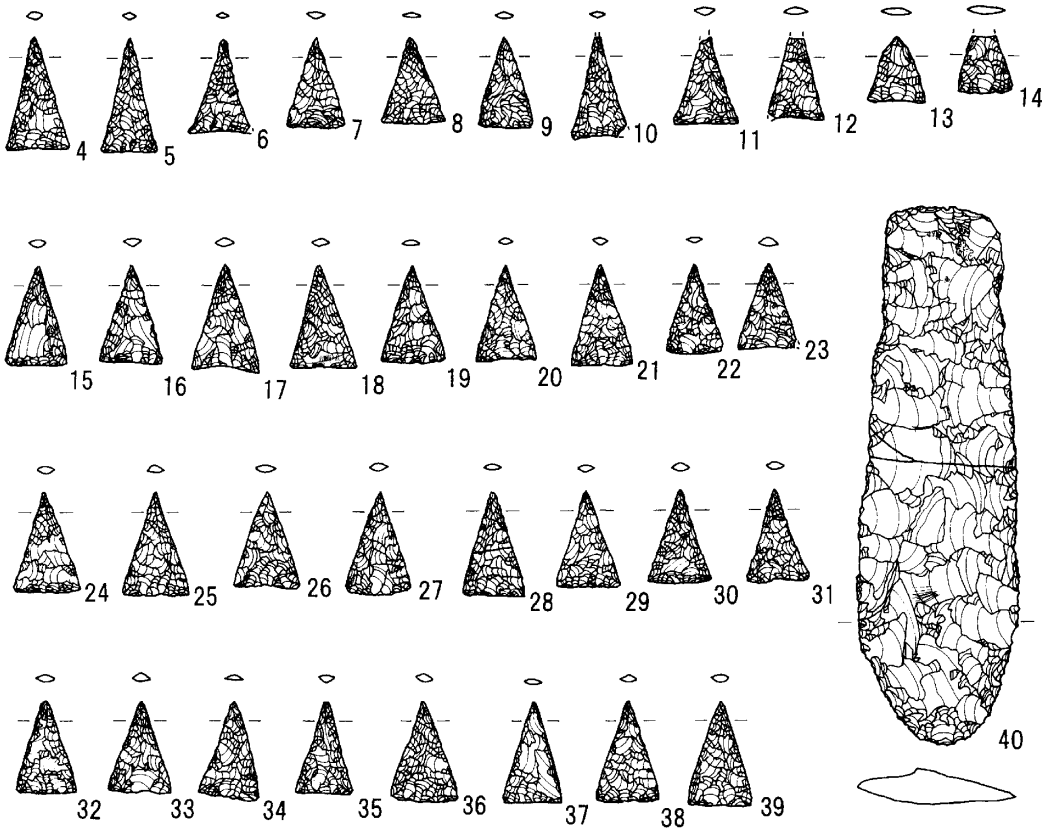
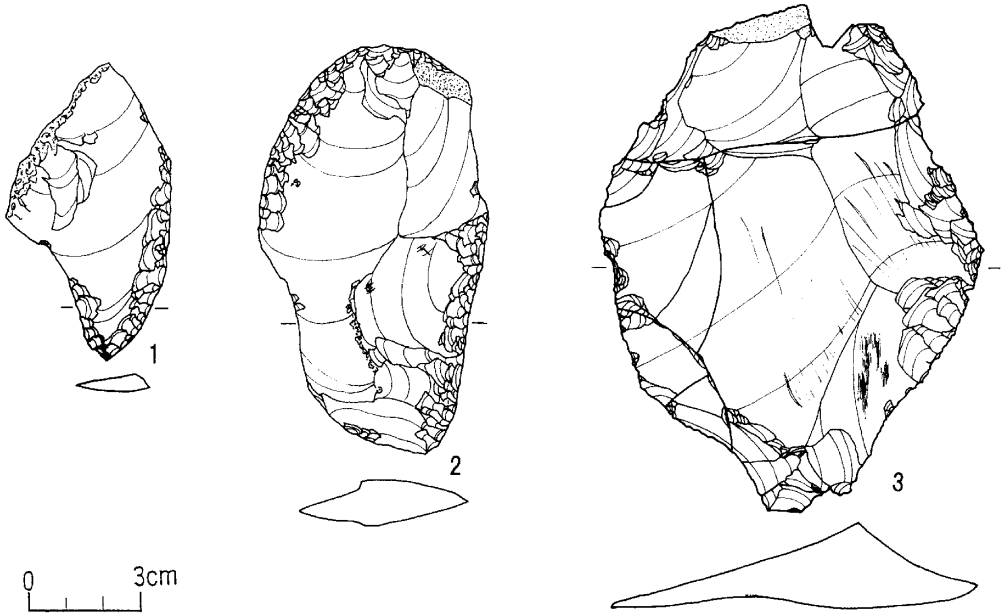
遺 物 (第189図-3～5, 第191図-4～40, 図版56-2～39)

第189図-3はピット1353の床面出土である。口径約19cm、器高約23cmの中型土器。2個1対の小突起4個から微隆起線を菱形状に施した続縄文後北C₁式。4は横走沈線文の下部に刺突文が下方から施される。続縄文初頭であろう。5は2本単位の縄線文が直線、弧状に施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は全てピット1353の床面出土である。第191図-4～39はピット1350、1351にもみられた無茎石鏃。40は折れて出土した大小3点が接合した両面加工ナイフ。全て黒曜石製である。

小 括

ピット1353は東南頭位の続縄文後北C₁式の土壙墓である。 (武田 修)



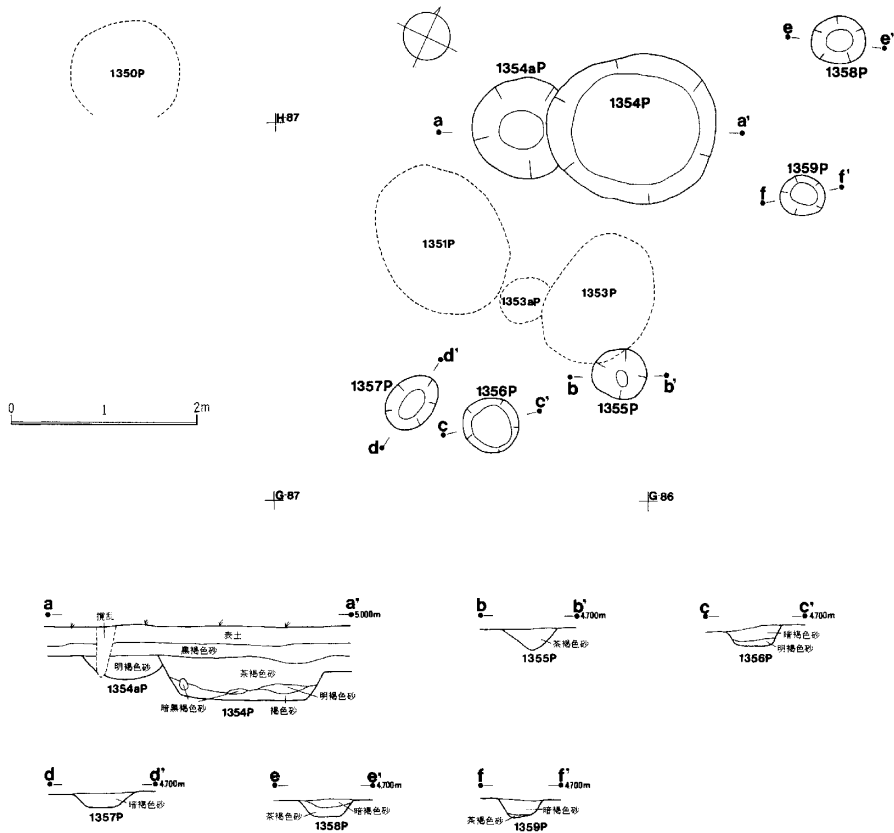
第191図 ピット1352埋土(1~3)、1353床面(4~40)出土石器

ピット 1354・1354a

遺構 (第192図)

ピット1354はH86グリッド杭下部に位置する。表土下の黒褐色砂を剥土した段階で確認した。規模は直径約1.70mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。埋土の堆積は炭化粒混じりの茶褐色砂が大半を占め、部分的に暗黒褐色砂が見られる。

ピット1354aはピット1354に北壁上部を削られている。規模は直径約0.85mの円形を呈し、壁は床面から丸みをもって立ち上がる。高さは確認面から約24cmである。 (武田 修)



第192図 ピット1354、1354a、1355、1356、1357、1358、1359平面図

ピット 1355

遺構 (第192図)

本ピットは G86グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁は「V」字状に立ち上がり、高さは確認面から約22cmを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1356

遺構 (第192図)

本ピットは G86グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1357

遺構 (第192図)

本ピットは G86グリッドに位置する。規模は長軸約0.62m、短軸約0.46mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約13cmを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1358

遺構 (第192図)

本ピットは H85グリッドに位置する。規模は直径約0.55mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約16cmを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 1359

遺構 (第192図)

本ピットは G85グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約17cmを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

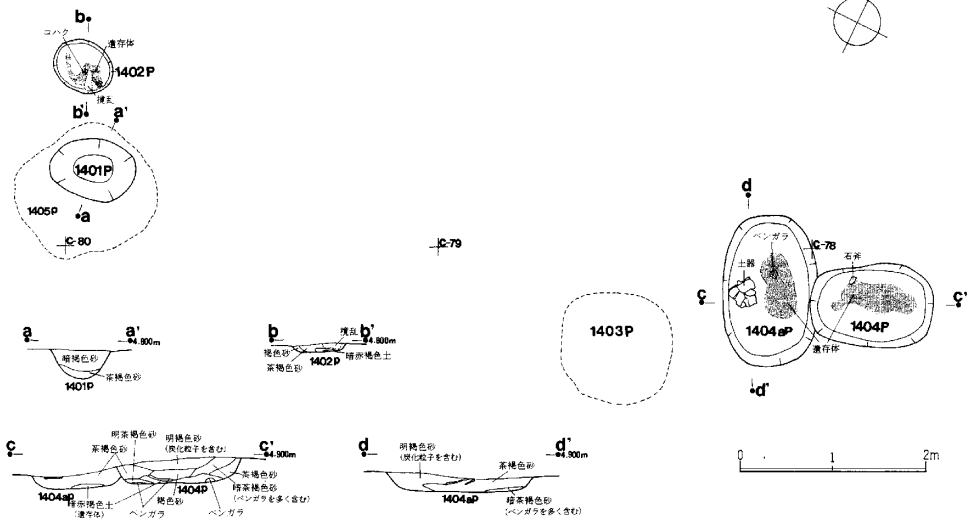
ピット 1401

遺構 (第193図)

本ピットは C79 グリッドに位置する。規模は長軸約 0.90m、短軸約 0.66m の楕円形を呈する。壁高は確認面から約 30cm を測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第193図 ピット1401、1402、1404、1404a 平面図

ピット 1402

遺構 (第193図)

本ピットは C79グリッドに位置する。規模は長軸約0.64m、短軸約0.54mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約8cmである。東壁側寄りにベンガラが散布され赤化した遺存体がある。遺存体は粘性をもち、第196図に示す琥珀玉が連なった状態で出土している。石器は黒曜石の剥片4点、白色粘土1点が東壁際からまとまって出土している。

遺物 (第196図-1~4, 図版57-1~11)

遺存体の上部からは平玉3点、漏斗状8点の琥珀玉が出土しており、代表的なものを図示した。第196図-1・2は平玉、3・4が漏斗状である。いずれも玉は小型の丸い原石を素材としており、穿孔部を両側とも研磨して薄く仕上げている。

小括

本ピットの詳細な時期は不明であるが、副葬品に琥珀玉をもつ点から統縄文初頭の宇津内Ⅱa式、もしくは平玉以外の漏斗状の玉をもつことから興津式など古手の土壙墓の可能性がある。

(武田 修)

ピット 1403

遺構 (第194図, 図版57-12)

B79グリッドに位置する。直径1.20mで、ほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は確認面から35cmを測る。

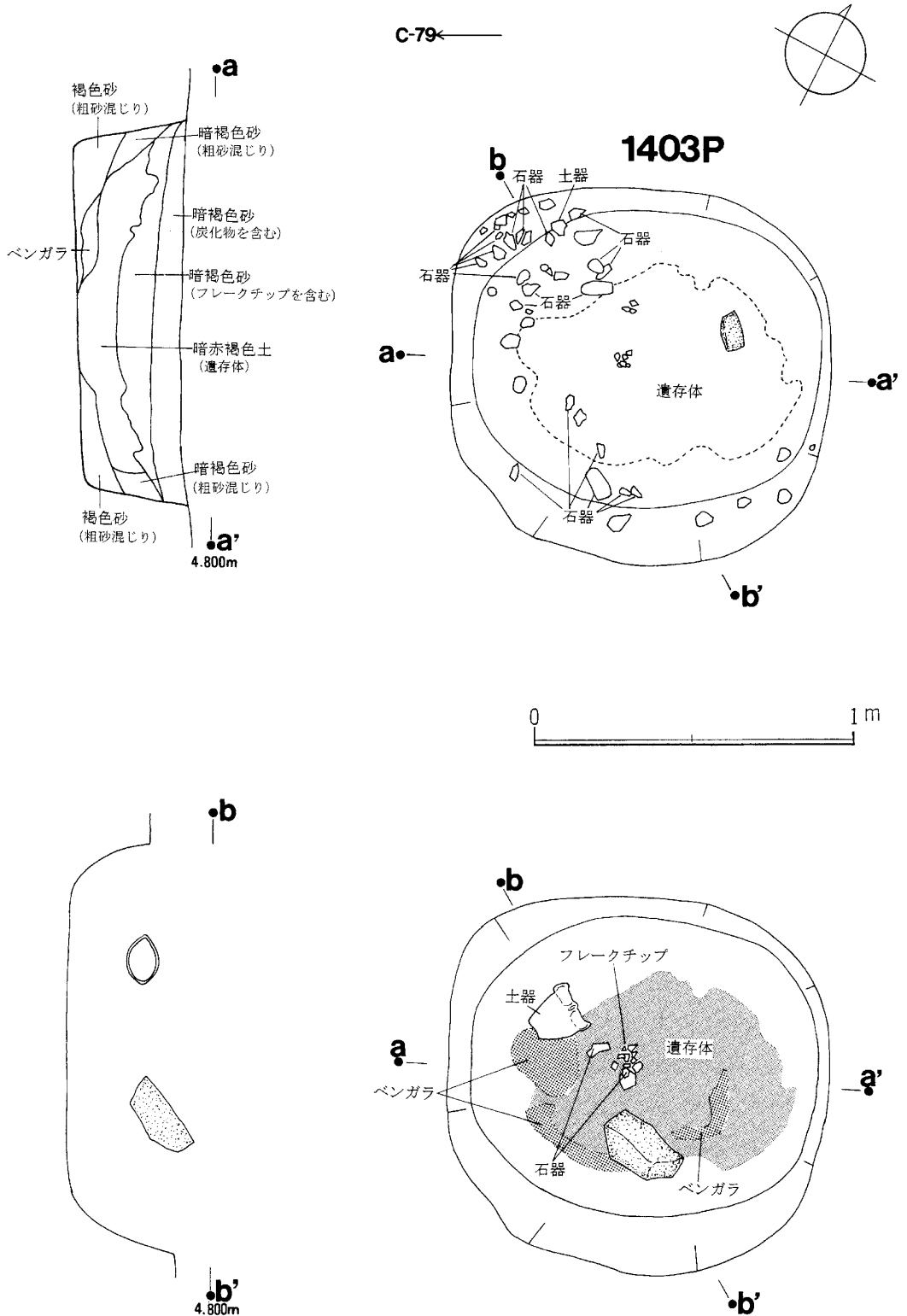
北東部分に2個の砂岩角礫があり、中央寄りのものは石皿で、墓壇内に落ち込んでいる。落ち込んだ部分にはベンガラが付着しており、ピット1403に伴う遺物と考えられる。埋土上層は暗褐色砂であり、炭化物、黒曜石のフレークチップが少量混在する。その下層に糊化した遺存体があり、石皿はこの層まで落ち込んでいる。

糊化した暗赤褐色土の遺存体の残りはよく、頭部の盛り上がりや背骨のラインなどを識別することができ、頭位方向は南である。また頭部から歯骨を2本検出した。ベンガラは頭部から背骨にかけて多く散布されており、すねと思われるあたりにも薄く確認することができた。

石器は遺存体上面の頭部西側に宇津内Ⅱb式の完形小型深鉢1個が口縁部を北に開口するように横倒しの状態で検出された。

その他の遺物はすべて頭部西側を中心に遺体を囲むように合計66個の副葬品が置かれていた。このうち64個が石製品である。このような石器の出土状況はピット267に類似していると思われる。

また、出土状況は、遺存体頭部西側の壁面に接したものの。床面(遺存体)の北東側から出土



第194図 ピット1403平面図・遺物出土状況

したもの。墓壙東側の壁面から集中するものなど3分類することができる。

さらに、このピットから出土した石材は、赤色系、黒曜石（黒色）、その他、色調で出土位置に偏りがある。赤色系は頭部西側、白色系は西側と東側、黒曜石は南東部から墓壙中央部にまとまって副葬されている。これらの遺物には未加工のものも認められ、その色彩に何らかの意味をもたせた可能性も考えられる。

遺物（第195図-1，第196図-5～26，図版57-13～27，図版58-1～8）

第195図-1は口径約12cm、器高約14cmの小型土器。口縁部に1対の吊り耳と小突起をもつ津内Ⅱb式。

第196図-5～23は床面出土である。5～7は無茎石鏃。8～13は両面加工ナイフ。14は主要剥離面の縁辺部に加工を施した削器。15は靴型状の削器。16～18は縦長剥片を素材とした削器。19も削器であるが、裏面は原石面を残す。20は表裏面とも粗い加工を施した削器。

21は片刃、22は両刃の磨製石斧。23は打製石斧。24～26は埋土出土のもので、24・25は柄部を入念に加工した片面加工ナイフ。26は搔器。8・16・17・20はジャスパー製。9～13は石英。14・15・26は硬質頁岩。21は泥岩製。22は緑色泥岩製。23は青色片岩製であり、他は黒曜石製である。
(熊木美野里)

ピット 1404

遺構（第193図）

本ピットはB77グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約0.90mの楕円形を呈し、南側にあるピット1404aの北壁の一部を切り込んで構築している。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

埋土層中からベンガラが散布され、一部では床面にもみられた。また、遺存体上では層厚約2cmほどのレンズ状に堆積している。

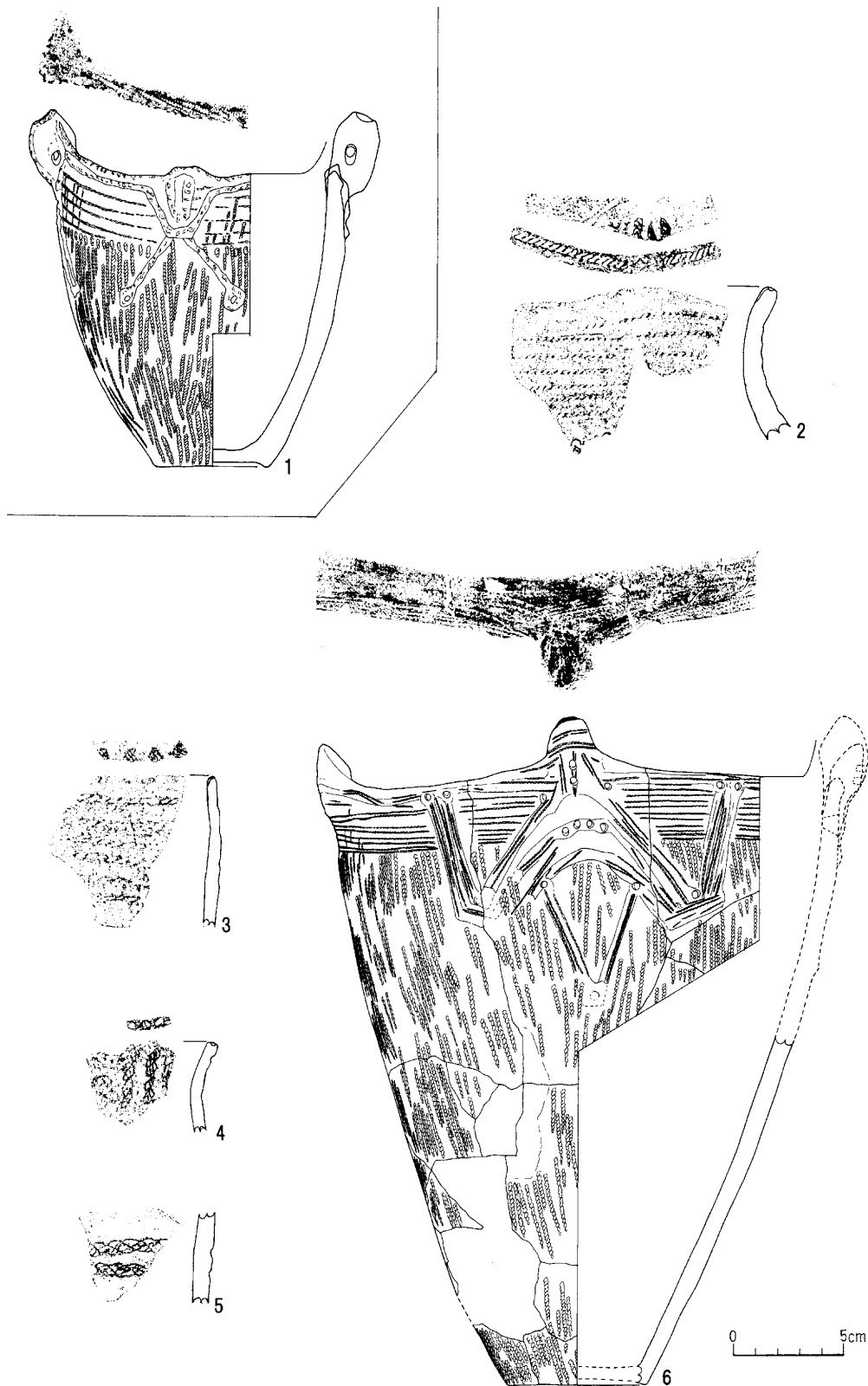
遺存体は粘性のある暗赤褐色土を呈する。

遺物（第196図-27，図版58-9）

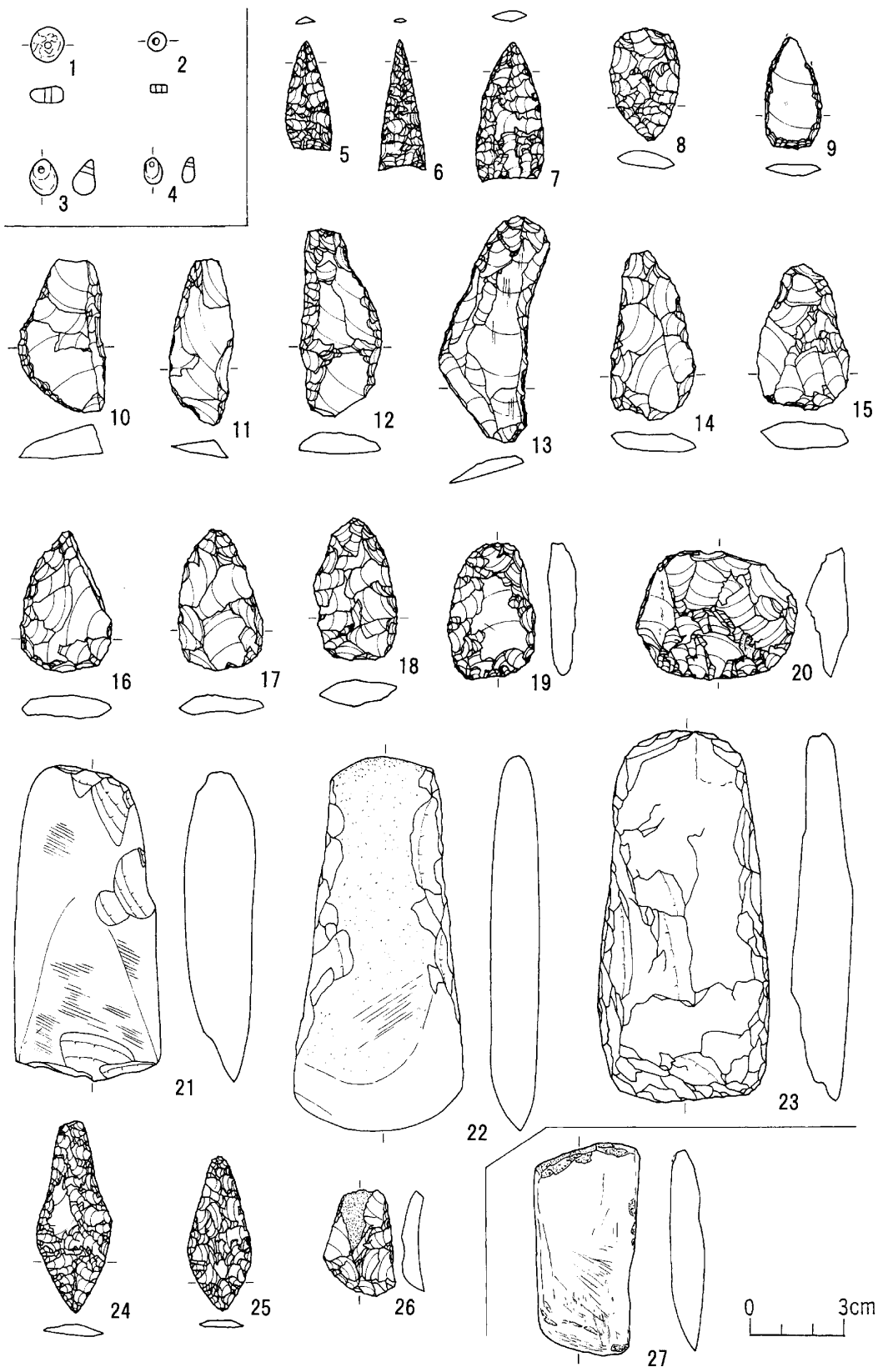
第196図-27は遺体上から出土した緑色泥岩製の磨製石斧。

小括

詳細な時期は不明であるが、形態、ベンガラを多量に散布することから続縄文初頭の土壙墓と思われる。
(武田 修)



第195図 ピット1403遺体上(1)、1404a 遺体上(2~4)・埋土(5・6)出土土器



第196図 ピット1402遺体上(1~4)、1403床面直上(5~23)・埋土(24~26)、1404埋土(27)出土石器・琥珀玉

ピ ッ ト 1404a

遺 構 (第193図)

本ピットはC78グリッド杭の下面に位置する。規模は長軸約1.60m、短軸約1.00mの楕円形である。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約20cm前後である。

中央部に粘性をもつ暗赤褐色土の遺存体があり、上部に径約10cmの範囲にベンガラが散布されている。土器は南壁に近接して潰れた状態で出土している。遺存体と同一レベルにあり本ピットに伴うと判断された。

遺 物 (第195図-2～6, 図版58-10)

第195図-2～4は遺存体上部から出土した。3点とも縄線文をもつもので、2は小波状を呈した口唇部に縄線文、3は縄端が押捺される。4は外反した口縁部に縄線文が縦位に施される。5は埋土出土である。無文部に太目の縄線文がみられる。2～5は興津式相当であろう。6は口径約24cm、器高約30cmの中型鉢形土器。口縁部と底部の一部が欠失するもののほぼ完形である。1対の大・小突起をもち、大突起からは「W」字状と「V」字状の隆帯をもち、組紐状圧痕文が施された下田ノ沢Ⅱ式。

小 括

明確な時期は不明であるが、埋土出土の下田ノ沢Ⅱ式の可能性が考えられる。

(武田 修)

ピ ッ ト 1405

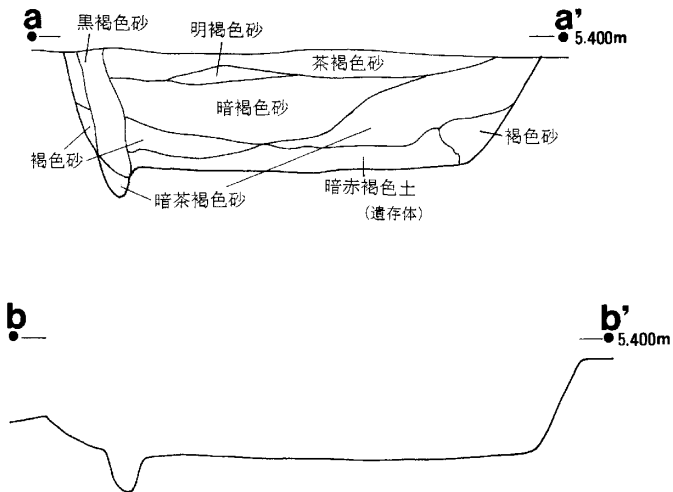
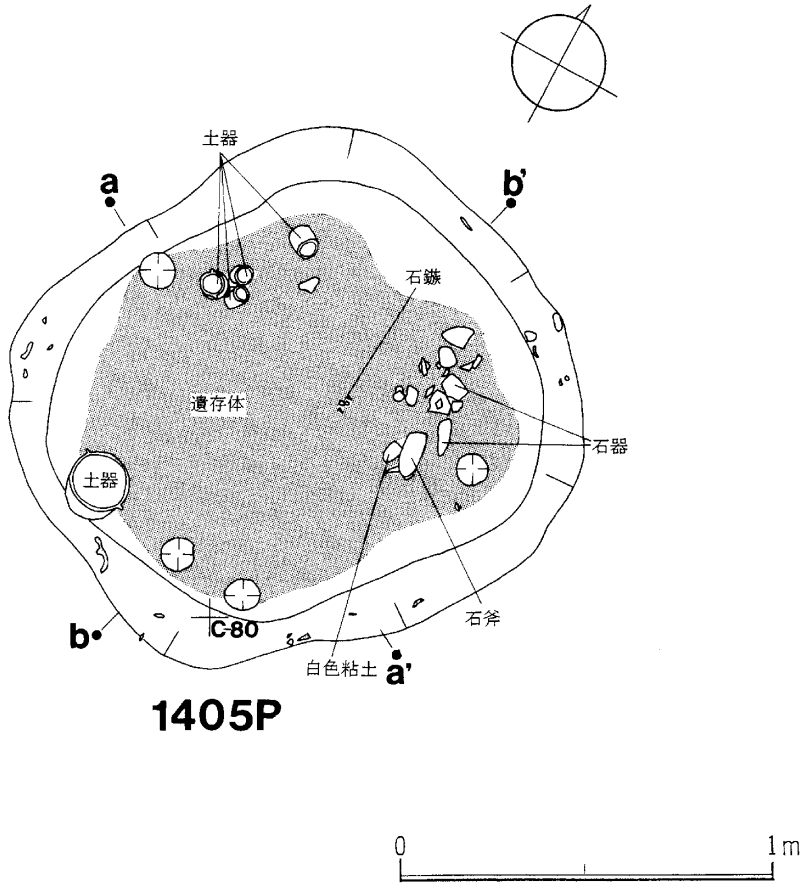
遺 構 (第197図, 図版59-1)

本ピットはC80グリッド杭の直下に位置する。一部は縄文期の堅穴である83a号堅穴の床面にあるが、この堅穴の床面精査中に確認できなかったものである。規模は直径約1.30mの不整形方形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは約30cmである。

埋土各層には少量ながらベンガラが混入しており、全体的に粘性のある土質である。層厚約5cm前後の遺存体も粘性をもち、ベンガラが多量に混じった暗赤褐色を呈する。腐食した遺存体の痕跡は床面のほぼ全面に広がっているものの頭部、歯骨などは検出できなかった。

北壁を除く各壁際に径約10cm、深さ約8～10cmの小柱穴があり、セクションラインにみられるとおり、西壁では上部から床面にかけて垂直の立ち上がりが確認できた。

遺物の配置は南壁中央部に中型土器を正立の状態に配置し、西壁際に4点のミニチュア土器がある。黒曜石を主体とした剥片はこのミニチュア土器に対応する北東壁際に集中している。石鏃は石器群よりやや内側にあり先端部を東に向けた状態で4本出土している。これらの副葬品は遺存体上に直接置かれたものでなく、墓壇内部に配置されたものである。



第197図 ピット1405平面図

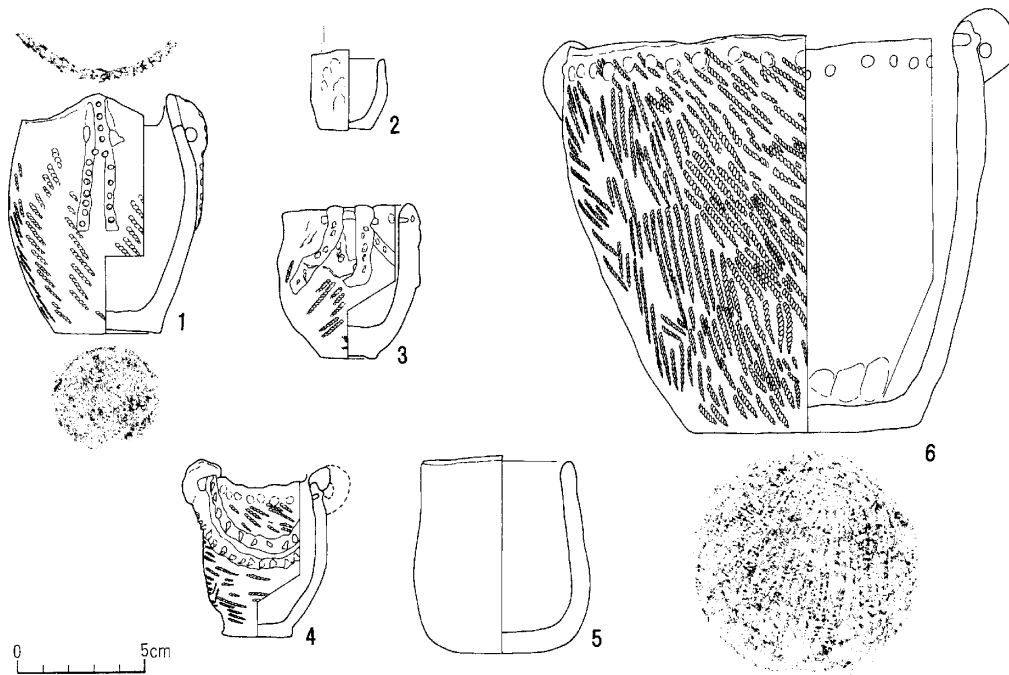
遺物 (第198図, 第199図, 図版59-2~5, 図版60)

土器は第198図-1~5のミニチュア土器が床面出土である。1は口径約6.5cm、器高約9cmであり、吊り耳をもつ。4個の小突起から2本の擬縄隆帯が垂下する。2は1の土器内部に納まっていたもので、口径、器高とも3cmの無文土器。3は口径約5.5cm、器高約6cmである。突瘤文をもち、擬縄隆帯が小突起から垂下する。4は口径約6.5cm、器高約7cmである。突瘤文をもち、吊り耳間に2本の太い擬縄隆帯が弧状に施される。5は口径約6cm、器高約7.5cm。口縁部よりも底部が広がる無文土器。6は口径、器高とも約16cmである。突瘤文が施され、2個の吊り耳をもつ。これらは宇津内Ⅱa式に比定される。

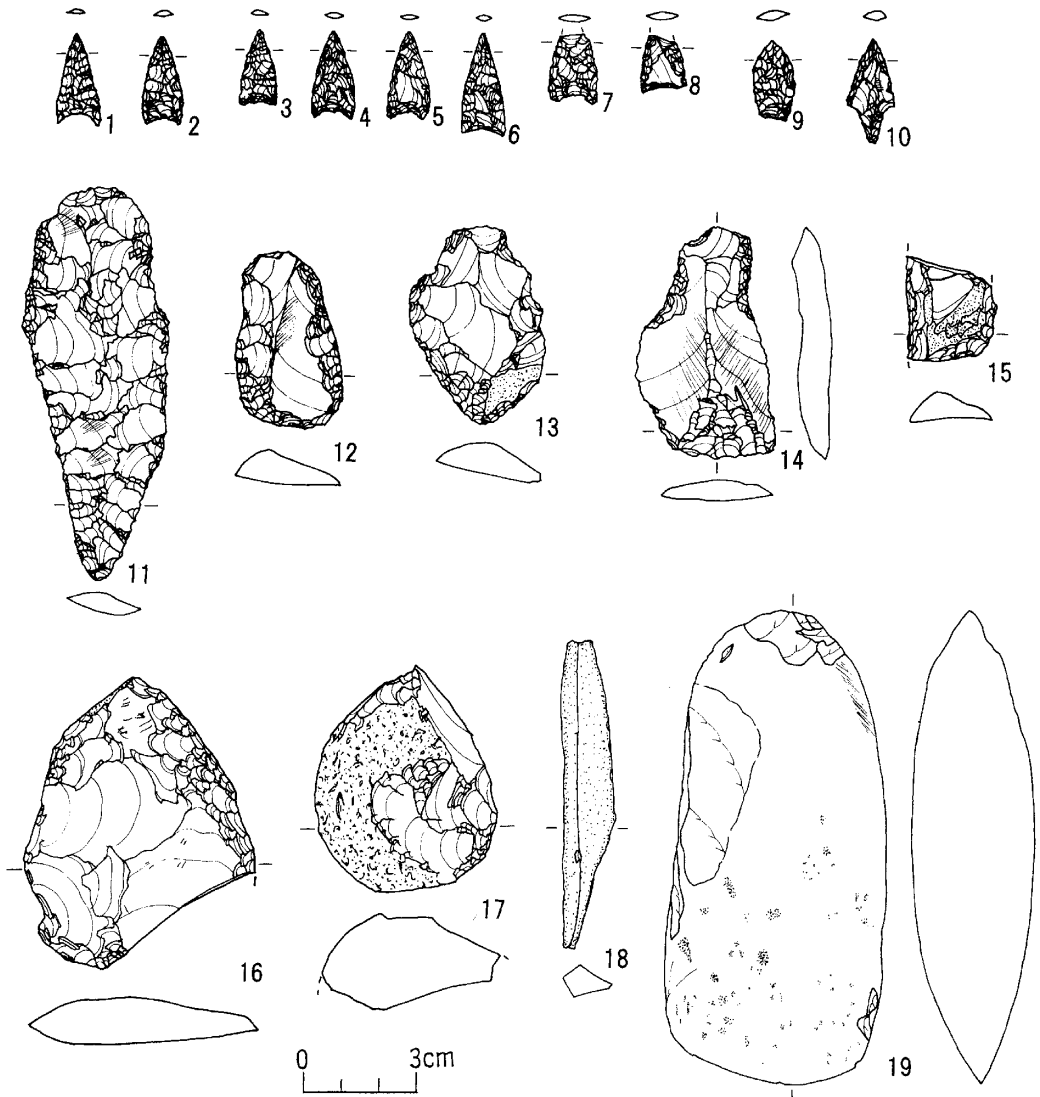
石器は床面出土である。第199図-1~9は無茎石鏃であるが、9は基部がすぼまる。10は有茎石鏃。11は両面加工ナイフ。12~16は削器。17は残核。18は棒状原石。19は両刃磨製石斧。9は頁岩製、19は青色片岩製であり、他は黒曜石製である。

小括

本ピット出土の土器は突瘤文をもつ土器。突瘤文をもたない土器。無文土器の三タイプに分けられる。突瘤文をもつ土器は宇田川編年の宇津内Ⅱa2式、もたないタイプは同Ⅱa1式、無文土器は興津式に相当する。 (武田 修)



第198図 ビット1405床面(1~5)・埋土(6)出土土器



第199図 ピット1405床面(1~19)出土石器

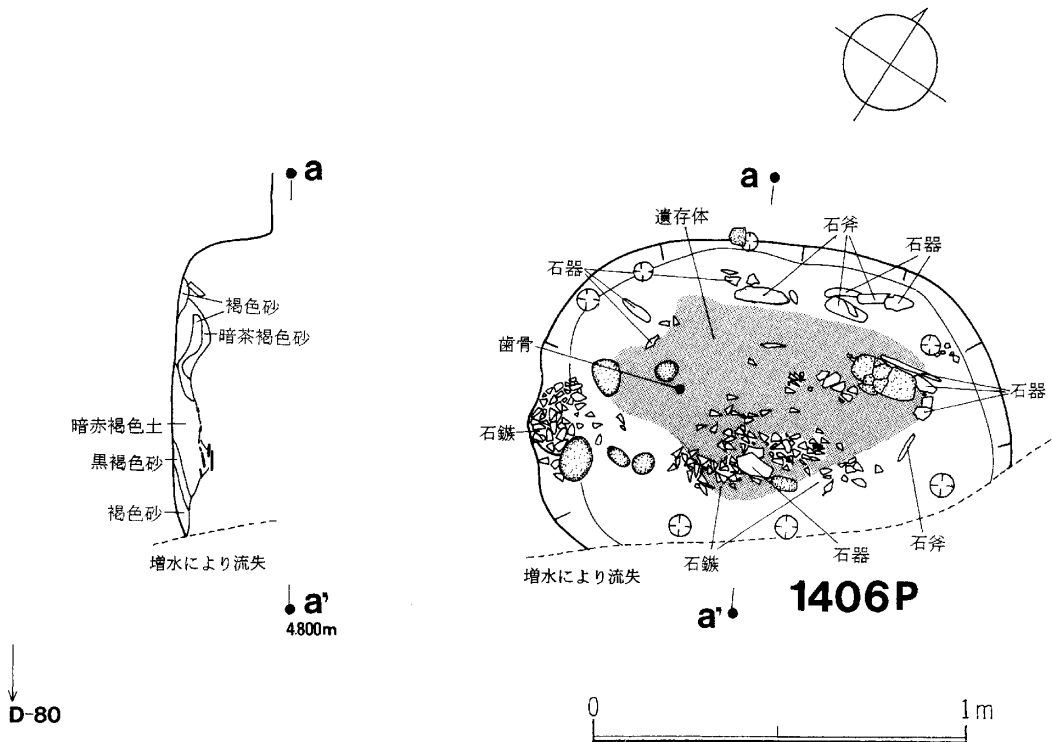
ピット 1406

遺構 (第200図, 図版61-1)

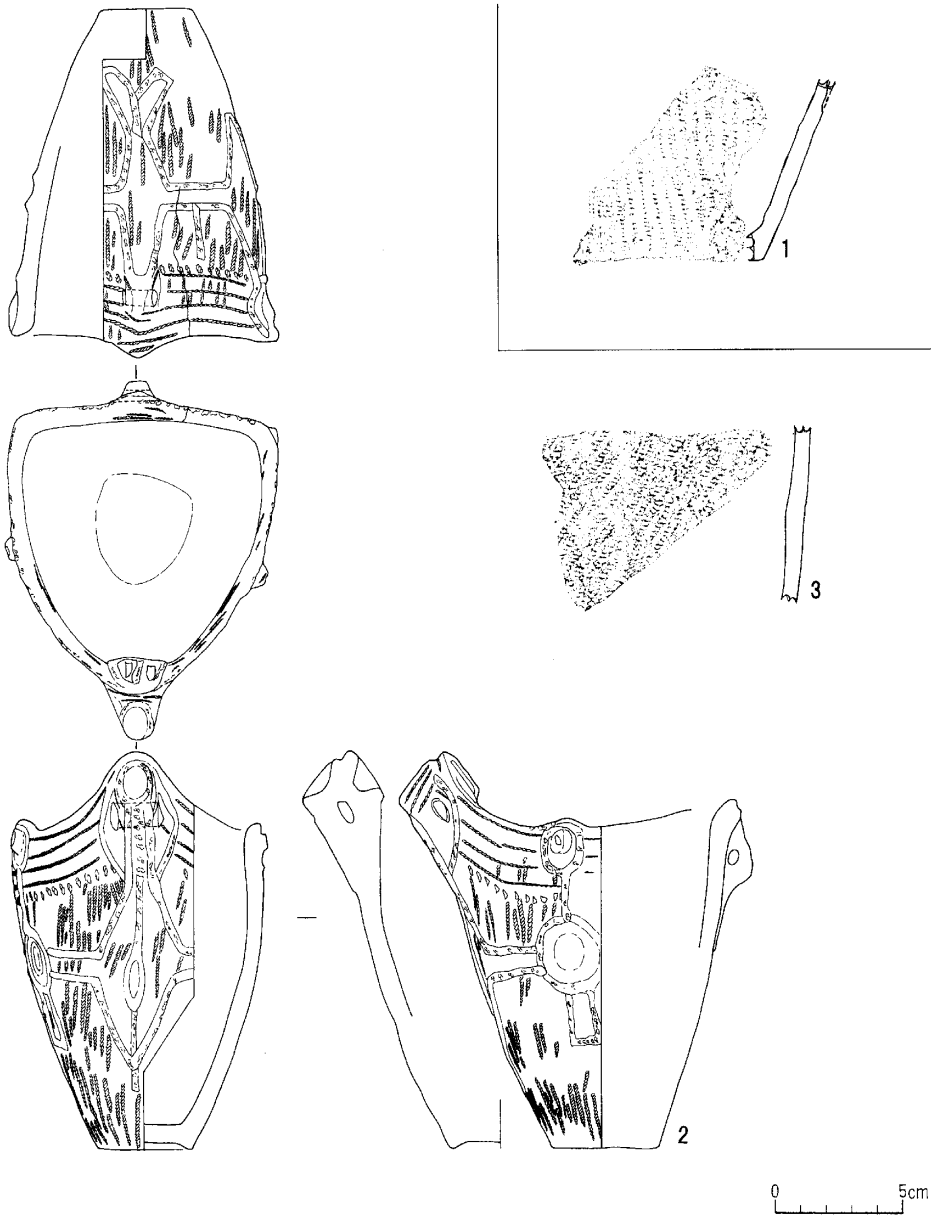
本ピットはD79グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.00mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約25cmである。南壁の墳上部から内側にかけて第203図-1~10に示す比較的大型の石鏃が先端方向を一定せずやや傾斜しつつまとまって出土した。周辺には大2個、小3個の黒曜石の原石がみられる。さらに内部を掘り進めると床面のほぼ全域に遺存体である、粘性をもった暗茶褐色土が広がり、各種の石器が出土した。遺存体には部分的にベンガラが散布されている。最も多いのは石鏃で、遺存体の中央部からやや東側にかけて縦長方向にまとまってみられる。やはり先端部は揃えておらず不規則である。石斧は西壁側にあり、北壁側では有溝研磨器が出土している。歯骨は遺存体の西側で検出した。

遺物 (第201図-1, 第202図, 第203図, 第204図, 第205図, 第206図, 第207図, 図版61-2~59, 図版62, 図版63, 図版64, 図版65)

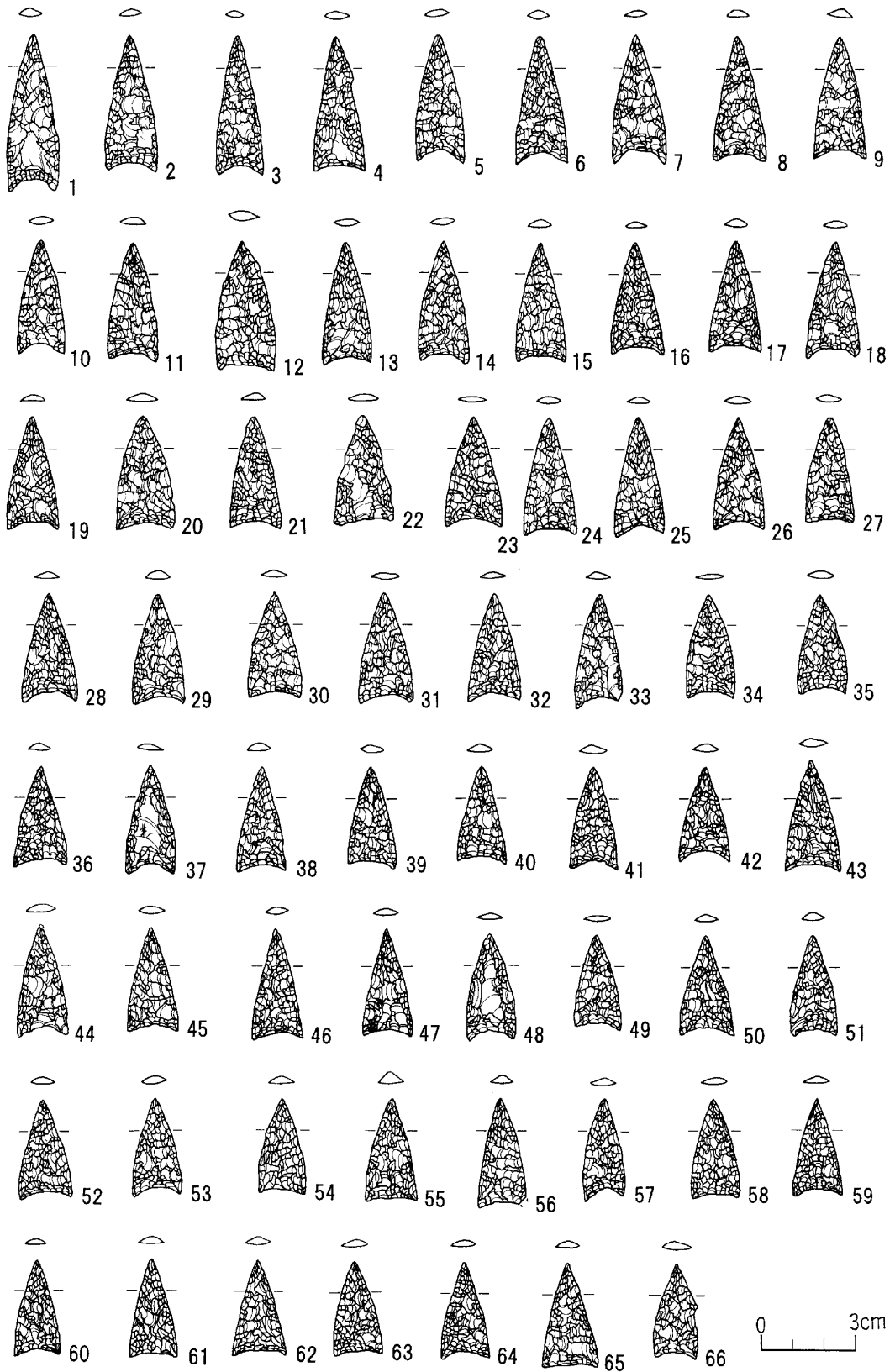
第201図-1は埋土出土の縄文土器の底部である。



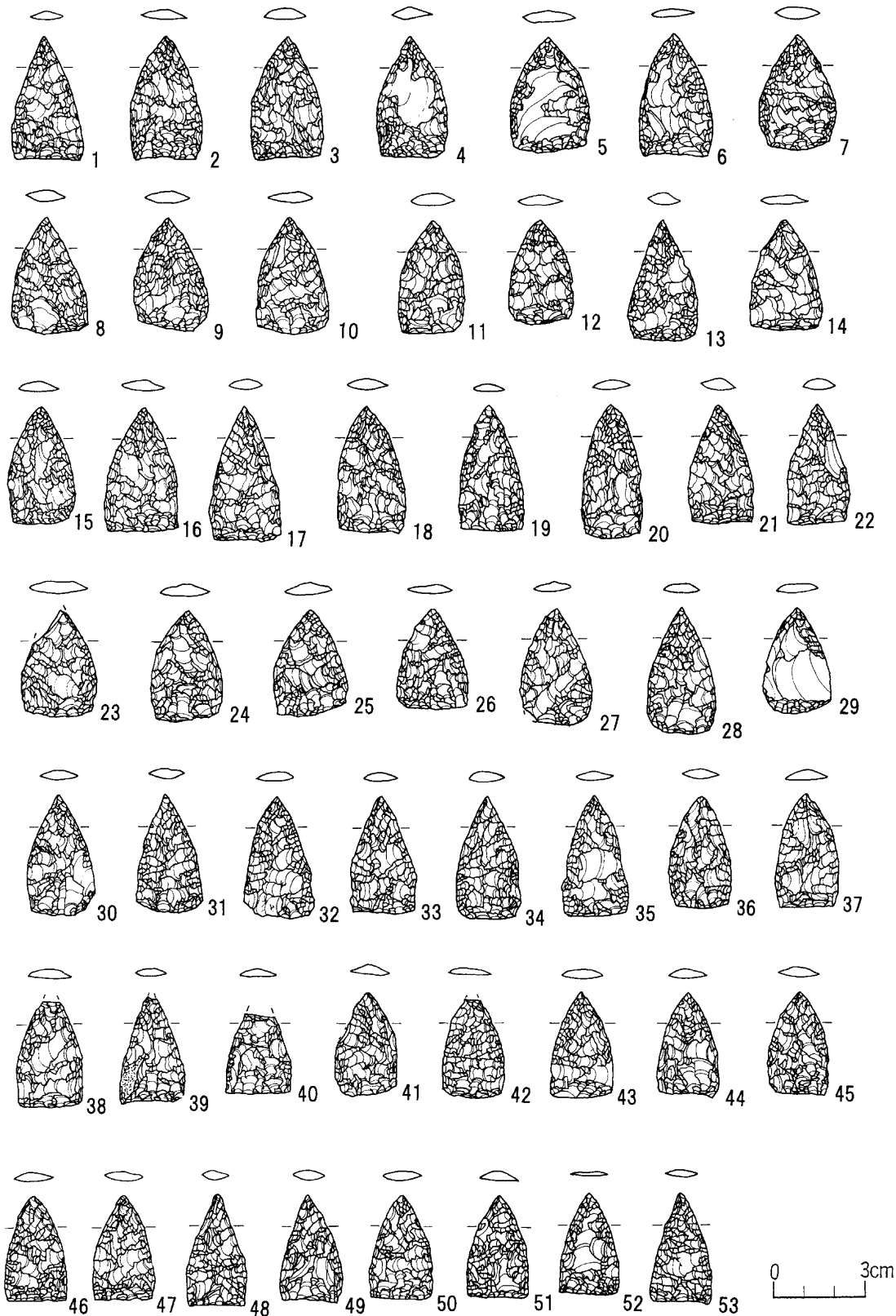
第200図 ピット1406平面図



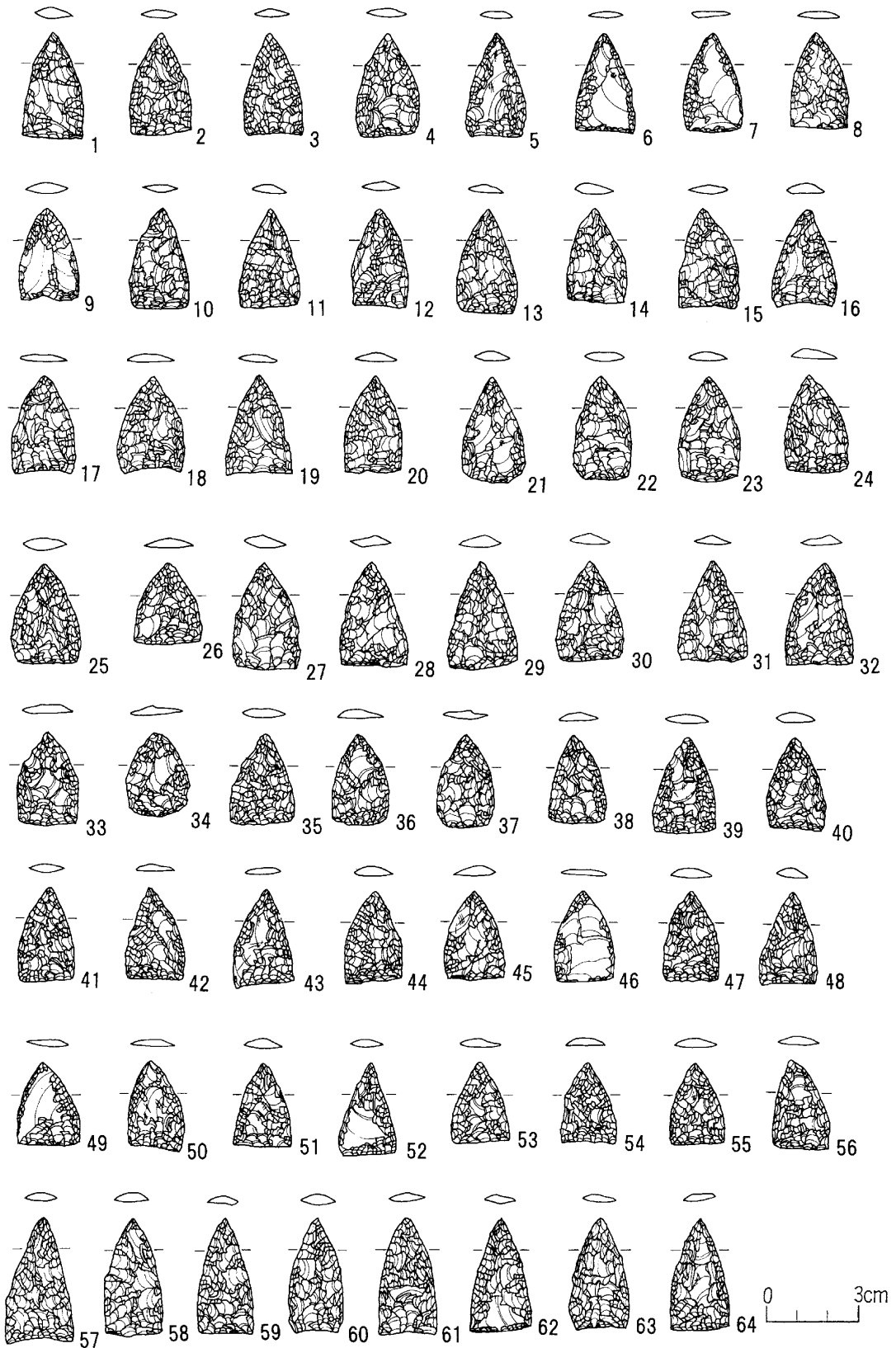
第201図 ピット1406埋土(1)、1408遺体上(2)・埋土(3)出土土器



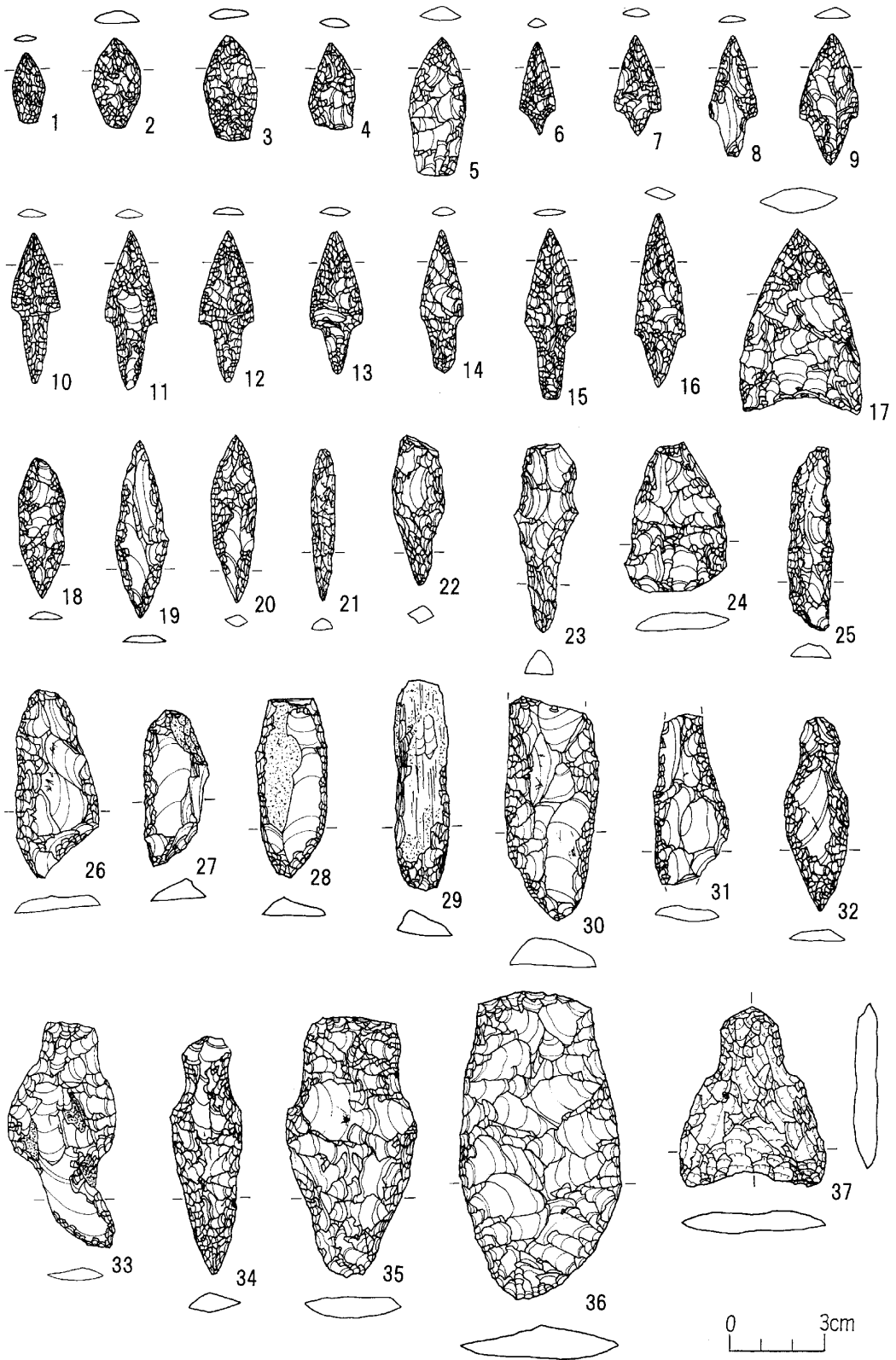
第202図 ビット1406遺体上(1~66)出土石器



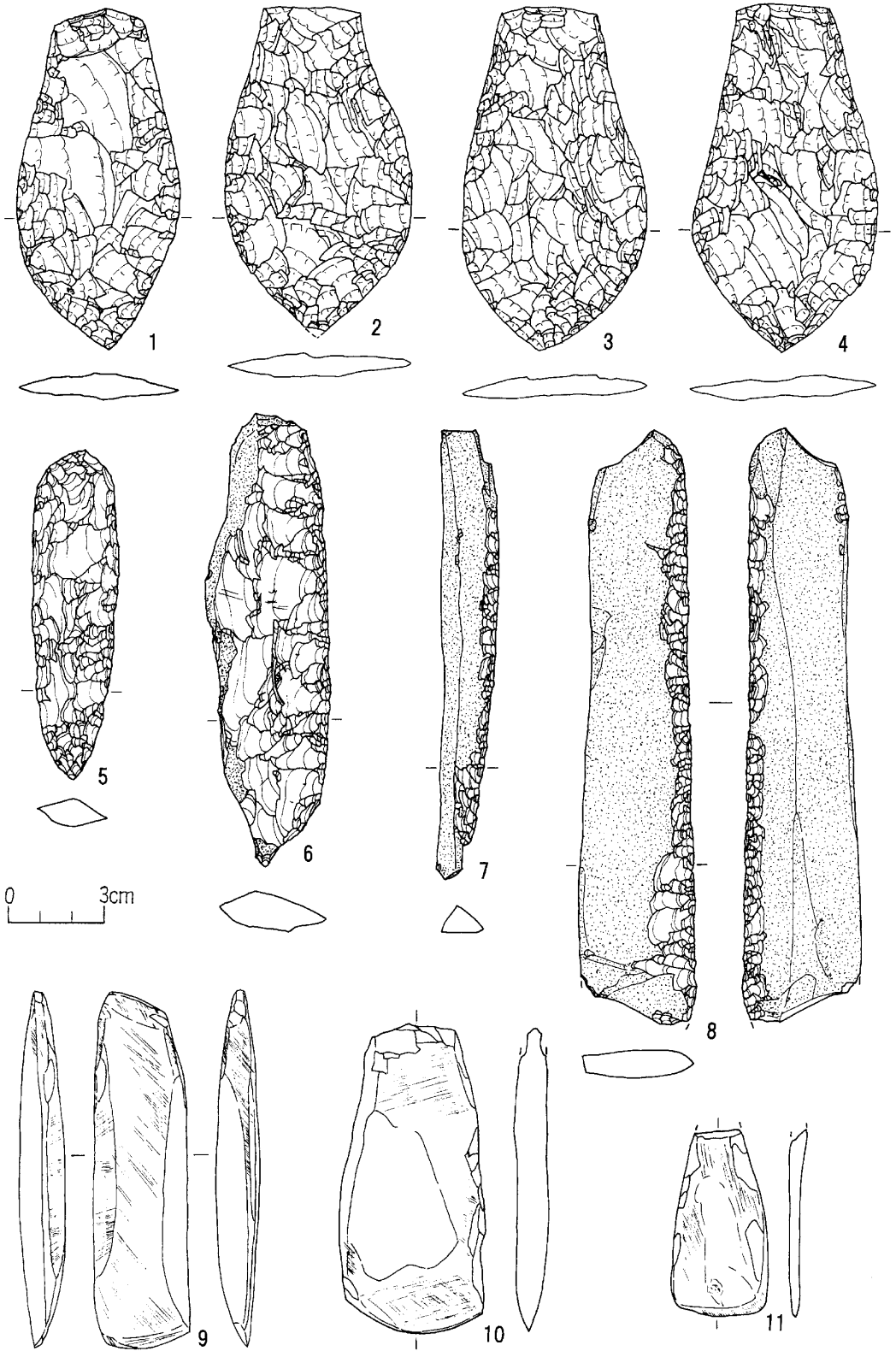
第203図 ビット1406遺体上(1~53)出土石器



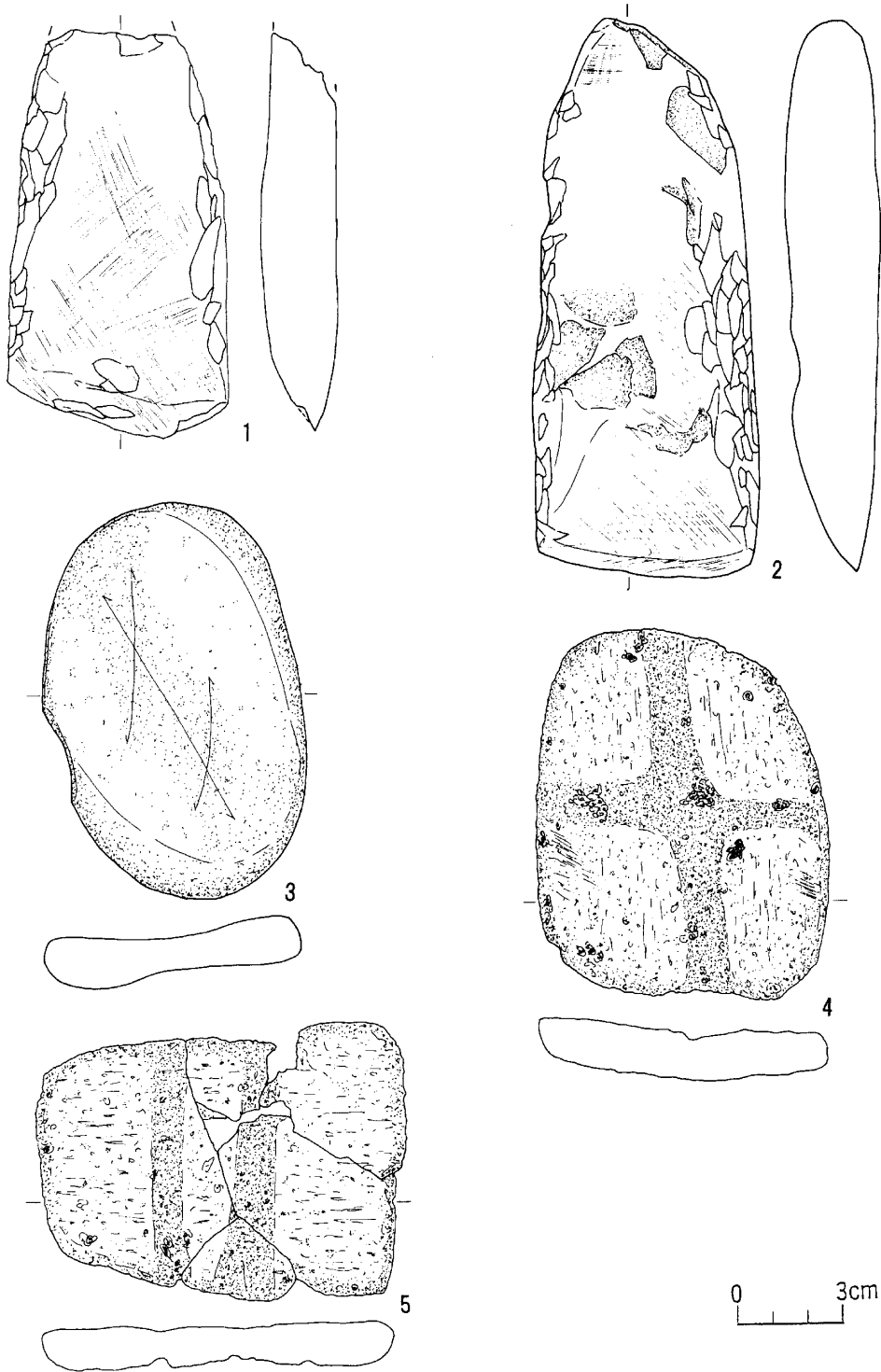
第204図 ピット1406遺体上(1~64)出土石器



第205図 ピット1406遺体上(1~37)出土石器



第206図 ビット1406遺体上(1~11)出土石器



第207図 ピット1406遺体上(1~5)出土石器

第202図-1～66は鍬身が比較的細身で基部が弧状となる無茎石鍬。全て黒曜石製である。

第203図-1～53、第204図-1～64は基部幅が広い無茎石鍬で三角形鍬に近いものもある。全て黒曜石製である。

第205図-1～5は基部が太い有茎石鍬。6～16は有茎石鍬であるが、6～9・13・16など基部が短いタイプと10～12・15など長いタイプがある。17は銚先鍬の可能性はある。18～24は片面加工ナイフ。25～31は削器。32～34は柄部が作出されたもので、32・33は片面加工ナイフ。34～37は両面加工ナイフ。37は上部が尖る異質な形態であるが、意図的に作出したものではない。柄部付きのナイフであろう。21・37は玄武岩製、22・23・26・35・36は頁岩製、27・28はメノウ製、他は黒曜石製である。

第206図-1～5は両面加工ナイフ。特に1～4は柄部が太く、下端部にかけて幅広い弧状を呈して、先端部が尖る独特の形態である。5は先端部が尖るが細身である。6～8は棒状原石を素材とした削器。3点とも右側縁部の表裏面のみ加工している。9は片刃、10・11は両刃の磨製石斧。1～4は玄武岩製、5は頁岩製、6～8は黒曜石製、9は緑色片岩製、10は緑色泥岩製、11は青色泥岩製である。

第207図-1は青色片岩製の片刃磨製石斧、2は緑色片岩製の片刃磨製石斧。1は左側面、2は両側面が敲打調整され、1は刃部が縦方向、2は横方向に研磨される。3は両面研磨された擦石。金雲母を含んだヘンマ岩製。4は「十」字形、5は2条の浅い研磨面をもつ有溝研磨器。軽石製。

小 括

副葬品は石鍬を主体としたもので総数378本におよぶ。土器は出土していないため詳細な時期は不明であるが石鍬、ナイフの形態から続縄文期と判断できる。宇津内Ⅱa式など同時期の初頭の可能性がある。

(武田 修)

ピット 1407

遺構 (第208図, 図版66, 図版67)

本ピットは B77 グリッドに位置する。長軸約 1.00m、短軸約 0.87m の不整楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は確認面から 28cm を測る。

遺存体の残りはよく、頭部、腕部などの判別が可能である。頭位は西である。頭部では歯骨を検出した。ベンガラは頭部ではなく、南東部の床面付近から遺体の一部に最大 7cm の厚さで散布されている。床面の柱穴は検出されていない。

完形土器は出土していない。小片が 2 点埋土から出土している。26 点の黒曜石の剥片が南東壁の立ち上がりに沿って副葬され、頭部から首にかけて合計 128 個の琥珀玉と磨製石斧 3 点、オレンジ色の自然石 1 点が置かれていた。琥珀玉は幾分ばらけているものの、数珠状であったと考えられる。

遺物 (第209図-1~9, 図版68)

第209図-1・2は床面出土である。1は大型の両面加工ナイフ。2は片面加工ナイフ。3~9は遺体上から出土した。3・4は削器。5~7は片刃磨製石斧。5は両側縁部に柄部と本体を縄等で固定するための凹部が敲打により作出されている。7は5の石斧にみられた凹部が明瞭に作出されている。8・9は琥珀製平玉である。平玉は直径約 7~9mm であり、両面とも研磨されている。5は青色片岩製。6は泥岩製。7は緑色片岩製であり他は黒曜石製である。

小括

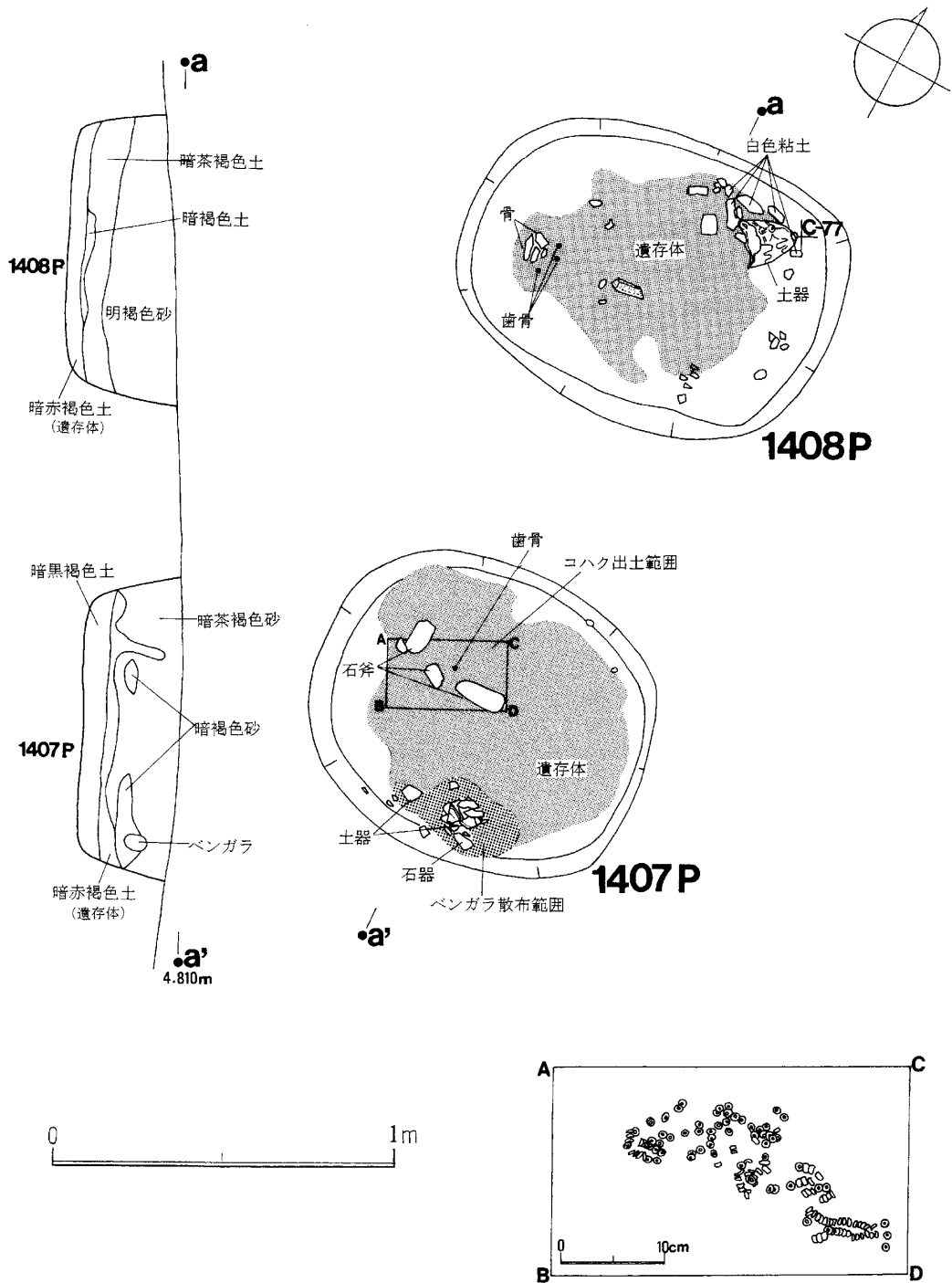
ピット 1407 からは土器の出土がないため直接の時期決定は出来ないが、ピット 1407 と 1408 は 2 つの墓壇の間隔が 50cm と狭いにもかかわらず、切り合いが見られないことから、埋葬時期はあまり離れていないと考えられる。頭位方向が共通する以外は副葬品の種類。配置、ベンガラの有無など異なる要素が多いが、副葬品の種類の豊富なピット 301 などと比較すると 1 墓壇に副葬される種類を 2 墓壇で分け合っているよう思われる。(熊木美野里)

ピット 1408

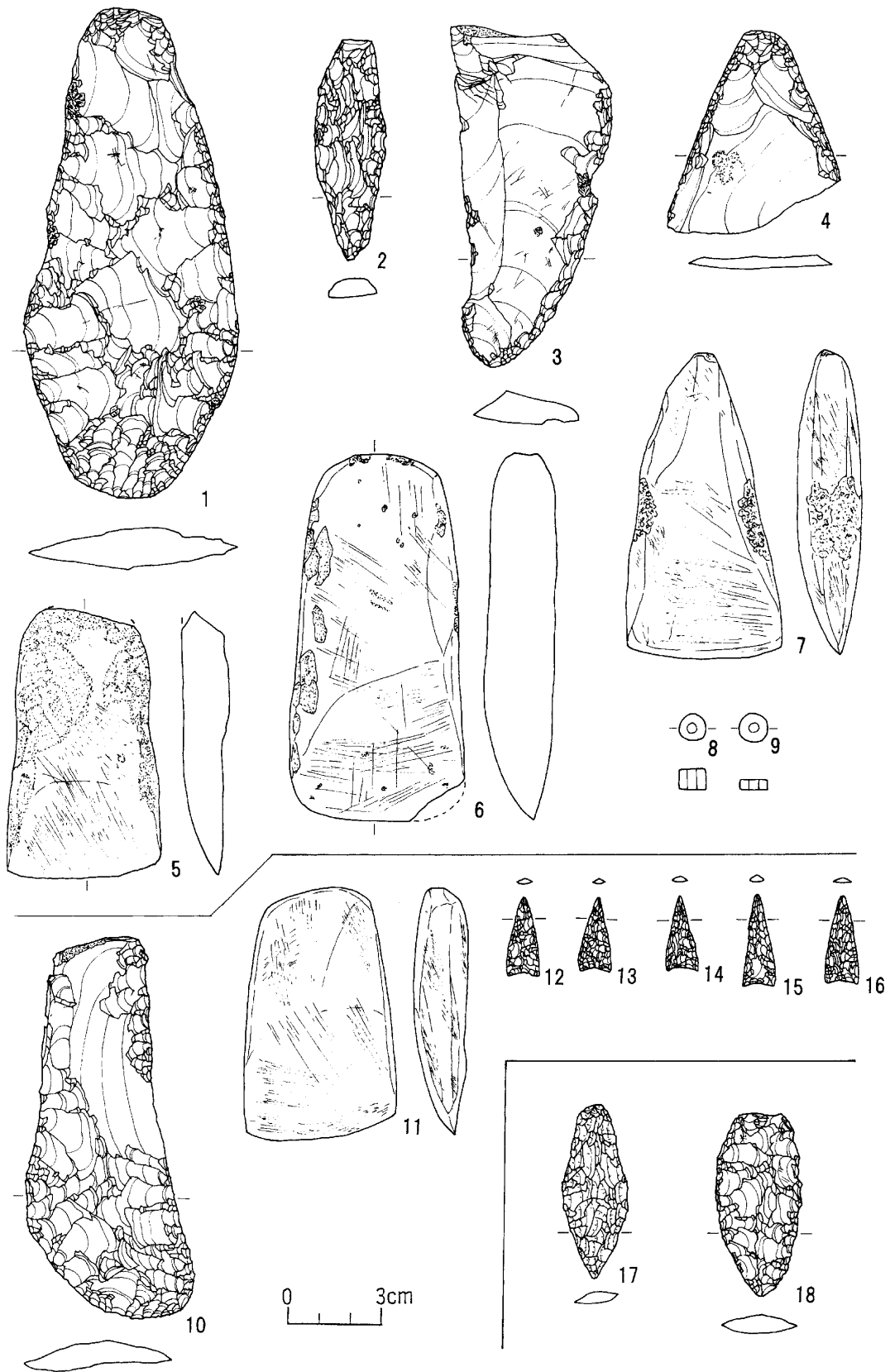
遺構 (第208図, 図版69)

本ピットは B77 グリッドに位置する。ピット 1407 が南側に 50cm の間隔をおいて検出されている。切り合いはない。規模は長軸約 1.11m、短軸 0.85m で平面形は不整楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から 33cm を測る。

糊化した暗赤褐色土の遺存体の残りはよく、頭位が西であることが分かる。頭部には明褐色の非常に固い骨片が一部頭部の膨らみを残したまま検出された。その下から歯骨を検出した。ベンガラは散布されておらず、床面での柱穴は検出されていない。



第208図 ピット1407、1408平面図・琥珀玉出土状況



第209図 ビット1407床面(1・2)・遺体上(3~9)、1408床面(10)・遺体上(11)・埋土(12~16)、1409埋土(17・18)出土石器・琥珀玉

宇津内Ⅱb式の完形小型土器が遺存体の上から出土した。口縁部平面形が三角形を呈しており、南西側に口縁部を向けて横倒しの状態で出土した。

白色粘土は4個出土した。長さ10cm、直径5cmほどの棒状のものであり、足元にあたる北部分に集中している。

遺物 (第201図-2・3, 第209図-10~16, 図版70)

第201図-2は遺存体上部から出土した小型土器。口縁部の上面観は側辺が丸みをもった三角状を呈し、頂部が反り上がった吊り耳である。吊り耳の下部には菱形の隆帯をもち、各辺の中央部と角にある5個の小突起から派生する同心円状、菱形の隆帯と連結している。吊り耳の内側には豚鼻状の刺突が深く刻まれ、外側は凹状となり注口土器を意匠したように見受けられる宇津内Ⅱb式。内外面とも煤が付着する。3は統縄文の胴部片。

第209図-10は太い柄部をもつ靴形状のナイフ。11は片刃磨製石斧。12~16は無茎石鏃。

11は青色泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小括

本ピットは統縄文宇津内Ⅱb式の土壙墓である。第201図-2に示した土器はこの時期には珍しい異形土器と考えられる。(熊木美野里)

ピット 1409

遺構 (第210図, 図版71-1)

本ピットはA75, B75グリッドに位置する。長軸約1.30m、短軸約1.11mの楕円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から52cmを測る。2層を掘削した後、東壁付近に3箇所、西壁付近に1箇所、合計4箇所の柱穴を確認した。どの柱穴も直径5cm、深さ15~20cm前後であるが、埋土の中間付近で底を検出しており、遺体上面、また床面にも達していない。

暗赤褐色土に変化した遺存体は頭部の丸みなどが確認でき、残りは良好であったが、歯骨は検出されなかった。頭位方向は南西である。遺存体の南半分にベンガラが散布されており、特に頭部に集中している。

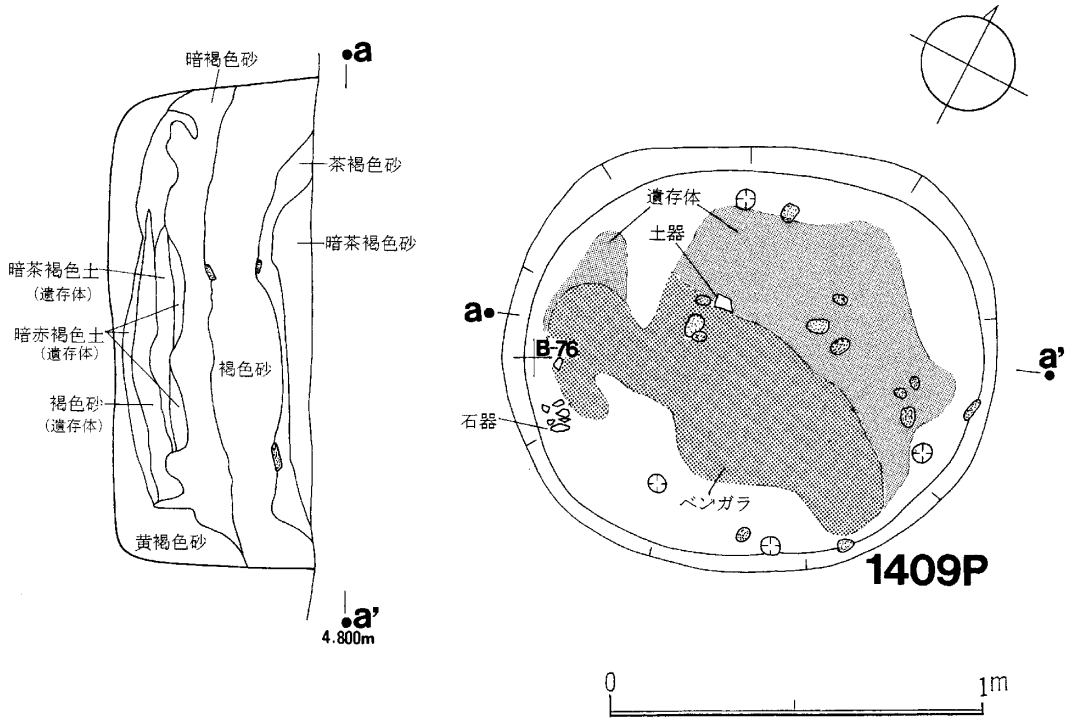
遺物は大きくピット検出面と床面の2つのレベルに分かれて出土している。

遺物 (第209図-17・18, 図版71-2・3)

第209図-17・18は埋土出土の両面加工ナイフ。17は玄武岩製、18は黒曜石製である。

小括

土器が出土していないため詳細な時期は不明であるが柱穴の存在から統縄文宇津内Ⅱa式かそれ以前の可能性が考えられる。(熊木美野里)



第210図 ピット1409平面図

ピット 1410

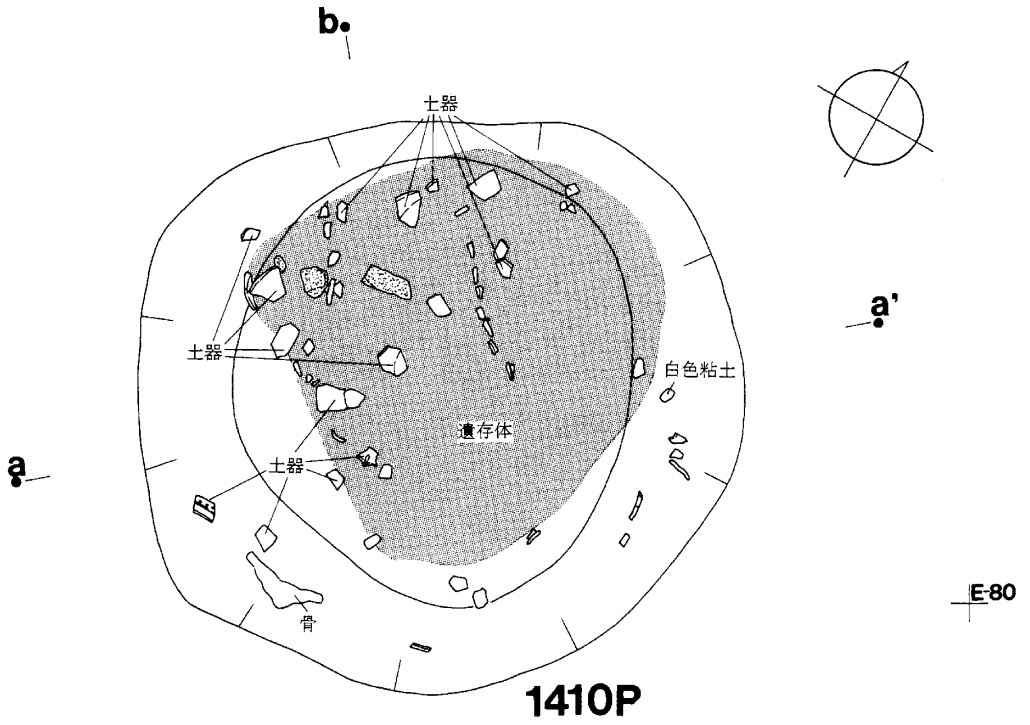
遺 構 (第211図)

本ピットはE80グリッドに位置する。規模は直径約1.60mの不整形円形を呈する。壁は西壁、東壁側が、ほぼ垂直に立ち上がるのに対し、北壁、南壁側は上部に向かって大きく開く。高さは約30cmを測る。

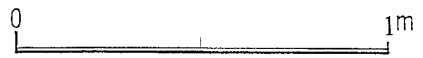
床面のほぼ全域には遺存体であるベンガラ混じりの暗赤褐色土が約10cmの層厚をもってみられる。上層は黒色土に覆われており、遺物の大半は本層からの出土である。

遺 物 (第217図-1~6, 図版71-4)

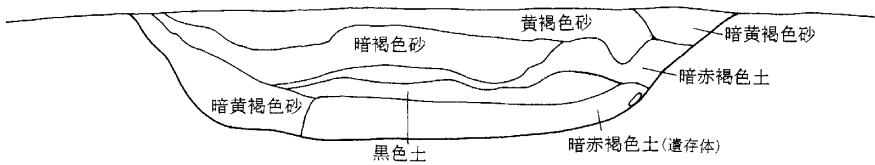
第217図-1~6は続縄文初頭興津式に相当すると思われる。1は横位の隆帯下部に縄端圧痕文をもつ。2は口径約8cm、器高約11.5cmの小型土器。内屈した無文の口縁部に小突起と隆帯をもち、口唇部と同様の刺突文が施される。3は横位の沈線文間に縄端圧痕文、4は無文、5・6は縦走縄文が施される。



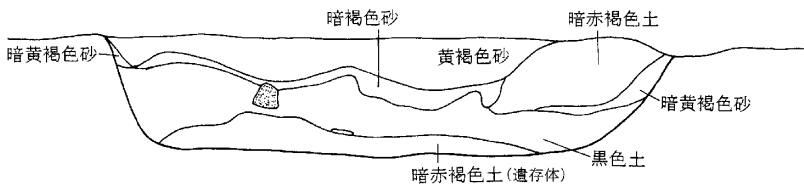
1410P



a a' 5.000m



b b' 5.000m



第211図 ビット1410平面図

小 括

遺存体がみられることから土壙墓と考えられる。時期は遺存体上部に堆積している黒色土層から出土した土器から統縄文字津内Ⅱa式と判断される。(武田 修)

ピ ッ ト 1411

遺 構 (第174図)

本ピットはF90グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。

南西壁側に長さ10cm程のベンガラがみられるので、土壙墓と思われるが詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 1418

遺 構 (第212図, 図版72-1)

本ピットはA72グリッド杭の下部に位置する。1998年の常呂川の冠水により土砂が流失したため上部が削られ礫、土器が露呈した状態であった。床面近くがかろうじて遺されていたわけであるが遺構のあり方や出土遺物の時期など貴重な資料が得られた。

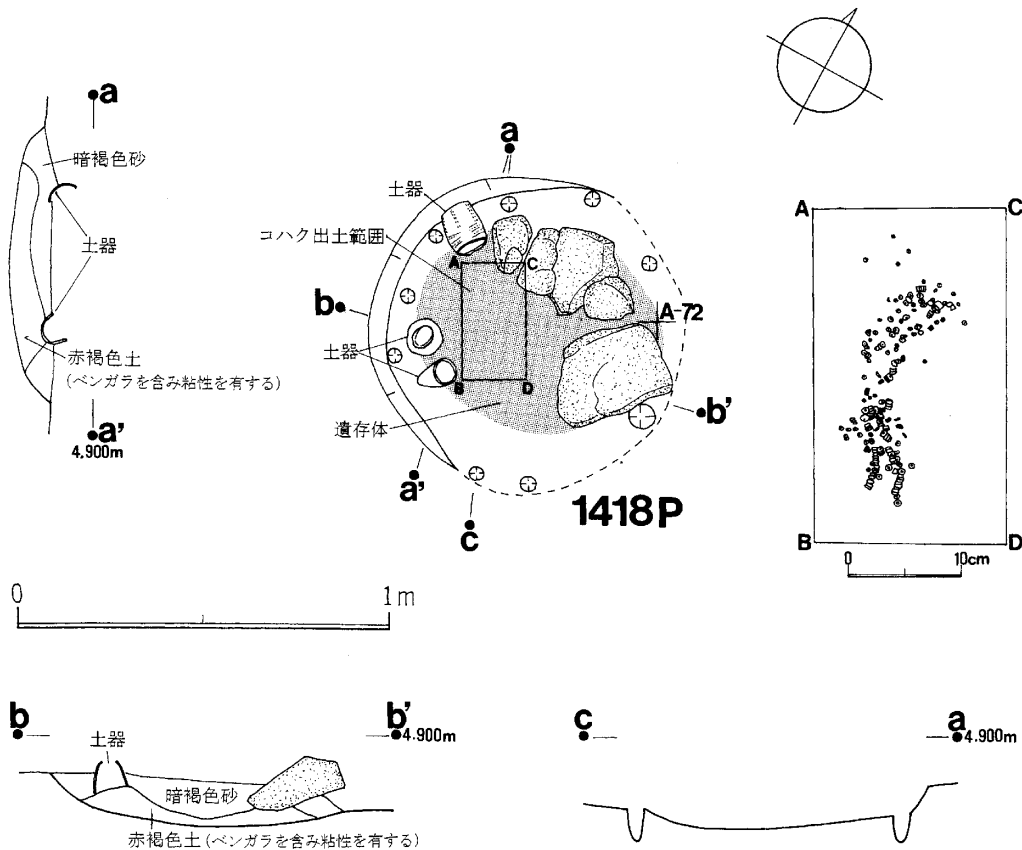
規模は床面の状況や縁辺部に沿って径約4～5cm前後、最大でも8cmの小柱穴が配置されていることから円形を呈すると思われる。小柱穴の深さは約6～12cm。検出できた床面の直径は径約0.75mであり、壁から中央部にかけて弧状となる。

層厚約5～10cmの遺存体は赤褐色を呈し、粘性をもち、部分的にベンガラを混入する。北壁側には15～30cmの角礫4点が配置されている。この礫は床面の円周に沿ってあり、大半が遺体上部と接している。

土器は西壁側に1点、南壁側に2点あり比較的近接した状態で出土している。琥珀玉はピットの中央部からやや西寄りの遺存体上から出土している。総数271点あり、第222図-1～10に示すとおり径約2～3mmと径約5～6mmサイズがある。径約5～6mmサイズでは一部が連なった箇所もみられる。

遺 物 (第213図, 第222図-1～10, 図版72-2～4)

第213図-1は口径約9cm、器高約11.5cmの小型土器。口唇部に4個の小突起をもつ。このうち相対する2個の下部には吊部と思われる2個の貫通孔がみられる。器面は変形工字文状の沈線文が施され、半載状施文具による刺突文が横位にみられる。胴下部は縦走縄文を地文に口唇部の小突起箇所の下方に縄端疋痕文が2本縦列する。内壁の一部に赤色顔料が付着する。フシコタン下層式相当である。2は口径約8cmで底部が小さく、器高約10.5cmの細長い小型土



第212図 ビット1418平面図・琥珀玉出土状況

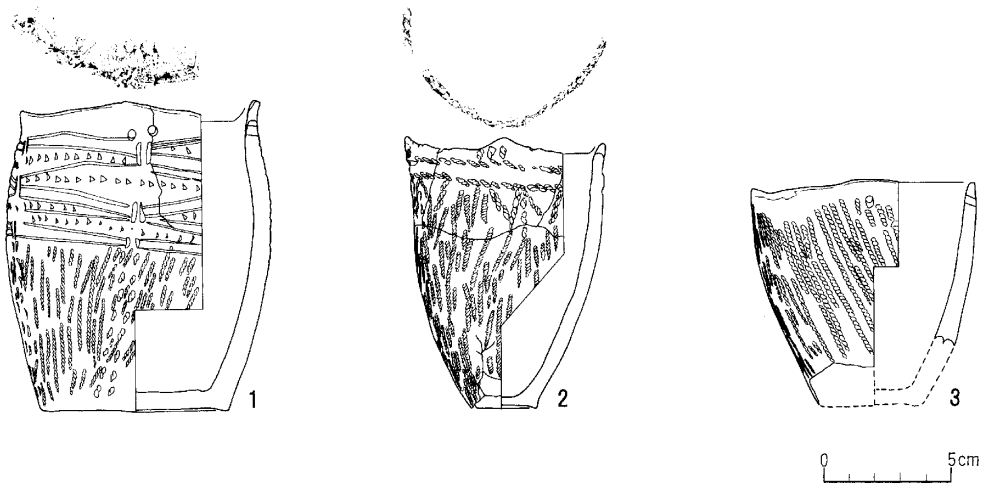
器。口唇部の4個の小突起には縄端が圧痕され、2本の縄線文の下部には「W」字状の縄線文と縄端圧痕文が施される。一部に赤色顔料が付着する。3は口径約8.5cm。底部は欠失する。口唇部は平縁で、口縁部に相対する2個の貫通口をもつ。器面は斜行縄文が施される。2は口径約8cmで底部が小さく、器高約10.5cmの細長い小型土器。口唇部の4個の小突起には縄端が圧痕され、2本の縄線文の下部には「W」字状の縄線文と縄端圧痕文が施される。一部に赤色顔料が付着する。3は口径約8.5cm。底部は欠失する。口唇部は平縁で、口縁部に相対する2個の貫通口をもつ。器面は斜行縄文が施される。これら3点の土器はフシココタン下層式に相当する。

第222図-1~10は琥珀製の平玉。

小 括

本ビットは続縄文初頭フシココタン下層式に相当する土壌墓である。

(武田 修)



第213図 ピット1418遺体上(1~3)出土土器

ピット 1419

遺 構 (第214図, 図版73-1・2)

本ピットはA73グリッドに位置する。平成3年度の擦文期の40号堅穴の調査の際に検出できず、最終の遺構確認の際に発見したものである。大部分を40号堅穴に削られ、北西壁の端部は下水道収水管により破壊されている。規模は長軸約1.22m、短軸推定0.90mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは40号堅穴の床面から約20cmである。

遺存体はベンガラが散布され、粘性をもった暗赤褐色土を呈する。遺存体を2~3cm下げると第215図-28~30に示す装身具がまとまり、やや下のレベルから石斧、石鏃、ナイフが出土した。副葬品は遺存体の上部に置かれていたと考えられる。

小柱穴は径約10~15cm、深さ約7~13cmを測り、北壁端部で5本集中し、東壁で3本確認できた。東北際には長さ約22cm、幅約3~5cm、深さ約4cmの弧状を呈した小溝があり、幅約13cm、厚さ1cmの板材が立った状態で出土した。この板材は壁止めに利用されたかと推測される。

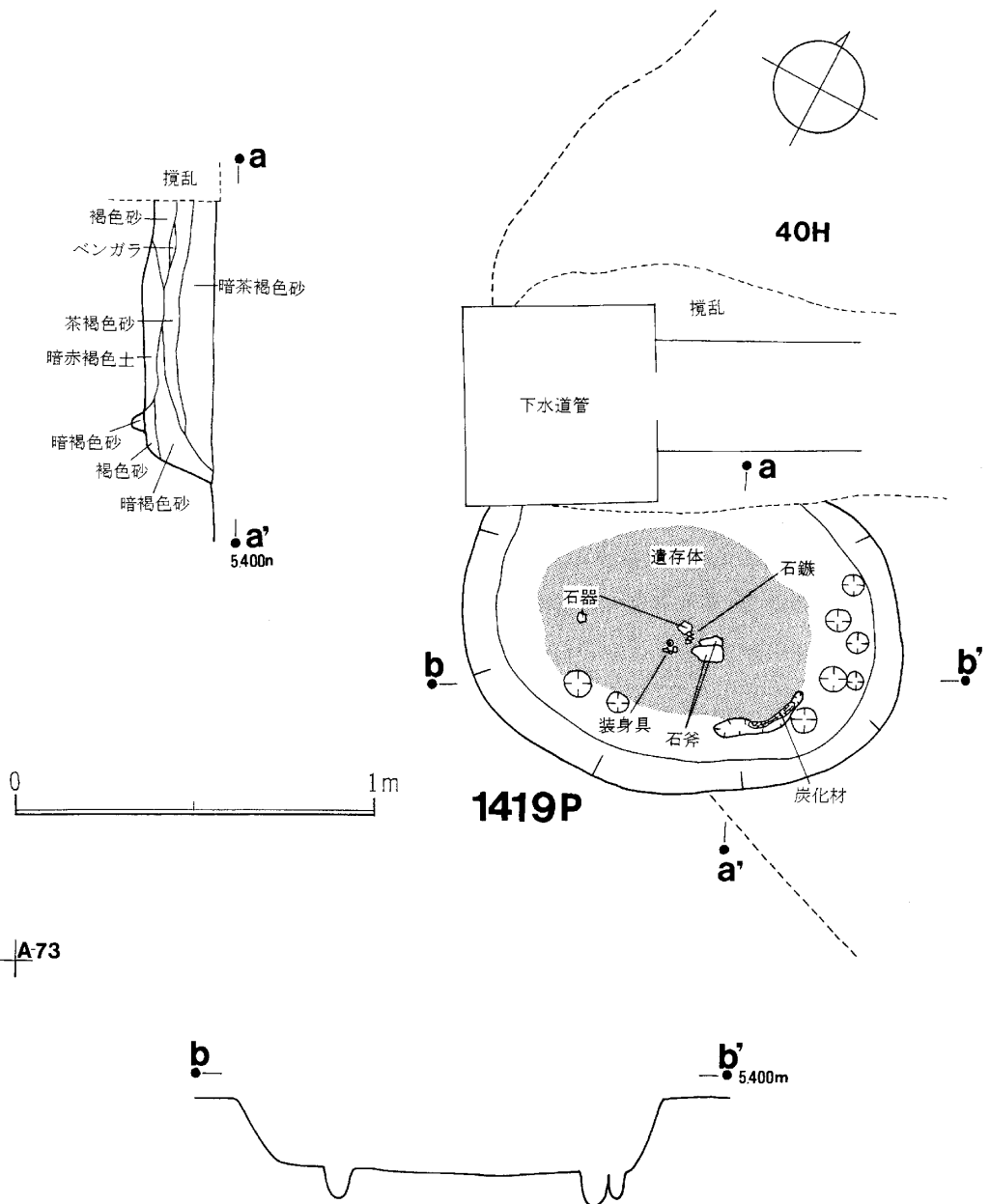
遺 物 (第215図, 図版73-3~25, 図版74-1~7)

第215図-1~23は無茎石鏃。24は柄部を作出し、刃部が幅広の両面加工ナイフ。遺存体中央部から出土した刃部と南壁側から出土した柄部が接合したものである。24~27は撥形の磨製石斧。3点とも片刃であるが、26は擦切り手法による。27は右側縁部の表裏面が敲打調整され、裏面に擦切り痕と思われる長さ5cm程の刻線が見られる。28~30は有孔装身具。29は緊縛用と思われる浅い溝をもつ。30は両側から穿孔されている。11・24は頁岩製、25・26は緑色泥岩製、

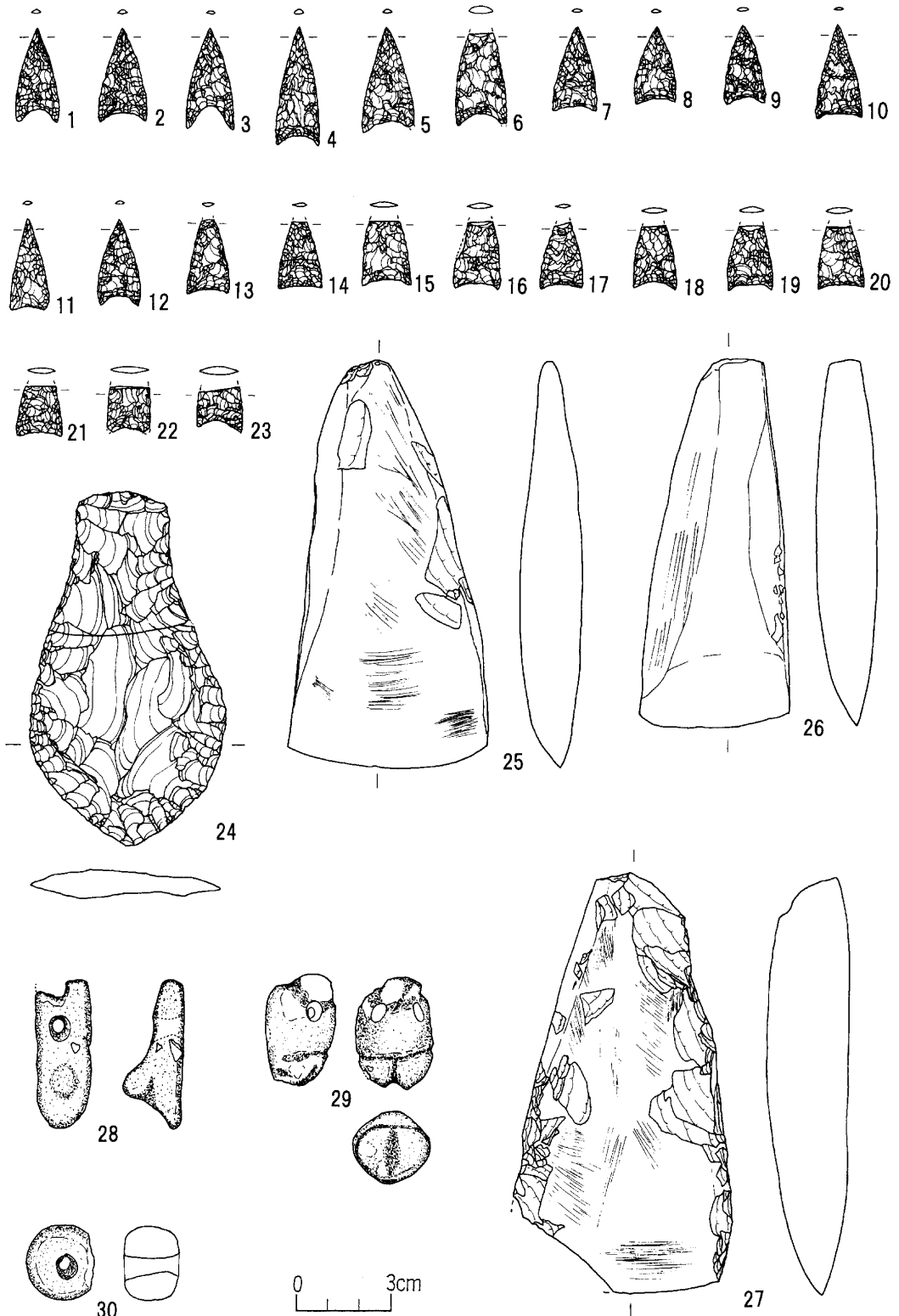
27は硬質頁岩製、28は珪質泥岩製、29・30は石質不明。他は黒曜石製である。

小 括

詳細な時期は不明であるが、形態が楕円形を呈し、小柱穴をもつことから続縄文初頭と思われるが、宇津内Ⅱa式期に見られない装身具をもつので、これより古い興津式相当の可能性はある。
 (武田 修)



第214図 ピット1419平面図



第215図 ピット1419遺体上(1~27)出土石器・石製装身具

ピ ッ ト 1426

遺 構 (第220図)

本ピットは A74, B74グリッドに位置する。規模は直径約1.23mのほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から21cmを測る。

ピット埋土のうち上層部分は冠水により堆積した粒子の細かい砂が混入している。

遺存体はわずかにピット中央に粘性を帯びた暗赤褐色土が残るのみで頭位方向は不明である。ベンガラは検出されていない。

遺 物 (第222図-11, 図版74-8)

第222図-11は遺体上から出土した黒曜石製の削器。 (熊木美野里)

ピ ッ ト 1427

遺 構 (第220図)

本ピットは A75グリッドに位置する。規模は直径約1.28mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から26cm、断面はレンズ状である。埋土の暗茶褐色砂には炭化物が多く含まれる。

遺 物 (第217図-7・8, 第222図-12・13, 図版74-9・10)

第217図-7は内外ともに縄線文が多用される。8は菱形の隆帯が施される。7・8は宇津内系と思われる。

第222図-12は無茎石鏃, 13は削器。2点とも黒曜石製である。 (熊木美野里)

ピ ッ ト 1428

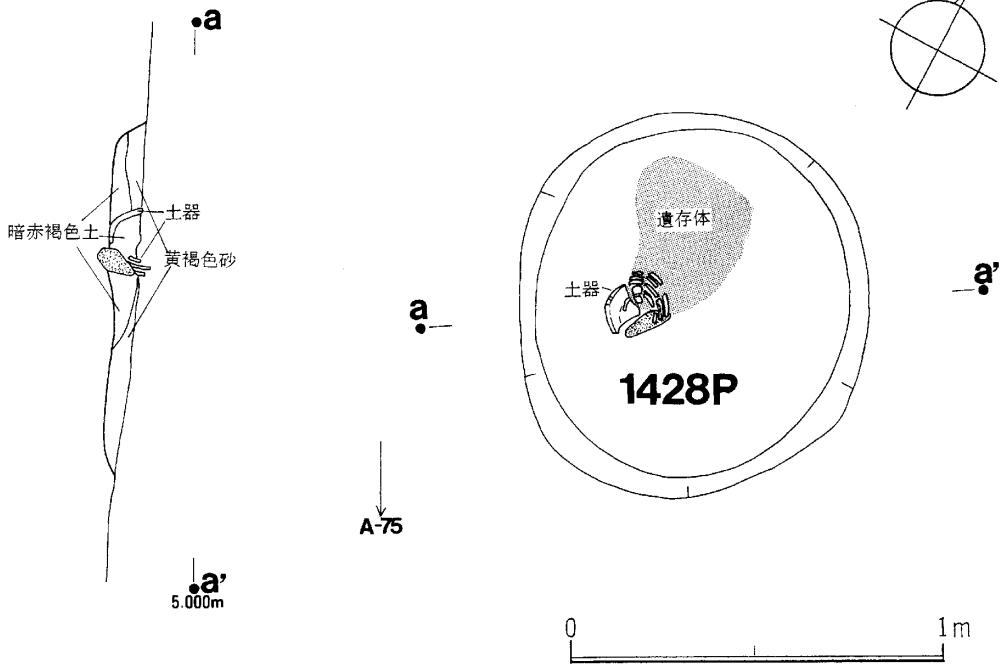
遺 構 (第216図)

本ピットは A74グリッドに位置する。規模は長軸約1.01m、短軸約0.93mの楕円形で、壁高は確認面から8cmを測る。

検出時にはすでに墓壇中央に土器と粘性を帯びた暗赤褐色土が露出しており、ほぼ床面の状態であった。土器は口縁部から頸部を欠き、胴部から底部のみで、暗赤褐色土にめり込んでいる。内部にも暗赤褐色土が堆積していた。

遺 物 (第217図-9, 図版74-11)

第217図-9は胴部が張り出し、口縁部が縮約する壺型土器と思われる。胴上部に半載状施文具による刺突文が施される。興津式相当であろう。 (熊木美野里)



第216図 ピット1428平面図

ピット 1429

遺構 (第220図)

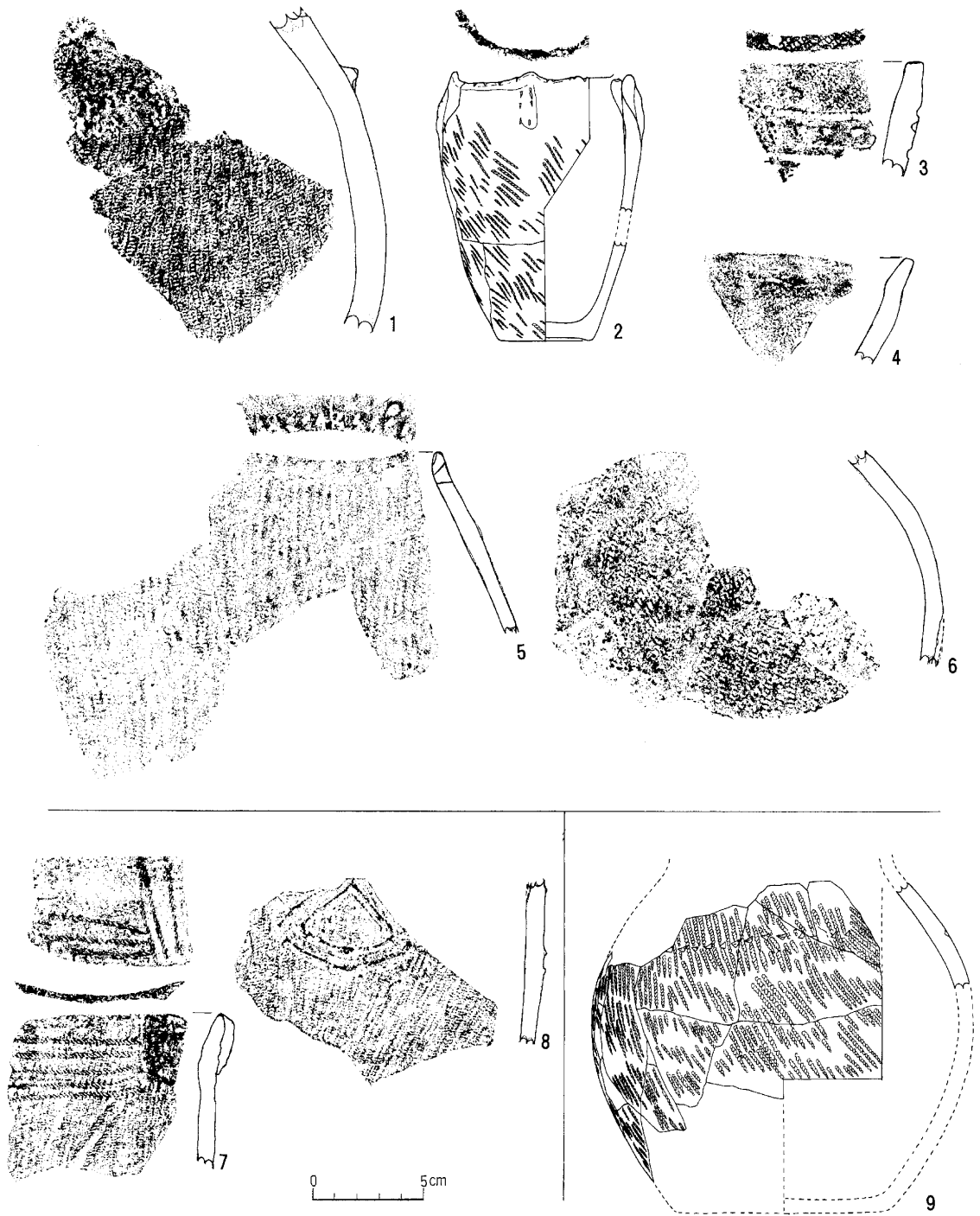
本ピットはA74グリッドに位置する。規模は直径約1.35mのほぼ円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高は確認面から24cmを測る。

ピット埋土のうち東側1/3が床面まで攪乱である。遺存体は西側に暗赤褐色土を検出したが、頭位方向は不明である。(熊木美野里)

ピット 1430

遺構 (第220図)

本ピットはA74グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.09mの不整楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は確認面から26cmを測る。黒曜石のフレーク1点が遺体下から出土している。(熊木美野里)



第217図 ビット1410遺体上(1~6)、1427埋土(7・8)、1428埋土(9)出土土器

ピット 1431

遺構 (第218図)

本ピットはA77グリッドに位置する。規模は長軸約1.54m、短軸約1.42mの不整楕円形で、壁高は確認面から50cmを測る。

遺存体の残りはよく、二体合葬ということがわかる。頭位は二体とも南である。

遺物の出土状況は、東側と西側で異なっている。完形土器は出土していないが、図示した土器は遺存体の頭部からの盛り上がりによって検出した土器片である。これは埋葬時に意図的に置かれたものと推察することが出来る。西側の遺体から琥珀玉が単体で出土しているが、出土数の半分は遺体上面から、半分は床面から出土している。このほかにピット中央付近の床面から黒曜石製の石鏃が4本、先端部を南に向けて出土している。

床面からは東側と西側それぞれ3箇所、直径5cm前後の柱穴が検出されている。深さは10～15cmで、東側のほうがやや浅めである。

遺物 (第219図, 第222図14～24, 図版75-1～19)

第219図-1は口径約16.5cm、器高推定27cmの深鉢土器。ほぼ直立した口縁部に9条に及ぶ縄線文が多用され、有段化した胴上部には縄端圧痕文が施される。有段部に楕円形の貼付文をもち、擬縄隆帯が垂下する。残存部から判断すると他の部位にも貼付文があり、それぞれ連結すると思われる。宇津内Ⅱa式と思われる。2は大半が欠失するが、器高約10cmの小型土器。口縁部は縄線文が多用され、突瘤文が施される。小突起下部に吊り耳をもち、擬縄隆帯が垂下する。3は口縁部の大半が欠失するものの器高約31.5cmの大型鉢形土器。大きな吊り耳をもち「V」字状の縄端圧痕文が横方向に派生する。垂直に立ち上がった口縁部に縄線文が多用される点など1の土器と類似する。4は宇津内系、5～8は縄文晩期であろう。

石器は第222図-14～20が遺体上出土の無茎石鏃。21も遺存体上から出土した8点の琥珀製平玉の1点である。22は埋土出土の無茎石鏃、23は搔器。24は遺体上出土の削器。石器は全て黒曜石製である。

小括

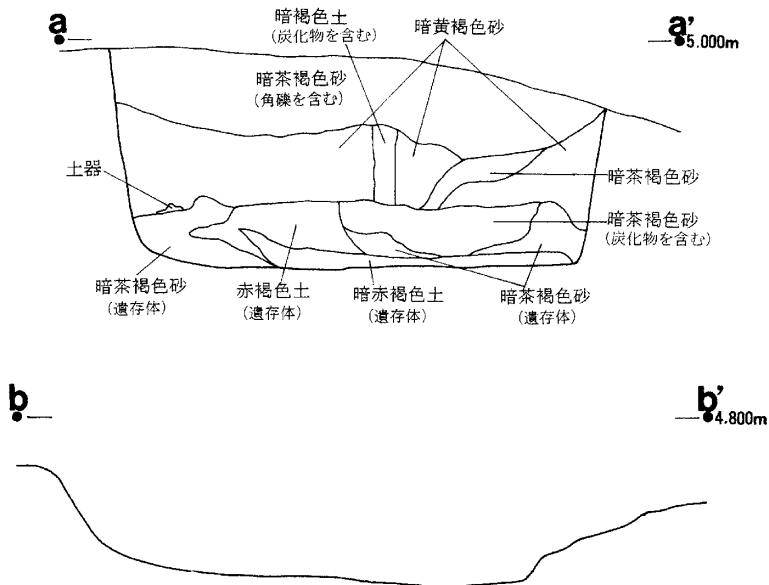
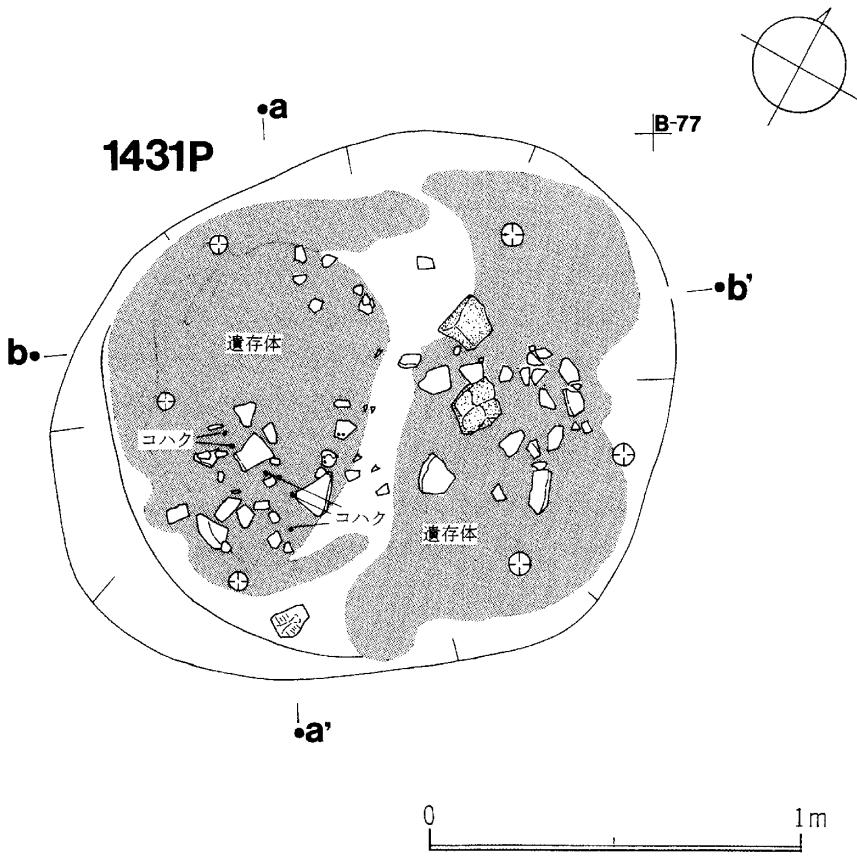
本ピットは南頭位の二体合葬の土壌墓である。時期は続縄文宇津内Ⅱa式と思われる。

(熊木美野里)

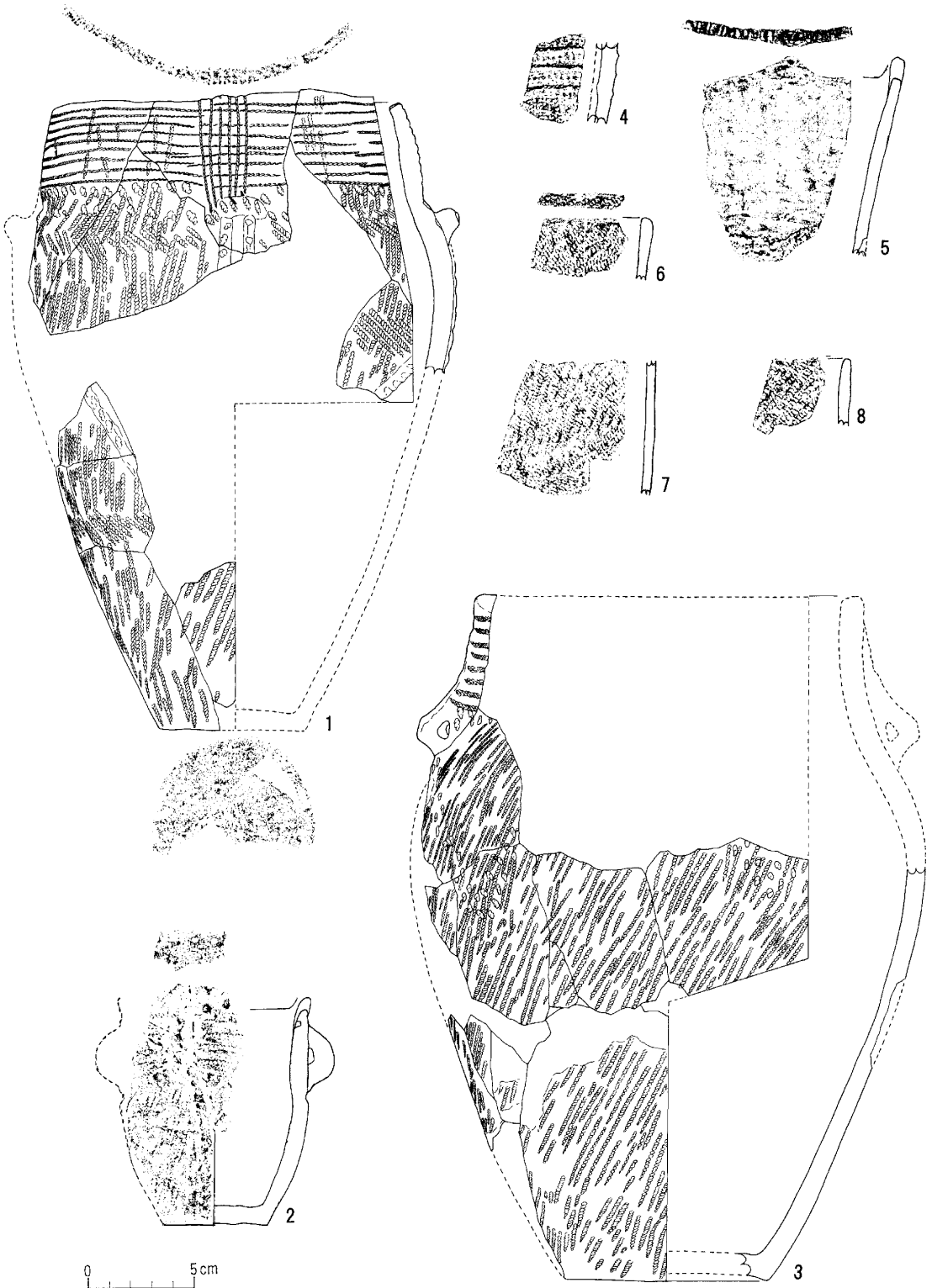
ピット 1432

遺構 (第220図)

本ピットはA77グリッドに位置する。北東壁がピット1431に切られているが、規模は直径1.10mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から44cmを測る。



第218図 ピット1431平面図



第219図 ピット1431遺体上(1~6)・埋土(7・8)出土土器

遺物 (第223図-1)

第223図-1は埋土出土の宇津内Ⅱb式。

(熊木美野里)

ピット 1433

遺構 (第220図)

本ピットはA77グリッドに位置する。上場の東部分1/3がピット1434に切られているが直径約1.00mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から22cmを測る。

埋土は炭化材が多く含まれ、長さ22cmの半分を被熱した砂岩礫が1個出土している。焼土は含まれていない。

(熊木美野里)

ピット 1434

遺構 (第220図)

本ピットはA77グリッドに位置する。規模は不明である。壁高は確認面から38cmを測る。

遺物 (第223図-2・3, 第222図-25・26, 図版75-20・21)

第223図-2は補修口をもち、3は横走沈線文が施される。2点とも縄文晩期であろう。

第222図-25は両面加工ナイフ、26は削器。2点とも黒曜石製。

(熊木美野里)

ピット 1435

遺構 (第220図)

本ピットはA77グリッドに位置する。規模は直径約0.48mの円形で、壁高は確認面から20cmを測る。

(熊木美野里)

ピット 1436

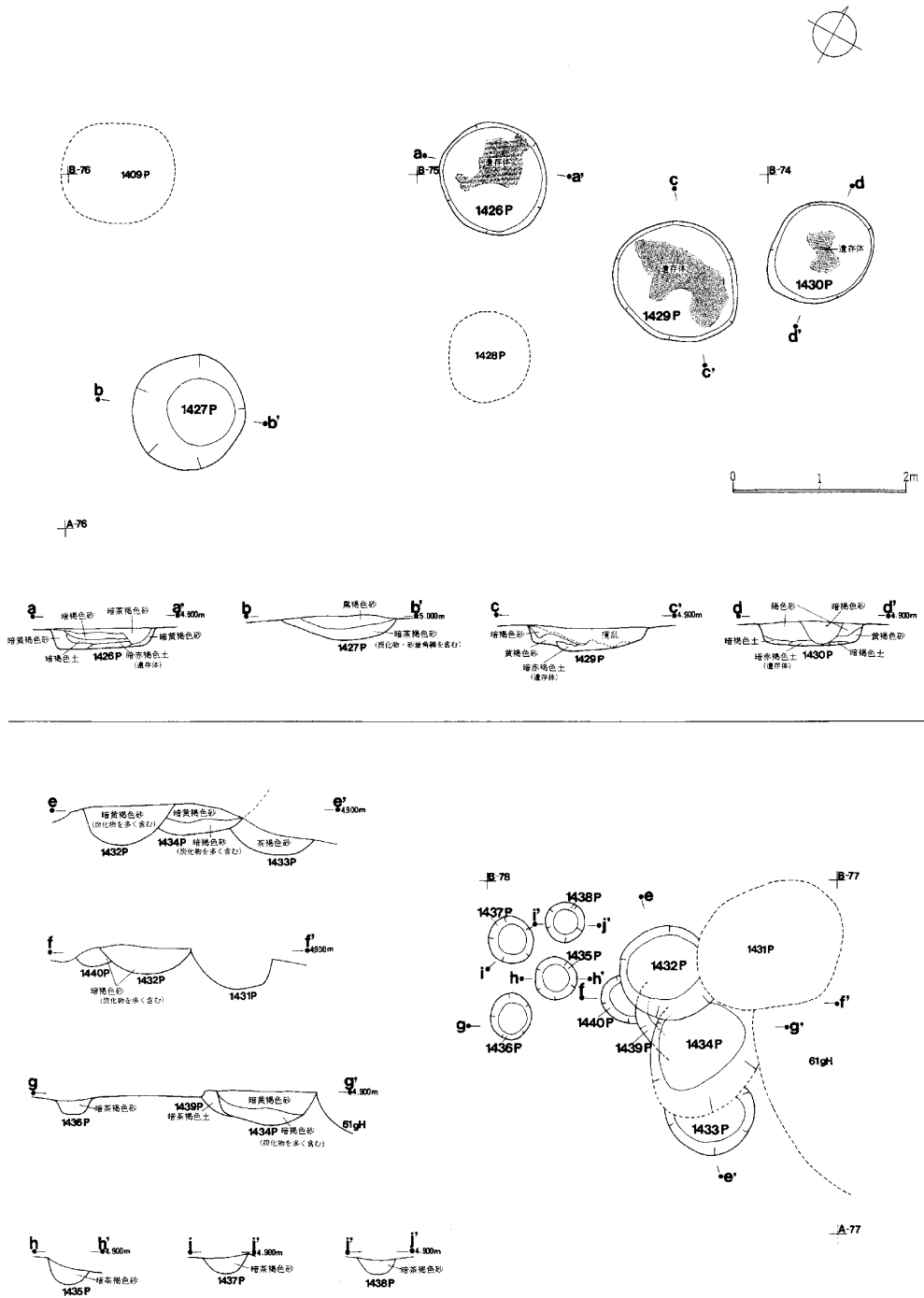
遺構 (第220図)

本ピットはA77グリッドに位置する。規模は長軸約0.52m、短軸約0.46mの楕円形で、壁高は確認面から16cmを測る。

遺物 (第223図-4)

第223図-4は続縄文の胴部片。

(熊木美野里)



第220図 ピット1426、1427、1429、1430、1432、1433、1434、1435、1436、1437、1438、1439、1440平面図

ピ ッ ト 1437

遺 構 (第220図)

本ピットは A77 グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形で、壁高は確認面から18cmを測る。
(熊木美野里)

ピ ッ ト 1438

遺 構 (第220図)

本ピットは A77 グリッドに位置する。規模は直径約0.44mの円形で、壁高は確認面から16cmを測る。埋土は赤味をおびた暗茶褐色砂。
(熊木美野里)

ピ ッ ト 1439

遺 構 (第220図)

本ピットは A77 グリッドに位置する。北西側をピット1432に、東側をピット1434に切られているため規模は不明である。壁高は確認面から24cmを測る。

遺 物 (第223図-5~9)

第223図-5は口縁下部に「ハ」字状と横位の列点文を施し、胴部は縦走縄文となる。後北系であろう。6・7は宇津内Ⅱb式。8は同Ⅱa式。9は縄文晩期。
(熊木美野里)

ピ ッ ト 1440

遺 構 (第220図)

本ピットは A77 グリッドに位置する。北東側はピット1432に切られている。規模は直径約0.56m、壁高は確認面から12cmを測る。

遺 物 (第223図-10)

第223図-10は埋土出土の宇津内Ⅱb式。
(熊木美野里)

ピ ッ ト 1441

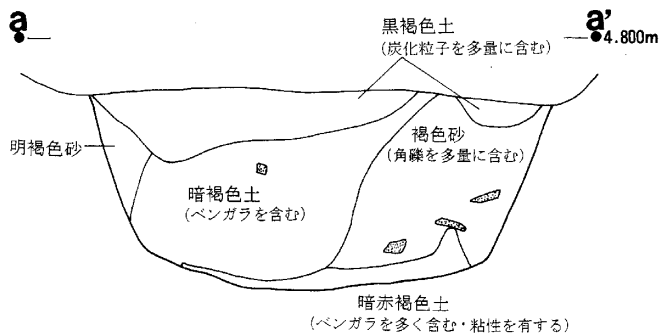
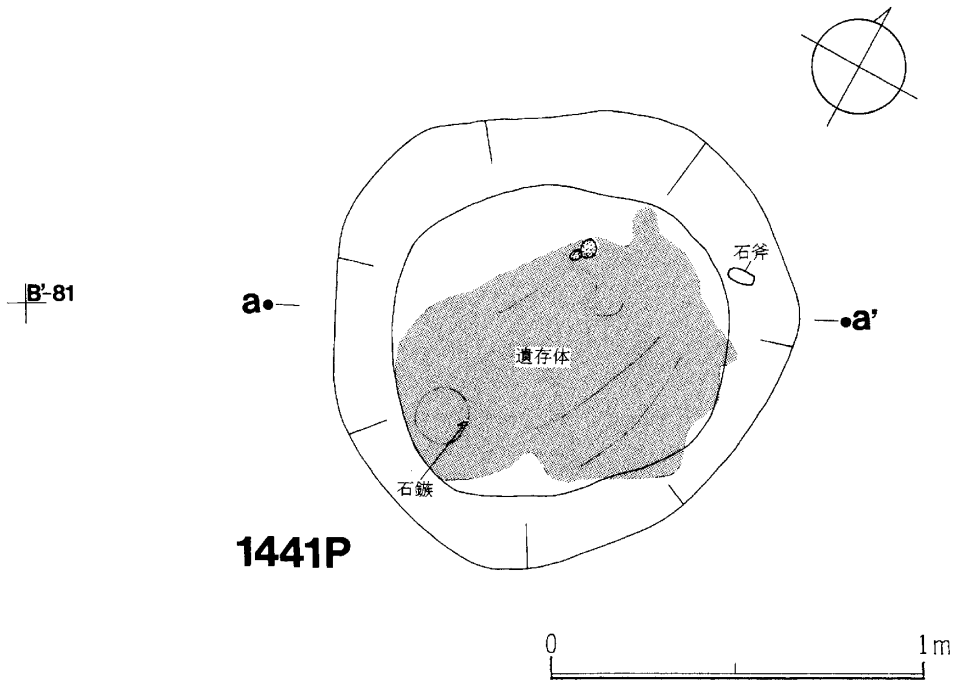
遺 構 (第221図)

本ピットは B'80, C'80 グリッドにまたがって位置する。規模は直径約1.30mの不整形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約45cmである。

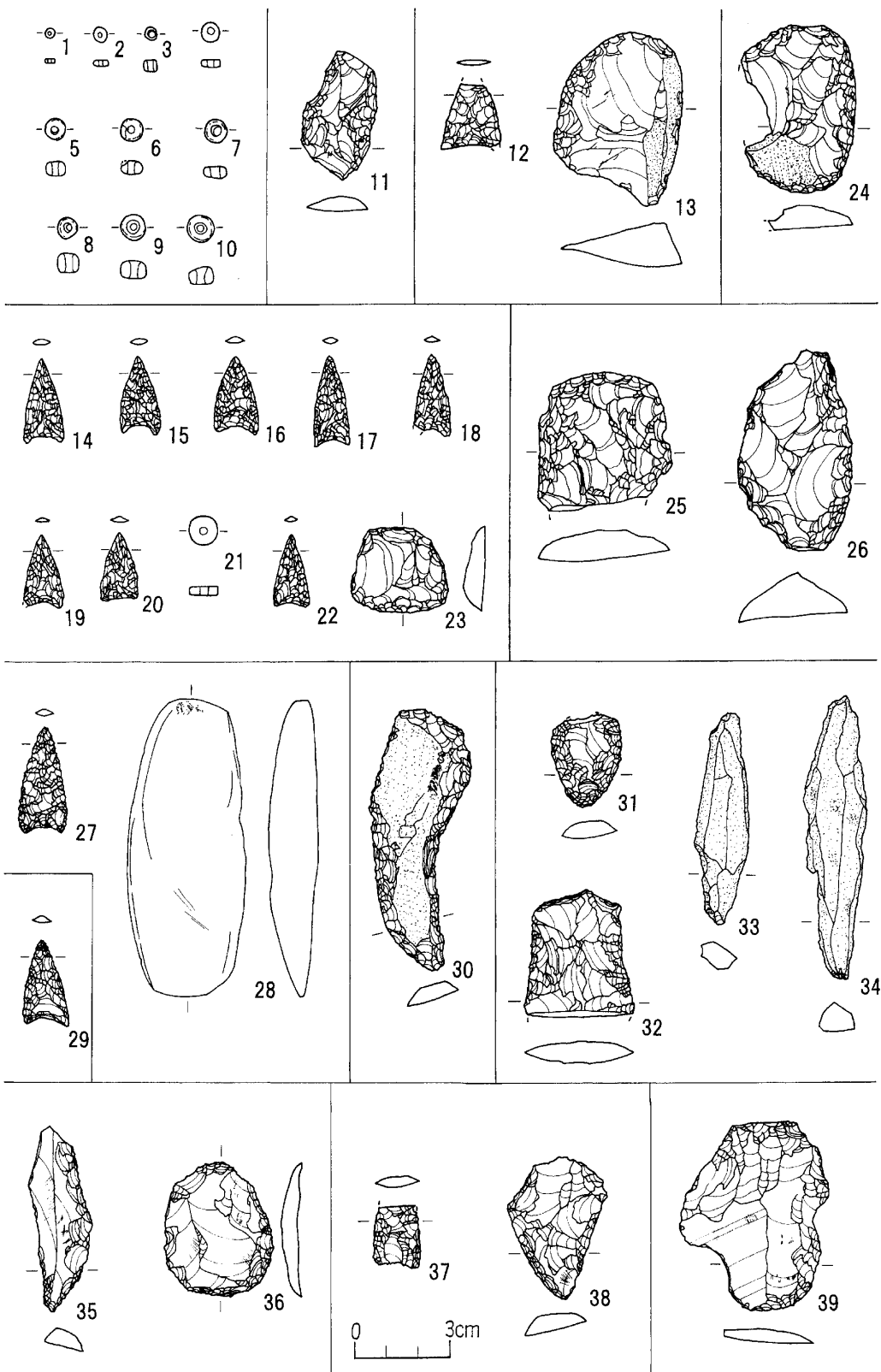
埋土にはベンガラを含む暗褐色土と褐色砂が大半を占め、堆積している。床面の遺存体は粘性を有した暗赤褐色土であり、ベンガラが多量に散布されている。頭部と思われる膨らみは南壁側にある。

遺物 (第223図-11~13, 第222図-27・28, 図版75-22・23)

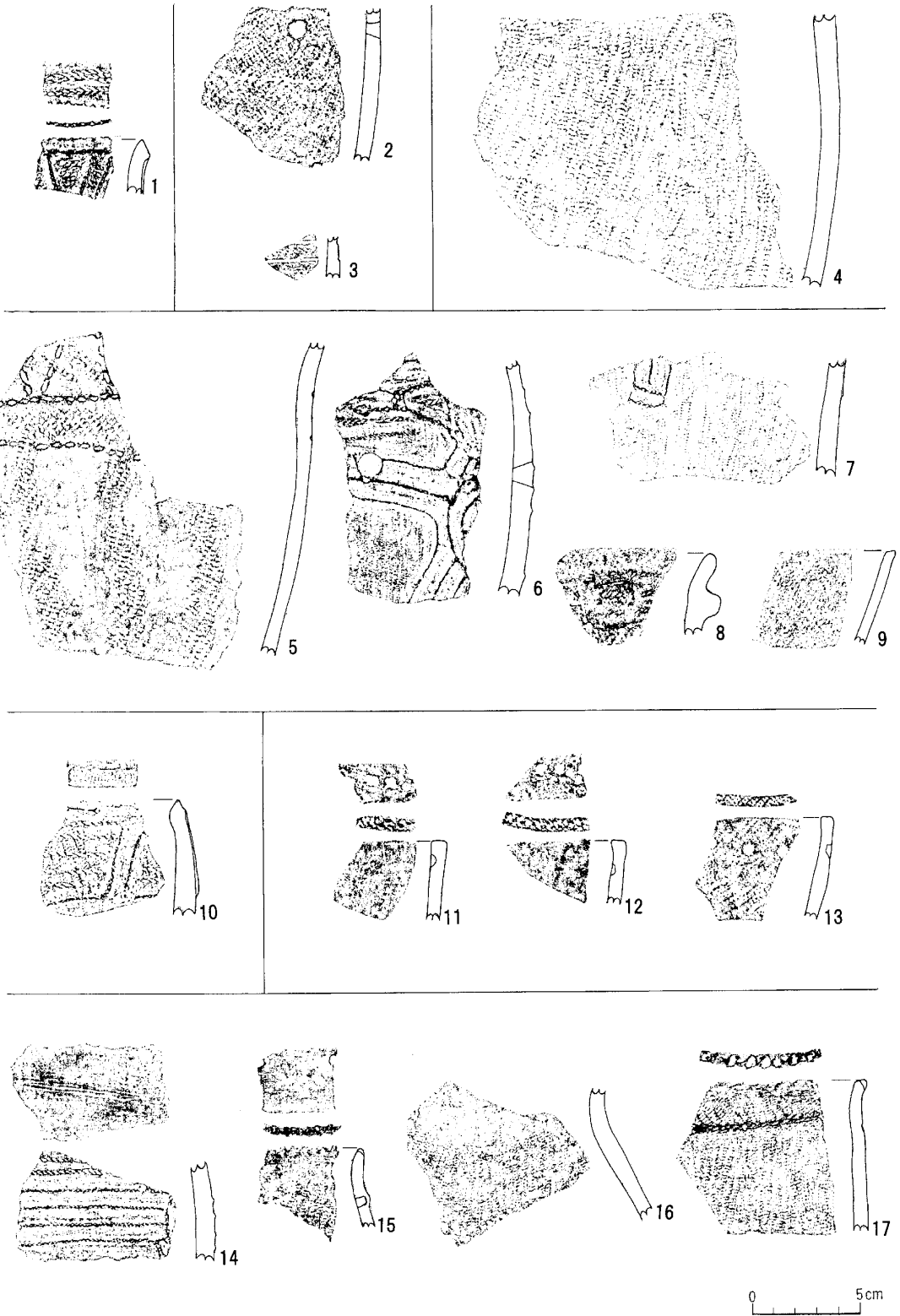
第223図-11は器面に刺突文、12・13は無文であるが、裏面に刺突文が施される。3点とも縄文晩期であろう。



第221図 ピット1441平面図



第222図 ビット1418床面(1~10)、1426遺体上(11)、1427埋土(12・13)、1431遺体上(14~21・24)・埋土(22・23)、1434埋土(25・26)、1441床面(27)・埋土(28)、1456埋土(29)、1458埋土(30)、1458a埋土(31~34)、1459埋土(35・36)、1460埋土(37・38)、1460b埋土(39)出土石器・琥珀玉



第223図 ピット1432埋土(1)、1434埋土(2・3)、1436埋土(4)、1439埋土(5~9)、
1440埋土(10)、1441埋土(11~13)、1453埋土(14~17)出土土器

第222図-27は無茎石鏃。28は片刃磨製石斧。27は黒曜石製、28は緑色泥岩製。

(武田 修)

ピ ッ ト 1452

遺 構 (第224図)

本ピットはE82グリッドに位置する。規模は南壁が攪乱を受けているものの直径約0.90mの円形を呈すると思われる。高さは確認面から20cmを測る。

(武田 修)

ピ ッ ト 1453

遺 構 (第224図)

本ピットはE83グリッドに位置する。Ⅱ層茶褐色砂の上面にある長軸約0.85m、短軸約0.40mの楕円形の焼土を切りこんで構築されている。床面の幅は約0.19m、上部は約0.78mと幅広であるが、セクションをみると床面から炭化材を含む暗褐色砂が立ち上がり、柱穴痕の可能性がある。幅広の部分にみられる暗褐色砂と黒色砂は固定するために埋め込まれた様に見受けられる。深さは確認面から約40cmである。

本ピットの周辺には径約6～10cm前後、最大でも20cmの柱穴15本が取り囲んでいる。深さは10～28cmであり、15cm以上の深いものが目立つ。比較的太い本ピットはこれらの柱穴と関連する可能性がある。

詳細な時期、用途・機能は不明である。

遺 物 (第223図14-17)

第223図-14は宇津内Ⅱb式。15は宇津内Ⅱa式。16は無文の口縁部が外反するもので、興津式相当であろう。17は縦走縄文を地文に縄線文が一条施される。続縄文初頭と思われる。

(武田 修)

ピ ッ ト 1454

遺 構 (第224図)

本ピットはF82グリッドに位置する。北壁・西壁と東壁の一部が攪乱を受けているため遺存は悪い。残存部から判断して楕円形を呈するようである。短軸は約0.86mである。壁の掘り込みは浅く、高さは確認面から約15cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1455

遺構 (第224図)

本ピットはE82グリッドに位置する。先に報告した統縄文期の竪穴である143号竪穴の埋土上部から発見されていたものである。北壁側が僅かに攪乱を受けるものの、規模は長軸約0.64m、短軸約0.50mの楕円形である。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約14cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 1456

遺構 (第224図)

本ピットはE82・83グリッドにまたがって位置する。壁や床面まで及んでいないが内部は攪乱を受けている。規模は直径約0.45mの円形である。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約12cmである。床面に径約10cm前後の円礫3点と埋土から石鏃1本が出土している。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第222図-29, 図版75-24)

埋土から出土した無茎石鏃。黒曜石製である。

(武田 修)

ピット 1457

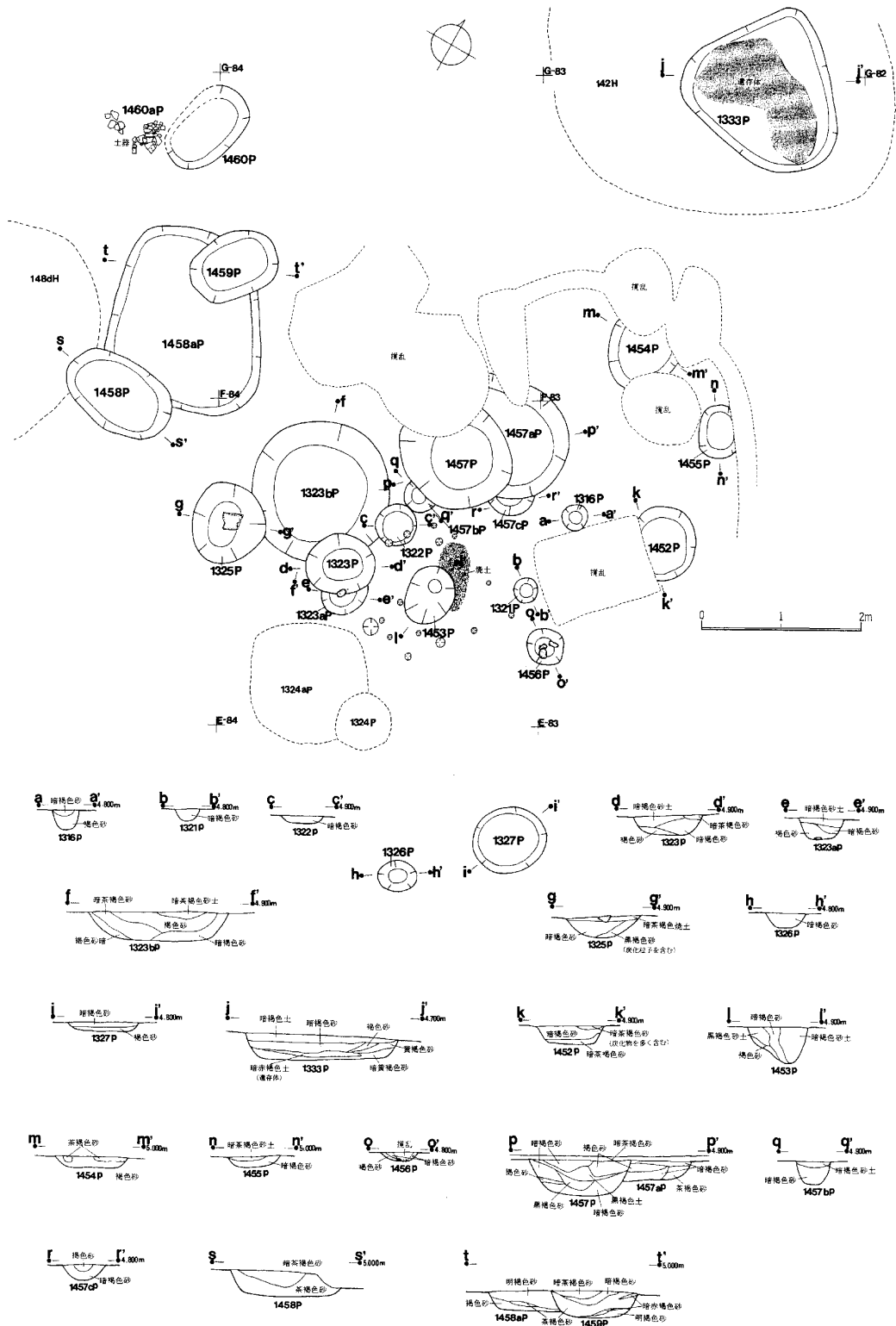
遺構 (第224図)

本ピットはE83グリッドに位置する。このグリッドの周辺では宇津内Ⅱb式を包含する層厚約3～4cmの暗茶褐色砂が堆積しており、ピット1457、1457aなどはこの層を剥土した段階で検出した。西壁側が攪乱を受けるものの、規模は直径約1.30mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。埋土は各層に分層されるが、いずれも炭化物が混入する。

遺物 (第225図-1～5)

全て埋土出土である。第225図-1・2は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。3も突瘤文をもつが、7条もの横位の沈線文があり、部分的に円形刺突文が加わる。元町2式である。4は口唇部の外側に縄端圧痕文、口縁部に3条の縄線文をもち、器面は緩い原体を用いた斜縄文が施される。縄文晩期中葉であろう。5も縄文晩期の胴部片と思われる。

(武田 修)



第224図 ピット1316、1321、1322、1323、1323a、1323b、1325、1326、1327、1333、1452、1453、1454、1455、1456、1457、1457a、1457b、1457c、1458、1458a、1459、1460、1460a 平面図

ピット 1457a・1457b・1457c

遺構 (第224図)

ピット1457aはピット1457に南壁を削られ、西壁は攪乱を受けているため遺存は悪い。形態は残存部から判断して楕円形を呈すると思われる。短軸は約1.40mである。埋土には少量の炭化物を混入する。壁高は確認面から約20cmである。

ピット1457bはピット1457に北壁を切られるものの、直径約0.40mの小円形を呈すると思われる。壁高は確認面から28cmを測る。

ピット1457cはピット1457・1457aに大部分を切られる。南東壁の一部だけ検出できたものの全体の規模・形態は不明である。(武田 修)

ピット 1458

遺構 (第224図)

本ピットはE84、F84グリッドにまたがって位置する。148d号堅穴に西壁端部を切られるものの規模は長軸約1.38m、短軸約0.87mの楕円形である。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第225図-6~8, 第222図-30, 図版76-1)

3点とも埋土出土である。第225図-6・7は統縄文後北C₂・D式。8は口唇部の外側に刻みが施され、器面は上部が斜縄文、胴部が縦走縄文となる。統縄文初頭であろう。

石器は第222図-30は先端部が尖り、右側縁部が弧状の刃部をもつ削器。黒曜石製である。

(武田 修)

ピット 1458a

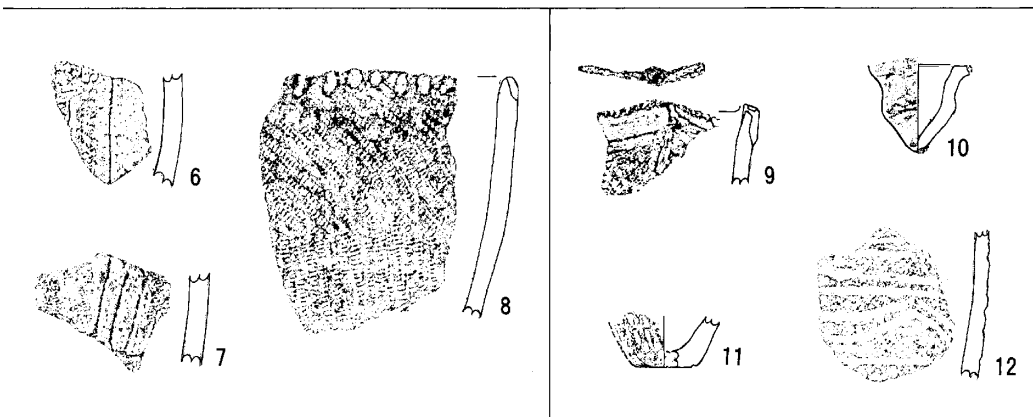
遺構 (第224図)

本ピットはF83・84グリッドに位置し、ピット1458に東南端部、ピット1459に北西端部を切られている。規模は長軸約2.24m、短軸約1.84mの不整形である。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約22cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第225図-9~12, 第222図-31~34, 図版76-2~5)

全て埋土出土である。第225図-9は統縄文後北C₂・D式。10は口径約3.8cm、器高約3.7cmの底部尖底のミニチュア土器。口縁部が外反するものの、口唇部は幅広く、平坦である。胎



第225図 ビット1457埋土(1~5)、1458埋土(6~8)、1458a埋土(9~12)、1459埋土(13~15)出土土器

土は砂粒を多量に混入するもので、12に類似する。11も無文のミニチュア土器。12は幅2mm程度の施文具と半載状施文具の二種類を用いて、横位と山形沈線文を施す。続縄文初頭フシココタン下層式相当であろう。

石器は第222図-31は片面加工ナイフ。主要剥離面側は縁辺部のみ細かな加工が施される。32は両面加工ナイフの柄部。33・34は棒状原石。全て黒曜石製である。(武田 修)

ピット 1459

遺構 (第224図)

本ピットはF83・84グリッドに位置する。ピット1458aの北西端部の床面を約5cm切り込んで構築されており、規模は長軸約1.14m、短軸約0.76mの楕円形を呈する。北壁側がほぼ垂直に立ち上がるが、他の壁は開き気味である。高さは確認面から約28cmである。床面よりやや浮いて堆積する暗赤褐色砂は遺存体ではないが、砂を焼いたものであり、ベンガラの効果をもたせたのであろう。形態的な特徴からも本ピットは土壙墓と考えられるが、詳細な時期は不明である。

遺物 (第225図-13~15, 第222図-35・36, 図版76-6・7)

全て埋土出土である。第225図-13・14は続縄文後北C₂・D式。15は宇津内Ⅱb式である。石器は第222図-35・36は削器。35は横長剥片を素材とする。2点とも黒曜石製である。

(武田 修)

ピット 1460

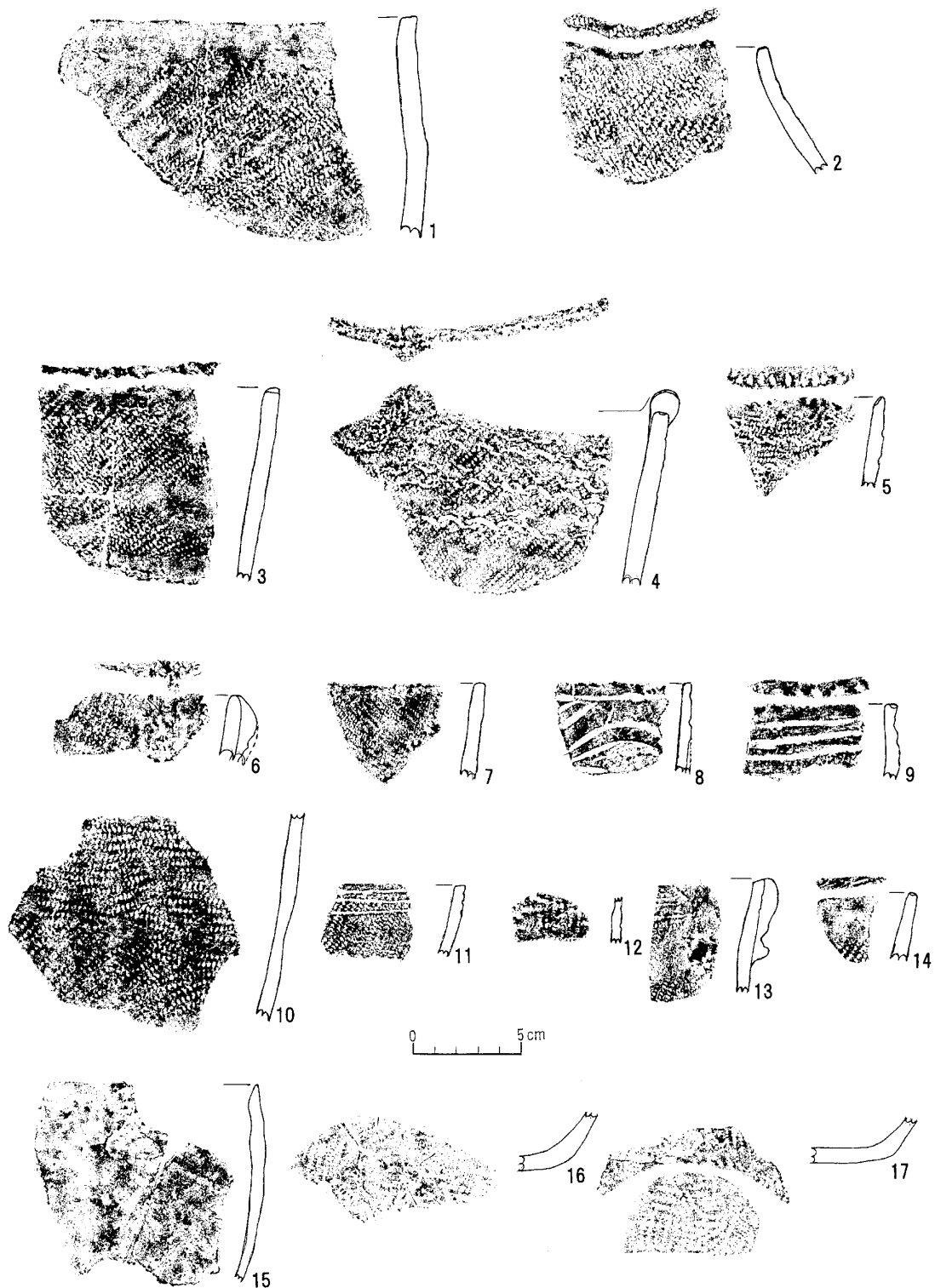
遺構 (第224図)

本ピットはF83・84グリッドにまたがって位置する。調査途中の段階で集中豪雨による冠水を受け、西壁を中心に破壊された。作図も途中であり正確な規模は不明であるが、残存部から判断して長軸約1.10m、短軸約0.70mの楕円形と思われる。壁は確認面から約50cm掘り下げた。埋土はベンガラの堆積が確認されているため墓壙の可能性がある。

遺物 (第226図, 第222図-37・38, 図版76-8・9)

全て埋土出土である。第226図-5・10が横位縄文、15が無文の他は斜位縄文を地文とする。1・14の口縁部は無文を呈し、2は内屈する。4は6条の綾線文が施される。8・9は太目の沈線文、11・13は細い沈線文が施される。16・17は丸みをもった底部。4は縄文晩期後葉の緑ヶ岡式、8・9はフシココタン下層式相当と思われる。他の資料も縄文晩期から続縄文初頭であろう。

石器は第222図-37は無茎石鏃。38は削器。2点とも黒曜石製。(武田 修)



第226図 ピット1460埋土(1~17)出土土器



第227図 ピット1460a 埋土(1)出土土器

ピ ッ ト 1460a・1460b

遺 構 (第224図)

ピット1460a・1460bはピット1460の上面精査中に発見していたものであるが、調査途中の段階で集中豪雨による冠水のためほとんどが破壊された。したがって規模・形態等は全く不明である。図示した遺物は上部からの出土であり、ピットに伴うものか不明である。

遺 物 (第227図, 第222図-39, 図版76-10)

第227図-1はピット1460aの上部から出土した。口縁部は底部まで3分の1ほど復元できたもので、口径約30cm、器高約45cmの大型深鉢である。器面は縦走縄文を地文に口縁直下には弧線状の沈線文が交互に施される。続縄文初頭フシコタン下層式に相当する。

石器はピット1460bからは第222図-39の削器が出土している。黒曜石製である。

(武田 修)

ピ ッ ト 1461

遺 構 (第174図)

本ピットはB'85グリッドに位置する。2001年の集中豪雨による冠水のためピット上部の大部分が削られ、土器が露呈した状態であり、かろうじて形態と遺存体を検出できた。規模は長軸約1.07m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁は残存部の高さが約10cmである。

遺存体は中央部よりやや西側にあり黄褐色土を呈する。

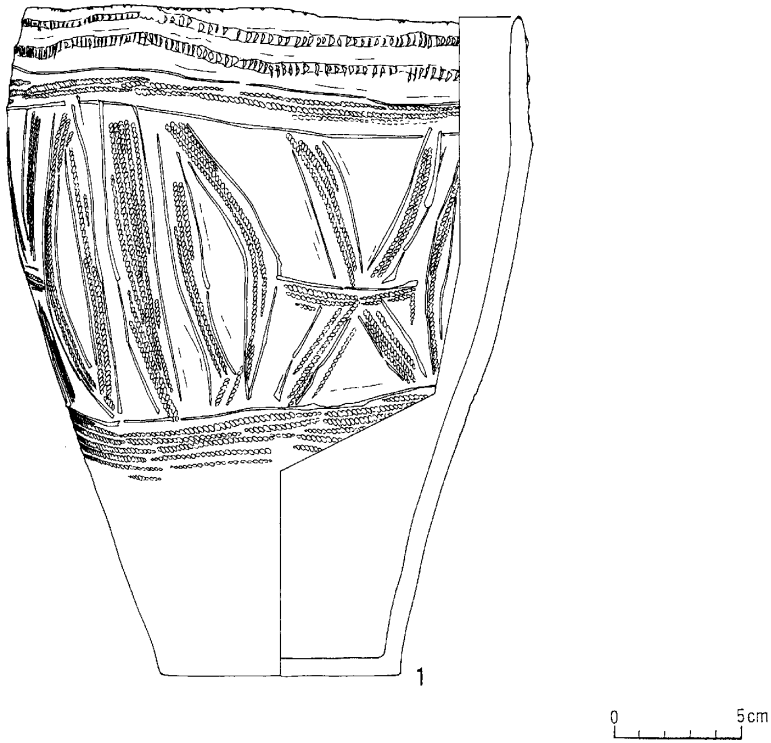
遺 物 (第228図, 図版76-11)

この土器は東壁端部の床面にある径約12cm、深さ約5cmの小ピットに底部が納まり、口縁部を遺存体側に向けた状態で出土した。口径約19cm、器高約27cmの大型鉢形土器である。上下二本の帯縄文間に縦方向の弧線状と横方向の短い弧線状の帯縄文が施される。続縄文後北C₂・D式である。

小 括

本ピットは続縄文後北C₂・D式の土壌墓である。東壁側に土器が副葬されており、これまでの調査事例から東頭位と判断できる。

(武田 修)



第228図 ピット1461床面(1)出土土器

第Ⅵ章 まとめ

1. アイヌ文化期

本時期の遺構は擦文期の竪穴である159号竪穴の埋土内に堆積する1739年降灰の樽前 a 火山灰の上層から検出した。焼土には動物骨、貝類、植物遺存体などが含まれ、送り場と考えられる。また、樽前 a 火山灰直下の小ピットにはヒトの下顎骨がみられ、時期差が明らかになった。

アイヌ墓と思われるのは擦文期の177号竪穴を僅かに切り込んでいるピット1314がある。遺物は出土していないが長方形の形態からこの時期の可能性がある。

2. 擦文文化期

本時期の竪穴は159号、160号、161号、162号、163号、165号、166号、167号、168号、169号、170号、176号、177号、178号、179号、180号の16軒である。遺物が出土していない竪穴もあるが、時期は宇田川編年後期に比定すると思われる。

炭化材がみられ焼失住居と考えられるのは159号、160号、161号、167号、170号、176号、177号、180号の8軒である。特に177号竪穴の炭化材は支柱穴を基点として東西方向に並列され、南壁と北東壁隅からは中央部に向かって放射状に配置されるなど、これまでの焼失住居とやや異なっている。

擦文期で特筆されることは168号竪穴のカマド内と床面からトビニタイⅠ群が出土したことである。このことは明らかに擦文文化とトビニタイ文化の接触を物語るものであり、同居の可能性も推測される。斜里町オタモイ1遺跡や須藤遺跡の土器について「搬入された擦文土器」「模作された擦文土器」という大井晴男氏の指摘や、本遺跡の石囲み炉をもつ46号竪穴、カマドをもつ東壁側が鋭角化した101号竪穴などトビニタイ文化の影響を思わせる竪穴など変容した様相がみられる。このことはトビニタイ文化圏から離れたこの地域の特殊性によるものか今後、土器形式・文様、胎土分析などから検討が必要であろう。

また、ピット1271は西頭位の伸展葬である。本遺跡ではオホーツク文化15号竪穴内に構築された5基のピットが楕円形の形態をもつもので伸展葬が考えられる。アイヌ期と擦文期以外の時期に細長い楕円形のピットはみられない。形態的にはアイヌ墓よりも擦文墓に近く、遺物は出土していないものの擦文期の可能性がある。

3. 続縄文期

本時期と思われる堅穴は21軒調査したが大部分の時期は不明である。時期が明確なのは後北 C₁ 式が172号。後北 C₂・D よりやや古手と思われるのが167b号。宇津内Ⅱb 式は166a号、172a号、172c号、173号。宇津内系と思われるのが172b号、175a号。

フシココタン下層式や興津式など続縄文初頭に位置づけられるのが172e号、172f号。時期が不明なのは161a号、161b号、164号、166b号、167a号、167c号、167d号、171号、174号、175号、175b号の11軒である。

本時期の堅穴で特筆されるのは続縄文初頭に位置づけられるのが172e号、172f号である。中でも床面の全域から炭化材が検出された172e号は舌状の張り出しをもつ。材料は樹木の他に茅、樹皮を用い、重厚に構築されており、続縄文初頭の堅穴建築を解明する上で重要な情報を得ることができた。

墓は不明の時期も多いが、続縄文各期にわたっている。時期が明確なのは後北 C₂・D 式が1229号、1233号、1247号、1278号、1461号の5基。全て東頭位であり。頭部に接して土器を正立の状態に副葬している。後北 C₁ 式は1350号、1351号、1353号。1350号は床面に小柱穴をもち、3基とも頭部に接して土器が副葬されている。頭位は南頭位であるが、土器の副葬位置が後続する後北 C₂・D 式に類似する。

宇津内Ⅱb 式は1219号、1282a号、1403号、1407号、1408号。1407号は土器が出土していないが1408号と近接し、方向も同一であることからこの時期の可能性が高い。この時期には少ない琥珀製の平玉が連なる状態で出土している。下田ノ沢Ⅱ式は1404a号がある。

続縄文宇津内Ⅱa 式と思われるのは1206号、1276号、1313号、1324a号、1332号、1405号、1431号。1313号からは琥珀玉が連なった状態で出土している。1405号は小柱穴をもち、大小5点の土器のほか、石器も多くみられる。フシココタン下層式相当は1209号、1328号、1418号。1209号は床面に小柱穴をもち、3点の土器をもつ。1418号も小柱穴をもち3点の土器と琥珀製の平玉がみられる。興津式相当は1272号、1281号、1333号、1419号。

詳細な時期は不明であるが宇津内Ⅱa 式、フシココタン下層式相当、興津式相当など続縄文初頭と思われるのは1210号、1232号、1233a号、1249号、1251号、1270号、1402号、1404号、1406号、1409号。1405号は宇津内Ⅱa 式から興津式に相当。1210号は遺存体の中央部に石剣が副葬されている。琥珀玉は1249号、1270号、1272号、1276号、1431号から出土している。

これまでの報告と同様であるが続縄文期の墓は初頭から後葉まで各期にわたっており、墓域を含めた集落との関係性、埋葬頭位の変化などの解明が期待される。

4. 縄文期

縄文期の住居は晩期と思われるものに167e号がある。墓は後葉の幣舞式が1225号、晩期中葉が1252号と思われる。

常呂川河口遺跡発掘調査報告書は今回の上梓で7巻目となる。発掘調査に15年間に要し、その後も遺物整理を継続してきた。長期間の発掘調査と遺物整理には東京大学名誉教授藤本強、宇田川洋、北海道教育委員会種市幸生氏をはじめ多くの方々からご指導、助言を賜りました。記して感謝の意を表する幸いです。 (武田 修)

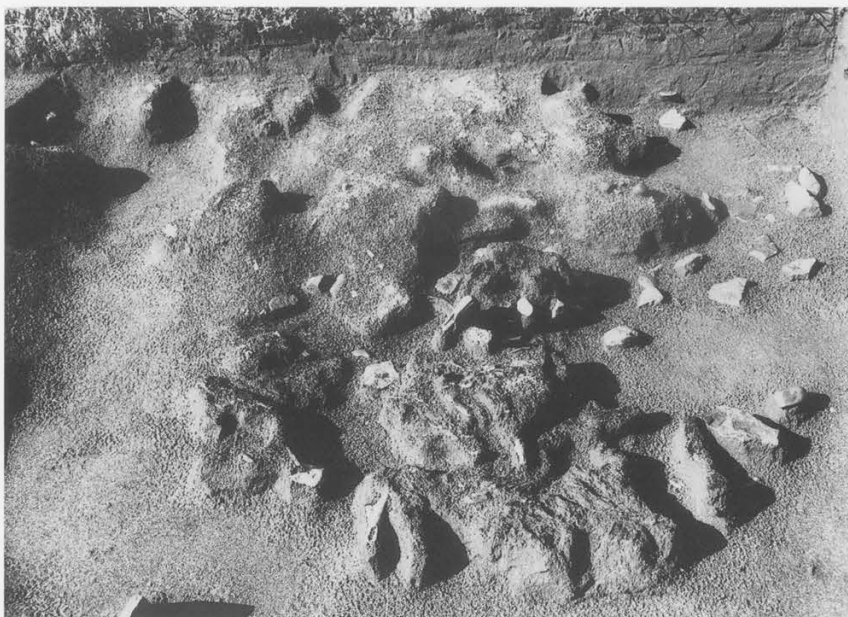
圖 版



1. 159号竪穴



2. 159号竪穴埋土内の送り場断面



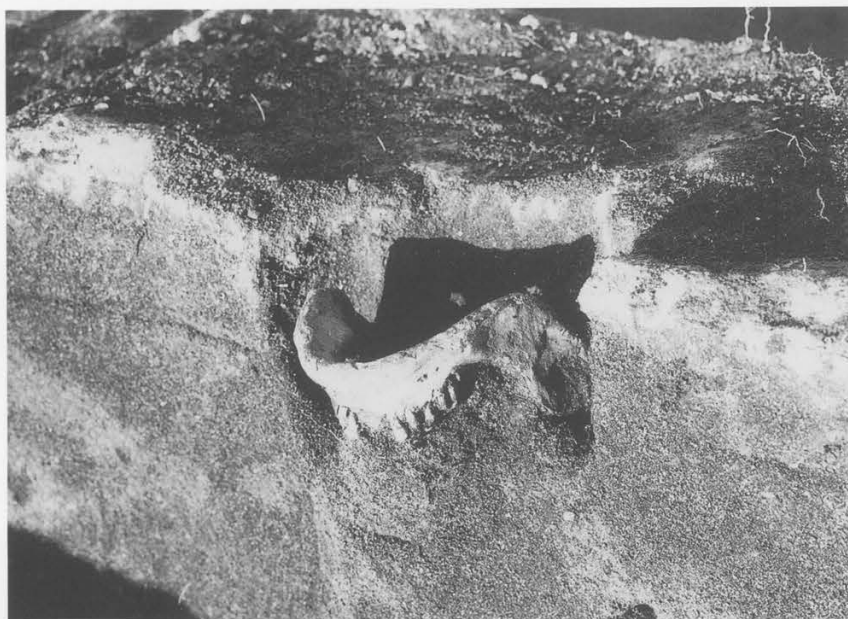
1. 159号竪穴埋土内の送り場



2. 159号竪穴埋土内の送り場



1. 159号堅穴埋土内送り場の集石



2. 下顎骨検出状況



1. 159号竪穴カマド出土土器



2. 159号竪穴埋土出土土器



3. 159号竪穴埋土出土土器



4. 159号竪穴埋土出土土器



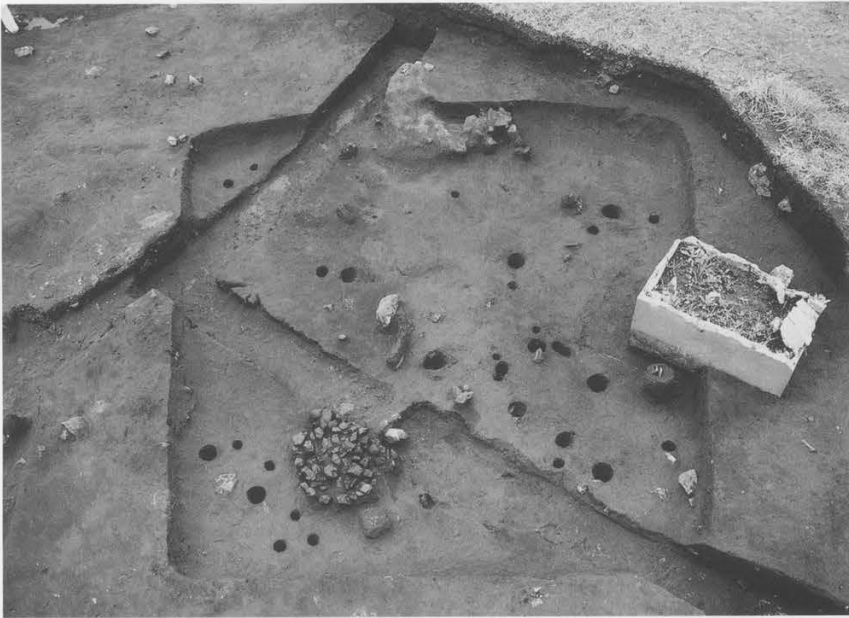
5. 160号竪穴



1. 160号竖穴床面出土土器



2. 160号竖穴床面出土土器



3. 161号竖穴



1. 161a 号竖穴



2. 161a 号竖穴埋土出土土器



3. 161a 号竖穴埋土出土土器



1. 161b 号竖穴



2. 161b 号竖穴埋土出土土器



3. 162号竖穴



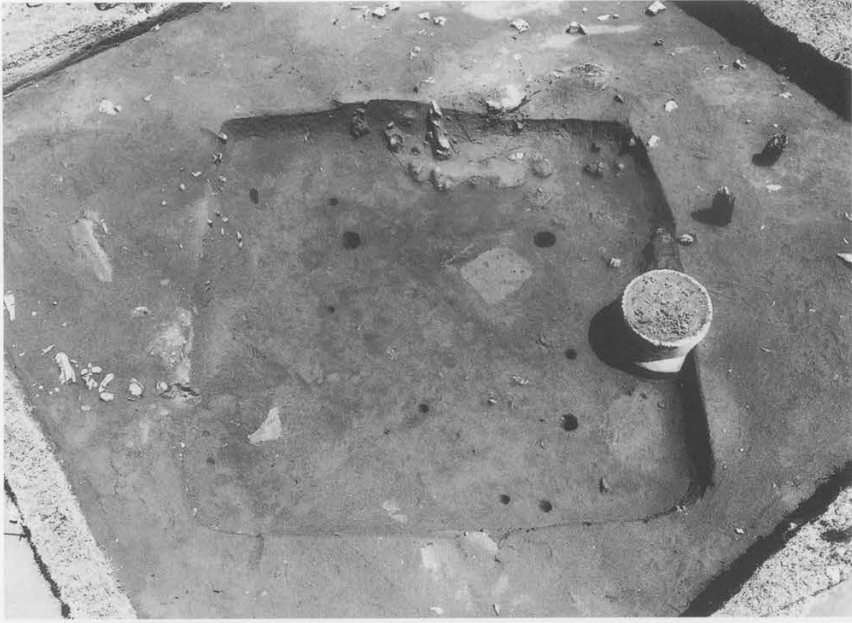
1. 162号竖穴床面出土土器



2. 162号竖穴床面出土土器



3. 162号竖穴埋土出土土器



1. 163号竪穴



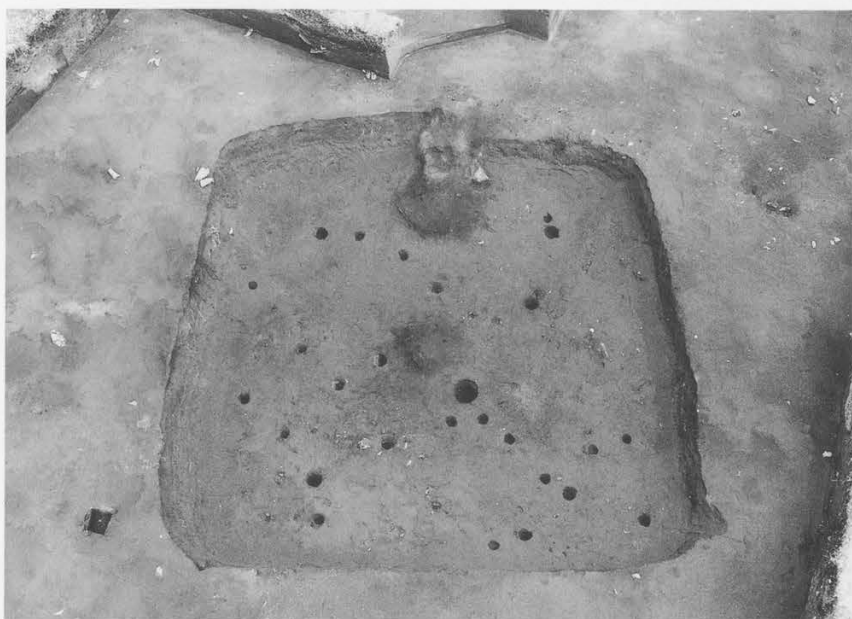
2. 163号竪穴カマド出土土器



3. 163号竪穴床面出土土器



1. 165号竖穴遺物出土状況



2. 165号竖穴



1. 165号竖穴土器出土状况



2. 165号竖穴土器出土状况



1. 165号竖穴床面出土土器



2. 165号竖穴床面出土土器



3. 165号竖穴床面出土土器



4. 165号竖穴床面出土土器



5. 165号竖穴床面出土土器



6. 165号竖穴床面出土土器



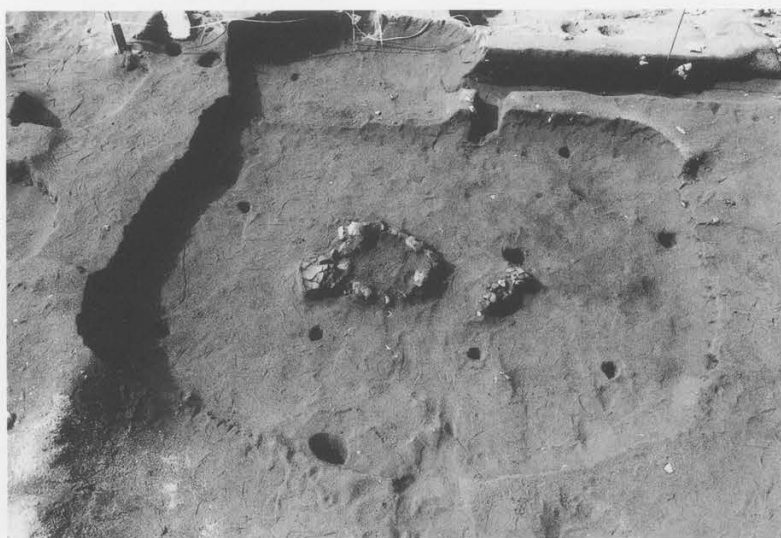
1. 166号竪穴



2. 166号竪穴カマド出土土器



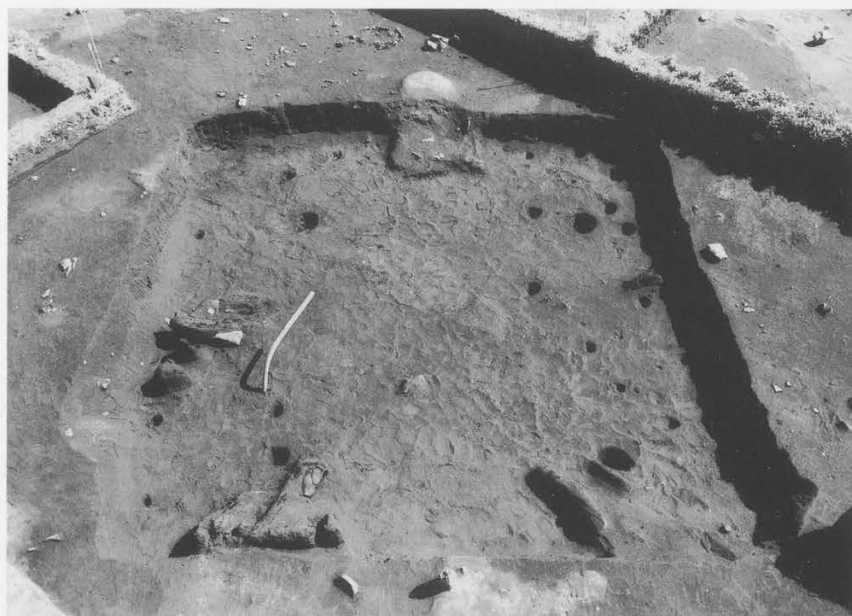
3. 166a号竪穴床面出土土器



4. 166a号竪穴



1. 166b 号竖穴埋土出土土器



2. 167号竖穴



1. 167号竖穴床面出土土器



2. 167号竖穴床面出土土器



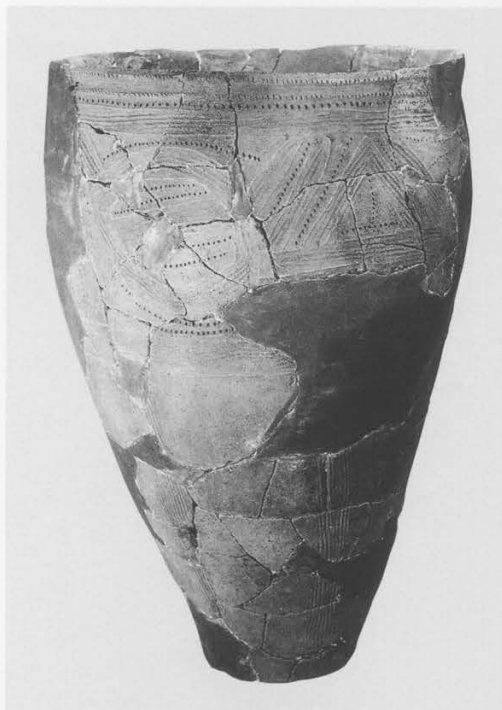
3. 167a号竖穴埋土出土土器



1. 167b 号竖穴埋土出土土器



2. 167b 号竖穴埋土出土土器



3. 167b 号竖穴埋土出土土器



4. 167b 号竖穴埋土出土土器



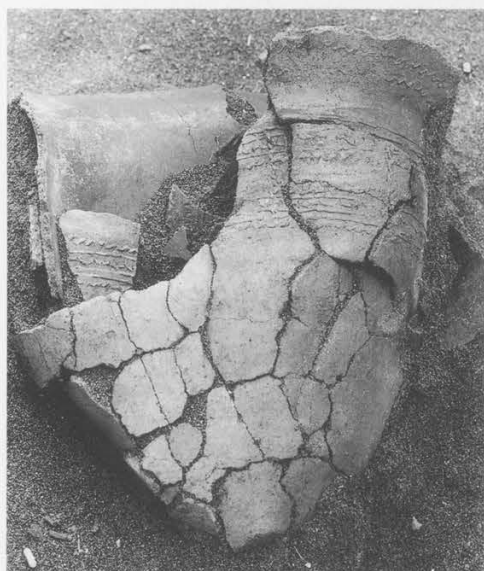
1. 167d 号竖穴埋土出土土器



2. 168号竖穴



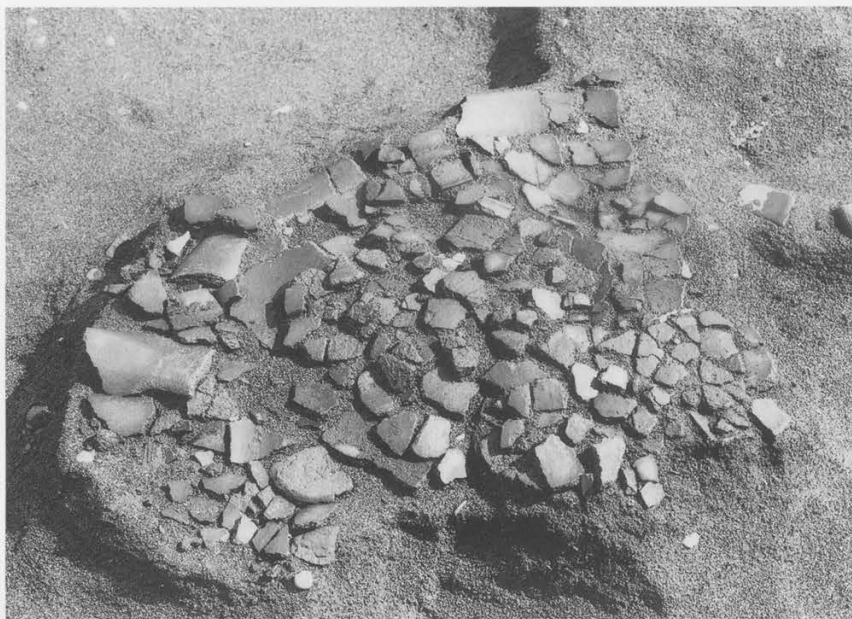
1. 168号竖穴土器出土状况



2. 168号竖穴土器出土状况



3. 168号竖穴床面出土土器



1. 168号竖穴土器出土状况



2. 168号竖穴床面出土土器



3. 168号竖穴床面出土土器



1. 168号竖穴床面出土土器



2. 168号竖穴床面出土土器



3. 168号竖穴床面出土土器



4. 168号竖穴埋土出土土器



1. 168号竖穴埋土出土土器



2. 168号竖穴埋土出土土器



3. 168号竖穴埋土出土土器



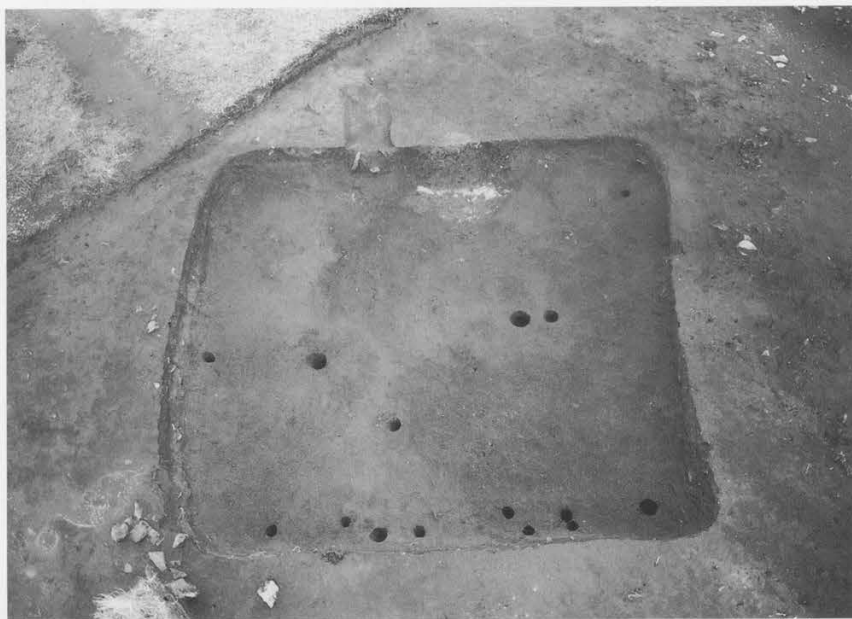
1. 169号竖穴



2. 169号竖穴床面出土土器



3. 169号竖穴埋土出土土器



1. 170号竖穴



2. 172a号竖穴



1. 172号竖穴床面出土土器



2. 172号竖穴床面出土土器



3. 172号竖穴埋土出土土器



4. 172号竖穴埋土出土土器



5. 172号竖穴埋土出土土器



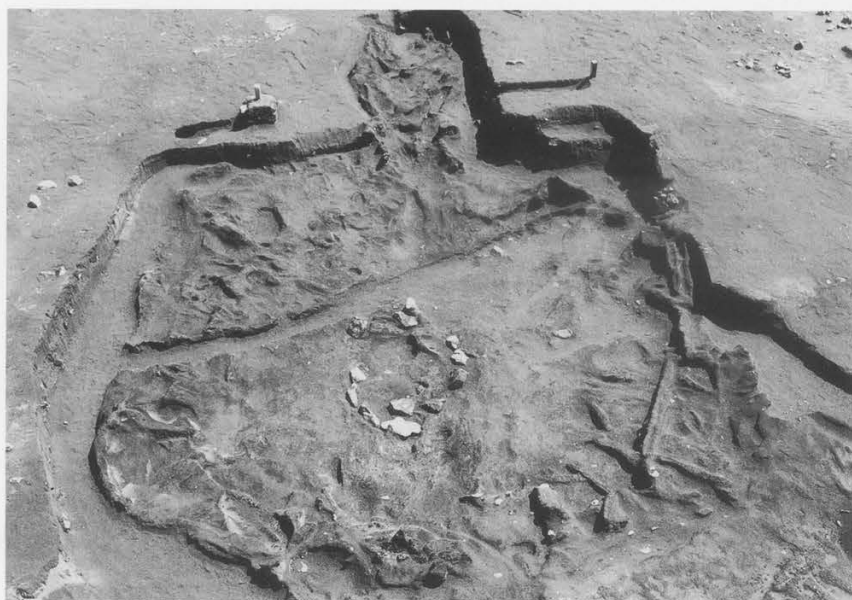
1. 172a 号竖穴床面出土土器



2. 172a 号竖穴埋土出土土器



3. 172c 号竖穴床面出土土器



1. 172e 号竖穴炭化材検出状況



2. 172e 号竖穴



1. 172e 号竪穴床面出土土器



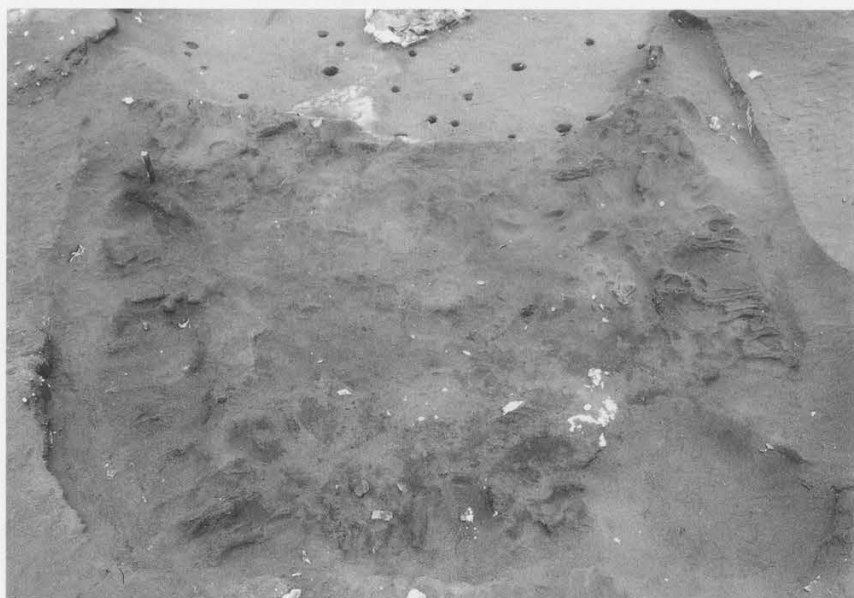
2. 172e 号竪穴床面出土土器



3. 172e 号竪穴ベンガラ上部出土土器



4. 172e 号竪穴埋土出土土器



1. 172f 号竖穴



2. 172f 号竖穴床面出土土器



3. 172f 号竖穴炭化材上出土土器



4. 172f 号竖穴炭化材上出土土器



5. 172f 号竖穴炭化粘土出土土器



1. 172f 号堅穴ベンガラ層出土土器



2. 172f 号堅穴ベンガラ層出土土器



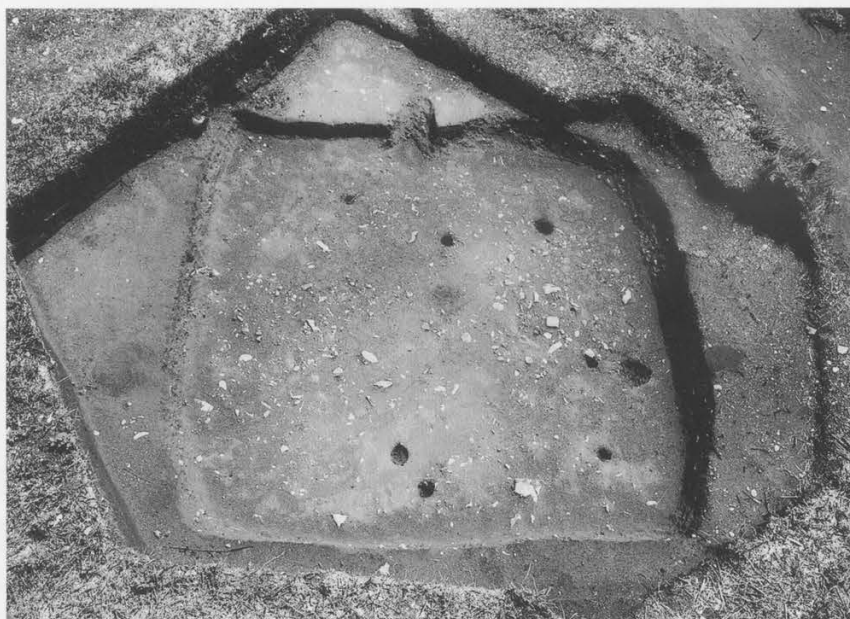
3. 172f 号堅穴ベンガラ層出土土器



4. 172f 号堅穴ベンガラ層出土土器



5. 172f 号堅穴埋土出土土器



1. 176号竖穴



2. 176号竖穴遺物出土狀況



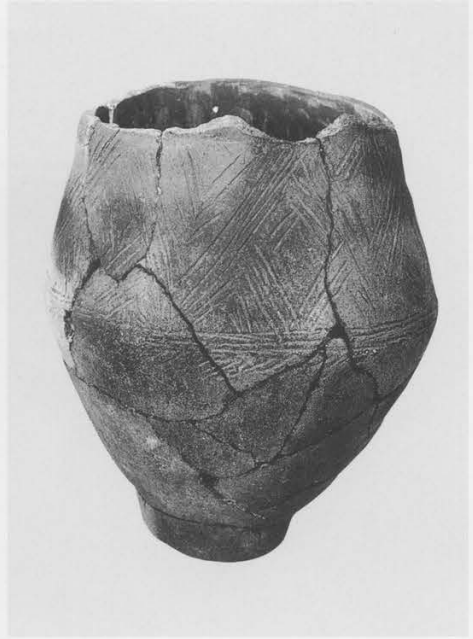
1. 177号竖穴炭化材検出状況



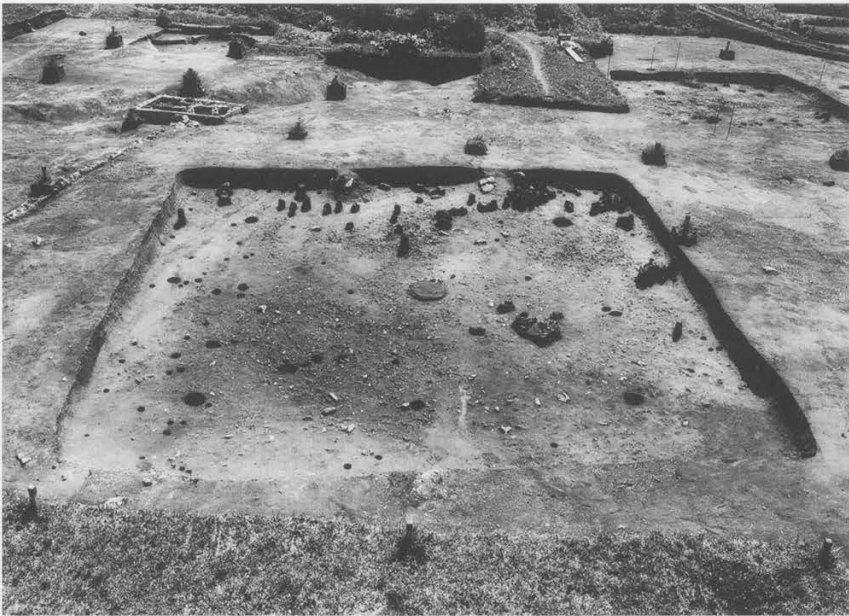
2. 177号竖穴



1. 177号竖穴床面出土土器



2. 177号竖穴床面出土土器



3. 178号竖穴



1. 178号竖穴床面出土土器



2. 178号竖穴埋土出土土器



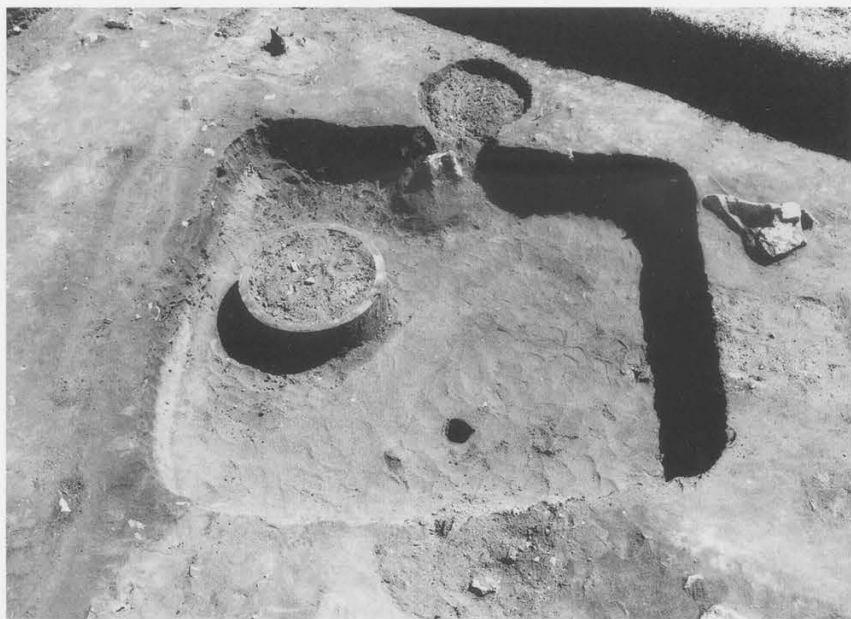
3. 178号竖穴埋土出土土器



4. 178号竖穴埋土出土土器



5. 178号竖穴埋土出土土器



1. 179号竖穴



1. 自然営力による段差出土土器(D-82)



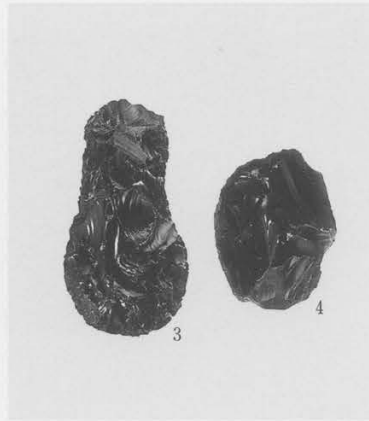
2. 自然営力による段差出土土器(E-84)



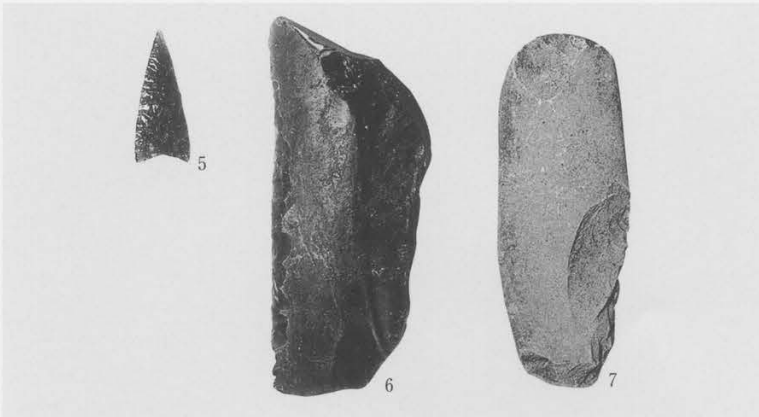
1. ピット1201



2. ピット1201床面出土土器



3・4. ピット1205埋土出土石器



5～7. ピット1207遺体上出土石器



1. ピット1209



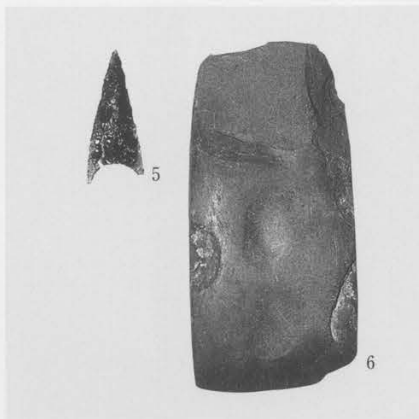
2. ピット1209埋土出土土器



3. ピット1209埋土出土土器



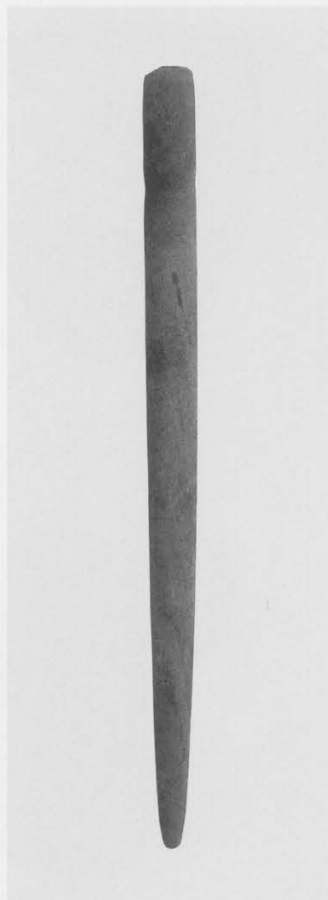
4. ピット1209埋土出土土器



5・6. ピット1209床面出土石器



1. ピット1210

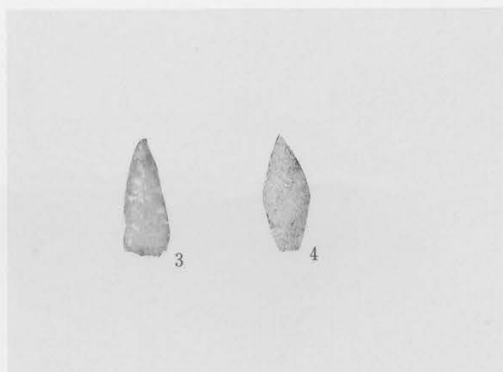


拡大部分

2. ピット1210床面直上出土石剣



1・2. ピット1214埋土出土石器



3・4. ピット1214a 床面出土石器



前面



側面

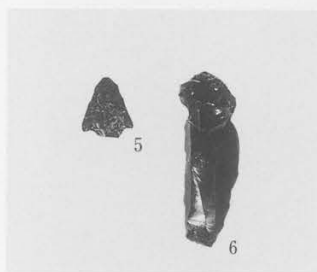
5. ピット1218埋土出土土器



1. ビット1219埋土出土土器



2～4. ビット1219埋土出土石器



5・6. ビット1221埋土出土石器



7. ビット1225上部配石



1. ビット1225



3. ビット1225出土石器



2. ビット1225床面石器出土状況



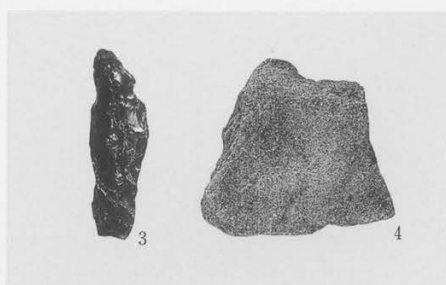
4. ビット1225床面出土石器



1. ピット1228



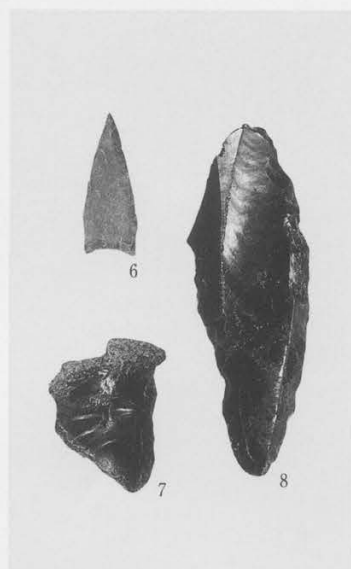
2. ピット1227埋土
出土石器



3・4. ピット1228埋土出土石器



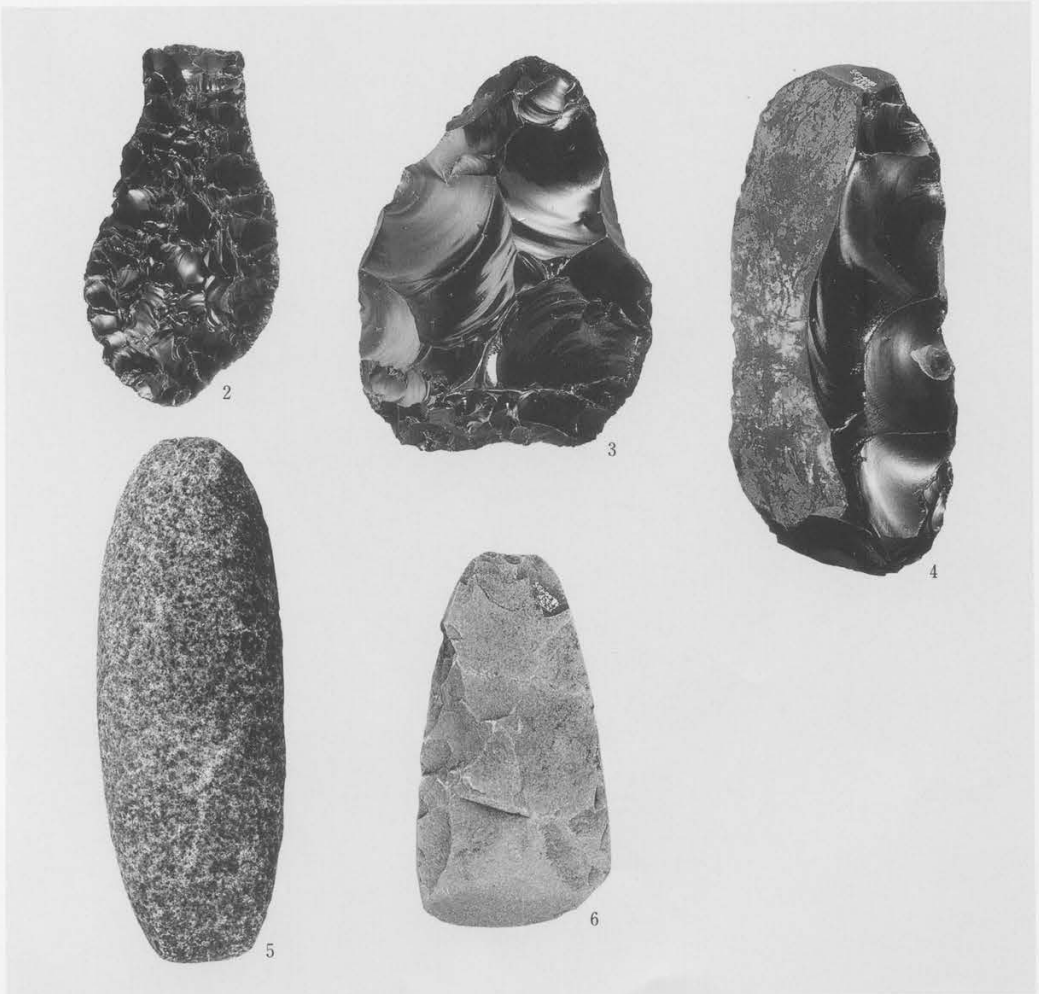
5. ピット1229床面出土土器



6～8. ピット1229埋土出土石器



1. ビット1232



2～6. ビット1232埋土出土石器



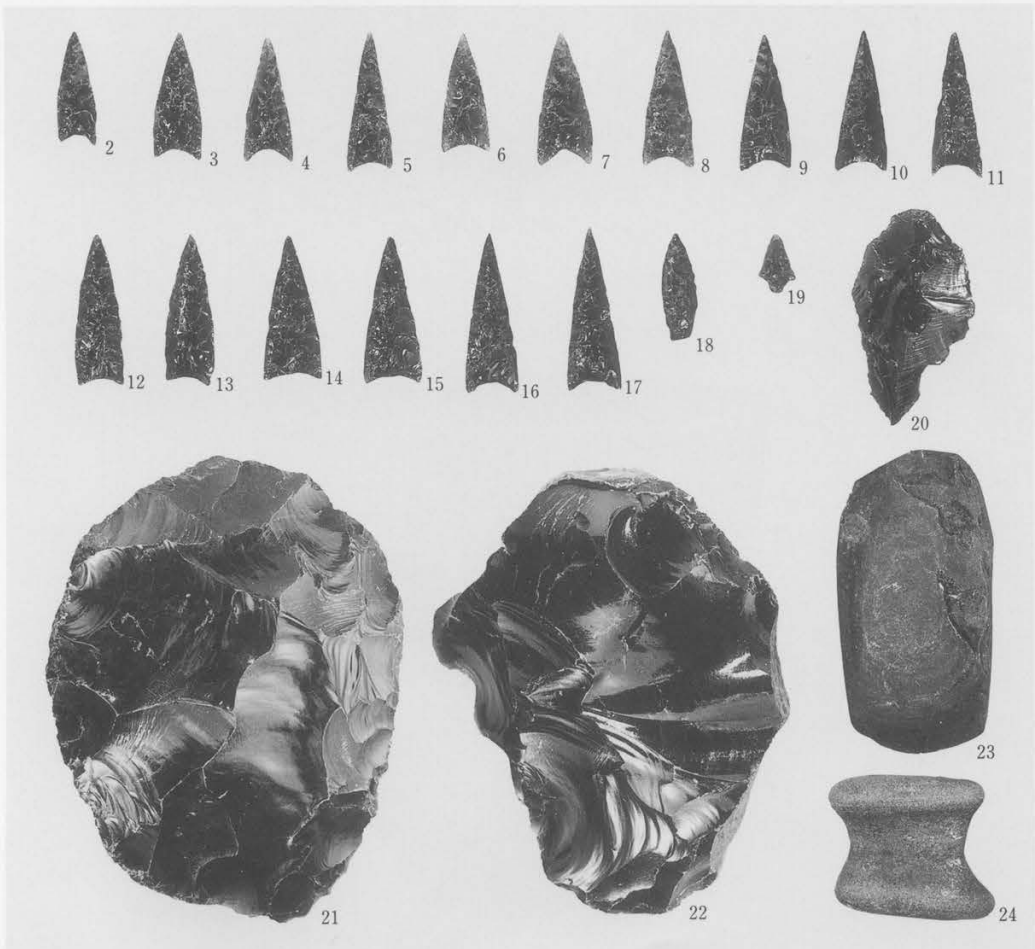
1. ピット1233



2. ピット1233埋土出土土器



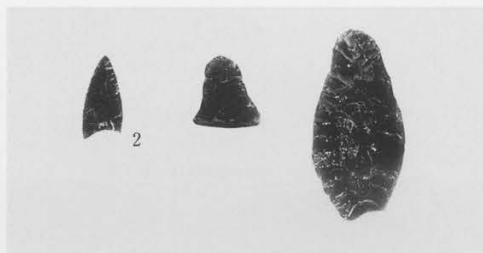
1. ピット1233a



2～17. ピット1233a 床面出土石器 18～24. ピット1233a 埋土出土石器



1. ピット1234埋
土出土石器



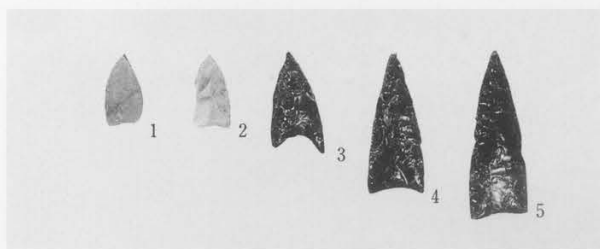
2～4. ピット1236床面出土石器



5. ピット1247



6. ピット1247床面出土土器



1～3. ビット1249床面出土石器
4・5. ビット1249埋土出土石器



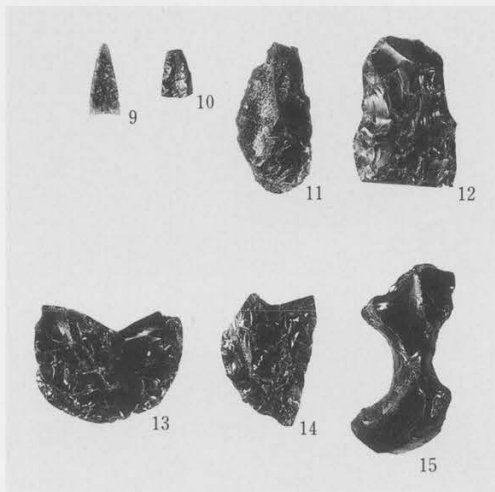
6. ビット1251床
面出土石器



7. ビット1252床面出土石器



8. ビット1252
床面出土
石器



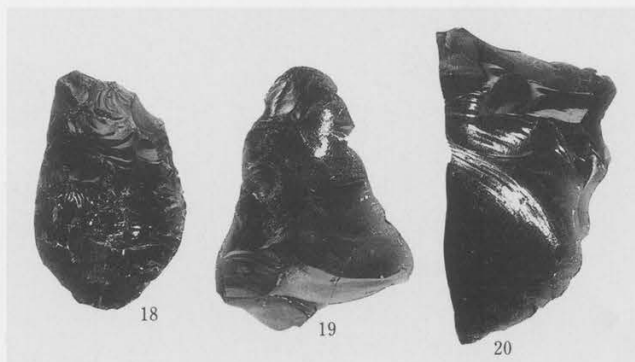
9～15. ビット1260埋土出土石器



16・17. ビット1262
埋土出土石器



21. ビット1268埋
土出土石器



18. ビット1267床面出土石器 19・20. ビット1267埋土出土石器



22. ビット1270埋土出土石器



23～26. ビット1270埋土出土琥珀玉



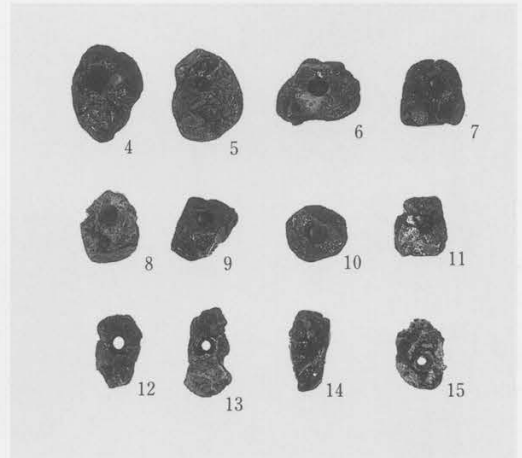
1. ピット1271



2. ピット1271埋
土出土石器



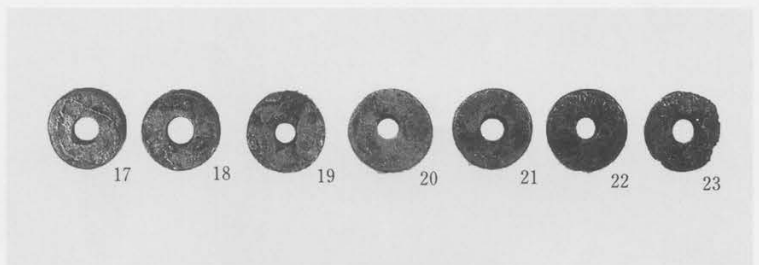
3. ピット1272床面出土土器



4～15. 1272床面出土琥珀玉



16. ピット1273埋土出土
石器



17～23. ピット1276埋土出土琥珀玉



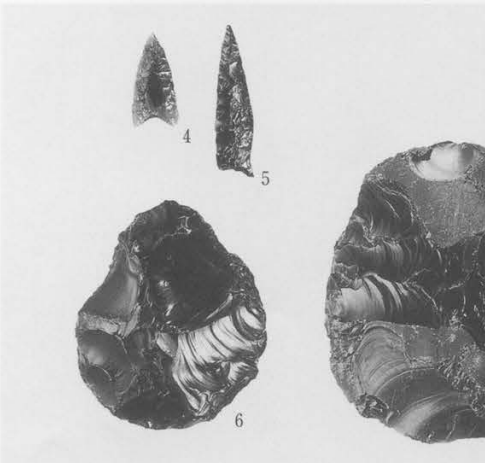
1. ピット1278



2. ピット1278床面出土土器



3. ピット1281埋土出土土器



4～8. ピット1281遺体上出土石器



1. ビット1282埋土出土土器



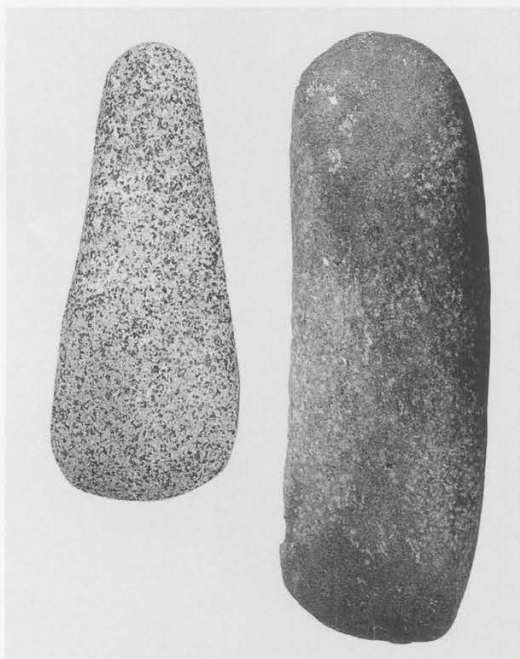
3. ビット1282a埋土出土土器



2. ビット1282埋土出土石器



4. ビット1282a床面出土石器
5. ビット1282a埋土出土石器



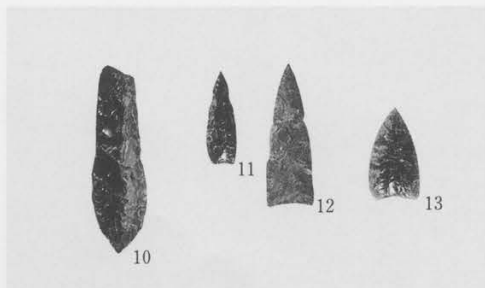
8・9. ビット1291遺体上出土石器



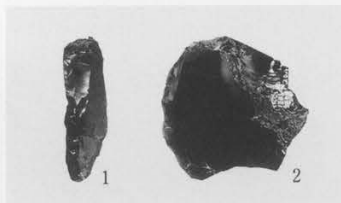
6. ビット1284b埋土出土石器



7. ビット1289埋土出土石器



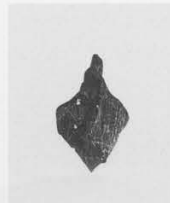
10. ビット1295b床面出土石器
11・12. ビット1296床面出土石器
13. ビット1297床面出土石器



1・2. ピット1306a 埋土出土石器



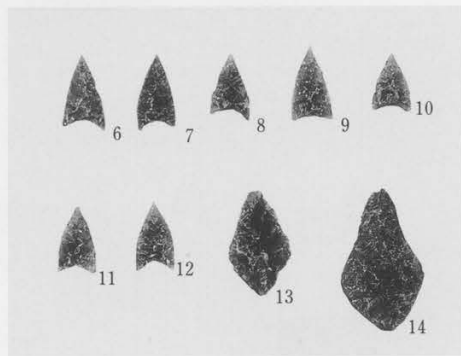
3. ピット1307埋土出土石器



4. ピット1308埋土出土石器



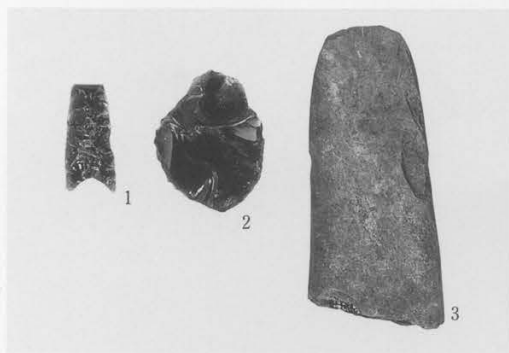
5. ピット1313埋土出土土器



6～14. ピット1313遺体上出土石器



15・16. ピット1313遺体上出土琥珀玉



1～3. ピット1323b 埋土出土石器



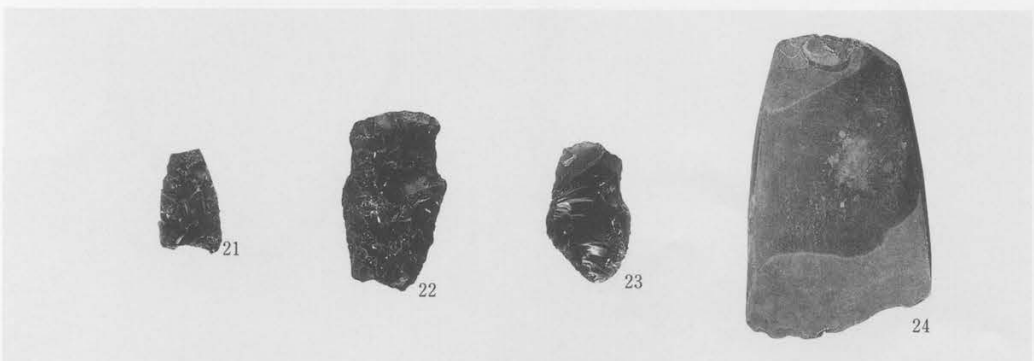
4. ピット1325埋土出土石器



5. ピット1327埋土出土石器



6～17. ピット1332床面出土石器 18～20. ピット1332埋土出土石器



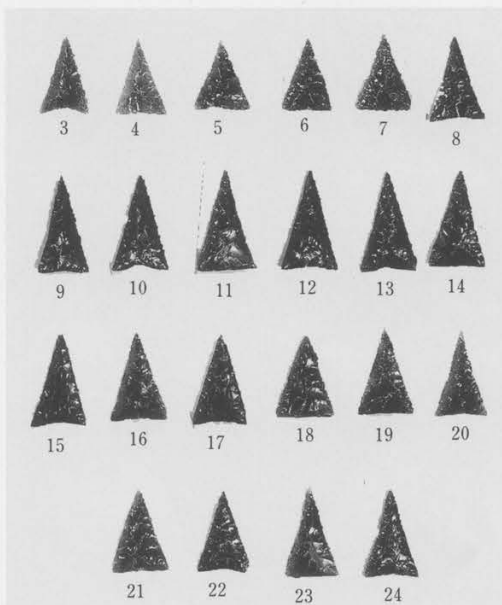
21～24. ピット1333埋土出土石器



1. ピット1350



2. ピット1350床面出土土器



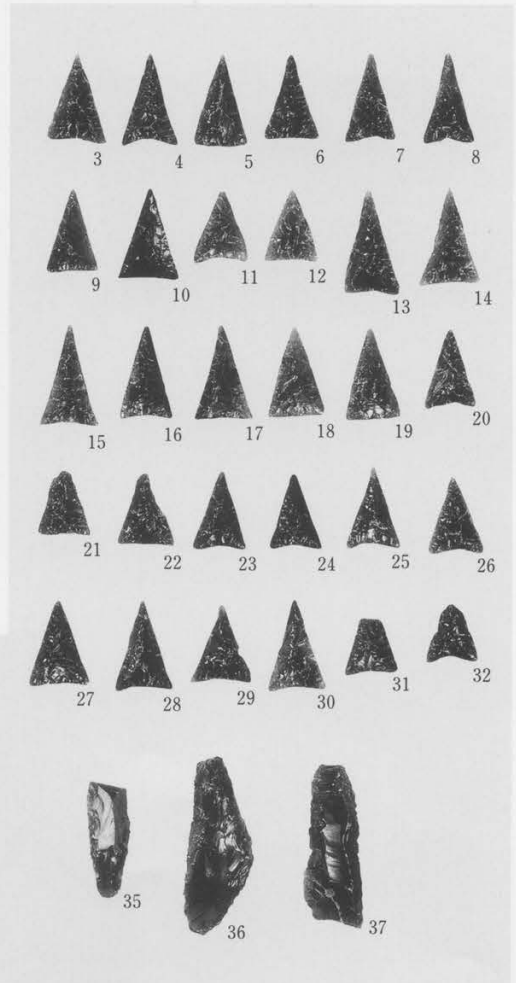
3～29. ピット1350埋土出土石器



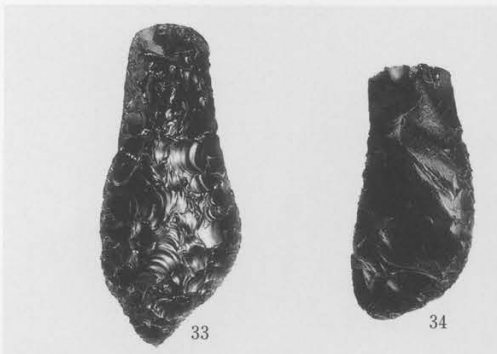
1. ピット1351

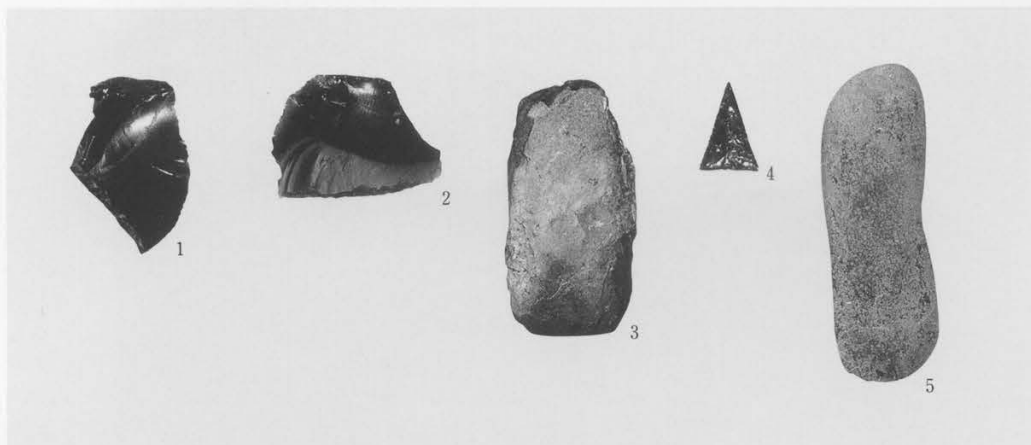


2. ピット1351遺体上出土土器

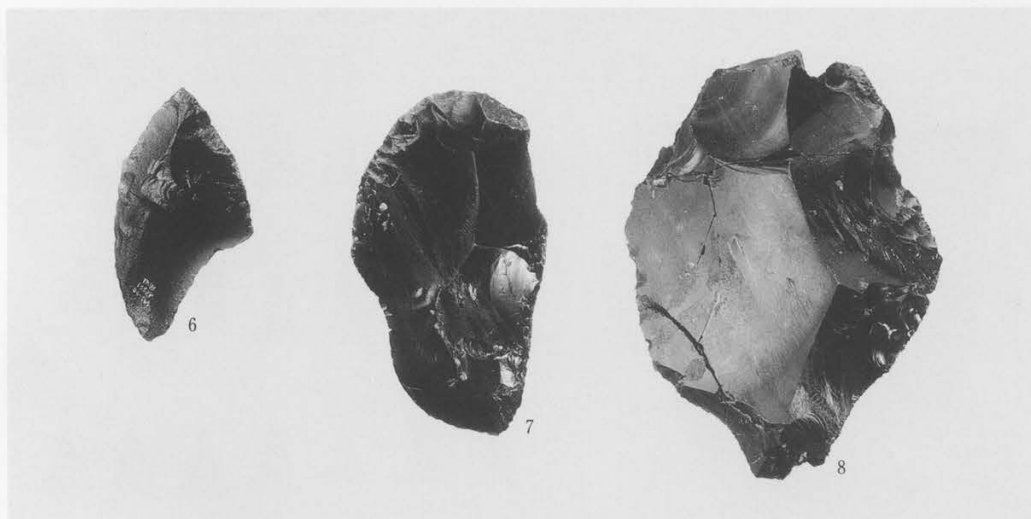


3～37. ピット1351遺体上出土石器





1～3. ピット1351遺体上出土石器
4・5. ピット1351埋土出土石器



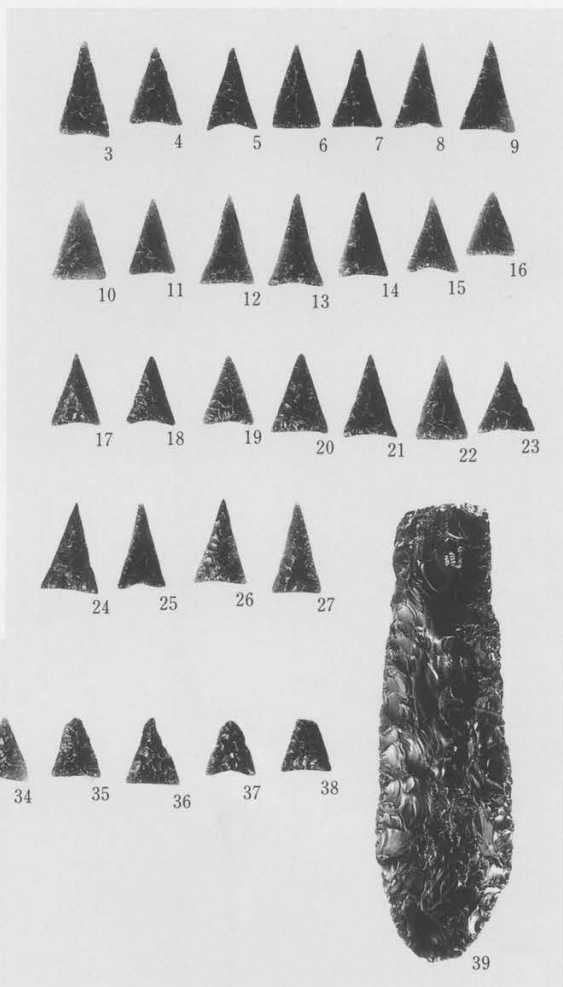
6～8. ピット1352遺体上出土石器



1. ピット1353



2. ピット1353床面出土土器



3~39. ピット1353床面出土石器



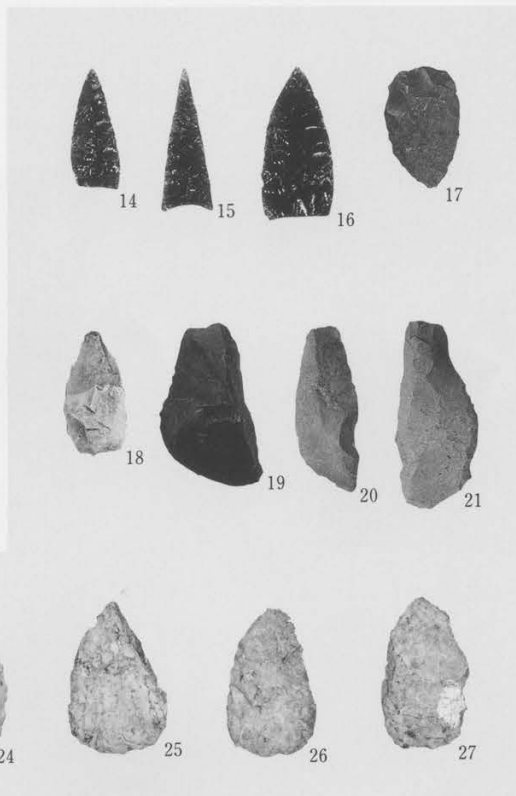
1～11. ピット1402遺体上出土琥珀玉



12. ピット1403



13. ピット1403遺体上出土土器



14～27. ピット1403床面出土石器



1～5. ピット1403床面出土石器
6～8. ピット1403埋土出土石器



9. ピット1404遺体上出土
石器



10. ピット1404a 埋土出土土器



1. ピット1405



2. ピット1405床面出土土器



3. ピット1405床面出土土器



4. ピット1405床面出土土器



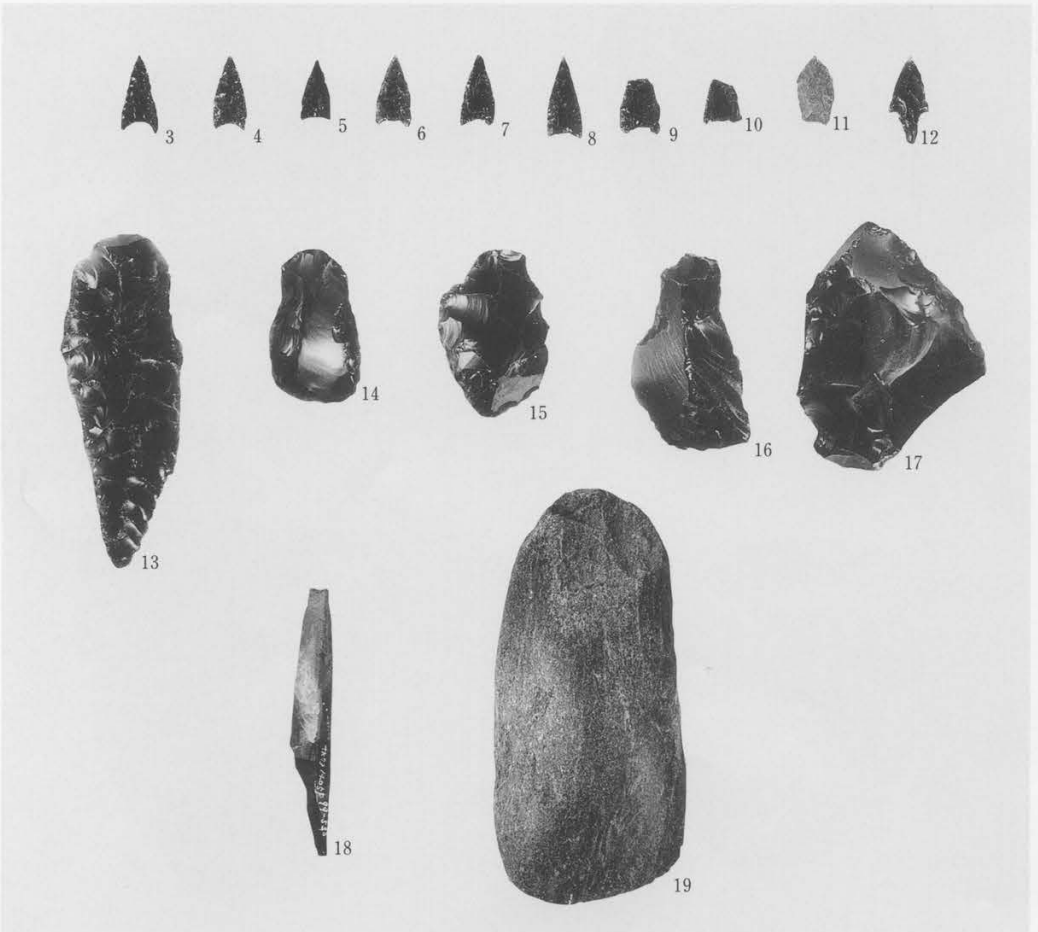
5. ピット1405床面出土土器



1. ピット1405床面出土土器



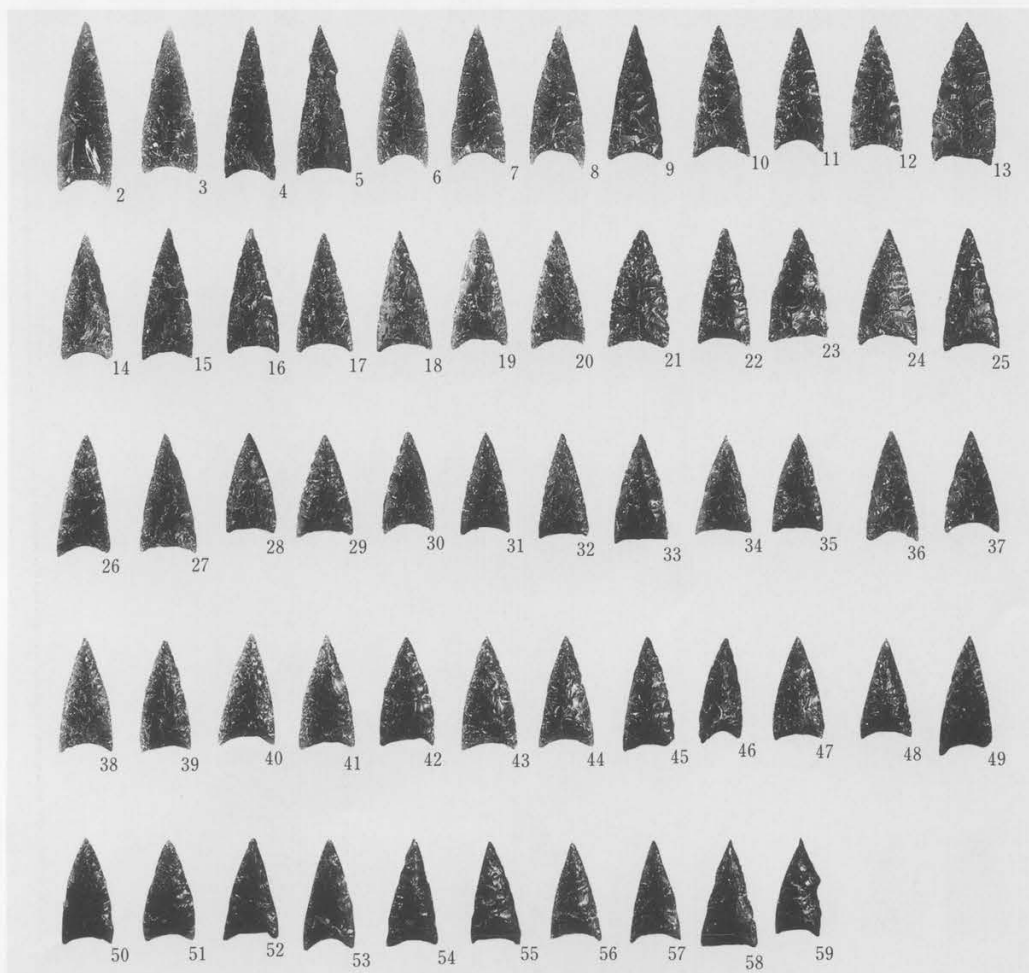
2. ピット1405埋土出土土器



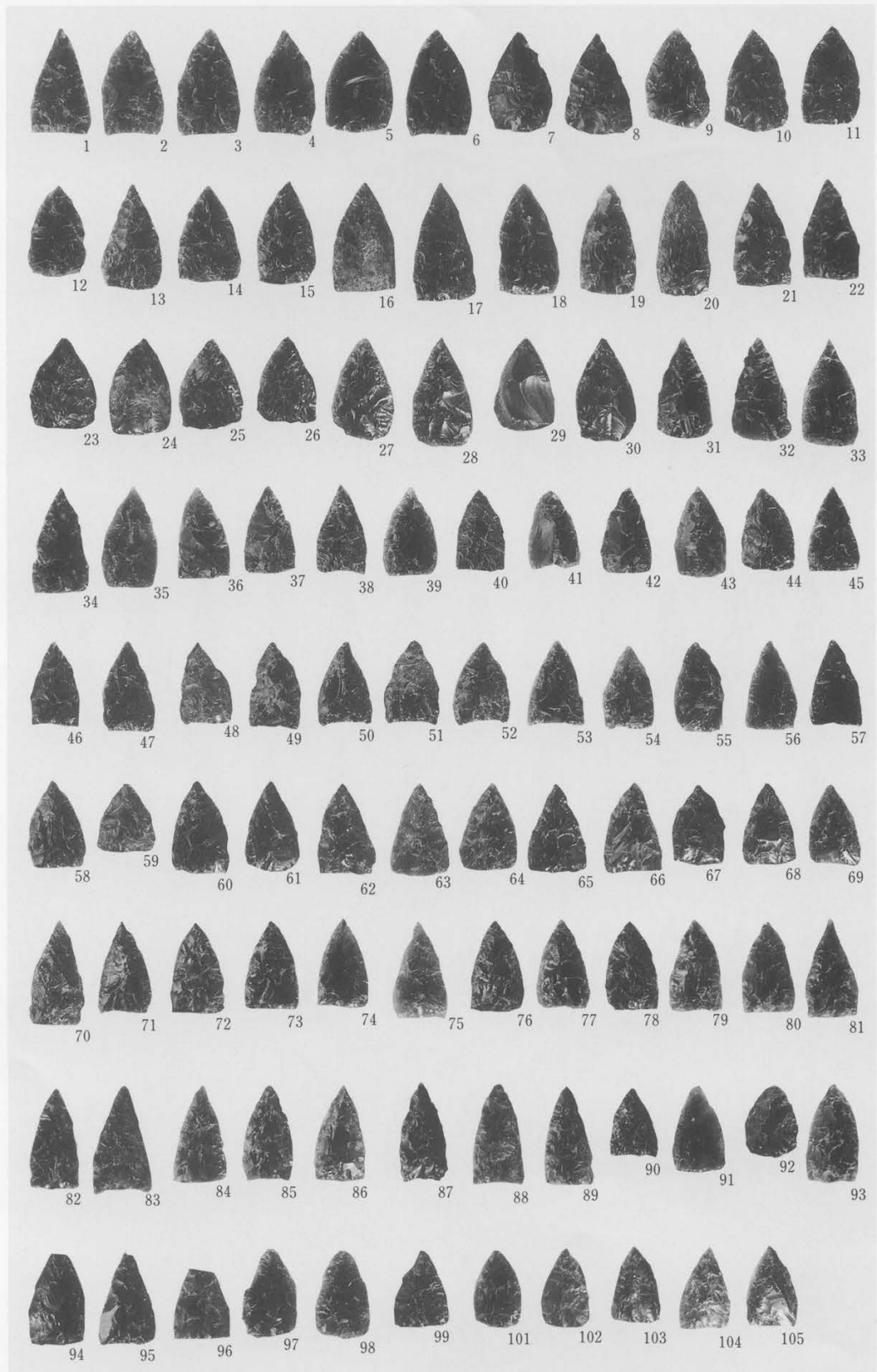
3～19. ピット1405床面出土石器



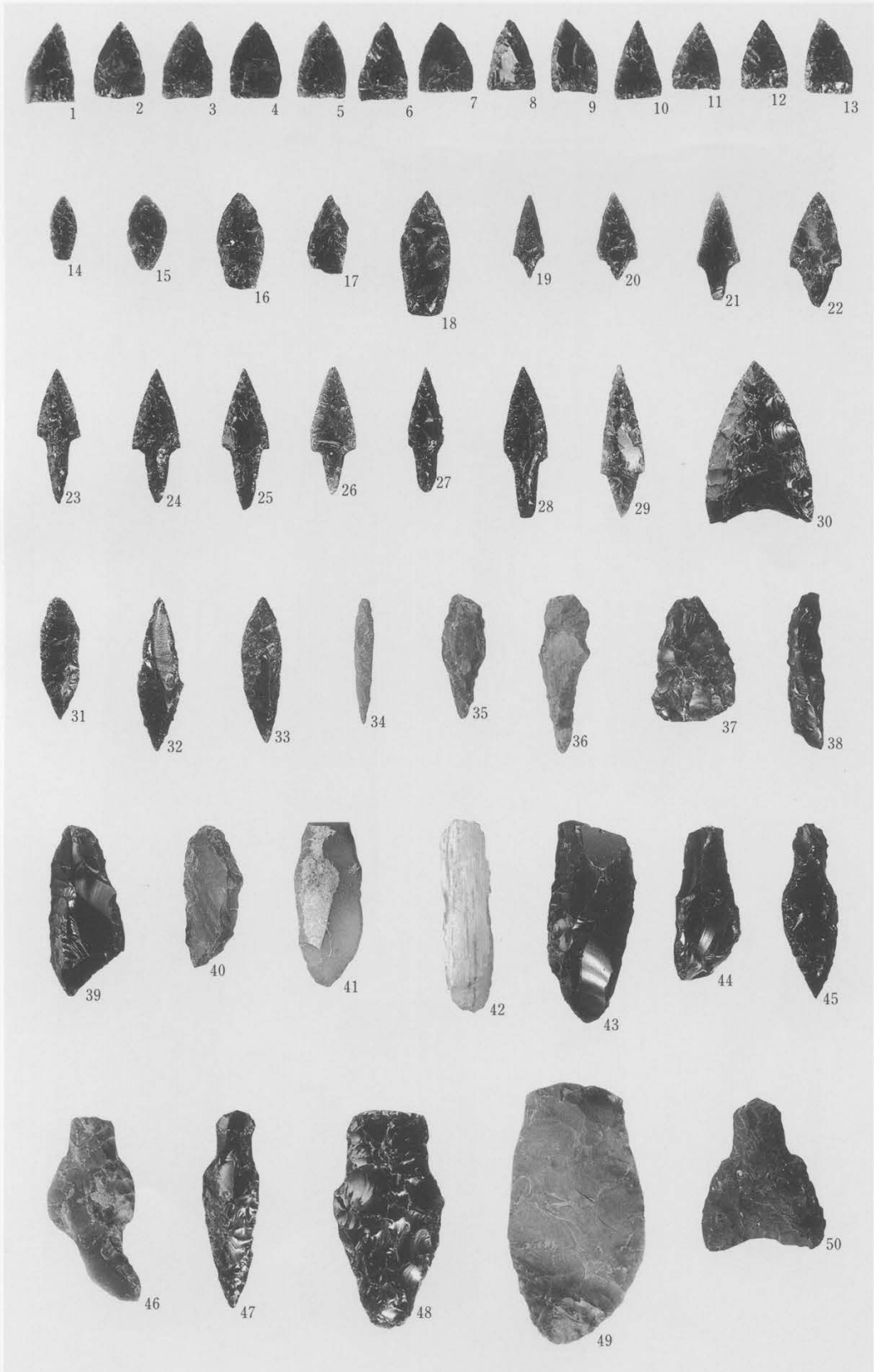
1. ビット1406



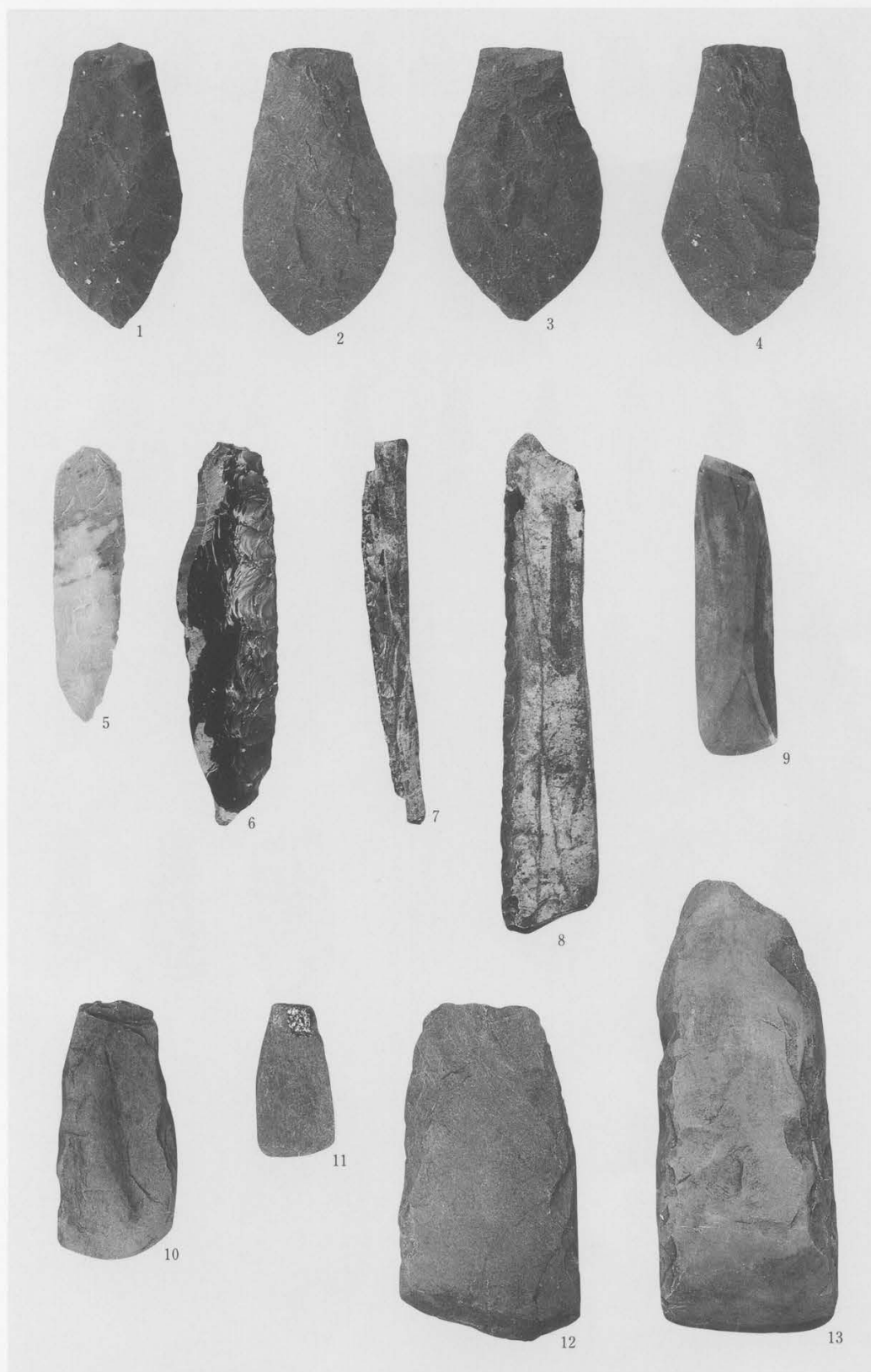
2～59. ビット1406遺体上出土石器



1~104. ピット1406遺体上出土石器



1～50. ビット1406遺体上出土石器



1～13. ピット1406遺体上出土石器



1～3. ピット1406遺体上出土石器



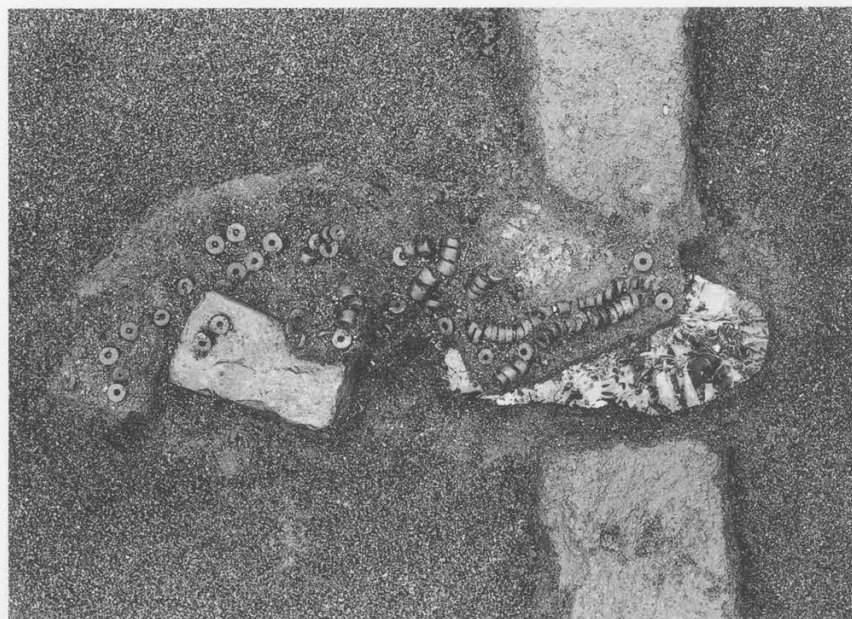
1. ピット1407



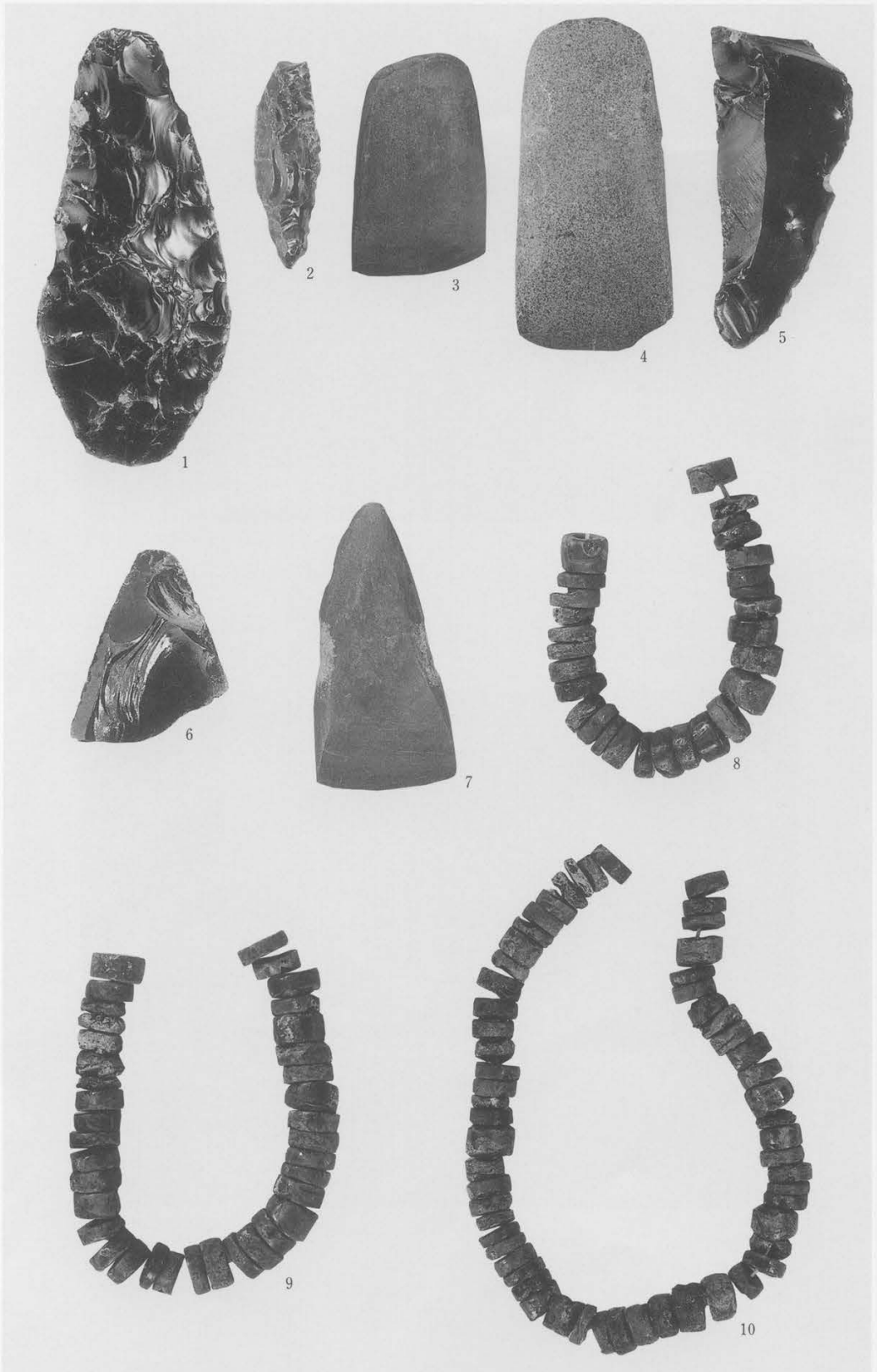
2. ピット1407遺物出土状況



1. ビット1407遺物出土状況



2. ビット1407遺物出土状況



1～4. ピット1407床面出土石器 5～10. ピット1407遺体上出土石器・琥珀玉



1. ピット1408



2. ピット1408遺物出土状況



1. ピット1408遺体上出土土器(正面・側面)



2. ピット1408遺体下出土石器



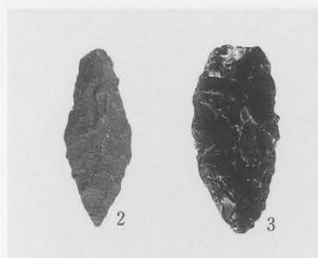
3. ピット1408遺体上出土石器



4～8. ピット1408埋土出土石器



1. ピット1409



2・3. ピット1409埋土出土
石器



4. ピット1410遺体上出土土器



1. ピット1418



2. ピット1418遺体上出土土器



3. ピット1418遺体上出土土器



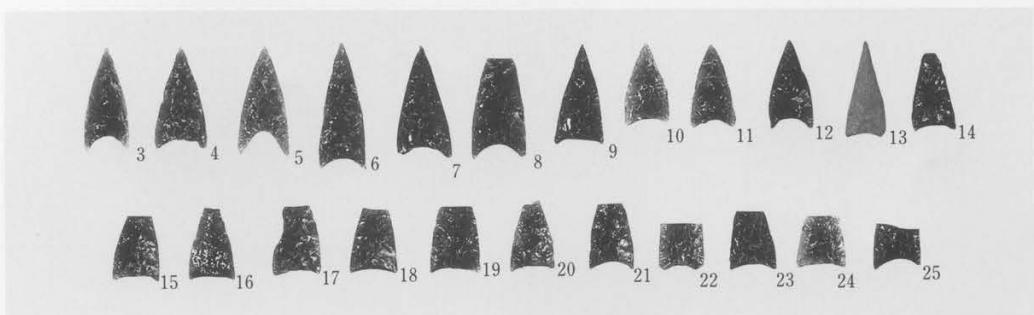
4. ピット1418遺体上出土土器



1. ピット1419



2. ピット1419遺物出土状況



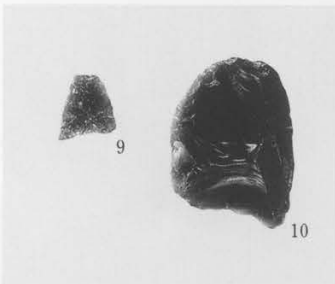
3～25. ピット1419遺体上出土石器



1～7. ピット1419遺体上出土石器・石製装身具



8. ピット1426遺体上出土石器



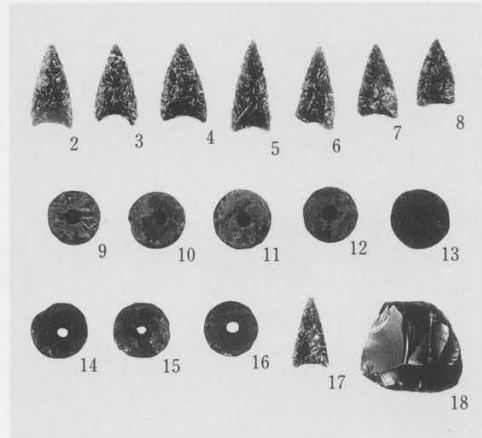
9・10. ピット1427埋土出土石器



11. ピット1428埋土出土土器



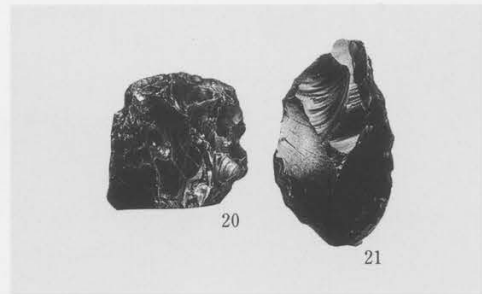
1. ピット1431遺体上出土土器



2～16. ピット1431遺体上出土石器・琥珀玉
17・18. ピット1431埋土出土石器



19. ピット1431遺体上出土石器



20・21. ピット1434埋土出土石器



22. ピット1441床面出土石器
23. ピット1441埋土出土石器



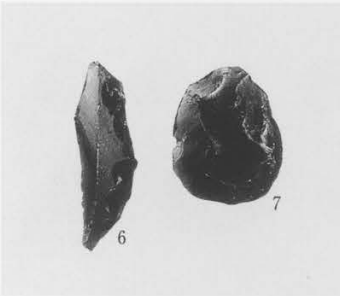
24. ピット1456埋土出土石器



1. ピット1458埋土
出土石器



2～5. ピット1458a 埋土出土石器



6・7. ピット1459埋土出土石器



8・9. ピット1460埋土出土石器



10. ピット1460b 埋土出土石器



11. ピット1461床面出土土器

報告書抄録

ふりがな	ところがわかこういせき				
書名	常呂川河口遺跡(7)				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	北見市教育委員会(ところ埋蔵文化財センター)				
所在地	〒093-0209 北海道北見市常呂町字栄浦376				
発行年月日	西暦2007年3月25日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
ところがわかこういせき 常呂川河口遺跡	ほっかいどうきたみしところちょう 北海道北見市常呂町	12084	I-16-128	44° 06′ 58″	144° 04′ 42″
調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成10年～平成11年	4,400	河川改修	常呂川河口遺跡	集落跡 包蔵地	擦文 続縄文 トビニタイ アイヌ
主な遺構		主な遺物		特記事項	
住居跡 土壇墓 送り場		土器・石器・琥珀玉・ガラス 玉など		続縄文初頭の興津式相当、宇 津内Ⅱa式の土壇墓には多量 の副葬品が見られる。後北C ₂ ・Dの土壇墓は東頭位である。	

2007年3月20日 印刷
2007年3月25日 発行

常呂川河口遺跡 (7)

—常呂川河口右岸掘削護岸
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道北見市教育委員会
印刷所 株式会社 小林印刷
北海道北見市本町5丁目